

千歳市

# ユカンボシ C 15 遺跡(6)

北海道横断自動車道(千歳・夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 8・9・10年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



平成10年度調査区 NE SW



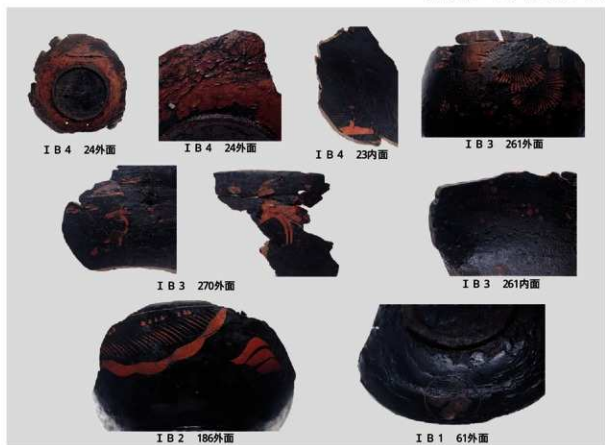
平成10年度調査区 SW NE



基本土層・27ライン ( L - M )



基本土層・Eライン ( 30-31 )



漆塗り椀文様

## 例 言

1. 本書は、北海道横断自動車道（千歳一ヶ張）建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した、千歳市ユカンボシC15遺跡の発掘調査の報告書である。本書では、既報告に対する修正と追加を基本とし、木製品を中心として取りまとめを行った。また動物遺体や樹種・漆碗の分析等、依頼原稿も掲載した。ユカンボシC15遺跡の調査報告書としての6冊目となる。
2. 編集は、本文編を三浦正人、写真図版を吉田裕史洋が行った。
3. 木製品等の報告は、三浦正人が担当した。  
樹種同定は独立行政法人森林総合研究所 木材特性研究領域組織材質研究室長 平川泰彦氏の指導のもとに、菊池育子が行い執筆した。
4. 調査写真は全体を菊池慈人・吉田裕史洋が、遺構を主に吉田が撮影した。遺物写真は主に吉田が担当し、木製品の一部を菊池が撮影した。写真整理は増田潔威・越智八重子が行い吉田が統括した。
5. 現場での作図・整理は、三浦正人・鈴木信・吉田裕史洋・倉橋直孝・大泰司統・藤内まゆみ・三浦千晴・原靖寿・大崎孝徳・増田潔威・梅木友子・井口隆子・小野哲也が担当、従事し、報告用に三浦正人・原が統括した。
6. 木製品等の実測・トレースは、は小林由里子・釜蓋みどり・小畑麻弓が行い、三浦正人・小林が統括して最終調整を施した。
7. 当報告書の図・写真の図版作成は、小林由里子・菊池育子・越智八重子が主となり、三浦・吉田が統括した。
8. 今回報告の、樹種同定以外の各種分析・同定は下記に依頼した。  
きのこ：北海道大学名誉教授 五十嵐恒夫氏  
植物遺体：札幌国際大学教授 吉崎昌一氏  
同 考古植物研究会 榎坂恭代氏  
動物遺体：千歳サケのふるさと館学芸員 高橋 理氏  
漆塗り碗：くらしき作陽大学講師 北野信彦氏
9. 金属製品・木製品の保存処理は、美々8遺跡の方法を用いているが、木製品の一部は、(株)ニッテツ・ファイブ・プロダクツ釜石文化財保存処理センターに依頼している。
10. 章自然科学的分析は依頼原稿のため、図・表には独自の番号が付されているので、図表目次には掲載していない。
11. 調査・報告にあたっては下記の諸機関、各氏から御指導御協力をいただいた。  
千歳市教育委員会埋蔵文化財センター、恵庭市教育委員会、恵庭市郷土資料館、北広島市教育委員会、札幌市教育委員会埋蔵文化財センター、江別市教育委員会、石狩市教育委員会、北海道開拓記念館、独立行政法人森林総合研究所、大林東洋共同企業体、大場工業株式会社  
大谷敏三、田村俊之、高橋 理、豊田宏良、松田淳子、手塚新太、乾 哲也、上屋真一、松谷純一、森 秀之、長町章弘、大林千春、佐藤幾子、遠藤龍歌、山田昌久、平川泰彦、赤沼英男、吉崎昌一、菊池徹夫、木村英明、辻誠一郎、北野信彦、鈴木正章、榎坂恭代、南 博史、佐藤宏之、熊木俊朗、追川吉生、五十嵐恒夫、野村 崇、三野紀男、赤松守雄、山田悟郎、平川善祥、小林幸雄、出利葉浩司、右代啓視、舟山直治、水島未記、手塚 薫、古原敏弘、横山英介、野中一宏、加藤邦雄、上野秀一、羽賀憲二、仙庭伸久、藤井誠二、秋山洋二、石川直章、乾 芳宏、赤石慎三、森岡健治、齋中剛史、澤田 健、北澤 実、山原敏朗、石川 朗、長谷部一弘、佐藤智雄、石橋孝雄、工藤義衛、森田知忠、原 靖寿、小野哲也、阿部明彦、伊藤武士、井上雅孝、宇部則保、大野 亨、利部 修、加藤道男、木村 高、工藤竹久、児玉 準、小松正夫、齊野裕彦、佐々木浩一、鈴木克彦、高橋与右衛門、高橋忠彦、仲田茂司、日野 久、船木義勝、藤沢 敦、保坂康夫、村田晃一、齋藤 淳、小嶋芳孝、伊藤雅文、篠原秀秀、鈴木康之、唐口勉三、中川正人、田畑信一、千葉 茂、清水恵一、大沼忠春、千葉英一、高橋和樹、田才雅彦、工藤研治、田中哲郎、宗像公司

## 記号等の説明

1. 平面図に方位記号がない場合は、上がN-22°-Wである。

平面図の+はグリッドラインの交点で、交点傍らの名称記号は右下の区画を示す。

2. 土層名は、下記の略号を用いた場合がある。

第0 黒色土層：0 B 0 黒	樽前a降下軽石層：Ta - a
第 黒色土層： B 黒	樽前b降下軽石層：Ta - b
第 黒色土層： B 黒	樽前c降下軽石層：Ta - c (c <sub>1</sub> ・c <sub>2</sub> )
漸 移 層： B下	樽前d降下軽石層：Ta - d
恵庭 a 降下軽石層：En - a	白頭山・苫小牧火山灰層：B - Tm
En - a起源のローム層：En - L	支笏軽石流堆積物：Spfl
En - a未風化軽石礫層：En - P	

火山灰の略号は、菅屋隆典・佐藤博之(1980)『千歳地域の地質』

北海道火山灰命名委員会(1982)『北海道の火山灰』による。

3. 修正・追加あるいは集成した木製品の図には、既報告に対応する層位と掲載・樹種名を付してある。報告書(1)分のみ各層にわたるため、層の前に(1)を付けた。

B5層・ B4層：報告書(3)

B3層：報告書(4)

B2層・ B1層・ 0 B層・ その他：報告書(5)

4. 当報告で使用した木製品の分類記号A-Nとa・b・c・d・h・tについては以下のとおり。

また、第 章第 1 節でも説明している。さらに用途細分や形状から、中分類を数字、小分類を - 数字で表現した。全分類と名称は、表 - 1-3 や表 - 4・5 に掲載してある。

A：舟関係	F：紡織編具	K：素材類
B：漁撈具	G：容器類	L：建築材類
C：狩猟具	H：食用具	M：樹皮
D：諸作業道具	I：祭祀具	N：腐材等
E：運搬具	J：各種加工製品や部品	

細部加工等による分類

a：挟り付き	h：長い	t：両端
b：挟り入り		
c：切り込み入り		
d：有孔		

# 目 次

口 絵

例 言

記号等の説明

調査要項

諸 言

1	本書の内容	1
2	遺跡の位置と環境	1
(1)	位置と地形	1
(2)	周辺の環境	6
(3)	周辺の遺跡	10
(4)	歴史的環境	16
(5)	現況	17
3	調査にいたる経緯	18
4	調査の方法	19
(1)	調査予定地の内容推定と問題点抽出	19
(2)	調査計画の立案と進行	19
(3)	発掘区の設定	21
(4)	発掘調査の手順	21
(5)	遺物の取り上げ・保管	21
(6)	遺物整理	21
(7)	記録類	22
5	調査と整理作業の概要	22
(1)	各年度の調査概要	22
(2)	昨年度までの整理作業	23
6	木製品と土壌サンプルの整理作業	24
(1)	木製品の保存処理	24
(2)	木製品の収納管理	26
(3)	土壌サンプルの選別	27
7	土層の区分	28
8	引用参考文献	41

低湿度部と木製品出土の概要

1	低湿度部既報告の概要	43
2	低湿度部形成の概略	44
3	木製品の出土状況	48

木製品データの訂正と追加

1	既報告木製品データの訂正と追加	49
2	木製品追加報告	65

3	遺構出土木製品の取りまとめ	65
4	樹種識別結果の追加と訂正	68
	(1) 樹種識別結果の追加	68
	(2) 樹種識別結果の訂正	68
	(3) 木製品の樹種同定結果の総まとめ	70
木製品の種別報告		
1	種別報告の概要	91
2	種別報告	95
	(1) 集成図の概略	95
	(2) 分類別報告	100
3	彫り・刻み等の加飾のある製品集成	168
4	漆塗り椀の紋様集成	176
その他の遺物報告		
1	金属製品の追加報告	181
2	ガラス玉の追加報告	182
3	骨製品報告	183
4	キノコ報告	183
	ユカンボシC15遺跡出土の菌類 五十嵐恒夫	184
写真図版		187
自然科学的分析		
1	ユカンボシC15遺跡から出土した炭化植物種子 札幌国際大学 吉崎 昌一・椿坂 恭代	265
2	千歳市ユカンボシC15遺跡出土動物遺存体 千歳サケのふるさと館 高橋 理	297
3	出土木製品の樹種識別における現状と課題 釜森林総合研究所 平川 泰彦 北海道埋蔵文化財センター 菊池 育子	309
4	ユカンボシC15遺跡 年代測定結果 株式会社地球科学研究所	329
5	ユカンボシC15遺跡出土漆器資料の材質と製作技法 くらしき作陽大学 北野信彦	331
まとめ・考察		
1	木製品集中区の意味	343
2	樹種構成からみたユカンボシC15遺跡の性格とその変容	350
3	道央部における縄文土器の編年	410
報告書抄録		453

## 目 次

Ⅰ 緒言		Ⅳ 木製品の種別報告	
図Ⅰ-1 遺跡の位置(1)	2	図Ⅳ-1 舟敷・舟材	118
図Ⅰ-2 遺跡の位置(2)	3	図Ⅳ-2 舷側板	119
図Ⅰ-3 遺跡の位置(3)	4	図Ⅳ-3 舟部材・車轍受台部等	120
図Ⅰ-4 調査前状況図	5	図Ⅳ-4 車轍(1)	121
図Ⅰ-5 西地区最終面コンター図	8	図Ⅳ-5 車轍(2)・早權	122
図Ⅰ-6 周辺の遺跡(1)	12	図Ⅳ-6 回転式龍頭鉞(キテ)中柄 ・魚叩き棒	123
図Ⅰ-7 周辺の遺跡(2)	13	図Ⅳ-7 やす・浮子	124
図Ⅰ-8 年度別調査区図 ・グリッド設定図	20	図Ⅳ-8 掛矢・横槌・縦槌	125
図Ⅰ-9 木製品の保存処理工程	25	図Ⅳ-9 斧柄・柄類(1)	126
図Ⅰ-10 旧カードと新カード	27	図Ⅳ-10 柄類(2)	127
図Ⅰ-11 土層模式図	28	図Ⅳ-11 柄類(3)	128
図Ⅰ-12 掲載土層位置図	31	図Ⅳ-12 発火具・挟み木	129
図Ⅰ-13 土層柱状図(1)Eライン	32	図Ⅳ-13 鉤類	130
図Ⅰ-14 土層柱状図(2)Kライン	33	図Ⅳ-14 まな板・作業台	131
図Ⅰ-15 土層柱状図(3)Mライン	34	図Ⅳ-15 諸道具類	132
図Ⅰ-16 土層柱状図(4)Oライン	35	図Ⅳ-16 歩行具・楯具等	133
図Ⅰ-17 土層柱状図(5)S・20・23ライン	36	図Ⅳ-17 丸木材加工製品等(錘等)	134
図Ⅰ-18 土層柱状図(6)29-28・34ライン	37	図Ⅳ-18 曲物	135
図Ⅰ-19 土層柱状図(7)区低湿部	38	図Ⅳ-19 漆塗り椀	136
		図Ⅳ-20 刺り鉢(ニマ)	137
Ⅱ 低湿部と木製品出土の概要		図Ⅳ-21 刺り物(盆・皿・椀)	138
図Ⅱ-1 低湿部の範囲	43	図Ⅳ-22 篋類(1)	139
図Ⅱ-2 木製品集計・層別点数グラフ	45	図Ⅳ-23 篋類(2)・大型篋	140
図Ⅱ-3 木製品分布図(1) I B 5・I B 4・I B 3	46	図Ⅳ-24 竪杵	141
図Ⅱ-4 木製品分布図(2) I B 2・I B 1・O B	47	図Ⅳ-25 イクバスイ・木幣等	142
		図Ⅳ-26 端袂付有孔製品類(杵材?)	143
Ⅲ 木製品データの訂正と追加		図Ⅳ-27 柱(1)	144
図Ⅲ-1 修正木製品(1)	59	図Ⅳ-28 柱(2)	145
図Ⅲ-2 修正木製品(2)	60	図Ⅳ-29 股木杭	146
図Ⅲ-3 修正木製品(3)	61	図Ⅳ-30 建杭(1)	147
図Ⅲ-4 修正木製品(4)	62	図Ⅳ-31 建杭(2)	148
図Ⅲ-5 追加報告木製品(1)	63	図Ⅳ-32 建杭(3)	149
図Ⅲ-6 追加報告木製品(2)	64	図Ⅳ-33 建杭(4)	150
図Ⅲ-7 遺構の柱・杭	66	図Ⅳ-34 建杭(5)	151
		図Ⅳ-35 建杭(6)	152
		図Ⅳ-36 建築部材(1)	153
		図Ⅳ-37 建築部材(2)	154
		図Ⅳ-38 杭	155
		図Ⅳ-39 彫り・刻み集成(1)	172
		図Ⅳ-40 彫り・刻み集成(2)	173
		図Ⅳ-41 彫り・刻み実大図	175
		図Ⅳ-42 漆塗り椀紋様集成(1)	178
		図Ⅳ-43 漆塗り椀紋様集成(2)	179



## 目次

### V その他の遺物報告

図V - 1 金属製品	182
図V - 2 ガラス玉	182
図V - 3 骨製品	182
図V - 4 キノコ分布図	185

### VII まとめと考察

#### 1 木製品集中区の意味

図VII - 1 I B 3層木製品集中区出土状況図	344
----------------------------	-----

#### 2 樹種からみたユカンボシC15遺跡の性格とその変容

図VII - 2 主要樹種の木取り系統比率グラフ	351
図VII - 3 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比(1)	379
図VII - 4 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比(2)	380
図VII - 5 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比(3)	381
図VII - 6 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比(4)	382
図VII - 7 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比(5)	383
図VII - 8 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比(6)	384
図VII - 9 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比(7)	385
図VII - 10 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比(8)	386
図VII - 11 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比(9)	387
図VII - 12 美々8遺跡低湿度I B層木製品樹種別構成比(1)	404
図VII - 13 美々8遺跡低湿度I B層木製品樹種別構成比(2)	405
図VII - 14 美々8遺跡低湿度I B層木製品樹種別構成比(3)	406
図VII - 15 美々8遺跡低湿度I B層木製品樹種別構成比(4)	407

#### 3 道央部における焼縄文土器の編年

図1～図18	
--------	--

## 表 目 次

## I 緒言

表 I - 1	千歳・恵庭の現生樹木	7
表 I - 2	周辺の遺跡	14

## II 低湿部と木製品出土の概要

表 II - 1	木製品地区別層別点数表	45
----------	-------------	----

## III 木製品データの訂正と追加

表 III - 1	正誤表(1)	50
表 III - 2	正誤表(2)	51
表 III - 3	正誤表(3)	52
表 III - 4	正誤表(4)	53
表 III - 5	正誤表(5)	54
表 III - 6	正誤表(6)	55
表 III - 7	正誤表(7)	56
表 III - 8	正誤表(8)	57
表 III - 9	正誤表(9)	58
表 III - 10	図修正木製品	61
表 III - 11	追加報告 木製品	64
表 III - 12	H - 31・33・34・35木製品一覧	65
表 III - 13	既報遺構出土木製品一覧	67
表 III - 14	出土木製品の層位別樹種同定結果	86
表 III - 15	区出土木製品の層位別 樹種同定結果	87
表 III - 16	区出土木製品の層位別 樹種同定結果	88
表 III - 17	出土木製品の樹種出現率	89

## IV 木製品の種別報告

表 IV - 1	木製品種別分類と出土 ・掲載一覧(1)	92
表 IV - 2	木製品種別分類と出土 ・掲載一覧(2)	93
表 IV - 3	木製品種別分類と出土 ・掲載一覧(3)	94
表 IV - 4	種別木製品の層別出土数(1)	96
表 IV - 5	種別木製品の層別出土数(2)	97
表 IV - 6	種別木製品の層別構成比(1)	98
表 IV - 7	種別木製品の層別構成比(2)	99
表 IV - 8	種別木製品集成掲載一覧(1)	156
表 IV - 9	種別木製品集成掲載一覧(2)	157
表 IV - 10	種別木製品集成掲載一覧(3)	158
表 IV - 11	種別木製品集成掲載一覧(4)	159
表 IV - 12	種別木製品集成掲載一覧(5)	160
表 IV - 13	種別木製品集成掲載一覧(6)	161
表 IV - 14	種別木製品集成掲載一覧(7)	162

表 IV - 15	種別木製品集成掲載一覧(8)	163
表 IV - 16	種別木製品集成掲載一覧(9)	164
表 IV - 17	種別木製品集成掲載一覧(10)	165
表 IV - 18	種別木製品集成掲載一覧(11)	166
表 IV - 19	種別木製品集成掲載一覧(12)	167
表 IV - 20	種別木製品集成掲載一覧(13)	168
表 IV - 21	種別木製品集成掲載一覧(14)	169
表 IV - 22	彫り・刻み等の加飾のある 木製品一覧	174
表 IV - 23	漆碗等一覧表	180

## V その他の遺物報告

表 V - 1	追加報告 金属製品	181
表 V - 2	金属製品蛍光X線分析	181
表 V - 3	追加報告 ガラス玉	182
表 V - 4	ガラス玉蛍光X線分析	182
表 V - 5	骨製品	183
表 V - 6	キノコ出土一覧	186

## 目次

### Ⅶ まとめと考察

#### 1 木製品集中区の意味

表Ⅶ-1	I B 3 層木製品集中区出土木製品一覧(1)	346
表Ⅶ-2	I B 3 層木製品集中区出土木製品一覧(2)	349
表Ⅶ-3	I B 3 層木製品集中区出土木製品一覧(3)	348
表Ⅶ-4	I B 3 層木製品集中区出土木製品一覧(4)	349

#### 2 樹種からみたユカンボシC15遺跡の性格とその変容

表Ⅶ-5	各樹種の層別構成比	353
表Ⅶ-6	種別木製品の樹種別・層別出土数(1)	356
表Ⅶ-7	種別木製品の樹種別・層別出土数(2)	357
表Ⅶ-8	種別木製品の樹種別・層別出土数(3)	358
表Ⅶ-9	種別木製品の樹種別・層別出土数(4)	359
表Ⅶ-10	種別木製品の樹種別・層別出土数(5)	360
表Ⅶ-11	種別木製品の樹種別・層別出土数(6)	361
表Ⅶ-12	種別木製品の樹種別・層別出土数(7)	362
表Ⅶ-13	種別木製品の樹種別・層別出土数(8)	363
表Ⅶ-14	種別木製品の樹種別・層別出土数(9)	364
表Ⅶ-15	種別木製品の樹種別・層別出土数(10)	365
表Ⅶ-16	種別木製品の樹種別・層別出土数(11)	366
表Ⅶ-17	種別木製品の樹種別・層別出土数(12)	367
表Ⅶ-18	種別木製品の樹種別・層別出土数(13)	368
表Ⅶ-19	種別木製品の樹種別・層別出土数(14)	369
表Ⅶ-20	種別木製品の樹種別・層別出土数(15)	370
表Ⅶ-21	種別木製品の樹種別・層別出土数(16)	371
表Ⅶ-22	種別木製品の樹種別・層別出土数(17)	372
表Ⅶ-23	種別木製品の樹種別・層別出土数(18)	373
表Ⅶ-24	種別木製品の樹種別・層別出土数(19)	374
表Ⅶ-25	種別木製品の樹種別・層別出土数(20)	375
表Ⅶ-26	種別木製品の樹種別・層別出土数(21)	376
表Ⅶ-27	主要樹種の出土製品点数表(1)	390
表Ⅶ-28	主要樹種の出土製品点数表(2)	391
表Ⅶ-29	主要樹種の出土製品 大分類別構成比	392
表Ⅶ-30	樹木のアイヌ名・伝承と出土製品(1)	394
表Ⅶ-31	樹木のアイヌ名・伝承と出土製品(2)	395
表Ⅶ-32	樹木のアイヌ名・伝承と出土製品(3)	396
表Ⅶ-33	樹木のアイヌ名・伝承と出土製品(4)	397
表Ⅶ-34	樹木のアイヌ名・伝承と出土製品(5)	398
表Ⅶ-35	美々8遺跡低湿度I B層出土木製品種別 ・樹種別点数(1)	401
表Ⅶ-36	美々8遺跡低湿度I B層出土木製品種別 ・樹種別点数(2)	402
表Ⅶ-37	美々8遺跡低湿度I B層出土木製品種別 ・樹種別点数(3)	403

#### 3 道央部における続縄文土器の編年

表1～表12

## 目 次

## I 緒言

図版 I - 1	遺跡全景	189
図版 I - 2	周辺の環境	190
図版 I - 3	遺跡の現況	191
図版 I - 4	低湿度対策施設	192
図版 I - 5	調査風景	193
図版 I - 6	一次整理作業風景	194
図版 I - 7	整理作業風景(1)	195
図版 I - 8	整理作業風景(2)	196
図版 I - 9	基本土層	197

## II 低湿度部と木製品出土の概要

図版 II - 1	平成8年度の調査	198
図版 II - 2	平成9年度の調査(1)	199
図版 II - 3	平成9年度の調査(2)	200
図版 II - 4	平成9年度の調査(3)	201
図版 II - 5	平成10年度の調査(1)	202
図版 II - 6	平成10年度の調査(2)	203

## III 木製品データの訂正と追加

図版 III - 1	修正木製品(1)	204
図版 III - 2	修正木製品(2)	205
図版 III - 3	修正木製品(3)	206
図版 III - 4	修正木製品(4)	207
図版 III - 5	追加報告木製品(1)	208
図版 III - 6	追加報告木製品(2)	209
図版 III - 7	遺構の柱・杭	210
図版 III - 8	木製品組立顕微鏡写真	211

## IV 木製品の種別の報告

図版 IV - 1	舟敷・舟材	212
図版 IV - 2	舷側板	213
図版 IV - 3	舟部材・車權受台部等	214
図版 IV - 4	車權(1)	215
図版 IV - 5	車權(2)・早權	216
図版 IV - 6	回転式離頭鉞(キテ)中柄 ・魚叩き棒	217
図版 IV - 7	やす・浮子	218
図版 IV - 8	掛矢・横槓・縦槓	219
図版 IV - 9	斧柄・柄類(1)	220
図版 IV - 10	柄類(2)	221
図版 IV - 11	柄類(3)	222
図版 IV - 12	発火具・挟み木	223

図版 IV - 13	鉤類	224
図版 IV - 14	まな板・作業台	225
図版 IV - 15	諸道具類	226
図版 IV - 16	歩行具・編具等	227
図版 IV - 17	丸木材加工製品等(錘等)	228
図版 IV - 18	曲物	229
図版 IV - 19	漆塗り椀(1)	230
図版 IV - 20	漆塗り椀(2)	231
図版 IV - 21	割り鉢(ニマ)	232
図版 IV - 22	割り物(盆・皿・椀)	233
図版 IV - 23	甕類(1)	234
図版 IV - 24	甕類(2)・大型甕	235
図版 IV - 25	竪杵	236
図版 IV - 26	イクバスイ・木幣等	237
図版 IV - 27	端挟付有孔製品(杵材?)	238
図版 IV - 28	柱(1)	239
図版 IV - 29	柱(2)	240
図版 IV - 30	股木杭	241
図版 IV - 31	建杖(1)	242
図版 IV - 32	建杖(2)	243
図版 IV - 33	建杖(3)	244
図版 IV - 34	建杖(4)	245
図版 IV - 35	建杖(5)	246
図版 IV - 36	建杖(6)	247
図版 IV - 37	建築部材(1)	248
図版 IV - 38	建築部材(2)	249
図版 IV - 39	杭(1)	250
図版 IV - 40	杭(2)	251
図版 IV - 41	彫り・刻み集成(1)	252
図版 IV - 42	彫り・刻み集成(2)	253
図版 IV - 43	彫り・刻み集成(3)	254
図版 IV - 44	彫り・刻み集成(4)	255
図版 IV - 45	彫り・刻み集成(5)	256
図版 IV - 46	彫り・刻み集成(6)	257
図版 IV - 47	彫り・刻み集成(7)	258
図版 IV - 48	漆塗り椀紋様集成(1)	259
図版 IV - 49	漆塗り椀紋様集成(2)	260
図版 IV - 50	漆塗り椀紋様集成(3)	261

## V その他の遺物報告

図版 V - 1	金属・骨製品・ガラス玉と キノコ(1)	262
図版 V - 2	キノコ(2)	263

## 調査要項

事業名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

事業委託者：日本道路公団北海道支社

事業受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

遺跡名：ユカンボシC15遺跡（北海道教育委員会登録番号：A-03-263）

所在地：千歳市長都183-1,1190-1ほか

調査期間：平成8年4月1日～平成9年3月26日（発掘 6月26日～10月30日）

平成9年4月1日～平成10年3月31日（発掘 5月6日～10月31日）

平成10年4月1日～平成11年3月31日（発掘 5月6日～9月12日）

調査面積：平成8年度 3,025㎡

平成9年度 8,855㎡

平成10年度 3,000㎡

### 調査体制

	氏名	平成8年度	平成9年度	平成10年度
第2調査部長	鬼柳 彰			
第2調査部第2調査課長	西田 茂			
" 主査	三浦 正人			(主任)
" 主任	鈴木 信			
" 主任	中田 裕香			
" 文化財保護主事	倉橋 直孝			
" 文化財保護主事	吉田裕史洋			
" 文化財保護主事	大泰司 統			
第1調査部資料調査課主任	田口 尚			
" 主任	菊池 慈人			

：発掘担当者

：調査員

平成11・12年度 整理作業

第2調査部第3調査課 課長	西田 茂
主査	三浦 正人
主任	鈴木 信
文化財保護主事	吉田裕史洋

平成13・14年度 整理作業

第2調査部第5・4調査課 課長	三浦 正人
主査	鈴木 信
文化財保護主事	吉田裕史洋

# I 緒 言

## 1 本書の内容

本書は整理作業の最終年度として、昨年度まで報告した<sup>(1)～(5)</sup>の報告書を基に、千歳市ユカンボシC15遺跡の報告のうち木製品を中心に取りまとめたものである。付随して未報告品の追加報告や遺物・遺跡についてのデータ修正・追加・更新、分析・同定データの修正・追加・新報告も掲載している。

口絵カラーでは、遺跡全景と土層断面を掲載し、おもな漆塗り椀の文様を集めて示した。

章には、ユカンボシC15遺跡と調査・整理に関する概要を示した。昨年度まで報告した内容へ補遺を中心としている。整理方法の概要は木製品や土壌サンプルについてである。

章では、低湿度についての概要を記し、木製品の出土状況など全体について概括した。

章では、報告済み木製品のデータ等の訂正・追加を報告書ごとに正誤表形式で揭示し、必要なものは修正図も掲載してある。未報告の木製品もここで報告する。また、各報告書に散らばっていた遺構の木製品データ等をまとめて掲載した。木製品の樹種データとその訂正・追加もこの章に示し、樹種同定結果の総まとめもおこなった。

章では、層別で既報告の木製品を種別にして再報告。木製品の用途と樹種・層位との関わりを検討した。図・表・写真・説明で報告しており、図は種別のスケール統一に努めたが、ページ内に収めるため掲載図の大きさは既報告よりも小さくなっている。そのため図・表は既報告分と対照できるように表示してある。また、木製品に付けられた刻みや彫りなどの加飾や漆椀の文様を集成して報告した。これもスケールをそろえた図と拡大図・表・写真・説明で報告している。文様等の一部には推定で加筆しわかりやすいように工夫した。

章では、金属製品・ガラス玉の追加報告品と、未報告であった骨製品・キノコ（サルノコシカケ）の報告を掲載した。サルノコシカケ報告には同定依頼原稿を含んでいる

章は、分析・同定のまとめを掲載した。土壌サンプルから選別した種子・骨の同定結果を各節で報告。木製品樹種同定については、問題点を含めた樹種識別の現状を報告。漆塗り製品の分析・考察もここに掲載する。

章は、遺物・遺構・遺跡の総括と考察である。木製品については集中出土部分の意味と、樹種構成から見た当遺跡の総括を試みた。また、台地部分のまとめとして、縄文時代後半以降の土器編年について考察した。

写真図版は各章対応とした。報告の都合上、既報告の写真と新撮影の写真とを組み合わせで使用している。

## 2 遺跡の位置と環境

### (1) 位置と地形（図1-1～5）

ユカンボシC15遺跡は、千歳市街地の北方、恵庭市街地の東方に位置し、JR千歳駅からは約6km、JR恵庭駅からは約4.5kmを測る。現在の千歳川からは、西方500mの位置となる。この千歳川に架かる「長都大橋」から「東6線」（道道馬追原野北信濃線）を南に約500m進むと「市道南23号」に達する。このあたりから西側300mほどが遺跡の広がりとして確認できている。近世一縄文時代の遺跡範囲の標高は6～9mで、現表土からは0.3～2mほど掘り下げたレベルにある。なおその下、標高5m前後には約2,000年前の埋没樹林と石器類が検出されている。

至近の千歳川の水位は通常6m前後であるが、周辺の河川改修や水路・干拓工事が進む以前は水位

## 2 遺跡の位置と環境



図 - 1 遺跡の位置(1)



この図は、陸地測量部、大正5年及6年測図、昭和10年修正測五万分の一地形図札幌第七號「志度」の一部を複製し加筆したものである。

図 - 2 遺跡の位置(2)



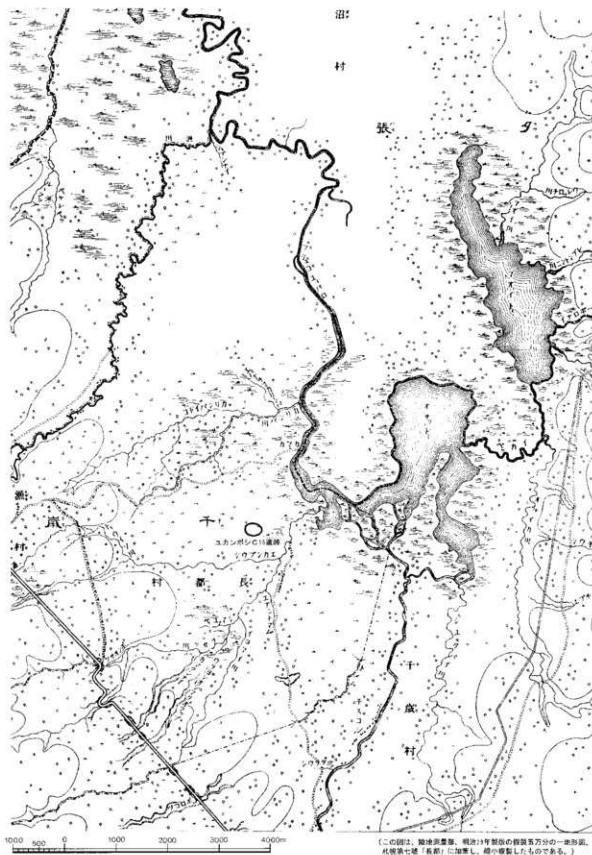


図 - 3 遺跡の位置(3)

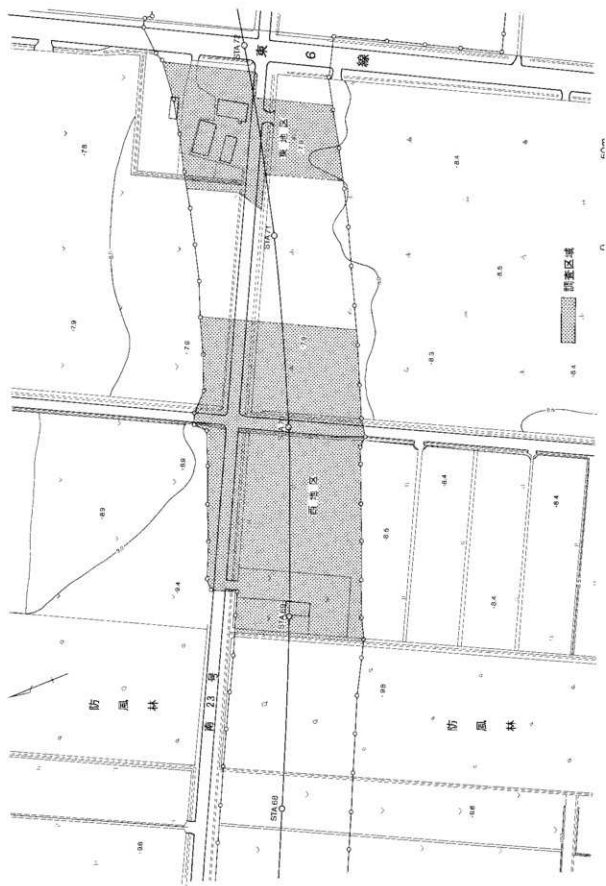


图 - 4 調査前状況图

が高く、標高8mあたりまでは湿地帯であった。この湿地帯は千歳川流域の石狩低地南東部に広がる一大停滞水域で、現在の千歳市・恵庭市・北広島市・長沼町・南幌町・江別市にまたがる。千歳川を主に桧梅川・長都川・ユカンボシ川・ケヌフチ川・漁川・島松川・音江別川・輪厚川・夕張川・早苗別川などの水を集め、長都沼・馬追沼・ボンユーバリ沼・菱沼・鶴沼などの大小の沼や低湿地・原野を形成していた。

当遺跡は長都沼（オサツトー）に流れ込むユカンボシ川下流部の微高地と低湿地部に立地し、この停滞水域に沿って千歳川下流域に向かうルートの長都沼端の位置にある。

また、遺跡調査区の東縁にあたる東6線から3区画西側の東3線には、千歳・恵庭両市の境界線が設定されており、ユカンボシ川もこの境界より上流部が恵庭市、下流部が千歳市域に属することになっている。ユカンボシ川も改修工事が進められており、現在の河口は旧来よりも500mほど南に寄って、改修された長都川に注いでいる。したがって遺跡内に現ユカンボシ川は流れておらず、旧流が地形図等で認識できる。

図 - 4 にみられる東西に調査区を分断する空白域が旧ユカンボシ川で、調査区東地区の北側を巻いて一旦南流し長都川に合流する。東地区の東西の低湿地部（『千歳市ユカンボシ川15遺跡』北埋調報128』所収）は、この旧流に由来する。西地区の調査では、その旧流跡に合するように東流する旧々流跡あるいは支流跡（図 - 5）と、それに伴う低湿地部や遺構・遺物が確認されている。東西両地区とも低湿地部に相対して標高8～9mの台地部（微高地）があり、遺跡を営んだ人々の住居や墓などが造られていた。

## (2) 周辺の環境

高速道路用地として買い上げられる以前は、東地区は家屋・畑・水田・市道、西地区は畑・水田・市道であった。西地区の一部はさらに前、宅地として利用されていたことがある。遺跡のあり方と同じく、相対的に高いところに宅地・畑、低いところが水田という土地利用がされていた。

東地区にあった農家では鶏卵用のニワトリ飼育が行われており、鶏舎をイタチ・キツネ・アライグマ等から守るため多数のイヌが杭に繋がれていた。遺構や遺物包含層の攪乱は、畑・水田・暗渠排水のほか、ごみ穴・井戸・家屋の基礎・小屋や犬用の杭などによるものもあった。

遺跡のすぐ西側や500m南の南24線には、幅40間（72m）の防風林（国有保安林）帯がある。林の構成はマツ・イチイなどの針葉樹、ヤチダモ・ハンノキ・カシワ・ミズナラ・コブシ・オニグルミ・クリ・ホオノキ・カエデ・ミズキなどの落葉広葉樹からなる。樹上でのアオサギの営巣・繁殖もみられた。林内や遺跡の周辺にはヤマクワ・タラノキ・ヤマブドウ・コクワ・ヤナギなども張っていた。千歳市域の植生を調査した1988年の寺崎昭紀編著『千歳の植物』では33科58属102種の木本・つる性木本が報告されている（表 - 1）。またユカンボシ川源流部である恵庭公園と周辺伐採地の植物相を調査した1994年の恵庭自然研究会の報告（『みずなら』第三号）では27科35属45種の木本・つる性木本が報告されている（表 - 1）。

明治26～28年に北海道・千島を踏査した道庁職員田中環の没後、その成果が発表された「北海道森林所見」（1907～08（明治40～41）年『殖民公報』第三十七～四十号）によれば、「本道に産する喬木、亜喬木」は「七十種」で、「内部の平地に能く生ずる樹種」はトドマツ・クロエゾマツ・アカエゾマツ・アララギ（イチイ）・シラカンバ・ナナカマド・イタヤカエデ・ウワミズザクラ・ヤマザクラ・オオナラ・ハリギリ・オガラバナ（ホザキカエデ）・ハコヤナギ・バッコヤナギ等であると言う。この「七十種」中、当遺跡周辺地域に限界のある樹種として、「石狩に入ればコナラは札幌、夕張、

表 - 1 千歳・恵庭の現生樹木

科名	属名	種名	『千歳の植物』	〔恵庭公園〕	
いらい	イチイ	イチイ	○	○	
まつ	トウヒ	エゾマツ	○		
		アカエゾマツ	○	○	
	モミ	トマツ	○	○	
やなぎ	カラマツ	カラマツ	○		
	ハコヤナギ	ヤマナラシ	○		
		ウラジロハコヤナギ	○		
	ヤナギ	ドロノキ	○		
		クチャヤナギ	○		
		エゾノハコヤナギ	○		
		エゾヤナギ	○		
		エゾノキヌヤナギ	○		
		オノエヤナギ	○		
		イヌコリヤナギ	○	○	
エゾノカリヤナギ		○			
キツネヤナギ	○	○			
くるみ	オニグルミ	オニグルミ	○	○	
	クマシデ	サワシバ	○		
かばのき	カバノキ	ウダイカンバ	○		
		シラカンバ	○		
	ハンノキ	ケヤマハンノキ	○		
ぶな	ハンノキ	ハンノキ	○	○	
	コナラ	ミズナラ	○		
にれ	コナラ	コナラ	○		
	カシワ	カシワ	○		
くわ	ニレ	ハルニレ	○	○	
やどりぎ	クワ	ヤマガワ	○	○	
かつら	ヤドリギ	ヤドリギ	○		
めぎ	カヅラ	カヅラ	○	○	
もくれん	メギ	ヒロハヘビノボラズ	○	○	
	モクレン	ホオノキ	○		
		コブシ	○	○	
ゆきのした	マツブサ	キタコブシ	○	○	
	イワガラミ	チョウセンゴミシ	○	○	
		イワガラミ	○	○	
ばら	アジサイ	ゴトウズル	○	○	
		エゾアジサイ	○		
		ナウシロイチゴ	○	○	
すいけい	スグリ	エビガライチゴ	○		
		ノイバラ	○		
		ハマナス	○		
		エゾヤマザクラ	○		
		ミヤマザクラ	○		
		シウリザクラ	○	○	
		エゾノウラミスザクラ	○		
		ズミ	○		
		カマツカ	ワタゲカマツカ	○	
		ナナカマド	アズキナシ	○	

科名	属名	種名	『千歳の植物』	〔恵庭公園〕	
まめ	イヌエンジュ	イヌエンジュ	○	○	
	ハギ	エゾヤマハギ	○		
みかん	ミカン	キハダ	○	○	
にがき	ニガキ	ニガキ	○	○	
うるし	ウルシ	ツタウルシ	○	○	
		ヤマウルシ	○	○	
もちのき	モチノキ	イヌツグ	○	○	
		ハイヌツグ	○		
にしきぎ	ニシキギ	ツルクメモドキ	イヌツルクメモドキ	○	
			ケニシキギ	○	
			コマユミ	○	○
			ツルマサキ	○	○
			マユミ	○	○
			ツリバナ	○	○
みつぼうつぎ	ミツバウツギ	○	○		
かえで	カエデ	ハウチワカエデ	○		
			ヤマモミジ	○	○
			カラコギカエデ	○	
			イタヤカエデ	○	
くろめもどき	クロウメモドキ	ベニイタヤ	○		
			クロビイタヤ	○	
			エゾイタヤ	○	○
ぶどう	ブドウ	ヤマブドウ	○	○	
			ノブドウ	○	
			ツタ	○	
しなのき	シナノキ	シナノキ	○	○	
			オオハボダイジュ	○	
またたび	サルナシ	サルナシ	○		
じんちようげ	ジンチョウゲ	マクタビ	○		
ぐみ	グミ	ナニワズ	○	○	
うこぎ	ウコギ	アキグミ	○		
			タラノキ	○	○
			ケヤマウコギ	○	○
みずき	ミズキ	コシアブラ	○		
			ハリギリ	○	○
つつじ	ツツジ	ハリギリ(センノキ)	○	○	
えごのき	エゴノキ	ミズキ	○	○	
もくせい	イボタノキ	ヤマツツジ	○		
			ハクウンボク	○	
			ミヤマイボタ	○	○
			エゾイボタ	○	
			イボタノキ	○	○
			ハシドイ	○	○
すいかざら	ガマズミ	ヤチダモ	○	○	
			アオダモ	○	○
			ニワトコ	○	○
すいかざら	スイカズラ	エゾニワトコ	○	○	
			カンボク	○	○
			オオカメノキ	○	○
		ガマズミ	○		
		クロミドリイソカグラ	○		
		ベニバナヒメカラボク	○	○	

『千歳の植物』:1988 千歳市植生調査報告  
〔恵庭公園〕:1994 恵庭公園植物相調査ほか

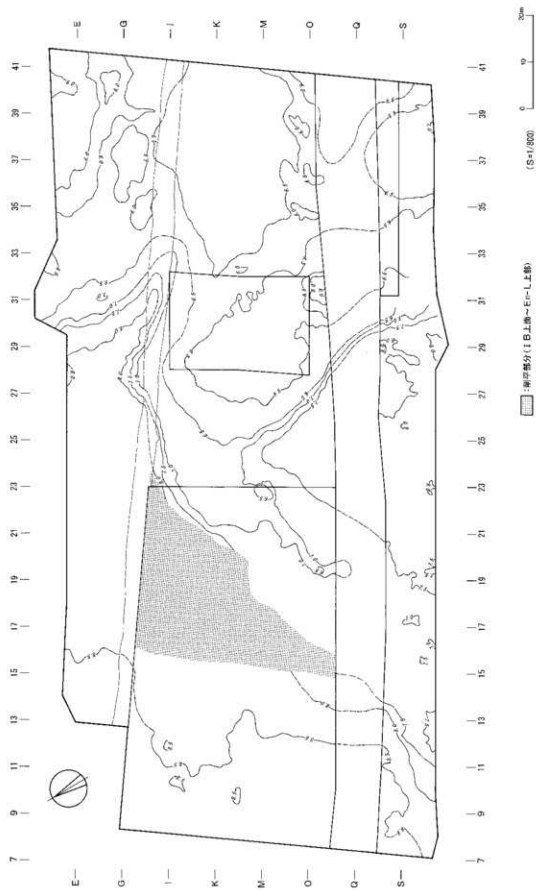


図 5 西地区最終面コンター図

空知三郡、トチは其西部、クリは夕張空知、両郡にて共に絶ゆ」との記述もある。また樹木の成長具合を「千歳村」を含め4カ所で測定した結果、ドロヤナギは周囲3～4m・高さ30～34m、ヤチダモは周囲1.5～2m・高さ27～32m、ニレは周囲2～2.5m・高さ27～30m、ハリギリは周囲2～2.5m・高さ25～28m、クロエゾマツは周囲2～2.5m・高さ27～35mと報告している。遺跡附近でも豊富な森林資源が育っていた状況が想像される。

前述した長都沼は、周囲に広大な湿原をもつおよそ3.9平方<sup>1)</sup>の滞水域で、千歳川の遊水池の役割も果たしていた(図 2・3)。1950年の元田 茂著「北海道湖沼誌」(『水産孵化場試験報告』5-1)では、「石狩川及千歳川流域の泥炭地帯には幾多の腐植栄養化する泥炭沼が存在し比較的大きいものとしては千歳川流域の長都沼、馬追沼、鶴沼をあげている。そして「附近は廣い湿潤な沼澤地で」「沼の底土は特色ある火山灰に覆われて」おり、「泥炭地から滲透する水の為に腐植質に富んだ褐色の水を湛へ過マンガン酸カリ消費量は5月下旬長都沼でmg/lを測る」と報告している。さらに「長都沼のプランクトンは*Ceriodaphnia pulchella*, *Keratella*, *Synedra*, *Asterionella*, *Epit hemia tergiida*, *Pediastrum*, *Centropyx*, *Arcella*, *Diffulgia*等を産し、又スズエビ、モクスガニ、イシガイ(*Unio douglasiae*)、カハシンジユバイ(*Margaritana margaritifera*)が棲息し、ヌマガイ(*Anodonta lauta*)の死殻が採集される。魚類はウグイ(*Tribolodon hakuensis ezoe*)、ヤチウグイ、フナ、イトウ、イトウオ、ゴリ、カチカ、ドジョウ等が居る。」と生物報告もある。戦前から知られていた特産物はワカサギ・フナ・コイ・エビなどで、キジヤガン・カモ・ハクチョウなどの水鳥も多かった。「千歳・舞鶴・鶴沼」といった地名が示すごとく、往年にはツルの飛来もあったようである。

現在遺跡から約500m東を北流する改修された千歳川は、長都沼干拓以前は沼に注ぎ、沼から緩やかに水を流し出す川であった。遺跡が営まれていた当時は東に1.5km弱の地点で長都川が千歳川・長都沼に合流する河口部で、遺跡は大湿原の西端に位置していたことになる。千歳川水系はサケの上る川で、遺跡近くの中流域ではウグイが大量に生息している。1978年の山本道也著「サケの来る川 千歳川の変遷とサケ文化史」(『苗別川流域における鳥・魚類・植生調査』千歳市文報)では、「千歳川の魚類相」として在来種で「サケ・サクラマス・ヤマメ・イトウ・ウグイ・エソウグイ・エソイワナ・アメマス・オシロコマ(未確認)・カワヤツメ・ナマス・コイ・ギンブナ・ドジョウ・フクドジョウ・エソボトケドジョウ・エソトミヨ・キタノトミヨ・トミヨ・イトヨ・ハナカジカ・アユ・ワカサギ・ヤチウグイ」をあげている。

ユカンボシ川は西約5.5kmの恵庭公園内に源流部を持ち、小蛇行を繰り返してほぼ東流して長都川に注ぐ。現在そのほとんどが流路改修され、源流部付近とその近辺のわずかに自然河川の姿を残すのみである。中流部の自然河川残存部での川幅は約3mである。河岸段丘との比高差は1.5～2.5mで、恵庭市側に11カ所、千歳市側に15カ所の各時代の遺跡が発見されている。このうち18カ所が河川改修や畑地改良事業により発掘調査されている。

189(明治24)年北海道廳発行の『北海道殖民地撰定報文』に「長都原野」の土性について、「(前略)重二茅ヲ生シタル地所二百萬坪許アリ其土ハ噴火灰ニシテ其積層ハ凡ソ八寸乃至貳尺ノ間ニ在テ各所異同アリ其表面は壹寸乃至四寸ノ壤土トス其地ハ稍湿地ナルモ(以下略)」とある。「噴火灰」「八寸乃至貳尺」の「積層」は、南西およそ30kmにある樽前山が173(文元4)年7月に噴火した時の降下火山灰で、樽前a降下軽石層(Ta a)と呼ばれている。未開墾や耕作の浅い部分では現在でも確認できる。

### (3) 周辺の遺跡

先に述べた如くユカンボシ川流域には27ヵ所(恵庭市11・千歳市15)の各時代の遺跡が発見されており、このうち18遺跡が河川改修や畑地改良事業により一部発掘調査されている。ユカンボシ川流域の遺跡は、源流～中流の恵庭市側では「ユカンボシE」、中流～下流の千歳市側では「ユカンボシC」と標記され、それぞれ1からの数字を付し遺跡名としている。両市の遺跡名はアイヌ語の河川名でほぼ統一され、流域ごとに数字を付し命名されている。

図 - 6 は『千歳市埋蔵文化財包蔵地分布図』(1994年 千歳市教育委員会)と恵庭市教育委員会作成の埋蔵文化財包蔵地分布図をもとに、北海道教育委員会の埋蔵文化財包蔵地カード等を使用して作ったユカンボシC15遺跡周辺の遺跡分布図(1/30,000)である。また図 - 7 はインターネットの『Map Fan Web』で検索し印刷した、図 - 6 とほぼ同範囲の地図に周辺の遺跡をドットで印した遺跡分布図である。遺跡見学にはこのような地図も必要となるだろう。

表 - 2 はこれら遺跡分布図に対応した一覧表で、文献は次ページに示してある。なお表 - 2 の文献は整理し直したため『千歳市ユカンボシC15遺跡① 北埋調報128』報告とは異なるものとなっている。

以下、既刊の①報告に西田茂が示した内容以降の情報(主に1998年以降)を、当遺跡との関係を考慮しつつ、ユカンボシ川流域の遺跡を中心に概括する。

### 3 ユカンボシC1遺跡

1998年地点再確認。『千歳市ユカンボシC15遺跡④ 北埋調報159』の第一分冊 章の「所謂「北海道式古墳」と「周溝のある墓」について」で、鈴木信が新表採遺物と河野広道報告の刀と古墳について述べている。擦文土器・続縄文土器・縄文土器・石斧片が表採できた。

### 4 ユカンボシC2遺跡

ユカンボシ川右岸・長都川左岸の標高8～9mの段丘から低部位にかけて形成されている、主に縄文中期・続縄文・擦文・アイヌ文化期の遺跡。1988・89年の調査では擦文文化期竪穴37軒・墓2基、アイヌ文化期建物跡39軒・墓7基などが検出されている。今年度、1994・2000年調査の報告書が刊行され擦文文化期竪穴5軒・炉跡9基、アイヌ文化期建物跡4軒・銅鍋?の副葬された墓1基・土坑16基・炉跡5基や馬蹄跡などが確認されている。擦文土器・須恵器・金属製品・木製品・漆椀?等が出土している。

### 14 オサツ2遺跡

長都川右岸の標高6～9mの低位段丘に形成されている、旧石器からアイヌ文化期の複合遺跡。1992～94年の調査では縄文中期の竪穴・土坑、続縄文期の墓・土坑、擦文文化期の竪穴・鍛冶遺構、アイヌ文化期の墓などが検出され擦文～アイヌ文化期の低湿度も調査している。1997～99年の調査では、縄文中期主体の竪穴16軒、縄文早・中・晩期の土坑120基・炉跡114基、擦文文化期の竪穴5軒・土坑15基・炉跡76基・掘立柱跡、アイヌ文化期の建物跡9軒・炉跡6基・灰集中・柱穴等が検出され、擦文土器・ガラス玉や内耳鉄鍋・鎌・刀子・小札・古銭等の金属製品などが出土した。また擦文～アイヌ文化期の低湿度部からは舷側板・早稲・矢中柄・やす・鉤鎌・縦槌・曲物・縄等2,000点以上の木製品・繊維製品が確認されている。

### 248 オサツ15遺跡

1995～1997年の調査で、黒層から縄文晩期の土坑45基・焼土62基を確認。黒層からは中期北筒式期を主体とした竪穴6軒・土坑・焼土190基・Tビット15基が検出された。北筒式期の盛土遺構も

確認されている。

#### 272 イヨマイ7遺跡

2001・02年に調査された。2001年は縄文早・後・晩期の竪穴3軒・土坑29基・焼土70基、擦文文化期の竪穴1軒・焼土10基、アイヌ文化期の墓1基・建物跡などが検出された。アイヌ文化期の墓からは太刀・刀子・鏃・漆椀が出土、擦文文化期の竪穴床面から漆器が出土しており注目される。

#### 273 イヨマイ8遺跡

1999～2001年に調査された。縄文中・後期・続縄文・アイヌ文化期の遺跡。縄文時代では竪穴・墓・土坑・焼土などが、アイヌ文化期では焼土や柱穴などが検出されている。

#### 40 トメト川3遺跡

2001・02年に調査された。隣接するトメト川2遺跡と合わせて、擦文文化期の竪穴と思われる窪みが28基あるという。2001年の調査では続縄文（後北C<sub>2</sub>・D期）の竪穴1軒・土坑6基・焼土10基、擦文文化期の竪穴1軒・土坑3基・焼土6基、アイヌ文化期の建物跡4軒・柱穴・土坑・焼土などが検出された。アイヌ文化期の遺物にはフイゴ羽口・鉄滓・鍋・刀子・マレク・すり鉢・漆器・ガラス玉・獣骨・カワシンジュガイ殻集積などである。

#### 7 ユカンボシE6遺跡

1996年調査。縄文中期主体で、早・後・晩・続縄文・擦文もある。土坑6基・焼土1基・Tビット1基が検出された。縄文中期の土偶が1点出土している。

#### 8 ユカンボシE7遺跡

1996・97年調査。竪穴8軒・土坑74基・焼土143基・Tビット19基等が検出された。竪穴は縄文中・後期・擦文文化期に属するもの。土坑のうち26基は続縄文（北大式期）の遺構で、うち23基が墓である。北大式土器や礫石器とともに斧・鎌・刀・刀子・鏃・針・錫製耳飾等の金属製品が副葬されている。アイヌ文化期では柱穴が確認されている。

#### 108 ユカンボシE8遺跡

1998年調査。縄文後期主体で、早・前・晩期もある。土坑13基・焼土3基・集石1基・Tビット3基が検出された。

#### 115 ユカンボシE10遺跡

1997年調査。縄文後期主体で、早・中・晩期・擦文文化期もある。竪穴5軒・土坑・集石・Tビット等が検出された。竪穴のうち2軒は擦文文化期である。旧石器調査でマイクロコア・マイクロブレードが発見されている。

#### 104 カリンバ1遺跡

1999～2001年にA～E地点が調査された。縄文早・前・中・後期・アイヌ文化期の遺跡。縄文時代では中期を主体に竪穴34軒・土坑147基・焼土・集石・Tビットなどが、アイヌ文化期では建物跡9軒・墓2基などが検出されている。墓には刀等の金属製品が副葬されている。

#### 105 カリンバ2遺跡

1995～98年に一地点が調査された。縄文時代では早期の竪穴1軒、中～後期竪穴33軒（うち6軒は余市式期の大型住居）、早・中・後・晩期の土坑298基、焼土196基・Tビット16基などが検出されている。擦文文化期では銅鏡が出土した竪穴1軒のほか擦文～アイヌ文化期の炉跡83基もある。アイヌ文化期では建物跡55軒・墓6基などが検出されている。墓には刀・刀子・片口鉄鍋・針等の金属製品や漆器・ガラス玉・白磁皿等が副葬されている。近世の地震による液状化現象でおこった噴砂も確認された。





図 - 6 周辺の遺跡(1)

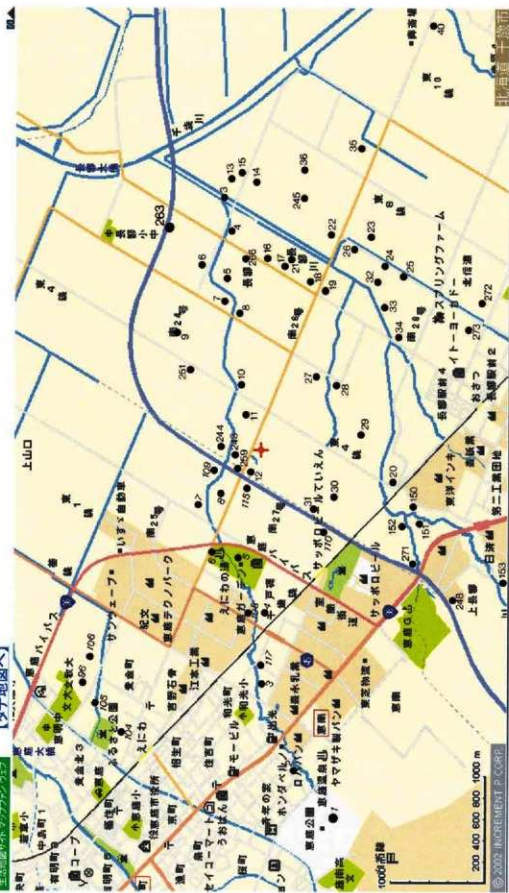


図 - 7 周辺の遺跡 (2)

表 - 2 周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時期	発掘調査履歴	文献No.等
3	ユカンボシC1	墓	縄・統・振・ア	1947ころ 河野広道 No.13か	1. 8. 51
4	ユカンボシC2	集落跡・墓・遺物包含地	早・前・中・後・晩・振・ア	1969 石川徹, 1988・89 千歳市教委, 1993 道壇文, 1994・2000 千歳市教委	6 p106, 5「長部堂穴遺跡」, 13, 22, 53, 文, 考
5	ユカンボシC3	集落跡	中・後・振・ア等	1990 千歳市教委	14
6	ユカンボシC4	集落跡	縄文・振		14
7	ユカンボシC5	集落跡・墓	中・後・振・ア等	1990・91 千歳市教委	14, 文
8	ユカンボシC6	集落跡・墓	中・後・統・振・ア	1990 千歳市教委	14
9	ユカンボシC7	集落跡	振		
10	ユカンボシC8	集落跡	中・後・統・振・ア	1991 千歳市教委	文
11	ユカンボシC9	集落跡	中・後・統・振・ア	1995 道壇文	25, 年
12	ユカンボシC10	墓・遺物包含地	中・後・統・振・ア		北海道式古墳?
243	ユカンボシC11	墓・遺物包含地	前・中・後・統	1992 千歳市教委	文
244	ユカンボシC12	遺物包含地	後		
251	ユカンボシC13	遺物包含地	前・中・後・晩・統・ア	1991 千歳市教委	15
259	ユカンボシC14	遺物包含地	縄文		
263	ユカンボシC15	集落跡・墓・低湿地ほか	ア・早・前・中・後・晩・統・振・ア	1996-97-98 道壇文	36, 42, 43, 50, 52, 年, 考, 当報告
13	オサツ 1	集落跡・墓	振・ア	1950 河野広道 No.3か	
14	オサツ 2	集落跡・墓・低湿地ほか	ア・早・中・後・統・振・ア	1992-93-94 道壇文, 1997-98-99 千歳市教委	6 p218, 24, 26, 53, 年, 考
15	オサツ 3	集落跡	振		
16	オサツ 4	遺物包含地	中・後		
17	オサツ 5	集落跡・低湿地	中・後・振・ア		4「長部遺跡」
18	オサツ 6	遺物包含地	縄文		
19	オサツ 7	遺物包含地	振		
20	オサツ 8	遺物包含地	振		
150	オサツ 9	集落跡	振		
151	オサツ 10	集落跡	振		
152	オサツ 11	集落跡	振		
153	オサツ 12	集落跡・遺物包含地	縄文(中)・振		4「長部遺跡」
245	オサツ 14	集落跡・低湿地	中・後・晩・振・ア	1994 道壇文	24, 年
248	オサツ 15	集落跡・遺物包含地	中・後・晩	1995-96-97 道壇文	28, 34, 35, 考
266	オサツ 17	集落跡	中・後・振		
271	ボンオサツ	墓・遺物包含地	晩・統	1995-96 道壇文	27, 33
21	長都のチャシ	チャシ跡	ア	1965 千歳市教委測量	4「長部遺跡」, 6 p215, 7
22	イヨマイ 1	集落跡・墓ほか	振・ア		
23	イヨマイ 2	遺物包含地	後・晩		
24	イヨマイ 3	集落跡	振		
25	イヨマイ 4	集落跡ほか	中・晩・振		
272	イヨマイ 7	集落跡・墓	早～晩・統・振・ア	2001-2002 千歳市教委	文, 考, 整
273	イヨマイ 8	集落跡・墓	早～晩・統・振・ア	1999-2000・2001 千歳市教委	文, 考, 整
26	長都田中	集落跡	縄文・振・ア	1953 Howard A. MacCord	2
27	シマコツナイ 1	遺物包含地	中		
28	シマコツナイ 2	遺物包含地	中・後・晩		
29	シマコツナイ 3	遺物包含地	縄文・振		
30	シマコツナイ 4	集落跡	振		
31	シマコツナイ 5	遺物包含地	晩		
32	ツツナツナツ	集落跡	振		
33	ツツナツナツ 2	集落跡	振		
34	カマクンナイ	集落跡	振		チャシ跡?
35	都	遺物包含地	晩		
36	都のチャシ	チャシ跡	ア	1966 石川徹・大場利夫	4「都遺跡」, 7
40	トメト川 3	集落跡	統・振・ア	2001-2002 千歳市教委	文, 考, 整
7	恵庭公園	集落跡	振	1963 石川徹・大場利夫	3「公園遺跡」
2	ユカンボシE1	遺物包含地	後・晩・振		
3	ユカンボシE2	遺物包含地	後・統・振		
4	ユカンボシE3	集落跡・墓	前・中・後・振・ア	1991-92 恵庭市教委	16, 17, 20
5	ユカンボシE4	集落跡・墓ほか	早・中・後・振・ア等	1991 道壇文, 1995 恵庭市教委	18, 文, 年, 整
6	ユカンボシE5	集落跡・墓ほか	早～後・振・ア等	1991-92 道壇文, 1993 恵庭市教委	19, 21, 文, 年
7	ユカンボシE6	遺物包含地	早・中・晩・振	1996 恵庭市教委	38, 文
8	ユカンボシE7	集落跡・墓ほか	早～晩・統・振・ア	1994 恵庭市教委, 1996-97 道壇文	23, 41, 年, 考
108	ユカンボシE8	集落跡ほか	早・中・後・振・ア	1988-90-91-98 恵庭市教委	12, 16, 44, 文, 考
109	ユカンボシE9	墓・遺物包含地	早・後・晩・統・振	1992-94 恵庭市教委	20, 29, 文
115	ユカンボシE10	集落跡ほか	早・中・後・振・ア	1996 恵庭市教委, 1997 道壇文	31, 37, 文, 年
117	ユカンボシE11	遺物包含地	中・後・晩	2001 恵庭市教委	文, 考, 整
110	シマコツナイE1	遺物包含地	早・中	1995 恵庭市教委	30, 文
104	カリンバ 1	集落跡・墓	早・中・後・振・ア	1999-2000・2001 恵庭市教委	48, 文, 考, 整
105	カリンバ 2	集落跡・墓	早～晩・統・振・ア	1986-87-95-96-97-98 恵庭市教委	10, 11, 39, 49, 文, 考, 整
96	カリンバ 3	集落跡・墓	前・後・晩・統・振・ア	1976-82-84 木村英明, 1999～市教委	9, 45, 46, 47, 文, 考, 整
106	カリンバ 4	集落跡・墓	中・後・統・振・ア	1996-97-98-99-2000 恵庭市教委	32, 40, 文, 考, 整

時刻表号 印石・アレ 縄文早期: 前 縄文中期: 中 縄文晩期: 晩 統縄文: 統  
 組織番号 (財)北海道埋蔵文化財センター: 道壇文 北海道文化財保護協会: 道壇文 各市教育委員会: 市教委 振文: 振 アイヌ文化: ア

## 表 - 2 文 献

- 1 河野広道 1954 『苫小牧地方古代史』苫小牧市教育委員会(1972『続北方文化論 河野広道著作Ⅱ』所収)
  - 2 Howard A. MacCord 1960 『CULTURAL SEQUENCES IN HOKKAIDO』  
『Proceedings of the United State National Museum』3443
  - 3 大場利夫・石川徹 1966 『恵庭遺跡』恵庭町教育委員会
  - 4 大場利夫・石川徹 1967 『千歳遺跡』千歳市教育委員会
  - 5 石川徹 1979 『続千歳遺跡』千歳市教育委員会
  - 6 宇田川洋校注 1981 『河野常吉ノート 考古編Ⅰ』
  - 7 北海道教育委員会 1983 『北海道のチャシ』
  - 8 宇田川洋編 1984 『河野広道ノート 考古編Ⅴ』
  - 9 木村英明 1985 『いわゆる北大式土器とその文化に関する基礎的研究(予報)』
  - 10 恵庭市教育委員会 1987 『カリンバ2遺跡』
  - 11 恵庭市教育委員会 1989 『カリンバ2遺跡 第Ⅰ地点における調査』
  - 12 恵庭市教育委員会 1989 『ユカンボシE8遺跡』
  - 13 千歳市教育委員会 1989・90 『ユカンボシC2遺跡発掘調査概要報告1・2』
  - 14 千歳市教育委員会 1991 『ユカンボシ3・5・6遺跡発掘調査概要報告』
  - 15 千歳市教育委員会 1992 『ユカンボシC13遺跡における考古学的調査』市文調報ⅩⅡ
  - 16 恵庭市教育委員会 1992 『ユカンボシE3遺跡A地点・ユカンボシE8遺跡B地点』
  - 17 恵庭市教育委員会 1992 『ユカンボシE3遺跡B地点』
  - 18 北海道埋蔵文化財センター 1992 『恵庭市ユカンボシE4遺跡』北理調報75
  - 19 北海道埋蔵文化財センター 1993 『恵庭市ユカンボシE5遺跡』北理調報81
  - 20 恵庭市教育委員会 1993 『ユカンボシE3遺跡・ユカンボシE9遺跡』
  - 21 恵庭市教育委員会 1994 『ユカンボシE5遺跡 低地帯における調査』
  - 22 北海道埋蔵文化財センター 1994 『千歳市ユカンボシC2遺跡』北理調報86
  - 23 恵庭市教育委員会 1995 『ユカンボシE7遺跡』
  - 24 北海道埋蔵文化財センター 1995 『千歳市オサツ2遺跡①・オサツ14遺跡』北理調報96
  - 25 北海道埋蔵文化財センター 1996 『千歳市ユカンボシC9遺跡』北理調報100
  - 26 北海道埋蔵文化財センター 1996 『千歳市オサツ2遺跡②』北理調報103
  - 27 北海道文化財保護協会 1996 『千歳市ボンオサツ遺跡・ケネフ5遺跡』北文保調報2
  - 28 北海道文化財保護協会 1996 『千歳市オサツ15・16・18遺跡』北文保調報3
  - 29 恵庭市教育委員会 1996 『ユカンボシE9遺跡B地点』
  - 30 恵庭市教育委員会 1996 『シマコツナイE1遺跡』
  - 31 恵庭市教育委員会 1997 『ユカンボシE10遺跡』
  - 32 恵庭市教育委員会 1997 『カリンバ4遺跡』
  - 33 北海道文化財保護協会 1997 『千歳市ボンオサツ遺跡②・オサツ18遺跡②・ケネフ5遺跡②』北文保調報5
  - 34 北海道文化財保護協会 1997 『千歳市オサツ15遺跡②』北文保調報6
  - 35 北海道文化財保護協会 1998 『千歳市オサツ15遺跡③』北文保調報8
  - 36 北海道埋蔵文化財センター 1998 『千歳市ユカンボシC15遺跡①』北理調報128
  - 37 北海道埋蔵文化財センター 1998 『恵庭市ユカンボシE10遺跡』北理調報129
  - 38 恵庭市教育委員会 1998 『ユカンボシE6遺跡』
  - 39 恵庭市教育委員会 1998 『カリンバ2遺跡第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地点』
  - 40 恵庭市教育委員会 1999 『カリンバ4遺跡』
  - 41 北海道埋蔵文化財センター 1999 『恵庭市ユカンボシE7遺跡』北理調報132
  - 42 北海道埋蔵文化財センター 1999 『千歳市ユカンボシC15遺跡②』北理調報133
  - 43 北海道埋蔵文化財センター 2000 『千歳市ユカンボシC15遺跡③』北理調報146
  - 44 恵庭市教育委員会 2000 『ユカンボシE8遺跡』
  - 45 恵庭市教育委員会 2000 『カリンバ3遺跡が語りかける恵庭織文人の世界』『恵庭市広報2000.1.1号』
  - 46 上屋眞一・佐藤麻子 2000 『北海道カリンバ3遺跡』『考古学研究』46・4
  - 47 上屋眞一・佐藤麻子 2000 『恵庭市カリンバ3遺跡の装身具』『考古学ジャーナル』
  - 48 恵庭市教育委員会 2001 『カリンバ1遺跡・A地点-a』
  - 49 恵庭市教育委員会 2001 『カリンバ2遺跡第Ⅵ地点』
  - 50 北海道埋蔵文化財センター 2001 『千歳市ユカンボシC15遺跡④』北理調報159
  - 51 鈴木信 2001 『所謂「北海道式古墳」と 周溝のある墓 について』『千歳市ユカンボシC15遺跡④』北理調報159
  - 52 北海道埋蔵文化財センター 2002 『千歳市ユカンボシC15遺跡⑤』北理調報176
  - 53 千歳市教育委員会 2002 『ユカンボシC2遺跡 オサツ2遺跡における考古学的調査』市文調報ⅩⅩⅡ
- 文 北海道教育庁文化課 『市町村における発掘調査の概要』平成3年度～毎年度(平成6年度未発行・2001年度分発行済み)
- 考 北海道考古学会 『遺跡調査報告会資料集』1997年度～毎年度(2001年度分 発行済)
- 年 北海道埋蔵文化財センター 『調査年報』4 平成3年度～毎年度(平成14年度『調査年報』15 発行済み)
- 整 市教委で整理中
- \* 千歳市教育委員会 1979 『千歳市における埋蔵文化財(上)』市文調報Ⅴ
- \* 千歳市教育委員会 1994 『千歳市埋蔵文化財包蔵地分布図』
- \* 北海道教育庁生涯学習部文化課 埋蔵文化財包蔵地カード  
遺跡No.は包蔵地カードの登録番号による

## 96 カリンバ3遺跡

1999年から調査されている。縄文時代早期からアイヌ文化期の複合遺跡。1999年調査の調査では墓から発見された多量の漆製品で全国的な話題となった。この年は縄文時代の竪穴5軒・土坑墓約320基・焼土約250基、擦文文化期の竪穴5軒・焼土約250基、アイヌ文化期の建物跡・物送り場などの遺構を検出した。縄文時代の土坑墓のうち後期末の30数基(うち4基合葬墓)には、土器・石器のほか50点近くの赤色漆塗、腰・髪・腕・耳等の飾りや糸状の漆塗り繊維製品など多量の漆製品や琥珀・滑石・ヒスイ製の玉、サメ歯装飾品、石棒、土製品が副葬されていた。3基の合葬墓は切り取り保存し、保存処理や複製製作を経て、現在恵庭市において常設展示中である。擦文文化期では土器・須恵器や紡錘車・鎌先・斧等が出土、アイヌ文化期では鍋・マレク・刀子などの鉄製品等が出土している。2000年以降は1999年の調査を踏まえ、遺跡の保存・史跡指定を見据えた範囲と遺構の分布調査が継続されており、2000・01の2ヵ年で縄文時代の竪穴16軒・土坑墓約500基、続縄文時代の土坑5基、擦文文化期の竪穴3軒、アイヌ文化期の建物跡などが確認されている。

## 106 カリンバ4遺跡

1996～2000年の5年間で調査された、縄文時代中期からアイヌ文化期の複合遺跡。縄文・続縄文時代では後期主体で竪穴19基、後期と続縄文を主とする土坑117基、焼土・Tピット・柱穴などが検出されている。アイヌ文化期では建物跡12軒・墓2基・焼土・集石・柱穴などがあり、墓には副葬品として耳飾・刀子等、包含層からは刀・鉞・斧・鎌・刀子・棒状鉄素材などの金属製品が出土している。

## (4) 歴史的環境

図 - 3は遺跡周辺の地形図では最も古い、1896(明治29)年陸地測量部製版の假製五万分の一図『長都』である。行政区画として西から「漁(イザリ)村」「長都(オサツ)村」「千歳(チトセ)村」の記載がある。ユカンボシC15遺跡の位置は長都村のうち「エカンブウシ」の表示の北にあたる。遺跡付近は低湿な原野と表現されており、川は「トーウイソ川」と合流した「エカンブウシ」がさらに「ヲサツ川」に合流して「オサツト」西端に注ぐ。南西部を斜めに走る道路は「札幌本道(室蘭街道)」で現在の国道36号線である。1807(文化4)年、山田文右衛門が開削した石狩千歳間道路からはじまり、拡幅改修後の1858(安政5)年に松浦武四郎が歩き「新道」(『戊午日誌 東西新道誌』)と呼んだ道の発展形である。対して「エカンブウシ」「ヲサツ川」合流点付近から始まり、「エアニトマム」の東を通過する小路は、1857年石川和助が視察時に通った道であり、「ヲサツ」と「千歳会所」間の千歳川は流れが速いので舟ではなく陸行することが報告書『観国録』に書かれている。地図はこの小路沿いに家屋の並びの表現もある。

この『観国録』には長都沼・長都川の当時の様子が以下のように記されている。

「浜るに随ひ幅愈廣境に周廻二里許の沼となる(是は全く見積りなり)、沼中蘆洲多く且水浅くして殆ど水澤の如し。半里許にて右壱間に小川流出す、幅二三間なり。此に船を入れ南若西に向ふ。其の最も狭き所は幅僅一間許なり。両側は一円の野地也。此をヲサツベツと云ふ。川中に図合船七八艘を見り此は鮭漁の際此辺の土人石刈へ出漁に至る舟の由、此の間十餘町にて左岸に上る憩所あり。」

先に触れた防風林は北海道廳が施工した「植民地区画割」に基づくもので、1918(大正7)年からはじまった耕地防風林の人口造成によって形成されたものである。「植民地区画割」は植民地選定による入植地として土地を調査し、300間(460m)四方区画を中区画として測量したもので、「千歳原野植民地区画割」は1893年に完了した。前述した「東6線」や「南23号」などの線号中区画の「基線」・「零号」の交点は現長沼町にあり、遺跡所在地は「長都原野」の南東端であった。これより東へは長

都沼・千歳川・祝梅川により一段と厳しい湿地帯となり、植民地区画は設定されていない。1894(明治24)年北海道庁発行の『北海道殖民地撰定報文』膽振國千歳郡漁原野 植物の項には「平野八檜カシハ樹ノミヲ生シ沼川ノ地ハ檜アカタモシ 柳 ヤチタモシ 柳、赤檜ハンノキノ類生長シ茅カヤ及葦ヨシ繁茂セリ(カウルビ)と記録されている。当時の遺跡周辺もこのような状況であったと推察される。

長都沼は、戦中戦後の食糧難に対する食糧増産と千歳川の治水を目的に、周辺を含む2,870ヘクタールの沼と湿地・原野の内水を排除し干拓する灌漑排水事業が進められた。その先駆は1944(昭和16)年、「学生義勇軍」の名のもとに全国270名の学生有志が参加して開削された「大学排水」である。1950年の元田 茂著「北海道湖沼誌」(『水産孵化場試験報告』5-1)には、「この通り戦時中に排水溝の掘鑿作業が行はれた結果地下水の水位が低下し湿潤地は耕地化され従って沼の水も水量が非常に少なくなった」と書き記されている。その後昭和21-44年の国営開墾建設事業と国営灌漑排水事業により、千歳川の切り替えと幹線排水路の掘削が進み、昭和30年代後半から40年代前半にかけて干拓は終了した。幾度かの洪水を経ながら昭和39-53年・61-平成6年の国営農地開発事業・灌漑排水事業が行われ、現在長都沼は、沼の北端に幹線排水路の一部として残る「旧長都沼」にその面影を残すのみとなった。

次に「ユカンボシ」の地名についてであるが、前回の報告までの西田の調査から、従来のアイヌ語の「yuk」:「シカ」関係の通説には納得しがたいものがある。通説では「yuk ampa usi」:「シカ・がたくさいる・所」(長見義三 1976 『ちとせ地名散歩』)や、「yuk kam pu us i」:「シカ・肉・庫・多い・所」(同1983『地名解』『増補千歳市史』)であるが、古記録にある「ユカンボシ」呼称とはかけ離れた感がある。古くは1824(文政5)年の『蝦夷全図』(伝聞宮林蔵・小林和夫作成の「付録地名図」)に「井カンブシ」、1854(安政5)年玉蟲左太夫『入北記』に「イカンブシ」「イカンフシ」、同年松浦武四郎『丁巳日誌』に「イカンフレ」「イカンヘツ」、翌年の『戊午日誌』ほかに「イカンブシ」「イカンフ」「イカンボシ」「ヘカンブシ」とある。1894(明治27)年北海道庁発行の『胆振國千歳郡千歳原野区画図(二万五千分の一)』には「エカンブウシ」。また五万分の一地形図では、1896年『長都』に「エカンブウシ」、1910年『漁』に「イカンボシ」、1916-17年『漁』に「ユカンボシ」、1935年『恵庭』に「ユカンボシ」となっている。いずれも川の名称かそれに由来する地名である。

古くは「I」音からはじまり「カン」が共通し、川の名を示す。西田は音の共通性や沼川の産物から「ベカンベウシ」:「沼菱の生育する所」との仮説を提唱した。菱は水深1m未満の穏やかな流れの水面に浮遊し、根を底の泥に張り定着する。熟した実は無味無臭の良質の澱粉で、食料源となる。先述した旧長都沼には今も生育し、往時は長都沼の北方に「菱沼」も存在していた。1846(弘化3)年『再航蝦夷日誌』で松浦武四郎は、長都沼縁辺の「イザリプト」の記録で「夷人毎日曰にて沼菱を搗いて、これを平日の食料とし、「カマカ」の記録では「夷人小屋の前に菱を筵に干したり。これまた此処の食料か」と菱と人々の生活を書き記している。当遺跡からはこれに使用したとも考えられる竝杵も出土している。「エ」「ユ」の誤記の可能性や、「ヘカンブウシ」の呼称記録はユカンボシがベカンベウシであった可能性を示し、自然環境や古記録類は沼菱に由来した地名であることを示唆している。

#### (5) 現況

発掘調査終了後約1年の1999年10月7日、千歳 夕張間の高速道路が開通した。この道路は北海道横断自動車道の一部で、道東自動車道千歳恵庭ジャンクション-夕張インターチェンジ間の42.1kmである。千歳・恵庭の両インターチェンジの間から両市の境界である東3線を通り、当遺跡のある南

### 3 調査にいたる経緯

23号に向かって東折、千歳川を橋梁でわたり、キウス遺跡群のある千歳東インターに至り、馬追丘陵を掘削で貫いて夕張方面へ向かう。橋梁や丘陵掘削以外は殆どが盛土上を走り、道路や水路はカルバートで通している。当遺跡部分もカルバート部分を除き、長大な盛土に覆われている。市道南23号は高速道路北側に沿って緩く曲げられ、アスファルト舗装されている。同じように南側に沿って新しく作られた側道は砂利敷きの農作業用である。ただし高速道路は暫定片側一車線の開通であるため、盛土と南側側道の間幅12mほどは、道路用地内の未調査部分として低湿部を主体とした遺跡が残存している。道路工事に付帯して作られた側溝は排水路としての機能が優先されているので水位低下が起こり、残存低湿部の木製品等の劣化が早まる懸念がある。

長都沼は、千歳市と長沼町の境界にあたる「14号幹線排水路」がその残骸となり「旧長都沼」と称されている。長さ約2km・幅約120mの人工排水路には、往時には及ぶべくもないが渡り鳥の飛来が確認されている。環境省はラムサール条約ののっとり、2001年12月27日、旧長都沼と周辺水田を「日本の重要湿地500」のうちの1カ所に選定した。理由は「マガン・オオヒシクイ・コハクチョウの渡来地」で、とくに国の天然記念物であるカモ科オオヒシクイの中継地としての評価が高かったためであろう。ヒシクイは文字通り、沼の萋を餌とするのでその名がある。「長都沼の雁・カモを守る会」によると現在最多でマガン13,000羽、オオヒシクイ1,600羽が飛来し、しかも増加傾向にあるという。10月～1月の狩猟解禁期には規制のない狩猟地となるので、これら鳥類の保護や危険防止のために、鳥獣保護区設定の要望が同会などから挙がり、道議会でも答弁がなされている。

以上の周辺環境・周辺の遺跡・歴史的環境・地名については、に、西田茂が詳しく著述している。特に「ユカンボシ」の地名解釈については『同(1) 北埋調報128』・『同(3) 北埋調報148』に別節を立てて解説している。昨年度の『同(5) 北埋調報176』ではこれらを取りまとめて、補筆した形式で報告してある。さらに当報告では、周辺の遺跡については『同(1) 北埋調報128』への補筆、それ以外は『同(5) 北埋調報176』への再補筆という形式を採っている。 (三浦)

### 3 調査にいたる経緯

先に現況で示したごとく、日本道路公団が建設を進めている北海道横断自動車道のうち、開通した道東自動車道千歳 夕張間は、1988年11月に施工命令が下り、1993年3月から1998年度の開通を目指し工事が進められた。これにかかる埋蔵文化財の保護についての活動は、まず北海道教育委員会が行った1988年4月以降の遺跡所在確認調査と、1991年10月以降の遺跡範囲確認調査である。範囲確認調査を終えた遺跡で、工事計画の変更が不可能であるために発掘調査を必要とする埋蔵文化財包蔵地は、千歳市11カ所・恵庭市3カ所・由仁町2カ所・夕張市3カ所であった。

ユカンボシC15遺跡については、1991年6月所在確認調査(A調査)が行われ、道路の路線が決定した後に遺跡であることが判明している。この時には縄文時代晩期タンネットウシ式土器が自然堤防上に確認されていた。1994年2月27日付で埋蔵文化財包蔵地として台帳登載、同12月23日付で範囲拡大が登載されている。近々の工事着工が予定されていたため、北海道教育委員会教育庁生涯教育部文化課調査班による範囲確認のための試掘調査(B調査)が、下記のような日程で行われた。

1995年5月29日～6月2日	西側の低湿部	担当：大沼忠春
1995年6月26日～27日	防風林の西側	担当：大沼忠春
1995年11月6日～10日	西側の台地・東端部	担当：千葉英一・西脇対名夫
1995年11月27日～12月1日	中央の低湿部・東側の台地	担当：稲市幸生・千葉英一・田才雅彦

1996年4月17日 民家・宅地部分・鶏小屋 担当：大沼忠春

以上のような範囲確認調査を基にして、1996年度から財団法人 北海道埋蔵文化財センターに発掘調査が委託された。確認調査では低湿度部の存在が明らかになっていたため、民家移転の後、鋼矢板打設・排水ポンプ設置・測量作業・表土やTa a火山灰の除去などの準備作業を経て、調査は同年6月下旬から開始された。調査の施工は同年4ヶ月、1997年6ヶ月、1998年6ヶ月の3期に分けて、工事工程にのった調査範囲設定で行われた。準備段階や調査の開始は、直前に調査していたキウス7遺跡との関係から、重複させた期間が2週間ほどあった。

また発掘調査中にも調査範囲拡大の追加試掘が文化課により以下の2度行われた。

1997年5月27日 東地区民家の西側 担当：種市幸生・藤原秀樹

1997年6月24日 " 担当：大沼忠春

また、深部の調査範囲（後期旧石器時代相当）に関しての判断もなされた。

1998年9月3日 西地区の深部 担当：千葉英一・工藤研治

これらB調査や発掘調査によって、最終調査面積は計14,880㎡となったのである。

(三浦)

#### 4 調査の方法

##### (1) 調査予定地の内容推定と問題点抽出

試掘調査によって推定される遺跡内容とおもな問題点は、以下の如くである。

- \* 約1万5千㎡と調査範囲が広く、しかも東西に分断されている。
- \* 暫定片側一車線で道路開通させるため、調査区内に未調査区が帯状に残り範囲がさらに分割される。しかも工事工程上、カルバート部や側道部を先行調査しなければならない。
- \* 調査区の半分以上は低湿度で、多量の木製品出土が予想される。しかも急激かつ浅部の水抜きは、周囲の水田・畑に悪影響を及ぼすので慎重を要する。
- \* 台地部や低湿度へ移行する斜面は、家屋や畑・水田、暗渠・明渠の水路の攪乱・削平を受けている部分も多く、水路には調査期間を通して使用している用水路もある。
- \* ほぼ全面に30cmほどのTa a火山灰がつもっている。
- \* 縄文時代からアイヌ文化期にかけての複合遺跡である。

##### (2) 調査計画の立案と進行(図1-8)

広くしかも分断されている調査区に対応するため、3か年の調査計画を立て、工事工程上の順番もクリアするため、調査計画の大略を立案した。一年目は最優先の東西のカルバートと側道部分。二年目は東地区を終え西地区の東半分、最終年は西地区の西半分と深掘り、とした。分割された調査区には、区：東地区の本線部分、区：西地区の本線部分、区：東地区の側道部分、区：西地区の側道部分と、当初面積算定時の呼称をそのまま与えた。

低湿度の調査もあることから上層に乗っている表土・Ta a火山灰・水田造成客土は必要ない範囲でバックホウなどの重機で除去することとした。低湿度の湧水・浸水対策は1年目は小面積であったため鋼矢板打設とカマ場設置・排水ポンプで対処した。

二年目以降は広い面積の低湿度調査となるため、ウエル・ポイント工法に鋼矢板打設を併用し、予備ポンプを常駐して集水・排水を行った。ウエル・ポイント工法は、先端が網状になった集水部を取り付けた揚水管を一定間隔で地面に打ち込み、ポンプで吸水し地下水位を下げる排水工法で、当調査では平成9・10年度に台地部を除く三辺に設置した。鋼矢板打設は調査範囲外の集排水を阻止し、周囲との



4 調査の方法

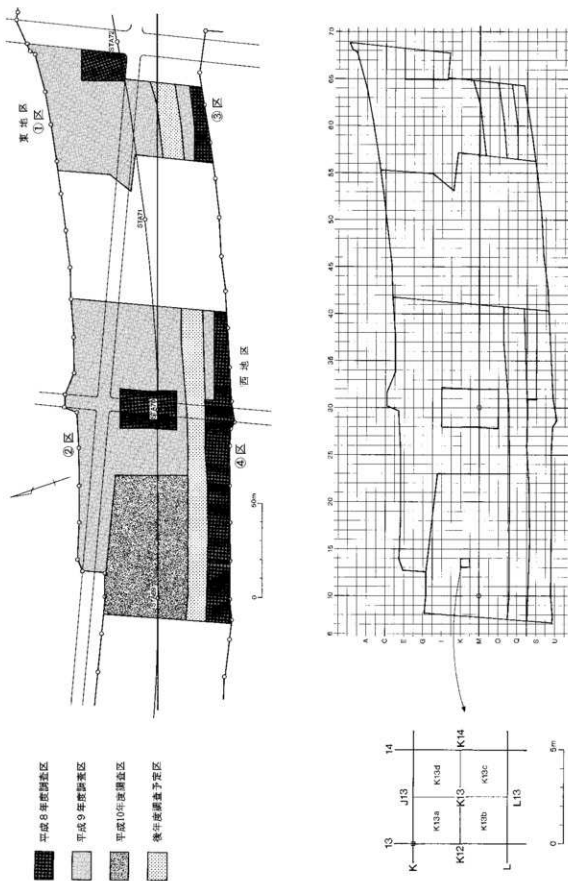


図 - 8 年度別調査区図・グリッド設定図

高低差による土砂崩落を防ぐ目的があった。予備ポンプは降雨後の流れ込み水など、上面からの水の排出に効果があった。これらの工法は作業の安全確保にもつながり、遺物検出も泥土中から行うよりは容易となり、今後の低湿度調査において推奨すべき方法となった。この工法採用を受け入れていただいた日本道路公団北海道支社と現地工事事務所に感謝したい。

### (3) 発掘区の設定 (図 - 8)

現地調査の基本図は、北海道横断自動車道工事予定図1000分の1を使用した。発掘区の設定は、以下のように行った。

まず工事予定中央線の「ST A69」・「ST A70」をそれぞれ「M10」・「M30」とする。これを結ぶ直線を基軸として5mの方眼を設定し、南北列にアルファベット大文字、東西列に数字を与える。この5m方眼は北西端の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称される(例: K13)。さらにこの方眼を2.5m四方に分割して小グリッドを設定、反時計回りに北西端からa・b・c・dと呼ぶこととする(例: K13)。

この方眼の平面直角座標値は第1系で下記のとおりである。

ST A69(M10): X = -124295 5363 · Y = -49502.1207

ST A70(M30): X = -124332 6406 · Y = -49409 2737

### (4) 発掘調査の手順

包含層より上層の土砂を重機で除去した後、遺構・遺物の全体的濃度を把握するため、広い区では、25%調査を行った。状況把握の後、全体調査に取り掛かった。

低湿度部ではB層とB層がTa c火山灰によって区別でき、さらに、B層は色や泥炭化程度、構成物・挟雑物の相違などから細分できたので、これに従い分層発掘を行った。台地部においてTa c火山灰は希薄であるが、B層にはTa cに由来する微小軽石が含まれるので、B層と分層できた。

包含層調査はすべて人力による手掘り作業で、土壌や遺物の状況に応じて移植ゴテ・竹べら・箸・串やスコップ・ジョレン・ツルハシなどを用いて行った。遺構調査と旧石器対応の深掘についてはすでに報告済みなので、省略する。

### (5) 遺物の取り上げ・保管

土器・石器等の遺物は、層や位置を記録し発掘区ごとに取り上げ、水洗乾燥後ビニール袋に一次保管した。微細遺物は周辺の土ごとに取り上げ、水洗・水篩選別を行って乾燥後取り上げた。

木製品は、重なりや土層に留意し移植ゴテ・竹べら・箸・串等を用いて慎重に検出した。検出後は乾燥防止のため水を含ませた晒し布で保全しビニールで蔽った。ウェルポイントを作動しているため、日に2・3度水掛けを行い水分を補給した。出土状態や位置を記録し、取り上げ時には各製品に1点ずつNoを与えた。取り上げ後は水洗して余分な土や草本の根を除去し、水漬けて一次保管した。漆や貴重品は密閉容器に、大型の木製品には簡易プールや木箱を作成してこれに対応した。二次保管として現場から整理作業所への移動やその後の保管のため、特殊フィルム製の袋に木製品を1点ずつ脱気封入した。詳細は6節(3)で、木製品の保存処理については6節(2)で記す。

土壌サンプルは、フローテーションで浮遊物と残渣に分別し、乾燥後紙袋や封筒にいれ、湿気を防除しながら選別鑑定まで保管した。以下6節(3)に続く。

### (6) 遺物整理

出土した遺物は野外作業と並行して現地で水洗・注記作業を行った。土器石器等の大部分に発掘区・出土層・取り上げ番号を注記した後、カード作成・遺物台帳の作成・一次分類を行った。

木製品は水洗後、大まかな種別に分け水漬ける時に、フィルム印刷したカードを1製品ずつ取り

#### 4 調査の方法

付けた。分割したものは、傷付けないようストッキングで結束・付帯したり、穴あけビニール袋に収納し散逸に対応した。

室内二次整理作業において、分類・接合・復元・実測・トレース・写真撮影・集計などを行った。土壌サンプルは検鏡下で選別作業を実施している。木製品は分類・樹種同定の後、仮接合して実測や写真撮影に到る物と、少数だが大型立体物など保存処理・接合を完了させてからその後の整理作業に入るものがある。

##### (7) 記録類

現地で記録した遺物取り上げ台帳・遺構図・遺物出土状況図・土層図などと写真・ビデオの記録類はナンバリングし、整理した。報告書に掲載するために素図を作り、写真はフォトリソを作成している。約250枚の木製品出土状況図は、報告スペース上ほとんど掲載できないが、各製品の出土位置や層位・レベルが記載された資料として保存する。(三浦)

#### 5 調査と整理作業の概要

##### (1) 各年度の調査概要

調査概要は一昨年度までの報告(1)～(4)で示してあるので、ここでは(5)同様簡略に記す。

##### 平成8年度(1996)の調査

縄文時代の遺構はTピットを東西地区の台地で、焼土を東地区の低湿度部で検出。擦文～アイヌ文化期では、西地区から6連の杭列を検出。

土器・石器等約10,000点、擦文～アイヌ文化期の木製品を破片数で約30,000点。交易品として漆椀・曲物・竹製品など、自家製品では舷側板などの舟部材や櫂などの舟関係品・魚叩き棒などの漁労具・矢や矢中柄などの狩猟具・くさびや発火具などの諸道具類・箸串筒などの食用具・かんじき・イクバスイや建材類のほか、用途名称不明の加工製品・板・割材丸木材等・樹皮・炭化材や廃品としての切片・木端などがある。

##### 平成9年度(1997)の調査

縄文時代では、中・後期の住居跡・土坑・Tピット・集石・焼土など、土器・石器約57,000点。擦文文化期では、東地区台地で周溝のある墓3・土坑墓12・住居跡1・集石など、西地区台地で住居跡3を確認。アイヌ文化期では、東地区台地で建物跡・鍛冶遺構・送り場・灰集中・道跡など、西地区台地で建物跡・土坑墓2・杭列などを確認。

擦文～アイヌ文化期の木製品は破片数で約70,000点。交易品として漆椀・曲物・柁目板・竹製品など、自家製品では前年度上記品はもちろん、舟敷・櫂受台部・やすや浮子などの漁労具・キテ中柄などの狩猟具・槌や斧柄などの諸道具類・刺物鉢や杵などの食用具・下駄・木幣・イクバスイなどがある。建材類以下も前年度同様数多い。また、擦文土器や金属製品・青磁皿なども出土している。

この年度で 区の東地区と側道部分の西地区 区は完了した。

##### 平成10年度(1998)の調査

旧石器関係の深掘りでは、En Lよりも下位で埋没樹林が検出され、黒曜石の石器類が3点出土した。縄文時代では、中・後期の住居跡・土坑・Tピット・集石・焼土など、土器・石器約7,500点。アイヌ文化期では、建物跡・柱穴列・土坑墓1・送り場・集石など。

擦文～アイヌ文化期の木製品は破片数で約30,000点。交易品として漆椀・曲物・柁目板・竹製品など、自家製品では前々・前年度上記品はもちろん、残存度の高い舟敷と櫂受台部付舟縁材・編台など

の諸道具類などもある。金属製品なども出土している。

(2) 昨年度までの整理作業

木製品処理や整理作業場の割り振り等から、平成9年度から整理作業完了順に以下のように、報告書を刊行してきた。報告が終了した遺物・図・写真等は、当センター収蔵庫に保管されている。自然科学的分析は成果を受け次第報告しているため、最も関係の深い事実報告と同一の報告書に掲載されていない場合がある。

『千歳市ユカンボシC15遺跡(1)』北理調報128集。1998年3月：東地区

『千歳市ユカンボシC15遺跡(2)』北理調報133集。1999年3月：西地区 黒層以下

『千歳市ユカンボシC15遺跡(3)』北理調報146集。2000年3月：西地区台地部。黒層以上・

西地区低湿部の B4層以下

『千歳市ユカンボシC15遺跡(4)』北理調報159集。2001年3月：西地区低湿部の遺構・西地区低湿部の

B3層の木製品・同層以上の遺物

『千歳市ユカンボシC15遺跡(5)』北理調報176集。2002年3月：西地区低湿部の B2・ B1・

O B層・その他の木製品

木製品については、区の東地区は(1)に、区の西地区は下記の理由から層ごとに分け、(3)から順次報告している。木製品は、整理作業所が1997年・1999年と2回の移動があったため、現場からの納入を含め都合3度の移転がなされ、そのたび梱包や水からの上げ濡れが繰り返された。整理作業にも支障をきたし、層ごとの報告のみを先行させることとなり、種別報告が持ち越された。このため今年度、種類別の取りまとめ報告を掲載した。

木製品の保存処理状況

上記の如く木製品は移動が多く、処理計画も立ちにくかった。さらに1999年の移転は事業所ごとのものであったため保存処理機器の作動ができず、移転前後の終結と試運転期間を合計した1年以上が、木製品の保存処理を行えない時間となってしまった。自前での処理はこの結果、1997年から移転までと、2001年から現在までの破片数合計で約62,000点が処理済みとなっている。また処理中は破片数合計で約37,000点である。この予想された遅れを回復する一助として、1997年からは計画的に㈱ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石文化財保存処理センターに一部保存処理を外注依頼し、現在破片数で約21,000点を終了させた。自前での処理方法等の詳細は6節(1)に詳述してある。

記録類について

現場で作成した図面や台帳類、撮影した写真・ビデオと、報告書に向け整理作業で作成した図面や台帳類、撮影した写真等の記録類がある。現場作成の図面は種別にNoを振って仮整理し、報告ごとに索引図を作成している。台帳類も遺物種別ごとに整理されているが、木製品については今年度、カードを含めて再整理した。木製品とその実測図の収納管理については6節(3)に詳述してある。ビデオは60分のミニ・デジタルビデオバックが74本撮影された。写真は現場と整理作業を合わせ現在、カラーリバーサルフィルム約22,500コマ、モノクロネガフィルム約15,000コマ、カラーネガフィルム約7,300コマが撮影されており、アルバムとパソコンで管理、フォトCDを作成し保存に対応している。

(三浦)

## 6 木製品の整理作業

## (1) 木製品の保存処理

木製品の保存処理は、図 - 9 保存処理工程のように基本的に美々 8 遺跡低湿度部（北埋調報114）の方法に従っている。ここではユカンボシC15遺跡の木製品保存処理について概略を述べる。

ユカンボシC15遺跡の保存処理では、美々 8 遺跡低湿度部と異なり作業的に労力を要する部分がいくつかあった。それは包含層がやや湿みに近い状態であったため、木製品内部に鉄錐など金属由来の沈着物などが多く介在していたことや木製品が年度毎に新たな保管事務所へと移設が繰り返され、十分な水浸漬による沈着物溶脱が行えず、水交換作業を最小限とするため特殊フィルムによる長期間の脱気バック保管となったことである。また、平成10年度後半には道理センターへの移転のため、長期にわたり水浸保管や保存処理作業が中断され、脱気バック内で沈着物が析出・固着し、木製品の腐朽を進行させた。これらにより沈着物溶脱を目的とした E D T A（界面活性剤）への浸漬と水洗の繰り返し、表面クリーニングに多くの時間を要した。樹脂含浸中にも沈着物析出によって PEG4000 溶液が強酸性に傾き、度々、含浸中の PEG 溶液を廃棄しての再含浸となったことがあげられる。

移転後の処理前遺物は、脱気バック保管、シール容器やコンテナ内での水漬保管あるいは屋外水槽等に水漬され、脱気バック以外のものは年数回の水洗と水交換を実施した。屋外水槽では冬期間の凍結防止のためには断熱材を浮かべている。新施設における保管では、以前ほど凍結の心配をする必要はないが、急激な温度変化などを事前に察知できるように毎日、気温・水温を記録している。

保存処理対象の木製品のカードは、耐水の白色マイラー紙のラベル（3cm 5cm）に替え、B・HB などの鉛筆で記載し、過熱や薬品処理に耐えられるものにした。

木製品は保存処理法ごとに、遺物名称、樹種名、形状、加工度、樹皮残存状況、炭化状況ごとに再選別し、製作技術や用途ごとに同一の処理法となるようにグルーピングした。

処理過程や処理後の観察資料のために、報告図版や実測図に劣化状況や破片数などを記録し、処理・修復後実測となる遺物は、接合・劣化の模式図を作成し、デジタルカメラで現状を記録した。これらの処理前の記録類は、一覧表にまとめられ、作業工程ごとに年月日を記して工程を管理した。

木製品の養生では、特にアイヌ関連の木製品として重要な彫刻やイトクバ（祖印）・シロシ（所有印）などのある製品に注意を払い、変形や収縮の予想される樹皮などの残るもの、炭化の著しいもの、脆弱な木製品などには補強材などをあてて嚴重に梱包した。

保存処理方法はグルーピングごと処理方法を選択した。彫刻やイトクバ・シロシのあるものや箸、串、挿酒箸、矢中柄、発火具、薄めの板材などは Mannitol + PEG + 真空凍結乾燥法（MPFD法）、大型建材、杭、大型材、芯持ち材、樹皮付材、樹皮、炭化材などは PEG4000 の 100% 含浸法（PEG法）、生活用具や各種製品の部材などは PEG4000（40～50% 溶液まで）含浸 真空凍結乾燥法（PFD法）を実施した。外部に保存処理を委託した木製品は、主に PFD法を採用している。

復元・補修は基本的にエポキシ樹脂とフェノール樹脂マイクロバレンの混合ペーストを使用し、MPFD法ではセルローズ系接着を一部使用した。補填・接合箇所はアクリル絵具で古色付した。

注意点をあげると、MPFD法は処理時間の短縮、明るい色調、鮮明な彫刻や炭化等の色変化に効果があるが、PEG法よりも湿気に弱く、強度不足のため大型遺物や重量バランスの悪い遺物に向かないため、運搬や展示時の取り扱いに注意を要する。また、他の処理法でも北海道のような寒冷地では、冬期間の搬入・搬出時の結露が問題となる。温湿度に注意し、十分に環境順応させてから展示や収納を実施することが後のカビの発生や劣化抑制となる。

今後の保存処理や収蔵・展示施設については保管環境や経年変化に留意して活用されるように道教委と十分に協議・検討せねばならない。（第1調査部第1調査課 保存処理部門 田口 尚）

## 木製品の保存処理



図 - 9 木製品の保存処理工程

## (2) 木製品の収納管理

現場で取上げた木製品は水洗後、大まかな種別に分け水漬けする時に、フィルム印刷したカードを一つの製品ごとに取り付けた。割れたり折れたりしたものは、傷付けないようストッキングで結束・付帯したり、穴あけビニール袋に収納し散逸に対応した。現地では仮分類状態であったが、ここでの分類の甘さや誤認は後の整理作業に直接影響を与えてしまうので、製品名の命名や過度の分類には注意が必要である。

整理作業所に持ち込むにあたって、運搬・収納スペースや水交換の手間を考慮し、小型の優品は密閉容器に水漬け、他は大型品も含めて水漬けから脱気バックした。一部大型の優品は、木箱を製しシートで包んで運搬納入した。脱気バックには足踏み式シーラー(富士インパルス F I・400 Y C・5 100 V / 1.25kw)・卓上型ポリシーラー(富士インパルス P C・300 100 V / 380w)と幅4種(10・15・20・28cm)の筒状特殊ロールフィルムを使用した。片方を閉じた筒状フィルムに水中で製品を入れ、引き上げる時の大気圧を利用して水と空気を抜き、残りの片口を圧着するという方法である。最終調査終了時には、長さ1.3m以下で太さ15cm以下の木製品は調査年度ごと・地区ごとにコンテナに収納され棚置き、大型品も棚か木箱・防火用水プールに格納された。漆塗り製品は専用冷蔵庫に密閉容器ごと収納管理した。

整理作業所では、分類・実測有無の振り分けや計測が当初の仕事となる。脱気バックは一旦閉封し、必要があればクリーニング、樹種同定のサンプル採集を行う。ここで実測用に選別されたものや密閉容器詰め優品の優品は実測や撮影作業に進む。実際には優品の実測が先行され、選別物は層位ごとの整理となった。分類・振り分け・計測では加工度合い・木取り観察や大きさによって種別や名称の変更も行い、樹種同定による別個体の判別があったときには追加で台帳や取り上げ図に書き込んだ。また、脆弱あるいは多分割の大型品は、保存処理 接合復元を先行、その後の実測・写真・分類の流れになった。保存処理工程の都合上処理が先行された製品も一部あるが、大多数の製品は振り分けが写真撮影終了後に再バックされ、保存処理の順番待ちで仮収蔵される。バックには卓上型シュアシーラー(石崎電機製作所 N L・201 J C・3 100 V / 600w)を追加導入し効率化を図った。処理前の水漬け品は水交換が必要で、処理待ち期間が長いとバック品ともども自然乾燥や腐朽の危険性が高くなり、実際何点かはこういった状態に陥っている。仮収蔵状態での温湿度や遺物・水への適切な管理が重要である。

保存処理後の収納時や収納済みなものには、今年度から新しいカードに取り替える作業をはじめた。名称変更や報告書掲載・樹種・木取り・計測値・保存処理履歴など新データを製品ごとに与えるためである(図-10)。これらはパソコンで整理し、管理用のMOを作成した。実測図にもデータカードを添付、報告書・層位ごとに分けて保管している。さらに実測台帳を作成し、取上げ順の複写図でも管理している。樹種同定のプレバート試料は出現全樹種のほか、各個の必要に応じて参考サンプルともども保管してある。完全な収蔵は保存処理終了後に報告書ごとに行われるが、展示等の利便性を考えると、図が掲載された製品については種別の収納も必要になるであろう。(三浦)

' 97 ユカンボシC15遺跡	
地区名	② 地区
調査区	M36a
遺構名	
遺物番号	2098
層位	I B2
分類	釘 材
点数	10
備考	
取り上げ日	1997年 8 月 29 日



千歳市 ユカンボシC15遺跡	
調査区 (遺構名)	2m× M36a ( )
遺物番号	2098 -
遺物名称	両端有孔丸木材加工製品
層 位	I B2
取り上げ日	1997/08/29 取り上げNo. 87
幅 (cm)	3.9
計 長さ (cm)	59.3
測 厚 さ (cm)	3.6
値 重 量 (g)	(467.6)
焼 痕	樹皮
樹 種	トネリコ肌
木取り	丸木
保存処理	
北埋調報	176集 - I B2 - 361 - 実測 済
備考	10点接合。建築部材 (窓枠の可能性あり)。

図 - 10 旧カードと新カード

### (3) 土壌サンプルの取り扱い

発掘調査で採取した遺構や包含層の土壌サンプルは、すべてウォーターセパレーションがフローテーションで資料を選別した。給排水の便やサンプルの移動・管理を考慮し、一次選別は現場で行った。ウォーターセパレーション(水篩選別)にはメッシュサイズ2.00mm・1.40mm・0.45mmの篩を使用、フローテーション(浮遊選別)にはマシンにメッシュサイズ2.00mm・0.45mmの篩をセットして作業した。この時点で木製品や金属製品・石材チップ・炭化物などが取り上げられた。

室内での二次選別は、実顕微鏡を使用し、種子や骨などの動物遺存体に分類した。この資料の同定については、種子は札幌国際大学 吉崎昌一・椿坂恭代両氏に、動物遺存体は千歳サケのふるさと館 高橋理氏にそれぞれ依頼した。同定結果は 章に掲載した。

(三浦)



## 7 土層の区分

調査にあたっての土層区分は、基本的には東地区・西地区とも通覧できるようにした。さらに台地と低湿部の有機的連続性が明確なものとなるよう意識した。図 - 11はこれを模式化した柱状図である。前年度までの報告書には各々、報告(1)に東地区のEラインと南北ライン等、(2)に西地区のEライン・27・29ライン、(3)にOライン・15ライン・23ライン、(4)にM・Sラインのセクション、(5)に区低湿部の東西中央ラインにあたるKラインセクションと、区低湿部の西寄りの南北セクションである20ラインセクションを掲載してきた。今回は低湿部のままとめとして、15ラインを除く既掲載分と未掲載の28・34ラインセクションを5mごとの柱状図に作り直し、細線で層を結ぶことにより遺跡内の土層全体のあり方や流れを表現した。次に土層図の位置関係を示し、その特徴を記す。

## 図 - 13 土層図 (Eライン)

上中下3列、柱状37本で、東西地区通しのEライン東西セクション。下段E41とE55の間は東西地区の間の調査地区外。E58とE65の間は区台地部のため省略。調査年度により観察方向が異なるため、若干の修正を加えてある。E58以西はTa aと攪乱土の一部を除去した後の図。

上段と中段E29までは西側台地部、E30は台地部と低湿部の交接帯にあたり、E31から下段E41までは区低湿部、E55・57は区西側の低湿部、E57は台地部と低湿部の交接帯、E58とE65は区台地部、E66が台地部と低湿部の交接帯で、E67・68が区東側の低湿部となる。EラインではOB層は未発達で、遺跡東端の区東側の低湿部にのみ現れる。B1層は区低湿部厚く、B3下やB4層が区低湿部で部分的に発達している。

B Tmは低湿部全域に点在する。Ta cは黒層下部と混合した状態で確認される部分と、間層を挟んでTa c<sub>1</sub>とTa c<sub>2</sub>が明瞭に認識できる部分がある。

## 図 - 14 土層図 (Kライン)

上下2列、柱状24本で、区のKライン東西セクション。K15とK20の間は水田造成の削平を受けており省略。Ta aと攪乱土の一部を除去した後の図。

K14-15は台地部、K21-K41が低湿部。台地と低湿部の交接帯は水田造成の削平を受けており台地側の微妙な層変化は観察できなかつた。OB層が低湿部全地点で見られる。黒層では部分的にB3やB4層が厚く発達しているほかほぼ均質な堆積になっている。B Tmは柱状図ではあまり掛かっていない。Ta cは西側では間層を挟んでTa c<sub>1</sub>とTa c<sub>2</sub>が明瞭に認識できるが、東側では黒層下部と混合した状態で確認される。

全体的に黒層の乱れに比べ黒層の乱れは小さく、B5層以降ほぼ安定した低湿部の形成がなされていたことがわかる。部分的に乱れるのは、水滞流や木根の影響であろう。

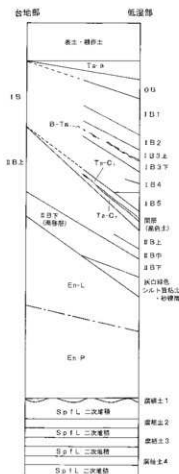


図 - 11 土層模式図

## 図 - 15 土層図 (Mライン)

上中下3列、柱状27本で、区のMライン東西セクション。M16とM17は水田造成の削平を受けている。調査年度により観察方向が異なるため、若干の修正を加えてある。Ta aと攪乱土の一部を除去した後の図。

O Bや黒層はKラインと比較して堆積厚の不均質な部分が多く、レベルの上下も大きい。これは基盤層とそれに堆積した黒層の乱れや風倒木に起因するものと思われ、これに水流や停滞水が影響を受けTa cより上位もその都度変化に富んだ堆積をしたものと考えられる。B Tmは低湿部全域に点在する。Ta cは黒層下部と混合した状態で確認される部分と、下層部の乱れの割には整然堆積し間層を挟んでTa c<sub>1</sub>とTa c<sub>2</sub>が明瞭に認識できる部分とがある。

## 図 - 16 土層図 (Oライン)

上下2列、柱状25本で、区のOライン東西セクション。O15とO16は水田造成の削平を受けている。調査年度により観察方向が異なるため、若干の修正を加えてある。Ta aと攪乱土の一部を除去した後の図。

O 8～O14は台地部、O17～O22とO27以東が低湿部。O23～O26は南側の低平台地である。低湿部と西台地の交接帯は水田造成の削平を受けており台地側の微妙な層変化は観察できなかった。O B層は低湿部全地点や南側の低平台地でも見られる。低湿部はKライン同様均質な黒層堆積を見せるが、西側でややB 3層が厚く発達している。低平台地上にも泥炭層の堆積がある。B Tmは柱状図ではあまり掛かっていない。Ta cは黒層下部と混合した状態で確認されることが多い。

## 図 - 17 土層図上中段 (Sライン)

柱状14本で、区のSライン東西セクション。S12は台地部、S14～S21とS30が低湿部。S22・S23とS29は南側の低平台地である。S24とS28の間は低平台地のため省略した。O B層は低湿部西端部のみに見られる。この部分の低湿部は西側台地と南側の低平台地に挟まれた流路に堆積し発達したものである。B Tmは見られず、Ta cは黒層下部と混合した状態で確認されることが多い。

## 図 - 17 土層図中段 (20ライン)

柱状6本で、区の20ライン南北セクション。K20以北は台地上のため省略。L20は台地部と低湿部の交接帯、M20以南が低湿部。区に近いこの部分の低湿部も西側台地と南側の低平台地に挟まれた流路に堆積し発達したものである。B Tmは見られず、Ta cは黒層下部と混合した状態で確認されることが多い。

## 図 - 17 土層図下段 (23ライン)

柱状8本で、区低湿部のほぼ中央部、23ライン南北セクション。O23とP23は南側の低平台地にかかる。23も北側台地からの傾斜を残している。O B層が全地点で見られる。B 4層がやや厚く上下動もあるが、他の黒層はほぼ均質な堆積を見せる。B Tmは柱状図では掛かっていない。Ta cは黒層下部と混合した状態で確認されることが多い。

## 図 - 18 土層図上段 (27～28ライン)

変則的な柱状11本で、区の北台地～低湿部の南北セクション。低湿部は28ラインが平成8年度調

## 7 土層の区分

査範囲の西壁の一部であった。しかし平成9年調査時に連続して台地部のセクションを観察しようとしたところ大規模な攪乱が28ラインに存在したため、5m東の29ラインに対象を変えたものである。低湿部と北台地の交接帯は灌漑水路により大規模に挟られ、微妙な層変化は観察できなかった。調査年度により観察方向が異なるため、若干の修正を加えてある。Ta aと攪乱土の一部を除去した後の図。OB層は比較的厚い。黒層はB3やB4層が厚く発達しているがほぼ均一な堆積になっている。B Tmは柱状図ではあまり掛かっていない。Ta cは間層を挟んでTa c<sub>1</sub>とTa c<sub>2</sub>が明瞭に認識できるが、交接帯部分では黒層下部と混合した状態で確認される。

### 図 - 18 土層図下段 (34ライン)

柱状12本で、区低湿部の東部、34ライン南北セクション。全点低湿部である。Ta aと攪乱土の一部を除去した後の図。OB層はJ34以南、N34まで見られる。J34以北は安定した堆積が続いているが、J34以南では基盤層が不安定に高まっているため堆積に乱れがある。B Tmは南部で確認できる。Ta cも南部では間層を挟んでTa c<sub>1</sub>とTa c<sub>2</sub>が明瞭に認識できる部分があるが、ほぼ全点で黒層下部と混合した状態で確認される。

### 図 - 19 土層図上段 (区東低湿部)

柱状10本で、区東低湿部の東壁(調査範囲)の南北セクション。全点低湿部である。Ta aと攪乱土の一部を除去した後の図。OB・B1層が厚く発達している。北半で基盤層が低く、流路もあり、乱れが大きい。B Tmは全域に点在する。Ta c明瞭に認識できるが部分と黒層下部と混合した状態で確認される部分とがある。

### 図 - 19 土層図下段 (区西低湿部)

柱状3本で、区西低湿部内の南北セクション。Ta a除去前の図。OB層は見られない。B1層が厚く発達している。B4層以下は水成堆積で泥炭層としての堆積はない。B Tmは全域に点在する。

以下、報告書(1)～(5)の土層図で細分し、今回概略柱状図を掲載した層の説明を記す。低湿部で土壌の近似した層はまとめてある。全体的な色の傾向は、口絵-2上段を参照のこと。

攪乱：水田造成・道路・側溝・水道管・宅地・暗渠・耕作等で層を乱した部分。遺物の混入がある。水田造成や道路基盤整備は、浅くてTa aから深いと黒層まで及んでいる。搬入土が混ぜられた部分もある。

旧表土：耕作が黒層上面まで達しているところが多くほとんど消滅しているが、道路盛土下の一部や宅地周辺に残存しているところがある。本来は開拓が入るまでTa aの上に堆積していた腐植土層で、当時の杭列跡が存在する。

Ta a：榊前a降下軽石層。1739年(元文4年7月)噴出。良好な残存部で層厚30～40cmあったが、攪乱されているところが多い。

OB：紫がかった褐色泥炭層で、主に低湿部に形成されているが、南側低平台地部にも見られる。層厚0～20cm。新千歳空港内の美々8遺跡低湿部で、B層よりも上位の泥炭層として、Ta aとTa b(1667年噴出、当遺跡では確認されていない)の間に確認されたのが最初の命名である。近世アイヌ文化

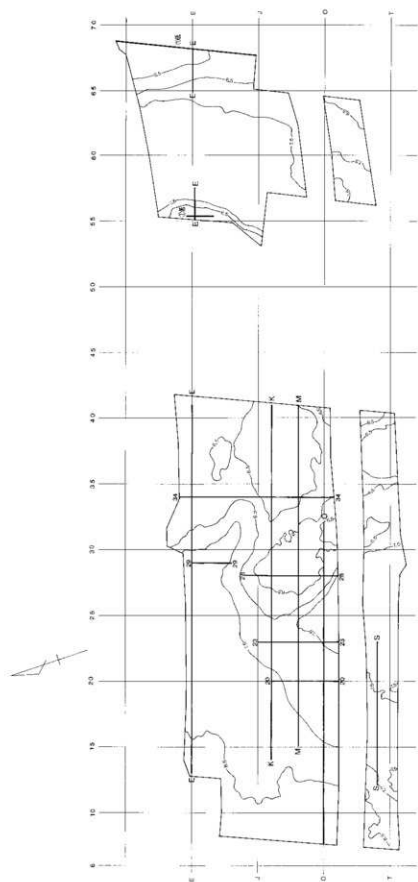


圖 - 12 掲載土層位置圖



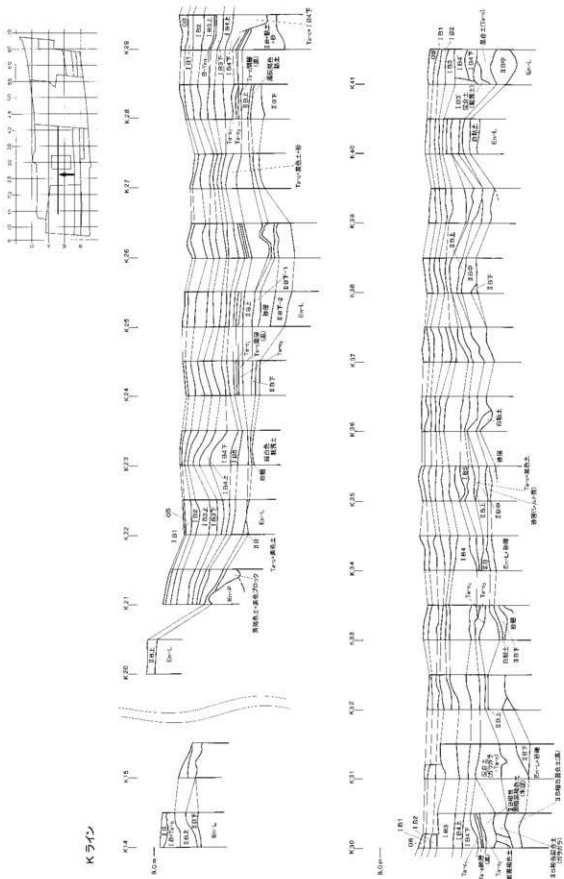


図 - 14 土層柱状図2)Kライン

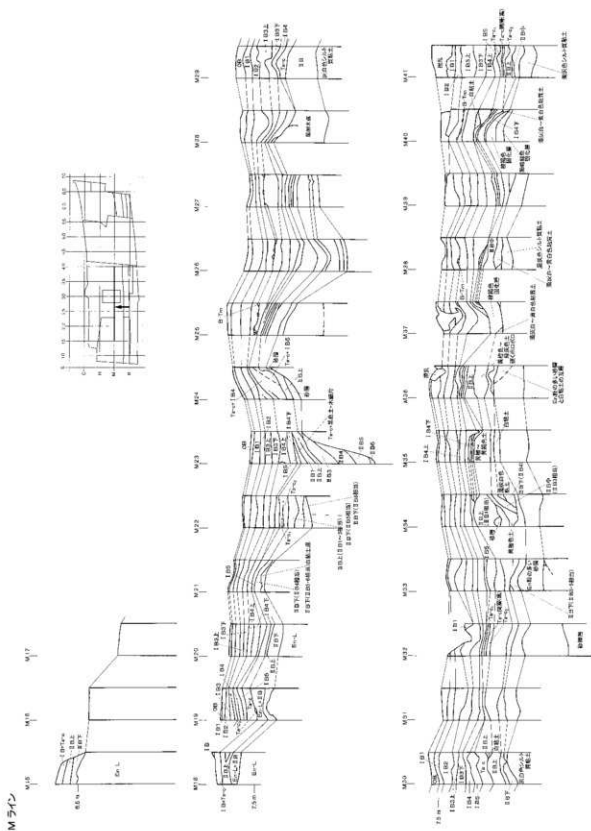


図 - 15 土層柱状図③Mライン

0ライン

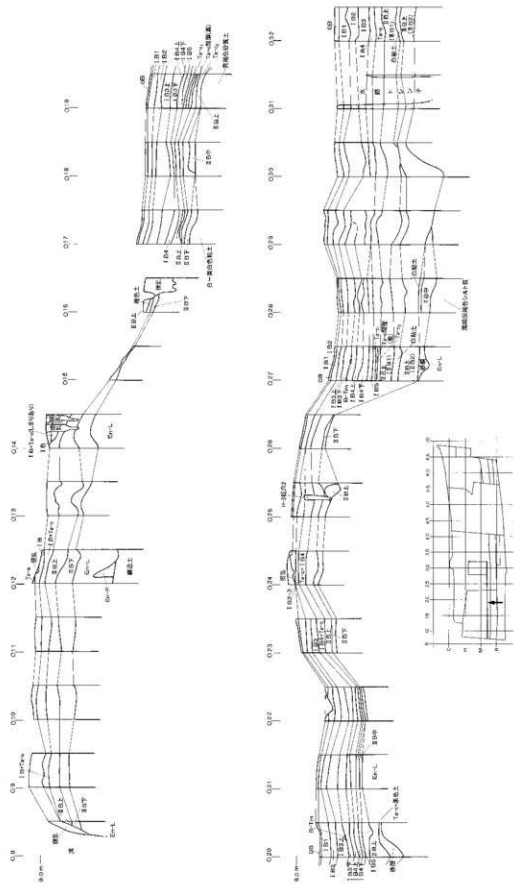


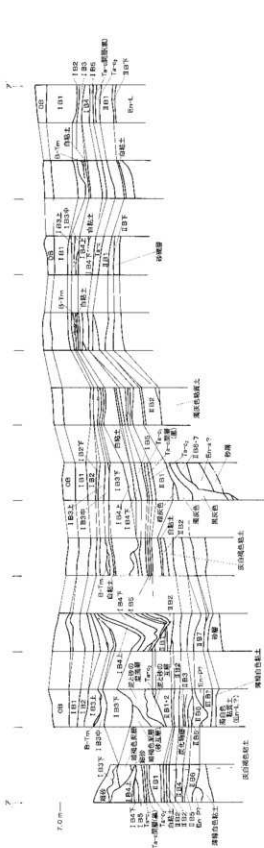
図 - 16 土層柱状図④0ライン







## ①区東端



## ①区西低湿部 南北ライン

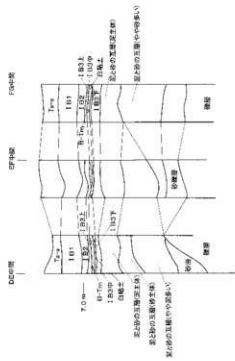


図 19 土層柱状図) 区低湿部

期の包含層で、当遺跡では木製品が若干出土する。当遺跡周辺では千歳市教育委員会や当センターが調査したユカンボシC 2遺跡やオサツ2遺跡でも確認されている。

B：区及び区西側や北側の台地上では分層されず、層厚5～20cmの黒色土層となる。低湿度のB1～3に対応する。

B1：黒褐～暗褐色泥炭層。腐植進行中の層。層厚5～25cmと層厚差が著しい。低湿度全域と南側低平台地部に堆積する。近世アイヌ文化期の主要包含層で、自然木とともに大量の木製品が検出される。

B2：濁暗灰褐色泥炭層。比較的腐植の進んだ層。層厚10～20cmで東側でやや厚いが、ほぼ均一に低湿度全域と南側低平台地部に堆積する。中世アイヌ文化期の主要包含層で、自然木とともに大量の木製品が検出される。

B3：濁暗褐色～暗褐色泥炭層。低湿度全域に堆積する。B Tmで上下に分層するが、B Tmが見られない部分でもわずかな色と植物質のちがいやB Tmの連続性でほぼ分層できる。台地と低湿度の交接帯や南側低平台地部および低湿度東側では分層できない。区東端には砂の多いB3層が見られる。木製品が大量に出土するが、大きな木根や自然木も多い。縄文文化期中葉～中世アイヌ文化期前葉相当層。

B3上：B Tmより上位のB3層。やや暗い色で、下層よりは腐植発達。層厚10～15cmでほぼ均一に堆積する。

B-Tm：白頭山・苫小牧火山灰。灰白色で粉状。低湿度や縄文文化期の遺構覆土に層厚0～2cmで断続的に分布する。これでB3の上下を分層する。10世紀前葉の降下。(註)

B3下：B Tmより下位のB3層。やや茶色がかつた層で、B3上層より腐植未発達。層厚10～15cmでほぼ均一に堆積する。

B4：濁暗褐～濁黒褐色泥炭層。部分的には腐植の発達した腐植土層。色や未腐植分の違いで、上下に分層できることが多い。B3層とほぼ同様の分層のできない地点があるほか、区でも分層がむずかしい。区東端には砂の多いB4層が見られる。大きな木根や自然木が多く、木製品も出土する。続縄文時代～縄文文化期前葉相当層。

B4上：濁暗褐色。下層よりも腐植未発達で、部分的に砂質のことがある。層厚10～15cmでほぼ均一に堆積する。

B4下：濁黒褐色。上層よりもやや腐植が発達し、黒味がち。層厚10～20cmで、低湿度中央部でやや厚い堆積を見せる。

B5：黒褐色腐植土層。部分的には腐植未発達の泥炭層で、Ta cと混合する部分もある。低湿度東側や南側のように確認できないところもある。『ユカンボシC15遺跡<sup>2)</sup> 北埋調報133』掲載のEラインなど、ごく一部で下部にシルト質や砂質が多く混合し、上部の方が腐植が発達しているなど、色や未腐植分の違いで上下に分層できることがある。層厚5～15cm。少量の木製品や土器が出土する。縄文時代晩期～続縄文時代の層。

B+Ta-c：台地上ではTa cが明確な層をなしておらず、黒層の一部と混合している。層厚10～20cmの黒色土層で、低湿度のB4・5層に対応するものであろう。

Ta-c(c<sub>1</sub>・c<sub>2</sub>)+黒色土(B5・4・3・B)：南側低平台地部およびその低湿度との交接帯では、Ta cが、黒層と混合して出現する。

Ta-c：樽前c降下軽石・岩片層。2,000～2,500B.P.噴出。低湿度の浅い部分や斜面では1枚で確認される。c<sub>1</sub>・c<sub>2</sub>と間層の混合の場合とc<sub>2</sub>主体のことがある。ごく少量、砂の混合する部分もあ

る。層厚10～15cm。

T a - c<sub>1</sub>: 樽前c<sub>1</sub>降下軽石層。層厚1～3cmで出現し、暗灰色を呈する。

間層(黒色土): Ta c<sub>1</sub>とc<sub>2</sub>の間の黒色腐植土で、層厚1～2cm。堆積には約50年かかると推定される。従って、c<sub>1</sub>とc<sub>2</sub>の時間差も約50年と考えられる。遺物は確認できていない。

T a - c<sub>2</sub>: 樽前c<sub>2</sub>降下岩片層。層厚1～10cmで、一部直上層の黒色土と混合する部分もある。茶褐色～暗褐色を呈する。

B: Ta c<sub>2</sub>下の黒褐色腐植土で、台地上および低湿部の浅い部分や斜面では、分層できず一枚の層と認識される。低湿部で粘土や砂の混在する部分がある。

B上: Ta c<sub>2</sub>下の茶褐色～黒色腐植土で、層厚10～50cm。縄文時代の包含層で、遺構も構築されている。低湿部では水の影響下でより粘質な部分と腐植的なところがあり、色の違いやシルト質の混合具合または間層の白粘土で分層できることもある。砂が混合する部分があり、砂主体の相当層もある。低湿部でも土器・石器や少量の木を含む。平成9年度報告(東地区『ユカンボシC15遺跡①』北埋調報128a)のB層や平成12年度報告(西地区『ユカンボシC15遺跡④』北埋調報159a)の大型ポットホルルのB1・2層に相当するものであろう。

白粘土: 低湿部のB上の間層やB中層との層界、B下の上層に均一層として現れる。層厚0～7cmの粘質土層。Spf(支笏軽石流堆積物)やEn α(患庭a降下軽石層)の水生二次堆積と思われる。部分的に灰色や黄色気味で濁ることもあり、砂が混在する部分もある。

B中: 茶褐色～黒灰色粘質土で、層厚5～20cm。斜面から低湿部で、B上と分層できる。KラインではK33あたりから比較的厚い堆積で出現するが、Oラインでは断続的になる。層界に白粘土層がみられることもある。少量の遺物を含む。低湿部では平成9年度報告(東地区『ユカンボシC15遺跡①』北埋調報128a)のB層や平成12年度報告(西地区『ユカンボシC15遺跡④』北埋調報159a)の大型ポットホルルのB3層に相当するものであろう。

B下: 漸移層で暗褐～暗黄褐色を呈す。層厚10～25cm。遺物はほとんどみられない。低湿部では層界に白粘土層を挟むことがあり、水流で削り取られているところも多い。台地部と低湿部の連続性はほとんどない。K25～27あたりでは、砂層によって-1・-2の上下に分層される。平成9年度報告(東地区『ユカンボシC15遺跡①』北埋調報128a)のB層や平成12年度報告(西地区『ユカンボシC15遺跡④』北埋調報159a)の大型ポットホルルのB4層以下に対応するものであろう。

橙色土・黄褐色土: 台地端のB層で、鉄分等が集積した部分が酸化したもの。焼土層ではない。

固化層: En L層に水等の影響で鉄分が沈着し、岩盤のように固化した層。場所や高低差、水分の多少で発色や固さ、厚さが違う。主に橙褐色か濁暗緑色で出現した。

シルト質粘土層: 水流後の砂礫層上にたまったシルト質粘土で、低湿部の基盤層となるところもある。場所や高低差・上下の層で濁黒灰～濁灰褐～濁緑灰～黄灰～灰白色と発色が違う。未腐植層と互層になる部分やEn p粒の混じる部分もある。

粘質土・粘土層: En Lが水などにより変化や二次堆積した層で、場所や高低差・上下の層で黄褐色系～濁灰褐～緑白色と発色が違う。黒色土が部分的にブロック上に入り込む。

砂礫層・砂層: B層堆積後に水流があったと思われる箇所では、基盤層がEn a系ではなく、径1mmほどの砂質や径3cmほどの礫、あるいはその混合土となる。シルト質粘土が少量混在する部分もある。暗灰～灰褐～灰緑色を呈す。

混合土: 水流があったと思われる箇所ではシルト質粘土・黒色土・砂質・砂礫・木根・Ta cなどが混合し、その混在具合により分層もされる。B層に相当することもある。M19区付近のやや高まる

基盤に堆積する層はEn Lと B層の混合である。

En - L : En a起源のローム層。黄褐～濁黄褐色。低湿部では脱色し、白っぽかったり腐植土・砂混じりになる部分もある。層厚25～50cm。平成10年度報告(西地区『ユカンボシC15遺跡<sup>2)</sup>北埋調報133a』)の旧石器深掘調査区の層にあたる。

En - p : En α(恵庭a降下軽石層)の未風化軽石礫層。黄褐～明黄褐色。低湿部ではさらに脱色し、白っぽい。平成10年度報告(西地区『ユカンボシC15遺跡<sup>2)</sup>北埋調報133a』)の旧石器深掘調査区の層にあたる。また、同調査区の 一層も基本的にこの層に相当する。層はEn pとシルトの互層で層厚70cm。層はEn pと粘土の互層で層厚70～80cm。層は層厚で5cmほどのEn p礫層。

構造土 : En aの水成二次堆積物が、凍上現象によって断面が波状に観察できたもの。平成10年度報告(西地区『ユカンボシC15遺跡<sup>2)</sup>北埋調報133a』)で報告した。

腐植土1～4とSpII二次堆積 : 旧石器深掘調査区でみられた腐植土と粘土・シルト(支笏軽石流堆積物の二次堆積)の互層。

註 B - Tmの降下年代については、1996年8月東京大学における「日本第四紀学会」大会で、町田 洋氏が、「A .D 923～A .D 938年」と口頭で発表されたとの情報を得た。

また、『火山』第43巻第5号(1998年)に発表された早川由紀夫・小山真人「日本海をさきで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日 十和田湖と白頭山」によると、史料記録に基いた火山学的検討から 白頭山の噴火クライマックスは947年2月7日で、噴火開始は946年11月(あるいは944年2月)との年代を提示している。

(三浦)

## 8 引用参考文献

以下に、当報告書の 一 章の引用・参考文献を掲示する。

- ①北海道埋蔵文化財センター 1990-93-96-97『美沢川流域の遺跡群 X B・X VI・X VII・X X』北埋調報69-83-102-114
- ②北海道埋蔵文化財センター 1996 『千歳市オサツ2遺跡<sup>2)</sup>』北埋調報103
- ③北海道埋蔵文化財センター 1998～2002 『千歳市ユカンボシC15遺跡<sup>1)</sup>～<sup>5)</sup>』北埋調報128-133-146-159-176
- 犬飼哲夫・武笠耕三 1953 「アイヌの丸木舟の作製」『北方文化研究報告第8輯』
- 知里真志保 1953 『分類アイヌ語辞典植物編』(1976)知里真志保著作集別巻 a 平凡社)
- 董野 茂 1978 『アイヌの民具』アイヌの民具刊行運動委員会編
- 氏家 等 1985 「北海道の民具」『北海道の研究7 民俗・民族篇』
- 山田昌久ほか1999『浄法寺町漆文化収蔵庫収蔵品調査』『人類誌集報1999』東京都立大学人類誌調査グループ 東京都立大学人類誌調査グループ 1997～2001 『人類誌集報1997～2001』
- 日本観光文化研究所 1975 『あるくみるきく103特集日本のうつわ』
- 仲田茂司 1999 「東国中世の漆器」『考古学研究46・1』
- 北野信彦 2000 「生産技術面からみた近世出土漆器の生産・流通・消費」『日本考古学9』
- 中山正典 1993 「曲物の製作技法と形態」『食生活と民具日本民具学会論集7』
- 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代篇』
- 札幌市教育委員会 2001『K39遺跡 第6次調査』札幌市文化財調査報告書65
- 千歳市教育委員会 1994『千歳市埋蔵文化財包蔵地分布図』
- 千歳市教育委員会 2002『ユカンボシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査。千歳市文化財調査報告書X X II』
- 北海道廳 1881 『北海道殖民地撰定報文』(1886 北海道出版企画センター復刻)
- 石川和助 1857 『経国録』(苫小牧町 1935 『苫小牧町史』)
- 玉龜左太夫 1857 『入北記』(稲葉一郎解説 1992 『蝦夷地・樺太巡見日誌 入北記』北海道出版企画センター)
- 松浦武四郎 1846 『再訪蝦夷日誌』(秋葉實翻刻・編 1999 『校訂 蝦夷日誌 全』北海道出版企画センター)
- 松浦武四郎 1857 『丁巳日誌』(秋葉實解説 1982 『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』北海道出版企画センター)

## 8 引用参考文献

- 松浦武四郎 1858 『戊午日誌』(秋葉實解読 1985 『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』北海道出版企画センター)  
小林和夫 1987 『蝦夷全図付録地名表』『北海道古地図集成』  
高倉新一郎編 1987 『北海道古地図集成』北海道出版企画センター  
長見義三 1976 『ちとせ地名散歩』  
千歳市 1983 『増補千歳市史』  
早川由紀夫・小山真人 1998 『日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日  
- 十和田湖と白頭山 - 』『火山』第43巻第5号  
寺崎昭紀 1988 『千歳の植物』(千歳文化財保護協会 千歳市植生調査報告)  
恵庭自然研究会 1994 『恵庭公園伐採予定地植生調査』・『恵庭公園植物相調査』・『恵庭公園植物目録』  
(『みづなら』第3号)  
田中 環 1907-08 『北海道森林所見』(北海道廳 『殖民公報』第三十七-四十號  
(1986 北海道出版企画センター復刻))  
元田 茂 1950 『北海道湖沼誌』(北海道水産孵化場 『水産孵化場試験報告』5-1)  
山本道也 1978 『サケの来る川 千歳川の変遷とサケ文化史』  
(千歳市教委 『苗別川流域における鳥・魚類・植生調査』千歳市文化財調査報告Ⅱ)  
金田一京助 1930 『アイヌのイトクバの問題』(『人類学雑誌』第45巻第4号)  
河野広道 1934 『アイヌのイナウシロシ』(『人類学雑誌』第49巻第1号)  
名取武光 1985 『アイヌの花矢と有翼酒壺』六興出版  
曇媛きのご観察会 『えひめのキノコ図鑑』(インターネットホームページ)  
佐藤孝夫 1990 『北海道樹木図鑑』亜細西社  
鮫島惇一郎 1986 『北海道の樹木』北海道新聞社

## II 低湿部と木製品出土の概要

### 1 低湿部既報告の概要

当遺跡の調査対象の低湿部は、東地区の東・西・南側と、西地区の約半分にあった。このうち東地区は、平成9年度発行の『千歳市ユカンボシC15遺跡<sup>1</sup>北埋調報128』で報告した。

三ヵ年（1996～98年）で調査した西地区低湿部は、ユカンボシ川の最下流部で、オサツ沼に注ぐ直前の滞水域化した部分の主として左岸に、縄文時代から近代にわたって形成された。この低湿部の層序の細分は 章7節「土層の区分」に掲載してある。層や遺物種別ごとに報告を行う事とし、平成11年度に B層（縄文時代）・B5層（縄文時代晩期～統縄文時代）・B4層（統縄文時代～擦文文化期前葉）分を『千歳市ユカンボシC15遺跡<sup>3</sup>北埋調報146』で報告した。12年度は遺構と B3層以上の土器・石器・金属製品等、B3層（擦文文化期中葉～中世アイヌ文化期）の木製品（全木製品の半分弱）を『千歳市ユカンボシC15遺跡<sup>4</sup>北埋調報159』に報告した。さらに昨年度、全木製品の4割強が出土した B2層より上位層分（アイヌ文化期）の報告を『千歳市ユカンボシC15遺跡<sup>5</sup>北埋調報176』としておこなった。

各報告では、低湿部と木製品出土状況の概要を示し、次に一覧表の説明を記した。各層の木製品は、層ごとに別章をたてて製品種別の報告をした。木製品は、舟とその道具類・狩猟漁撈具・作業道具類・燃焼関係具・容器食器類（漆碗含む）・串類・かんじき・機械具・祭祀具・板・杭や柱等の建材のほか、材料である板材・割材・枝材・丸木材とそれらの加工製品、切片・炭化材・樹皮などで、合計11点、破片数だと約120,000点にのぼる。各報告書の後半には各報告分全製品の一覧表を示し、樹種・木取り・計測値などを記載してある。

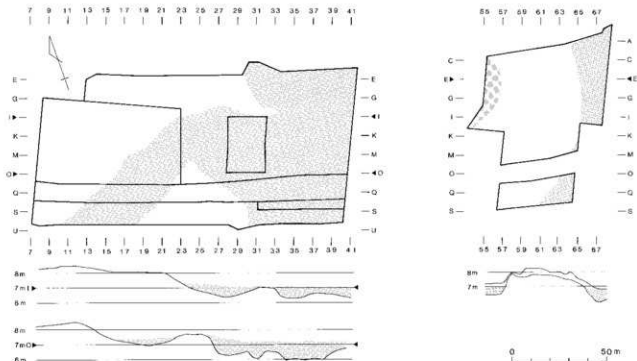


図 - 1 低湿部の範囲



## 2 低湿度形成の概略

当遺跡は、千歳川流域の石狩低地南東部に広がる標高8m以下の一大停滞水域のうち、長都沼（オサツト）に流れ込むユカンボシ川下流部の微高地と低湿度部に立地していた。遺跡内に現ユカンボシ川は流れておらず、旧流が地形図等で認識できる。東西に調査区を分断する空白域が旧ユカンボシ川で、調査区東地区の北側を巻いて一旦南流し長都川に合流する。東地区の東西の低湿度部は、この旧流に由来する。西地区の調査では、その旧流跡に合するように東流する旧々流跡あるいは支流跡と、それに伴う低湿度部や遺構・遺物が確認されている。東西両地区とも低湿度部に相対して標高8～9mの台地部（微高地）があり、遺跡を営んだ人々の住居や墓などが造られていた。

低湿度部の形成の大略を珪藻・花粉分析の結果（バリノ・サーベイ隊に依頼、『千歳市ユカンボシC15遺跡』北埋調報159）に報告掲載）で見ると、B層での環境は流水の影響のある沼沢のような水域であったが、河川の活発化による氾濫性堆積物により、低湿度内に高低差を生じた。

Ta-c降下後、流水の影響を多少受ける沼沢地となり、B5層黒褐色腐植土（泥炭）が発達し湿原が拡大した。B5層はB層高低差やTa-c降下の影響か、西地区東側では形成されない部分があり、全体でもTa-cと混合した箇所が多い。

B4層までは泥炭の発達が顕著となり、厚い層が形成される。この層は濁暗褐色～濁黒褐色泥炭層で部分的に腐植が発達する。

B3層になると部分的には中位まで泥炭の発達が顕著だが、全体的には池塘のような安定した止水水域となり、濁暗褐色～暗褐色泥炭層が低湿度全域に堆積した。中間にB-Tm火山灰点在層を含んでいる。

B2層では、再び流水の影響を多少受ける湿原状態となる区域もあったようだが、まだ比較的安定した止水水域で、低湿度全域に濁暗灰褐色の泥炭層が堆積した。

B1層の時期になると流水の影響が再び顕著となり、安定した止水水域の中に沼沢～湿原の状態が出現する。このため地点により厚さの不均一な黒褐色泥炭層が堆積した。

さらにこの上に暗紫色の0B層がTa-a降下まで薄く堆積するが、区西側や区のほとんどでは確認されない。

木製品の樹種同定結果からは、全層的に多い種で、トネリコ属・ヤナギ属・ニレ属・コナラ属等の湿地性落葉広葉樹林に針葉樹（モミ属・イチイ）が混交した後背林が存在したと想像される。低湿度にはハンノキ属とトネリコ属の混生湿地林があったようである。製品数の多い層で変化を見ると、B3層でヤナギ属が増・トネリコ属が減、B2層でモミ属増・広葉樹変化なし、B1層でヤナギ減・ハンノキ属とトネリコ属増という変遷がある。

花粉分析からは、縄文期の後背地にはコナラ亜属中心の落葉広葉樹林、低地にハンノキ属の湿地林があり、クルミ属・キハダ属等が混交していたものと思われる。草本ではミズバショウ属・ササ類・ヨシ属・イネ科・スゲ属・ヨモギ属・ミズゴケ属などが繁茂し、これらが次代の泥炭の母材になった。

B層の時期に入ると後背地林は変わらないものの、樹種同定結果から見たように低湿度にはハンノキ属とトネリコ属の混生湿地林があったと考えられる。クルミ属・キハダ属は姿を消すらしい。草本類も変化し、ミズバショウ属が増加、さらにB1～0B層ではヨシ属が増加するとの結果が得られている。

木製品はこのような低湿度部の安定度の変化や流水・植生の影響により、各層ごとに出土状態や出土数に異同をみせる。

表 - 1 木製品地区別層別点数表

層	①区	②区	③区	④区	計	構成比
表土・Ta-a	106	10			116	1.00%
OB	7	152	1	21	181	1.56%
IB1	194	1016	1	256	1467	12.63%
IB2	59	2994		237	3290	28.33%
IB3	27	4831	6	362	5226	45.01%
IB4	10	786	1	183	980	8.44%
IB5	6	117			123	1.06%
II B	12	93	1	45	151	1.30%
攪乱・不明等	1	71		6	78	0.67%
合計	422	9985	10	1119	11612	

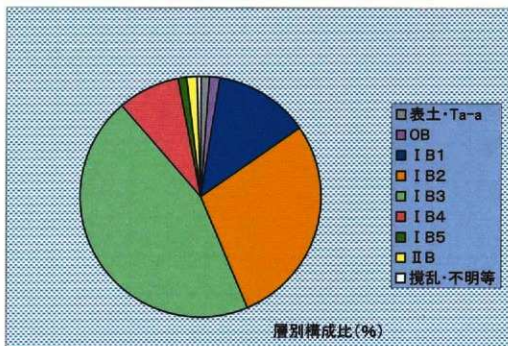
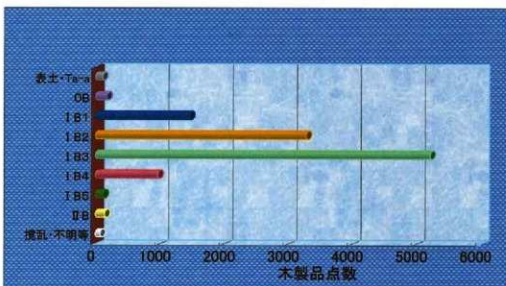


図 - 2 木製品集計・層別点数グラフ

2 低湿度形成の概略

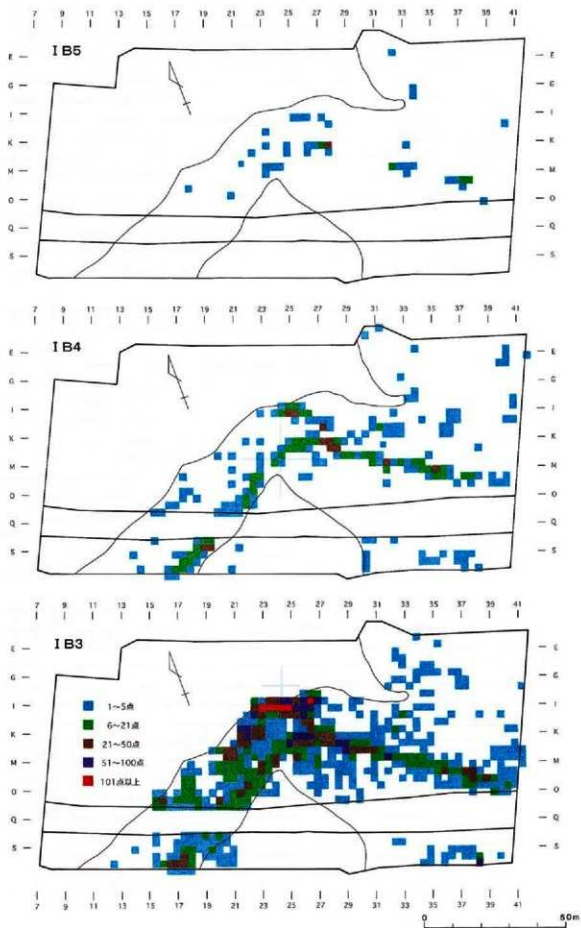


図 - 3 木製品分布図(1) B5・B4・B3

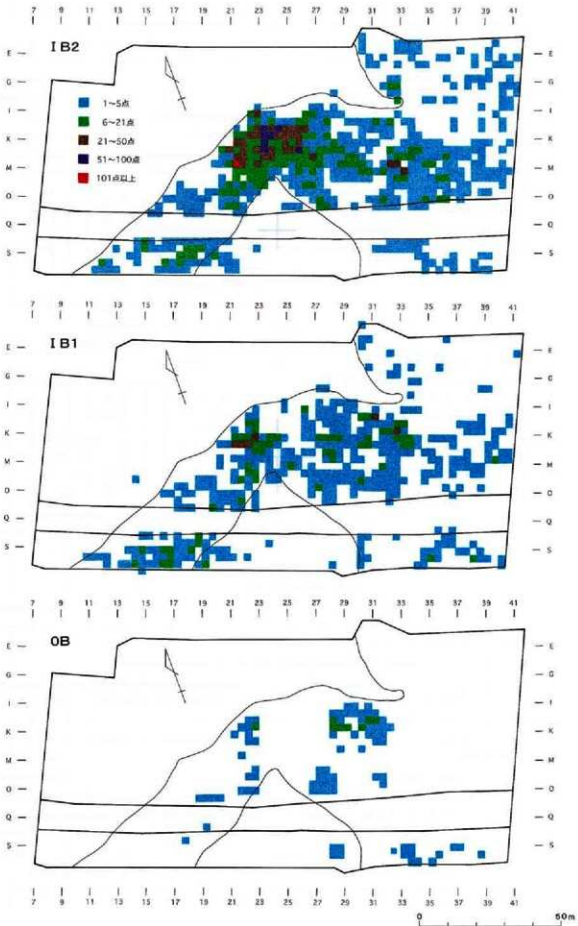


図 - 4 木製品分布図(2) B2・B1・OB

### 3 木製品の出土状況

#### 3 木製品の出土状況

東地区の低湿度全層における木製品の出土状況は台地縁辺の密度が濃く、この状況は台地との段差のきつい西側の低湿度部に顕著である。東地区で地点計測をして取り上げた木製品の総計は428点。製品の混在などを分割していくと、製品数で432点、破片数だと4,500点ほどになる。西地区の低湿度全層における木製品の出土状況は、台地縁辺となる西側が濃く、東寄りになるにつれ淡くなっていく傾向にある。西地区で地点計測をして取り上げた木製品の総計は11,060点。製品の混在などを分割していくと、製品数で11,180点、破片数だと110,000点以上となる。

東西合わせると取り上げ地点で11,488点、製品数で11,612点、破片数だと約120,000点となる。表-1と図-2に地区別・層別の木製品出土点数表と比率を示した。区が東地区、区が西地区である。

層ごとの出土傾向は、前述の低湿度部の堆積環境と運動するようである。全域で安定したB3層の時期には総計の約45%の木製品が、区域的に安定を続けるB2層以降でも総計の約43%が、台地縁辺を中心に出土している。逆にB4・B5・B層では、流水の影響を受けていた沼沢～湿原であったためか、合計でも約11%の出土にとどまっている。東地区ではB1層の出土比率が高いという時代的特徴もある。

西地区におけるB層以上の層ごとの出土分布を、2.5×2.5mの小グリッドごとに取りまとめた形式で図-3・4に掲載した。B層では台地縁よりも沖の沼沢の底あたりに点在する分布があり、

B5層でも断続的に低い位置に出土する。B4層では、南低平地縁に沿って台地突端に達し低湿度部中央に散在する水流に沿うような出土域があり、北側台地に沿った集中域もみられる。B3層の出土分布はほぼB4層と重なり、これを密度濃くした状況である。北台地の縁辺部に分布が激増し、集中区周辺の密度はさらに濃密である。集中域については章で若干の考察を試みる。B2層では安定した止水域の状況からか、数を減らしながらもB3層よりも分布域には広がりが見られる。集中域は北台地縁辺に沿って南西に移動している。B1層では分布域はB2層の状況のまま、数を減らした観がある。北台地突出部の南側の状況が変化を示している。0B層では北台地突出部の南側にやや集中が見られる。

層と年代の対応は、B層：縄文時代、B5層：縄文時代晩期～続縄文時代、B4層：続縄文時代～擦文文化期前葉とらえた。B3層は、10世紀前葉の降下である白頭山-苫小牧火山灰(B-Tm)を中間に挟む層であることなどから、擦文文化期中葉から中世アイヌ文化期前葉、およそ9世紀から13世紀の遺物包含層といえる。B2層は中世アイヌ文化期(およそ13～16世紀)、B1層は近世アイヌ文化期前半(およそ17～18世紀前葉)・0B層は近世アイヌ文化期後半(18世紀中葉～19世紀)と考えている。

(三浦)

### Ⅲ 木製品データの訂正と追加

1 既報告木製品データの訂正と追加 (図 - 1-4, 表 - 1-10, 図版 - 1-4)

前出のとおりすでに報告した木製品は、報告書(1)-(5)で Ⅰ 区の包含層・遺構、層では B・B5・B4・B3・B2・B1・0Bの各層とその他攪乱層の出土など、最終集計製品数11,612点のうち11,607点であった。この中で訂正や追加データのあったものが相当数にのぼったので、報告書ごと掲載順にページと図表 を示して、正誤表形式で表 - 1-9に掲載する。

相当量の正誤表を掲載することになったのは、報告後に次の報告のため別地区や別層の整理作業を行っている過程ですでに報告したものの訂正が必要となり、整理終了後の見直しで訂正・追加が必要となったためである。件数が多くなってしまったのは、整理作業計画・方針の甘さや、製品名決定上の視点・条件を曖昧にしつづけた事が主な原因である。これを防止するためには、整理作業開始時、ひいては発掘調査開始当初からの綿密な整理計画方針の確立と計画遂行が望ましい。事例にそった木製品名称の画一化(少なくともその地域において)や、加工技術の呼称と用途不明製品名の統一化、報告方法など全体のマニュアルづくりが今後必要となる。

主な訂正・追加項目を概説すると、[層位]は取上げ位置再検討の結果や誤認・誤植。[遺物取上げ] (= [遺物番号])は杭列7・8の杭に整理の都合上、取上げ を新たに与えたため 区で397-428が追加されたことなど。

[遺物名称]は用字の統一(例:船敷 舟敷, 榎杵 榎杵) 用字の誤植(例:棒遺器状製品 棒遺器状製品) 木取りや大きさ・加工法・用途の検討による変更(例:材 加工製品, 枝材 細枝材, 丸木材 枝材, 有孔丸木材 加工製品 有孔短丸木材加工製品, 矢 やす・矢, やす・矢 矢, 柄 有孔柄) などである。

[木取り]は観察・再検討(例:丸木 股木(丸木), 柱目 18割)や製品名とのかかわりによる(例:板目 偏14割, 柱目 偏割, 心持 丸木)ものと、データ未掲載分の追加がある。

[樹種]は細分が可能になり種まで確定できたもの(例:ヒノキ属アスナロ属 アスナロ, アジサイ属 ノリウツギ, タラノキ属 タラノキ)、不確定要素があるため分類レベルを下げたもの(例:ブナ属 散孔材A)、根材(根)とデータ未掲載分の追加等がある。詳細は 章4節樹種同定の訂正・追加を参照。

[計測値](長さ・幅・厚さなど)は整理中や報告書作成時の誤記入・計測ミス訂正とデータ未掲載分の追加等がある。報告書(4)179ページの表 - 11掲載の516は図 - 98の掲載図ともども、同一破片の保存処理前後を掲載してしまったため[掲載番号・遺物番号・計測値・備考]の説明・整理が必要となったものである。

また、図 - 1-4・表 - 10の11点は報告後に新たな接合や誤認が発覚したもので、修正図や変更計測値をこの図・表に掲載した。表 - 1-9には「修正後新図」や「修正後計測値」を「当報告書掲載」と表示してある。

図 - 1の B3-80は早権の水掻き部端に接合していた破片接合が誤認で、取り除いた。またこの破片は他の残破片と接合し別個体とも思われる水掻き部を形成したので、新たに実測し掲載した。B1-6は舷側板で、上端や下方に新たに破片が接合し結合孔も現れたので新図を掲載した。

図 - 2の B3-185の柄は中間部と端部で新たに破片が接合、B4-65と67の柱目板も新たな破片接合でそれぞれ長さが大きく変わったため、65は新片も同時に掲載した。B4-79は新たに破片が接合し接合誤認が認められたため修正した。

図 - 3の B2-160は鉤鎌柄部で接合誤認が認められ新たに破片が接合したため修正した。

図 - 4の4点は端部に破片が接合したものである。

## 1 既報告木製品データの訂正と追加

表 - 1 正誤表(1)

ユカンボシC15遺跡(1) 北埋調報第128集 表等の訂正・追加 その1

ページ	ページ内容	掲載順	項目	原→正・追加事項
48	図Ⅳ-5	杭列9-12	図番号	9-12 → 9-32
49	表Ⅳ-1	杭列7-24	長さ	(45.2) → 45.2
		杭列7-25	遺物取上げNo.	— → 397
		杭列7-28	遺物取上げNo.	— → 398
		杭列7-27	遺物取上げNo.	— → 399
		杭列7-28~38の いずれか1/8部材	遺物取上げNo. 長さ・幅・樹種	400・長(36.5)・幅5.0・トネリコ属
49 50	表Ⅳ-1 表Ⅳ-2	杭列7-28~38 or 杭列8-17~32 のいずれか	遺物取上げNo. 長さ・幅・樹種	401・長(39.0)・径2.8・トネリコ属
				402・長(29.2)・径2.1・トネリコ属
				403・長(11.9)・径2.0・トネリコ属
				404・長(49.0)・径3.5・トネリコ属
				405・長(39.5)・径2.5・トネリコ属
				406・長(23.0)・径3.5・トネリコ属
				407・長(25.2)・径2.3・トネリコ属
				408・長(19.5)・径3.0・トネリコ属
				409・長(23.3)・径2.6・トネリコ属
				410・長(25.9)・径3.1・トネリコ属
				411・長(31.2)・径3.0・ヤナギ属
				412・長(28.3)・径2.0・ヤナギ属
				413・長(35.0)・径3.0・ヤナギ属
				414・長(15.7)・径2.9・ヤナギ属
				415・長(14.2)・径2.6・ヤナギ属
				416・長(25.5)・径2.5・ヤナギ属
				417・長(49.2)・径3.6・ヤナギ属
				418・長(25.5)・径2.3・ヤナギ属
				419・長(40.2)・径2.0・ヤナギ属
				420・長(42.9)・径2.7・ヤナギ属
				421・長(27.2)・径2.6・ヤナギ属
				422・長(41.9)・径2.9・ヤナギ属
				423・長(18.1)・径2.6・ヤナギ属
424・長(35.9)・径2.2・イヌエンジュ				
425・長(49.2)・径3.3・モミ属				
426・長(29.8)・径2.6・モクレン属				
50	表Ⅳ-2	杭列8-15	遺物取上げNo.	— → 427
		杭列8-16	遺物取上げNo.	— → 428
		杭列8-17~32	木取り	大木
51	表Ⅳ-3	杭列8-a	樹種	ヒノキ属?アスナロ属 → アスナロ
		杭列9-20	P48 実測図 計測値	修正後計測値 当報告書掲載
222	表Ⅶ-6	杭列9-39	長さ	1840 → 840
		製品番号1	遺物名称	船載切断品片 → 舟載切断品片
		製品番号4	茶園区	東 C85c → 東 C85cd
		製品番号5	樹種	アジサイ属 → ノリウツギ
		製品番号6	茶園区	東 E87c → 東 E87bc
		製品番号8	樹種	アジサイ属 → ノリウツギ
		製品番号9	樹種	アジサイ属 → ノリウツギ
		製品番号10	遺物名称	欠(竪) → やす・欠
			樹種	アジサイ属 → ノリウツギ
			樹種	アジサイ属 → ノリウツギ
		製品番号11	厚さ	0.9 → 0.4
			重量	4.0 → 3.4
		製品番号20	樹種	ハギ属 → イヌエンジュ
		製品番号21	樹種	アジサイ属 → ノリウツギ
		製品番号22	樹種	アジサイ属 → ノリウツギ
		製品番号28	樹種	アジサイ属 → ノリウツギ
		製品番号33	厚さ	1.45 → 1.0
		製品番号34	樹種	ヒノキ属?アスナロ属? → アスナロ
		製品番号36	木取り	板目 → 端1/4側
		製品番号37	遺物名称	両端部接付板材片 → 両端部接付板材加工製品片
	樹種	ヒノキ属?アスナロ属? → アスナロ		
製品番号39	備考	有遺丸木材 → 有遺丸材両端加工製品		
製品番号40	遺物名称	丸? 追加		
	遺物名称	角材加工製品片 → 角材加工製品(側材加工製品)		
	長さ	(41.75) → (48.85)		

表 - 2 正誤表(2)

ユカンボシC15遺跡(1) 北理調報第128集 表等の訂正・追加 その2

ページ	ページ内容	掲載地	項目	誤り・追加事項	
223	表VII-7	製品番号 44	祭壇区	西 F56c → 東 C67a	
			遺物名称	角材 → 角材(薪材加工製品)	
			長さ	(18.5) → (18.5)	
		製品番号 47		幅	3.0 → (2.8)
				厚さ	2.7 → 1.95
				重量	(81.7) → (54.5)
		製品番号 49	祭壇区	東 D66c → 東 E66a	
		製品番号 52	祭壇区	西 F56c → 西 E56b	
		製品番号 52	遺物名称	切り出し原料 → 切り出し原料(丸木材)	
		製品番号 56	遺物名称	丸板状製品片 → 細杭	
		製品番号 57	遺物名称	丸板状製品片 → 細杭	
		製品番号 58	遺物名称	丸板状製品片 → 細杭	
			樹種	アシサイ属 → ノリウツギ	
		製品番号 59	遺物名称	丸板状製品片 → 細杭	
			遺物名称	二股杭 → 股木杭	
		製品番号 60	木取り	丸木 → 股木(丸木)	
			樹種	ヨウラクツツジ属? → 散孔材C	
		製品番号 63	祭壇区	東 C66a → 東 C65d・C66a	
		製品番号 71	祭壇区	東 D66bc → 東 D66bc・E66ad	
		製品番号 72	遺物名称	建築部材片 → 建材	
		製品番号 73	遺物名称	建築部材片 → 建材	
			祭壇区	西 E56bc → 西 E56bc・F56a	
		製品番号 74	遺物名称	建築部材片 → 建材	
		製品番号 75	祭壇区	東 B67cd・B68a → 東 B67cd・B68ab	
		製品番号 78	遺物名称	樹皮片 → 樹皮加工製品	
			祭壇区	東 D66c → 西 D55c	
		製品番号 80	幅・厚さ	4.3 0.1 → 1.1 0.1	
製品番号 81	幅・厚さ	7.35 2.6 → 2.6 0.15			
224	表VII-8	遺物番号 390	祭壇区	J60a 遺跡1區 → J59d・J60a 遺跡1區	
		遺物番号 3	木取り	偏1/8割 → 1/8割	
		遺物番号 308	遺物名称	扶付細板材片 → 扶付細板材加工製品	
		遺物番号 39	遺物名称	右溝部材加工製品 → 扶付部材加工製品	
			木取り	偏半割 → 半割	
		遺物番号 286	遺物名称	右孔部材片 → 右孔部材(右孔部材加工製品)	
			木取り	柱目 → 1/8割	
		遺物番号 377	祭壇区	西 H565 → 西 H54b	
			樹種	ヒノキ属?アスナロ属? → アスナロ	
		遺物番号 343	木取り	板目 → 偏割	
		遺物番号 236	祭壇区	西 C555 → 西 C55c	
		遺物番号 179	遺物名称	加工材片 → 加工材片(薪材加工製品?)	
			祭壇区	東 C66ab → 東 C66ab・D66a	
		遺物番号 122	層位	I 31 → I B2	
		遺物番号 268	遺物番号	トマリコ属の方 288 → 266	
		遺物番号 329	祭壇区	西 D56c → 西 D55cd	
		遺物番号 357	祭壇区	西 I54b → 西 I54ab	
遺物番号 370-1	祭壇区	西 I54a → 西 I54ad			
遺物番号 370-2	祭壇区	西 I54a → 西 I54ad			
遺物番号 375	祭壇区	西 I55a → 西 I54d			
225	表VI-9	遺物番号 37	遺物名称	角材 → 角材(薪材加工製品)	
			遺物名称	角材 → 角材(薪材加工製品)	
		遺物番号 45	祭壇区	西 H56d → 東 H65d	
		遺物番号 97	遺物名称	角材 → 角材(薪材加工製品)	
		遺物番号 237	祭壇区	西 C56c → 西 C55d	
		遺物番号 363	祭壇区	西 I53d → 西 I54ad	
		遺物番号 282	層位	I 82 → I B3	
		遺物番号 318	層位	I 82 → I B1	
		遺物番号 327	層位	I 82 → I B1	
		遺物番号 60-3	祭壇区	南 PB3d → 南 PB3c	
		226	表VI-10	遺物番号 7	遺物名称
遺物番号 22	木取り			板目 → 偏割	
遺物番号 94	木取り			不明 → 偏割	
遺物番号 132	木取り			半割 → 偏半割	
遺物番号 224	木取り			板目 → 偏割	
	祭壇区			東 C66c → 東 D66d	
遺物番号 290	木取り			板目 → 偏割	
遺物番号 296	木取り	板目 → 偏割			



表 - 3 正誤表(3)

ユカンボシC15遺跡(1) 北埋調報第128集 表等の訂正・追加 その3

ページ	ページ内容	掲載No	項目	誤 → 正・追加事項
226	表Ⅵ-10	遺物番号 334	発掘区	西 D56c → 西 D56bc
		遺物番号 335	遺物名称	偏割材片 → 心持材
		遺物番号 368	木取り	柱目 → 偏割
		遺物番号 373	木取り	板目 → 偏割
		遺物番号 386	木取り	板目 → 偏割
		遺物番号 ㉓-4	発掘区	南 P65b → 南 P63c
		遺物番号 ㉓-8	木取り	板目 → 偏割
		遺物番号 130	層位	I B1 → I B3
		遺物番号 12	層位	0B → I B1
		227	表Ⅵ-11	遺物番号 13
	層位			0B → I B1
遺物番号 19	遺物名称			枝材 → 細枝材
遺物番号 23	遺物名称			枝材 → 細枝材
遺物番号 44	遺物名称			枝材 → 細枝材
	樹種			ツル性植物 → ツルズメドキ属
遺物番号 66	遺物名称			枝材 → 細枝材
遺物番号 70	発掘区			東 C66c → 東 C66b-D66a
遺物番号 76	遺物名称			枝材片 → 細枝材
遺物番号 80	遺物名称			枝材片 → 細枝材
遺物番号 95	遺物名称			枝材 → 細枝材
遺物番号 96	遺物名称			枝材 → 細枝材
遺物番号 113	発掘区			東 B68a → 東 B67d-B68a
遺物番号 120	樹種			ヒノキ属/アスナロ属? → アスナロ
遺物番号 123	遺物名称			枝材片 → 細枝材
遺物番号 145	樹種			ブナ → 散孔材A
遺物番号 146	発掘区	東 C66d → 東 C65d		
	樹種	ブナ → 散孔材A		
遺物番号 181	層位	I B3 → I B3下		
遺物番号 234	遺物名称	枝材片 → 細枝材		
遺物番号 242	遺物名称	枝材片 → 細枝材		
遺物番号 287	遺物名称	枝材片 → 細枝材		
遺物番号 350	遺物名称	枝材 → 細枝材		
遺物番号 380	発掘区	西 I54d → 西 I54ad		
遺物番号 319	遺物名称	丸枝材 → 丸木材		
遺物番号 9	遺物名称	丸木材片 → 枝材		
遺物番号 72	遺物名称	丸木材片 → 枝材		
遺物番号 77	遺物名称	丸木材片 → 枝材		
遺物番号 89	遺物名称	丸木材片 → 枝材		
遺物番号 142	遺物名称	丸木材片 → 枝材		
遺物番号 310	遺物名称	丸木材片 → 枝材		
遺物番号 323	遺物名称	丸木材 → 枝材		
遺物番号 247	発掘区	西 D56cd → 西 D56cd-D57a		
遺物番号 263	発掘区	西 D55d → 西 D55ad		
遺物番号 381	発掘区	西 F56ad → 西 E56ad		
遺物番号 29	木取り	丸木 → 原木(丸木)		
遺物番号 54	木取り	丸木 → 原木(丸木)		
遺物番号 83	木取り	丸木 → 原木(丸木)		
遺物番号 232	木取り	丸木 → 原木(丸木)		
遺物番号 333	遺物名称	糊粒状製品 → 糊粒		
遺物番号 325	遺物名称	丸粒状製品 → 糊粒		
遺物番号 382	発掘区	西 I54d → 西 I54a		
遺物番号 238	発掘区	西 C55b → 西 C55c		
遺物番号 353	遺物名称	二股杖 → 原木(丸木)		
	木取り	丸木 → 原木(丸木)		
229	表Ⅵ-13	遺物番号 332	発掘区	西 D56b → 西 D55c-D56b
		遺物番号 141	発掘区	東 B66bc → 東 B66abc
		遺物番号 ㉓-6	樹種	同定不能
		遺物番号 257	発掘区	西 F56b → 西 F56ab
		遺物番号 278	発掘区	西 F56d → 西 F56c

表 - 4 正誤表(4)

ユコナポシC15遺跡3) 北埋調報第146集 表等の訂正・追加

ページ	ページ内容	掲載No.	項目	誤→正・追加事項
127	表N-8	追加 遺物番号 9816		炭化材
133	表N-10	製品番号 1	遺物名称	機軸製品 → 車輻受台座輪
		製品番号 8	樹種	フリウツギ → クワ属
		製品番号 13	備考	フナ属 → 散孔材A
134	表N-12	遺物番号 4219	木取り	林酒造 → 榊酒造
		遺物番号 3974	樹種	1/12割 → 榎目
135	表N-13	遺物番号 4284	樹種	フナ属 → 散孔材A
137	表N-13		タイトル	トネリコ属 → トネリコ属(根)
171	表N-15	製品番号 4	遺物名称	榎木掻き部 → 車輻木掻き部
		製品番号 7	遺物名称	欠 → やす・欠
172	表N-16	製品番号 12	遺物名称	破片 → 破片
		製品番号 26	遺物名称	寄器片 → 割り鉢片
		製品番号 39	長さ	(11.0) → (11.1)
		製品番号 41	長さ	18.5 → 18.3
		製品番号 44	遺物名称	(両先口) → (両先中)
		製品番号 46	樹種	トネリコ属 → ツルツメドキ属
		製品番号 50	木取り	板目 → 1/4割
		製品番号 52	備考	榊酒造 → 榊酒造
		製品番号 53	備考	榊酒造 → 榊酒造
		製品番号 54	備考	榊酒造 → 榊酒造
		製品番号 55	備考	榊酒造 → 榊酒造
173	表N-17	製品番号 56	遺物名称	榊酒造状製品 → 榊
		製品番号 65	P159 実測図	修正後新図 当報告書掲載
			計測値	修正後計測値 当報告書掲載
		製品番号 67	P159 実測図	修正後新図 当報告書掲載
			計測値	修正後計測値 当報告書掲載
			備考	解7
174	表N-18	製品番号 72	備考	
		製品番号 74	遺物名称	角材加工製品 → 角材加工製品(樹材加工製品)
		製品番号 79	P161 実測図	修正後新図 当報告書掲載
			計測値	修正後計測値 当報告書掲載
		製品番号 91	幅	6.0 → 6.6
		製品番号 99	木取り	丸木(段木) → 段木(丸木)
		製品番号 104	木取り	丸木(段木) → 段木(丸木)
		製品番号 108	木取り	丸木(段木) → 段木(丸木)
		製品番号 116	木取り	丸木 → 心持
		製品番号 116	木取り	丸木(段木) → 段木(丸木)
		製品番号 117	木取り	丸木(段木) → 段木(丸木)
			P169 実測図	修正後新図 当報告書掲載
			計測値	修正後計測値 当報告書掲載
			木取り	丸木(段木) → 段木(丸木)
	木取り	丸木(段木) → 段木(丸木)		
	製品番号 119	長さ	(22.5) → 22.3	
175	表N-19	遺物番号 2396	木取り	1/8割 → 板目
177	表N-21	遺物番号 1110	木取り	1/4割 → 割材
178	表N-22	遺物番号 3885	木取り	1/12割 → 榎目
178	表N-22	遺物番号 999	樹種	ニレ属 → ニレ属(根)
180	表N-24	遺物番号 9883	樹種	ニレ属 → ニレ属(根)
183	表N-27	遺物番号 1061	樹種	フナ属 → 散孔材A
		遺物番号 1246	樹種	フナ属 → 散孔材A
		遺物番号 2017	樹種	フナ属 → 散孔材A
184	表N-28	遺物番号 2048	樹種	フナ属 → 散孔材A
		遺物番号 2369	樹種	フナ属 → 散孔材A
		遺物番号 4052	樹種	フナ属 → 散孔材A
187	表N-31	遺物番号 7508	樹種	フナ属 → 散孔材A
187	表N-31	遺物番号 1011	樹種	ニレ属 → ニレ属(根)
188	表N-32	遺物番号 3958	木取り	丸木 → 段木(丸木)
189	表N-33	遺物番号 4463	樹種	イヌエンジュ
			計測値	長さ 187・径 5.5
		遺物番号 4467	樹種	コナラ属
			計測値	長さ(125)・径 9.8
		遺物番号 ④368	樹種	ハンドイ属
			計測値	長さ 213・径 8.1
189	表N-33	遺物番号 ④614	樹種	トネリコ属
			計測値	長さ(212)・径 5.0
		遺物番号 ④695	樹種	トネリコ属
			計測値	長さ 153・径 14.6
193	表N-37	遺物番号 8361	樹種	トネリコ属 → トネリコ属(根)

## 1 既報告木製品データの訂正と追加

表 - 5 正誤表(5)

ユカンボシC15遺跡(4) 北埋調報第159集 第一分冊 表等の訂正・追加

ページ	ページ内容	掲載No.	項目	誤 → 正・追加事項
34	表II-1	B-33 柱-2	樹皮	○
48	表II-9	竪列3-1	径	8.0 → 9.5
			長さ	(84.8) → (85.8)
51	表II-10	竪列4-13	径	(9.1) → (9.5)
			径	(7.0) → (8.9)
	表II-11	竪列5-7	木取り	腹木 → 腹木(丸木)

ユカンボシC15遺跡(4) 北埋調報第159集 第二分冊 表等の訂正・追加 その1

ページ	ページ内容	掲載No.	項目	誤 → 正・追加事項	
16	本文		上から20行目	後ろの「幅広先木型」 → 「幅狭先木型」	
31	図IV-12	左下	スケール	1/3用 → 1/6用	
45	図IV-26	掲載番号 56	スケール	1/3用 → 1/6用	
168	図IV-143	右下の図	掲載番号 816	追加	
169	表N-1	掲載番号 26	厚さ	(2.30) → 2.30	
			重量	(214.60) → 乾重量(214.60)	
			木取り	丸木 → 心持	
			縮尺	1/6 → 1/8	
			縮尺	1/6 → 1/8	
			重量	620.00 → (520.00)	
170	表N-2	掲載番号 80	P49 実測図	修正後新図 当報告書掲載	
			計測値	修正後計測値 当報告書掲載	
			遺物名称	やす・矢 (木炭) → やす・矢	
			遺物名称	やす・矢 → 矢	
171	表N-3	掲載番号 108	厚さ	1.50 → 1.15	
			長さ	(88.50) → 88.50	
172	表N-4	掲載番号 163	遺物名称	挟付有孔柄 → 有孔柄	
			掲載番号 164	柄 → 有孔柄(有孔丸木材加工製品)	
			掲載番号 166	柄 → 挟付有孔柄(有孔丸木材加工製品)	
			掲載番号 167	柄 → 有孔柄(有孔丸木材加工製品)	
			掲載番号 185	P68 実測図	修正後新図 当報告書掲載
173	表N-5	掲載番号 230	計測値	修正後計測値 当報告書掲載	
			掲載番号 238	樹皮	○
			掲載番号 239	長さ	144.50 → 114.50
			掲載番号 254	長さ	(11.70) → 117.50
174	表N-6	掲載番号 280	長さ	16.80 → (16.80)	
			掲載番号 298	重量	(560.00) → 乾重量(211.20)
176	表N-8	掲載番号 385	重量	(12.60) → (12.80)	
			掲載番号 393	重量	4.10 → 14.10
177	表N-9	掲載番号 399	樹跡	○	
			掲載番号 434	遺物名称	櫛鏡具 → 扁台析
			掲載番号 438	層位	I 2層に変更
			掲載番号 439	遺物名称	イクバスイ → 竊伏入柄材加工製品
			掲載番号 444	遺物名称	イクバスイ → 両端伏入柄材加工製品
			掲載番号 459	縮尺	1/3 → 1/6
			掲載番号 462~469	樹種	タラノキ炭 → タラノキ
			掲載番号 479	遺物名称	縄器製炭製品 → 縄器製炭製品
			掲載番号 480	遺物名称	心持材加工製品 → 短心持材加工製品
			178	表N-10	掲載番号 481~483
遺物名称	丸木材両端加工製品 → 短枝材両端加工製品				
長さ	47.15 → (47.15)				
		掲載番号 503	重量	348.80 → (348.80)	

表 - 6 正誤表(6)

ユカンボシC15遺跡(4) 北埋調報第159集 第二分冊 表等の訂正・追加 その2

ページ	ページ内容	掲載No.	項目	誤 → 正・追加事項
179	表N-11	掲載番号 516	遺物番号	2508を削除
			備考	1・4・5・6・8・9は処理後重量
		掲載番号 516-1	遺物番号	2504
		掲載番号516-3と4	遺物番号	2505
		掲載番号516-2と5	遺物番号	2506
		掲載番号516-7	遺物番号	2507
		掲載番号516-6	遺物番号	2509
		掲載番号516-10と9	遺物番号	2513
		掲載番号516-8	遺物番号	2514
		掲載番号516-2と5	備考	同一破片で2は処理前、5は処理後実測
		掲載番号516-3と4	備考	同一破片で3は処理前、4は処理後実測
		掲載番号516-10と9	備考	同一破片で10は処理前、9は処理後実測
		掲載番号 516-1	計測値	長さ(12.45) → (12.5) 乾重量(3.3) → 乾重量(4.4)
		掲載番号 516-2	計測値	長さ 幅 厚 (15.23) 1.9 1.8 → (15.8) 2.0 1.85
		掲載番号 516-4	計測値	長さ 厚 (19.65) 1.6 → (19.1) 1.7
		掲載番号 516-5	計測値	乾重量(24.9) → 乾重量(25.4)
		掲載番号 516-6	計測値	長さ(15.15) → (15.6)
		掲載番号 516-6	計測値	長さ 厚 (12.90) 1.3 → (12.8) 1.1
		掲載番号 516-7	計測値	乾重量(6.9) → 乾重量(10.2)
		掲載番号 516-7	計測値	長さ 幅 厚 (9.15) 1.2 0.5 → 9.0 1.4 0.7
		掲載番号 516-8	計測値	長さ(10.88) → (10.6) 乾重量(4.4) → 乾重量(3.3)
		掲載番号 516-9	計測値	長さ 幅 厚 (9.00) 1.7 1.0 → (8.9) 1.6 1.1
掲載番号 516-10	計測値	長さ 幅 (9.15) 1.8 → (9.0) 1.7		
掲載番号 519	痕跡	なし 空欄に		
掲載番号 521	長さ	1.35 → 16.00		
掲載番号 525	長さ	14.70 → 14.30		
掲載番号 527	遺物名称	有孔細板加工製品 → 固定補助具(有孔細板加工製品)		
掲載番号 531	遺物名称	溝付板材加工製品 → 溝付両先楔(溝付板材加工製品)		
掲載番号 561	長さ	(57.20) → 57.20		
掲載番号 591	調査区	②B22b → ②B22c		
掲載番号 598	幅	(2.80) → (1.95)		
掲載番号 605	備考	613(遺物番号④-687)と同一個体 接合はせず		
掲載番号 612	調査区	②123a → ②125a		
181	表N-13	掲載番号 613	調査区	②124a → ④118a
			備考	605(遺物番号④-688)と同一個体 接合はせず
掲載番号 614	調査区	②125a → ②134b		
182	表N-14	掲載番号 664	長さ	60.80 → 60.00
		掲載番号 667	樹種	○
掲載番号 677	樹種	タラノキ属 → タラノキ		
183	表N-15	掲載番号 733	幅	(10.60) → 10.60
		掲載番号 782	長さ	(68.60) → (68.80)
184	表N-16	掲載番号 816	重量	(343.50) → (9.00)
			底板 → 底板(種?)	
185	表N-17左	遺物番号 9782	遺物名称	木取り
			板目	板目
			板目 → 1/8割	
	遺物番号 9955	計測値	幅 4.0 厚さ 0.3	
	遺物番号 8562	計測値	板目 幅 1.9 厚さ 0.8	
表N-17右	遺物番号 4179	計測値	厚さ 0.6	
	遺物番号 5184	計測値	幅 1.6 厚さ 0.7	
	遺物番号 9492	遺物名称	編組板 → 編組板(編組材加工製品)	
	遺物番号 4688	計測値	幅 2.7 厚さ 0.25	
186	表N-18左	遺物番号 2415以下21点	遺物名称	樽酒甕状製品 → 樽酒甕状製品
		遺物番号 5036	木取り	板目
			計測値	幅 2.5 厚さ 0.8
		遺物番号 5692	木取り	1/6割 → 板目
		遺物番号 6500	木取り	1/6割 → 板目
	表N-18右	遺物番号 6798	計測値	厚さ 1.0
		遺物番号 6843	計測値	幅 2.6 厚さ 0.35
		遺物番号 3869	計測値	幅 1.5
			木取り	1/8割
			計測値	幅 2.5 厚さ 1.1

## 1 既報告木製品データの訂正と追加

表 - 7 正誤表(7)

ユカンボシC15遺跡(4) 北埋調報第159集 第二分冊 表等の訂正・追加 その3

ページ	ページ内容	掲載地	項目	誤 → 正・追加事項
187	表N-19左	遺物番号 746	遺物名称	丸木材両端加工製品 → 短丸木材両端加工製品
		遺物番号 3883	計測値	幅 2.0 厚さ 0.45
188	表N-20左	遺物番号 3893	計測値	幅 2.2 厚さ 0.4
	表N-20右	遺物番号 4869	計測値	幅 1.1 厚さ 0.4
	表N-22左	遺物番号 5042	計測値	幅 (1.7) 厚さ 0.8
190	表N-22右	遺物番号 4352	計測値	厚さ 1.3
		遺物番号 5328	計測値	幅 (3.4) 厚さ 1.3
		遺物番号 8538	計測値	幅 5.0 厚さ 0.9
191	表N-23左	遺物番号 (0750)	計測値	厚さ 0.8
		遺物番号 (0793)	計測値	厚さ 0.9
	表N-23右	遺物番号 2261	樹種	タラノキ属 → タラノキ
192	表N-24右	遺物番号 4870	遺物名称	筒材 → 筒形材加工製品
		遺物番号 5839	木取り	幅 1/4弱
		遺物番号 (0426)	樹種	タラノキ属 → タラノキ
193	表N-25右	遺物番号 (0682)	木取り	1/4弱
		遺物番号 2323	計測値	幅 (1.5)
194	表N-26左	遺物番号 (0662)	樹種	タラノキ属 → タラノキ
195	表N-27右	遺物番号 2223	計測値	径 1.4
196	表N-28左	遺物番号 9237	樹種	ガマズミ属 → ミツバウツギ
197	表N-29左	遺物番号 596	備考	削除 空欄に
198	表N-30左	遺物番号 901	樹種	ハンノキ → ハンノキ属
		遺物番号 3308	樹種	タラノキ属 → タラノキ
199	表N-31左	遺物番号 3347	樹種	タラノキ属 → タラノキ
		遺物番号 4818	樹種	タラノキ属 → タラノキ
	表N-31右	遺物番号 5421	樹種	タラノキ属 → タラノキ
		遺物番号 7355	樹種	タラノキ属 → タラノキ
200	表N-32左	遺物番号 7522	樹種	タラノキ属 → タラノキ
		遺物番号 7542	樹種	タラノキ属 → タラノキ
201	表N-33左	遺物番号 8551	樹種	タラノキ属 → タラノキ
	表N-33右	遺物番号 9985	調査区	②123d・124a → ②123d・124a
202	表N-34左	遺物番号 (0658)	樹種	タラノキ属 → タラノキ
		遺物番号 1043	樹種	トネリコ属 → トネリコ属(根)
203	表N-35右	遺物番号 7585	樹種	タラノキ属 → タラノキ
204	表N-36左	遺物番号 7093	樹種	タラノキ属 → タラノキ
205	表N-36右	遺物番号 6643	計測値	計測不明
	表N-37右	遺物番号 5426	樹種	タラノキ属 → タラノキ
	表N-38左	遺物番号 2787	計測値	幅 1.9
		遺物番号 5282	計測値	幅 2.3
206	表N-38右	遺物番号 5297	樹種	タラノキ属 → タラノキ
		遺物番号 5495	計測値	幅 1.7~3.0
		遺物番号 5701	計測値	幅 3.4
		遺物番号 5822	樹種	タラノキ属 → タラノキ
		遺物番号 6542	計測値	幅 1.3
		遺物番号 6568	計測値	幅 4.3
		遺物番号 6736	計測値	幅 6.3
207	表N-39左	遺物番号 6736	計測値	幅 2.6
		遺物番号 6828	計測値	幅 1.2
		遺物番号 6828	計測値	幅 2.2
		遺物番号 625	計測値	幅 2.9
209	表N-41左	遺物番号 633	計測値	幅 2.7

表 - 8 正誤表(6)

ユカンポシC15遺跡⑤ 北埋調報第176集 本文編 表等の訂正・追加 その1

ページ	ページ内容	掲載No.	項目	誤 → 正・追加事項
	例言	11	協力者	藤原芳孝 → 藤原芳秀 失礼致しました
40	本文		下から2行目	アスナロ材 をどろ
56	表Ⅲ-9		スケール	1/3用 → 1/6用
80	表Ⅲ-32	掲載番号 127-129	廊下区画線	127・128間の廊下区画線を128-129に移動
160	表Ⅲ-1	掲載番号 4	重量	(1435.00) → 乾重量(668.30)
161	表Ⅲ-2	掲載番号 79	長さ	(9.30) → 9.30
162	表Ⅲ-3	掲載番号 160	P86 実測図	修正後新図 当報告書掲載
			計測値	修正後計測値 当報告書掲載
		掲載番号 161	遺物名称	駒 → 出り駒
		掲載番号 165	遺物名称	桶底 → 桶桶底
		掲載番号 167	長さ	15.90 → (15.90)
			幅	(7.00) → 7.00
163	表Ⅲ-4		遺物名称	漆木碗
		掲載番号 185	調査区	2X23c
			遺物番号	4498-4499
		掲載番号 195	木取り	堅木 → 榿木
			長さ	16.05 → 19.70
			幅	1.80 → 1.55
164	表Ⅲ-2	掲載番号 210	重量	13.60 → 28.20
			備考	祭祀用具
165	表Ⅲ-6	掲載番号 269	長さ	(7.35) → 7.35
		掲載番号 282	厚さ	2.60 → 2.50
		掲載番号 346	遺物名称	扶付丸木材加工製品 → 扶付短丸木材加工製品
			木取り	丸木 → 榿木
		掲載番号 347	遺物名称	有孔丸木材加工製品 → 有孔短丸木材加工製品
			木取り	榿目 → 榿木
		掲載番号 348	遺物名称	心得材加工製品 → 両端切込付短心得材加工製品
		掲載番号 349	遺物名称	扶付心得材加工製品 → 扶付短心得材加工製品
		掲載番号 350	遺物名称	棧材加工製品 → 短棧材加工製品
		掲載番号 351	遺物名称	丸木材加工製品 → 短丸木材加工製品
		掲載番号 352	遺物名称	丸木材加工製品 → 短丸木材加工製品
		掲載番号 358	木取り	心得 → 丸木
		掲載番号 361	長さ	9.30 → 59.30
		掲載番号 362	遺物名称	扶付有孔丸木材加工製品 → 両端切込付有孔短丸木材加工製品
		掲載番号 363	遺物名称	扶付有孔丸木材加工製品 → 両端切込付有孔短丸木材加工製品
		掲載番号 367	備考	跡?
		掲載番号 377	遺物名称	両端扶付別材加工製品 → 両端扶入別材加工製品
		掲載番号 378	遺物名称	両端扶付別材加工製品 → 端扶入別材加工製品
		掲載番号 402	板材加工製品	板材加工製品 → 榿(両付板材加工製品)
		掲載番号 408	幅	1/3 → 1/6
168	表Ⅲ-9	掲載番号 414	幅	1/3 → 1/6
		掲載番号 443	厚さ	3.00 → 0.30
169	表Ⅲ-10	掲載番号 470	幅	1/6 → 1/3
		掲載番号 509	重量	(895.00) → (1300.00)
			遺物名称	板
			調査区	2X25cd
			遺物番号	5288-5287
171	表Ⅲ-12	掲載番号 590	長さ	12.50 → 12.05
	表Ⅲ-13左	遺物番号 66	遺物名称	榿木桶部 → 厚榿木桶部
		遺物番号 1290以下13点	遺物名称	漆器器状製品 → 漆器器状製品
	表Ⅲ-13右	遺物番号 717	遺物名称	棧材加工製品 → 扶付棧材加工製品
		遺物番号 3593	遺物名称	板材加工製品 → 扶付板材加工製品
179	表Ⅲ-20右	遺物番号 75下段	計測値と備考の内容を樹種と計測値の段にすらすら	
			遺物名称	棧材 → 切片
		遺物番号 4896	木取り	空欄に
			計測値	径2.4 → 幅2.5
			遺物名称	棧材 → 切片
		遺物番号 4899	木取り	空欄に
			計測値	径2.5 → 幅2.7
182	表Ⅲ-23左	遺物番号 9915	備考	H-31柱穴8 追加
		遺物番号 6857	備考	H-31 → H-31柱穴8
183	表Ⅲ-24右	遺物番号 6858	備考	H-31柱穴12 → H-31柱穴6
		遺物番号 6856	備考	H-31 → H-31柱
184	表Ⅲ-25左	遺物番号 6860	備考	H-31柱穴15 → H-31柱穴7
	表Ⅲ-26左	遺物番号 7111	計測値と備考の内容を樹種と計測値の段にすらすら	
	表Ⅲ-26右	遺物番号 8851	計測値と備考の内容を樹種と計測値の段にすらすら	

## 1 既報告木製品データの訂正と追加

表 - 9 正誤表(9)

ユカンボシC15遺跡(5) 北埋調報第176集 本文編 表等の訂正・追加 その2

ページ	ページ内容	掲載№	項目	誤 → 正・追加事項
243	図N-43	掲載番号 210 掲載番号 5	実測図 木取り	上下逆 堅木 → 産木
244	表N-1	掲載番号 6	P204 実測図 長さ	修正後新図 当報告書掲載 修正後計測値 当報告書掲載
245	表N-2	掲載番号 空欄 (遺物番号 262) 掲載番号 55 掲載番号 81 掲載番号 113	計測値 実測図 遺物名称 遺物名称 備考	曲物 復元口径約40 高さ4.8 板厚0.45cm 当報告書掲載 帯しめ差込み具(捺付機) → 両先楔(帯付しめ差込み具) 洋蓋 → 漆桶蓋 跡?
246	表N-3	掲載番号 114 掲載番号 115 掲載番号 116 掲載番号 138	遺物名称 遺物名称 遺物名称 重量	丸木材両端加工製品 → 型枝材両端加工製品 丸木材両端加工製品 → 型丸木材両端加工製品 両端切込付丸木材加工製品 → 両端切込付型丸木材加工製品 (242.50) → 重量(242.50)
247	表N-4	掲載番号 159 掲載番号 173	P235 実測図 長さ P237 実測図 長さ	修正後新図 当報告書掲載 修正後計測値 当報告書掲載 修正後新図 当報告書掲載 修正後計測値 当報告書掲載
248	表N-5	掲載番号 207	辨別	○
249	表N-6左	遺物番号 6706以下4点 追加 追加 遺物番号 149	遺物名称 遺物番号 遺物名称 調査区 木取り 樹種 計測値 備考	樽酒瓶状製品 → 樽酒瓶状製品 149 榎目板 ②K28b 榎目 ハシドイ属 幅0.9cm 13
	表N-6右	遺物番号 1284	遺物名称 木取り	型材 → 榎別材 不明 → 榎別
250	表N-7右	遺物番号 597・598	行間ライン	同一個体のため行間ライン削除
253	表N-10右	遺物番号 6649 遺物番号 6859	樹種 層位 備考	不明 → トネリコ属 I 32 項目全体を P183 表III-24右に移動 H-31柱穴18 → H-31柱穴3
264	表V-1	掲載番号 3	遺物名称	鈎 → 吊り鈎
265	表V-2左	掲載番号 4 掲載番号 (4273)	遺物名称 樹種	柄 → 挟付柄 トネリコ属 → ハンノキ属
270	表V-1	掲載番号 1 掲載番号 4	長さ 樹皮	16.10 → (16.10) ○

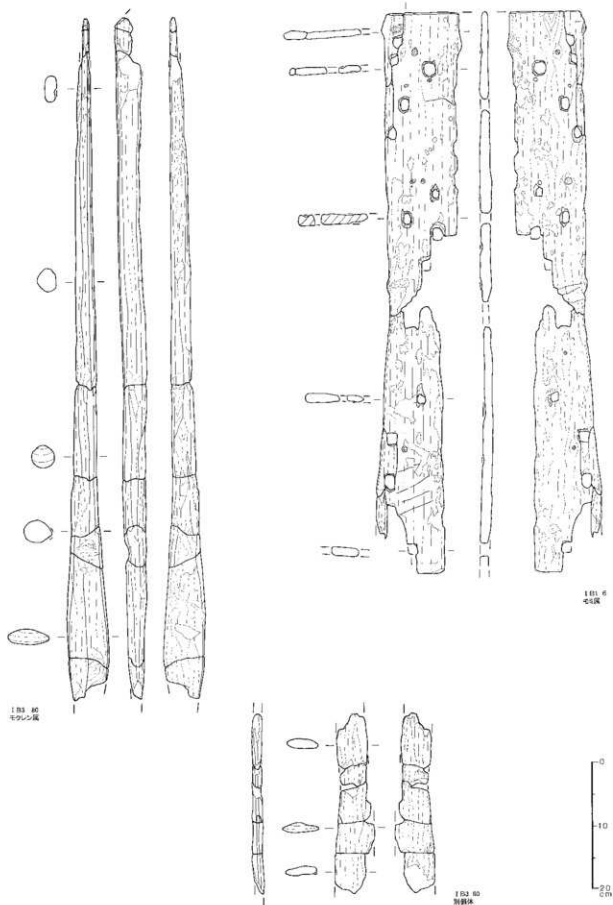


図 - 1 修正木製品(1)



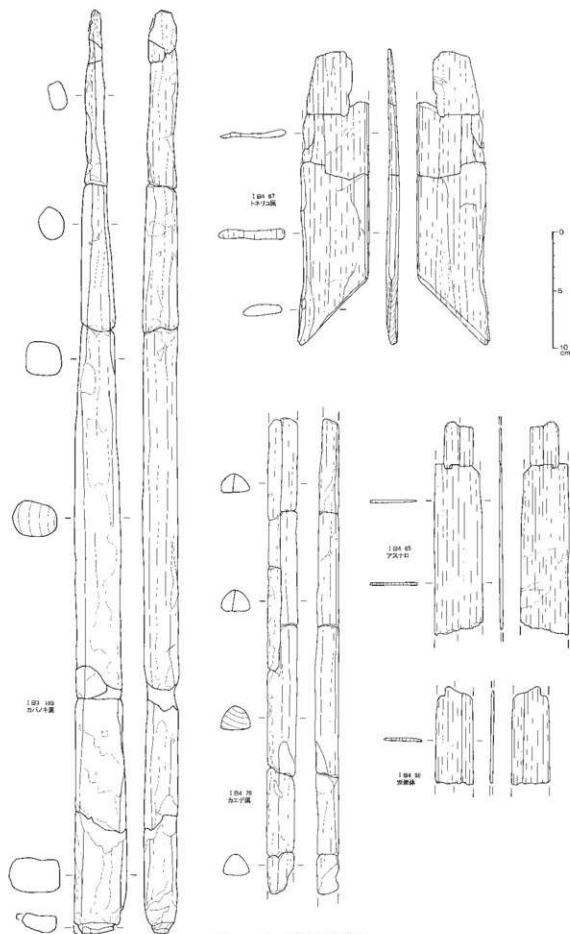


図 - 2 修正木製品(2)

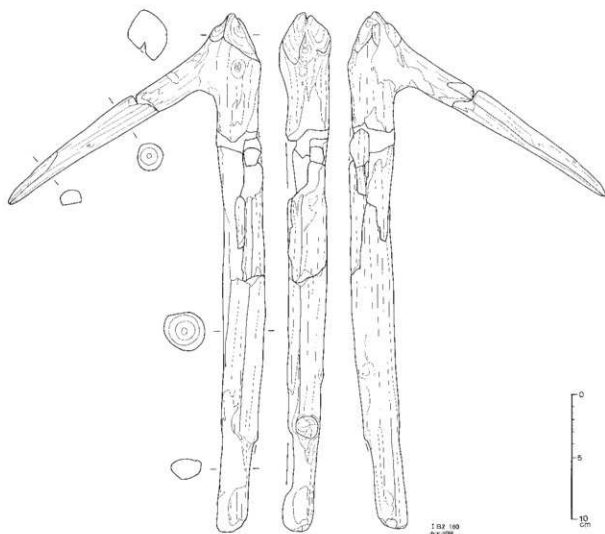


図 - 3 修正木製品(3)

表 - 10 図修正木製品

層一掲載No.	製品名	修正前の			修正後変更計測値
		報告書No.	表(ページとNo.)	図(ページとNo.)	
I B 4 - 65	桎目板	(3) 北理調報146集	P173・表IV-17	P159・図IV-36	長さ(18.2)cm/乾重量(7.9)g
				(別個体)	長さ(8.2)cm/幅3.2cm/厚さ0.3cm
I B 4 - 67	桎目板加工製品	(3) 北理調報146集	P173・表IV-17	P159・図IV-36	乾重量(33.0)g
				(別個体)	長さ・幅・厚さに変化なし
I B 4 - 79	割材加工製品	(3) 北理調報146集	P173・表IV-17	P161・図IV-38	乾重量(61.3)g
I B 4 - 118	股木杭	(3) 北理調報146集	P174・表IV-18	P169・図IV-46	股木幅14.6cm/乾重量(890.0)g
				(別個体)	長さ(110.3)cm/乾重量(760.0)g
I B 3 - 80	早樫	(4) 北理調報159集	P170・表IV-2	P 49・図IV-30	長さ(28.3)cm/幅6.0cm/厚さ1.7cm
				(別個体)	長さ(78.7)cm/乾重量(430.0)g
I B 3 - 185	柄	(4) 北理調報159集	P172・表IV-4	P 68・図IV-49	長さ(78.7)cm/乾重量(430.0)g
I B 2 - 160	鈎鉋	(5) 北理調報176集	P162・表III-3	P 86・図III-38	厚さ4.00cm/乾重量(163.8)g
I B 1 - 6	舷側板	(5) 北理調報176集	P244・表IV-1	P204・図IV-9	幅12.3cm/重量(880)g
I B 1 - 159	柱	(5) 北理調報176集	P247・表IV-4	P235・図IV-37	長さ(258.6)cm
I B 1 - 173	建材	(5) 北理調報176集	P247・表IV-4	P237・図IV-38	長さcm
杭列9-20	杭	(1) 北理調報128集	P 51・表IV-3	P 48・図IV-5	長さ(39.0)cm/径6.7cm/乾重量(215.0)g

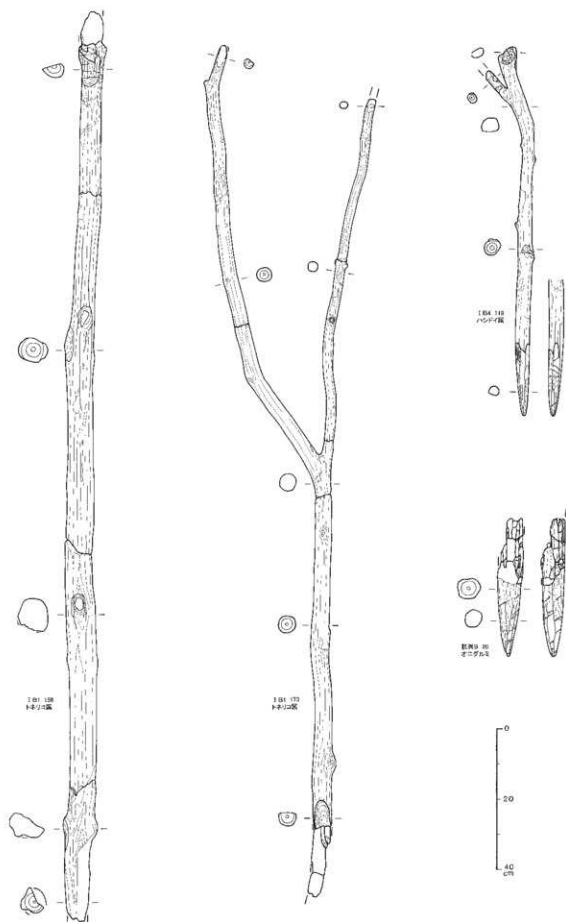


図 - 4 修正木製品(4)

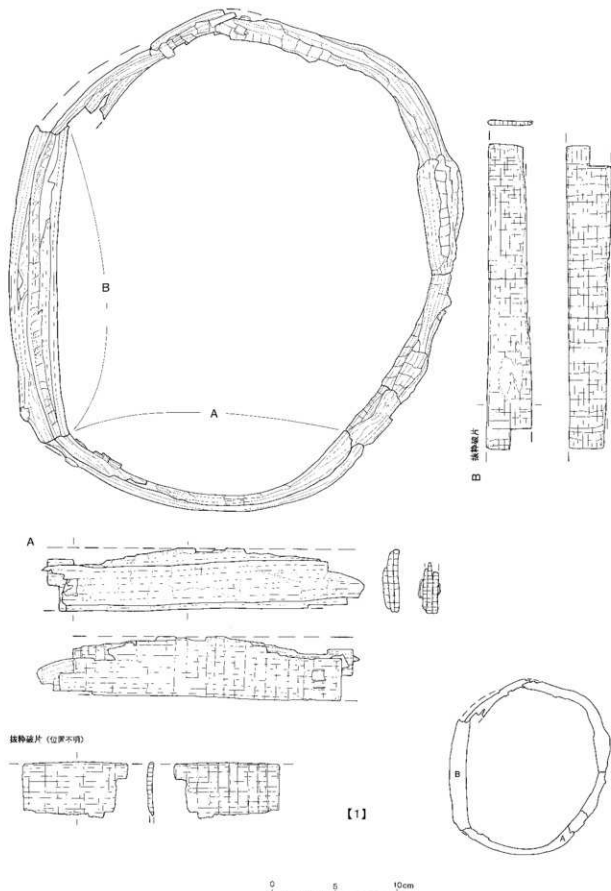


図 - 5 追加報告木製品(1)

1 既報告木製品データの訂正と追加

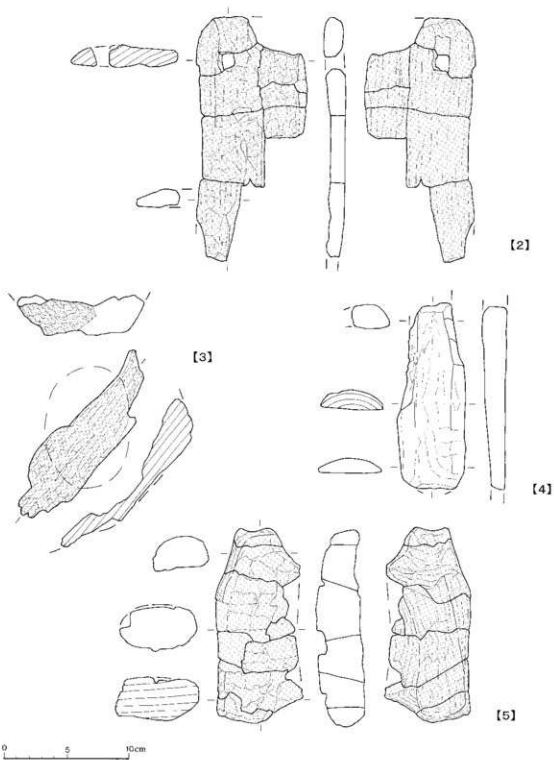


図 - 6 追加報告木製品(2)

表 - 11 追加報告木製品

掲載番号	遺物名称	調査区	層位	遺物番号	木取り	使用	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	縮尺	備考
(1)	曲物	②N28a	1B1	262	柱目		アスナロ	径39.5	高4.8	0.45	(125.9)	1/3	報告書(5)表IV-2
(2)	有孔板	①F56b	1B1	395	柱目	○	トネリコ属	(19.3)	(8.5)	1.7	(25.0)	1/3	炭化物水洗で抽出
(3)	網の物?	①E56abd	1B1	396	横木	○	コナラ属	(13.1)	(9.9)	(2.8)	(22.0)	1/3	#
(4)	筒状製品	②C32b	1B1	10012	筒割		トネリコ属	(14.6)	5.3	1.9	(20.7)	1/3	1B #
(5)	板材加工製品	②D40c	1B3	10013	板目	○	トネリコ属	15.4	6.7	3.5	(77.2)	1/3	#

## 2 木製品追加報告(図 - 5・6, 表 - 11, 図版 - 5・6)

図 - 5 - 【1】は⑤ B1 報告分で表には掲載したが、土ごと取上げて掘り出していなかったため、図の掲載ができずにいた曲物である。5年かけてゆっくりと土とともに自然乾燥させ取り出した。底は失われているが、胴板はほぼ完全に残存している。アスナ口の柎目板を三枚重ねて樹皮帯で綴じている。縦方向の毛引き線がほぼ7~9mm間隔で入っている。径約40cmと大きい割に高さ約5cmと低い。容器ではなく、篩か蒸し器の重ね輪と思われる。

図 - 6の4点はそれぞれまとめて取上げた炭化物の水洗後、形状の認識できるものを図化し掲載した。【2】は隅に角孔が穿たれた板。舷側板の可能性もある。【3】は横木取りした割り鉢の底部と思われる炭化片。【4】は偏削した材の両側の一部を削り加工した材。筧の未製品と思われる。炭化物と同時に取上げられたが炭化していない。【5】は緩いツノ状の突起を持った、厚い板材を加工した製品。接合できなかったが、同所から類似した炭化破片が数多く出土しており、同様の製品が数個まとまって存在していたことを示している。

## 3 遺構出土木製品の取りまとめ(図 - 7, 表 - 12・13, 図版 - 7)

木製品が出土した遺構は、杭列・建物跡・竪穴等である。低湿部や台地部からの移行斜面では表土層で杭列-1・7~9、B1層で杭列-3・5・6、B2層で杭列-2・12と建物跡H-33、B3層で杭列-4・11、B4層で杭列-10である。また、台地部ではB1層相当で建物跡H-35、B2層相当で建物跡H-31・34・墓AP-3、B3層相当で竪穴H-13がある。杭列・建物跡・竪穴からの木製品はいずれもその骨格である、柱や杭の先端部がほとんどだが、区表土杭列でこれに伴う製品類が出土している。墓AP-3からは漆膜が検出され、漆塗椀が副葬されていたものとみえる。他にAP-3やAP-1・X-2・P-12・P-27からは柄や鞘の木質が残存した刀や刀子などが出土しているが、これらは鉄製品で扱い報告した。H-13床面の炭化材も木製品は付していない。

表 - 12は、図 - 7に図示したB1・2層相当の建物跡杭・柱の一覧で、図の【1】~【4】は図初掲載のH-31・35のもの、【5】~【17】は既掲載のH-33・34のものを、すべてスケール $\frac{1}{2}$ に統一して示した。表 - 13には、既報の11(3)(4)(5)に分散して報告した遺構出土の木製品を取りまとめた。(三浦)

表 - 12 H-31・33・34・35 木製品一覧

掲載番号	遺構名・柱穴No	調査区	層位	遺物番号	未取り	樹皮	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	縮尺	備考
11	H-31	②O24c	I B2	6856	丸木	○	サクラ属	(28.6)	2.8	2.6	(129.0)	1/8	図初掲載
12	H-31 柱穴3	②N25c	I B2	6859	丸木	○	ハンドイ属	(14.7)	5.8	4.2	(77.7)	1/8	図初掲載
13	H-35 HP-1	②MRb-N8d	I B1	6648	1/4割		コナラ属	(12.3)	5.6	4.9	(105.1)	1/8	図初掲載
14	H-35 HP-2	②N8a	I B1	6647	1/4割		コナラ属	(22.6)	6.9	5.5	(332.2)	1/8	図初掲載
15	H-33 柱-1	②L25d	I B2	3765	丸木	○	ヤナギ属	(27.8)	6.8	6.0	(470.0)	1/8	報告(4) 図Ⅱ-3
16	H-33 柱-2	②K26b	I B2	3493	丸木	○	ハンノキ属	(28.4)	6.0	5.1	(413.6)	1/8	報告(4) 図Ⅱ-3
17	H-33 柱-3	②K26c	I B2	3517	丸木	○	サクラ属	(34.9)	4.3	4.0	(203.0)	1/8	報告(4) 図Ⅱ-3
18	H-33 柱-4	②L26d	I B2	2966	丸木	○	トネリコ属	(50.4)	4.8	4.8	(560.0)	1/8	報告(4) 図Ⅱ-3
19	H-33 柱-5	②L26a	I B2	2543	丸木	○	ヤナギ属	(21.3)	4.5	4.5	(171.7)	1/8	報告(4) 図Ⅱ-3
20	H-33 柱-6	②L26a	I B2	2542	1/4割		ヤナギ属	(29.7)	6.4	4.6	(252.6)	1/8	報告(4) 図Ⅱ-3
21	H-33 柱-7	②L26a	I B2	2541	1/4割		ヤナギ属	(20.6)	4.1	4.0	(134.1)	1/8	報告(4) 図Ⅱ-3
22	H-34 柱-1	③S28b	I B2	12	丸木		オニグルミ	(32.85)	(9.65)	7.0	(1010.0)	1/8	報告(4) 図Ⅱ-4
23	H-34 柱-2	③S28a	I B2	13	1/4割		ハンドイ属	(47.85)	9.9	8.8	(1900.0)	1/8	報告(4) 図Ⅱ-4
24	H-34 柱-3	③S28d	I B2	14	丸木		ハンドイ属	(39.85)	(8.8)	10.0	(1520.0)	1/8	報告(4) 図Ⅱ-4
25	H-34 柱-4	③S28d	I B2	15	丸木		オニグルミ	(36.80)	8.0	6.5	(1090.0)	1/8	報告(4) 図Ⅱ-4
26	H-34 柱-5	③S28d	I B2	16	丸木		オニグルミ	(41.80)	10.3	9.1	(1910.0)	1/8	報告(4) 図Ⅱ-4
27	H-34 柱-6	③S28c	I B2	17	丸木		キハダ属	(29.15)	(8.15)	(7.0)	(690.0)	1/8	報告(4) 図Ⅱ-4

3 遺構出土木製品の取りまとめ

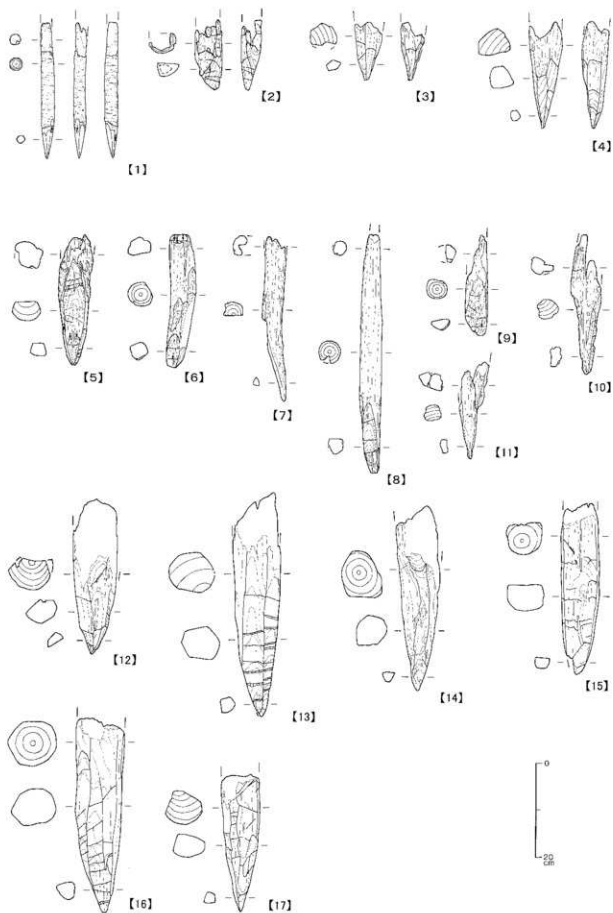


図 - 7 遺構の柱・杭

表 - 13 既報選構出土木製品一覧

報告書	遺構名	製品名	遺物番号(取土地)	報告ページと題	報告表ページと題	備考	
北地調報128集 ユカンボンシC15 遺跡(1)	杭列-7	表土	杭・細杭・作業台・板・有孔板 加工製品・丸木材	①区 105~111・156~173・391~393・397~ 400 及び401~426のうち10点	P46・47 図Ⅳ-3・4 P49 表Ⅳ-1	杭列7-1~38・a~d 杭列-8の杭と一部混合	
	杭列-8	表土	杭・桁(早樺樹?)・ 早樺木掻き部	①区 147~155・188~192・221・222 及び401~426のうち16点	P47・48 図Ⅳ-4・5 P50 表Ⅳ-2	杭列8-1~32・a・b 杭列-1の杭と一部混合	
	杭列-9	表土	杭	①区 116・182~187・183~210・212~216	P48 図Ⅳ-5 P51 表Ⅳ-3	杭列9-1~3・5~7・13~18・20・21・ 23~25・27~30・32~36・38~41	
	北地調報146集 ユカンボンシC15 遺跡(3)	AP-3	埴土0層漆喰	②区 4699	P52 図Ⅱ-17 P53 表Ⅱ-18	風雨剥品 漆喰のみ 1点相当	
		杭列-10	I B4 杭	②区 8271・8272・8275	P106 図Ⅳ-2 P171 表Ⅳ-14	杭列10-6~8	
		H-33	I B2 柱・杭	②区 2541~2543・2566・3493・3517・3785	P35 図Ⅱ-3 P34 表Ⅱ-1	柱-1~7	
	北地調報159集 ユカンボンシC15 遺跡(4) 第一分冊	H-34	I B2 杭	④区 12~17	P36 図Ⅱ-4 P36 表Ⅱ-2	柱-1~6	
		杭列-1	表土	杭・細杭	②区 4991~4999	P45 図Ⅱ-10 P46 表Ⅱ-7	杭列1-1~9
		杭列-2	I B2 杭・柱	②区 5601~5607	P46 図Ⅱ-11 P46 表Ⅱ-8	杭列2-1~7	
		杭列-3	I B1 杭・柱	②区 526・535~538	P49 図Ⅱ-13 P48 表Ⅱ-9	杭列3-1~5	
		杭列-4	I B3 杭・柱	②区 406~412・540~544	P51 図Ⅱ-15 P51 表Ⅱ-10	杭列4-1~3・6・7・11~14・17~19	
		杭列-5	I B1 杭・柱・新材	④区 19~26・1067・1068	P52 図Ⅱ-16 P51 表Ⅱ-11	杭列5-1~10	
杭列-6		I B1 柱	④区 938~941	P53 表Ⅱ-12	杭列6-1~4		
杭列-11		I B3 杭・細杭	②区 7780・8342~8345・9681・9682	P54 図Ⅱ-18 P53 表Ⅱ-13	杭列11-1~7		
杭列-12		I B2 杭・細杭	②区 2726・3134・4846~4848・4851~ 4854・4835~4941	P56 図Ⅱ-19 P55 表Ⅱ-14	杭列12-1~16		
北地調報159集 (4) 第二分冊		H-13	I B3 柱	②区 6643	((3)P33 図Ⅱ-2) P204 表Ⅳ-36右	柱-13 柱六4	
		北地調報176集 ユカンボンシC15 遺跡(5)	H-31	I B2 杭・枝材	②区 6856~6860・9915	P183 表Ⅲ-24右 P184 表Ⅲ-25左 P253 表Ⅳ-10右 No.6859 扉付 I B2に修正	柱3-6・7・8・枝 No.6859 扉付 I B2に修正
			H-35	I B1 杭	②区 6647~6649	((3)P45 図Ⅱ-12) P253 表Ⅳ-10右	柱-35 附-1~3



#### 4 木製品の樹種同定

#### 4 木製品の樹種同定

##### (1) 樹種識別結果の追加

##### 1 試料及び識別方法

炭化物水洗により検出された木製品4点について樹種の識別を行なった。このうち1点は生物顕微鏡観察、他3点は完全に炭化していたため走査電子顕微鏡観察により樹種識別を行なった。生物顕微鏡、走査電子顕微鏡用試料の作製方法及び識別方法については、『千歳市 ユカンボシC15遺跡①』北埋調報128集に同じである。

##### 2 識別結果(図版 - 8)

コナラ属が1点、トネリコ属が3点であり、それらは以下のような組織構造的な特徴を根拠に、樹種の同定をした。

コナラ属 *Quercus* (ぶな科 FAGACEAE) 顕微鏡写真 1

環孔材である。孔圏部の大血管にはチロースが認められ、周囲には周囲仮道管が存在する。孔圏外の道管は、やや放射状に配列することがある。放射組織は単列と広放射組織からなり同性である。道管要素は単せん孔をもつ。

トネリコ属 *Fraxinus* (もくせい科 OLEACEAE) 顕微鏡写真 2・3

環孔材である。孔圏部では単独または2個が放射方向に複合した大きな道管が、1〜3列並ぶ。孔圏外では急激に小さくなり、単独ないし2〜4個が放射方向に複合して散在する。放射組織は1〜3細胞幅、10細胞高ほどで比較的均一であり、同性である。道管要素は単せん孔をもつ。軸方向柔組織は周囲状で、晩材部では翼状ないし連合翼状となる。道管放射組織間壁孔は、非常に小さく密に存在する。らせん肥厚は存在しない。

##### (2) 樹種識別結果の訂正

ここでは、すでに刊行された『千歳市 ユカンボシC15遺跡①』から『千歳市 ユカンボシC15遺跡⑤』において報告した樹種識別結果の訂正をまとめて記載した。さらに層位別樹種同定結果の集計も新たに、層位変更の確認や遺物の接合などによる個体数の確認を行ない、最終的な集計を表 - 14 に掲載した。

『千歳市 ユカンボシC15遺跡①』北埋調報128集の訂正

製品番号 杭列 8 - a (区 遺物番号221) ヒノキ属?アスナロ属?をアスナロに

製品番号5 (区 遺物番号 5) アジサイ属をノリウツギに

製品番号8 (区 遺物番号133) アジサイ属をノリウツギに

製品番号9 (区 遺物番号243) アジサイ属をノリウツギに

製品番号10 (区 遺物番号 27) アジサイ属をノリウツギに

製品番号11 (区 遺物番号180) アジサイ属をノリウツギに

製品番号20 (区 遺物番号283) ハギ属をイヌエンジュに

製品番号21 (区 遺物番号 16) アジサイ属をノリウツギに

製品番号22 (区 遺物番号117) アジサイ属をノリウツギに

製品番号28 (区 遺物番号348) アジサイ属をノリウツギに

製品番号33 (区 遺物番号340) ヒノキ属?アスナロ属?をアスナロに

製品番号36 (区 遺物番号385) ヒノキ属?アスナロ属?をアスナロに

製品番号58 (区 遺物番号 99) アジサイ属をノリウツギに

製品番号60 ( 区 遺物番号118 ) ヨウラクツツジ属?を散孔材Cに

- 区 遺物番号377 ヒノキ属?アスナロ属?をアスナロに
- 区 遺物番号 44 ツル性植物をツルウメモドキ属に
- 区 遺物番号120 ヒノキ属?アスナロ属?をアスナロに
- 区 遺物番号145 ブナ属を散孔材Aに
- 区 遺物番号146 ブナ属を散孔材Aに

『千歳市 ユカンボシC15遺跡<sup>3)</sup>』北理調報146集の訂正

B 5 層 製品番号 1 ( 区 遺物番号1898 ) ノリウツギをクワ属に

製品番号 8 ( 区 遺物番号4259 ) ブナ属を散孔材Aに

- 区 遺物番号3974 ブナ属を散孔材Aに
- 区 遺物番号4284 トネリコ属をトネリコ属(根)に

B 4 層 製品番号46 ( 区 遺物番号11 ) トネリコ属をツルウメモドキ属に

- 区 遺物番号 999 ニレ属をニレ属(根)に
- 区 遺物番号9883 ニレ属をニレ属(根)に
- 区 遺物番号1061 ブナ属を散孔材Aに
- 区 遺物番号1246 ブナ属を散孔材Aに
- 区 遺物番号2017 ブナ属を散孔材Aに
- 区 遺物番号2048 ブナ属を散孔材Aに
- 区 遺物番号2369 ブナ属を散孔材Aに
- 区 遺物番号4052 ブナ属を散孔材Aに
- 区 遺物番号7508 ブナ属を散孔材Aに
- 区 遺物番号1011 ニレ属をニレ属(根)に
- 区 遺物番号4463 未同定をイヌエンジュに
- 区 遺物番号4467 未同定をコナラ属に
- 区 遺物番号 368 未同定をハシドイ属に
- 区 遺物番号 614 未同定をトネリコ属に
- 区 遺物番号 695 未同定をトネリコ属に
- 区 遺物番号8361 トネリコ属をトネリコ属(根)に

『千歳市 ユカンボシC15遺跡<sup>4)</sup>』北理調報159集の訂正

製品番号 459 ( 区 遺物番号8464 ) タラノキ属をタラノキに

製品番号 677 ( 区 遺物番号2478 ) タラノキ属をタラノキに

- 区 遺物番号2261 タラノキ属をタラノキに
- 区 遺物番号5839 タラノキ属をタラノキに
- 区 遺物番号 662 タラノキ属をタラノキに
- 区 遺物番号9237 ガマズミ属をミツバウツギに
- 区 遺物番号 596 ハンノキをハンノキ属に
- 区 遺物番号 901 タラノキ属をタラノキに
- 区 遺物番号3308 タラノキ属をタラノキに
- 区 遺物番号3347 タラノキ属をタラノキに
- 区 遺物番号4618 タラノキ属をタラノキに

#### 4 木製品の樹種同定

- 区 遺物番号5421 タラノキ属をタラノキに
- 区 遺物番号7355 タラノキ属をタラノキに
- 区 遺物番号7522 タラノキ属をタラノキに
- 区 遺物番号7542 タラノキ属をタラノキに
- 区 遺物番号8551 タラノキ属をタラノキに
- 区 遺物番号 658 タラノキ属をタラノキに
- 区 遺物番号1043 トネリコ属をトネリコ属(根)に
- 区 遺物番号7585 タラノキ属をタラノキに
- 区 遺物番号7093 タラノキ属をタラノキに
- 区 遺物番号5426 タラノキ属をタラノキに
- 区 遺物番号5297 タラノキ属をタラノキに
- 区 遺物番号5701 タラノキ属をタラノキに

『千歳市 ユカンボンC15遺跡<sup>5)</sup>』北理調報176集の訂正

- B1層 区 遺物番号6649 樹種不明をトネリコ属
- O B層 区 遺物番号 273 トネリコ属をハンノキ属に

#### (3) 木製品の樹種同定結果の総まとめ

本遺跡の木製遺物について行なった樹種同定の総数は11616点に上るが、このうち木質部をもち、樹種識別の行なえた遺物は11207点であり、その他樹皮200点、木質部を持たない、保存状態が悪いなどの理由から識別のできなかった遺物208点である。識別の結果として32科48属を同定した。その樹種構成は針葉樹4科6属、広葉樹28科42属であり、そのうち16属については種までの同定を行なった。それらの同定の根拠となった組織構造的な特徴を針葉樹、広葉樹の順に記すと共に、同定した樹種の形質についても略記する。

イチイ *Taxus cuspidata* Sieb. et Zucc. (イチイ属 *Taxus*)(いちい科 TAXACEAE)

顕微鏡写真北理調報128集 1・159集 1・176集 1

仮道管と放射柔細胞からなり、分野壁孔はヒノキ型である。仮道管の内壁には、はっきりとしたらせん肥厚が存在する。

イチイは高さ15m、直径50cmより大きくなり、枝分かれしやすく灌木状にもなる耐陰性の非常に強い陰樹である。心材は紅褐色、辺材部は狭くて白色で区別は明瞭。材質は緻密でやや重硬で狂いにくく弾力性も強い。耐朽性は高く加工も乾燥も容易であるため、細工物、彫刻、床柱、器具、建築などに使われる。

モミ属 *Abies* (まつ科 PINACEAE)

顕微鏡写真北理調報128集 2・146集 1・159集 2・176集 2

仮道管と放射柔細胞からなり、分野壁孔はスギ型である。放射柔細胞の壁は厚く数珠状末端壁を有する。

モミ属の中でも北海道に自生するトドマツと推定される。トドマツは高さ25m、直径60cm以上になる。心材と辺材はいずれも白色で区別は不明瞭であり、材質は軽軟で木理は通直、加工も容易である。建築材、器具材その他に広く用いられる。

カラマツ属 *Larix* (まつ科 PINACEAE) 顕微鏡写真北理調報133集 1~5・159集 3・176集 3

仮道管と放射柔細胞、放射仮道管、水平・垂直樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞からなる。垂直

樹脂道は、晩材部に多い。分野壁孔はトウヒ型、ヒノキ型である。仮道管にらせん肥厚は存在しない。木口面において、早材部の仮道管は薄壁で径が大きく、晩材部の仮道管は厚壁で方形又は長方形であり、早材から晩材への移行は急である。

カラマツ、グイマツが推定される。カラマツは本州中部、グイマツはサハリン、南千島などで、いずれも北海道には自生しない。カラマツは高さ30m、直径80cmほどになり、耐寒性がある陽樹である。心材は褐色、辺材は白色で区別は明瞭。材質は比較的硬く、樹脂分を多く含み水湿のところに使って耐朽性が高いが捻れやすい。建築材、船舶、彫刻などに用いられる。グイマツは高さ25m、直径60～90cmほどになり、湿気好む樹木である。心材は黄褐色、辺材は黄白色で区別は明瞭。材質は樹脂分が多くカラマツに似たところが多いが、それより硬くて強靱である。用途はカラマツと同様である。

トウヒ属 *Picea* (まつ科 PINACEAE) 顕微鏡写真北理調報128集 3・159集 4・176集 4

仮道管と放射柔細胞、放射仮道管、水平・垂直樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞からなる。垂直樹脂道は、晩材部に多い。分野壁孔はトウヒ型である。木口面において、早材部の仮道管は薄壁でやや小さく、晩材部の仮道管は厚壁である。早材から晩材への移行は緩やかである。

トウヒ属の中でも北海道に自生するエゾマツ、アカエゾマツが推定される。エゾマツは高さ30m、直径90cm以上になり、心辺材とも淡黄白色で、材質は軽軟で加工も容易であるが脂壺が多く耐朽性は低い。アカエゾマツは高さ35～40m、直径100～150cmにもなり、心辺材とも淡黄白色で、材質はエゾマツによく似ていて少し硬く、その他の強度もやや高い。共に建築構造材、船舶、器具、楽器など用途は広い。

トウヒ属・カラマツ属 *Picea・Larix* (まつ科 PINACEAE) 顕微鏡写真北理調報159集 5

トウヒ属とカラマツ属とは、早晚材の移行の状態、放射仮道管の有縁壁孔の大きさ、分野壁孔の型、髄近く軸方向柔細胞などの違いがあると報告されている。しかし、本遺跡の試料は腐朽及びあて材の影響により壁孔の型の判別は難しく、正常な早晚材の移行の状態も観察できないため、両属の違いを明確にすることができなかった。従って、どちらの可能性も否定できない。

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don (スギ属 *Cryptomeria*) (すぎ科 TAXODIACEAE)

顕微鏡写真北理調報128集 4・146集 2・159集 6・176集 5

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなり、樹脂道、放射仮道管は存在しない。仮道管にらせん肥厚は存在しない。樹脂細胞は早・晩材部の移行部から晩材部にかけて散在する。年輪界は明瞭で、早材部から晩材部への移行は急又はやや急である。晩材部の幅は比較的広い。放射組織は単列のみで一般に10細胞高以下である。分野壁孔はスギ型である。仮道管の内壁の表面にはイボ状層の存在が走査電子顕微鏡により確認できる。これらの形質からはネズコの可能性もある。しかし、ネズコの分野壁孔の孔口直径は一般に6～7 mであるのに対し、本遺跡の試料は7.5 m以上と大きいことから、スギと同定した。

スギは北海道には自生しない。高さ40m、直径200cmになる。心材は淡い紅色や暗赤褐色、黒味がかった褐色などいろいろで、辺材はほとんど白色であり、材質は軽軟で強靱、木理は通直で加工も容易である。建築、船舶、家具、器具(樽、桶、下駄、箸)など用途は広い。

アスナロ *Thujaopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. (ヒノキアスナロ var. *Hondai* Makino)

(アスナロ属 *Thujaopsis*) (ひのき科 CUPRESSACEAE)

顕微鏡写真北理調報128集 5・146集 3・159集 7・176集 6, 7

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなり、樹脂道、放射仮道管は存在しない。仮道管にらせん肥厚は存在しない。樹脂細胞は晩材部の接線状に散在する。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の

幅が狭い。分野壁孔はヒノキ型が殆どであるが、スギ型とトウヒ型も認められ、1分野に2～5個存在する。これらの形質からはヒノキ又はサワラの可能性もある。しかし、ヒノキの分野壁孔の孔口直径は一般に4 m以下、サワラは4.5～7 mであるのに対し、本遺跡の試料は4～5 mとヒノキよりやや大きいのがサワラより小さく、さらにそれらよりスギ型が多く出現することから、アスナロ（ヒノキアスナロ）と同定したが、アスナロとその北方型の変種のヒノキアスナロを組織構造的に区別することはできない。

(注) 美々8遺跡低湿度の樹種識別の際に、分野壁孔の形状から判断して、スギ?、ヒノキ?、ネズコ?等とした(1, 2)ものは、本遺跡の識別方法に準じて、分野壁孔の孔口直径を計測する等の検討をした場合、本遺跡というアスナロとなる可能性が高い。

1 『美沢川流域の遺跡群』 北埋調報102 p.347・353

2 『美沢川流域の遺跡群』 北埋調報114 p.605～606

アスナロは北海道に自生しないが、ヒノキアスナロは、本州北中部から北海道南部まで自生している。ともに高さ20～30m、直径50～70cmになる耐陰性の樹木である。材としての区別もなく、心材は暗黄色、辺材は淡い黄白色で区別は不明瞭であり、材質は柔らかいが強靱である。殺菌性のある樹脂成分を多く含んでいて耐朽性はよく水湿の場所に使うとヒノキよりも優れているといわれている。建築材、家具、船舶、彫刻などの他に漆器木地にも用いられる。

ヤナギ属 *Salix* (オオバヤナギ属 *Toisusu*) (やなぎ科 SALICACEAE)

顕微鏡写真北埋調報128集 6・146集 5・159集 8・176集 8

散孔材である。道管は時折2～3個の複合管孔を形成する。放射組織は単列で異性である。道管要素は単せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。道管相互壁孔は交互壁孔である。道管放射組織間壁孔は大きくふるい状となる。

エゾノカワヤナギ、オノエヤナギ、バッコヤナギ、エゾノバッコヤナギなどが推定される。

オオバヤナギ属については、ヤナギ属との解剖学的な組織構造の違いは殆どなく区別はできない。ヤナギ属のバッコヤナギでは大型の丸木舟を造ることは不可能で、オオバヤナギ属のオオバヤナギ、トカチヤナギである可能性が高いとの指摘(本田1998, 1999)もあることから、両属を併記することにした。さらに、本遺跡の舳や櫓などについても組織構造的には両属を区別できないため、報告の表中などでは便宜的にヤナギ属として一括して扱うことにしている。

両属は全国の山野や河岸、沢筋などに普通に生え、特に湿地に多い。材質は軽軟で割裂自在であり、加工が容易であるため、細工物や器具材、下駄などのほか薪炭材にも用いられる。

ハコヤナギ属 *Populus* (やなぎ科 SALICACEAE)

顕微鏡写真北埋調報146集 6・159集 9・176集 9

散孔材である。多くの道管は2～4個の複合管孔を形成する。放射組織は単列で同性である。道管要素は単せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。道管相互壁孔は交互壁孔である。道管放射組織間壁孔は大きくふるい状となる。

ドロノキ、ヤマナラシが推定される。ドロヤナギは高さ20～30m、直径100～150cmにもなり、河川の段丘や河床、泥流跡などの日当たりのよいやや湿気たところを好む生長のきわめて速い陽樹である。心材は淡い灰褐色、辺材はほぼ白色で区別はできない。材質は軽軟で加工も乾燥も容易ではあるが耐朽性は低い。器具(杓子、箸、箱材、マッチの軸)、船舶(丸木舟、小船の底板)、下駄などに用いられる。ヤマナラシは高さ20～25m、直径30～60cmになる陽樹である。心辺材ともに白色で区別はない。材質は軽軟で割裂自在、弾性も強いが耐朽性は低い。建築材、器具材(まな板、杓子、箸、マッチの

軸) 彫刻、下駄などに用いられる。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. (オニグルミ属 *Juglans*) (くるみ科 JUGLANDACEAE)

顕微鏡写真北埋調報128集 7・146集 7・159集 10・176集 10

散孔材である。大型の道管が単独もしくは2〜3個複合して存在する。道管内には顕著にチロースが認められることが多い。柔細胞の接線方向への配列は本属の特徴である。放射組織は1〜3細胞幅、3〜20細胞高で同性であるが、方形細胞を含む場合がある。道管要素は単せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。

オニグルミは高さ20〜30m、直径30〜100cmになり、河岸、沢沿い、平地のやや湿けた肥沃地に多く生育する生長の速い陽樹である。心材は暗褐色、辺材は灰白色で区別は明瞭。材質は狂いが少なく靱性にとき加工が容易である。建築材、器具(家具、椅子、かまど枠、桶類) 彫刻、挽物、下駄などに用いられる。

アサダ *Ostrya japonica* Sarg. (アサダ属 *Ostrya*) (かばのき科 BETULACEAE)

顕微鏡写真北埋調報176集 11

散孔材である。2〜3個の大型の道管が放射方向に複合する。晩材に相当する部分で道管の径は小さくなり、3〜6個が放射方向に複合する。軸方向柔細胞は接線状、散在状に配列する。放射組織は1〜3細胞幅で20細胞高より高くなる場合も多い。殆どが平伏細胞からなるが、上下の縁辺部には方形細胞を含む異性である。道管要素は単せん孔をもち、内壁には不規則ならせん肥厚が存在する。

アサダは高さ20〜25m、直径30〜80cmになる過湿で肥沃な深層土を好む陽樹である。心材は紅褐色で辺材は褐白色で区別は明瞭。材質は緻密で硬く割裂、加工は幾分難しいが耐朽性は高い。建築材、器具(杓子、柄類、棍棒など) 船舶(船の櫓など) 樺材、薪炭材などに用いられる。

カバノキ属 *Betula* (かばのき科 BETULACEAE)

顕微鏡写真北埋調報128集 8・146集 8・159集 11・176集 12

散孔材であり、一般に道管は2〜4個が放射方向に複合する。放射組織は1〜4細胞幅で40細胞高以上にもなり同性である。道管要素は階段せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。

現生の植生を考慮すると、シラカンバやウダイカンバ等が推定される。概ねカバノキ属は湿気たところを好み、谷あい、河畔などに生育する生長の速い陽樹である。材質は、やや重硬で強靱、加工と乾燥も中庸であるが、シラカンバの耐朽性は低い。建築材、器具材(曲木細工、漆器木地、木釘、マッチの軸)などに用いられる。

ハンノキ属 *Alnus* (かばのき科 BETULACEAE)

顕微鏡写真北埋調報128集 9・146集 9・159集 12・176集 13

散孔材である。多くの道管は2〜4個が放射方向に複合する。放射組織は単列で同性である。集合放射組織を形成する。道管要素は階段せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。

本属のうち、ハンノキ、ケヤマハンノキ等には集合放射組織がみられ、ミヤマハンノキ等には集合放射組織が殆ど現れないが、現れないと報告(伊東1995、鈴木・能城ら1996、バリノ・サ・ヴェイ2001)されている。本遺跡の試料については、全て集合放射組織がみられること、さらには現生の植生を考慮して、ハンノキ、ケヤマハンノキであると推定した。ハンノキは高さ20〜25m、直径30〜60cmほどになる、湿原や過湿なところに生育する陽樹である。心材は灰褐色、辺材は黄褐色であるが区別は不明瞭。材質は軽軟、加工性は中庸で耐朽性もあまり高くなく、乾燥はやや困難で割れやすい。建築材(床柱、梁など) 器具材(椅子、炉縁、杓子、漆器木地など) 土木用杭、樺材、下駄などに用いられる。ケヤマハンノキは高さ15〜20m、30〜80cmになる、河岸や沢沿いなどやや湿気たところ

に生育する陽樹である。心材は淡紅褐色、辺材は灰白色であるが区別は不明瞭。材質はやや重くて硬い。建築材(床柱、梁、板など) 器具材(小物細工、箱類、漆器木地、椀類、椅子、各種の柄など) 下駄などに用いられる。

ブナ属 *Fagus* (ぶな科 FAGACEAE)

顕微鏡写真北埋調報159集 14・176集 14

散孔材である。道管はほぼ平均に分布し、年輪前半部の道管の方が大きく、外側にいくにつれて大きさと数が減少する。軸方向柔細胞は単独で散在するものと短接線状に配列するものがある。放射組織は単列のもの、2—数列のもの、広放射組織の3種類があり、ほとんど同性である。道管要素は一般に年輪の前半部で単せん孔、外側では階段せん孔と網状せん孔をもつ。内腔には時々チロ-スが認められる。年輪の外側の道管と全ての木部繊維にはイボ状層の存在が走査電子顕微鏡により確認できるが、らせん肥厚は存在しない。

ブナ(北海道南部が北限) イヌブナ(北海道には自生しない)が推定される。ブナは高さ25—30m、120—150cmにもなる陰樹である。心辺材とも淡黄白色で区別は不明瞭。材質はやや重硬で緻密である。イヌブナの心材は赤褐色、辺材は灰白色で区別は明瞭。ブナほど大きくはならず、材質もほとんど変わらない。建築材、器具(漆器木地、杓子、柄など)家具、薪炭材など広く用いられる。

コナラ属 *Quercus* (ぶな科 FAGACEAE)

顕微鏡写真北埋調報128集 10・146集 10・159集 13・176集 16

環孔材である。孔圏部の大道管にはチロ-スが認められ、周囲には周囲仮道管が存在する。孔圏外の道管は、やや放射状に配列することがある。放射組織は単列と広放射組織からなり同性である。道管要素は単せん孔をもつ。

コナラ属の中でも北海道に自生するミズナラ、コナラ、カシワが推定される。ミズナラは高さ25—30m、直径70—120cmになり、谷あい、溪流沿い、湖畔など湿気のあるところにおいて最も旺盛に生育する生長の速い陽樹である。心材は黄褐色、辺材は淡紅白色で区別は明瞭。材質は重硬で緻密なため加工が難しく、乾燥は困難で割れが出やすい。建築材、器具材(椅子、白類、曲木細工、柄類など)、船舶(樅、船用曲木)、薪炭材など広く用いられる。コナラは高さ17—22m、直径40—60cmになり、日当たりのよい丘陵地に多く生育する。心材は淡灰褐色、辺材は淡黄褐色で区別は不明瞭。強度は高く硬いが従曲性がある。用途はミズナラと同様だがこれより劣る。カシワは高さ20—25m、直径30—90cmになり、日当たりのよい適潤な肥沃地から火山灰地、海岸、砂丘にしばしば群生することもある。心材は暗赤褐色、辺材は黄褐色で区別は明瞭。材質は硬く加工は困難であるが水湿に耐える。樽材、器具材、薪炭材などに用いられる。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. (クリ属 *Castanea*) (ぶな科 FAGACEAE)

顕微鏡写真北埋調報176集 17

環孔材である。孔圏部の大道管にはチロ-スが認められ、周囲には周囲仮道管が存在する。孔圏外の道管は火災状に配列する。放射組織は、殆どが単列であるが稀に複列になり、1—15細胞高で同性である。道管要素は単せん孔をもち、小道管には稀に階段せん孔がみられる。らせん肥厚は存在しない。

クリのせん孔板については、単せん孔のみとする報告(大谷・石田1978、鈴木・能城ら1996)と、小道管にはごく稀に階段せん孔が存在するとの報告(島地ら1982、伊東1995)がある。現有する現生材鑑の観察では、稀にはあるが小道管に階段せん孔が認められたので、後者を同定の根拠に加えた。

クリは高さ15—25m、直径50—80cmになる陽樹である。心材は褐色、辺材は褐色で区別は明瞭。水湿に強く、耐朽性は非常によい。材質は重硬で割裂容易だが加工はやや困難である。建築材(床柱、

柱、床板など) 器具材(椅子、漆器木地、桶樽類など) 土木用材、下駄、櫓などに用いられる。

ニレ属 *Ulmus* (にれ科 ULMACEAE)

顕微鏡写真北埋調報128集 12・146集 12,13・159集 16,17・176集 18,19

環孔材である。孔部道の道管は2〜3列になり、孔部外では多数の小道管が接合して集団管孔を形成し、接線方向にかなり規則的に配列する。放射組織は1〜6細胞幅、3〜70細胞高で同性である。道管要素は単せん孔をもち、内壁にはらせん肥厚が存在する。道管状仮道管が存在し、らせん肥厚が認められる。木部柔組織に結晶細胞が認められる。本属では根材(地際近くの木部及び根の部分)と推定されるものが数点出土している。

根材:ひねた材である。一般に髄は認められず、年輪境界があまり明瞭ではなく、孔部道の道管の径が大きかったり小さかったり不規則で、その数も多くなり散孔状を呈す。環孔材では本属本来の道管配列とは異なることが多い。

ハルニレまたはオヒョウが推定される。ハルニレは高さ25〜35m、直径70〜120cmになり、湿気のある肥沃な土壌を好む中庸樹であるがやや陽性を帯びる。心材は暗褐色、辺材は帯褐灰白色で区別は明瞭。材質はやや重硬で加工は幾分難しく乾燥は困難で狂いが出やすい。耐朽性は低い。建築材、器具材(指物、斧の柄、盆、椀など)、船底、太鼓の胴、下駄、薪炭材などに用いられる。オヒョウは高さ15〜25m、直径80〜100cmになり、湿気のある肥沃な深層土を好む中庸樹である。心材は淡紅褐色、辺材は淡黄褐色で区別は明瞭。材質はハルニレと同様である。挽物細工、薪炭材などに用いられる。

ケヤキ属 *Zelkova* (にれ科 ULMACEAE)

顕微鏡写真北埋調報128集 13・176集 20

環孔材である。孔部道では大道管が1列に並び、孔部外の小道管は多数接合して集団管孔を形成し、接線方向へ規則的に配列する。放射組織は6〜7細胞幅のものが多く、上下の縁辺のみが方形細胞の異性である。その方形細胞にしばしば結晶が認められる。道管要素は単せん孔をもち、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

ケヤキ(北海道には自生しない)が推定される。高さ20〜40m、直径80〜150cmになる陽樹である。心材は黄褐色、辺材は淡黄褐色で区別は明瞭である。材質はやや重硬で強靱であり、水湿に強く耐朽性が高い。乾燥もそれほど困難ではない。建築構造材、家具、漆器木地、薪炭材などに用いられる。

クワ属 *Morus* (くわ科 MORACEAE)

顕微鏡写真北埋調報128集 14・146集 14・159集 18・176集 21

環孔材である。孔部道では単独あるいは2〜3個の道管が複合する。孔部外では小道管が複合して団塊状をなす。道管内にはチロースが認められる。放射組織は1〜6細胞幅、5〜60細胞高で異性である。道管要素は単せん孔をもち、小道管に存在するらせん肥厚は、走向が不規則な場合がある。

ヤマグワが推定される。ヤマグワは高さ8〜12m、直径30〜50cmほどになる、湿気のある肥沃な深層土を好む中庸樹である。心材は黄褐色、辺材は淡黄白色で区別は明瞭である。材質は韌性に富み重硬であるが、比較的加工は容易である。建築材(床柱、床板、棚板など) 器具材(指物、挽き物、漆器木地、弓側木、弓など) 覆物材(雪覆) 彫刻材、櫛材など広く用いられる。

カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.

(カツラ属 *Cercidiphyllum*)(かつら科 CERCIDIPHYLLACEAE)

顕微鏡写真北埋調報128集 15・146集 15・159集 19・176集 22

散孔材である。道管の多くは単独で存在し数が極めて多く、年輪内全体を通じて均等に分布する。放射組織は1〜2細胞幅、直立細胞の間に方形細胞と平伏細胞が入り込む典型的な異性である。道管要素は階段せん孔をもち、バ-の数も20本以上と非常に多い。らせん肥厚は存在しない。



カツラの道管のらせん肥厚については、存在しない(大谷・石田1995)と、一部の道管要素の先端部にのみらせん肥厚が認められる(鈴木・能城ら1996)との報告がある。現有する現生材鑑の観察では、一部の道管要素にらせん肥厚を認めたが、本遺跡の試料には認められなかった。その理由は明らかではないが、腐朽による組織の劣化、樹木の個体間や樹幹内での部位の違い等があるためかもしれない。

カツラは高さ20-30m、直径100-200cmほどにもなる、水湿に富む肥沃な深層土を好む中庸樹である。沢沿いや水湿地に生育する。心材は暗赤褐色、辺材は黄褐色で区別は明瞭である。材質はやや軽軟で狂いが少なく加工しやすいが耐朽性、保存性は低い。建築材(床板) 器具材(杵、臼、小刀の柄、漆器木地など) 船底材、彫刻材、下駄、挽物、櫓材などに用いられる。

モクレン属 *Magnolia* (もくれん科 MAGNOLIACEAE)

顕微鏡写真北埋調報128集 16・146集 16・159集 20・176集 23

散孔材である。単独または2-2個の放射方向に接続した道管が均等に分布する。放射組織は1-2細胞幅、5-35細胞高と高い。上下縁辺の1-2列のみが直立細胞ないし方形細胞、そのほかは平伏細胞の異性である。道管要素はらせん孔と階段せん孔をもつ。道管には階段壁孔と対列壁孔が認められ、らせん肥厚が存在する。

ホオノキ、キタコブシ、コブシが推定される。ホオノキは高さ20-30m、直径60-100cmほどになる、潤潤で肥沃な深層土を好む陽樹である。心材は暗灰緑色、辺材は灰白色で区別は明瞭である。材質は軽軟で緻密であり加工は容易であるが耐朽性は低い。建築材、器具材(漆器木地、櫓の柄、曲物、指物など) 船舶材(船具など) 彫刻材、下駄などに用いられる。キタコブシまたその母種のコブシとともに高さ15-20m、直径30-60cmほどになり、日当たりのよい山腹、溪畔などの適度に湿ったところに生育する。心辺材ともにやや緑がかった黄白色で区別は不明瞭である。材質及び用途はホオノキとほとんど同様である。

ノリウツギ *Hydrangea paniculata* Sieb. et Zucc.

(アジサイ属 *Hydrangea*)(ゆきのした科 SAXIFRAGACEAE)

顕微鏡写真北埋調報128集 17・146集 18・159集 21・176集 24

散孔材である。道管は単独または2-3個が複合して年輪内に均等に分布する。軸方向柔細胞が放射方向へ連続して認められるのが特徴である。放射組織は1-2細胞幅、3-5細胞高で異性である。また、板目面では上下方向で軸方向柔細胞と接している。道管要素は階段せん孔をもち、バーの数は時々50を超え、非常に多い。道管には平板状のチロースが存在し、階段壁孔が認められる。らせん肥厚は認められない。

ノリウツギはアジサイ属の中でも直立性の落葉低木である。高さ2-3m、直径5-10cmほどになり、森林内、丘陵地、湿原など日当たりのよいところに生育する。材質はやや重硬で緻密である。髄は白くて太く、皮と木質部の間の内皮から糊をとるなどが特徴である。

ツルアジサイ *Hydrangea petiolaris* Sieb. et Zucc.

(アジサイ属 *Hydrangea*)(ゆきのした科 SAXIFRAGACEAE)

顕微鏡写真北埋調報146集 17・159集 22・176集 25

散孔材である。単独または2-2個の放射方向に接続した道管が均等に分布する。チロースが存在する。放射組織は1-6細胞幅で殆どが30細胞高以上と高く、異性である。道管要素は階段せん孔をもち、バーの数も非常に多い。道管には階段壁孔が認められる。さや細胞が存在する。らせん肥厚は認められない。

ツルアジサイは他の木や岩を登る落葉藤本植物であり、太い幹では直径10cmほどになる。

サクラ属 *Prunus* (ばら科 ROSACEAE)

顕微鏡写真北埋調報128集 18・146集 19・159集 23・176集 26

散孔材である。道管は単独または2〜3個が複合して年輪内に均等に分布する。放射組織は1〜4細胞幅、20細胞高以上になる場合が多い。異性であるが、板目面では判別しにくい。道管要素は単せん孔をもち、らせん肥厚が存在する。

エゾヤマザクラ、ミヤマザクラ、シウリザクラ、エゾノウミズザクラ等が推定される。エゾヤマザクラは高さ15〜30m、直径30〜90cmになり、山腹や深流沿いのやや湿気て肥えた広葉樹林に多く生育する。心材は淡黄褐色、辺材は肌色で区別は明瞭である。材質は緻密で硬い。建築材、器具材(漆器木地、柄、桶、箱など)彫刻材、楽器などに用いられる。ミヤマザクラは高さ7〜12m、直径15〜30cmになる陽樹である。心材は紅褐色、辺材は淡濁白色で区別は不明瞭である。材質は重硬で耐朽性も高く加工性は中庸であるが、乾燥は難しい。建築材、器具材(椅子、箸、杓子、盆、椀、小物細工など)彫刻材、下駄材、薪炭材などに用いられる。シウリザクラは高さ18〜25m、直径30〜50cmになり、やや湿気た河岸や窪地に多く生育する耐陰性のある陽樹である。心材は赤褐色、辺材は淡黄褐色で区別は明瞭である。材質は緻密で硬い。家具材、器具材(木型、漁具)楽器、彫刻材などに用いられる。エゾノウミズザクラは高さ15m、直径30cmになり、やや湿気て肥えた河岸などによく生育する。心材は赤褐色、辺材は淡黄褐色で区別は明瞭である。材質は緻密で軽いが硬い。狂いは少ない方である。家具材、器具材(樽、桶、柄、漆器木地、盆など)彫刻材などに用いられる。

ナナカマド属 *Sorbus* (ばら科 ROSACEAE)

顕微鏡写真北埋調報128集 19・146集 20・159集 24・176集 27

散孔材である。道管は径が小さく単独または2〜3個が複合する。放射組織は2〜3細胞幅、3〜30細胞高で同性である。道管要素は単せん孔をもち、稀に網状せん孔が認められる。内壁には、2〜3本が束になるSらせんとZらせんの特徴的ならせん肥厚が存在する。

ナナカマド、アズキナシが推定される。ナナカマドは高さ10〜15m、直径20〜30cmになる中庸樹である。心材は暗褐色、辺材は淡黄色で区別は明瞭である。材質は緻密で重硬である。器具材(槌、小物細工など)薪炭材などに用いられる。アズキナシは高さ10〜15m、直径30〜50cmになる中庸樹である。心辺材ともに淡紅色で区別は不明瞭である。材質は緻密で重くて硬い。建築材、家具材、薪炭材などに用いられる。

リンゴ属 *Malus* (ばら科 ROSACEAE)

顕微鏡写真北埋調報159集 25

散孔材である。道管は径が小さく単独または2〜3個が複合する。軸方向柔細胞は散在状である。放射組織は2〜3細胞幅、5〜30細胞高で同性である。道管要素は単せん孔をもち、内壁にはSらせんとZらせんのらせん肥厚が存在する。

ズミ、エゾノコリンゴが推定される。ズミは高さ5〜10m、直径20〜40cmになる。心辺材共に帯紅淡褐色で区別はない。材肌は緻密で組織は均斉である。エゾノコリンゴは高さ3〜5m、直径5〜15cmほどになる落葉低木である。

イヌエンジュ *Maackia amurensis* Rupr. et Maxim.

(イヌエンジュ属 *Maackia*)(まめ科 LEGUMINOSAE)

顕微鏡写真北埋調報128集 20, 21・146集 21・159集 26・176集 28

環孔材である。孔圍部から孔圍外への道管の径の移行は緩やかである。年輪界付近には小道管が集まってきた集団管孔の不規則な配列がみられる。放射組織は1〜6細胞幅、6〜50細胞高で同性で

ある。小道管が層階状配列をなし、顕著ならせん肥厚が認められる。道管の壁孔にはベスチャード壁孔が走査電子顕微鏡により認められる。

イヌエンジュは高さ10～15m、直径20～30cmになる陽樹である。心材は暗黄褐色、辺材は黄白色で区別は明瞭である。材質は重くて硬く、耐朽性は高い方である。加工はやや困難である。建築材（床柱、床板など）、器具材（寄木細工、農具の柄、手斧の柄、漆器木地など）、彫刻材、挽物、薪炭材などに用いられる。

ハギ属 *Lespedeza* (まめ科 LEGUMINOSAE)

顕微鏡写真北理調報146集 22・159集 27・176集 29

道管は環孔状に配列することが多い。孔部から孔圏外への道管の径の移行は緩やかである。年輪界付近では小道管が集団をなし、不規則に配列する。放射組織は1～4細胞幅で4～60細胞高と高く、顕著な異性である。小道管が層階状配列をなす。らせん肥厚は存在しない。

エゾヤマハギ等が推定される。エゾヤマハギは高さ1～2m、直径3～4cmほどで、日当たりのよいところに生育する落葉灌木である。

キハダ属 *Phellodendron* (みかん科 RUTACEAE)

顕微鏡写真北理調報146集 23・159集 28・176集 30

環孔材である。孔部では大道管が2～3個複合する。孔圏外では小道管が3～6個集まって接線状あるいは紋様状に配列する。放射組織は1～4細胞幅、5～35細胞高で同性である。道管要素は単せん孔をもつ。小道管には顕著ならせん肥厚が認められる。

キハダ、ヒロハノキハダ等が推定される。このうちキハダは高さ20～25m、直径60～100cmになり、湿気を好む陽樹である。心材は黄褐色、辺材は黄白色で区別は明瞭である。材質はやや軽軟で加工も容易である。建築材（床柱、床板など）、器具材（家具、指物、机、箆、杓子、盆、椀、箱類など）、下駄材、薪炭材などに用いられる。

ニガキ *Picrasma quassioides* (D. Don) Benn. (ニガキ属 *Picrasma*) (にがき科 SIMAROUACEAE)

顕微鏡写真北理調報159集 29・176集 31

環孔材である。孔部道管は大きく2～3個がまばらに配列する。孔圏外の小道管は小さく、厚壁である。軸方向柔細胞は晩材部において数個の小道管を包み込むように、塊状、波状あるいは帯状に配列する。放射組織は1～5細胞幅、3～70細胞高で異性である。道管要素は単せん孔をもつ。板目面においては軸方向柔細胞が層階状に並ぶことがある。木部柔細胞に結晶が認められる。らせん肥厚は存在しない。

ニガキは高さ8～15m、直径20～40cmになる陽樹である。心材は赤みがかった淡黄色、辺材は淡黄白色で区別はできるが境界は不明瞭である。材質は緻密でやや硬い。器具材（箱類、曲物、農具、天秤棒など）、下駄材、薪炭材などに用いられる。

ウルシ属 *Rhus* (うるし科 ANACARDIACEAE) 顕微鏡写真北理調報159集 30・176集 32

環孔材である。孔部道管の径は大きく、孔圏外へ向かって徐々に減じる。孔圏外への道管は単独または2～3個複合して分布する。放射組織は1～2細胞幅で異性である。道管要素は単せん孔をもつ。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

ヌルデまたはヤマウルシが推定される。ヌルデは高さ5～10m、直径15～20cmになり、乾燥した丘陵地に多く生育する。心辺材の区別は不明瞭である。材質は中庸で加工は容易である。耐朽性もそれほど高くないが吸湿しにくい。器具材（箱、浮子、下駄など）などに用いられる。ヤマウルシは高さ5～7m、直径5～8cmになり、山地や丘陵地の林内、湿原の周辺などに生育する。材質は軽軟であ

る。径が小さいため、器具、薪炭材などのほかは、まとまった用途はない。

ニシキギ属 *Euonymus* (にしきぎ科 CELASTRACEAE) 顕微鏡写真北理調報159集 31・176集 33  
散孔材である。道管の径はきわめて小さく、年輪内に均等に分布する。放射組織は単列のみで同性である。道管要素は単せん孔をもつ。道管と木部繊維にらせん肥厚が存在する。

ニシキギ、マユミ、ツリバナ等が推定される。ニシキギ属の樹木は概ね高さ3～5m、直径10～15cmになる。心辺材色の区別はなく、材質は緻密で重く硬い。器具材(杖、木釘、櫛など)のほか、特に弓に用いられる。

ツルウメモドキ属 *Celastrus* (にしきぎ科 CELASTRACEAE)

顕微鏡写真北理調報128集 22, 23, 24・146集 24・159集 32

道管は環孔状を呈し、極めて径の大きい道管と複合する小道管が混在する配列をなす。放射組織は1～6細胞幅で、多列部が20～60細胞高、時々100細胞高以上に達する。異性である。道管要素は単せん孔をもち、らせん肥厚が存在する。大道管の付近には周囲仮道管が存在する。

ツル性植物の同定には資料が乏しいが、ツルウメモドキ、その変種のおニツルウメモドキであると考えられる。

ミツバウツギ *Staphylea Bumalda* (Thunb.) DC

(ミツバウツギ属 *Staphylea*)(みつばうつぎ科 STAPHYLEACEAE)

顕微鏡写真北理調報146集 25・159集 33・176集 34

散孔材である。多くの道管は単独に存在するが、稀に2～3個の複合も見られる。放射組織は直立細胞からなる単列放射組織と、多列放射組織とからなる。多列放射組織の多列部は1～6細胞幅で平伏細胞からなり、上下縁辺に直立細胞の単列翼部をもつ異性である。道管要素は階段せん孔をもつ。らせん肥厚は認められない。走査電子顕微鏡では、木部繊維にイボ状層が認められる。

高さ2～5m、直径5～10cmになり、山地のやや湿気たところに生育する落葉低木である。

カエデ属 *Acer* (かえで科 ACERACEAE)

顕微鏡写真北理調報128集 25・146集 26・159集 34・176集 35

散孔材である。道管は、単独または数個が複合して均等に分布するが数は少ない。放射組織は1～6細胞幅、5～30細胞高で同性である。道管要素は単せん孔をもち、らせん肥厚が存在する。柔細胞には時折結晶が認められる。

イタヤカエデ、ヤマモミジ、ハウチワカエデ等が推定される。カエデ属には多くの樹種があり、やや湿った肥沃な深層土を好む陽樹～中庸樹である。いずれも心辺材の区別は不明瞭で、ほとんど同様の材質であり、緻密で重くてやや硬い。建築材(柱など) 器具材(刀柄、刀鞘、杓子、漆器木地など) 薪炭材など広く用いられる。

ヤマブドウ *Vitis Coignetiae* Pulliat (ブドウ属 *Vitis*)(ぶどう科 VITACEAE)

顕微鏡写真北理調報159集 35・176集 36

道管の配列は特殊であり、径の大きい道管が1年輪内のほとんどを占め、径の小さい道管が2～6個放射方向に集まって集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は散在柔組織と周囲柔組織を構成している。放射組織は1～12細胞幅で異性である。道管要素は単せん孔をもち、らせん肥厚が存在する。道管相互壁孔、道管放射組織間壁孔は階段壁孔である。

ツル性植物の同定には資料が乏しいが、ヤマブドウであると考えられる。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume. (トチノキ属 *Aesculus*)(とちのき科 HIPPOCASTANACEAE)

顕微鏡写真北理調報146集 27・159集 36・176集 37

散孔材である。道管は単独または2〜4個の複合管孔を形成する。放射組織は単列のみ、2〜10細胞高で高さが揃っており、層階状に規則正しく配列するのが特徴である。道管要素は単せん孔をもち、内壁にはらせん肥厚が存在する。道管相互壁孔は交互壁孔である。

北海道では小樽から室蘭あたりが北限とされており、高さ20〜25m、直径60〜100cm以上にもなる。心辺材共に帯紅黄白色が淡黄褐色で区別は不明瞭である。材質は緻密で軽軟であり加工も乾燥も困難ではないが狂いが出やすい。建築材、家具、器具材（漆器木地、下駄、など）彫刻材などに用いられる。

シナノキ属 *Tilia*（しなのき科 TILIACEAE）

顕微鏡写真北埋調報146集 28・159集 37・176集 38

散孔材である。道管は2〜5個の複合管孔を形成し、軸方向柔細胞は短接線状に配列することが多い。放射組織は1〜4細胞幅、5〜50細胞高で同性である。道管要素は単せん孔をもち、内壁には直径が大きいために存在を認めやすいらせん肥厚が存在する。道管相互壁孔は交互壁孔である。

シナノキまたはオオバボダイジュと推定される。シナノキは高さ20〜25m、直径40〜100cmになり、やや湿性の山地斜面、丘陵に多く生育する。心材は淡黄褐色、辺材は淡黄白色で区別は不明瞭。材質は軽く緻密で加工も容易であるが耐朽性は低い。比較的曲がりやすい性質がある。合板（特に曲面に使う）建築材、器具材（桶、樽、下駄など）彫刻材、薪炭材などに用いられる。オオバボダイジュは高さ20〜30m、直径50〜120cmになる。心材は黄色がかかった淡褐色、辺材は黄白色であるが区別は不明瞭である。材質、用途はシナノキとほとんど同様である。

サルナシ属 *Actinidia*（またたび科 ACTINACEAE）

顕微鏡写真北埋調報146集 29・159集 38・176集 39

道管は環孔状を呈し、孤立管孔の極めて径の大きい道管と小さい道管が混在する配列をなす。それらの周囲には周囲仮道管が存在する。放射組織は単列放射組織と多列放射組織からなる。単列放射組織は直立細胞からなる。多列放射組織の多列部は1〜4細胞幅で平伏細胞もしくは方形細胞からなり、上下縁辺に直立細胞の単列翼部をもつ異性である。道管要素は単せん孔と階段せん孔をもつ。はっきりしたらせん肥厚は認められない。

本属の中で、コクワは単せん孔をもち、周囲仮道管が存在し、ミヤママタタビは単せん孔と階段せん孔をもち、周囲仮道管は存在しない（宮本1996）サルナシ（コクワ）マタタビは単せん孔をもち、らせん肥厚が存在する（伊東1996）等の報告がある。しかし、本遺跡の試料には、周囲仮道管が存在し、単せん孔のみでなく階段せん孔もみられ、何れの報告とも完全一致はみられず、現生の資料、材鑑にも乏しく、種レベルまでの同定はできないが、サルナシ（コクワ）ミヤママタタビ、マタタビの何れかであると考えられる。

ハリギリ *Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai (ハリギリ属 *Kalopanax*) (うこぎ科 ARALIACEAE)

顕微鏡写真北埋調報128集 26・146集 30・159集 39・176集 40

環孔材である。孔部部の道管は1列で径は大きく、孔部外では小道管が多数接合して集団管孔を形成し、接線方向にかなり規則的に配列する。放射組織は1〜6細胞幅で、上下縁辺の1列のみが方形細胞の異性である。道管要素は単せん孔をもつ。らせん肥厚は存在しない。

ハリギリは高さ25〜30m、直径60〜120cmになるやや湿気た肥沃な深層土を好む陽樹である。心材は淡灰褐色が黄褐色で辺材は淡黄白色を呈し区別は不明瞭である。材質は重さと硬さは中庸で加工も乾燥も容易な方であるが耐朽性は高くない。建築材、器具材（椅子、盆、漆器木地、指物、杓子、臼、把柄類、櫛など）、楽器材、橋梁材、川船の櫂、下駄材などに用いられる。

タラノキ *Aralia elata* (Miq.) Seem. (タラノキ属 *Aralia*) (うごぎ科 ARALIACEAE)

顕微鏡写真北埋調報159集 40・176集 41

環孔材である。年輪のはじめに大道管が2〜3個複合し、晩材部では丸みを帯びた多角形の小道管が放射方向に数個接合して複合管孔を形成し、波状に配列する。放射組織は1〜6細胞幅、5〜40細胞高で異性である。道管放射組織間壁孔は大きいふるい状となる。鞘細胞が存在する。らせん肥厚は存在しない。

タラノキは高さ3〜5m、直径5〜10cmになる落葉低木である。心材は淡灰色か淡褐色、辺材は白か黄白色で区別はつかない。重さは中庸であり強くはない材質である。器具材(箱、盆、杓子、小物細工)などに用いられる。

コシアブラ *Acanthopanax sciadophylloides* Fr. et Sav

(ウコギ属 *Acanthopanax*) (うごぎ科 ARALIACEAE) 顕微鏡写真北埋調報128集 27

環孔材であるが、孔圏道管はあまり明瞭ではなく、孔圏外では散孔状に配列し、半環孔状を呈する。放射組織は1〜4細胞幅で異性である。道管要素はらせん孔をもつ。道管壁にらせん肥厚は存在しない。

コシアブラは高さ15〜18m、直径30〜50cmになる陽樹である。心材は淡黄褐色、辺材は灰白色か淡黄白色で区別は明瞭である。材質は緻密で軟らかく弱い。器具材(箱類、箸、杓子、棒類など)下駄材、薪炭材などに用いられる。

ミズキ属 *Cornus* (みずき科 CORNACEAE) 顕微鏡写真北埋調報159集 41・176集 42

散孔材である。道管は単独または放射方向に数個が複合して均一に分布する。放射組織は1〜3細胞幅、上下両端に直立細胞が多く異性である。道管要素は階段せん孔をもつ。らせん肥厚は認められない。

ミズキが推定される。高さ15〜20m、直径30〜50cmになり、湿気のある肥沃な深層土を好む中庸樹である。心辺材共に淡黄白色か濁白色で区別はない。材質は緻密で軟らかく加工しやすい。建築材(梁)、器具材(漆器木地、把柄類、箸、杓子、櫛、コケシ木地など)、下駄材、薪炭材などに用いられる。

エゴノキ属 *Styrax* (えごのき科 STYRACACEAE) 顕微鏡写真北埋調報159集 42

散孔材である。道管は単独または数個で複合管孔を形成する。軸方向柔細胞は短接線状に配列する。放射組織は1〜3細胞幅、3〜30細胞高で単列の翼部の高い異性である。道管要素は階段せん孔をもつ。らせん肥厚は認められない。

ハクウンボクまたはエゴノキ(北海道南部以南)が推定される。本遺跡において出土している漆碗については、遺跡周辺に自生しないエゴノキの可能性も考えられる。ハクウンボクは高さ6〜15m、直径20cmほどになり湿気を好む。心辺材共に淡黄白色か黄褐色で区別はない。材質は緻密で硬いが加工は容易にできる。器具材(将棋の駒、杓子、籠など)、彫刻材などに用いられる。エゴノキは高さ7〜8m、直径20〜25cmになり湿気を好む。心辺材共に淡黄白色か黄褐色で区別はない。材質は緻密で硬いが曲げやすい。建築材、器具材(柄、将棋の駒、櫛)などに用いられる。

トネリコ属 *Fnxinus* (もくせい科 OLEACEAE)

顕微鏡写真北埋調報128集 29・146集 31〜33・159集 43〜45・176集 43〜45

環孔材である。孔圏部では単独または2個が放射方向に複合した大きな道管が、1〜3列並ぶ。孔圏外では急激に小さくなり、単独ないし2〜4個が放射方向に複合して散在する。放射組織は1〜3細胞幅、10細胞高ほどで比較的均一であり、同性である。道管要素はらせん孔をもつ。軸方向柔組織は周囲状で、晩材部では翼状ないし連合翼状となる。道管放射組織間壁孔は、非常に小さく密に存在する。らせん肥厚は存在しない。本属では根材(地際近くの木部及び根の部分)と推定されるものが

数点出土している。

根材：ひねた材である。道管の数はかなり少なく、配列も特異である。放射組織は1〜2細胞幅が主となる。現生の根の試料と比較検討した結果、組織の特徴が一致するため、根材と同定した。

ヤチダモ、アオダモが推定される。ヤチダモは高さ20〜25m、直径70〜100cmになり、肥沃な湿地を好み、非常に生長が速い。心材は淡黄褐色、辺材は黄白色で区別は明瞭である。材質はやや重硬で弾力性、耐朽性がある。建築材（床柱、建具など）器具材（指物、盆、柄、オールなど）塗器材、船舶材、下駄材、薪炭材などに用いられる。アオダモは高さ10〜12m、直径20〜30cmになり、適潤で肥沃な土壌を好む陽樹である。心材は淡黄褐色か褐色、辺材はほとんど白色で区別は明瞭である。材質はヤチダモより強靱である。建築材（床柱）器具材（塗器木地、把柄材、木槌、箸、野球用バット、櫛材など）薪炭材などに用いられる。

ハシドイ属 *Syringa*（もくせい科 OLEACEAE）

顕微鏡写真北埋調報128集 30・146集 34・159集 46・176集 46

散孔材である。道管は、単独または数個が複合してほぼ均等に分布する。放射組織は1〜2細胞幅で異性であるが、大部分は平伏細胞である。道管要素は単せん孔をもち、2本の対をなす特徴的ならせん肥厚が存在する。

また、木口面において道管が年輪に沿って一列に並ぶこともあり、道管の配列は個体間で違いが見られる。

ハシドイが推定される。高さ5〜10m、直径10〜20cmになり、沢沿いなどの適潤なやや肥沃地を好むが、やや乾燥する高いところにも生育する。材質は緻密でやや硬い。建築材、器具材、小物細工、薪炭材などに用いられる。

ニワトコ属 *Sambucus*（すいかずら科 CAPRIFOLIACEAE）

顕微鏡写真北埋調報159集 47・176集 47

散孔材である。道管は放射状、斜線状など不規則に複合する。放射組織は1〜3細胞幅で異性である。道管要素は単せん孔をもち、鞘細胞がみられる。らせん肥厚は認められない。

エゾニワトコが推定される。

ニワトコのせん孔については、単せん孔をもち（鈴木・能城ら1996）単せん孔と階段せん孔をもち（大谷・石田1978、伊東1999）等の報告がある。本遺跡の試料においては、階段せん孔は認められなかったが、ニワトコで報告された階段せん孔は、バ-の数も少なく稀に出現するだけなので、確認できなかった可能性も考えられる。

エゾニワトコは高さ3〜5m、直径10〜15cmになる落葉低木である。材質は軽軟で緻密だが脆い。小物細工、寄木細工などに用いられる。

ガマズミ属 *Viburnum*（すいかずら科 CAPRIFOLIACEAE） 顕微鏡写真北埋調報159集 48

散孔材である。道管は殆どが単独で年輪内全体に均等に分布する。軸方向柔細胞の配列は散在状で目立たない。放射組織は1〜4細胞幅の多列部と背の高い単列部がある。道管要素は階段せん孔をもち、バ-の数も40本以上と多い。放射組織壁は厚い。道管放射組織間壁孔は対列状、交互状である。道管の内壁には稀にらせん肥厚が認められることがある。

オオカメノキ、ガマズミ等が推定される。ガマズミ属には多くの樹種があるがいずれも高さ3mほどの落葉低木である。中でもガマズミの材質は緻密で硬く、強靱で粘りがある。

散孔材A

顕微鏡写真北埋調報128集 11・146集 11・159集 15・176集 15

散孔材である。道管はほぼ平均に分布し、年輪前半部の道管の方が大きく、外側に向かうにつれて

大きさと数が減少する。軸方向柔細胞は単独で散在状に配列する。放射組織は単列のもの、2〜数列のもの、広放射組織の3種類があり、ほとんど同性である。道管要素は単せん孔、網状せん孔と階段せん孔をもつ。道管相互壁孔は交互壁孔が認められる。

木口面で見ると組織はブナと酷似しているが、軸方向柔細胞は散在状であるが少ない、広放射組織がやや高い、単列の放射組織は直立細胞状であるが確認が難しい、道管の内腔にチロ-スは殆ど認められない、大部分が単せん孔及び網状せん孔で階段せん孔は少ない、道管相互壁孔は交互壁孔が多く認められる、道管と木部繊維ともにイボ状層の存在は認められないという点ではブナとやや異なっていた。

ホザキナカマド等である可能性も考えられたが、現有の材鑑と比較検討しても組織構造が完全に一致せず、同定するには至らなかった。

#### 散孔材B

顕微鏡写真北埋調報159集 50

散孔材である。年輪界付近でやや径の大きい道管が環孔状に配列する。放射組織は1〜3細胞幅になるが単列のものが多く、また、単列部を介して軸方向に2〜3個連なる。異性である。道管要素は単せん孔と階段せん孔をもち、いずれも柾目面ではせん孔部が長楕円に見える。階段せん孔には階段の間隔が極めて狭い20〜30段のものと、間隔が広くバ-も太い4〜5段のものがある。道管と木部繊維にはせん肥厚が存在する。

組織構造的な特徴はスイカズラ属のヤマウグイスカグラ等に似るが断定はできない。

#### 散孔材C

顕微鏡写真北埋調報128集 28

散孔材である。道管は径が小さく、単独または2〜3個が複合し、年輪内に平等に分布する。放射組織は大部分が1細胞幅で稀に2細胞幅になり、2〜60細胞高である。直立細胞と平伏細胞からなる異性である。道管要素は階段せん孔をもつ。らせん肥厚の有無は腐朽がひどく確認できない。

つつじ科のヨウラクツツジ属に類似するが断定はできない。

#### 環孔材A

顕微鏡写真北埋調報176集 48

環孔材である。孔部道の道管は単独ないし2〜3個が複合する。孔部外の小道管は2〜20個が不規則に複合する。放射組織は1〜5細胞幅、高さは極めて高く、ほとんど同性である。道管要素は単せん孔をもつ。側壁には交互壁孔がみられる。らせん肥厚が認められる。本試料には髄が認められないことから、根材であると推定されるが、現生木の根に関するデータは少なく、同定はできなかった。

#### 広葉樹

顕微鏡写真北埋調報128集 31, 32

これらの試料では、乾燥時の収縮により組織が変形したり、試料が小さく髄のそばからしか切片を採取できない等の理由により正常な組織構造の観察ができなかった。道管の存在は認めることができたが、散孔材、環孔材の判別も難しく、樹種の識別は困難であったので、広葉樹と記載するに留めた。

#### タケ属 (Take) (いね科 GRAMINEAE)

顕微鏡写真北埋調報146集 35・159集 49

一対の後生木部道管を挟んで稈の中心側に原生木部、外側に原生師部があり、それらを厚壁の維管束鞘が覆っている。これらのことから、いね科のササ属およびタケ属と識別される。両者に属する種類はたくさんあるが、解剖学的性質の知識、現生の比較資料に乏しく、顕微鏡においてそれらを区別することは難しい。しかし、本報告の遺物の用途適性から類推して、タケ属のマダケ(本州以南)などが考えられる。

本遺跡の樹種同定結果を層位別に集計した表 - 14を作成し、その数値を元に遺跡の東側にあたる区と区のみを集計した表 - 15、および西側にあたる区と区のみを集計した表 - 16を作成



した。また、本遺跡周辺はどのような樹種で構成され、それらがどのように利用されていたのか、おおまかな傾向を知るために、樹種の識別できた11207点の樹種出現率を算出して表 - 17を作成した。各樹種の出現率は、針葉樹と広葉樹の出現数の合計に対する各樹種の出現数の割合を算出したものである。この算出方法で、本遺跡での傾向を知るために、遺物が集中する B3・B2・B1層（合わせて9735点）について層ごとにまとめ、比較のため全ての層の合計数（11207点）を全層として同様に算出し、共に表にまとめた。

さらに、用材の形状を生かして利用したものととして木取りが丸木・股木・心持の4912点と、「割る」などの加工を施して利用したものの代表として木取りが板目・柎目・追柎の2113点（切片・木端を除く）に対して同様に割合を算出した、全層と B3・B2・B1層の樹種出現率もこの表 - 17に併せて示した。

本遺跡の樹種同定結果で得られる樹種構成から、およそ当時の遺跡周辺の植生はトネリコ属、ハンノキ属、ヤナギ属、ニレ属、コナラ属など湿地を好む落葉広葉樹を中心に、モミ属、イチイなどの針葉樹が混じる植生が考えられる。低湿度においては樹種の出現率の結果から、トネリコ属、ハンノキ属の混生する湿性林が広がっていたと考えられ、現在の植生と大きな違いはみられなかったものと思われる。

木製遺物の出土数の多い B1、B2、B3層の樹種出現率、丸木・股木・心持および板目・柎目・追柎の違う木取りの樹種出現率の違いを比較すると、木理が通直なアスナロ、幹の直径が大きくなり木理が通直で加工もしやすいハリギリは、割って板等として丸木以外で利用される傾向が強い。また、トネリコ属、ハンノキ属、モミ属、ヤナギ属は、幹や枝を丸木のままの利用も、割って加工をしての利用もされているが、このうち、材質が軽くて軟らかく割裂自在で加工のしやすいヤナギ属は、丸木のままで利用される傾向が強く、木理が通直で板状に割りやすい材質を持つモミ属は、割って利用される傾向が強い。これらから、アスナロは遺跡周辺には自生していないため移入材の再利用とみられ、そのほかについては、近くに生育する樹木の中から使用する部位の形状や大きさ、材質などを考慮して木材を選択し、加工、利用をしていたと思われる。

特にトネリコ属については、樹種の出現率の結果だけでなく、現地でも調査をしたであろう住居の柱材の樹種構成においても利用頻度が出ている。さらに幹の直径の大きい材もみられること、幹や枝だけでなく根材の部分も利用されていることから、そこには大木が生育しており、好んで選択的に多用されていたことがうかがえる。

(菊池)

#### 樹種同定参考文献

- 伊東隆夫 (1995) 『日本産広葉樹材の解剖学的記載』, 木材研究・資料, 31, p.81-181  
 伊東隆夫 (1996) 『日本産広葉樹材の解剖学的記載』, 木材研究・資料, 32, p.66-176  
 伊東隆夫 (1997) 『日本産広葉樹材の解剖学的記載』, 木材研究・資料, 33, p.83-201  
 伊東隆夫 (1998) 『日本産広葉樹材の解剖学的記載』, 木材研究・資料, 34, p.30-166  
 伊東隆夫 (1999) 『日本産広葉樹材の解剖学的記載』, 木材研究・資料, 35, p.47-216  
 大谷 諒・石田茂雄 (1978) 『走査型電子顕微鏡による本邦産双子葉木本植物のせん孔板の観察』,  
 北海道大学農学部演習林研究報告, 35-1, p.65-98  
 大谷 諒・石田茂雄 (1978) 『走査型電子顕微鏡による本邦産双子葉木本植物の道管要素のらせん肥厚の観察』,  
 同上, 35-2, p.433-464  
 大谷 諒・石田茂雄 (1979) 『走査型電子顕微鏡によるイボ状層の研究〔第2報〕』, 同上, 36, p.585-608

- 岡本省吾・北村四郎(1981)『原色日本樹木図鑑』, 保育社
- 小林弥一(1957)『本邦における針葉樹材のカ・D式識別法』, 林業試験場研究報告, 98, p.1-71
- 鮫島悳一郎(1986)『北海道の樹木』, 北海道新聞社
- ①北海道埋蔵文化財センター(1991)『美沢川流域の遺跡群』, 北埋調報77
- ②北海道埋蔵文化財センター(1992)『美沢川流域の遺跡群』, 北埋調報83
- ③北海道埋蔵文化財センター(1996)『美沢川流域の遺跡群』, 北埋調報102
- ④北海道埋蔵文化財センター(1997)『美沢川流域の遺跡群』, 北埋調報114
- ⑤北海道埋蔵文化財センター(1996)『千歳市 オサツ2遺跡②』, 北埋調報103
- ⑥北海道埋蔵文化財センター(1998)『千歳市 ユカンボシC15遺跡①』, 北埋調報128
- ⑦北海道埋蔵文化財センター(1999)『千歳市 ユカンボシC15遺跡②』, 北埋調報133
- ⑧北海道埋蔵文化財センター(2000)『千歳市 ユカンボシC15遺跡③』, 北埋調報146
- ⑨北海道埋蔵文化財センター(2001)『千歳市 ユカンボシC15遺跡④』, 北埋調報159
- ⑩北海道埋蔵文化財センター(2002)『千歳市 ユカンボシC15遺跡⑤』, 北埋調報176
- 鳥地 謙・伊東隆夫(1982)『図説木材組織』, 地球社
- 鳥地 謙・伊東隆夫(1988)『日本の遺跡出土木製品総覧』, 雄山閣
- 鳥地 謙・須藤彰司・原田 浩(1976)『木材の組織』, 森北出版
- 鳥地 謙・佐伯 浩ほか(1985)『木材の構造』, 文永堂出版
- 鈴木三男・能城修一・松葉礼子(1996)『仙台市中在家遺跡都出土材の樹種』, 仙台市教育委員会編, 中在家南遺跡他(第2分冊), 仙台市文化財調査報告書, 第213集, p.339-387
- 須藤彰司(1959)『本邦産広葉樹材の識別』, 林業試験場研究報告, 118, p.1-117
- 成澤潔水(1989)『木材(増補改訂版) 生えている資源』, パワー社, p.130-177
- 能城修一・鈴木三男・網谷克彦(1996)『鳥浜貝塚から出土した木製品の樹種』, 福井県立若狭歴史民俗資料館編, 鳥浜貝塚研究1, p.23-38,
- バリノ・サ・ヴェイ株式会社(2001)『札幌市K39遺跡第6次調査地点で出土した木製品・炭化材の樹種及び昆虫遺体の同定』, 札幌市教育委員会編, K39遺跡第6次調査一環状遺構整備事業に伴う発掘調査(第5分冊), 礼文報65, p.88-102
- 本田優子(1998)『ハリギリの丸木舟-民族誌/考古資料/口承文芸資料に基づく一考察-』, 北海道立アイヌ民族文化研究センター-研究紀要, 第4号, p.15-25
- 本田優子(1999)『ヤナギに関する一考察-アイヌ丸木舟に用いるヤナギの樹種の同定とその学名について-』, 北海道立アイヌ民族文化研究センター-研究紀要, 第5号, p.33-51
- 宮本忠輔(1996)『つる性木本植物の二次木部の解剖学的性質』, 北海道大学卒業論文, p.1-47
- 村田 源・平野弘二(1989)『検索入門 冬の樹木』, 保育社
- E. W. J. PHILLIPS (1948) 『IDENTIFICATION OF SOFTWOODS BY THEIR MICROSCOPIC STRUCTURE』, Forest Products Research Bulletin, 22 p.1-56

## 4 木製品の樹種同定

表 - 14 出土木製品の層別樹種同定結果

針葉樹		複合材や集中の場合は各々の樹種にカウントする														
科	名	属	種	名	IB	IB5	IB4	IB3	IB2	IB1	OB	Ta-a	攪乱	挿土	不明	合計
い	イチイ		イチイ					7	5	4	2					18
ま	ミミ				1	5	23	240	233	54	3	1	2		1	563
	カウマツ							3	7	1	1					12
	トウヒ							5	3	3		2	2			15
	トウヒ							5	2							7
す	スギ		スギ			5	25	17	5				1			53
ひ	ヒノキ		ヒノキ		1	16	68	593	357	68	3	1				1107
	4	科	6	属	2	21	96	875	622	135	9	4	5	0	1	1770
広葉樹																
や	ヤナギ					8	82	658	430	132	12	18	2			1342
	ハコヤナギ							2	58	28	7					96
く	クマシラカシ		クマシラカシ		1	2	10	96	48	15	1	6	1	1	1	182
か	カバノキ							1	3	1	7			1		13
	ハンノキ					10	91	370	279	190	8	11	4			963
ぶ	ブナ							5	3	1	1					10
	コナラ				6	5	20	177	79	37	9	3				336
	クナ		クナ					2	1							3
に	ニレ				1	6	28	191	89	38	5	3	3		1	363
	クヤキ							2	2	2						4
く	クワ				2	3	10	68	41	34	3	3	2			166
か	カツラ		カツラ		1	1	8	9	11	4						35
も	モクレン					1	8	97	56	29	3	2	2			198
ゆ	ユズサイ		ノリウツギ		4	22	185	105	45	1	1	3				366
			ツルアジサイ		1	2	7	8	5				1			24
ば	サクラ				1	6	49	47	14	1	3					121
	ナナカマド						6	7	3	2						18
	リンゴ							1								1
ま	イヌエンジュ		イヌエンジュ		1		23	104	81	54	5	7	5			280
	ハビ					1	3	5	3	2		1				15
み	ミカン		キハダ		1		4	34	32	8	2	2	1			84
に	ニガキ		ニガキ					4	1							5
うる	ウルシ							1	1							2
に	ニシキギ							10	8	3					1	22
	ツルウメ		モドキ		1	2	1	4								8
み	ミツバウツギ		ミツバウツギ				4	39	39	8	1					91
か	カエデ				1		17	60	15	9	1	3	2			108
ぶ	ブドウ		ヤマブドウ					4	1	1						6
と	トチノキ		トチノキ				1	5	2							8
し	シナノキ						7	92	33	7						139
ま	またたび		サルナシ				3	10	3	1						17
う	ウコギ		ハリギリ		1	14	202	128	45	4	1					395
			タラノキ					20	9	8	2					39
	ウコギ		コシアブラ										2			2
み	ミズキ							1	1							2
え	エゴノキ							2								2
も	トネリコ				27	49	422	1444	882	507	93	47	23	1	6	3501
	ハシドイ				3	38	149	100	34	5	2	3				334
	ニワトコ							11	4	2	1					18
	ガマズミ							2								2
	散孔材A				2	7	60	21	9	1						100
	散孔材B							1								1
	散孔材C									1						1
	環孔材A									1						1
	広葉樹							3	6							9
い	イタケ(ササ)							1	2							3
	28	科	42	属	44	100	844	4251	2600	1256	161	114	56	2	9	9437
針葉樹と広葉樹の合計																
	32	科	48	属	46	121	940	5126	3222	1391	170	118	61	2	10	11207
推定					6	2	16	76	53	41	3		3			200
不可能(木質なし)								2	2	2						7
同定不能					99		24	23	17	31	7					201
未同定										1						1
					105	2	40	101	72	75	11	0	3	0	0	409
樹種同定総数																
					151	123	980	5227	3294	1466	181	118	64	2	10	11616

表 - 15 区出土木製品の層位別樹種同定結果

針葉樹		複合材や集束中の場合は各々の樹種にカウントする														合計	
科	名	属	名	種	名	IIB	IB5	IB4	IB3	IB2	IB1	OB	Ta-a	攪乱	抹土	不明	合計
	いちい		イチイ	イチイ						1							1
	まつ		モミ			1				2	1		1				5
			カラマツ														0
			トウヒ								1		2				3
			トウヒ														0
	すぎ		スギ	スギ							2						2
	ひのき		アスナロ	アスナロ						2	2		1				5
			4 科	5 属		1	0	0	0	5	6	0	4	0	0	0	16

広葉樹																		
科	名	属	名	種	名	IIB	IB5	IB4	IB3	IB2	IB1	OB	Ta-a	攪乱	抹土	不明	合計	
	やなぎ		ヤナギ					1		4	19	1	17				42	
			ハコヤナギ														0	
	くるみ		オニグルミ	オニグルミ		1					3		4				8	
	かばのき		アサダ	アサダ													0	
			カバノキ								1			1			2	
			ハンノキ				1			2	4		10				17	
	ぶな		ブナ														0	
			コナラ				2		3	4	9	3	2				23	
			クナ	クナ													0	
	にれ		ニレ						1		6		3				10	
			ケヤキ								1						1	
	くわ		クワ					1	1	3	2	1	2				10	
	かつら		カツラ	カツラ									3				3	
	もくれん		モクレン								4		2				6	
	ゆきのした		アジサイ	ノリウツギ					3	1	5						9	
				ツルアジサイ													0	
	ばら		サクラ			1					1		3				5	
			ナナカマド								1						1	
			リンゴ														0	
	まめ		イヌエンジュ	イヌエンジュ						4	18		6				28	
			ハギ														0	
	みかん		キハダ														0	
	にがき		ニガキ	ニガキ													0	
	うるし		ウルシ														0	
	にしきぎ		ニシキギ														0	
			ツルウメモドキ			1	2										3	
	みつばうつぎ		ミツバウツギ	ミツバウツギ													0	
	かえで		カエデ								2		3				5	
	ぶどう		ブドウ	ヤマブドウ													0	
	どちのき		トチノキ	トチノキ													0	
	しなのき		シナノキ														0	
	またたび		サルナシ														0	
	うこぎ		ハリギリ	ハリギリ				1			4		1				6	
			タラノキ	タラノキ													0	
			ウコギ	コシアブラ									2				2	
	みずき		ミズキ														0	
	えごのき		エゴノキ														0	
	もくせい		トネリコ			9	1	7	24	27	72	2	45				187	
			ハシドイ				1				8		2				11	
	すいかずら		ニフコ														0	
			ガマズミ														0	
	散孔材A										2						2	
	散孔材B																0	
	散孔材C										1						1	
	環孔材A																0	
	広葉樹									2							2	
	いわ		タケ(ササ)														0	
			17 科	21 属		12	6	11	32	48	165	7	102	1	0	0	384	
	針葉樹と広葉樹の合計																	
			21 科	26 属		13	6	11	32	53	171	7	106	1	0	0	400	

## 4 木製品の樹種同定

表 - 16 区出土木製品の層位別樹種同定結果

針葉樹		複合材や製中の場合は各々の樹種にカウントする											合計	
科名	属名	種名	IIB	IB5	IB4	IB3	IB2	IB1	OB	Ta-a	攪乱	排土	不明	合計
いちい まつ	イデイ	イデイ				7	4	4	2					17
		モミ		5	23	240	231	53	3				1	558
		カラマツ				3	7	1	1					12
		トウヒ				5	3	2				2		12
すざ ひのき	スギ	スギ			5	25	17	3				1		51
		アスナロ	1	16	68	593	355	66	3					1102
4 科 6 属			1	21	96	875	617	129	9	0	5	0	1	1754

広葉樹													合計		
科名	属名	種名	IIB	IB5	IB4	IB3	IB2	IB1	OB	Ta-a	攪乱	排土	不明	合計	
やなぎ	ヤナギ	ヤナギ		8	81	658	426	113	11	1	2			1300	
		ハコヤナギ			2	58	281	7				1		96	
くるみ かほのき	オニグルミ	オニグルミ		2	10	96	48	12	1	2	1	1	1	174	
		アサダ					1							1	
ぶな	カバノキ	カバノキ			1	3	1	6						11	
		ハンノキ		10	90	370	277	186	8	1	4			946	
		ブナ				5	3	1	1					10	
		コナラ		6	3	20	174	75	28	6	1			313	
にれ	クナ	クナ				2	1							3	
		ニレ	1	6	26	190	89	32	5	3			1	353	
くわ かつら	クワ	クワ		2	3	9	67	38	32	2	1	2		156	
		カツラ	1	1	8	9	11	1				1		32	
もくれん ゆきのした	モクレン	モクレン		1	8	97	56	25	3			2		192	
		アジサイ		4	22	182	104	40	1	1	3			357	
ばら	ツルアジサイ	ツルアジサイ	1	2	7	8	5					1		24	
		サクラ		6	49	47	13	1						116	
		チナカマド		6	7	3	1							17	
		リンゴ				1								1	
まめ	イヌエンジュ	イヌエンジュ	1		23	104	77	36	5	1	5			252	
		ハギ		1	3	5	3		2		1			15	
みかん	キハダ	1		4	34	32	8	2	2	1			84		
にがき	ニガキ				4	1							5		
うるし	ウルシ				1	1							2		
にしきぎ	ニシキギ	ニシキギ				10	8	3					1	22	
		ツルアジサイ		1	4									5	
みつばうつぎ	ミツバウツギ			4	39	39	8	1					91		
かえで	カエデ	1		17	60	15	7	1			2		103		
ぶどう	ヤマブドウ				4	1	1						6		
とちのき	トチノキ			1	5	2							8		
しなのき	シナノキ			7	92	33	7						139		
またたび	サルナシ			3	10	3	1						17		
うこぎ	ハリギリ	ハリギリ	1	13	202	128	41	4						389	
		タラノキ			20	9	8	2						39	
		ウコギ												0	
みずき	ミズキ				1	1							2		
えごのき	エゴノキ				2								2		
もくせい	トネリコ	トネリコ		18	48	415	1420	855	435	91	2	23	1	6	3314
		ハシンドイ		2	38	149	100	26	5		3			323	
すいかずら	ニフトコ	ニフトコ				11	4	2	1					18	
		ガマズミ				2								2	
散孔材A			2	7	60	21	7	1					98		
散孔材B					1								1		
散孔材C													0		
環孔材A								1					1		
広葉樹						3	4							7	
いね	タケ(ササ)				1	2								3	
27 科 40 属			32	94	833	4219	2552	1091	154	12	55	2	9	9053	

針葉樹と広葉樹の合計													合計	
科名	属名	種名	IIB	IB5	IB4	IB3	IB2	IB1	OB	Ta-a	攪乱	排土	不明	合計
31 科 46 属			33	115	929	5094	3169	1220	163	12	60	2	10	10807

表 - 17 出土木製品の樹種出現率

針葉樹	木製品 11207点				木取りが丸木・股木・心持 4912点				木取りが板目・柱目・流経 2113点						
	種名	風名	種名	(%)	I B3	I B2	I B1	全層	I B3	I B2	I B1	全層			
いちい	イチイ		イチイ	0.13	0.15	0.28	0.16	0.14	0.14		0.12	0.19	0.28	0.53	0.23
まつ	モミ			4.68	7.23	3.89	5.02	1.57	2.38	2.03	1.81	10.45	14.72	14.43	12.21
	カラマツ			0.05	0.21	0.07	0.10						0.98	0.53	0.37
	トウヒ			0.09	0.09	0.21	0.13	0.04	0.14	0.29	0.12		0.42	0.53	0.23
	ソウ・おけ			0.03			0.01	0.04				0.02	0.09		0.04
すぎ	スギ		スギ	0.48	0.52	0.36	0.47					2.32	1.96	2.67	2.22
ひのき	アスナロ		アスナロ	11.57	11.08	4.89	9.87	0.04	0.07	0.29	0.08	52.56	45.30	32.62	47.79
	針葉樹の合計			17.07	19.30	9.72	15.80	1.86	2.74	2.61	2.16	65.53	63.67	51.33	63.13
広葉樹															
やなぎ	ヤナギ			12.83	13.34	9.51	11.97	20.92	22.83	15.40	19.80	3.67	3.64	3.20	3.31
	ハコヤナギ			1.13	0.86	0.50	0.85	0.04			0.02	2.61	2.24	0.53	2.22
くるみ	オニグルミ		オニグルミ	1.87	1.48	1.08	1.62	2.67	2.38	0.87	2.28	0.19	0.28	0.53	0.28
かばのき	アサダ		アサダ		0.03		0.008		0.07		0.02				
	カバノキ			0.05	0.03	0.50	0.11	0.04	0.07	1.01	0.20				
	ハンノキ			7.21	8.65	13.68	8.59	8.31	7.51	12.79	8.81	3.38	4.90	5.88	4.21
ぶな	ブナ			0.09	0.09	0.07	0.08								
	コナラ			3.45	2.45	2.59	2.99	5.73	2.52	3.34	3.96	0.38	0.70	1.06	0.61
	タリ		タリ		0.06	0.07	0.02						0.14		0.04
にれ	ニレ			3.72	2.76	2.73	3.23	4.39	4.14	3.19	3.99	1.35	0.98	1.06	1.27
	ケヤキ				0.06	0.14	0.03								0.53
かわ	タワ			1.32	1.27	2.44	1.48	1.38	1.68	3.34	1.83	0.19	0.56	1.06	0.37
かつら	カツラ		カツラ	0.17	0.34	0.28	0.31	0.04	0.07		0.06	0.09	0.14	1.06	0.28
もくれん	モクレン			1.89	1.73	2.08	1.76	1.14	1.33	1.45	1.26	1.25	0.98	2.13	1.23
ゆきのした	アジサイ		ノリウツギ	3.60	3.25	3.24	3.26	2.87	1.54	0.43	1.89	0.19	0.14	1.06	0.28
			ツルアジサイ	0.15	0.15		0.21	0.38	0.35		0.38				
ばら	サクラ			0.95	1.45	1.00	1.07	1.52	1.54	0.87	1.42	0.38	0.84		0.42
	ナナカマド			0.13	0.09	0.14	0.16	0.14	0.21	0.29	0.22				
	リンゴ			0.01			0.008								
まめ	イヌエンジュ		イヌエンジュ	2.02	2.51	3.89	2.49	3.63	4.14	4.94	4.07	0.19	0.28	0.53	0.28
	ハギ			0.09	0.09	0.13		0.23	0.14		0.28				
みかん	キハダ			0.66	0.99	0.57	0.74	0.76	0.91	0.58	0.81	0.96	0.70	1.60	0.85
にがき	ニガキ		ニガキ	0.07	0.03		0.04	0.14	0.07		0.08				
うるし	ウルシ			0.01	0.03		0.01	0.04	0.07		0.04				
にしきぎ	ニシキギ			0.19	0.24	0.21	0.19	0.28	0.28	0.43	0.30				
	ツルウメモドキ			0.07			0.07	0.09			0.08				
みつばうつぎ	ミツバウツギ		ミツバウツギ	0.76	1.21	0.57	0.81	1.48	2.38	0.87	1.54				
かえで	カエデ			1.17	0.46	0.64	0.96	1.29	0.49	0.43	0.99	0.19	0.28		0.23
ぶどう	ブドウ		ヤマブドウ	0.07	0.03	0.07	0.05	0.09	0.07	0.14	0.08				
どちのき	トチノキ		トチノキ	0.09	0.66		0.07		0.07		0.02				
しなのき	シナノキ			1.79	1.02	0.50	1.24	0.04			0.02	4.35	3.08	1.06	3.45
またたび	サルナシ			0.19	0.09	0.07	0.15	0.33	0.14	0.14	0.24		0.14		0.09
うごぎ	ハリギリ		ハリギリ	3.94	3.97	3.24	3.52	0.90	0.49	0.43	0.89	7.45	9.39	15.50	8.51
	タラノキ		タラノキ	0.39	0.27	0.57	0.34	0.71	0.42	1.16	0.65				
	ウゴギ		コシアブラ				0.01				0.04				
みずき	ミズキ			0.01	0.03		0.01				0.04				
えごのき	エゴノキ			0.03			0.01	0.04			0.02				
もくせい	トネリコ			28.15	27.37	36.38	31.20	30.38	33.09	39.38	33.73	7.35	6.59	11.76	8.61
	ハンシドイ			2.90	3.10	2.44	2.98	5.78	6.18	3.92	5.76	0.09	0.28		0.14
	ニワトコ			0.21	0.12	0.14	0.16	0.47	0.21	0.29	0.32				
	ガマズミ			0.03			0.01	0.09			0.04				
散孔材A				1.17	0.65	0.64	0.68	1.62	1.40	1.30	1.48				
散孔材B				0.01			0.008	0.04			0.02				
散孔材C							0.07	0.08			0.14	0.02			
環孔材A							0.07	0.008			0.14	0.02			
広葉樹				0.05	0.18		0.08	0.04	0.35		0.12				
いね	タケ(ササ)			0.03			0.02	0.09			0.06				
	広葉樹の合計			82.92	80.69	90.27	84.20	98.13	97.25	97.38	97.84	34.36	36.32	48.66	36.87

## IV 木製品の種別報告

### 1 種別報告の概要

当遺跡から出土した木製品総計は11,612点で、当報告書を含めてすべて報告した。このうち実測図を示した製品は、B層：1点・B5層：23点・B4層：133点・B3層：836点・B2層：633点・B1層：279点・0B層：24点・表土層：34点・その他：8点の合計1,971点、総数の約17%である。残りの約83% 9,641点は、表によるデータ報告とした。遺構出土の製品は各遺構の報告で（章3節参照）行ない、報告書に東地区低湿度部（区）の報告をしたほかは、すべて層別別に報告した。

そこで今報告では層や地区・遺構で区切らない、木製品の種別報告を行うことにした。製品ごとの時期をわたる形態や規模・組み合わせ等の変化・不変化や、製品と樹種との関係の疎密などをとらえるきっかけになるものとする。

木製品の名称は、用途・形状からつけたもの、用途推定で用途と加工の両者から名付けたもの、用途不明で加工から呼称したものがある。種別報告にあたっては、当章と章の分類報告が必要になるため、表-1-3に示したごとく木製品分類に略号を与えた。これは用途や材からの分類で、大分類を以下のようにアルファベット大文字で表した。

A：舟関係    B：漁撈具    C：狩猟具    D：諸作業道具    E：運搬具  
 F：紡織編具    G：容器類    H：食用具    I：祭祀具    J：各種加工製品や部品  
 K：素材類    L：建築材類    M：樹皮    N：廃材等

さらに用途細分や形状から、中分類を数字、小分類を-数字で表現し、細部加工等による分類でアルファベット小文字（a：挟り付き・b：挟り入り・c：切り込み入り・d：有孔・h：長い・t：両端）を付し細分したものもある。この分類は同じような用途・形状・加工を持つものを集めやすくするための試的なもので未完成、今報告で便宜上使用する。

さらにこの表-1-3は、各報告書・各層ごとに分類された製品の報告がどうかを、実測図があるものはその掲載で、表掲載ものは網掛けで示している。次節の分類別報告で、当報告書に図を再掲載していないものの検索に使用する。

表-4・5は種別分類した木製品の層別出土数を表示したものである。どの層の何が多いか、絶対的な数字である。

この各出土数を層の出土合計で割り、各層における種別の構成比を計算したものが表-6・7で、同種の製品がどの層に多いかや、層ごとの製品量の変化や安定が相対的に比較できる。数値はわかり易くするために一律に100を掛けて小数第2位で四捨五入してある。特に比率の高いものはゴチック、継続して安定した製品供給されていると判断できるものには網掛けで連続性を示した。なお、この比較には総数11,612点中10%以上の出土のあるB3層・B2層・B1層とそれに近いB4層を対象とし、2%に満たないB層・B5層・0B層・表土層・その他は一部を例外として比較から除外している。

表-4・5と6・7からいえることは、出土点数が10点を超えるものは低湿度部の利用度に合わせて出土数は変移するものの、層中に占める割合の変化をみるとそれなりに安定して供給・使用されていると思われる。従って、擦文 中世 近世（アイヌ文化期）と、木製品に関しては大きな変化はないものと考えられる。これは曲物・箱物・漆椀など移入品である製品の推移をみても同様で、和人と交易関係の生活に占める状況は、木製品から見る限り擦文 アイヌ文化期と継承されていたものと

表 - 1 木製品種別分類と出土・掲載一覽(1)

分類	製品番号	製品名	年代(西暦)												
			I 128	II 129	III 130	IV 131	V 132	VI 133	VII 134	VIII 135	IX 136	X 137	XI 138	XII 139	
A 舟部材・舟用用具	A1-1	舟底材	2	1		1	1	2,3	4~5, 16~18	159	181(181)	181	182	176	05
	A1-2	舟縁材							6~11				1,2	1	05
	A1-3	舟側板							16~28				8,9	2~3	
	A1-5	舟部材							27~31				10~24	9~14	1
	A2-1	舟底突部							32~34				8,7	18~20	2
	A2-2	舟底突部接合部							35~45				26~35	21~23	
	A2-3	舟底突部接合部							46~79				47~81		
	A2-4	舟底突部接合部	4						80~84				82,83		
	A3-2	舟底突部接合部							85,86				84		
	A4	舟底突部接合部							87,88				84		
B 漁網具	B1	漁網具	8	8				5	92~95				26,68	40	
	B2	漁網具	5	5				10	96~91				87,89		
	B3	漁網具	10	10				7	96~103,105				24~28		
	B4	漁網具	7	7				8,9	104,109~120				76~79	24~28	
	C1-1	天中網							121~139				80~100	29~32	
	C1-2	天中網							140				33~37	38	
	C1-3	天中網							141				100	38	
	D1-1	網	11						142,143				109	41	
	D1-2	網							144,145				102	44	2
	D2	網							146,147				104	42,43	
C 網具	C1	網具							148,149				115,122~125,128	46~48	5
	C2	網具							149,150				120,119	49	
	C3	網具							151~153				130	4	
	D4	網具							154~161				126,121		
	D5-1	網具							162~162				116~119		
	D5-2	網具							164~164				125	56	
	D6	網具							165				131~134	50	
	D6h	網具							166				160		
	D6s	網具							167~168,167,168				137~153,402	51~55	
	D6t	網具							169				154		
D 網具	D6u	網具							170				161		
	D6v	網具							171				155~157	3	
	D6w	網具							172				159		
	D6x	網具							173				162		
	D6y	網具							174				163		
	D6z	網具							175				164		
	D6aa	網具							176				165		
	D6ab	網具							177				166		
	D6ac	網具							178				167		
	D6ad	網具							179				168		
E 漁網具	E1	漁網具							180				181		
	E2-1	漁網具							182				183		
	E2-2	漁網具							184				185		
	E3	漁網具							186				187		
	E4	漁網具							188				189		
	E5	漁網具							190				191		
	E6	漁網具							192				193		
	E7	漁網具							194				195		
	E8	漁網具							196				197		
	E9	漁網具							198				199		



表 - 2 木製品種別分類と出土・掲載一覧(2)

分類	製品略号	製品名	存在は調査		128集				146集			150集			176集				
			I B1	I B2	I B3	I B4	I B1	O B	表土	I B1	I B3	I B4	I B1	I B2	I B3	O B	他		
F 新 織 織 具	F1-1	繩子																	
	F1-2	海綿挟付割材加工製品(繩具)																	
	F2-1	縄(128集の37, 176集の267食)			37														
	F2-2	短丸木材・枝材周縁加工製品(縄)																	
	F2-3	挟付枝材加工製品(縄?)																	
G 容 器 類	F3	茅針																	
	G1	桶?の胴板・底板																	
	G2-1	曲物																	
	G2-2	曲物底板																	
	G3	箱物																	
	G4-1	漆塗り竹製品			17														
	G4-2	漆塗り竹製品																	
H 食 用 具	G5	葉木板																	
	G6	割り物																	
	G7	樹皮製容器																	
	H1	大盆器																	
	H2	匙・匙状製品																	
	H3	匙																	
	H4	箸																	
I 祭 祀 具	H5	串・串状製品																	
	H6	杵木板																	
	H7																		
	I 1	イクハスイ																	
	I 2	木幣																	
	I 3	横道具																	
	I 4	花矢																	
J 各 種 加 工 製 品 ・ 部 品	I 5	新穀棒																	
	I 6	珣目入加工製品																	
	J1-1(b)	総枝材加工製品(挟入含む)																	
	J1-2	枝材加工製品																	
	J1-2a	挟付枝材加工製品																	
	J1-3	丸木材・段木材加工製品																	
	J1-3a	挟付丸木材加工製品																	
	J1-3・J2-1	両端挟付有孔丸木材・半割材																	
	J2-2・J2-4の edt	材・割材・心持材加工製品 (150集の有孔丸木材・割材加工製品)																	
	J1-3odt	両端切込付(有孔)丸木材・心持材加工製品																	
	J2-4ct	持材加工製品																	
	J2-1	半割材加工製品																	
	J2-1a	挟付半割材加工製品																	
	J2-2	割材加工製品 (150集の角材加工製品・角材)																	
J2-2a	挟付割材加工製品																		
J2-2d	有孔割材加工製品																		
J2-3(d)	偏割材加工製品(有孔含む)																		
J2-3a	挟付偏割材加工製品																		
J2-3at	両端挟付偏割材加工製品																		
J2-4(d)	心持材加工製品(有孔含む)																		
J2-4a	挟付心持材加工製品																		

表 3 木製品種別分類と出士・掲載一覽(3)

分類	製品番号	製品名	129集	143集	159集	171集
			1E1	1E2	1E3	1E4
J 木製品	J3-1	製材加工製品	42,43	44,45	46	47
	J3-1a	製材加工製品	36	37	38	39
	J3-1b	製材加工製品	40	41	42	43
	J3-1c	製材加工製品	44	45	46	47
	J3-1d	製材加工製品	48	49	50	51
	J3-1e	製材加工製品	52	53	54	55
	J3-1f	製材加工製品	56	57	58	59
	J3-1g	製材加工製品	60	61	62	63
	J3-1h	製材加工製品	64	65	66	67
	J3-1i	製材加工製品	68	69	70	71
	J3-1j	製材加工製品	72	73	74	75
	J3-1k	製材加工製品	76	77	78	79
	J3-1l	製材加工製品	80	81	82	83
	J3-1m	製材加工製品	84	85	86	87
K 木製品	K1-1	製材加工製品	88	89	90	91
	K1-2	製材加工製品	92	93	94	95
	K1-3	製材加工製品	96	97	98	99
	K2-1	製材加工製品	100	101	102	103
	K2-2	製材加工製品	104	105	106	107
	K2-3	製材加工製品	108	109	110	111
	K2-4	製材加工製品	112	113	114	115
	K3-1	製材加工製品	116	117	118	119
	K3-2	製材加工製品	120	121	122	123
	K3-2b	製材加工製品	124	125	126	127
	K4	製材加工製品	128	129	130	131
	K4	製材加工製品	132	133	134	135
	K4	製材加工製品	136	137	138	139
	K4	製材加工製品	140	141	142	143
L 木製品	L1-1	製材加工製品	144	145	146	147
	L1-2	製材加工製品	148	149	150	151
	L3	製材加工製品	152	153	154	155
	L1-2	製材加工製品	156	157	158	159
	L4	製材加工製品	160	161	162	163
	L5	製材加工製品	164	165	166	167
	L6	製材加工製品	168	169	170	171
	M1	製材加工製品	172	173	174	175
	M2	製材加工製品	176	177	178	179
	M3	製材加工製品	180	181	182	183
	M4	製材加工製品	184	185	186	187
	M5	製材加工製品	188	189	190	191
	N	製材加工製品	192	193	194	195
	N1	製材加工製品	196	197	198	199
N2	製材加工製品	200	201	202	203	
N3	製材加工製品	204	205	206	207	
N4	製材加工製品	208	209	210	211	

みられる。また、他層と比べて比率の高い値を示すものが、B2層に多い。これが擦文 アイヌ文化期の道具や生活の変化をわずかながらに示す材料なのかもしれない。これらについては、木製品に使用された樹種の観点を含めて、終章で若干考察してみたい。

次節では種別ごとの報告を分類に沿って行い、代表的な製品の集成図(図 - 1~38)を掲載した。ただし数は多いが形態変化の乏しいC1 - 1矢中柄・D11楔・H4箸・H5串・L5細杭・L6刺し杭や、数が少なく形態変化も乏しいC1 - 3矢柄・G2 - 2曲物底などや、多様な形態のJ各種加工製品のほとんどと、K素材・M樹皮・N廃材は図表から除外してある。表 - 8~20は図 - 1~38に掲載した木製品一覧表。これら図表には出土グリッドや計測値のデータ・展開した図が確認できるよう層別に報告した報告書と掲載を表示してある。

また、彫刻や刻線などの加飾のある製品と漆塗り椀の文様集成を行ない、次々節以降、それぞれ図 - 39~41、図 - 42・43に掲載した。個々の製品の加飾は種別報告の中では触れず、集成で説明してある。

## 2 種別報告(図 - 1~38、表 - 8~20、図版 - 1~40)

### (1) 集成図の概略

- 図 - 1 : 舟敷と舳や鱧の舟材の代表例
- 図 - 2 : 板綴舟の舷側板 再利用品も含む
- 図 - 3 : 舟本体に組み込む部品の例
- 図 - 4 : 車糧の完形品と柄や軸穴部
- 図 - 5 : 車糧の水掻部と早糧
- 図 - 6 : 回転式離頭話(キテ)と魚叩き棒(イサバクニ)の集成
- 図 - 7 : 「やす」と思われる製品と類似の矢 網の浮子
- 図 - 8 : 掛矢・横槌・縦槌 掛矢の類品として制載棒を掲載
- 図 - 9 : 斧柄と道具の柄 挟り入り・切り込み付の柄を細工のないものと比較  
長頭部・小頭部削り出しの柄をまとめた。
- 図 - 10 : 小頭部削り出しの柄と有孔の柄 裝飾付頭部の柄を並べた
- 図 - 11 : 挟付長柄と挟付柄・突起削り出しの柄
- 図 - 12 : 発火具と挟み木(灯火用とは限らない)
- 図 - 13 : 鉤・吊り鉤・炉鉤・鉤鎌 鉤類の比較
- 図 - 14 : まな板と作業台の比較
- 図 - 15 : 諸道具類比較 マキリ・小刀関係 樹皮製品 固定補助具 両頭・溝入り楔  
浮子類似品 挟り・溝入りの組み合わせ製品 など
- 図 - 16 : かんじき・下駄・雪かき 編具関係
- 図 - 17 : 丸木・枝材等の短材加工品比較 錘など
- 図 - 18 : 曲物比較
- 図 - 19 : 漆塗椀比較
- 図 - 20 : 刺り物(鉢)比較
- 図 - 21 : 刺り物(盆・皿)と挽物(椀)比較
- 図 - 22 : 筥比較
- 図 - 23 : 舌状筥と大型筥

表 - 4 種別木製品の層別出土数(1)

木製品の種別	層位										計
	IB	IB5	IB4	IB3	IB2	IB1	0B	表土	他		
A1-1			1	13	3	2					19
A1-2			2	8	6	5					21
A1-3					2						2
A1-4				11	17	9	1				38
A1-5				5	2						7
A2-1			1	24	14	6	1				46
A2-2				11	13	3			1		28
A2-3				16	5						22
A3-1		1		6	11	1		1			19
A3-2					2						2
A4				2	1						3
B1			1	2	1						4
B2			1	4	2	2					9
B3		1	1	3	2	1					8
B4		1	1	9	7	6					23
C1-1				17	4	5					26
C1-2			1	2	20	21	5				49
C1-3				1	1	1					3
C2				3	1						4
D1-1				2		1					3
D1-2				2	1						3
D2			1								1
D3				2		2					4
D4			1	3	1				1		6
D5-1			1	1	1						3
D5-2						1					1
D6				6	30	18	4	1	1	2	62
D6h				1	1						2
D6a				1	2	1	1				5
D6b					1						1
D6c					1						1
D6d					5	2					7
D6ah					8	3					11
D6ad-D6adh					1	1					2
D7			1	1	1	1					4
D8			1	4	4	1		1			11
D9				1	1						2
D10					1						1
D11			3	40	36	9					88
D12				2	1						3
D13				7	1			1			9
D14				2	3	2					7
D15				1	1						2
D16					1						1
E1				1							1
E2-1				1							1
E2-2				4							4
E3							1				1
F1-1				1							1
F1-2				2	2						4
F2-1					1	2					3
F2-2			1	5		2					8
F2-3						1					1
F3						1					1
G1				4							4
G2-1				12	9	1					22
G2-2			1	4	9	4					18
G3				7	3	2					12
G4-1			4	16	11	5	2				38
G4-2				1							1
G5				2	1						3
G6			1	12	3	3					19
G7			1	2	1	1					5
H1				8	9	9	5				31
H2											1
H3											1
H4			1	2	17	23	7	1			51
H5			6	13	104	56	28	1			208
H6					2	2					4
H7			1	3	3						7

表 - 5 種別木製品の層別出土数(2)

木製品の種別	層位	層位										計	
		II B	I B5	I B4	I B3	I B2	I B1	0B	表土	他			
I 1	イグバスイ		1	5	52	73	10						141
I 2	木幣				2	2							4
I 3	模造品				4								4
I 4	花矢							1					1
I 5	銅鏡棒							1					1
I 8	指目入加工製品				3	1							4
J1-1(b)	細枝材加工製品		1	10	5	1	1						18
J1-2	枝材加工製品		3	27	16	3	3						52
J1-2a	挟付枝材加工製品				1	3							4
J1-3	丸木材・脱木材加工製品		1	6	10	6							23
J1-3a	挟付丸木材加工製品			3	1	1							5
J1-3・J2-1・ 2-4(adt)	両端挟付有孔丸木材・半割材・割材・心持材加工製品				4	7	1						12
J1-3odt	両端切込付(有孔)丸木材												
J2-4ct	心持材加工製品					3	1						4
J2-1	半割材加工製品			2	16	8	2						28
J2-1a	挟付半割材加工製品					1							1
J2-2	割材加工製品	2	2	26	135	72	32	11	1	3			284
J2-2a	挟付割材加工製品		1		6	6	2	1					16
J2-2d	有孔割材加工製品							2					2
J2-3(d)	扁割材加工製品			2	23	13	5	1		1			45
J2-3a	挟付扁割材加工製品		1		2			1					4
J2-3at	両端挟付扁割材加工製品				1								1
J2-4(d)	心持材加工製品		1	2	8	1							12
J2-4a	挟付心持材加工製品					4	1						5
J3-1	板材加工製品		2	11	127	29	12	2		1			184
J3-1a	挟付板材加工製品				7	5							12
J3-1b	挟入板材加工製品						1						1
J3-1d	有孔板材加工製品				2								2
J3-1ad	挟付有孔板材加工製品						2						2
J3-1ac	裝飾付板材加工製品					1							1
J3-2	板加工製品				4	26	10			1			41
J3-2a	挟付板加工製品					2							2
J3-2d	有孔板加工製品				6	12	3			1			22
J4(a)	細板(材)加工製品				5	27	6						38
J5	椀目板加工製品			2	3	6							11
J6-1	ピン状製品		1		4	7	3	1					16
J6-2	輪状製品			5	23	32	12	3			2		77
J7	棒酒應伏製品				30	14	4						48
J8	礎状製品			1	2	1							4
J9	弓状製品			1									1
J10(c)	彫加工品							2	1	1			4
J11	竹材・加工製品			1	1								2
K1-1	細枝材	3	9	71	429	320	123	6		6			967
K1-2	枝材	8	14	109	699	460	226	21	1	7			1545
K1-3	丸木材・脱木材	1	7	33	243	128	107	18		1	7		545
K2-1	半割材	2	5	22	102	43	31	3			2		210
K2-2	割材	2	13	150	416	202	85	19		9			806
K2-3	扁割材・扁半割材	3	5	47	156	113	43	3		3			373
K2-4	心持材	1		6	17	8	5	2					39
K3-1	板材	3	4	24	157	83	19	2		2			294
K3-2	板			1	5	43	52	12	1	1	1		116
K3-2d	有孔板(材)					10	18	10					38
K4	薄板・細板(材)		1	8	16	53	20	1			2		101
K5	椀目板	1	16	58	498	215	41	2					831
L1-1	柱		1	13	53	32	32	6	1	3			141
L2	建材		2	21	170	105	55	5		2			380
L3	建築部材			23	80	55	18	4					180
L1-2	脱木杭			5	46	35	9	1			2		98
L4	杭	1	2	19	130	129	85	7	101	6			450
L5	細杭			12	87	41	19	3	7	1			170
L6	割し杭	1		9	50	28	12	3		1			104
M1	樹皮加工製品				3		1						4
M2	樹皮製絞め具				1	1							2
M3-1	纏帯状樹皮製品				1		4						5
M3-2	帯状樹皮				6	4	1						11
M4	溝巻状樹皮				27	26	10	1		2			66
M5	樹皮	4	13	27	19	22	2						87
N1	割材			7	26	11	16	2					53
N2	切片	7	17	140	582	317	174	28			1		1271
N3	木端	2	1	25	103	47	21	1					201
N4	炭化材	110	5	42	53	30	35	7					282
計		151	123	980	5226	3290	1467	181	118	76			11612

表 - 6 種別木製品の層別構成比(1)

木製品の種別	層位										点数計
	IB	IB5	IB4	IB3	IB2	IB1	OB	表土	他		
A1-1			102	249.9	9.1		13.0				19
A1-2			204	15.3	18.2	34.1					21
A1-3					6.1						2
A1-4				21.0	0.1			55.2			36
A1-5				9.6	9.1						7
A2-1			104	45.9	42.5	60.0		55.2			46
A2-2				21.0	3.5	20.4				131.6	28
A2-3				32.6	18.1						22
A3-1		81.3		11.5	33.4	5.0		84.7			19
A3-2					6.1						2
A4				3.0	3.0						3
B1			102	3.0	3.0						4
B2			102	7.7	6.1	13.0					9
B3		81.3	102	5.7	6.1	6.0					8
B4			102	17.2	21.5	40.0					23
C1-1				32.0	12.1	36.1					26
C1-2		81.3	204	38.3	63.0	84.0					49
C1-3				1.9	3.0	6.0					3
C2				6.7	6.0						4
D1-1				3.0		6.0					3
D1-2					3.0						1
D2			102	3.0		13.6					5
D3				3.0							2
D4			102	3.7		6.0			131.6		6
D5-1			102	1.9	3.0						3
D5-2						6.0					1
D6			61.6	67.4	84.1	27.0	55.2	84.7	263.1		62
D6h				1.9	3.0						2
D6a				1.9	6.1	6.0	55.2				5
D6b					3.0						1
D6c					3.0						1
D6d				6.0	6.1						7
D6ah				18.1	9.1						11
D6ah-D6ahh				1.9	3.0						2
D7			102	1.9	3.0	6.0					4
D8			102	7.7	12.1	3.0		84.7			11
D9				1.9	3.0						2
D10				1.9							1
D11			30.6	70.7	109.4	81.3					88
D12				3.0	3.0						3
D13				13.4	3.0		55.2				9
D14				3.0	9.1	13.0					7
D15				1.9	3.0						2
D18					3.0						1
E1				1.9							1
E2-1				1.9							1
E2-2				7.7							4
E3						6.0					1
F1-1				1.9							1
F1-2				3.0	6.1						4
F2-1					3.0	13.6					3
F2-2			102	9.6		13.6					8
F2-3						6.0					1
F3					3.0						1
G1				2.7							4
G2-1				27.0	27.0	6.0					22
G2-2			102	2.7	27.0	27.0					18
G3				13.4	9.1	13.0					12
G4-1			40.0	32.6	33.4	36.1	170.5				38
G4-2				1.9							1
G5				3.0	3.0						3
G6			102	23.0	9.1	20.0					19
G7				3.0	3.0						1
H1			102	3.0	3.0	6.0					5
H2			81.3	17.2	27.4	36.0					31
H3						6.0					1
H4		81.3	204	32.6	69.0	47.0	55.2				51
H5			40.0	132.7	195.0	170.2	180.0	55.2			208
H6				3.0	6.1						4
H7			102	9.1	9.1						7

表 - 7 種別木製品の層別構成比(2)

木製品の種別	層位	IB	IB5	IB4	IB3	IB2	IB1	OB	表土	他	点数計
I 1	イクハスイ		81.3	51.0	199	221.8	352				141
I 2	木割				3.8	6.1					4
I 3	模造品				2.9						4
I 4	花矢							ΔB			1
I 5	新製薄							ΔB			1
I 6	簡易入加工製品				5.9	3.0					4
J1-1(b)	挟持材加工製品			10.2	19.7	15.2	3.8	55.2			18
J1-2	挟持材加工製品			30.6	51.7	48.5	3.6	165.7			52
J1-2a	挟持材加工製品						3.0	20.4			4
J1-3	丸木材・板木材加工製品		81.3		11.5	33.4	40.9				23
J1-3a	挟持丸木材加工製品				5.9	3.0	ΔB				5
J1-3-J1-1-2-4(b)an	両端挟持有丸木材・半割材・割材・心持材加工製品				7.7	21.3	ΔB				12
J1-3cdt	両端切込材(有丸木材・心持材加工製品)						8.1	ΔB			4
J2-4ct											
J2-1	平割材加工製品			20.4	30.6	24.3	13.6				28
J2-1a	挟持平割材加工製品						3.0				1
J2-2	割材加工製品	132.5	162.6	263.3	263.3	218.2	218.1	469.3	84.7	394.7	284
J2-2a	挟持割材加工製品		81.3		11.5	16.7	13.6	55.2			10
J2-2d	有孔割材加工製品										2
J2-3(d)	層割材加工製品			20.4	44.0	39.5	3.9	55.2		131.6	45
J2-3a	挟持層割材加工製品		81.3		3.8		ΔB				4
J2-3ct	両端挟持層割材加工製品					1.9					1
J2-4(d)	心持材加工製品		81.3	20.4	15.8	3.0					12
J2-4a	挟持心持材加工製品					12.2	ΔB				5
J3-1	板材加工製品		162.6	112.6	243.0	32.2	81.6	110.8		131.6	184
J3-1a	挟持板材加工製品				13.4	15.2					12
J3-1b	挟入板材加工製品						ΔB				1
J3-1d	有孔板材加工製品				3.8						2
J3-1ad	挟持有孔層材加工製品						13.6				2
J3-1ac	両端層材加工製品						3.0				1
J3-2	板加工製品				7.7	79.0	68.2			131.6	41
J3-2a	挟持板加工製品					6.1					2
J3-2d	有孔板加工製品				11.5	38.5	21.4		84.7		22
J4(a)	層板(材)加工製品				5.5	82.1	40.9				38
J5	徑目板加工製品		81.3	20.4	5.9	16.2					11
J6-1	ピン状製品		81.3		7.7	31.3	20.4	55.2			16
J6-2	棒状製品			81.0	44.0	97.2	81.6	198.2		263.1	77
J7	棒滑面状製品				27.4	42.6	27.3				48
J8	棒状製品		10.2		3.8	3.0					4
J9	弓状製品		10.2								1
J10(c)	動加工品						13.6	55.2	84.7		4
J11	杆材・加工製品		10.2		1.9						2
K1-1	層材	198.7	731.7	84.9	601.9	972.5	5,389	331.5		789.5	967
K1-2	挟材	529.5	1189.9	117.2	137.5	129.2	154.5	160.8	84.7	921.1	1545
K1-3	丸木材・板木材	66.2	509.1	356.7	465.0	393.1	729.4	394.8	84.7	921.1	545
K2-1	平割材	132.5	403.5	224.5	195.2	132.1	211.2	155.7		263.1	210
K2-2	割材	132.5	162.6	1630.8	788.0	314.0	570.4	1069.8		1132.2	896
K2-3	層割材・層平割材	198.7	403.5	279.5	258.5	343.3	293.1	165.7		394.7	373
K3-4	心持材	66.2		61.2	32.3	54.1	36.1	110.5			39
K3-1	板材	198.7	325.2	244.9	300.4	252.1	125.2	110.5		263.1	284
K3-2	板		81.3	51.0	32.2	168.1	81.6	55.2	84.7	131.6	116
K3-2d	有孔板(材)				18.1	64.7	68.2				38
K4	薄板・層板(材)		81.3	81.6	30.6	161.1	136.3	55.2		263.1	101
K5	徑目板	66.2	1300.8	891.8	842.8	638.5	277.5	110.5			831
L1-1	柱		81.3	132.7	101.4	97.3	218.1	331.5	84.7	394.7	141
L2	層材		162.6	214.3	328.3	319.1	374.8	276.2		263.1	380
L3	建築部材			234.7	153.1	162.1	122.2	221.0			180
L1-2	板木杭			31.0	88.0	106.4	61.8	56.2		263.1	98
L4	杭	66.2	162.6	193.9	248.8	392.1	374.8	386.7	8669.3	789.5	450
L5	層材			122.4	166.8	124.8	128.8	166.7	593.2	131.6	170
L6	割工杭	66.2		91.8	95.7	66.1	81.6	155.7		131.6	104
M1	層板加工製品				5.9	3.0	ΔB				4
M2	層板製成済み				1.9	3.0	27.3				5
M3-1	帯状面皮製品						8.8				1
M3-2	帯状面皮				11.5	12.2	8.8				11
M4	帯状面皮				21.7	30.0	26.2	55.2		263.1	66
M5	層皮	264.9		132.7	51.7	57.2	150.0	110.5			87
N1	割材			91.4	47.9	37.4	106.1	110.5		134.6	63
N2	切片	463.6	1382.1	1428.6	1113.7	983.5	1183.1	1545.8		789	1271
N3	木割	132.5	81.3	263.7	195.1	142.5	143.1	55.2		131.6	201
N4	炭化材	7284.8	403.5	428.6	101.4	91.2	236.6	386.7			282
点数計		151	123	980	5226	3290	1467	181	118	76	11612

- 図 - 24: 竪杵集成
- 図 - 25: 祭祀具 イクバスイ・木幣(イノウ)・刻みや彫刻の入ったもの
- 図 - 26: 端部に抉りや角孔を開けた材 ほぼ同一規格・同形品の比較 杵材?
- 図 - 27: 柱比較その1
- 図 - 28: 柱比較その2
- 図 - 29: 股木杭比較
- 図 - 30: B1層の建材その1
- 図 - 31: 0B層の建材・ B1層の建材その2・ B2層の建材その1
- 図 - 32: B2層の建材その2
- 図 - 33: B3層の建材その1
- 図 - 34: B3層の建材その2
- 図 - 35: B4層の建材
- 図 - 36: 建築部材その1
- 図 - 37: 建築部材その2
- 図 - 38: 杭比較

## (2) 分類別報告

### A 舟関係(舟部材・舟用具)

A1-1・2: 舟敷・舟材: 丸木舟や板綴舟の舟敷の一部分や破片(A1-1)が19点、舟敷に取り付けた舳(鱧)材が舟本体の舳(鱧)(A1-2)が21点出土している。図-1は舟敷と舟材の代表例である。舟敷は巨木から横木取りされ、底や側が厚さ2〜3cm前後に削り込まれている。舳(鱧)には B3-1・2・10や B1-2のように先端平板部が削り出されたものがあり、B3-2や B1-2にはここに木幣装着孔が開けられている。

舟敷と舳(鱧)材を未掲載品も含めて樹種でみると、40点中シナノキ属が12点、ハリギリ11点、ハンノキ属5点、トネリコ属4点、ヤナギ属ハコヤナギ属各3点と続く。シナノキ属(推定でシナノキかオオバボダイジュ)の舟は、出土品では他に千歳市美々8遺跡の B3層(擦文文化期)の有孔板材(舷側板、『美沢川流域の遺跡群』北埋調報102)と、0B層(1667〜1739年)の舷側板(『美沢川流域の遺跡群』北埋調報114) オサツ2遺跡の舷側板・舟部材(『ユカンボシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査』市文調報 )がある。札幌市K39遺跡では擦文文化期のシナノキ属の舟や部材が発掘(『K39遺跡代6次調査』市文調報65)されている。また、聞き取りによって八雲(犬飼ほか 1953)と長万部(知里 1953)でシナノキの舟が知られている。特に長万部では、メカジキの吻骨に突き刺されても割れないように、舟底は必ずシナノキで作ったという。ハリギリは加工しやすく、各地で舟の素材として使われている。ハンノキ属は舟本体の材としてではなく部材として使われることが多いことが、当遺跡や美々8遺跡例で知られる。

また、B2-1は舳(鱧)から舟底にかけての部分であるが、内法で10cmほどの深さしかなく、縁も滑らかに加工されていることから、(1) B1-1と同じく、舟廃用後に槽として利用されたものと思われる。

A1-4: 舷側板: 板綴舟の舷側板で、38点出土している。図-2に代表例を示した。四角くあけられた綴り孔の横方向の間隔は、ほぼ10〜40cmにおさまり、5cmが10cm相当の単位が存在している。個体では大きさにより厚さに違いもあるが、概ね2cm前後の均一な厚みを持つ大型の板で



ある。本来の幅を保っているもの、舳（鱧）付近の部位の板のほか、舷側板を再利用した有孔板製品もある。斜辺をもった舳（鱧）付近の板の出土が多いのは、幅を減じるため再利用しにくく廃棄されやすいためだろうか。未掲載品も含めて樹種でみると、38点中ハリギリ11点、モミ属8点、ハンノキ属8点、ハコヤナギ属4点と続きシナノキ属・ヤナギ属・トネリコ属・モクレン属もある。A1-1～5の舟用材で、舷側板にだけモミ属が出現し数量も多いのが特徴的である。

A1-3・5：舟縁材・舟部材：その他の舟本体の部材で、舟縁材（A1-3）と舟部材（A1-5）がある。図-3にB2-6・8・9とB3-27・29～31を掲載した。舟縁材は丸木舟や板綴舟の縁に取り付けられる長大な部材で、B2-8は長さ4m弱の完形品で、舟形の合わせて緩くカーブしている。桁目取りした材の2カ所に膨らみを残し、車權の受台部（タカマ）を設けている。片端部は舟縁材をさらにつなぐための段差を切り込んでいる。舟縁との固定は、片端部付近の側部の挟りと胴部5カ所の角孔でなされる。このうち車權受台部間のほぼ中間に開けられた1孔は車權受台部に転用されたようで、2カ所の車權受台部と同じく軸（タカマ・チ）が残存している。車權受台部間の結合孔を急速変更したために、その脇に別の孔をあけたものと考えられる。同9も折れているが同じ構造で、板目取りした材に膨らみを残して車權受台部を設け、片端には舟縁材をつなぐための切り込み段差がある。いずれもキダ属の材である。管見ではアイヌの丸木舟や板綴舟の絵図や模型・出土品でも確認しておらず、初めての出土品といえる。今後、和船との比較検討が必要となってくる。

B2-6とB3-27・30・31は台形状の板。逆台形にすると舟内部の仕切り板兼構造材と見ることができ、29も31と似た挟りが付き、構造材とみられる。

A2-1：車權：舟の車權で46点出土している。図-4に車權と車權の柄や軸孔部分、図-5前半に車權の水撞部の代表例を示した。移行部もみられる。32～35は水撞部である。柄は隅丸角一略円形に削られており、軸孔までの長さはおよそ50～80cmである。長さ調整のためか軸孔が2～3孔確認できるものも多い。孔径は使用度により3～5cmである。軸孔から水撞部への移行部は略円形に削られており、距離は柄よりもやや長い。水撞部は断面レンズ状で稜線をもつものもある。先端形は、体部と同じ幅で丸みを持つもの・細身になるもの・山形になるものがある。

未掲載品も含めて樹種でみると、46点中ハンノキ属16点、モクレン属16点、サクラ属4点と3者で大半を占める。前2者ではケヤマハンノキ・ヤチハンノキ・ミヤマハンノキ・ホオノキ・キタコブシが推定でき、比較的一般的で、材の長さの確保できる樹種として、車權用材に選定されているのであろう。注目されるのは、カラマツ属とアスナロである。樹種としては遺跡周辺のものではなく、交易者の舟の糧として持ち込まれたものである。本州・北海道の他例を探索することで、交易等の地域の連携が顕在化してくるであろう。

A2-2：車權受台部：車權の受台部で「タカマ」と呼ばれ、板綴舟の舟縁に取り付けて車權の動きの支点を形成する舟の部品である。28点出土し、支点となる軸（タカマ・チ）を差し込む孔が開けられた軸差込式17点と、軸が本体から出た枝である軸枝利用式9点がある。軸枝利用式全点と軸差込式の代表例を図-3に示した。軸枝利用式は枝が成育した方向に軸角度がついており、舟に装着する際、左右の制約があったものもあったと思われる。軸差込式の軸孔は丸形と角形がある。両端には舟縁に固定するための挟りが入っている。割材からの加工が一般的だが、軸枝利用式には樹心のある材も使用する。B2-42のように舟縁材の再利用品と思われる、軸孔と固定部の距離が長いものもある。B1-22の軸両脇には縦3本1組のシロシが刻まれている。刻線等については次節で別に触れる。樹種ではモクレン属6点・モミ属5点・ヤナギ属4点・オニグルミ3点等で、B3層の軸枝利用式でモミ属3点、B2層の軸差込式でモクレン属3点が目を引く。

A 2 - 3 : 車權受台部軸 : 軸差込式の車權受台部に挿入し、車權の支点となる軸「タカマ・チ」である。22点のほか軸状製品とした中にも可能性が高い物が数点ある。枝材から作られたものが多い。頭部が明瞭なもの・軸部に向かって徐々に径を減じるもの・頭部軸部の径がほぼ同じもの・両端とも軸部などがある。軸部の加工が明瞭なものでは丸軸と角軸があり、使い減りと思われる摩耗痕がみられるものもある。トネリコ属とハシドイ属で半数以上を占める。

A 3 - 1 : 早權 : 早權19点で図 - 5後半に代表例を図示した。水掻部の幅広いバドル形10点、幅狭で長い水掻部のオ - ル形6点、未製品2点、柄部1点である。車權水掻部の可能性があるものも含む。

B 2 - 55の柄部端には2列の段があり、持ち手を嵌め込んだ痕と思われる。19点中モクレン属7点・サクラ属4点、ハンノキ属2点・トネリコ属2点で、車權と同様に樹種選定されていたものであろう。

A 3 - 2 : 權持ち手 : 權の柄部端に取り付ける持ち手。出土は B 2層の2点のみ。B 2 - 62は反りがあり両端部が幅狭になる持ち手、B 2 - 63は直棒状で装着孔に直交して固定用の木釘孔がいている。

A 4 : あか汲み : 舟の中に入った水を掬い出す道具「あか汲み」で B 3層から2点、B 2層から1点出土している。横木取りの割り物で、ヤナギ属・ハコヤナギ属・ハンノキ属という舟を構成する材で作られている。

## B 漁撈具

B 1 : 浮子 : 紡錘状・棒状に削り整形した網の浮子であろう。片端部に固定の袢りと摩耗痕がみられる。B 3 - 88と B 2 - 64は持ち込まれた材の再利用と思われる。B 4 - 5と B 3 - 87は外皮を残したハンノキ属材の加工品。図 - 7下段に全4点を示した。図 - 15の下段3点も浮子の可能性がある。

B 2 : 魚叩き棒 : 捕獲後の魚の頭を叩く棒。図 - 6下段に全9点を示した。叩き部には使用痕が認められる。握部と叩き部の境が不明瞭なもの、叩き部と握部が明瞭に分かれているものがある。後者には握部尻が野球バットのグリップエンド状になるものがある。B 2 - 65の握部尻には紐通しの角孔が開けられている。B 3 - 92の叩き部元と握部尻には文様彫刻が施されている。彫刻については次節で別に触れる。9点中4点がヤナギ属枝材を加工した製品。ヤナギは木幣を作る木で、魚叩き棒をヤナギで作るのは、魚の霊を神のもとに送るというアイヌ民族の精神文化の現れであろう。

B 3 : キテ中柄 : 8本とも一本式の回転式離頭鉋(キテ)の中柄。図 - 6上段に示した。棒との接合部は、裏面を平坦に袢り表面を削り込んだタイプと片側面を緩く斜めに削って形成してタイプがある。装着用の袢りは全周・半周・部分とあり、半周には二段のものもある。B 2 - 68の先端は鉋先装着部の細工削りが明瞭である。ノリウツギの割材を使用しているという共通点は、樹種選定と用材法に強いこだわりがあるものと言える。ノリウツギはアイヌ語で「ラスバ・ニ」、槍や鉋の中柄を作る木の意である(知里 1953)。

B 4 : やす : 漁獲用の「やす」か、狩猟用の矢に分類されるもの。鏃部は円錐形かそれ以上削り込み鋭さを持ち、その直下は円筒形になる。円筒形の下部には斜め下から逆刺しの加工が一周2〜3箇所入り、3箇所逆刺しの場合部分的に断面三角形をなす。さらに2〜4cmの明瞭な籠被ぎ部、長く先細りの茎部という構造である。鏃部や全体のフォルムが簡略化されたものもある。全23点を図 - 7に示した。96%22点がノリウツギの枝の割材から作られており、鏃部と中柄部が一体となっているこの手の製品も、中柄を作る木「ラスバ・ニ」=ノリウツギから作ったのだろう。同様の製品が近隣のオサツ2遺跡からも得られており(千歳市文調報 )、地域社会での道具の共通性をうかがわせる。

## C 狩猟具

C1-1: 矢: いずれも直接矢柄に装着する中柄一体形の矢が26本ある。先山形14点・先平形9点と平たい長三角形鏃を削り出し明瞭な筈被ぎ部と矢柄装着部を削り込んでいるもの3点がある。この3点を図-7に示した。ノリウツギの枝の割材加工96% 25点であるのは、「やす・矢」と同様の理由だろう。

C1-2: 矢中柄: 先端に鏃を、尾部を矢柄に装着するもので、49点すべて両端部が細く体部の太い中柄特有の形状をしている。前項の先山形の矢との判別や上下の見分けが難しいが、鏃装着部は先がより細く薄くなるもの判断し判別決定した。茎部が明瞭なタイプと不明瞭なタイプがある。鏃装着部と思われる加工を観察できるものや、矢の可能性のあるものもある。長さで約20cm・15cm前後・12~13cm・10cm未満のものに分けられる。80%39点がノリウツギの枝の割材加工である。中柄を作る木「ラスバ・ニ」の所以である。

C1-3: 矢柄: 矢柄が3点出土している。完形品は B3層に1点。弓弦に掛ける切り込みがある。

C2: 弓: 弓あるいは弓状の製品も4点しか出土していない。弭加工のあるもの、長短がみられる。

## D 諸作業道具

D1-1: 鞘: 小刀の鞘で、紐通しの張り出し部と孔のある樹皮製1点、合せ板作りが2点出土。各1点を図-22に示した。 B3-144は刀形に合わせて削り込んだ2枚の板を合わせ、樹皮で巻いて固定・装飾をしている。

D1-2: マキリ柄: 差込式のマキリ(小刀)の柄1点。全体が緩く外反し柄頭は下から上へ斜めに切られている。小口側は3cm幅で1段高く削り残されている。柄の中ほどまでマキリ茎が差し込まれるようで、薄くなっている胴部の一部が破損している。図-22に示した。

D2: 縦槌: 縦型の木槌で、柄孔式3点、柄枝利用式2点。各2点を図-8に示した。柄孔式は平角孔で B3層の2点は頭部と柄が同じ材(樹種)で作られている。柄枝利用式は両者とも短い頭部だが、いずれも両打面とも使用痕がある。

D3: 横槌: 丸木材から一木で作られた横型の槌。棒状・砧形の各1点を図-8に示した。両者とも加工は粗いが、使用痕らしいつぶれは顕著である。

D4: 掛矢: 大きさや形状から、杭などを打ち込む大型横槌、掛矢と判断した製品が6点ある。5点を図-8に示し、比較対象として(1) B1-29の制裁棒を先頭に並べた。丸木材を使ったバット状のもの、割材を使ったラケット状のものがある。

D5-1: 斧柄: 3点出土している。袋状鉄斧に対応する2点を図-9に示した。枝別れ材の幹を削りと削りて加工して斧台部とし、枝を柄部とした斧の柄。樹心部にあたる斧装着部は樹心を残したまま整形されている。斧台と柄の角度は約45°と70°である。斧装着が横位置ならば手斧柄となる。また斧装着せず、このままで縦槌になるものとも考えられる。 B4層の1点は縄文時代からの伝統を引く石斧用の柄である。

D5-2: 手斧柄: 板状鉄斧を載せる手斧の台部と思われる部品1点。台尻に柄の装着溝が約45°の角度で削り込まれている。

D6: 柄: 他の部品を装着して一体で道具となる製品の柄の部分で、頭部を削り出しただけのもの28点と、特徴ある細工や形態が確認できないもの34点とを総括する。全62点の代表例として頭部削出柄は図-9に5点・図-10に6点を、普通柄は図-9に6点示した。これらの柄は心持材を含む丸木材系の木取り29点、板材を含む割材系の木取り33点とほぼ半数ずつである。柄部の断面形をみ

ると、木取りに関係なく円形系と角形系が半々となっている。頭部削出柄の頭部形は、長頭・小頭・円柱状・瘤状・平片張出し・装飾付など多様である。装着部の加工を見ると、端部の削り・削ぎ落とし・長めの斜め削り・緩い抉り・尖った端部などがある。

B3-182の頭部張り出しには帯状の彫り、B2-115の頭部張り出しには横3本の刻線が入っている。形状・規模・木取りが類似しており、樹種も同じコナラ属であることから、同じ用途の製品といえる。B3-185・186などとともに端部にまで太さを増しており、これだけで何かを打つ道具がもしれない。装飾については次節で別に触れる。

樹種は19属と多彩で、トネリコ属10・クワ属8・ハシドイ属6・モミ属4・ヤナギ属・モクレン属・カエデ属各3点ほかとなり、出現率から見るとクワ属・ハシドイ属に特徴がある。「柄」は抉り付き・有孔・長・頭部削り出しなどの加工や形態の差異により、用途に多様性がある。

D6h：長柄：抉りや孔がなく、1mに達するであろう長めの柄2点。図-11のB3-183は先端に突起が削り出されている。他に加工のある長柄とともに後章でまとめる。

D6a：抉付柄：頭部側と思われる側面の1箇所に深い抉りが削り込まれた柄で、5点を扱う。図-11に2点掲載。後出のD6ah抉付長柄などが別用途と思われるために分類を進め、雑多なものがここに残っている。B2-119は短めの角柄。他の抉付柄とともに用途を検討すべきである。

D6b：抉入柄：胴部に抉り削りが帯状にほぼ一周する柄1点。この裏から削ぎ落とされて厚味を減じるところからみて、抉りは部品装着に関係するものと考えられる。図-9左下に示した。

D6c：切込入柄：装着部に抉りが削り込まれた柄で、D6aと区別するために「切込入」とした1点。図-9中段右に示した。

D6d：有孔柄：後出の抉り付きの有孔を除いた、有孔柄7点。図-10にB3-168・B3-164・B2-121の3点を示した。B3-168は頭部削出柄だが、装着部に角孔が開けられており、有孔柄として扱った。他の6点は頭部の有孔と思われる、内2点は細身の角短柄とみられる。他の有孔柄とともに用途を検討すべきである。

D6ah：抉付長柄：端部付近に幅1.5～4cmの抉りが削り込まれ、端部が抉り側に斜めに落されている柄で11本出土している。この類似品分類のためにD6ahを設定した。図-11に9点を掲載した。

B3-154・156の抉りはやや傾斜した削り込みである。平柄と丸柄・角柄があり、平柄の完形品でみると逆端部は細かい削りで舌状に加工されている。11点中5点がカエデ属の1/2割材を加工した平柄で、形状・規模・木取り・樹種も同じであることから、同じ用途の製品といえる。組み合わせるセットものかもしれない。丸柄・角柄も抉り部はほぼ同じ形状を呈し、形状・規模・木取りが類似しており、同じ用途の製品と考えられる。

D6ad・adh：抉付有孔柄・抉付有孔長柄：有孔部に両側からの抉りが伴うもので、枝材使用の長尺物にhを付けた。2点中この長尺物を図-10に示した。有孔部が装着部になる可能性もある。

D7：把手・取手・つまみ：B4・1層の2点はアスナロ材で曲物が結物の取手と思われる。他に把手やつまみ部と思われる2点をここに分類した。

D8：作業台・作業台板：板やその加工品・割材等を刃物用作業台に使用したもので11点出土。刃物使用痕があるものや、円形厚板を基準とした。表裏両面に刃物使用痕がみられるものもある。B3-197には摘み突起が切り出されている。図-14下段に6点を示した。

D9：鉤楯：土掘り具としての鉤形の楯で、2点出土、図-13下段に掲載した。枝別れの股木材を利用し、幹を体部、枝を鉤部にした製品。鉤部の長さ・太さや先端部の鋭い加工から、土掘り用の鉤楯としたが、B3-202は細身で吊り鉤の可能性もある。鉤部と柄の角度は約40～60°である。

D10：雪かき：雪かきの可能性がある丸柄付の偏割厚板1点。図 - 16に掲載。本体と柄は同じ厚味を持ち、本体片面は平坦に削り調整されている。伝世資料との比較と「かんじき」の出土から「雪かき」とした。

D11：楔：木割りや諸接合部の緩み止めに使用する楔で、楔状と報告したのもも楔として扱い、計86点出土。両面平らなものもあるが、片面は必ず平滑に仕上げられている。割材や板材の切れ端や廃品等を利用したものが多いであろう。樹心が残るものもある。基本的に体部厚が1.6cm以下の薄型と、厚さ1.6cm以上か幅と比較して厚型に分けられる。さらにそれぞれ幅広と幅狭があり、先端形で先平型と先丸型に分類できる。都合8形態となるが、これが用途に反映するのかは検討を要する。また図 - 15に示したような両先・溝付の楔状加工製品も出土している。

樹種で見ると、モミ属25点・アスナロ16点・スギ3点と針葉樹・持ち込み材やハリギリ15点・モクレン属7点が多く、トネリコ2点・ヤナギ属3点と汎用材は少ない。一定の樹種選択があるように思われる。

D12：発火具：火鑽り板1点、火鑽り棒2点の発火具で、図 - 12上段に全点掲載。火鑽り板はスギの箱板材を再利用したもの。両端を山形にカットし、端部付近に1箇所のみ白が鑽られている。火鑽り白には位置決めのための外周円が二重に引かれている。白部は径1.3mmで焦げており、火口に火が移りやすいようにV字刻みも施されている。板の中央部には連続波文が彫刻されている。火鑽り棒は2点ともニレ属の枝の1/4割材を使い、火鑽り部の径は1.1cmで焦げている。両者とも短く、使用済みの廃用品と思われる。

D13：炉鉤・吊り鉤：枝別れ材の幹を削り加工して柄部とし、細枝を短く丁寧に削り加工して鉤部にした製品。9点出土し、6点を図 - 13上段に示した。炉鉤か吊り鉤となるもので、吊り鉤とすれば、鉤に物を吊るす場合と、鉤を固定部に引っ掛ける使用方法がある。全体に加工は粗く、鉤の先端は切痕のままのものが多く、屈曲部には比較的細かく削り加工が入る。吊り下げ接続部の形態が明らかかなものでは、B3 - 230が股木部利用、B3 - 231・B3 - 233が挟りによる瘤状加工である。

B3 - 231は柄部が枝、鉤部が幹と通常と逆の使い方をした鉤部の短い製品である。樹種ではヤナギ属3点・ニレ属2点が目を引く。

D14：挟み木：丸木に縦割りを入れて物を挟めるようにした枝材。7点全点を図 - 12下段に示した。焦げ跡がないので燈火の挟み木とは限定しなかった。食物等を挟んで、炉の廻りに差して使うこともできる。B2 - 155とB3 - 236は下端が杭状。B2 - 156は両先とも挟み部で、中央部に磨耗が見られる。天秤のようなものか。B2 - 157は枝の自然の曲がりが残り、曲がりから末側は平坦に削られており、他の材と合わせる固定部と思われる。

D15：固定補助具：物同士を固定するための製品と推定したモミ属の板目板加工品が1点ある。図 - 15に示した。両端を角山形に切り落とし、固定のための小孔を端部を主体にほぼ左右対称に13カ所配置している。同じく図 - 15の隣に示した留め具と推定した有孔細板加工製品B3 - 527とは、形状・規模がよく似ている。

D16：漆付着枝製品：トネリコ属の細枝の小片に何故か赤色の漆（顔料）が付着している。枝には樹皮も残っている。漆塗りや赤色顔料の扱いに関わる細枝片であろう。そのため道具として扱った。既報告書ではカラー図版の都合で図や写真は漆塗り製品のページに掲載した。

## E 運搬具

E1：木札：樹皮を切り取った方形の札が1点出土している。

## 1 既報告木製品データの訂正と追加

E 2 - 1 : かんじき : 単輪型の瓢箪形かんじきの破損品が1点。図 - 16に示した。モミ属の $\frac{1}{2}$ 割材を柱目状にし、穿孔や曲げ等の加工をしている。破片からは蛇行状の反りと絞込みのための挟り、横軸差込孔4孔が確認できる。

E 2 - 2 : かんじき軸 : ノリウツギの $\frac{1}{2}$ 割材を削り加工した、かんじきの横軸。4本出土しており、うち3本を図 - 16に示した。両端は差込固定しやすいように円錐形に削られている。長さは差し込まれるかんじきの位置(幅)により違いがある。

E 3 : 下駄 : 歯高の低い連歯下駄の前半分の破片が1点出土。図 - 16に示した。歯には氷雪上歩行の滑り止めと思われる鉄紙を打った痕跡がある。

## F 紡織編具

F 1 - 1 : 編台 : 機織の糸揃えと報告した刻み目付きの板材加工製品が1点。図 - 16に示した。両側面の刻み目の幅が違う事や類例のないことなどから、当報告では編物の編台ではないかと考えた。脚との固定部は両側から深く挟りを入れ、両側面対応となっている。刻み目が密な側はおよそ25mmと8mm、疎な側は60mmの単位幅で目が刻まれている。近隣の千歳市オサツ2遺跡の B3相当層からは、長さ1mを超える割材の片側稜線におよそ25mmの均等な刻み目の付いた加工製品が出土しており(『ユコンボシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査』市文調報 )、これも編物の編台と思われる。

F 1 - 2 : 両端挟付割材加工製品(編具) : 両端に挟りの付いた割材加工製品で、3点ともアスナロ材。全点図 - 16に示した。両端を小突起にするような、縛り痕のごとき浅い挟りの入った長紡錘形の製品。形状や使用材から、同じ用途の製品と見て、機織か編具の部品の類ではと考えた。

F 2 - 1 : 錘 : 形状からゴザや蒔織み等の錘と見られる製品3点。B 2 - 367は全体を滑らかに整形、B 1 - 45は両脇から挟りを入れて頭部を作ったいわゆる「コモ槌」の大型品。3点とも図 - 17中段あたりに掲載してある。

F 2 - 2 : 短丸木・枝材両端加工品(錘?) : 両端を粗く削り加工した丸木・枝材等の短材加工品。出土8点中、既報告で図示した7点をまとめて図 - 17中下段に示した。径5cm以上の大型1点、径4~5cmの中型2点、径3cm前後の小型5点に分けられる。このように規格があるとすれば、これらもゴザや蒔織み等の錘と推定できよう。並べて図示したF 2 - 1の(1) B 1 - 37も小型の部類であろう。

F 2 - 3 : 挟入枝材加工製品(錘?) : 細い方の端部に挟りが一周する枝材加工製品1点。図 - 16に示した。編物の錘(コモ槌)の軽細型と考えた。

F 3 : 茅針 : 茅針と想定した。ノリウツギの枝材から球状の頭部を作り出し、中央以下は樹心を削り抜き半割している。先端は両脇から削って尖らせ、先から3cmのところに円孔を開けている。この孔に屋根や壁の茅を編み束束するための茅や紐を通して固定し、縫い込んでいったものであろう。球状頭部は押し込め力を入れるのに都合がよいものと思われる。図 - 16下段に示した。

## G 容器類

G 1 : 桶の側板・底板 : 桶や樽のような結物の側板や底板と思われるもの。側板1点・底板3点が出土している。樹種でみると多聞に疑問視されるか。

G 2 - 1 : 曲物 : アスナロ・スギの薄い柱目板で、毛引き線のあるものを曲物側板(曲輪)と判断し分類した。底板が付いたままのもの1個体、側板のみ21個体出土し、代表例を図 - 18に掲載した。いずれも持込み品・交易品と考えられる。K 5 柱目板の大半も曲物側板と思われるが、毛引き線の有

無を分類の基準とした。B3-247は底板が結合した資料で、底板の径が曲輪の径より大きくて底板が出張る「カキソコ」といわれる形態である。曲輪は樹皮による内二段綴じで、連続して底板とも固定されている。底板に残る樹皮と痕跡から四方で留められていたことがわかる。他の資料にも樹皮やその綴じ溝が残っているものがあり、二列綴じ・四段綴じなどが確認できる。曲輪の高さも4~15cmと様々である。曲輪の内側にある毛引き線には、縦方向・格子目・斜め方向・斜め格子の4パターンがある。

G2-2: 曲物底板: 曲物の底板で前出の B3-247を含めて19点出土している。ケヤキ材1点を除いてはいずれもアスナロなど針葉樹の柾目板で、二三の楕円形以外は円形の板である。桶や樽の底板と思われるものより薄手のものを曲物の底板とした。持込み品・交易品と考えられる。厚さは0.5~1.3cmに収まるが、径は7.5~36cmとある。10cm以下の小品4点・20cm以下の中品4点・24cm前後の大型品6点・30cm以上の特大品に分けられよう。接ぎを確認できるものはなく、ほとんど一枚物の底板と思われる。曲輪を留めた釘跡と思われる小穴の確認できるものや、漆塗りの残るものもある。均一な厚さや大きさから、再利用されるものも多い。

G3: 箱物: アスナロ・スギ・モミ属の柾目板で、曲物の側板よりは厚く、短辺に合わせの削り込みのある板や、釘跡らしき小孔がある板を箱物の板(箱材)とした。12点出土している。1点は四辺側面に釘痕が残る小箱の底板、11点は側板で、持込み品・交易品と考えられる。未掲載の細板の中にも同類品は存在するだろう。

G4-1: 漆椀: 漆塗りの椀38点をここに分類し、代表例を図-19に掲載した。38点個別の観察報告は既報の(1)(3)~(5)の4冊に詳しく、次々節に表-23として出土漆椀等一覧も掲載してある。文様等は次節以降で検討報告し、全体的には終章でも触れる。サンプリングした上での木胎と下地・漆膜の観察・分析は、くらしき作楽大学食文化学部の北野彦彦氏に依頼し、章に報告を掲載した。出土状態は底部片2個体・胴一底部片4個体・胴部片11個体・口縁部一胴部1個体・口縁部片8点7個体・1/4復元可能な破損品8個体・膜片4個体分である。木地の樹種は木地の残る33個体で、漆椀の汎用材であるトチノキ7点・ブナ属8点・ケヤキ属3点、比較的使用例の多いカツラ9点、希少例であるクリ2点・ハリギリ2点・トネリコ属1点・エゴノキ属1点となっている。出土層と樹種には傾向がありそうで、終章で述べたい。

この33個体を内外面の塗りで見ると、内外面とも黒色7・内外面とも黒地に赤色2・内赤外黒23・生漆1個体となる。内赤外黒23点中では、内面が黒地に赤色塗りが21点と多い。また残りの内面直接赤色の2点は B4層出土品であることは時代認定の上で興味深い。文様は内外面に見られ、黒地に朱で描かれたものが多い。膜片出土のものを加えてみると、文様のあるもの27点・ないもの6点・不明5点と、約8割に文様が描かれている。文様には、抽象的な線や点文・草文・花文・鳥文・葉文などがあり、家紋や幾何学文はない。また蓋表に3カ所の円・菱状文が描かれ金(銀)箔を使用した、いわゆる「南部箔椀」もある。他に赤色漆上に墨書きした文様がある。いずれも次々節で詳述する。「シロシ」のような刻文が高台内に入れられたものは3個体あり、次節で取上げる。

出土層位については報告書(3)章4節で触れたように、B4層出土品に疑義がある。当稿執筆時現在、北野氏の分析結果がまだ手元にないため、ここでは一部に上位層からの混入の可能性が高いことのみ報告しておく。章北野氏報文を参照願いたい。漆器の背景には北野氏が「生産技術面からみた近世出土漆器の生産・流通・消費」(2000『日本考古学』9)で整理しているように、年代・使用階層・生活様式・地域性・使用目的や方法・生産技術の特徴等の条件が複合したものがあり、しかも北海道にはこれが二次的に搬入されているという条件もある。つまり北海道の場合、当時の交易ルー

トや交易条件・状況等を検討する上で、漆器は重要な位置を占める事になる。

G4-2：漆塗り竹製品：全面黒漆塗りの竹製品が1点出土している。片側が開口、もう一方は節を残して透かしのある突起が付随する。用途不明の交易品。針葉状の彫刻や方形削りが漆塗り前にほどこされている。彫刻等は次節にて取り扱う。形状・紋様・漆から風雅な一面を垣間見る竹製品で、美々8遺跡低湿度部で出土した（北理調報102）茶筌を思い起こさせる。

G5：素木椀：漆が塗られていない素木の挽物椀で、ブナ属製2点・ハリギリ製1点が出土、図-21下段に掲載した。大きさや形態は漆塗椀と同じである。

G6：削り物：削り物のうつわをここに分類。19点中1点は堅果類の外皮加工品の可能性があり、18点をさらに細分した。11点は剝鉢「ニマ」と思われ、既報の10点は図-20に集成、もう1点は図-6追加報告に掲載してある。半割材を横木にしてマキリ等で削り込んだもの10点、丸木を縦木にして削り込んだもの1点。樹種ではハリギリ4点・モクレン属3点が目立つ。B3-279はモクレン属の横木取りで、舌状突起を持った完形に近い製品である。

また他の7点は皿や盆など容積の少ない平たいうつわで、図-21上段に集成した。木取りは、横木5点・縦木1点・節加工1点である。樹種は7点とも違う極端なバラつきである。

G7：樹皮製容器：カバノキ属とみられる幅約5cmの樹皮を、径12cmほどの環状に二重巻きしている。底は確認できていないが、丸まらずに環状を保っていることから樹皮製容器の側部分と判断した。

## H 食用具

H1：大型節：大型の節で、酒の醸造や、大量の汁物を攪拌するときに使用する。5点出土し、図-23下段に集成してある。B3-291・292・B2-201は縁辺部に角孔の残欠がある大型の板加工品で、舟の船部分舷側板を再利用したものであろう。丁寧に縁加工され、節先は徐々に厚さを減ずるよう削られている。B4-34・B3-292・B2-201は節部が大きい割に柄部は小振りである。

H2：節：節の類31点をここに分類し、代表例を図-22と23上段に掲載した。31点個別の観察報告は既報の(1)(3)～(5)の4冊に詳しい。未製品のような厚みのあるものも平面形態からここに含めた。ほとんどが板や板材から加工した節で、スギ7点・アスナロ9点と交易で得た製品の再加工が多い。特に図-23上段に集めた舌状の節は、スギ材にこだわっている。

柄と節部の明瞭なものと緩い移行のもの、同幅で区分のないものがある。B4-33・B3-295・B2-198～200・B1-68などの小型品は個人の食器用、25～40cmほどの中型品は調理や配膳用であらう。細身の節には食事以外の使用方法もと思われる。B2-200・203～205・B1-293などは割り材から作られた節である。J7樽酒節状製品との報告から分類替えしたのものもある。

H3：匙：匙部は欠失しているが、匙と推定できるハリギリ製の有孔の柄だけが1点出土している。図-15の中央部に示してある。

H4：箸：箸に分類できるもので51点出土している。ノリウツギ等の枝材を $\frac{1}{2}$ ～ $\frac{3}{4}$ 割した材と、アスナロ・スギ・モミ属・トウヒ属・イチイなどの針葉樹の板材を小割して細材にしたものがある。この細材を細化調整加工して、断面を方形～楕円形に仕上げている。太さ1cmほどの調理用共用の箸が数点、他は太さ0.85cm以下で個人用の箸と思われる。全体の細さと均一さ、先端の細さ具合から微妙ながら細串・平細串や楕円串と区別している。

H5：串：串に分類できるもので208点出土している。断面形や先端の加工で円串・楕円串・両先楕円串・両先串・両先細串・両先長串・細串・平細串・三角串・太三角串・太串・平串・角串・半円



串・長串・長角串・長平串・長太串・袂付串細分できるが、特徴をとらえにくく報告で細分を標記していないものもある。全点中113点54%がノリウツギの半割〜割材を削り加工したものである。他は、アスナロが24点12%、ハシドイ属21点10%あり、ツルウメモドキ属・ニシキギ属・ハギ属・ニガキ属・ガマズミ属材のような遺物での出現数が極少の樹種も使われている。アスナロ材は割材と板からの加工が半々で、再利用材が多いものと考えられる。全点中23点11%が樹心を持つが、基本的には割材から作られるものである。

全点を細分類ごとに樹種で統計して見ると、長串系は46点中34点74%がノリウツギ材である。同じように、楕円串系は36点中26点72%が、細串系は31点中20点65%がノリウツギ材である。ところが、ノリウツギ材の比率は太串系では21点中4点19%（ハシドイ属7点）、平串系でも27点中11点41%（アスナロ10点）、角串系24点中7点29%である。形状を考慮すると、ノリウツギ材の比率の高い長串・楕円串・細串系は、食用具としての串、ノリウツギ材の比率の低い太串・平串・角串系は、食用具以外の用途があったと考えたほうが良いであろう。特徴的な形状では、頭部が股になるものや、小挟りのつく串、祭祀具として扱ったB2 - 210の刻目付串などがある。

H6：まな板：整った特殊な形状から調理用の「まな板」として、D8作業台と区別し分類した。

B2層から2点出土、図 - 14上段に掲載した。とも細片に崩壊した部分が多く復元に苦労したが、木目や破片形状から組み立て、図化した。B2 - 135はハリギリの半割材を横木取りして、18 11.5 cmの作業台部を残して浅い舟形に削り込んだ製品。2段の凸形の取手が付く。厚く残された台部と台から取手部にかけては平坦に削られ、刃物使用痕も残っている。対して前半分と台部の両脇は削り込まれて浅血状に加工されている。台部で切った食材を血部に移しつつ使用したまな板であろう。B2 - 136はハリギリの偏半割材を、木表側を内面として削り込んだ盆状の製品。全体が平坦で、先端が約35°に立ち上がるように削り出されている。対する取手側も厚みを残しており、半環状の取手が作り出されている。両脇を欠失しているが、取手付近に細い樹皮帯が残っており、割れ目を補修して使用されていたことが窺える。平面形全体のバランスをくずして先端は片寄りがあり、延びた先に注口があるように思われる。まな板というより、汁の出る食材を扱うための道具であろうか。

H7：竪柱：丸木材から握り部と搦き部を削り出した両頭の竪柱。7点出土し、図 - 24に集成した。長い両頭部の端部にあたる搦き面は、平坦なもの・やや丸みを持つもの・球頭状のものがある。やや丸みを持つ搦き面は、つぶれてはいないが摩擦が認められ、球頭状のものは未使用と思われる。平坦な搦き部でも周囲の削り痕が明瞭であり使用された状態にないものもある。なお、搦き部の形状は、使用方法および対象物により、搦く と 擦り潰す では違ってくるという。食料・農業・交易などと関わって来る問題および遺物である。多方向に無数の刃物傷がつき、作業台として利用したような部分が見られるものもある。トネリコ属材製が4本ある。

## I 祭祀具

I1：イクバスイ：削りかけや明瞭な文様などは確認できないが、端部の舌状削りや、片目が平らな断面形から、捧酒籠（イクバスイ）かその原形品と考えた。141点出土している。代表例24点を図 - 25に掲載した。近辺どうしの出土である B2層の5点（うち1点は B3層から編入）には表中央部の同位置・同方向にイトクバと思われる斜め2条の刻み目が入っている。刻み目については次節で若干検討する。約74%・105点がアスナロ材、約16%・22点がモミ属材で、この二種で9割を占める。イクバスイにはアスナロやモミ属（トドマツと推定）などの木目の美しい材が好まれているようだ。木取りでみると109点、77%が榎目系（榎目・追根・榎目をいかず割材）の材である。この中で

#### 4 木製品の樹種同定

アスナロ材が79点72%、モミ属材が21点19%、合わせて90%以上を占める。板目系(板目・偏半割・半割)32点はこのうち26点がアスナロ材である。B4層出土が5点とも板目系であるのが特徴的である。イクバスイの半数以上が交易で持ち込まれたと思われるアスナロ柱目板材の再加工であるとすれば、祭祀具材料の調達の方法を見直し、祭祀儀礼のあり方検討する一材料となりえる。

I2: 木幣: 削りかけなどは残っていないが、先の段に向けて細く削り込まれ、段部でその削り込みがきれいに落されていないように観察できることから、木幣(イノウ)とした。4点出土し、全点を図-25に掲載した。全点、枝丸木材を丁寧に削り加工している。B2-344は2mを超える長材。3点は先端が尖り、端部形状が酷似しており、同系統の製品と考えられる。ヤナギ属1点・モクレン属2点・トネリコ属1点という樹種の内訳である。アイヌの利用伝承では、ヤナギ・ホオノキ・アオダモなどは、イノウにも使う木であり、相当する資料となった。

I3: 模造品: 模造品・ミニチュアと思われるもの4点をここに分類した。B3-443は早稲か槍先のミニチュアであろう。柄端部や肩部に彫刻様の文様が施されている。図-25に掲載した。彫刻等については若干検討する。他の3点は丸木舟・刀・クマ頭の模造と思われる。

I4: 花矢: 矢や矢中柄に似るが、両者とも違いのある製品を、花矢として分けた。鏃部は細長い突起で、ここに削花を装着したものと思われる。

I5: 制裁棒: 大型横槌(掛矢)に似るが、瘤状の打撃部を持つもの1点を制裁棒(ストウ)として分類した。掛矢との比較のため、図-8先頭に示した。先端部は切断されているが、さらに瘤が続いていた可能性がある。

I6: 刻目入加工製品: 端部付近に刻み目が入った、枝材・割材加工の串状諸製品である。4点出土し、3点を図-25に示した。刻み目はいずれも片端部にほぼ均一な幅で並んでいる。類例が少なく祭祀具に分類したが、暦や算木のような日常品である可能性もある。

#### J 各種加工製品(各種用具の部品等)

J1-1(b): 細枝材加工製品: 端部に様々な削り加工がある細枝材で、枝材加工品と同様に軸状製品や串などに包括できないものである。18点出土し、トネリコ属が10点を占める。挟り入りのものもある。

J1-2: 枝材加工製品: 胴部を角材に近いほど削り込んだ製品もあるが、基本的には端部に様々な削り加工がある枝材で、細枝材加工品と同様に軸状製品や串などに包括できないものである。52点出土し、ヤナギ属15点・トネリコ属13点・ハシドイ属4点で6割以上。

J1-2a: 挟付枝材加工製品: 挟り付きの枝材加工製品で4点出土している。柄の可能性のあるものが含まれる。

J1-3(d): 丸木材・股木材加工製品: 基本的には挟りや孔がなく、丸木・股木の太さ・長さや形状を活かした製品。図-17のF2-3分類の製品は除いて、様々な長さや割取りの入った23点が出土。図示した図-17のB2-347は紡錘車状の製品。中央に貫通孔があるが、小孔なのでここで扱った。

J1-3a: 挟付丸木材加工製品: 端部や胴部に挟りが入った丸木材の加工品5点を一括。様々な長さがあり、挟りの形態も多様である。

J1-3adt・J2-1adt・J2-2adt・J2-4adt: 両端有孔丸木材・半割材・割材・心持材加工製品: 用材の木取りの違いで、丸木材(J1-3)・半割材(J2-1)・割材(J2-2)・心持材(J2-4)とあるが、両端(t)に挟りが付き(a)挟り部やその直下に角孔が開けられた(d)加工製品で、12点出土している。図-26に集成してある。J1-3adtは B3-487・488・B2-355・356・357・361・B1-117

と片端部しかない B3 - 484を含めて8点。J2 - 1 adtは B2 - 359の1点。J2 - 2 adtは片端部を欠き(t)のつかない B3 - 489の1点。J2 - 4 adtは B2 - 358と片端部を欠く B2 - 360の2点。また、図 - 26の上から二段目の B3 - 724はL3 建築部材に分類したもののだが、端部や長さはこの製品に似ており、加工で分類記号をつけるとJ2 - 2 dtとなる。中段右から二番目の B1 - 120も2孔だが類似品で、加工による分類記号はJ2 - 2 dとなる。

基本的には両端部の背面する2面を平坦に削るか抉りを入れ、そこに角孔を開けている。先端部に大きな抉りを入れ突起状に残す加工を施したものも多い。端部形状が類似し長さの揃いがあるなどの点から、図 - 26に掲載した14点は同じ用途の製品と考えられる。左右ほぼ同形の製品で、窓枠などの建築部材の可能性もあろう。14点を樹種でみるとモミ属・モクレン属・トネリコ属が各3点、ヤナギ属2点と比較的まとまりをみせる。千歳市美々8遺跡(『美沢川流域の遺跡群』北埋調報102)やオサツ2遺跡(『ユカンボシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査』市文調報 )からも類例が出土している。

J1 - 3cdt・J2 - 4ct: 両端切込付(有孔)丸木材・心持材加工製品: 両端から(t)切り込みがある(c)、丸木材(J1 - 3)・心持材(J2 - 4)の加工製品。出土した4点を図 - 17上方に集成した。B2 - 362・363には片寄った位置に角孔が開く(d)、丸木を両カット面が開くような角度で短材にし、片側のカット面はさらに一段抉り込んでいる。有孔のものと無孔のものではカットの角度が違うが、手斧の支持台部に形状は似ており、孔や切り込みで柄を固定し手斧柄とするものかもしれない。

J2 - 1: 半割材加工製品: 基本的に半割材の樹心部付近を残す製品。全28点で、幅8.1~18cm・厚4.3~0.7cmと大小様々である。半割後の加工法も、主に割面側を削るもの、側面も削るもの、半割形状を活かすものなど様々である。片端部に突起を削り出した製品もある。ヤナギ属9点・トネリコ属6点が多い。

J2 - 1a: 抉付半割材加工製品: 半割材の両端とも丸みをつけるように削り加工。片側面に35cmと8cmの2カ所の大きな抉りを入れて加工した吊り鉤状の製品。抉りがこの製品の特徴であるため、別分類とした。

J2 - 2: 割材加工製品: 抉りなどがなく、割材の形状が残る製品。全284点で、幅10.3~0.7cm・厚7.1~0.4cmと大小様々ある。割材の形状が残る製品から板状に近く割材の形状がやや不明瞭になった製品まで多様である。

下記の抉付・有孔18点を加えて全302点で検討すると、 $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{4}$ ・ $\frac{1}{8}$ 割材( $\frac{1}{2}$ 割系)が207点69%、 $\frac{1}{4}$ ・ $\frac{1}{8}$ 割材( $\frac{1}{4}$ 割系)が72点24%と2系統で大半を占めるが、木取を半割とすべきものも21点ある。これは、半割後に $\frac{1}{4}$ 割系や $\frac{1}{8}$ 割系以外で割面を割ったり、側縁を偏割りで落すものである。この加工法は主となる2系統にも使われていて、角材が作られる。樹種で見ると、トネリコ属99点・ハリギリ33点・モミ属33点・ハンノキ属28点・モクレン属16点で約7割を占めるほか、サクラ属・アスナロ・ノリウツギ等が使われていることに特徴がある。アスナロは交易で得た品の再利用と思われる。

J2 - 2a: 抉付割材加工製品: 抉り付きの割材加工製品16点。割材形状は様々で、抉り部位も側縁や端部・両端部・中央部と、種々の製品がある。抉りには深いV字抉りや固定部と見られるものなどがある。

J2 - 2d: 有孔割材加工製品: 穿孔された割材加工製品2点。B1 - 120は上記J2 - 2 adtの類似品で、図 - 26に並べてある。

J2 - 3(d): 偏割材加工製品: 樹心を通らない、偏った割り方をした材からの製品で、その原材は丸木・半割材・割材である。全45点で幅7.8~1.1cm・厚5.0~0.6cmと大小・形状とも様々であるが、

断面凸レンズ状の製品が多い。棒状の製品もある。有孔の製品1点もここにに入れておく。下記の挟付・有孔5点を加えて全50点の樹種を割材加工製品と比較すると、やはりトネリコ属16点・ハリギリ5点・モミ属4点・ハンノキ属6点・モクレン属3点で約7割を占めるが、コナラ属・サクラ属・アスナロ・ノリウツギ等がほとんど利用されていないという違いがある。用材的には必ずしも心持材の残り部分が使われているわけではない。

J2-3a: 挟付偏割材加工製品: 挟り付きの偏割材加工製品4点。形状は偏平で長く、側縁に小規模の挟りが1カ所付く。

J2-3at: 両端挟付偏割材加工製品: 両端に挟りの付いた偏割材加工製品1点。加工しやすいノリウツギ材から削られた左右対称の薄い作りの小形で、両側からのV字挟り部が固定部となる。中央部に節を利用した受口状突起がある。機織具の部品ではと考え、図-16右上に示した。

J2-4(d): 心持材加工製品: 樹心を残した、偏った割り方をした材からの製品全12点で、その原材は丸木である。厚板状・未製品など大小・形状とも様々である。有孔の製品もここにに入れておく。

J2-4a: 挟付心持材加工製品: 挟り付きの心持材加工製品5点。厚板鉤状・角材状などがあり、図-15右下に示した。B2-365は、模式図に示したように台状の-1と棒状の-2の組み合わせる製品。365-1は平面家形にカットされた材の中心線と底辺部に溝を切ったもの。365-2は片面を平坦にした棒状で、平面部の片端に挟りを入れ、この脇も浅くけずっている。-1の溝に-2が挟り面を下に向けて嵌った状態で出土した。

J3-1: 板材加工製品: 挟りや孔などがなく、板材の形状が残る製品。全183点で、幅12.3cm~1.1cm以下・厚2.9~0.3cmと厚板状・長尺物・いずれかの辺に丸みを持つもの・平面長紡錘形など大小・形状とも様々であり、他の製品に分類できそうなものも含まれる。図-15左下に示した2点は浮子の可能性のある卵形の厚板状製品である。

下記の挟付・有孔等19点を加えて全202点で検討すると、木取は榎目99点49%、板目84点42%、追衤17点8%の割合である。樹種ではモミ属(トドマツと推定)53点26%・アスナロ15点7%、ハリギリ43点21%・トネリコ属25点12%・ハンノキ属16点8%・ヤナギ属15点7%と6属で83%とやや分散傾向にある。アスナロ材の出土の多さは、交易等で得た製品の材を再利用することが多いということである。

J3-1a: 挟付板材加工製品: 挟りの浅深・かたち・数・位置などに違いはあるが、挟りの入った板材の加工品をここで取り上げた。図-15に示したB3-537は刻み線が描き込まれたもの、B2-397と398-1は側縁の挟りによる凹凸が組み合わせるもので、模式図に示したように1個の孔が生まれる。この組み合わせは平面だけでなく立体的に行われることも想定される。398-2も397の凹凸の少ない側と似て肩に直角の挟りが入る。この3点は他の同形品と立体的に組み合わせさせて製品を構成するものと考えられる。

J3-1b: 挟入板材加工製品: 板材の端部の片面を大きく挟っているため、側縁を挟るJ3-1aと区別した。柄であろうか。

J3-1d: 有孔板材加工製品: 孔が開けられた板材加工製品。2点出土。

J3-1ad: 挟付有孔板材加工製品: 板材の側縁に角形の挟りが付き、中心線に角孔が開けられている。2点出土しており、平面形は似ている。

J3-1ac: 装飾付板材加工製品: 側縁に連続する2枚の半円形錐状突起を作り出した板材加工品。錐状突起を持った割材加工製品(B2-381)もサクラ属材なのは偶然であろうか。

J3-2: 板加工製品: 挟りや孔などがなく、板の均一な厚さと形状が残る製品全41点。台形状・

札状・隅落とし・鱗状・籠状・杓木状・多角形・弧状辺や内弧状辺を持つもの・駒のような小品など多様である。箱・底板など板物の再利用品もある。

下記の扶付2点を加えて全43点で検討すると、木取は榎目系28点65%、板目15点35%の割合である。樹種ではモミ属(トドマツと推定)12点28%、ハリギリ10点23%と、2属で51%と半数を占める。板への加工し易さがこの樹種の材にあるということだろう。スギ・アスノ科材も各3点の出土しており、交易等で得た製品の材を再利用することをここでも示している。

J3-2a: 扶付板加工製品: 側縁に角孔状の抉りが入っている板加工製品。舷側板の再利用品か。

J3-2d: 有孔板加工製品: 板加工製品のうち孔が開いているもの22点で、大きさ・厚みやハリギリ8点・モミ属7点という樹種構成から、すべて板綴舟の舷側板を再利用したものと考えている。長板という点や孔を生かした製品となっている。

J4(a): 細板加工製品: 板の面よりも細さ・長さを生かした板加工製品で、小抉り付や板材と思われるものも含んだ。38点中27点71%が榎目の板。アスナロ・モミ属・ハリギリが多い。

J5: 榎目板加工製品: 曲物に使用するような薄い榎目板に加工を施した加工品11点。曲物の再利用が多いと思われる。H2の籠(図-22・23)にも榎目板加工が多い。

J6-1: ピン状製品: 串とするには長さ・太さの点で合わず、軸状製品の加工や磨耗が見られない製品16点をここに集めた。敷物等の押さえとして差し込むピンとも考えられる。角串様・三角串様の短形品や太串状の製品がある。割材から削り込むものと、細枝材・枝材を使用するものがある。

J6-2: 軸状製品: 基本的には明瞭な頭部や摩耗痕がないものや、串・ピン状とするには太いもので、77点出土している。樹心を残す丸木・心持材加工のもの49点と、割材から加工するもの23点、板材から加工するもの5点とがある。平角軸・角軸・丸軸などがあり、先が楔状になるもの等、端部形状は様々である。長く先尖りのものは刺し杭とすべきかも知れない。車權受台部軸「タカマ・チ」の可能性が高いものもある。

J7: 棒酒籠状製品: イクバスイに似るが、厚さ・幅・長さなどからそう分類しきれないものをいう。48点出土している。材でみると全点中29点が榎目系である。また、アスノ科材が24点50%、モミ属材が11点23%、合わせて73%を占める。これらはイクバスイとほぼ同傾向に表れているので、イクバスイの分類枠を広げるか、加工途中品とすべきものかもしれない。

J8: 桶状製品: 丸木の半割材の樹心周辺を削り削って桶状にした製品が4点出土している。3点がトネリコ属材である。導水や排水のための桶が敷設されていたのかもかもしれない。

J9: 弓状製品: 弓の形状をしているが樹種がサルナシ属であるため、蔓状の材では弓の機能が成り立たないと考え、弓状の製品とした。

J10(c): 節加工品: トネリコ属材の節を加工した製品が4点出土。有孔の結縷め形の製品や球状のものがある。

J11: 竹材・加工製品: 竹材とその加工製品。2点とも細い竹だが、長さは60cm以上あり、柄などに利用されたものと思われる。当地では竹が自生しないため、持ち込み品と考えられる。他にG4-2 漆塗り竹製品もある。

## K 素材

K1-1: 細枝材: 最大径が2cm以下の枝材で、明瞭な切痕をもつ材(60%)と折れ材とがあり、股木材もある。切痕は両端にあるものや、二面以上の多面のものもある。全97点で、焼痕のあるもの34点35%、樹皮を残すもの78点8%と少ない。細枝材のみの集中・集積が2カ所あり、建物の屋

根や壁の一部ではないかと推定している。

K1-2: 枝材: 最大径が2~4cmの丸木材で、明瞭な切痕をもつ材(67.5%)と折れ材とがあり、股木材もある。切痕は両端にあるものや、二面以上の多面のものもある。全1,545点で、うち焼痕のあるもの140点9%、樹皮を残すもの136点9%となる。枝材のみの集中・集積が1カ所あり、建物の屋根や壁の一部ではないかと推定している。

K1-3: 丸木材・股木材: 最大径が4cm以上の丸材で、明瞭な切痕をもつ材(55%)と折れ材・割れ材とがあり、股木材もある。二面以上の多面の切痕が残る大型の切り出し材もある。全545点で、焼痕のあるもの142点26%、樹皮を残すもの51点9%と、細枝材・枝材と比較して、焼痕のあるものが高率となる。対して樹皮を残すものは、一律に1割未満しかない。また、明瞭な切痕をもつ材は枝材だと $\frac{1}{2}$ ほどになるが、丸木材では半分程度である。これらは丸材の太さによって、切り出し方や道具、貯木の方法、加工の仕方に違いがあることを示すものであろうか。

K2-1: 半割材: 樹心部付近を残す半割材全210点で、幅20.5~1.2cmと大小様々である。幅10cm以上のものが18点ある。 $\frac{1}{2}$ 割や $\frac{1}{4}$ 割という次段階の元材が含まれている。焼痕のあるものが33点と比較的多いのは、加工法との関係であろうか。

K2-2: 割材: 全896点で、幅11.7~0.6cmと大小様々であるが、割材加工製品とは素材と製品の関係から同規模である。長さ50cm以上・1m以上のものである。 $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{4}$ ・ $\frac{1}{8}$ ・ $\frac{1}{16}$ 割材( $\frac{1}{2}$ 割系)が613点68%、 $\frac{1}{4}$ ・ $\frac{1}{8}$ 割材( $\frac{1}{4}$ 割系)が206点23%と2系統で大半を占めるが、木取を半割とすべきものも77点ある。これは半割後に $\frac{1}{4}$ 割系や $\frac{1}{8}$ 割系以外で割面を割ったり、側縁を偏割りで落すものである。この方法は主となる2系統の二次加工にも使われている。これら木取構成割合も、素材と製品の関係となる割材加工製品と同様の比率を示している。小片の中には切片・木端として扱わねばならないものが混入している可能性はあるが、樹心を割る意識の見えるようなものは割材としてある。

K2-3: 偏割材・偏半割材: 樹心を通らない偏った割り方をした材で、その原材は丸木・半割材・割材である。全373点で幅21.0~0.7cmと大小・形状とも様々である。切片として扱わねばならないものも一部混入しているであろう。

K2-4: 心持材: 樹心を残して割った材で、39点出土している。割ったもう一方は偏割材となるが、使用されているかは不明。割材・偏割材という次段階の元材が含まれている。

半割材・割材・偏割材・心持材とそれらの加工製品の合計は1,518点である。樹種は31属に及ぶが、トネリコ属724点48%、ハンノキ属145点10%、ヤナギ属127点8%の3属で $\frac{1}{2}$ 近くを占める。トネリコ属の突出が特徴である。さらにコナラ属・ニレ属を足した汎用材の合計は1,153点、 $\frac{1}{2}$ 以上を占めることになる。

K3-1: 板材: 板とするほど厚みに均一性がなく、板や加工品の素材となるような材。全294点の内訳は、柃目92点31%・追柃34点12%・板目168点57%となる。板材加工製品とは柃目系と板目の割合が逆転する。板とほぼ同じく91%・268点が広葉樹である。トネリコ属90点31%・ハリギリ43点15%・ハンノキ属33点11%・シナノキ属32点11%・ヤナギ属24点8%とこの5属で $\frac{1}{2}$ を占めるが、針葉樹モミ属19点も見逃せない。板・板材・その加工製品と樹種との関係については、終章でまとめてみたい。

K3-2: 板: 板そのものとして使用されたと思われるもので、全116点の内訳は柃目37点32%・追柃12点10%・板目66点57%である。板加工製品とは柃目系と板目の割合が逆転する。長四辺形にそろえられた板や深淺の斜めカットや緩い内外の弧状加工がみられるものがある。50cmあるいは1mを超えるであろう長尺板もある。他も安定した幅と厚みがあり、住居や舟に関わるものが多いと思われる。

る。89% 103点が広葉樹である。シナノキ属20点17%・トネリコ属・ハリギリが各19点16%・ハコヤナギ属15点13%・ヤナギ属11点9%とこの5属で7割以上を占める。利用される樹種は舟材・舷側板と共通点がある。

K3-2d: 有孔板: 板綴舟の舷側板であった可能性があるが、厚い・薄くなっている・小さくなっている・節があるなどの点で、舷側板との決め手を欠くもの38点を分類した。板の利用以前から孔があったのか、利用のために孔を開けたのか特定できない。有孔の意味が問われる製品ではある。孔は角孔や角孔の磨耗が多く、明確な円孔はない。形状は広長・狭長・四辺形等様々である。板に1孔しかないかそう思われるもの、2孔以上が均等に並ぶもの、板面積の割に孔が多いものがある。モミ属10点・ハンノキ属7点・ハリギリ10点・ハコヤナギ属・シナノキ属・トネリコ属各3点と、出現する樹種は舷側板と共通点がある。

K4: 薄板・細板: 木取や加工度の違いなどから柁目板に分類できない薄い小型・細型の板101点だが、柁目については次段階の加工によって同じものになるのかもしれない。内訳は柁目55点・追根7点・板目39点で、モミ属の板目19点・柁目系16点、トネリコ属の柁目系11点、アスナコの柁目系10点が多い。

K5: 柁目板: 曲物や折敷などに加工され得る柁目の薄い板を集めた。一地点からの複数出土も含めて、831個体確認している。幅は、9.7以上-0.6cm以下と様々だが、3cm前後が平均的である。J5加工品を加え842点中で、樹種は、アスナコ759点90%と大半で、他ではモミ属49点6%・スギ11点が目立つ。供給を交易に依存していたことがわかる反面、約1割は地場産でまかっていたことも確かで、曲物等を自家生産しようとしていたことも窺える。

## L 建築材

L1-1: 柱: 直径がおよそ6cm以上で長さがおよそ2mかそれ以上、桁・梁の受け部や柱根の削りのあるもの、あるいはこれらの条件を満たすと推定できるもの141本を柱とした。ほとんどが木元側端部に削り加工がある。削りは一部に樹表面を残すものが多く、削り面数は1面〜7面以上の多面型と多彩である。径10cm前後の太柱のみみられる。トネリコ属59本42%・コナラ属22本16%・ハンノキ属19本13%という樹種構成で、この3属で7割以上を占めるほか他に10属ある。汎用材トネリコ属が多いなど、樹種選択は限定されている可能性が高く、B3層のコナラ属・B2層のオニグルミ・B1層のトネリコ属に特徴がある。図-27・28に代表例21点を示した。

L2: 建材: 桁・梁や垂木など、建物の大枠を組む柱以外の材で、360本を分類したが、柱の可能性のあるものも含まれてはいる。樹皮の付いたものも50本ある。長さや端部加工・材受け部加工などから、使用部位を検討したが、認定しきれないものが多いため、建材という範疇で取り扱う。分けきれない重複のまま分類して見ると、垂木22本・桁108本・梁125本で桁・梁総数は150本以上といえよう。破損や彎曲した材も多く、枝落としや端部の削り加工だけのものがほとんどであるが、端部に組む際の挟り込みや材固定用の枝元削り残し端部・交叉部の緩い削り・端部細化平坦加工・継ぎ足し部段加工など、建材としての特徴的加工を持つものもある。丸木が基本だが、大型の割材を利用も認められる。図-31に0B層の建材1本、図-30・31にB1層15本、図-31・32にB2層20本、図-33・34にB3層31本、図-35にB4層10本と、図6葉にほぼ層位順に代表例77本を掲載した。

トネリコ属149本41%・ヤナギ属35本10%・ハンノキ属33本9%・コナラ属28本8%・イヌエンジュ21本6%・ニレ属17本5%・ハシドイ属15本4%・オニグルミ14本4%の8種で9割近くを占めるが、

他に10属もの樹種が出現しており、群を抜いて多いのが汎用材のトネリコ属である。樹種選定は強いといえば、コナラ属・ニレ属・イヌエンジュ・オニグルミに建築材選定の特徴を見い出せるかもしれない。

L3：建築部材：建物の大枠に組み込む細部の材。180本が出土している。ほとんどが屋根や壁の横架材で、ほぼ均一の太さで両端を削りなどで加工ある。他種に分類した製品で建築部材の可能性のあるものは、各報告の一覧表の備考欄に示してある。長さ・太さで見ると、1.2m以上・1m前後・90～80cm・80～70cm・70～60cm・60～50cm・約30cmとほぼ10cm刻みで長短取りそろっている。使用部位や建築規模の相違に依るものであろう。割材製のものもある。図未掲載の細枝・枝材の集合は、屋根材や壁材かと思われる。図 - 36・37に長さ・形状ごとに代表例73本を掲載した。

トネリコ属46本26%・ヤナギ属38本21%・ハシドイ属16本9%・モミ属15本8%の4種で約 $\frac{1}{2}$ を占めるが、他に18属もの樹種が出現しており、汎用材のトネリコ属・ヤナギ属が多いなど、建材と同様、汎用材以外で樹種選定があったかもしれない。

L1 - 2：股木杭：股木部が受け部になった杭で98本出土している。股木端部に切断痕、元側端部に削り加工があり、削り面数は1～多数ある。柱とするには細身だが、構造材を受ける仕組みのものをここに分類した。長さほぼ1.5m以上の長尺杭・1m前後の中尺杭・70cm前後の短尺杭に分けられる。受け部には、股部の幹と枝の開き角度や太さのバランスがよいもの・股部の端を短くカットしたもの・開き角が偏り枝の張出しが物掛け状になるもの・幹が開くものなどがある。樹皮の付いたものも24本ある。図 - 29に代表例17本を掲載した。トネリコ属21本・ハシドイ属18本・ヤナギ属15本・イヌエンジュ13本・ニレ属9本・ミツバウツギ6本・クワ属5本・ほか8属という樹種の構成で、ハシドイ属・イヌエンジュ・ミツバウツギに特徴を見い出せる。

L4：杭：太さ5cm前後の杭で、450本出土している。端部加工や枝落としては柱・股木杭と変わらない。木元側を杭先としている(先のみで判別できないものもある)ことが多い。割材製の杭もある。図 - 38に代表例41本を掲載した。トネリコ属154本34%・ヤナギ属58本13%・ハンノキ属45本10%・コナラ属30本7%・ハシドイ属29本6%の5属で7割を占めるが、他に16属もの樹種が出現しており、群を抜いて多いのが汎用材のトネリコ属であるなど、樹種21種と樹種選定に特別な意識はないようであるが、オニグルミとサクラ属がやや多い。

L5：細杭：太さ3～4cmぐらいの細い杭で、170本出土している。端部加工や枝落としては杭と変わらない。トネリコ属61本36%・ヤナギ属31本18%・その他19属という樹種構成である

L6：刺し杭：手で刺して使う短めの細杭で、建材類に含めるべき物ではないかもしれない。104本出土している。端部加工や枝落としては杭と変わらないほか、頭部も削りて調整している。上半部が枝別れや曲がりて特徴付けられるものがあり、これらが引っ掛かり・固定などの役割を果たすのであろう。トネリコ属27本26%・ヤナギ属18本17%・ハシドイ属17本16%・イヌエンジュ・ミツバウツギ各7本7%・他12属という樹種構成である。B3層のタラノキ4本が特徴的である。

#### M 樹皮

M1：樹皮加工製品：樹皮に切る・穿孔・延ばし・焼きなどの加工を施した製品4点で、D1 - 1鞘やG7と丸まった帯状の製品は別扱い。図 - 15に示した B3 - 803・804は平面楕円形に切り取られた製品で、周縁部に小穴列がある。包み材か張り当て材と思われる。

M2：樹皮製絞め具：刀の鞘か柄等の絞め具と思われるが、独立しているため樹皮製の製品として2点を分類した。図 - 15右上二段目に示した B3 - 583はサクラ属と思われる樹皮の細帯状加工製



品。幅145cmにカットした樹皮を、片端部に入れた逆「Y」字状のスリットにもう一方端を折り加工して差込み、長径4cm・短径2.5cmに巻き絞めたもの。

M3-1：細帯状樹皮：平均幅で2cm以下に細く裂き採られた、細帯状の樹皮5点。紐のように使用されたと考えられる。M4渦巻状樹皮から採取されるのだろう。

M3-2：帯状樹皮：帯状に幅を揃えられた樹皮製品11点。巻く・包むなどの用途があるほか、加工のための原材料になると思われる。幹から直接かM4渦巻状樹皮から採取されるのだろう。

M4：渦巻状樹皮：取上げ地点で66点ある。当初から幅を設定して幹から採集したものが、丸まった状態で残ったもの。採集対象の樹種や幹の太さによって、幅・太さや巻き方が変わってくる。巻の状態から、双渦巻状と渦巻状に分けた。巻が緩んで乱れたものもある。縛り材・固定材や燈火用に使われるものである。

M5：樹皮：取上げ地点で87点ある。形態は、小片・切片・細片などさまざまで、剥がされたと見られる以外の加工はない。炭化したものや焼痕のあるものが6点ある。

## N 廃材等

N1：剥材：偏割材の極端なあり方で、薄く樹皮近くを剥くように割った材。さらに加工できないような材なので、切片ともいえる。63点出土。

N2：切片：製品製作や材料切断などの作業時に出る、割削片。細かく割れ計測不能のものも多い。作業場所であるのが、集中して出土する地点も180カ所ある。集中内で別樹種を分けてカウントすると、取上げ地点で1271点を数える。樹種で見ると、製品全点11,612点に占める割合よりかなり高い率を示すのが、トネリコ属50%・ハンノキ属16%など、極度の低率を示すのがアスナロ・ノリウツギ・ハシドイ属などである。木材の利用を考える上で興味深いデータである。

N3：木端：製品や材料の割削片。細かく割れ計測不能のものも多い。集中も27カ所ある。集中内で別樹種を分けてカウントすると、取上げ地点で201点ある。樹種で見ると、製品全点11,612点に占める割合よりかなり高い率を示すのが、トネリコ属44%・ニレ属・ハリギリなど、極度の低率を示すのがアスナロ・モミ属・ヤナギ属・ノリウツギ・ハシドイ属などである。これも木材の利用を考える上で興味深いデータである。

N4：炭化材：取上げ地点で282点ある。このうち材としてほとんど形状をなさず、炭化材破片の集中状態や散布状態で確認されたものが143点ある。既報告の一覧表ではこれらは、備考に範囲の規模を記録した。樹種が認定できたものは80点である。

(三浦)

4 木製品の樹種同定

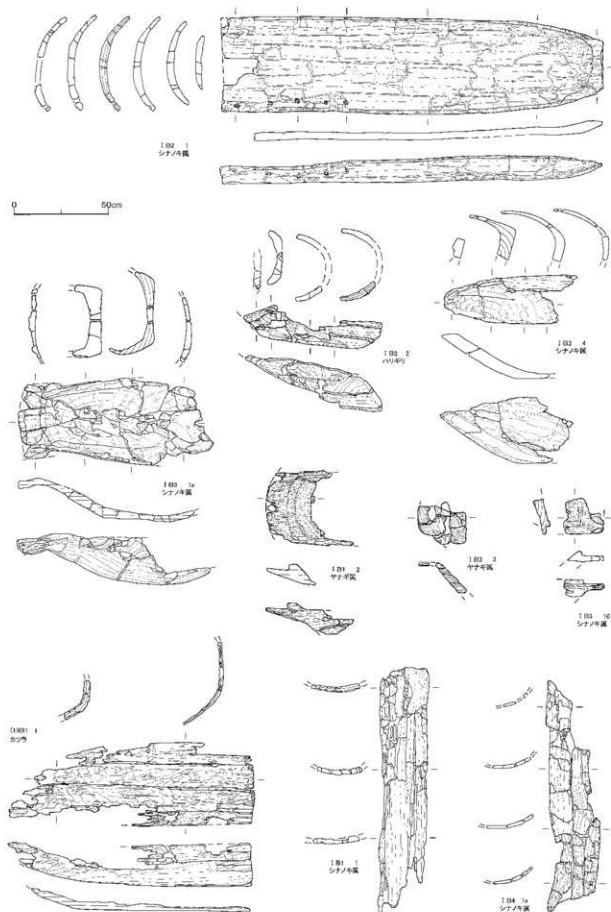


図 - 1 舟敷・舟材

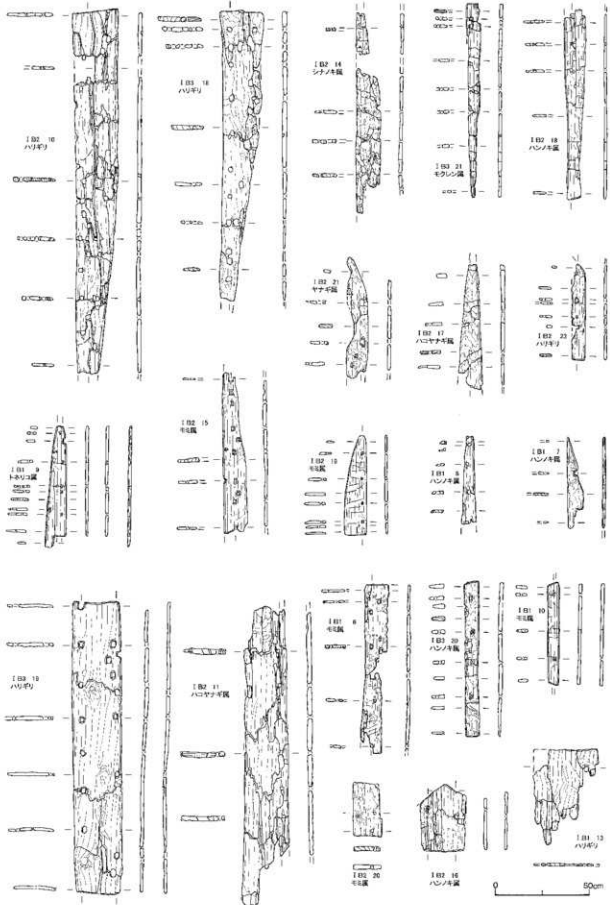


図 - 2 舷側板

4 木製品の樹種同定

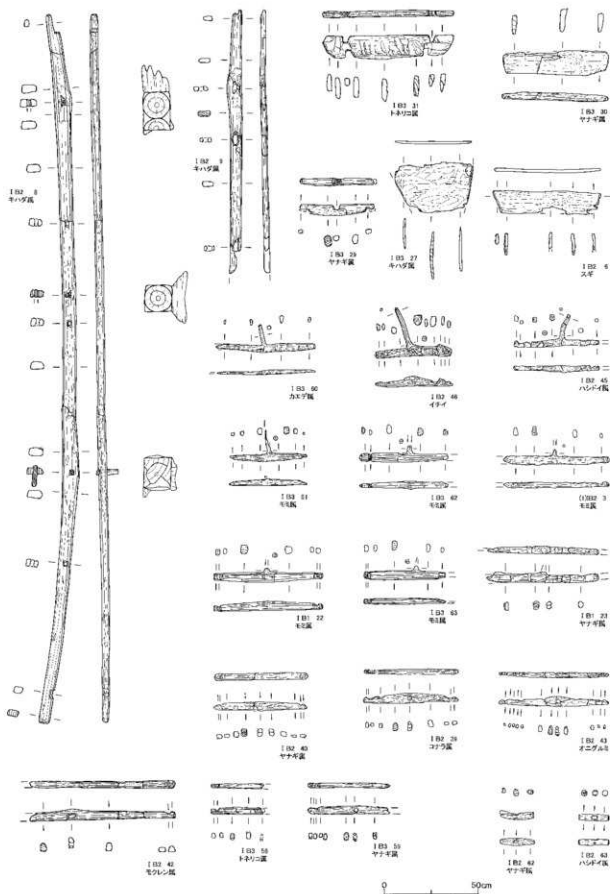


図 - 3 舟部材・車權受上部等

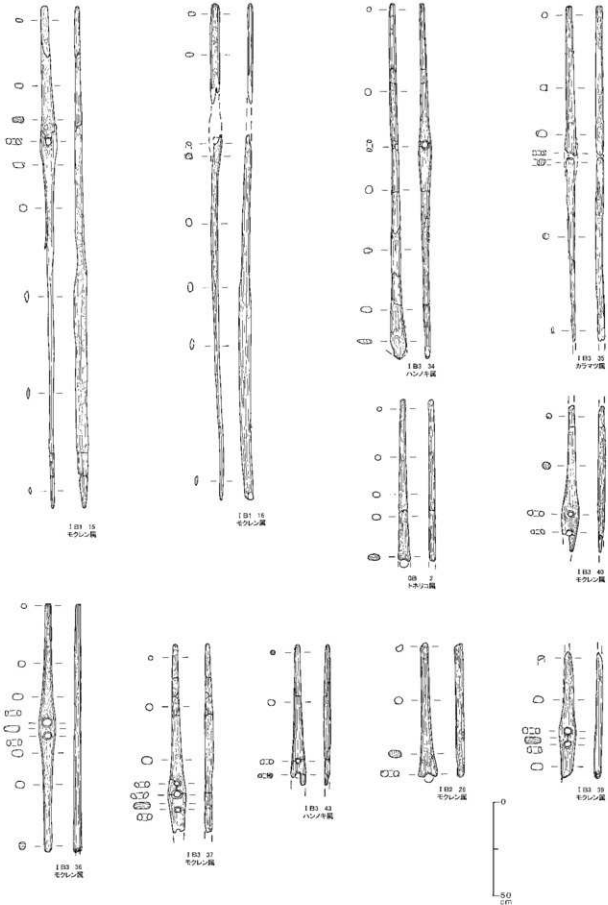


図 - 4 車權 ( 1 )

4 木製品の樹種同定

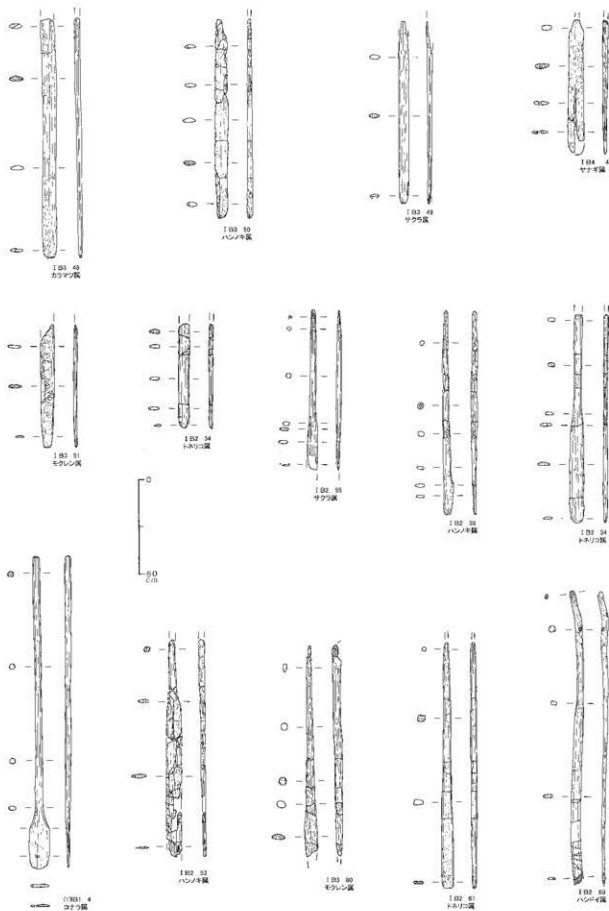


図 - 5 車權(2)・早權

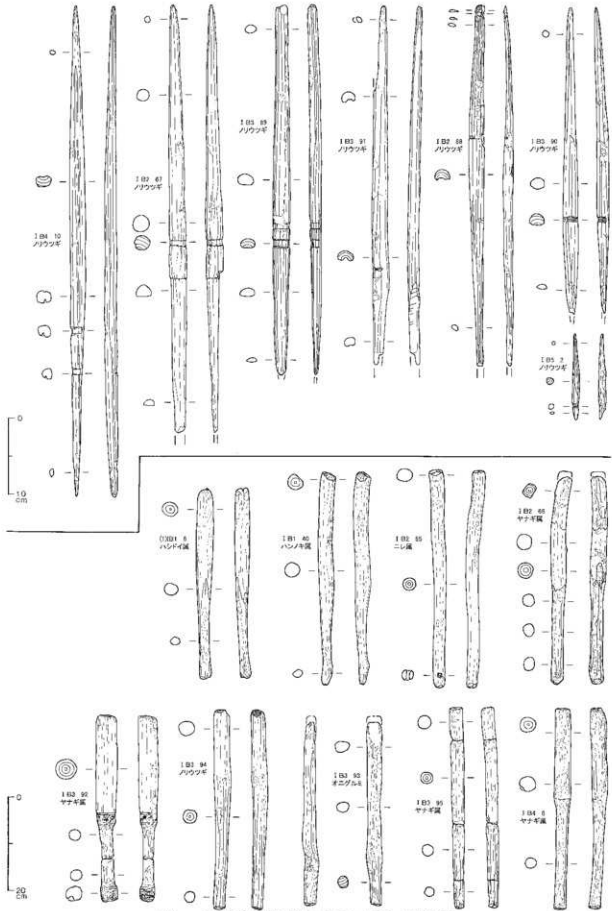


図 - 6 回転式離頭鉤 (キテ) 中柄・魚叩き棒

4 木製品の樹種同定

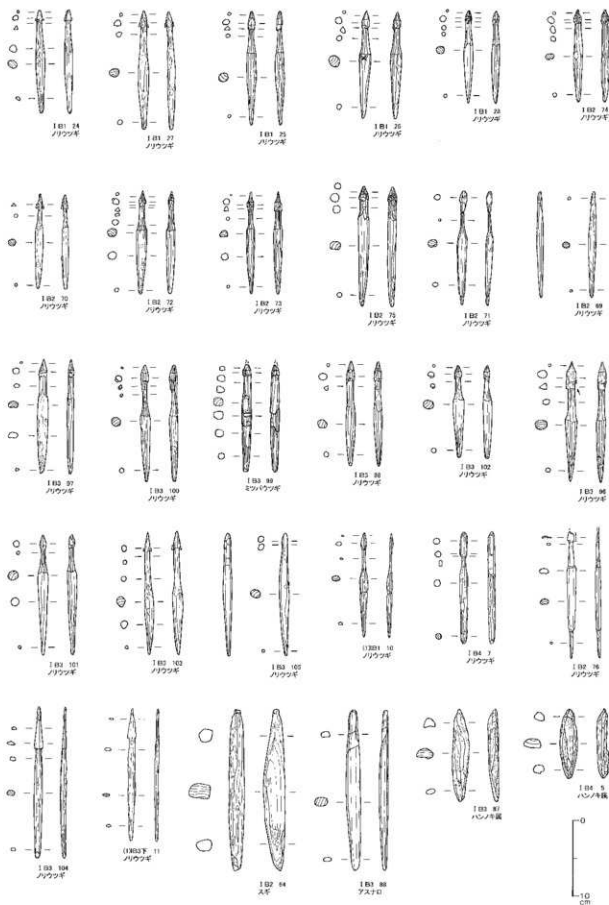


図 - 7 やす・浮子



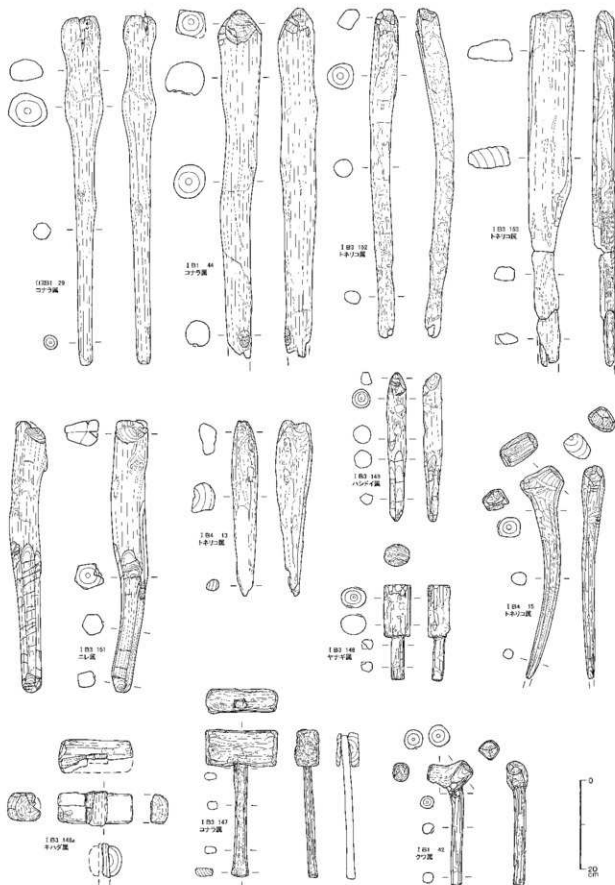


図 - 8 掛矢・横槌・縦槌

4 木製品の樹種同定

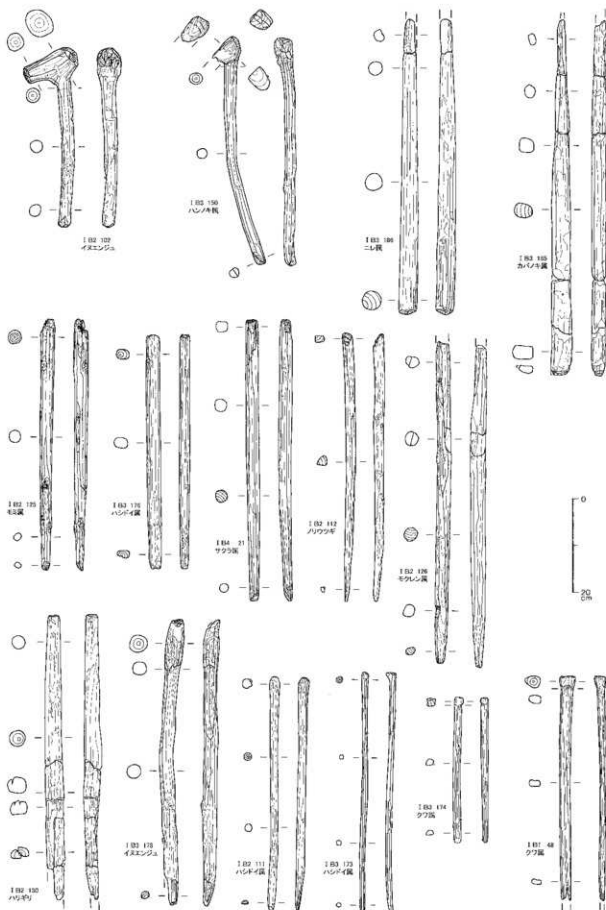


図 - 9 斧柄・柄類 (1)

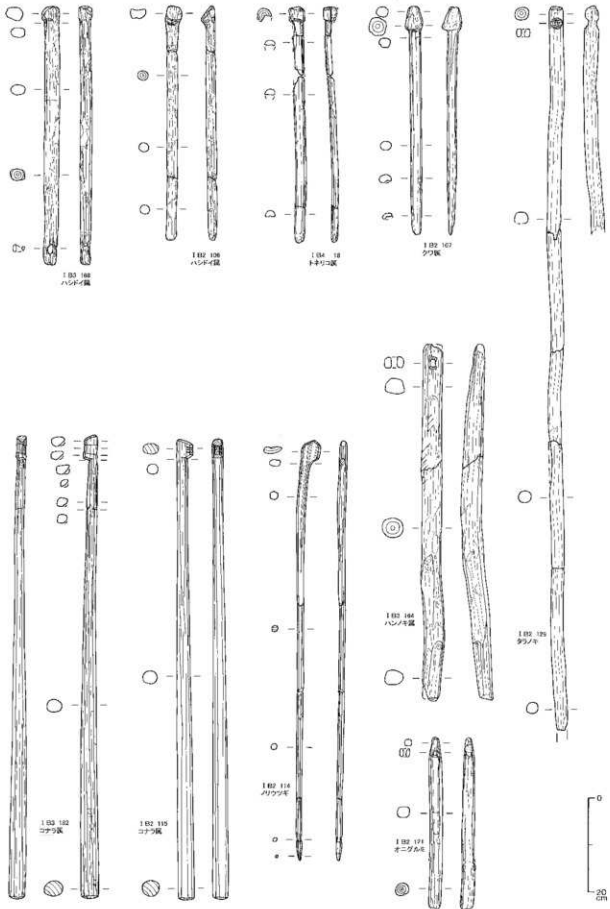


図 - 10 柄類 ( 2 )

4 木製品の樹種同定

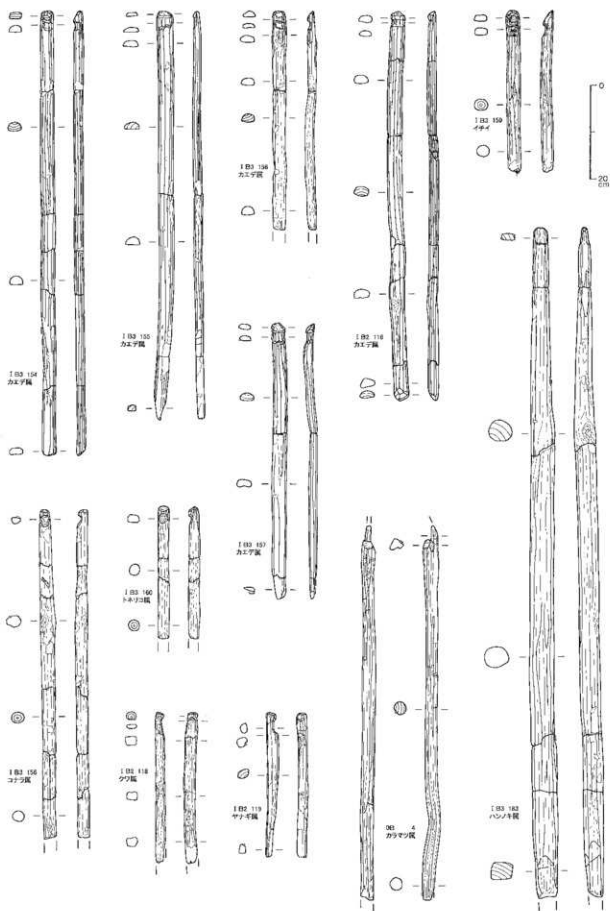


図 - 11 柄類 (3)

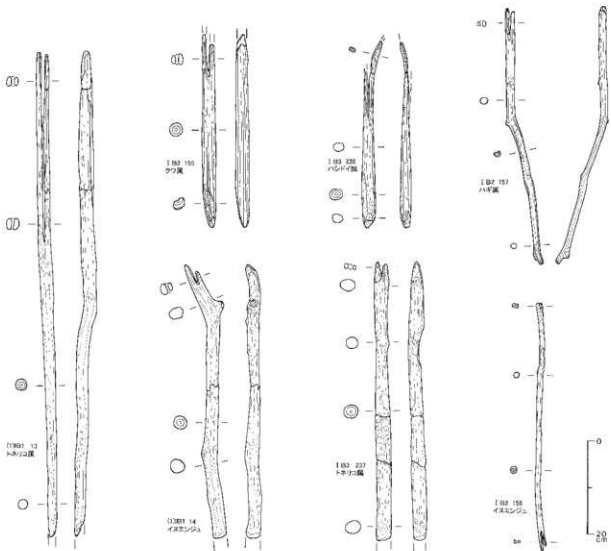
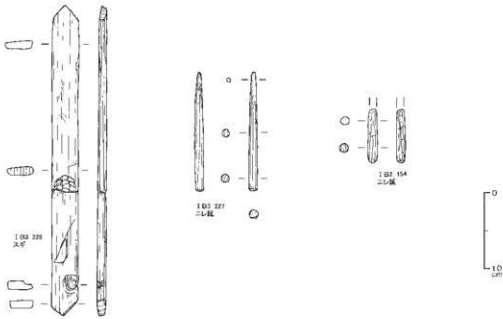


図 - 12 発火具・挟み木

4 木製品の樹種同定

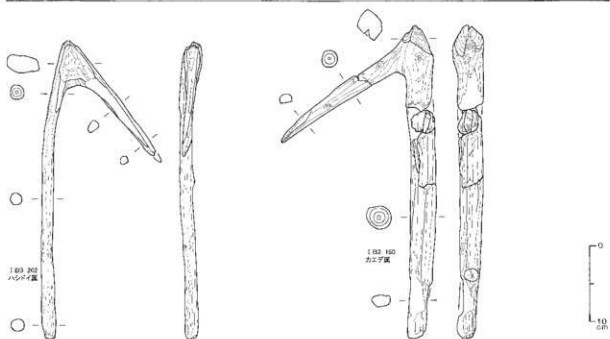
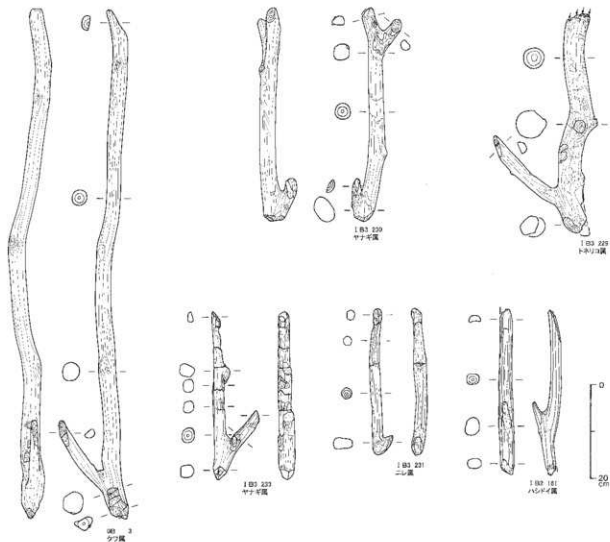


図 - 13 鉤類

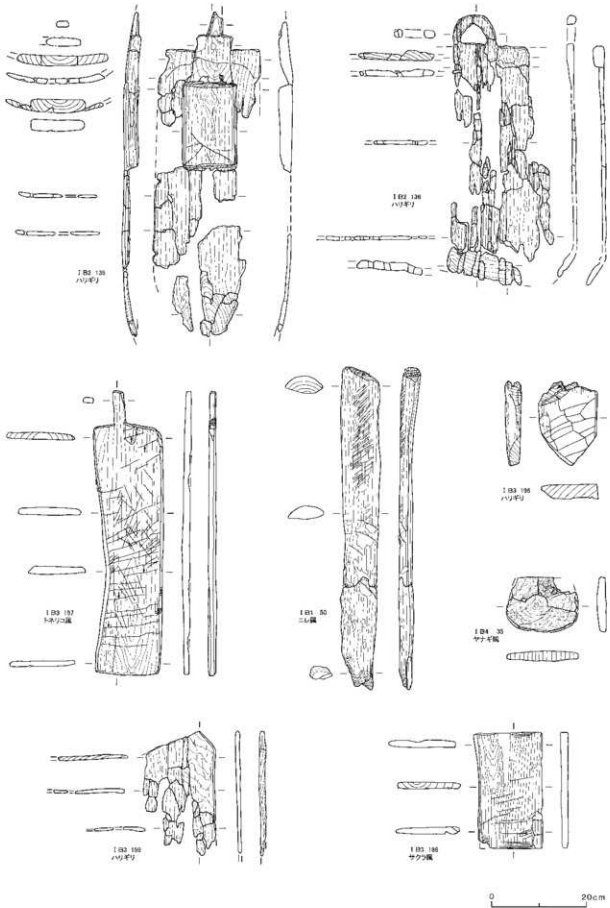


図 - 14 まな板・作業台

4 木製品の樹種同定

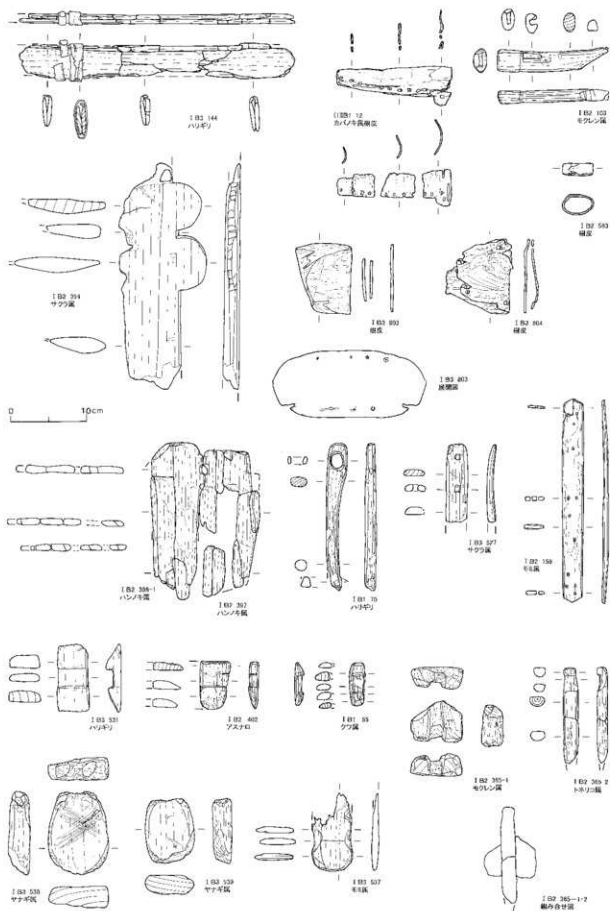


図 - 15 諸道具類





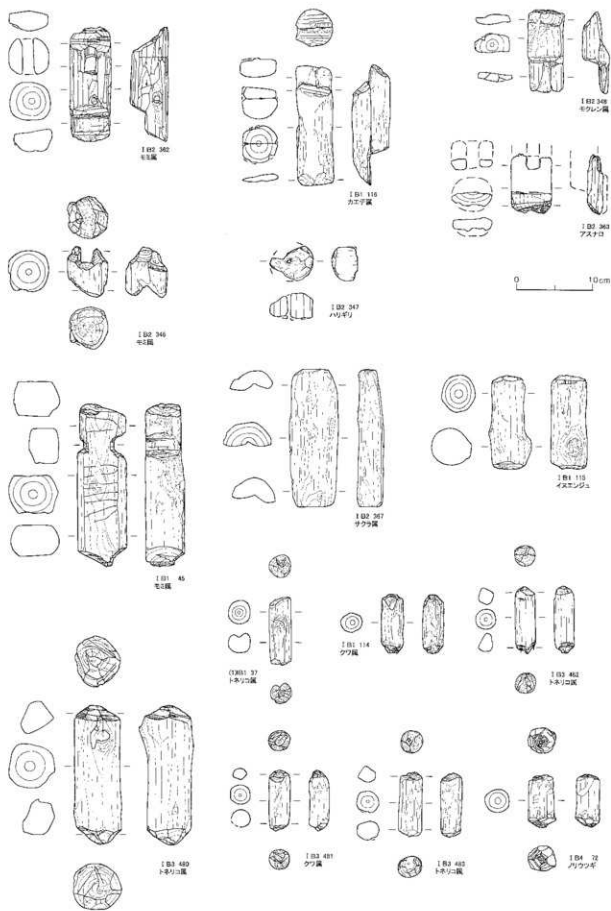


図 - 17 丸木材加工製品等（錘等）

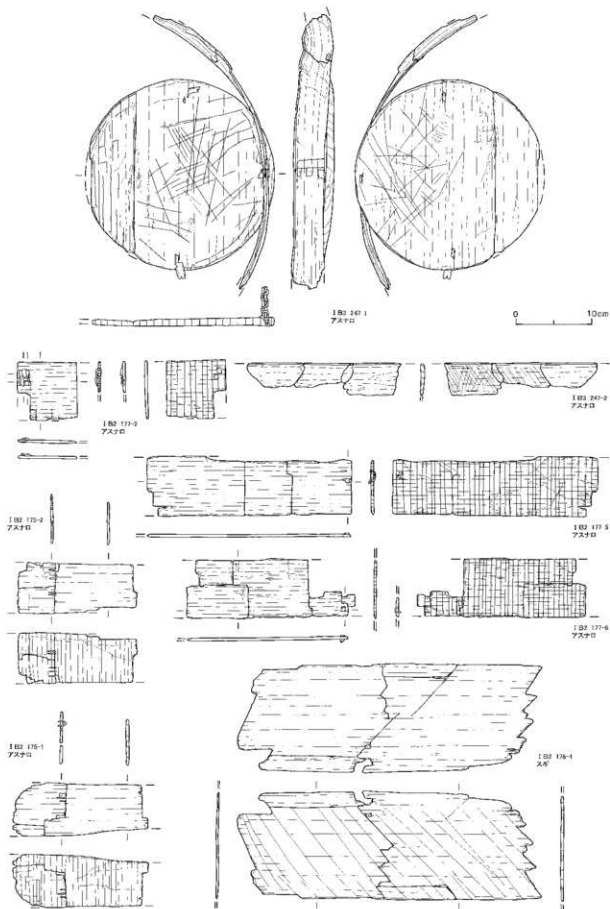


図 - 18 曲物

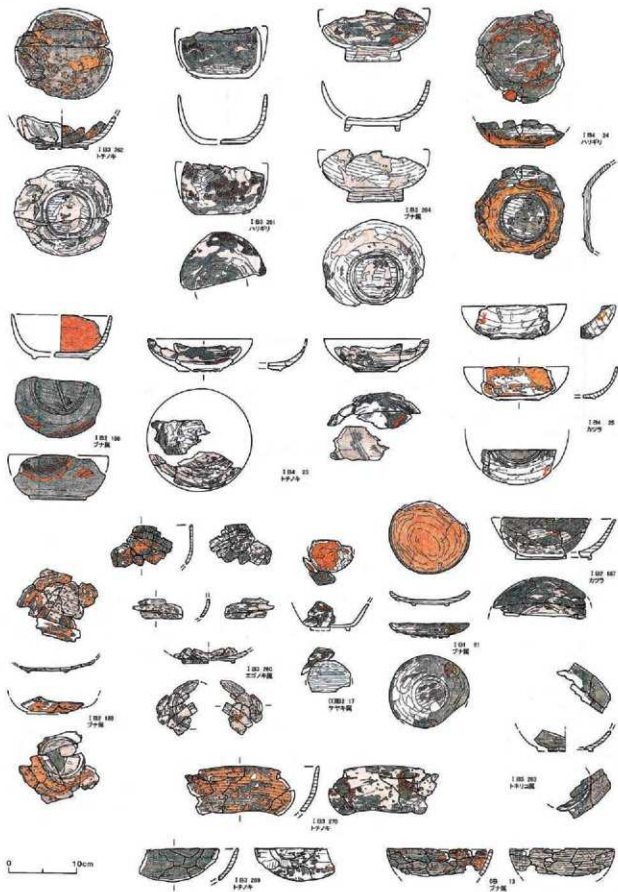


図 - 19 漆塗リ椀

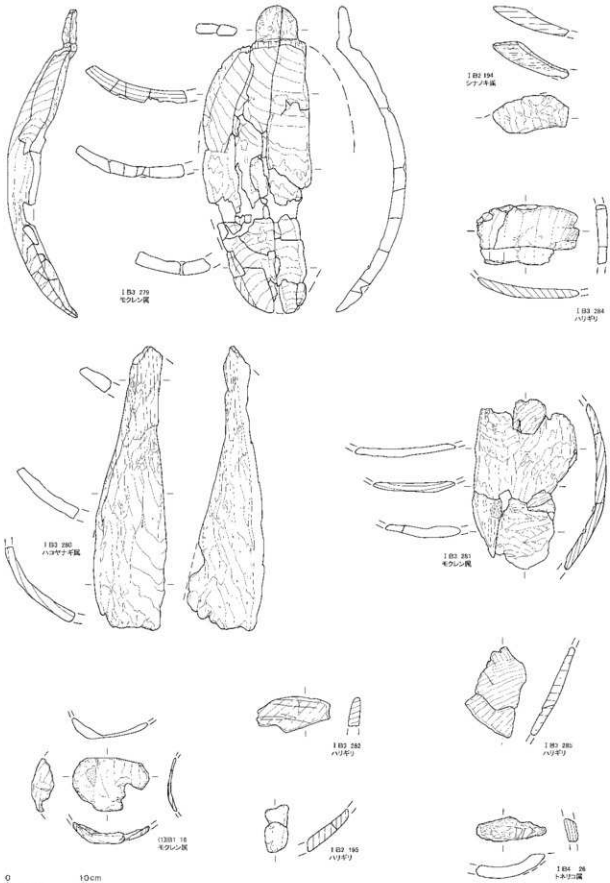


図 - 20 刺り鉢 (ニマ)

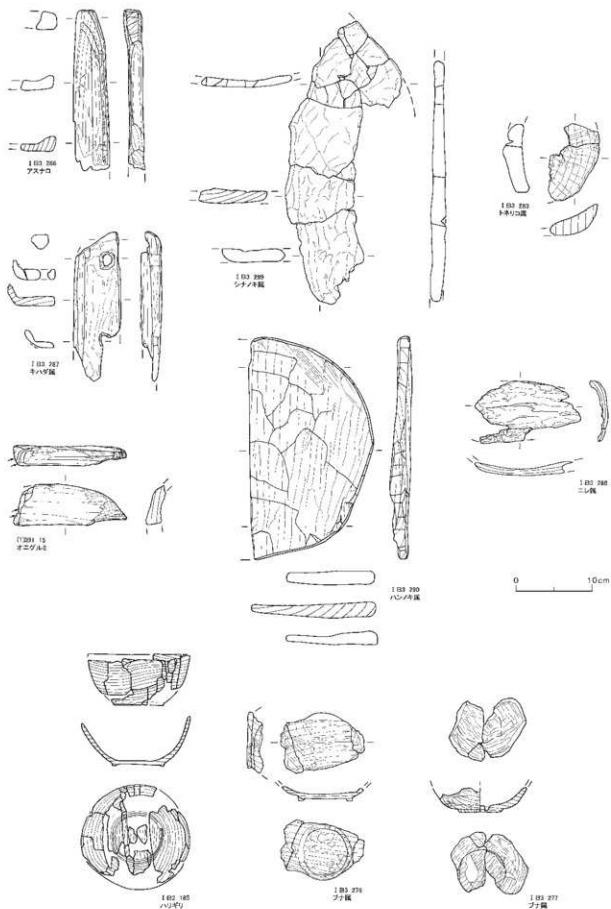


図 - 21 割り物(盆・皿・椀)

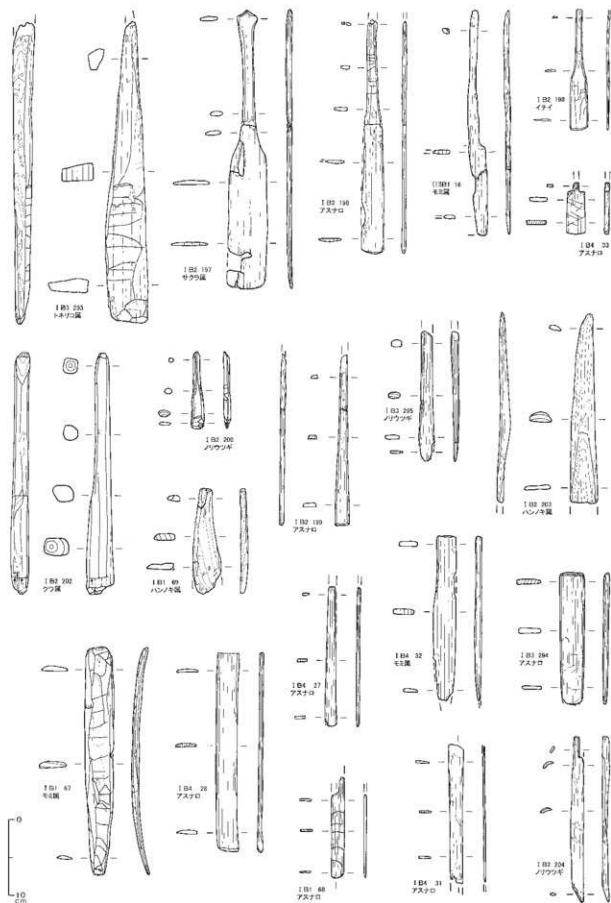


図 - 22 箭類 ( 1 )

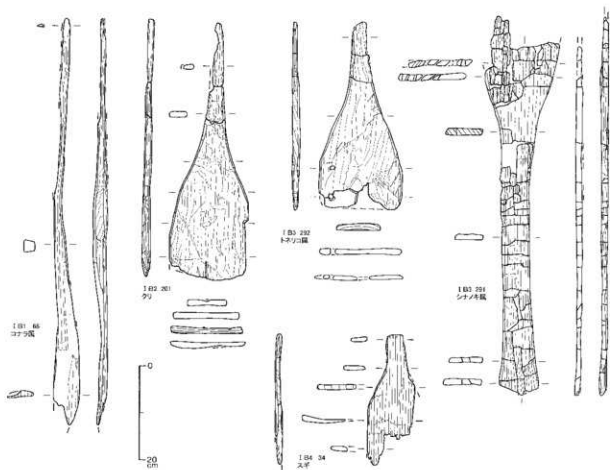
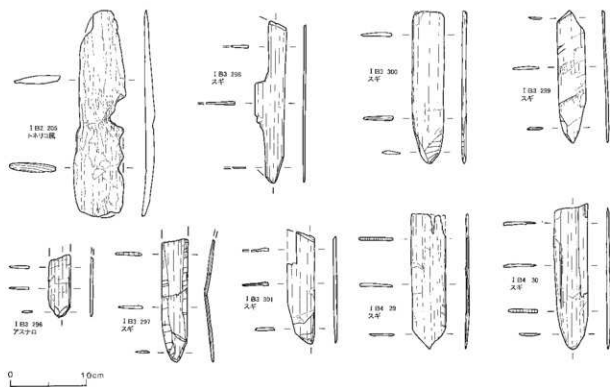


図 - 23 箭類 (2)・大型箭



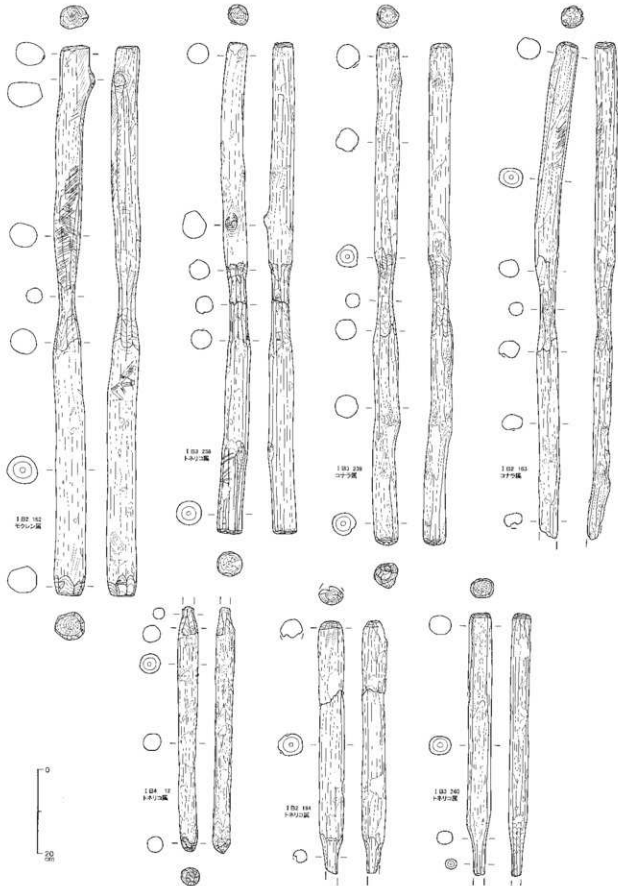


図 - 24 豎杵

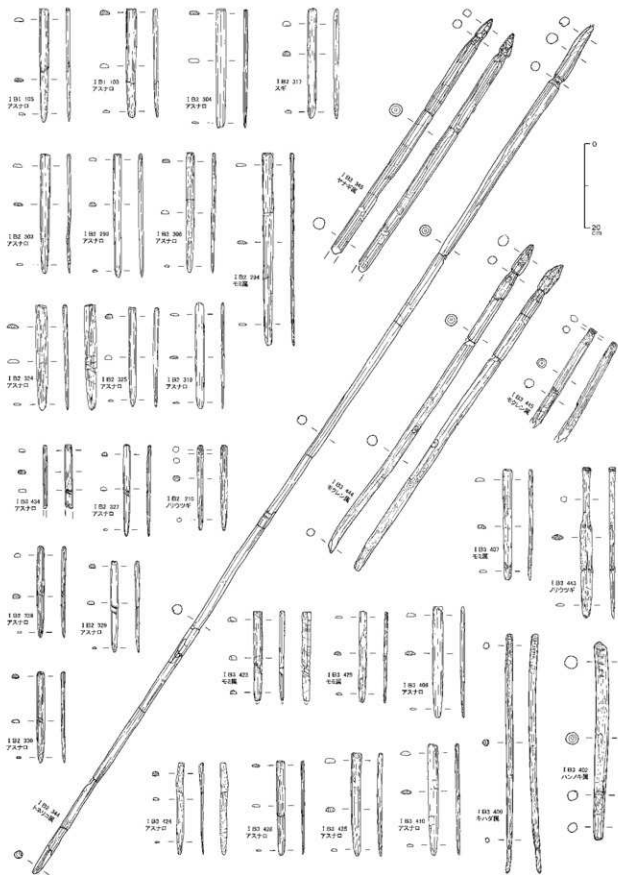


図 - 25 イクバスイ・木箭等

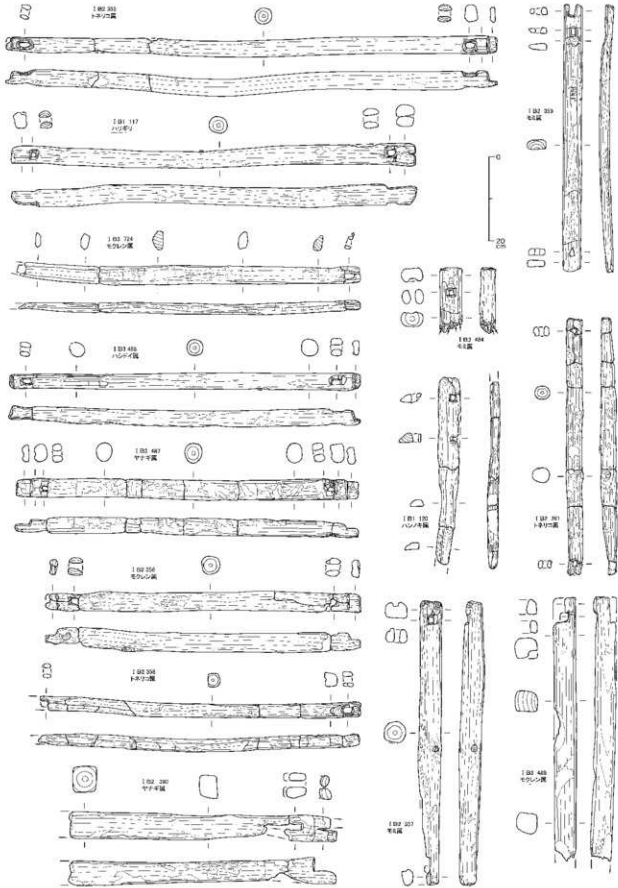


図 - 26 端扶付有孔製品類 ( 杵材 ? )

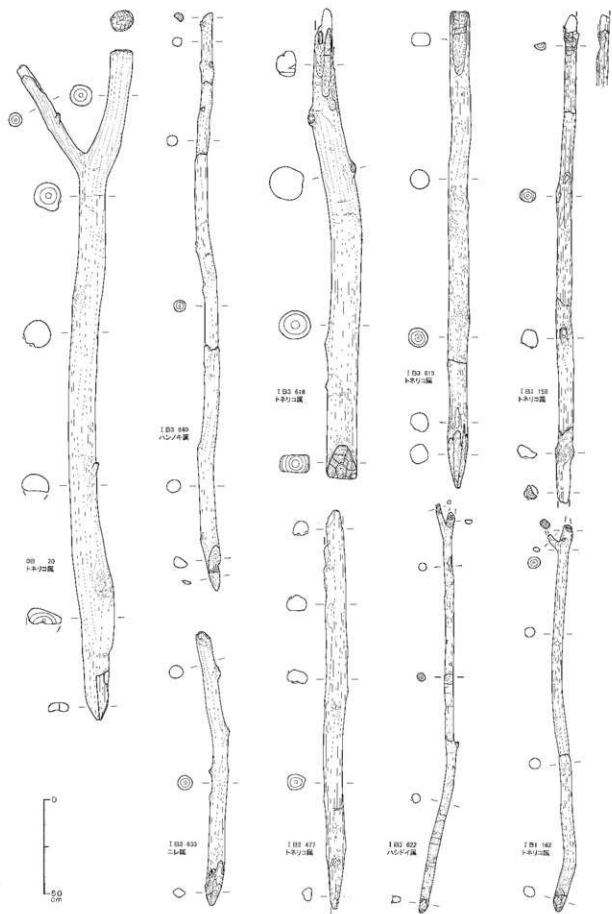


図 - 27 柱 (1)

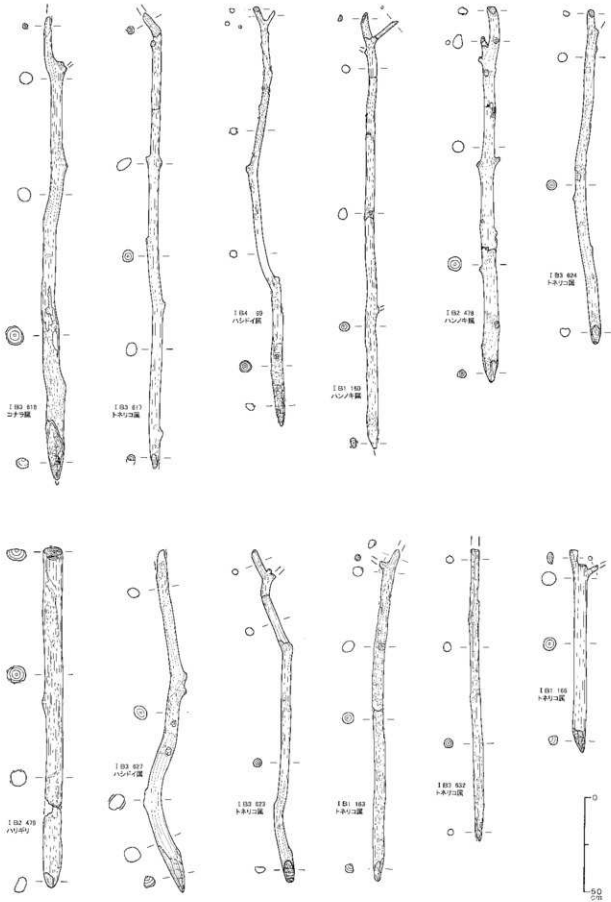


図 - 28 柱 (2)

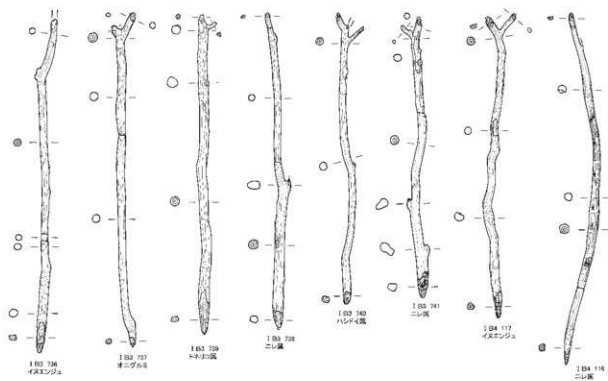
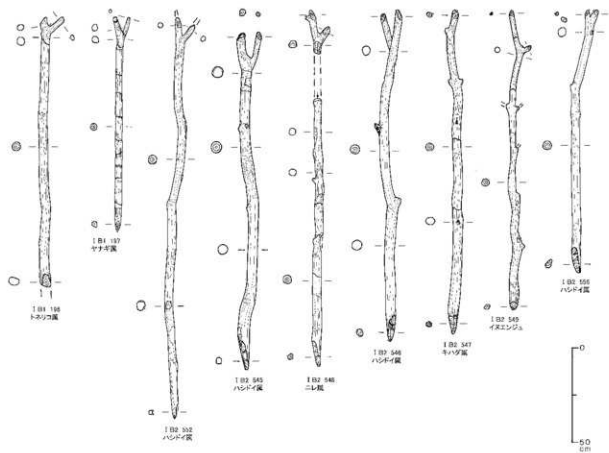


図 - 29 股木杭

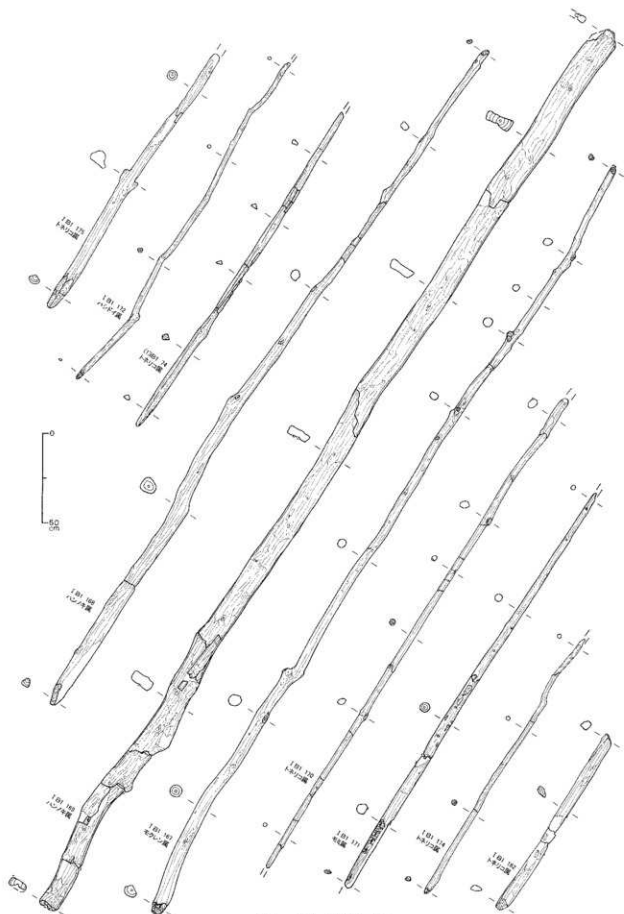


図 - 30 建材 ( 1 )

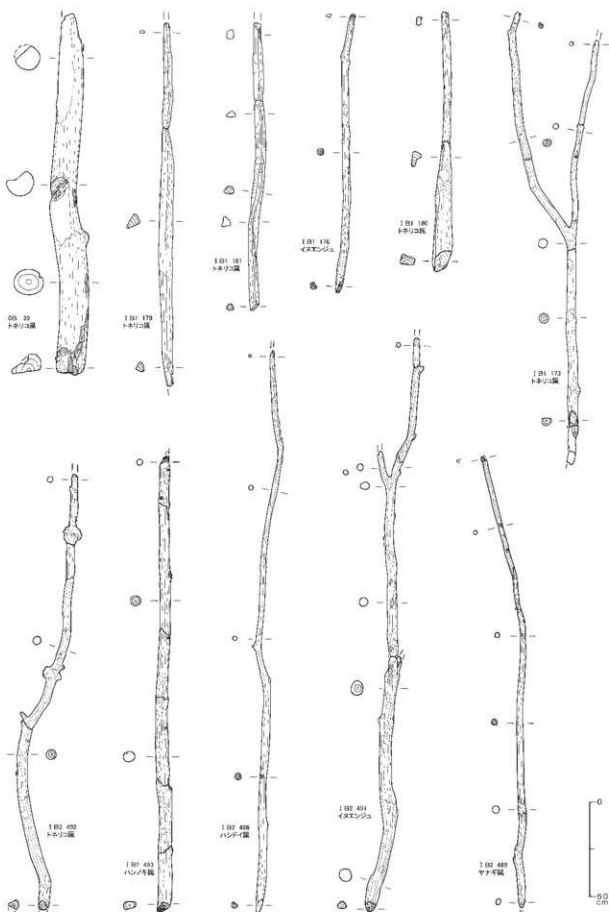


図 - 31 建材 ( 2 )



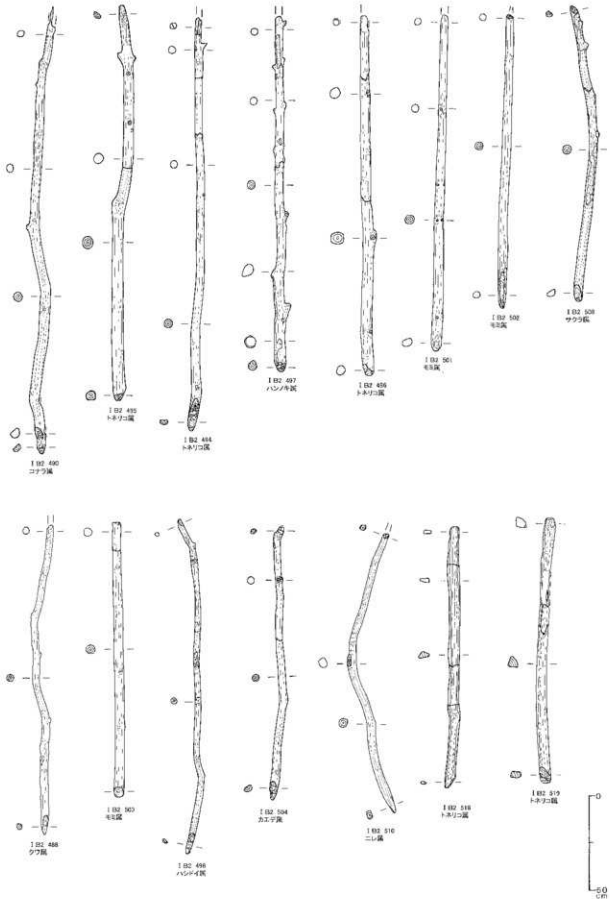


図 - 32 建材 ( 3 )



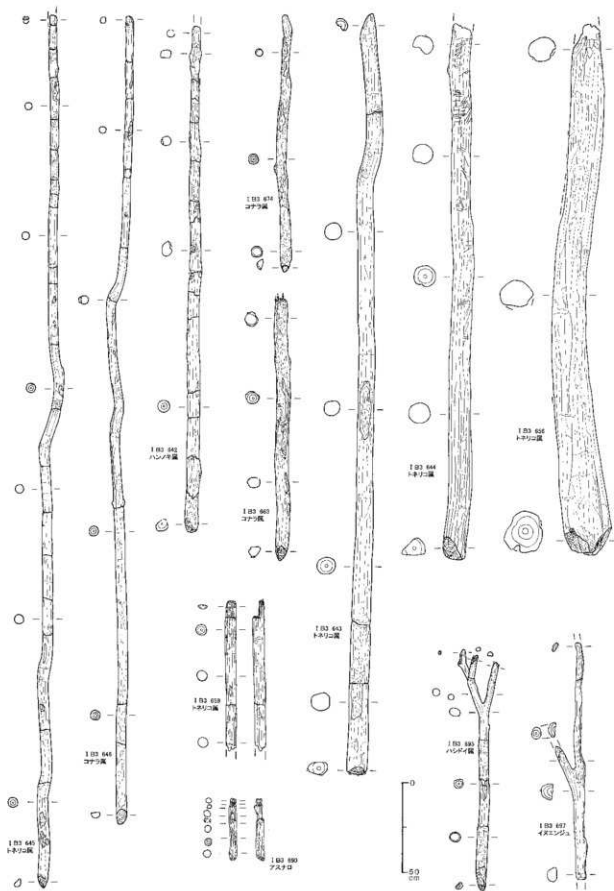


図 - 34 建材 ( 5 )

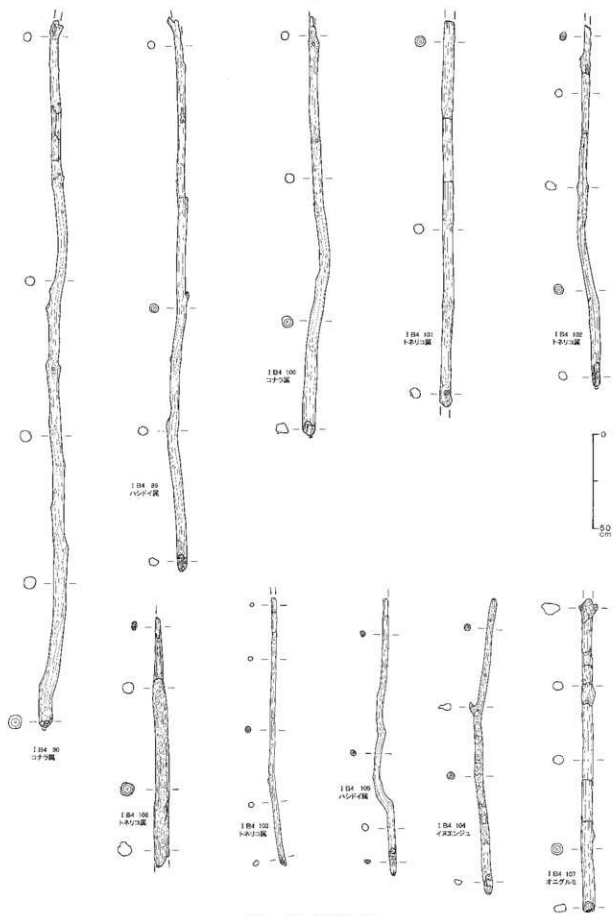


図 - 35 建材 ( 6 )

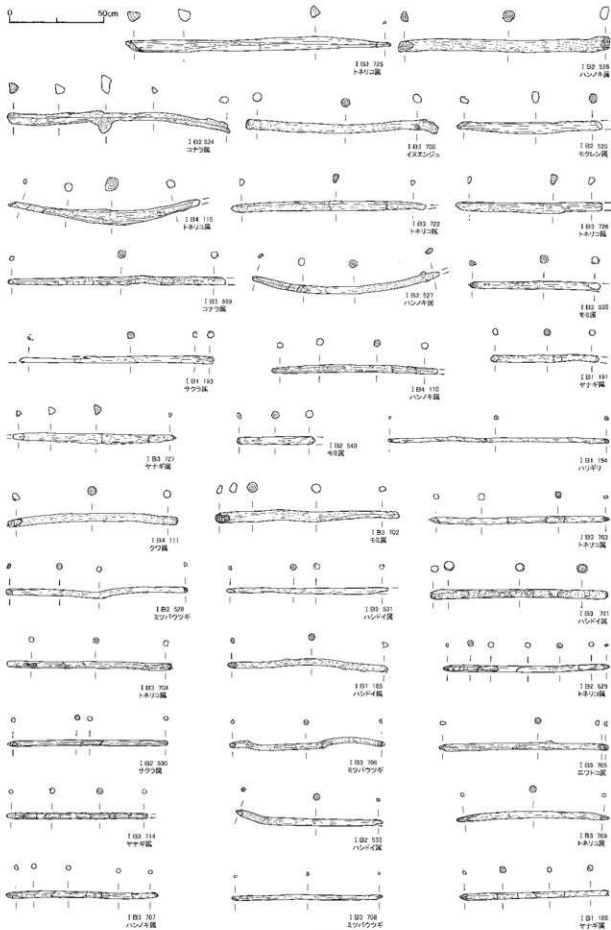


図 - 36 建築部材 ( 1 )

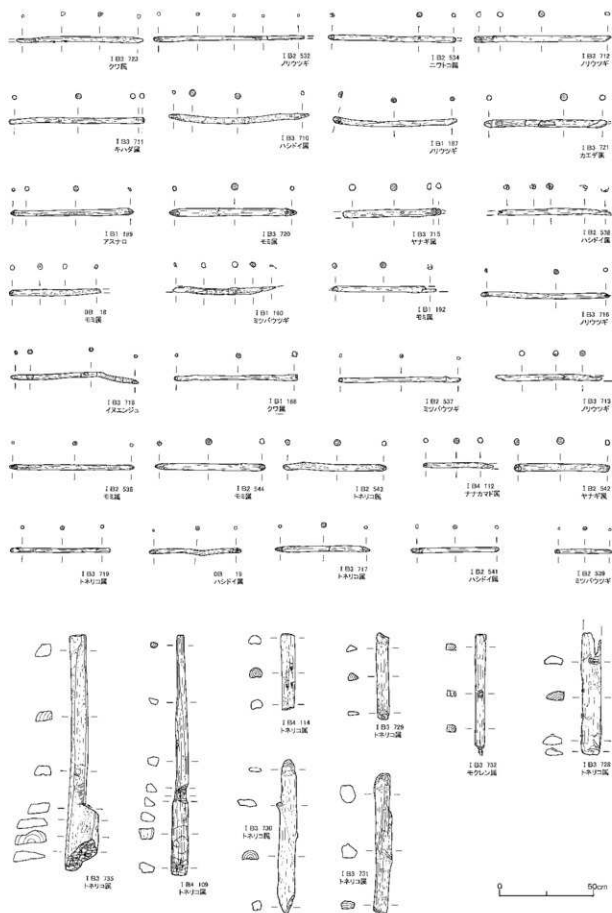


図 - 37 建築部材 ( 2 )

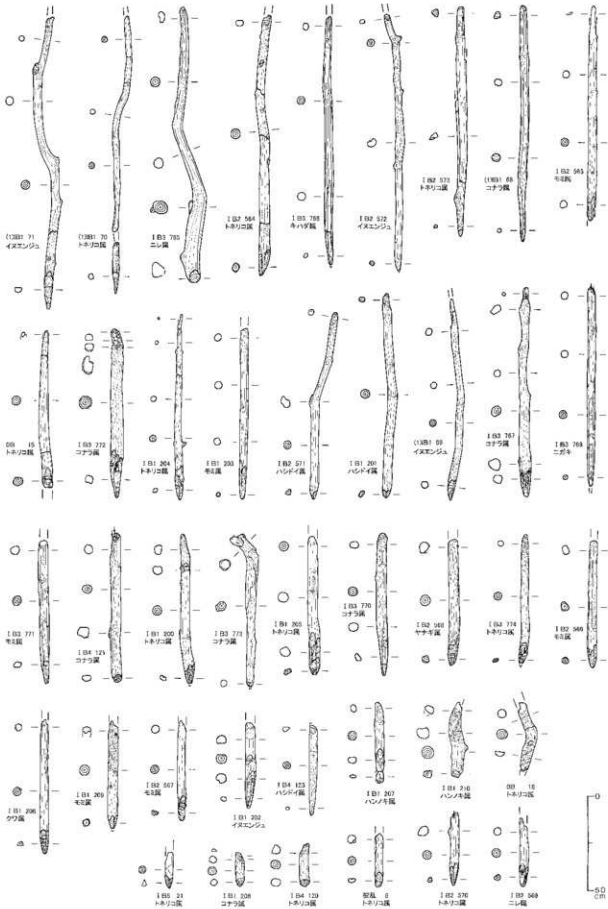


図 - 38 杭

表 - 8 種別木製品集成掲載一覧(1)

## 舟数・舟材(図Ⅳ-1)

製品名(推定含む)	階位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
A1-1 舟数 切断品 再利用品	I B2 (5)	北埋176集	1	横木	シナノキ属	1/10
A1-1 舟数 軸	I B3 (4)	北埋159集	1a	横木	シナノキ属	1/10
A1-1 舟数 軸・舷	I B2 (5)	北埋176集	2	横木	ハリギリ	1/10
A1-1 舟数 舷	I B3 (4)	北埋159集	4	横木	シナノキ属	1/10
A1-2 軸 舟数 舟材	I B1 (5)	北埋176集	2	横木	ヤナギ属	1/10
A1-2 軸 舟数 舟材	I B3 (4)	北埋159集	2	横木	ヤナギ属	1/10
A1-2 軸 舟数 舟材	I B3 (4)	北埋159集	10	横木	シナノキ属	1/10
A1-1 舟数 切断品 再利用品	I B1 (1)	北埋128集	1	横木	ハリギリ	1/10
A1-1 舟数片	I B1 (5)	北埋176集	1	横木	シナノキ属	1/10
A1-1 舟数片	I B4 (3)	北埋146集	1a	横木	シナノキ属	1/10

## 舷側板(図Ⅳ-2)

製品名(推定含む)	階位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
A1-4 舷側板	I B2 (5)	北埋176集	10	板目	ハリギリ	1/10
A1-4 舷側板	I B3 (4)	北埋159集	18	板目	ハリギリ	1/10
A1-4 舷側板	I B2 (5)	北埋176集	14	板目	シナノキ属	1/10
A1-4 舷側板	I B3 (4)	北埋159集	21	板目	モクレン属	1/10
A1-4 舷側板	I B2 (5)	北埋176集	18	板目	ハンノキ属	1/10
A1-4 舷側板 再利用品	I B2 (5)	北埋176集	21	板目	ヤナギ属	1/10
A1-4 舷側板	I B2 (5)	北埋176集	17	板目	ハコヤナギ属	1/10
A1-4 舷側板 再利用品	I B2 (5)	北埋176集	23	板目	ハリギリ	1/10
A1-4 舷側板 再利用品	I B1 (5)	北埋176集	9	板目	トネリコ属	1/10
A1-4 舷側板	I B2 (5)	北埋176集	15	板目	モミ属	1/10
A1-4 舷側板 再利用品	I B2 (5)	北埋176集	19	板目	モミ属	1/10
A1-4 舷側板	I B1 (5)	北埋176集	8	追板	ハンノキ属	1/10
A1-4 舷側板 再利用品	I B1 (5)	北埋176集	7	追板	ハンノキ属	1/10
A1-4 舷側板	I B3 (4)	北埋159集	19	板目	ハリギリ	1/10
A1-4 舷側板	I B2 (5)	北埋176集	11	板目	ハコヤナギ属	1/10
A1-4 舷側板	I B1 (5)	北埋176集	6	板目	モミ属	1/10
A1-4 舷側板	I B3 (4)	北埋159集	20	板目	ハンノキ属	1/10
A1-4 舷側板 再利用品 仕切板・構造材	I B1 (5)	北埋176集	10	板目	モミ属	1/10
A1-4 舷側板 再利用品	I B2 (5)	北埋176集	20	追板	モミ属	1/10
A1-4 舷側板 再利用品	I B2 (5)	北埋176集	16	板目	ハンノキ属	1/10
A1-4 舷側板	I B1 (5)	北埋176集	13	板目	ハリギリ	1/10

## 舟部材類・車權受上部等(図Ⅳ-3)

製品名(推定含む)	階位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
A1-3 舟縁材	I B2 (5)	北埋176集	8	横木	キハダ属	1/10
A1-3 舟縁材	I B2 (5)	北埋176集	9	横木	キハダ属	1/10
A1-5 舟部材 仕切板・構造材	I B3 (4)	北埋159集	31	板目	トネリコ属	1/10
A1-5 舟部材 仕切板・構造材	I B3 (4)	北埋159集	30	板目	ヤナギ属	1/10
A1-5 舟部材 仕切板・構造材	I B3 (4)	北埋159集	29	心持	ヤナギ属	1/10
A1-5 舟部材 板	I B3 (4)	北埋159集	27	板目	キハダ属	1/10
A1-5 舟部材 仕切板・構造材	I B2 (5)	北埋176集	6	板目	スキ	1/10
A2-2 車權受上部 軸枝利用式	I B3 (4)	北埋159集	60	1/4割	カエデ属	1/10
A2-2 車權受上部 軸枝利用式	I B2 (5)	北埋176集	46	股木(丸木)	イチイ	1/10
A2-2 車權受上部 軸枝利用式	I B2 (5)	北埋176集	45	股木(丸木)	ハシドイ属	1/10
A2-2 車權受上部 軸枝利用式	I B3 (4)	北埋159集	61	1/4割	モミ属	1/10
A2-2 車權受上部 軸枝利用式	I B3 (4)	北埋159集	62	半割(心持)	モミ属	1/10
A2-2 車權受上部 軸枝利用式	I B2 (1)	北埋128集	3	板目	モミ属	1/10
A2-2 車權受上部 軸枝利用式 新目付	I B1 (5)	北埋176集	22	1/4割	モミ属	1/10
A2-2 車權受上部 軸枝利用式	I B3 (4)	北埋159集	63	1/4割	モミ属	1/10
A2-2 車權受上部 軸枝利用式	I B1 (5)	北埋176集	23	丸木	ヤナギ属	1/10
A2-2 車權受上部 軸差込式	I B2 (5)	北埋176集	40	丸木	ヤナギ属	1/10
A2-2 車權受上部 軸差込式	I B2 (5)	北埋176集	39	1/4割	コナラ属	1/10
A2-2 車權受上部 軸差込式	I B2 (5)	北埋176集	43	1/4~1/8割	オニグルミ	1/10
A2-2 車權受上部 軸差込式	I B2 (5)	北埋176集	42	板目	モクレン属	1/10
A2-2 車權受上部 軸差込式	I B3 (4)	北埋159集	56	1/4~1/6割	トネリコ属	1/10
A2-2 車權受上部 軸差込式	I B3 (4)	北埋159集	59	心持	ヤナギ属	1/10
A3-2 權持ち手	I B2 (5)	北埋176集	62	心持	ヤナギ属	1/10
A3-2 權持ち手	I B2 (5)	北埋176集	63	丸木	ハシドイ属	1/10



表 - 9 種別木製品集成掲載一覧(2)

## 車權(1) (図IV-4)

製 品 名 (推定含む)	階 位	報 告 書 No.	掲載No.	木 取	樹 種	縮 尺
A2-1 車權	I B1 (5)	北埋176集	15	板目	モクレン属	1/10
A2-1 車權	I B1 (5)	北埋176集	16	板目	モクレン属	1/10
A2-1 車權	I B3 (4)	北埋159集	34	1/4~1/8割	ハンノキ属	1/10
A2-1 車權	I B3 (4)	北埋159集	35	1/4~1/8割	カラマツ属	1/10
A2-1 車權	0B (5)	北埋176集	2	1/4割	トネリコ属	1/10
A2-1 車權	I B3 (4)	北埋159集	40	1/4割	モクレン属	1/10
A2-1 車權 切断品	I B3 (4)	北埋159集	36	1/4割	モクレン属	1/10
A2-1 車權	I B3 (4)	北埋159集	37	1/4割	モクレン属	1/10
A2-1 車權	I B3 (4)	北埋159集	43	1/4~1/6割	ハンノキ属	1/10
A2-1 車權	I B2 (5)	北埋176集	26	柀目	モクレン属	1/10
A2-1 車權 切断品	I B3 (4)	北埋159集	39	1/4~1/6割	モクレン属	1/10

## 車權(2)・早權 (図IV-5)

製 品 名 (推定含む)	階 位	報 告 書 No.	掲載No.	木 取	樹 種	縮 尺
A2-1 車權水掻部	I B3 (4)	北埋159集	48	1/4割	カラマツ属	1/10
A2-1 車權水掻部	I B3 (4)	北埋159集	50	1/4割	ハンノキ属	1/10
A2-1 車權水掻部	I B3 (4)	北埋159集	49	1/6~1/8割	サクラ属	1/10
A2-1 車權水掻部	I B4 (3)	北埋146集	4	心持	ヤナギ属	1/10
A2-1 車權水掻部	I B3 (4)	北埋159集	51	半割	モクレン属	1/10
A2-1 車權水掻部	I B2 (5)	北埋176集	34	1/4~1/8割	トネリコ属	1/10
A3-1 早權	I B2 (5)	北埋176集	55	柀目	サクラ属	1/10
A3-1 早權	I B2 (5)	北埋176集	56	丸木	ハンノキ属	1/10
A3-1 早權	I B2 (5)	北埋176集	54	柀目	トネリコ属	1/10
A3-1 早權	I B1 (1)	北埋128集	4	1/4割	コナラ属	1/10
A3-1 早權	I B2 (5)	北埋176集	53	柀目	ハンノキ属	1/10
A3-1 早權	I B3 (4)	北埋159集	80	1/4割	モクレン属	1/10
A3-1 早權 未製品	I B2 (5)	北埋176集	61	板目	トネリコ属	1/10
A3-1 早權	I B2 (5)	北埋176集	60	柀目	ハシドイ属	1/10

## 回転式離頭鉋(キテ)中柄・魚叩き棒 (図IV-6)

製 品 名 (推定含む)	階 位	報 告 書 No.	掲載No.	木 取	樹 種	縮 尺
B3 回転式離頭鉋(キテ)中柄	I B4 (3)	北埋146集	10	半割	リウツギ	1/5
B3 回転式離頭鉋(キテ)中柄	I B2 (5)	北埋176集	67	1/4割	リウツギ	1/5
B3 回転式離頭鉋(キテ)中柄	I B3 (4)	北埋159集	89	半割	リウツギ	1/5
B3 回転式離頭鉋(キテ)中柄	I B3 (4)	北埋159集	91	半割	リウツギ	1/5
B3 回転式離頭鉋(キテ)中柄	I B3 (4)	北埋159集	90	半割	リウツギ	1/5
B3 回転式離頭鉋(キテ)中柄	I B2 (5)	北埋176集	68	半割	リウツギ	1/5
B3 回転式離頭鉋(キテ)中柄	I B5 (3)	北埋146集	2	1/6割	リウツギ	1/5
B2 魚叩き棒	I B1 (1)	北埋128集	6	丸木	ハシドイ属	1/8
B2 魚叩き棒	I B1 (5)	北埋176集	40	丸木	ハンノキ属	1/8
B2 魚叩き棒	I B2 (5)	北埋176集	65	丸木	ニレ属	1/8
B2 魚叩き棒	I B2 (5)	北埋176集	66	丸木	ヤナギ属	1/8
B2 魚叩き棒 彫刻入り	I B3 (4)	北埋159集	92	丸木	ヤナギ属	1/8
B2 魚叩き棒	I B3 (4)	北埋159集	94	丸木	リウツギ	1/8
B2 魚叩き棒	I B3 (4)	北埋159集	93	1/4割	オニグルミ	1/8
B2 魚叩き棒	I B3 (4)	北埋159集	95	丸木	ヤナギ属	1/8
B2 魚叩き棒	I B4 (3)	北埋146集	6	丸木	ヤナギ属	1/8

表 -10 種別木製品集成掲載一覧(3)

## やす・浮子 (図IV-7)

製 品 名 (推定含む)	層 位	報 告 書 No.	掲 載 No.	木 取	樹 種	縮 尺
B4 やす 矢	I B1 (5)	北埋176集	24	1/4割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B1 (5)	北埋176集	27	1/4割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B1 (5)	北埋176集	25	1/4割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B1 (5)	北埋176集	26	1/4割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B1 (5)	北埋176集	28	1/8割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B2 (5)	北埋176集	74	1/8割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B2 (5)	北埋176集	70	1/4割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B2 (5)	北埋176集	72	1/4割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B2 (5)	北埋176集	73	1/8割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B2 (5)	北埋176集	75	1/6割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B2 (5)	北埋176集	71	1/4割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B2 (5)	北埋176集	69	1/6割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B3 (4)	北埋159集	97	半割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B3 (4)	北埋159集	100	1/8割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B3 (4)	北埋159集	99	1/4割	ミンバウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B3 (4)	北埋159集	98	1/4割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B3 (4)	北埋159集	102	1/4割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B3 (4)	北埋159集	96	半割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B3 (4)	北埋159集	101	1/8割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B3 (4)	北埋159集	103	1/4割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B3 (4)	北埋159集	105	1/4割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B1 (1)	北埋128集	10	1/4割	リウツギ	1/5
B4 やす 矢	I B4 (3)	北埋146集	7	1/4割	リウツギ	1/5
C1-1 矢 やす	I B2 (5)	北埋176集	76	半割	リウツギ	1/5
C1-1 矢 やす	I B3 (4)	北埋159集	104	1/4割	リウツギ	1/5
C1-1 矢 やす	I B3下 (1)	北埋128集	11	板目	リウツギ	1/5
B1 浮子	I B2 (5)	北埋176集	64	板目	スギ	1/5
B1 浮子	I B3 (4)	北埋159集	88	1/6割	アスナロ	1/5
B1 浮子	I B3 (4)	北埋159集	87	板目	ハンノキ属	1/5
B1 浮子	I B4 (3)	北埋146集	5	1/8割	ハンノキ属	1/5

## 掛矢・横槓・縦槓 (図IV-8)

製 品 名 (推定含む)	層 位	報 告 書 No.	掲 載 No.	木 取	樹 種	縮 尺
I5 制裁棒 大型横槓	I B1 (1)	北埋128集	29	丸木	コナラ属	1/8
D4 掛矢	I B1 (5)	北埋176集	44	丸木	コナラ属	1/8
D4 掛矢	I B3 (4)	北埋159集	152	丸木	トネリコ属	1/8
D4 掛矢	I B3 (4)	北埋159集	153	1/8割	トネリコ属	1/8
D4 掛矢 大型横槓	I B3 (4)	北埋159集	151	丸木	ニレ属	1/8
D4 掛矢 大型横槓	I B4 (3)	北埋146集	13	半割	トネリコ属	1/8
D3 横槓 棒状	I B3 (4)	北埋159集	149	丸木	ハシドイ属	1/8
D3 横槓 碇形	I B3 (4)	北埋159集	148	丸木	ヤナギ属	1/8
D2 縦槓 柄枝利用式	I B4 (3)	北埋146集	15	股本(丸木)	トネリコ属	1/8
D2 縦槓 柄孔式	I B3 (4)	北埋159集	146a	頭:丸木, 柄:板目	キハダ属	1/8
D2 縦槓 柄孔式	I B3 (4)	北埋159集	147	頭:心持, 柄:1/4割	コナラ属	1/8
D2 縦槓 柄枝利用式	I B1 (5)	北埋176集	42	股本(丸木)	クワ属	1/8

表 - 11 種別木製品集成掲載一覧(4)

斧柄・柄類(1) (図Ⅳ-9)							
製品名(推定含む)	階位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺	
D5-1 斧柄 手斧柄	I B2 (5)	北埋176集	102	股本(丸木)	イヌエンジュ	1/8	
D5-1 斧柄	I B3 (4)	北埋159集	150	股本(丸木)	ハンノキ属	1/8	
D6 柄	I B3 (4)	北埋159集	186	1/4割	ニレ属	1/8	
D6 柄	I B3 (4)	北埋159集	185	1/8割	カバノキ属	1/8	
D6 柄 切断品	I B2 (5)	北埋176集	125	丸木	モミ属	1/8	
D6 柄	I B3 (4)	北埋159集	176	丸木	ハシドイ属	1/8	
D6 柄	I B4 (3)	北埋146集	21	1/4割	サクラ属	1/8	
D6 柄	I B2 (5)	北埋176集	112	1/4割	ブリウツギ	1/8	
D6c 切込み付柄	I B2 (5)	北埋176集	126	1/4割	モクレン属	1/8	
D6b 挟入柄	I B2 (5)	北埋176集	130	丸木	ハリギリ	1/8	
D6 長頭部削出柄	I B3 (4)	北埋159集	178	丸木	イヌエンジュ	1/8	
D6 小頭部削出柄	I B2 (5)	北埋176集	111	丸木	ハシドイ属	1/8	
D6 小頭部削出柄	I B3 (4)	北埋159集	173	丸木	ハシドイ属	1/8	
D6 小頭部削出柄	I B3 (4)	北埋159集	174	1/4割	クワ属	1/8	
D6 小頭部削出柄	I B1 (5)	北埋176集	48	丸木	クワ属	1/8	

## 柄類(2) (図Ⅳ-10)

製品名(推定含む)	階位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
D6d 頭部削出有孔柄	I B3 (4)	北埋159集	168	丸木	ハシドイ属	1/8
D6 頭部削出柄	I B2 (5)	北埋176集	106	丸木	ハシドイ属	1/8
D6 頭部削出柄	I B4 (3)	北埋146集	18	丸木	トネリコ属	1/8
D6 頭部削出柄	I B2 (5)	北埋176集	107	丸木	クワ属	1/8
D6 裝飾頭部削出柄	I B3 (4)	北埋159集	182	1/4割	コナラ属	1/8
D6 裝飾頭部削出柄	I B2 (5)	北埋176集	115	1/4割	コナラ属	1/8
D6 裝飾頭部削出柄	I B2 (5)	北埋176集	114	心持	ブリウツギ	1/8
D6d 有孔柄	I B3 (4)	北埋159集	164	丸木	ハンノキ属	1/8
D6d 有孔柄	I B2 (5)	北埋176集	121	丸木	オニグルミ	1/8
D6adh 挟付有孔長柄	I B2 (5)	北埋176集	129	丸木	タラノキ	1/8

## 柄類(3) (図Ⅳ-11)

製品名(推定含む)	階位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
D6ah 挟付長柄	I B3 (4)	北埋159集	154	1/4割	カエデ属	1/8
D6ah 挟付長柄	I B3 (4)	北埋159集	155	1/4割	カエデ属	1/8
D6ah 挟付長柄	I B3 (4)	北埋159集	156	1/4割	カエデ属	1/8
D6ah 挟付長柄	I B3 (4)	北埋159集	157	1/4割	カエデ属	1/8
D6ah 挟付長柄	I B2 (5)	北埋176集	116	1/4割	カエデ属	1/8
D6ah 挟付長柄	I B3 (4)	北埋159集	159	丸木	イチイ	1/8
D6ah 挟付長柄	I B3 (4)	北埋159集	158	丸木	コナラ属	1/8
D6ah 挟付長柄	I B3 (4)	北埋159集	160	丸木	トネリコ属	1/8
D6ah 挟付長柄	I B2 (5)	北埋176集	118	丸木	クワ属	1/8
D6a 挟付柄	I B2 (5)	北埋176集	119	1/4割	ヤナギ属	1/8
D6a 挟付柄	OB (5)	北埋176集	4	1/4割	カラマツ属	1/8
D6h 突起部削出長柄	I B3 (4)	北埋159集	183	1/4割	ハンノキ属	1/8

## 発火具・挟み木 (図Ⅳ-12)

製品名(推定含む)	階位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
D12 火鑽り板	I B3 (4)	北埋159集	228	柾目	スギ	1/5
D12 火鑽り棒	I B3 (4)	北埋159集	227	1/4割	ニレ属	1/5
D12 火鑽り棒	I B2 (5)	北埋176集	154	1/4割	ニレ属	1/5
D14 挟み木	I B1 (1)	北埋128集	13	丸木	トネリコ属	1/8
D14 挟み木	I B3 (4)	北埋159集	236	丸木	ハシドイ属	1/8
D14 挟み木	I B2 (5)	北埋176集	155	丸木	クワ属	1/8
D14 挟み木	I B3 (4)	北埋159集	237	丸木	トネリコ属	1/8
D14 挟み木	I B1 (1)	北埋128集	14	丸木	イヌエンジュ	1/8
D14 挟み木	I B2 (5)	北埋176集	157	丸木	ハギ属	1/8
D14 挟み木 両先	I B2 (5)	北埋176集	156	丸木	イヌエンジュ	1/8

表 - 12 種別木製品集成掲載一覧(5)

## 鉤類 (図Ⅳ-13)

製品名 (推定含む)	階位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
D13 吊り鉤	0B	(5) 北埋176集	3	股本(丸木)	クワ属	1/8
D13 炉鉤 吊り鉤	1B3	(4) 北埋159集	230	股本(丸木)	ヤナギ属	1/8
D13 吊り鉤 切断品	1B3	(4) 北埋159集	229	股本(丸木)	トネリコ属	1/8
D13 炉鉤 吊り鉤	1B3	(4) 北埋159集	233	股本(丸木)	ヤナギ属	1/8
D13 炉鉤 吊り鉤	1B3	(4) 北埋159集	231	股本(丸木)	ニレ属	1/8
D13 吊り鉤	1B2	(5) 北埋176集	161	股本(丸木)	ハシドイ属	1/8
D9 鉤 鉤鉄	1B3	(4) 北埋159集	202	股本(丸木)	ハシドイ属	1/5
D9 鉤鉄	1B2	(5) 北埋176集	160	股本(丸木)	カエデ属	1/5

## まな板・作業台 (図Ⅳ-14)

製品名 (推定含む)	階位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
H6 まな板	1B2	(5) 北埋176集	135	横木	ハリギリ	1/8
H6 まな板	1B2	(5) 北埋176集	136	偏半割	ハリギリ	1/8
D8 作業台板 まな板	1B3	(4) 北埋159集	197	追板	トネリコ属	1/8
D8 作業台	1B1	(5) 北埋176集	50	偏半割	ニレ属	1/8
D8 作業台板	1B3	(4) 北埋159集	196	追板	ハリギリ	1/8
D8 台板	1B4	(3) 北埋146集	35	縦木	ヤナギ属	1/8
D8 作業台板	1B3	(4) 北埋159集	199	追板	ハリギリ	1/8
D8 作業台板 まな板	1B3	(4) 北埋159集	198	柱目	サクラ属	1/8

## 諸道具類 (図Ⅳ-15)

製品名 (推定含む)	階位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
D1-1 刀鞘	1B3	(4) 北埋159集	144	板目合せ・樹皮	ハリギリ・樹皮	1/5
D1-1 樹皮製小刀(マキリ)鞘	1B1	(1) 北埋128集	12	樹皮	カバノキ属樹皮	1/5
D1-2 小刀(マキリ)柄	1B2	(5) 北埋176集	103	1/4割	モクレン属	1/5
M2 樹皮製絞め具	1B2	(5) 北埋176集	583	樹皮	樹皮	1/5
M1 長楕円形樹皮加工製品	1B3	(4) 北埋159集	803	樹皮	樹皮	1/5
M1 長楕円形樹皮加工製品	1B3	(4) 北埋159集	804	樹皮	樹皮	1/5
J3-1ac 裝飾付板材加工製品	1B2	(5) 北埋176集	394	柱目	サクラ属	1/5
J3-1a 組合せ快付板材加工製品	1B2	(5) 北埋176集	397-398-1	板目	ハンノキ属	1/5
H3 匙柄	1B1	(5) 北埋176集	70	1/4割	ハリギリ	1/5
D15 留め具 有孔細板加工製品	1B3	(4) 北埋159集	527	追板	サクラ属	1/5
D15 固定補助具 有孔細板加工製品	1B2	(5) 北埋176集	159	板目	モミ属	1/5
D11 両先楔 有溝板材加工製品	1B3	(4) 北埋159集	531	柱目	ハリギリ	1/5
D11 楔 有溝板材加工製品	1B2	(5) 北埋176集	402	柱目	アスナロ	1/5
D11 両先楔 有溝板材加工製品	1B1	(5) 北埋176集	55	柱目	クワ属	1/5
J2-4a 快付組合せ心持材加工製品	1B2	(5) 北埋176集	365-1	心持	モクレン属	1/5
	1B2	(5) 北埋176集	365-2	心持	モクレン属	1/5
J3-1 鎌? 卵形板材加工製品	1B3	(4) 北埋159集	538	板目	ヤナギ属	1/5
J3-1 鎌? 卵形板材加工製品	1B3	(4) 北埋159集	539	板目	ヤナギ属	1/5
J3-1a 鎌? 快付板材加工製品	1B3	(4) 北埋159集	537	板目	モミ属	1/5

## 歩行具・編具等 (図Ⅳ-16)

製品名 (推定含む)	階位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
E2-1 単輪型かんじき	1B3	(4) 北埋159集	394	1/4割(柱目)	クワ属	1/5
E2-2 かんじき軸	1B3	(4) 北埋159集	395	1/4割	ノリウツギ	1/5
E2-2 かんじき軸	1B3	(4) 北埋159集	396	1/4割	ノリウツギ	1/5
E2-2 かんじき軸	1B3	(4) 北埋159集	397	1/4割	ノリウツギ	1/5
E3 下駄	1B1	(1) 北埋128集	27	追板	ハリギリ	1/5
F1-1 編合桁 機織具(糸そろえ)	1B3	(4) 北埋159集	399	1/8割	ニレ属	1/5
F1-2 編具? 両端快付部材加工製品	1B3	(4) 北埋159集	439	1/8割	アスナロ	1/5
F1-2 編具? 両端快付部材加工製品	1B2	(5) 北埋176集	377	1/8割	アスナロ	1/5
F1-2 編具? 端快付部材加工製品	1B2	(5) 北埋176集	378	1/8割	アスナロ	1/5
F2-3 鎌?	1B1	(5) 北埋176集	113	丸木	トネリコ属	1/5
F3 茅針	1B2	(5) 北埋176集	158	丸木	ノリウツギ	1/5
J2-3at 両端快付部材加工製品	1B3	(4) 北埋159集	485	偏1/4割	ノリウツギ	1/5
D10 雷掻き 茅そろえ具	1B3	(4) 北埋159集	203	偏半割	トネリコ属	1/5

表 - 13 種別木製品集成掲載一覧(6)

## 丸木材加工製品等(銚等) (図IV-17)

製品名(推定含む)	階位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
J1-3cdt 両端切込付有孔短丸木材加工製品	I B2 (5)	北埋176集	362	丸木	モミ属	1/5
J1-3ct 両端切込付短丸木材加工製品	I B1 (5)	北埋176集	116	丸木	カエデ属	1/5
J2-4ct 両端切込付短心持材加工製品	I B2 (5)	北埋176集	348	心持	モクレン属	1/5
J1-3cdt 両端切込付有孔短丸木材加工製品	I B2 (5)	北埋176集	363	丸木	アスナロ	1/5
J1-3a 挟付有溝短丸木材加工製品	I B2 (5)	北埋176集	346	丸木	モミ属	1/5
J1-3 紡錘車状短丸木材加工製品	I B2 (5)	北埋176集	347	丸木	ハリギリ	1/5
F2-1 挟付銚 二も樋	I B1 (5)	北埋176集	45	丸木	モミ属	1/5
F2-1 銚 半割材加工製品	I B2 (5)	北埋176集	367	半割	サクラ属	1/5
F2-2 銚? 短丸木材両端加工製品	I B1 (5)	北埋176集	115	丸木	イヌエンジュ	1/5
F2-1 銚 有溝短枝材両端加工製品	I B1 (1)	北埋128集	37	丸木	トネリコ属	1/5
F2-2 銚? 短枝材両端加工製品	I B1 (5)	北埋176集	114	丸木	クワ属	1/5
F2-2 銚? 短枝材両端加工製品	I B3 (4)	北埋159集	482	丸木	トネリコ属	1/5
F2-2 銚? 短丸木材両端加工製品	I B3 (4)	北埋159集	480	丸木	トネリコ属	1/5
F2-2 銚? 短枝材両端加工製品	I B3 (4)	北埋159集	481	丸木	クワ属	1/5
F2-2 銚? 短枝材両端加工製品	I B3 (4)	北埋159集	483	丸木	トネリコ属	1/5
F2-2 銚? 短枝材両端加工製品	I B4 (3)	北埋146集	72	丸木	リウツギ	1/5

## 曲物 (図IV-18)

製品名(推定含む)	階位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
G2-1 曲物	I B3 (4)	北埋159集	247-1	榎目・樹皮	アスナロ・樹皮	1/5
G2-1 曲物側板	I B3 (4)	北埋159集	247-2	榎目	アスナロ	1/5
G2-1 曲物側板	I B2 (5)	北埋176集	177-2	榎目・樹皮	アスナロ	1/5
G2-1 曲物側板	I B2 (5)	北埋176集	177-5	榎目・樹皮	アスナロ	1/5
G2-1 曲物側板	I B2 (5)	北埋176集	177-6	榎目・樹皮	アスナロ	1/5
G2-1 曲物側板	I B2 (5)	北埋176集	175-2	榎目	アスナロ	1/5
G2-1 曲物側板	I B2 (5)	北埋176集	175-1	榎目・樹皮	アスナロ	1/5
G2-1 曲物側板	I B2 (5)	北埋176集	176-1	榎目	スギ	1/5

## 漆塗り碗 (図IV-19)

製品名(推定含む)	階位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
G4-1 漆碗 底~胴部完形	I B3 (4)	北埋159集	262	横木	トチノキ	1/5
G4-1 漆碗 1/2片	I B3 (4)	北埋159集	261	横木	ハリギリ	1/5
G4-1 漆碗 2/3 底部は完形	I B3 (4)	北埋159集	264	横木	ブナ属	1/5
G4-1 漆碗 底~胴部完形	I B4 (3)	北埋146集	24	横木	ハリギリ	1/5
G4-1 漆碗 1/2片	I B2 (5)	北埋176集	186	横木	ブナ属	1/5
G4-1 漆碗 1/4片	I B4 (3)	北埋146集	23	横木	トチノキ	1/5
G4-1 漆碗 1/3片	I B4 (3)	北埋146集	25	横木	カツラ	1/5
G4-1 漆碗 底~胴部片	I B2 (5)	北埋176集	189	横木	ブナ属	1/5
G4-1 漆碗 1/3片	I B3 (4)	北埋159集	260	横木	エゴノキ属	1/5
G4-1 漆碗 底~胴部片 底部完形	I B2 (1)	北埋128集	17	横木	ケヤキ属	1/5
G4-1 漆碗蓋 完形	I B1 (5)	北埋176集	61	横木	ブナ属	1/5
G4-1 漆碗 1/3片	I B2 (5)	北埋176集	187	横木	カツラ	1/5
G4-1 漆碗 底部片	I B3 (4)	北埋159集	263	横木	トネリコ属	1/5
G4-1 漆碗 口縁~胴部片	I B3 (4)	北埋159集	270	横木	トチノキ	1/5
G4-1 漆碗 口縁部片	I B3 (4)	北埋159集	269	横木	トチノキ	1/5
G4-1 漆碗 胴部片	OB (5)	北埋176集	13	横木	ブナ属	1/5

表 - 14 種別木製品集成掲載一覧(7)

## 削り鉢(ニマ) (図IV-20)

製 品 名 (推定含む)	層 位	報 告 書 No.	掲載No.	木 取	樹 種	縮 尺
G6 削り鉢(ニマ)	I B3 (4)	北埋159集	279	横木	モクレン属	1/5
G6 削り鉢片	I B2 (5)	北埋176集	194	横木	シナノキ属	1/5
G6 削り鉢片	I B3 (4)	北埋159集	284	横木	ハリギリ	1/5
G6 削り鉢片	I B3 (4)	北埋159集	280	横木	ハコヤナギ属	1/5
G6 削り鉢片	I B3 (4)	北埋159集	281	横木	モクレン属	1/5
G6 削り鉢片 口縁部片	I B3 (4)	北埋159集	282	横木	ハリギリ	1/5
G6 削り鉢片	I B3 (4)	北埋159集	285	横木	ハリギリ	1/5
G6 削り鉢片	I B1 (1)	北埋128集	16	横木	モクレン属	1/5
G6 削り鉢片	I B2 (5)	北埋176集	195	縦木	ハリギリ	1/5
G6 削り鉢片	I B4 (3)	北埋146集	26	横木	トネリコ属	1/5

## 削り物(盆・皿・椀) (図IV-21)

製 品 名 (推定含む)	層 位	報 告 書 No.	掲載No.	木 取	樹 種	縮 尺
G6 盆	I B3 (4)	北埋159集	286	横木	アスナロ	1/5
G6 盆	I B3 (4)	北埋159集	287	横木	キハダ属	1/5
G6 盆状容器片	I B1 (1)	北埋128集	15	横木	オニグルミ	1/5
G6 大皿	I B3 (4)	北埋159集	289	横木	シナノキ属	1/5
G6 皿	I B3 (4)	北埋159集	290	横木	ハンノキ属	1/5
G6 皿	I B3 (4)	北埋159集	283	縦木	トネリコ属	1/5
G6 皿	I B3 (4)	北埋159集	288	節	ニレ属	1/5
G6 椀	I B2 (5)	北埋176集	185	横木	ハリギリ	1/5
G6 椀	I B3 (4)	北埋159集	276	横木	ブナ属	1/5
G6 椀	I B3 (4)	北埋159集	277	横木 縦目	ブナ属	1/5

## 筐類(1) (図IV-22)

製 品 名 (推定含む)	層 位	報 告 書 No.	掲載No.	木 取	樹 種	縮 尺
H2 籠	I B3 (4)	北埋159集	293	1/12割	トネリコ属	1/5
H2 籠 筐部有孔 柄頭裝飾	I B2 (5)	北埋176集	197	縦目	サクラ属	1/5
H2 籠 柄頭有孔	I B2 (5)	北埋176集	196	縦目	アスナロ	1/5
H2 籠	I B1 (1)	北埋128集	18	縦目	モミ属	1/5
H2 籠 小型 食事用	I B2 (5)	北埋176集	198	板目	イチイ	1/5
H2 籠 小型	I B4 (3)	北埋146集	33	縦目	アスナロ	1/5
H2 籠 切断品	I B2 (5)	北埋176集	202	丸木	クワ属	1/5
H2 籠 小型 食事用	I B2 (5)	北埋176集	200	半割	ノリウツギ	1/5
H2 籠	I B1 (5)	北埋176集	69	1/6割	ハンノキ属	1/5
H2 籠 小型 食事用	I B2 (5)	北埋176集	199	縦目	アスナロ	1/5
H2 籠 小型 食事用	I B3 (4)	北埋159集	295	1/4割	ノリウツギ	1/5
H2 籠	I B2 (5)	北埋176集	203	偏割	ハンノキ属	1/5
H2 籠	I B4 (3)	北埋146集	27	縦目	アスナロ	1/5
H2 籠	I B4 (3)	北埋146集	32	縦目	モミ属	1/5
H2 籠	I B3 (4)	北埋159集	294	縦目	アスナロ	1/5
H2 籠	I B1 (5)	北埋176集	67	板目	モミ属	1/5
H2 籠	I B4 (3)	北埋146集	28	縦目	アスナロ	1/5
H2 籠 小型 食事用	I B1 (5)	北埋176集	68	縦目	アスナロ	1/5
H2 籠	I B4 (3)	北埋146集	31	追椀	アスナロ	1/5
H2 籠 小型 食事用?	I B2 (5)	北埋176集	204	偏割	ノリウツギ	1/5

表 - 15 種別木製品集成掲載一覧(8)

## 筐類(2)・大型筐 (図IV-23)

製品名(推定含む)	層位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
H2 扶付筐	I B2 (5)	北埋176集	205	偏割	トネリコ属	1/5
H2 筐	I B3 (4)	北埋159集	298	板目	スギ	1/5
H2 舌状筐	I B3 (4)	北埋159集	300	板目	スギ	1/5
H2 舌状筐	I B3 (4)	北埋159集	299	板目	スギ	1/5
H2 舌状筐	I B3 (4)	北埋159集	296	柾目	アスナロ	1/5
H2 舌状筐	I B3 (4)	北埋159集	297	柾目	スギ	1/5
H2 舌状筐	I B3 (4)	北埋159集	301	板目	スギ	1/5
H2 舌状筐	I B4 (3)	北埋146集	29	柾目	スギ	1/5
H2 舌状筐	I B4 (3)	北埋146集	30	柾目	スギ	1/5
H1 大型筐	I B1 (5)	北埋176集	66	柾目	コナラ属	1/8
H1 大型筐(舷側板再加工品)	I B2 (5)	北埋176集	201	板目	グリ	1/8
H1 大型筐(舷側板再加工品)	I B3 (4)	北埋159集	292	追柾	トネリコ属	1/8
H1 大型筐(舷側板再加工品)	I B3 (4)	北埋159集	291	追柾	シナノキ属	1/8
H1 大型筐	I B4 (3)	北埋146集	34	柾目	スギ	1/8

## 竪杆 (図IV-24)

製品名(推定含む)	層位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
H7 竪杆	I B2 (5)	北埋176集	162	丸木	モクレン属	1/8
H7 竪杆	I B3 (4)	北埋159集	238	丸木	トネリコ属	1/8
H7 竪杆	I B3 (4)	北埋159集	239	丸木	コナラ属	1/8
H7 竪杆	I B2 (5)	北埋176集	163	丸木	コナラ属	1/8
H7 竪杆	I B4 (3)	北埋146集	12	丸木	トネリコ属	1/8
H7 竪杆	I B2 (5)	北埋176集	164	丸木	トネリコ属	1/8
H7 竪杆	I B3 (4)	北埋159集	240	丸木	トネリコ属	1/8

## イクバスイ(捧酒籠)・木幣等 (図IV-25)

製品名(推定含む)	層位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
I1 イクバスイ	I B1 (5)	北埋176集	105	板目	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ	I B1 (5)	北埋176集	103	1/4割	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ	I B2 (5)	北埋176集	294	1/8割	モミ属	1/8
I1 イクバスイ	I B2 (5)	北埋176集	317	柾目	スギ	1/8
I1 イクバスイ	I B2 (5)	北埋176集	303	柾目	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ	I B2 (5)	北埋176集	299	柾目(小割)	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ	I B2 (5)	北埋176集	306	柾目	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ	I B2 (5)	北埋176集	324	柾目(小割)	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ	I B2 (5)	北埋176集	325	板目(小割)	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ	I B2 (5)	北埋176集	319	柾目(小割)	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ	I B2 (5)	北埋176集	304	柾目	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ(刻目付)	I B2 (4)	北埋159集	434	板目	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ(刻目付)	I B2 (5)	北埋176集	327	柾目(小割)	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ(刻目付)	I B2 (5)	北埋176集	328	柾目(小割)	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ(刻目付)	I B2 (5)	北埋176集	329	板目(小割)	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ(刻目付)	I B2 (5)	北埋176集	330	板目	アスナロ	1/8
I6 刻目付太串	I B2 (5)	北埋176集	210	半割	ブリウツギ	1/8
I2 木幣	I B2 (5)	北埋176集	345	丸木	ヤナギ属	1/8
I2 木幣	I B2 (5)	北埋176集	344	丸木	トネリコ属	1/8
I2 木幣	I B3 (4)	北埋159集	444	丸木	モクレン属	1/8
I2 木幣	I B3 (4)	北埋159集	445	丸木	モクレン属	1/8
I1 イクバスイ	I B3 (4)	北埋159集	407	柾目	モミ属	1/8
I1 イクバスイ	I B3 (4)	北埋159集	423	1/6割	モミ属	1/8
I1 イクバスイ	I B3 (4)	北埋159集	429	柾目	モミ属	1/8
I1 イクバスイ	I B3 (4)	北埋159集	406	柾目(小割)	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ	I B3 (4)	北埋159集	424	板目(1/6~1/8割)	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ	I B3 (4)	北埋159集	428	柾目	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ	I B3 (4)	北埋159集	425	柾目(小割)	アスナロ	1/8
I1 イクバスイ	I B3 (4)	北埋159集	410	柾目(小割)	アスナロ	1/8
I3 彫刻入榫ミニチュア 槍先形	I B3 (4)	北埋159集	443	半割	モクレン属	1/8
I6 刻目付長串	I B3 (4)	北埋159集	400	丸木	キハダ属	1/8
I6 刻目付枝材加工製品	I B3 (4)	北埋159集	402	丸木	ハンノキ属	1/8

表 - 16 種別木製品集成掲載一覧(9)

## 端挟付有孔製品類(枠材?) (図IV-26)

分類名(推定含む)	層位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
J1-3adt	I B2 (5)	北埋176集	355	丸木	トネリコ属	1/8
L3 (J2-2dt)	I B3 (4)	北埋159集	724	1/4~1/6割	モクレン属	1/8
J1-3adt	I B1 (5)	北埋176集	117	丸木	ハリギリ	1/8
J1-3adt	I B3 (4)	北埋159集	488	丸木	ハシドイ属	1/8
J1-3adt	I B3 (4)	北埋159集	487	丸木	ヤナギ属	1/8
J1-3adt	I B2 (5)	北埋176集	356	丸木	モクレン属	1/8
J2-4adt	I B2 (5)	北埋176集	358	丸木	トネリコ属	1/8
J2-4adt(t)	I B2 (5)	北埋176集	360	心持	ヤナギ属	1/8
J2-1adt	I B2 (5)	北埋176集	359	半割	モミ属	1/8
J1-3ad	I B3 (4)	北埋159集	484	丸木	モミ属	1/8
J2-2d	I B1 (5)	北埋176集	120	1/4割	ハンノキ属	1/8
J1-3adt	I B2 (5)	北埋176集	361	丸木	トネリコ属	1/8
J1-3adt	I B2 (5)	北埋176集	357	丸木	モミ属	1/8
J2-2ad	I B3 (4)	北埋159集	489	1/6割	モクレン属	1/8

## 柱(1) (図IV-27)

製品名(推定含む)	層位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
L1-1 柱	O13 (5)	北埋176集	20	股本(丸木)	トネリコ属	1/10
L1-1 柱	I B3 (4)	北埋159集	640	丸木	ハンノキ属	1/10
L1-1 柱	I B3 (4)	北埋159集	618	丸木	トネリコ属	1/10
L1-1 柱	I B3 (4)	北埋159集	615	丸木	トネリコ属	1/10
L1-1 柱	I B1 (5)	北埋176集	159	丸木	トネリコ属	1/10
L1-1 柱 焼失	I B3 (4)	北埋159集	633	丸木	ニレ属	1/10
L1-1 柱	I B2 (5)	北埋176集	477	丸木	トネリコ属	1/10
L1-1 柱 股本杭	I B3 (4)	北埋159集	622	股本(丸木)	ハシドイ属	1/10
L1-1 柱	I B1 (5)	北埋176集	162	股本(丸木)	トネリコ属	1/10

## 柱(2) (図IV-28)

製品名(推定含む)	層位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
L1-1 柱	I B3 (4)	北埋159集	616	丸木	コナラ属	1/10
L1-1 柱	I B3 (4)	北埋159集	617	丸木	トネリコ属	1/10
L1-1 柱	I B4 (3)	北埋146集	99	股本(丸木)	ハシドイ属	1/10
L1-1 柱	I B1 (5)	北埋176集	160	股本(丸木)	ハンノキ属	1/10
L1-1 柱	I B2 (5)	北埋176集	478	股本(丸木)	ハンノキ属	1/10
L1-1 柱	I B3 (4)	北埋159集	624	股本(丸木)	トネリコ属	1/10
L1-1 柱	I B2 (5)	北埋176集	479	丸木	ハリギリ	1/10
L1-1 柱	I B3 (4)	北埋159集	627	丸木	ハシドイ属	1/10
L1-1 柱	I B3 (4)	北埋159集	623	股本(丸木)	トネリコ属	1/10
L1-1 柱	I B1 (5)	北埋176集	163	股本(丸木)	トネリコ属	1/10
L1-1 柱	I B3 (4)	北埋159集	632	丸木	トネリコ属	1/10
L1-1 柱 接ぎ柱	I B1 (5)	北埋176集	166	股本(丸木)	トネリコ属	1/10



表 - 17 種別木製品集成掲載一覧(10)

## 股本杭 (図IV-29)

製品名 (推定含む)	層位	報告書 No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
L1-2 股本杭	I B1 (5)	北埋176集	196	股本(丸木)	トネリコ属	1/10
L1-2 股本杭	I B1 (5)	北埋176集	197	股本(丸木)	ヤナギ属	1/10
L1-2 股本杭	I B2 (5)	北埋176集	552	股本(丸木)	ハシドイ属	1/10
L1-2 股本杭	I B2 (5)	北埋176集	545	股本(丸木)	ハシドイ属	1/10
L1-2 股本杭	I B2 (5)	北埋176集	548	股本(丸木)	ニレ属	1/10
L1-2 股本杭	I B2 (5)	北埋176集	546	股本(丸木)	ハシドイ属	1/10
L1-2 股本杭	I B2 (5)	北埋176集	547	股本(丸木)	キハダ属	1/10
L1-2 股本杭	I B2 (5)	北埋176集	549	股本(丸木)	イヌエンジュ	1/10
L1-2 股本杭	I B2 (5)	北埋176集	556	股本(丸木)	ハシドイ属	1/10
L1-2 股本杭	I B3 (4)	北埋159集	736	股本(丸木)	イヌエンジュ	1/10
L1-2 股本杭	I B3 (4)	北埋159集	737	股本(丸木)	オニグルミ	1/10
L1-2 股本杭	I B3 (4)	北埋159集	739	股本(丸木)	トネリコ属	1/10
L1-2 股本杭	I B3 (4)	北埋159集	738	股本(丸木)	ニレ属	1/10
L1-2 股本杭	I B3 (4)	北埋159集	740	股本(丸木)	ハシドイ属	1/10
L1-2 股本杭	I B3 (4)	北埋159集	741	股本(丸木)	ニレ属	1/10
L1-2 股本杭	I B4 (3)	北埋146集	117	股本(丸木)	イヌエンジュ	1/10
L1-2 股本杭	I B4 (3)	北埋146集	116	股本(丸木)	ニレ属	1/10

## 建材(1) (図IV-30)

製品名 (推定含む)	層位	報告書 No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
L2 建材 桁、屋根・壁材	I B1 (5)	北埋176集	175	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 垂木、屋根・壁材	I B1 (5)	北埋176集	172	丸木	ハシドイ属	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B1 (1)	北埋128集	74	1/4割	トネリコ属	1/10
L2 建材 垂木・桁、屋根・壁材	I B1 (5)	北埋176集	168	丸木	ハンノキ属	1/10
L2 建材 桁、屋根・壁材	I B1 (5)	北埋176集	169	心持	ハンノキ属	1/10
L2 建材 垂木・桁、屋根・壁材	I B1 (5)	北埋176集	167	丸木	モクレン属	1/10
L2 建材 垂木・桁、屋根・壁材	I B1 (5)	北埋176集	170	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 桁、屋根・壁材	I B1 (5)	北埋176集	171	丸木	モミ属	1/10
L2 建材 垂木・桁、屋根・壁材	I B1 (5)	北埋176集	174	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B1 (5)	北埋176集	182	偏割	トネリコ属	1/10

## 建材(2) (図IV-31)

製品名 (推定含む)	層位	報告書 No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
L2 建材 桁、屋根・壁材	OB (5)	北埋176集	22	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B1 (5)	北埋176集	179	1/6割	トネリコ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B1 (5)	北埋176集	181	1/4割	トネリコ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B1 (5)	北埋176集	176	丸木	イヌエンジュ	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B1 (5)	北埋176集	180	偏割	トネリコ属	1/10
L2 建材? 補助材	I B1 (5)	北埋176集	173	股本(丸木)	トネリコ属	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	492	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	493	丸木	ハンノキ属	1/10
L2 建材 垂木、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	486	丸木	ハシドイ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	491	股本(丸木)	イヌエンジュ	1/10
L2 建材 垂木、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	489	0	ヤナギ属	1/10

表 - 18 種別木製品集成掲載一覧(1)

## 建材(3) (図IV-32)

製品名(推定含む)	層位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	490	丸木	コナラ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	495	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	494	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	497	丸木	ハンノキ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	496	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	501	丸木	モミ属	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	502	丸木	モミ属	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	508	丸木	サクラ属	1/10
L2 建材 垂木、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	488	丸木	クワ属	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	503	丸木	モミ属	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	498	丸木	ハシドイ属	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	504	丸木	カエデ属	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	510	丸木	ニレ属	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	518	1/6割	トネリコ属	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B2 (5)	北埋176集	519	1/4割	トネリコ属	1/10

## 建材(4) (図IV-33)

製品名(推定含む)	層位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
L2 建材 垂木、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	648	丸木	コナラ属	1/10
L2 建材 垂木、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	641	丸木	モミ属	1/10
L2 建材 桁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	650	丸木	コナラ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	651	丸木	カバノキ属	1/10
L2 建材 垂木、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	649	丸木	コナラ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	672	丸木	ハリギリ	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	681	丸木	モクレン属	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	682	丸木	ハシドイ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	676	丸木	イヌエンジュ	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	683	丸木	イヌエンジュ	1/10
L2 建材 垂木・梁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	693	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	673	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	680	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 桁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	657	丸木	ハンノキ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	671	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	670	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	691	丸木	ハシドイ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	675	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 梁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	689	丸木	イヌエンジュ	1/10

## 建材(5) (図IV-34)

製品名(推定含む)	層位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
L2 建材 垂木、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	645	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 垂木、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	646	丸木	コナラ属	1/10
L2 建材 垂木・桁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	642	丸木	ハンノキ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	674	丸木	コナラ属	1/10
L2 建材 桁・梁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	663	丸木	コナラ属	1/10
L2 建材 桁 接ぎ柱、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	659	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 挟入有孔	I B3 (4)	北埋159集	690	丸木	アスナロ	1/10
L2 建材 桁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	643	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 桁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	644	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 桁、屋根・壁材	I B3 (4)	北埋159集	656	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 補助材	I B3 (4)	北埋159集	695	股木(丸木)	ハシドイ属	1/10
L2 建材 補助材	I B3 (4)	北埋159集	697	股木(半割)	イヌエンジュ	1/10

表 - 19 種別木製品集成掲載一覧(12)

## 建材(6) (図IV-35)

製品名(推定含む)	層位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
L2 建材 垂木・屋根・壁材	1 B4 (3)	北埋146集	90	丸木	コナラ属	1/10
L2 建材 垂木・屋根・壁材	1 B4 (3)	北埋146集	89	丸木	ハシドイ属	1/10
L2 建材 桁・屋根・壁材	1 B4 (3)	北埋146集	100	丸木	コナラ属	1/10
L2 建材 桁・屋根・壁材	1 B4 (3)	北埋146集	101	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 桁・屋根・壁材	1 B4 (3)	北埋146集	102	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 梁・屋根・壁材	1 B4 (3)	北埋146集	106	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 桁・梁・屋根・壁材	1 B4 (3)	北埋146集	103	丸木	トネリコ属	1/10
L2 建材 梁・屋根・壁材	1 B4 (3)	北埋146集	105	丸木	ハシドイ属	1/10
L2 建材 桁・梁・屋根・壁材	1 B4 (3)	北埋146集	104	股木(丸木)	イヌエンジュ	1/10
L2 建材 桁・屋根・壁材	1 B4 (3)	北埋146集	107	丸木	オニグルミ	1/10

## 建築部材(1) (図IV-36)

製品名(推定含む)	層位	報告書No.	掲載No.	木取	樹種	縮尺
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B1 (5)	北埋176集	186	丸木	ヤナギ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B3 (4)	北埋159集	708	半割	ミツバウツギ	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B3 (4)	北埋159集	707	丸木	ハンノキ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B3 (4)	北埋159集	709	丸木	トネリコ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B2 (5)	北埋176集	533	丸木	ハシドイ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B3 (4)	北埋159集	714	丸木	ヤナギ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B3 (4)	北埋159集	705	丸木	ニワトコ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B3 (4)	北埋159集	706	丸木	ミツバウツギ	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B2 (5)	北埋176集	530	1/4割	サクラ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B2 (5)	北埋176集	529	丸木	トネリコ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B1 (5)	北埋176集	185	丸木	ハシドイ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B3 (4)	北埋159集	704	丸木	トネリコ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B3 (4)	北埋159集	701	丸木	ハシドイ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B2 (5)	北埋176集	531	丸木	ハシドイ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B2 (5)	北埋176集	528	丸木	ミツバウツギ	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B3 (4)	北埋159集	703	丸木	トネリコ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B3 (4)	北埋159集	702	丸木	モミ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B4 (3)	北埋146集	111	丸木	クワ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B1 (5)	北埋176集	194	丸木	ハリギリ	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B2 (5)	北埋176集	540	丸木	モミ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B3 (4)	北埋159集	727	1/6割	ヤナギ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B1 (5)	北埋176集	191	丸木	ヤナギ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B4 (3)	北埋146集	110	丸木	ハンノキ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B1 (5)	北埋176集	193	丸木	サクラ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B2 (5)	北埋176集	535	丸木	モミ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B2 (5)	北埋176集	527	丸木	ハンノキ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B3 (4)	北埋159集	699	丸木	コナラ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B3 (4)	北埋159集	726	1/8割	トネリコ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B3 (4)	北埋159集	722	1/4割	トネリコ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B4 (3)	北埋146集	115	丸木	トネリコ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B2 (5)	北埋176集	525	偏割	モクレン属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B3 (4)	北埋159集	700	丸木	イヌエンジュ	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B2 (5)	北埋176集	524	1/4割	コナラ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	1 B2 (5)	北埋176集	526	丸木	ハンノキ属	1/10
L3 建築部材 横架材・梁	1 B3 (4)	北埋159集	725	1/4割	トネリコ属	1/10

表 - 20 種別木製品集成掲載一覧(13)

## 建築部材(2) (図IV-37)

製 品 名 (推定含む)	層 位	報 告 書 No.	掲 載 No.	木 取	樹 種	縮 尺
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B2	(5) 北埋176集	532	丸木	リウツギ	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B3	(4) 北埋159集	723	1/4割	クワ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B2	(5) 北埋176集	534	丸木	ニワトコ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B3	(4) 北埋159集	712	丸木	リウツギ	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B3上	(4) 北埋159集	711	丸木	キハダ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B3	(4) 北埋159集	710	丸木	ハシドイ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B1	(5) 北埋176集	187	丸木	リウツギ	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B3	(4) 北埋159集	721	丸木	カエデ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B1	(5) 北埋176集	189	丸木	アスナロ	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B3	(4) 北埋159集	720	丸木	モミ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B3	(4) 北埋159集	714	丸木	ヤナギ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B2	(5) 北埋176集	538	丸木	ハシドイ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	OB	(5) 北埋176集	18	丸木	モミ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B1	(5) 北埋176集	190	丸木	ミツバウツギ	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B1	(5) 北埋176集	192	丸木	モミ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B3	(4) 北埋159集	716	丸木	リウツギ	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B3	(4) 北埋159集	718	丸木	イヌエンジュ	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B1	(5) 北埋176集	188	丸木	クワ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B2	(5) 北埋176集	537	丸木	ミツバウツギ	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B3	(4) 北埋159集	713	丸木	リウツギ	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B2	(5) 北埋176集	536	丸木	モミ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B2	(5) 北埋176集	544	丸木	モミ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B2	(5) 北埋176集	543	丸木	トネリコ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B4	(3) 北埋146集	112	丸木	ナナカマド属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B2	(5) 北埋176集	542	丸木	ヤナギ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B3	(4) 北埋159集	719	丸木	トネリコ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	OB	(5) 北埋176集	19	丸木	ハシドイ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B3	(4) 北埋159集	717	丸木	トネリコ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B2	(5) 北埋176集	541	丸木	ハシドイ属	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B2	(5) 北埋176集	539	丸木	ミツバウツギ	1/10
L3 建築部材 屋根・壁横架材	I B3	(4) 北埋159集	735	半割	トネリコ属	1/10
L3 建築部材 扶付部材加工製品	I B4	(3) 北埋146集	109	1/4割	トネリコ属	1/10
L3 建築部材 枠材	I B4	(3) 北埋146集	114	心持	トネリコ属	1/10
L3 建築部材 枠材	I B3	(4) 北埋159集	729	1/6割	トネリコ属	1/10
L3 建築部材 枠材 切断品	I B3	(4) 北埋159集	732	心持	モクレン属	1/10
L3 建築部材 枠材	I B3	(4) 北埋159集	730	半割	トネリコ属	1/10
L3 建築部材 枠材	I B3	(4) 北埋159集	731	1/4割	トネリコ属	1/10
L3 建築部材 枠材	I B3	(4) 北埋159集	728	1/4割	トネリコ属	1/10

## 3 彫り・刻み等の加飾のある製品集成 (図 - 39-41、表 - 21、図版 - 41-47)

## (1) 個別製品報告

図 - 39・40に27点を掲載し、A-ZとZZの記号を付した。図 - 41には一部の実大図・展開図を示した。

A: 軸枝利用式の車輻受台部(タカマ)に長さ2cm前後の刻み目が付けられている。加飾部位は軸元付近と舟との結合部である。前者は胴部が最も厚味を持つ軸元の両側に、一組三本の平行線を軸と平行する方向に配置。後者は前者と同一面となる両固定部の凹みの両脇に、一本ずつの刻み目が付けられている。全体で10本の短線が同一面上に平行に並ぶ。

表 - 21 種別木製品集成掲載一覧(14)

杭 (図IV-38)		製 品 名 (推定含む)	層 位	報 告 書 No.	掲 載 No.	木 取	樹 種	縮 尺
L4	杭		I B1 (1)	北埋128集	71	丸木	トネリコ属	1/10
L4	杭		I B1 (1)	北埋128集	70	丸木	トネリコ属	1/10
L4	杭		I B3 (4)	北埋159集	765	丸木	ニレ属	1/10
L4	杭		I B2 (5)	北埋176集	564	丸木	トネリコ属	1/10
L4	杭		I B3 (4)	北埋159集	766	丸木	キハダ属	1/10
L4	杭		I B2 (5)	北埋176集	572	股本(丸木)	イヌエンジュ	1/10
L4	杭		I B2 (5)	北埋176集	573	1/4割	トネリコ属	1/10
L4	杭		I B1 (1)	北埋128集	68	丸木	トネリコ属	1/10
L4	杭		I B2 (5)	北埋176集	565	丸木	モミ属	1/10
L4	杭		OB (5)	北埋176集	15	丸木	トネリコ属	1/10
L4	杭	大型刺し杭	I B3 (4)	北埋159集	772	丸木	コナラ属	1/10
L4	杭		I B1 (5)	北埋176集	204	丸木	トネリコ属	1/10
L4	杭		I B1 (5)	北埋176集	203	丸木	モミ属	1/10
L4	杭	焼失	I B2 (5)	北埋176集	571	丸木	ハシドイ属	1/10
L4	杭	焼失	I B1 (5)	北埋176集	201	丸木	ハシドイ属	1/10
L4	杭		I B1 (1)	北埋128集	69	丸木	トネリコ属	1/10
L4	杭	大型刺し杭	I B3 (4)	北埋159集	767	丸木	コナラ属	1/10
L4	杭	切断品	I B3 (4)	北埋159集	768	丸木	ニガキ	1/10
L4	杭		I B3 (4)	北埋159集	771	丸木	モミ属	1/10
L4	杭	切断品	I B4 (3)	北埋146集	121	丸木	コナラ属	1/10
L4	杭	焼失	I B1 (5)	北埋176集	200	丸木	トネリコ属	1/10
L4	杭	大型刺し杭	I B3 (4)	北埋159集	773	丸木	コナラ属	1/10
L4	杭		I B1 (5)	北埋176集	205	丸木	トネリコ属	1/10
L4	杭	焼失	I B3 (4)	北埋159集	770	丸木	コナラ属	1/10
L4	杭		I B2 (5)	北埋176集	568	丸木	ヤナギ属	1/10
L4	杭	焼失	I B3 (4)	北埋159集	774	丸木	トネリコ属	1/10
L4	杭		I B2 (5)	北埋176集	566	心持	モミ属	1/10
L4	杭		I B1 (5)	北埋176集	206	丸木	クワ属	1/10
L4	杭	焼失	I B1 (5)	北埋176集	209	丸木	モミ属	1/10
L4	杭		I B2 (5)	北埋176集	567	丸木	モミ属	1/10
L4	杭		I B1 (5)	北埋176集	202	丸木	イヌエンジュ	1/10
L4	杭	刺し杭	I B4 (3)	北埋146集	123	丸木	ハシドイ属	1/10
L4	杭	焼失	I B1 (5)	北埋176集	207	丸木	ハンノキ属	1/10
L4	杭	焼失	I B1 (5)	北埋176集	210	丸木	ハンノキ属	1/10
L4	杭		OB (5)	北埋176集	16	丸木	トネリコ属	1/10
L4	杭		I B2 (5)	北埋176集	569	丸木	ニレ属	1/10
L4	杭		I B5 (3)	北埋146集	21	丸木	トネリコ属	1/10
L4	杭	切断品	I B1 (5)	北埋176集	208	丸木	コナラ属	1/10
L4	杭	焼失	I B4 (3)	北埋146集	120	丸木	トネリコ属	1/10
L4	杭		攪乱 (5)	北埋176集	6	丸木	トネリコ属	1/10
L4	杭	切断品	I B2 (5)	北埋176集	570	丸木	トネリコ属	1/10

B: ヤナギ属材の魚叩き棒に周回する紋彫彫刻が施されている。加飾部位は握り部の尻と叩き部の元である。前者はパットのグリップエンド状に太く削り残した尻部に、上下1条の直線を約2cm幅で一周彫り、その間に曲線・短線を施し、直弧文的な紋様となっている。後者は叩き部元上下2条の直線を約1.5cm幅で一周彫り、その間に交互に正立倒立の「八」字状線が付随した列点を配している。「八」字状線は正立4・倒立3で、1カ所正立が隣接する。実大図・展開図を図-41に掲載してある。

C: 漁獲用の「やす」と思われる同形態の23点中1点にシロシが彫られている。加飾部位は茎部の最上段(肩部)で二つの彫りが並んでいる。ひとつは張り出し翼の長い「」状印、もう一方は「キ」字状

印である。「」状は中央線が先に彫られ、下翼のみが先端で接している。「キ」字状は右上がりの平行斜線が先に彫られ、左側の線を中心に直交する彫りを入れている。実大図を図 - 41に掲載してある。

D：矢中柄の上方（矢側）の一部に5cmほどの範囲で、規則性のない小列点が押されている。

E：矢中柄の上半部（矢側）に、縦方向に連続した小刻みの列点がみられる。

F：スギの箱板材を再利用した火鑽り板。両端を山形にカットし、端部付近に1箇所の白が鑽られている。火鑽り白には位置決めのための外周円が二重に引かれている。白部は径1.3mmで焦げており、火口に火が移りやすいようにV字刻みも施されている。板の中央部には魚鱗状の連続波文が彫刻されている。火鑽り関係の線・刻み等は加飾ではなく、中央部の連続波文が箱としてあった時の彫刻と思われる。

G：柄（打ち棒）の端部突起。頭部削り出しとしたが、グリップエンドの突起とも考えられる。この片側に張り出した突起に幅2cm弱の帯状の彫りが入っている。

H：Gと同様の形態で、片側に張り出した突起部には3本の平行刻線が彫られている。

I：内外黒地橙赤色の漆塗り椀。内外に墨書の紋様がある。底部高台内に長さ約1cmの深い彫り点が3点、直交の位置に広がっている。空白の位置にもう1点あると椀型を換く時の軸固定痕である可能性もある。実大図を図 - 41に掲載してある。

J：内黒地茶赤色・外黒色の漆塗り椀。底部高台内の一隅に「・」「ト」字状の深い彫りが並んでいる。「ト」字状の縦棒の長さは0.95cm。漆塗りの後から彫られたもので、向きは不明だが、組み合わせでひとつのシロシと思われる。実大図を図 - 41に掲載してある。

K：内黒地朱赤色・外黒色の漆塗り椀の1/2片。外面に朱色漆で柏葉文が描かれている。底部高台内の一隅に長さ1cmの「二」字状の深い彫りがある。漆塗りの後から彫られたもので、向きは不明だが、ひとつのシロシと思われる。また、高台内中央を貫いて2本の平行線による片矢印が刻まれている。最終の漆塗り前に毛引かれたため、地塗りの漆等が細く盛り上がった線となっている。高台内縁付近の交叉部で観察すると、長い中央線の方が後描きのようである。実大図を図 - 41に掲載してある。形態や漆塗り前後の加飾という点からみて、両者には製造時と当遺跡での使用時という時間差と性格の違いがある。

L：全面黒漆塗りの突起付竹製品。漆塗り前に施された加飾で、胴部の節周辺に削りが入り、さらに突起対岸に幅5～7mmの広い削りが2カ所並び、刻点が散在している。何かを表現したものが抽象文かは不明。実大図・展開図を図 - 41に掲載してある。

M：アスナロ材の柁目板を加工した細身の篋。柄頭には張り出しと紐穴がみられる。柄には全体に浅い横筋が幾条も入り、篋部への移行部片面には斜線・短線などで構成された紋様が刻まれている。Bの握り部の尻に彫られたものに似て直弧文である。

N：刻み目の付いた枝材加工製品。枝元の端部に5本の平行短線が刻まれている。魚叩き棒・算木・暦などの可能性がある。

O：刻み目の付いた割材加工製品。折れた材の端部片辺に5ヶ所のV字刻み目が入っている。算木・暦などの可能性がある。

P：刻み目の付いた長い串。頭側の端部に8本の平行短線が刻まれている。算木・暦などの可能性がある。

Q：刻み目の付いた太串。頭側の端部に抉ったような深い刻みが2カ所縦に並んで付けられている。後出のW～ZZのイクバスイとの関連も考えられる。

R：彫刻等が施された早椀のミニチュアまたは槍先の模造品と思われる半割材加工製品。加飾部位

は柄の頭部と両肩部である。前者はバットのグリップエンド状に太く削り残した端部に、2条の直線を一周彫り、その外側の線上に三角状列点を刻んでいる。後者は両肩部に上下二段の刻みを付け、片面にそれを囲むような二重半円文を線刻している。実大図・展開図を図-41に掲載してある。

S：薄く筒状に削られ浅い袈りを両脇に付けられた板材加工製品。両面ともこの袈りを囲むような弧状線とこれを繋ぐ直線が線刻されている。また、その上部には斜線や弧状の線刻が両面ともにみられる。

T：幅2.5～3mmの帯状にした樹皮の表面に、斜平行・交差など不均一な印象の線刻が連なっている。下半部に集中することや線の方向の揃いから、単なる傷ではないと思われる。

U：端部が段になるほどの袈りが入った半割材加工製品。胴部の片面から側面にかけて短い斜線が数条刻まれている。

V：両面に線刻のあるイクバスイ。正面は傷のようなまばらな方向の斜線が数条。裏面はやや深め・広めの平行斜線が付く。

W：正面中央部にシロシの付いたイクバスイ。シロシは斜めに傾いた2列点の刻み。Xと酷似。

X：正面中央部にシロシの付いたイクバスイ。シロシは斜めに傾いた2列点の刻み。Wと酷似。

Y：正面中央部にシロシの付いたイクバスイ。シロシは斜めに傾いた平行な2短線の刻み。

Z：正面中央部にシロシの付いたイクバスイ。シロシは斜めに傾いた平行な2短線の刻み。Yより線の間隔が狭い。

ZZ：正面中央部にシロシの付いたイクバスイ。シロシは斜めに傾いた平行な2短線の刻み。Z同様Yより線の間隔が狭いが、線の傾きは緩い。

W～ZZのイクバスイは、ほぼ同一地点の同一層（B2）からの出土である。

## (2) 小括

伝世品だけではなく出土品にもこのような彫刻・線刻などがあることは美々8遺跡低湿度の調査から知られていた（※北海道埋蔵文化財センター 北埋調報83・102・114）。これらを参考に、報告した製品に入った彫りや刻みを、加飾のされ方で分類すると、

シロシとしてつけられたもの

シロシの延長としての装飾的なもの

紋様としてより、使用上の必要でつけられたもの

交易で得た器物にすでに施されていたもの

に分けられる。

：アイヌの人々の使用する器物に付けられた彫りや刻みで、マークのような「印」を「イトクバ」、「シロシ」と呼んでいる。シロシについては、河野広道が1934年に「アイヌのイナウシロシ」（『人類学雑誌』49-1）を発表した中で「シロシ概念」として取り扱った文章に詳しい。「シロシ」は日本語の「しるし」が訛化した言葉で、古くは「イトクバ」と呼ばれていた。イトクバの本来の意味は「刻み目」で（金田一京助 1930）、交易などで人・器物・日本語などが入り込む中で、シロシと呼び方が変わっていったものと考えられる。今回の出土品報告の中では、シロシは日用品・祭祀具等の製品にみられ、所有を示す符号としての印となっていると思われる。上記の河野論文によれば、「所有を示す覚え印」ということで、家族で同一のことや個人で異なることもあるとし、「神印・血族印・家族印・個印・狩猟団の印」などが考えられるという。

報告記号でいうとA・C・H・I・J・K・1・Q・W・X・Y・Z・ZZがここに分類される。Aの軸下脇とHでは3本一組の線という共通項がある。I・J・K・1の漆塗り椀の高台内の印は、出土

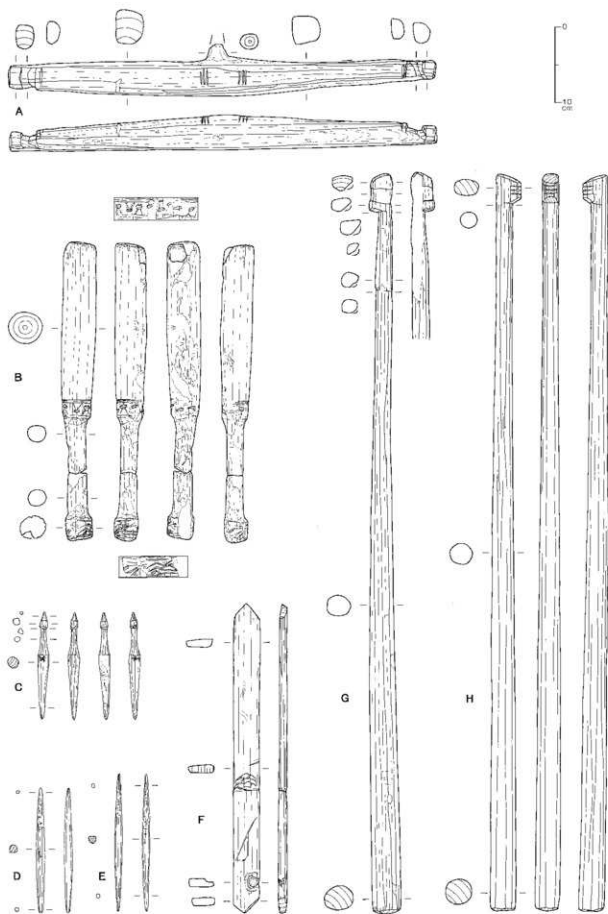


图 - 39 彫り・刻み集成 ( 1 )



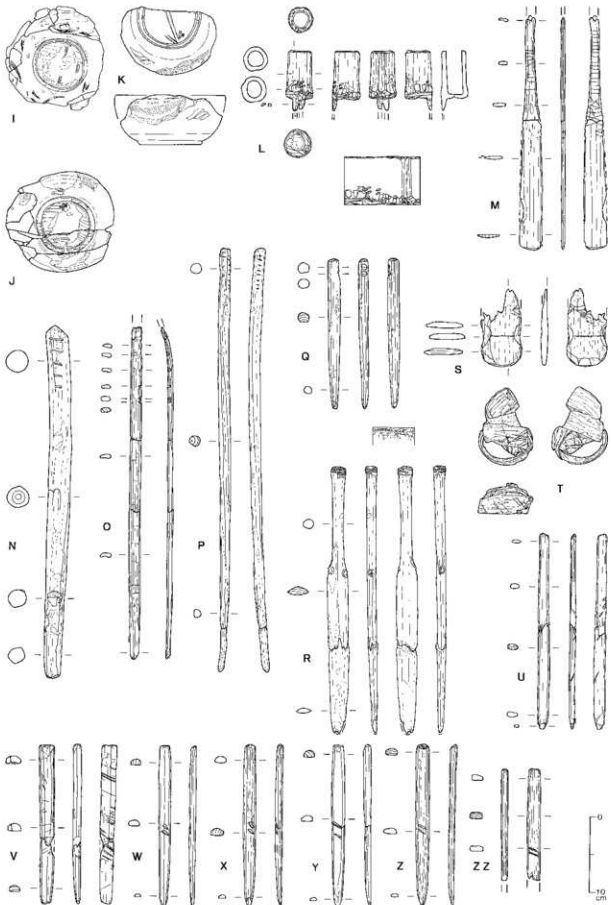


図 - 40 彫り・刻み集成 ( 2 )

表 - 22 彫り・刻み等の加飾のある木製品一覧

略号	製品名	層位	報告書・掲載No.	樹種	彫り・刻みの部位	技法・形態
A	車權受台部	I B1	(5) I B1 22	モミ属	胴部軸下両脇 胴部両固定部両脇	刻線 1組3本平行線1対 刻線 両脇各1本1対
B	魚叩き棒	I B3	(4) 92	ヤナギ属	握部尻・全周 叩部元・全周	彫・刻線 直・曲線 彫・刻線 直周線・列点・「ハ」字状線
C	ヤサ・矢	I B1	(5) I B1 26	ノリウツギ	肩部 肩部	刻線 「キ」印 刻線 「一」状印
D	矢中柄	I B2	(5) I B2 88	ノリウツギ	矢側(上半部)	刻 不連続列点
E	矢中柄	I B4	(3) I B4 9	ノリウツギ	矢側(上半部)	刻 連続 縦列点
F	火鑽り板	I B3	(4) 228	スギ	火鑽り面中央部	彫 刻線 鱗状波文
G	装飾付頭部削出柄	I B3	(4) 182	コナラ属	柄頭全周	彫 凹帯状
H	装飾付頭部削出柄	I B2	(5) I B2 115	コナラ属	柄頭突起部	刻線 3本平行線
I	漆椀	I B4	(3) I B4 24	ハリギリ	底部高台内	彫 「・」状3点印 軸端固定痕?
J	漆椀	I B3	(4) 262	トチノキ	底部高台内	彫 「・」状3点印
K	漆椀	I B2	(5) I B2 186	ブナ属	底部高台内	彫 「ニ」字状印 刻線 2本平行線による片「→」状
L	漆塗竹製品	I B3	(4) 278	タケ属	胴部下方全周	削・刻 散刻点と並び削り
M	筥	I B2	(5) I B2 196	アスナロ	裏面柄篋移行部	刻線 弧直文的
N	刻目付枝材加工製品	I B3	(4) 402	ハンノキ属	上端部	刻線 5本平行の短線
O	刻目付割材加工製品	I B3	(4) 401	アスナロ	片端部側面	刻 連続列点
P	刻目付長串	I B3	(4) 400	キハダ属	上端部	刻 連続列点(短線)
Q	刻目付太串	I B2	(5) I B2 210	ノリウツギ	上端部	刻 縦に2列点
R	横換造品 (ミニチュア)	I B3	(4) 443	ノリウツギ	柄頭全周 肩部とその片面	彫・刻線 直周線・列点 刻・刻線 2列点と「」状開み線他
S	扶け板材加工製品	I B3	(4) 537	モミ属	両面	刻線 扶部に弧状囲み線、これを繋ぐ直線、上部に弧状「ハ」字状重線
T	帯状樹皮	I B3	(4) 806	樹皮	下半部表面	刻線 斜平行・交差・不整
U	端挟入半割材加工製品	I B3	(4) 438	ミツバウツギ	胴部片面～側面	刻線 斜短線・不整
V	イクバスイ	I B3	(4) 423	モミ属	両面	刻線 斜平行・不整
W	イクバスイ	I B2	(5) I B2 327	アスナロ	正面中央部	刻 斜2列点
X	イクバスイ	I B2	(5) I B2 328	アスナロ	正面中央部	刻 斜2列点
Y	イクバスイ	I B2	(5) I B2 329	アスナロ	正面中央部	刻 斜2列点(短線)
Z	イクバスイ	I B2	(5) I B2 330	アスナロ	正面中央部	刻 斜2列点(短線)
ZZ	イクバスイ	I B2	(4) 434	アスナロ	正面中央部	刻 斜2列点(短線)

彫:全周か閉じる・

刻:側面からの刃入れで閉じない

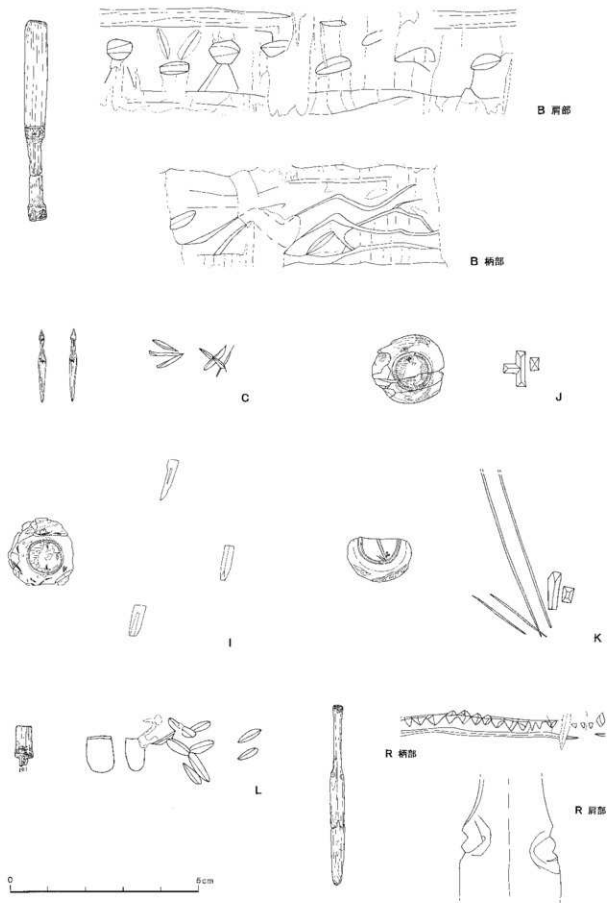


图 - 41 彫り・刻み実大図

層や彫りの形状に違いはあるものの、典型的なイトクバ=シロシといえよう。B2層出土のQとW-ZZにみられる2点組の印は同一のシロシと考えられ、特にW-ZZのイクバスイは同地点からの出土で、そのまともりからも同一者(家族)のものといえよう。伝世品でみるイクバスイにおいては全面彫刻が入ることが多いほか、シロシは両端部に入っていることが多く、これらが組み合わさって個々のシロシとされる。出土例のように中央部に1カ所のものは少なく、時間差や地域性を考慮して検討すべきものであろう。

: 金田一京助は、装飾的な彫刻もシロシの延長線上にあるという。報告記号でいうとB・G・M・R・Sがこれにあたる。B魚叩き棒とR権ミニチュアでは装飾彫刻の部位に共通点がある。魚叩き棒は魚の霊を再生を祈念して送るという木幣(イナウ)としての意味もあり、権ミニチュア(槍先模造品)という祭祀的なものと装飾部位が共通するのは興味深い。また、B-2とM筐では、斜線・短線・曲線などが組み合わされた直弧文の彫刻に共通点がある。筐の中には動物の脳を掻き出す用途のものがあり(名取武光 1985)これも再生を祈念する木幣の意味がある。Gはに分類したHと製品形状での共通点があり、シロシとしての帯状彫りかもしれない。逆に彫りや刻線が実用的なもので、に分類される可能性もあろう。Sの線刻は全面にあり、斜線・曲線の使用などが装飾的に見えるが、製品が木札であれば線刻はシロシと考えることもできる。

: シロシや装飾と見るよりも使用に関わる刻み等と思われるもので、報告記号でいうとD・E・N・O・P・T・U・Vがこれにあたる。D・Eの矢中柄は列点のある部位が矢側にあることから、矢の装着に係するものと考えた。N・O・Pの刻み目は算木・暦という実用性を見出せる。またNは魚叩き棒の可能性もあり、刻みに捕獲魚数の計上などの意味を想像させる。Tの樹皮やUには使用時に必要で付けたと思わせる線や刻みが入っている。Vのイクバスイも本来以外の使用目的で付いた刻線に見受けられる。イクバスイではなく、一般の筐なのかもしれない。

: 交易で得た器物やそれを再利用したものにみられる、和産物に元から付いている彫刻等である。報告記号でいうとF・K・2・Lがここに分類される。Fは当初はスギの木箱で、その際に装飾として彫られていた鱗状波文と考えられる。K・2は最終の漆塗り前に引かれた線のため、漆を塗っても地塗りの漆等が細く盛り上がり線文となっている。注文時・出荷時の印と思われ、後彫りであるI・J・K・1のようなシロシとは明確に区別されるべきものである。Lも漆塗り前に彫られた紋様で、製品は用途不明ながら形・紋様・漆に風雅な一面がある竹製品である。

(三浦)

#### 4 漆塗り椀の紋様集成(図 -42・43、表 -22、口絵2、図版 -48~50)

全体で38点出土している漆塗り椀は、表 -23に他の漆塗り製品ともども出土漆椀一覽として取りまとめている。38点中、文様のあるものが27点・ないもの6点・不明5点と、約8割に文様が描かれている。文様には、抽象的な線や点文・草文・花文・鳥文・葉文などがあり、家紋や幾何学文はない。また蓋表に3カ所の円・菱状文が描かれ金(銀)箔を使用した、いわゆる「南部箔椀」もある。他に赤色漆上に墨書きした文様がある。これらの文様は漆椀の時代や産地を特定する上で欠かせない情報となるため、ここで代表例8点を選び、展開図(一部推定復元あり)を図 -42・43に掲載する。以下、漆椀ごとに文様報告を行う。各個で出土層位・掲載・報告書を示し、図では実測図を置き内外面にあるものは2段にしてある。ここに掲載しなかったものについては、既報の(3)~(5)の3冊の報告書を参照願いたい。

## B4層 掲載 24 報告書③北埋調報146

内外とも黒漆地に橙赤色の漆を塗った椀。文様は高台内を除く破片全体に、墨書と思われる筆払い描きである。黒漆ではなく墨による文様であるため、製品出荷後の使用者の手による可能性が高い。ランダムに細葉状の絵を描き散らした状態である。他に外面の一部に黒漆による線描があり、これが本来の文様の一部かと思われる。

## B4層 掲載 23 報告書③北埋調報146

内外とも黒漆を塗った椀。文様は内面見込みを中心に朱色漆で描かれている。破片であるのと漆の剥離が著しいため文様の全容を知ることができないが、見込み付近の太描きが帆を掲げた舟であれば、周辺が小波、口縁付近の斜線の残存が富士山の一部とみて、近世浄法寺漆器（岩手県）にみられる美保松原文（山田昌久ほか 1999）との関連が考えられる。ただし出土層位の問題がある。

## B3層 掲載 261 報告書④北埋調報159

内外とも黒漆を塗った椀。文様は内外面全体に菊花と思われる花文を朱色漆で描いている。外面の菊花は火花のような大輪と小輪の組み合わせで、重なり合いもある乱菊となっている。葉が蕾の表現もみられる。内面は外面よりも菊花は少なく大輪も扇状の表現で、葉が蕾と思われる点の集合が多い。鎌倉漆器のような印象をもつ。

## B3層 掲載 270 報告書④北埋調報159

内面黒漆地に褐赤色漆塗り、外面黒漆塗りの椀。文様は外面に朱色漆で木と鳥が描かれている。破片であるのと漆の剥離が著しいため文様の全容を知ることができないが、木は葉の表現から松と思われ、細かい線描の鳥は組み合わせから鶴と考えられる。松に鶴の吉祥文とみられる。鳥文は千鳥や時鳥（ホトトギス）の可能性もある。

## B3層 掲載 17 報告書①北埋調報128

内面黒漆地に朱赤色漆塗り、外面黒漆塗りの椀。文様は外面に朱色漆で描かれている。破片であるのと漆の剥離が著しいため文様の全容を知ることができない。草文・波文が抽象文のようなフリーの線文である。

## B2層 掲載 187 報告書⑤北埋調報176

内外とも黒漆を塗った椀。文様は朱色漆で内外面全体に草文・波文が抽象文のようなフリーの線文を描いている。破片であるのと漆の剥離が著しいため文様の全容を知ることができないが、線は内面が外面より密で、太細・長短の種類が豊富である。

## B2層 掲載 186 報告書⑤北埋調報176

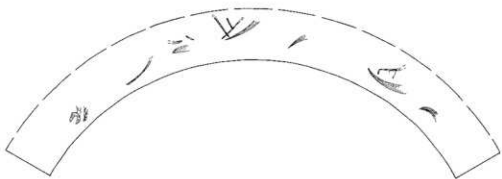
内面黒漆地に朱赤色漆塗り、外面黒漆塗りの椀。文様は外面に朱色漆で鮮やかに描かれている。雲文か柏葉文と思われる大構えの文様と腦の文様からなる。前者は口縁部から太い波線が弧状に描かれ、その内側に列点・連続斜線が納まっている。腦の文様は3本の太く短い波線で構成された山形で、欠失してみられない左側にも対で描かれていたものと思われる。

## B1層 掲載 61 報告書⑤北埋調報176

内面黒漆地に茶赤色漆塗り、外面黒漆塗りの椀の蓋。文様は外面に褐色がかった赤色漆で描かれている。3ヵ所に均等に配置されているが、欠失や漆の剥落のため完全に残っているのは1ヵ所のみである。まず径2cm強の円を細線で描き、内側に刷くように描いた4つの略菱文を配している。その上に金箔（銀箔？）を置いており、いわゆる南部箔椀とされるものようである。菱形の描き方や箔の置き方からみて、上質のものとはいえないだろう。

(三浦)

1B4 24 外面  
ハリキリ



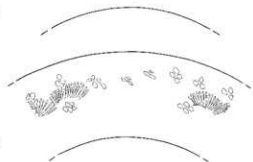
1B4 23 内面  
トキノキ



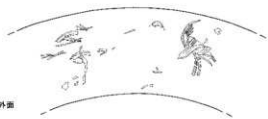
1B3 261 外面  
ハリキリ



1B3 261 内面  
ハリキリ



1B3 270 外面  
トキノキ



0 5 10cm

図 - 42 漆塗り椀紋様集成 (1)

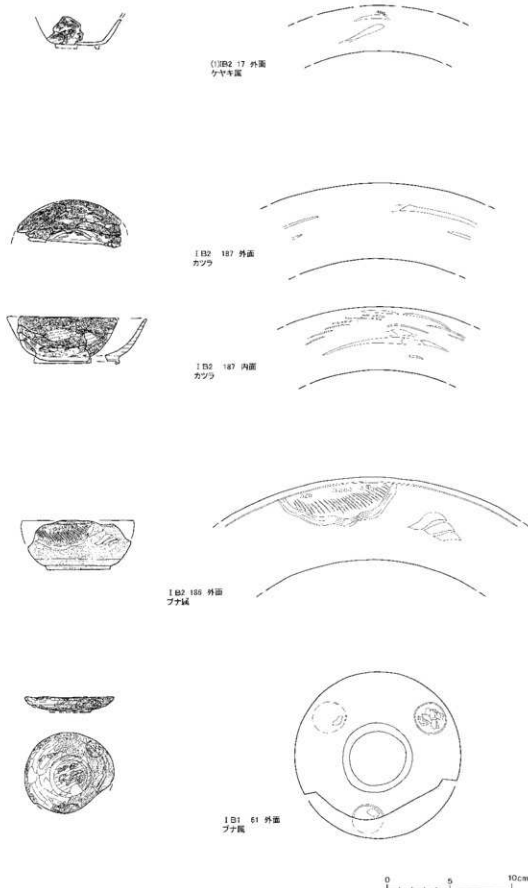


図 - 43 漆塗り椀紋様集成(2)

表 - 23 漆碗等一覧表

グッド 遺物名	層位	地区	遺物№	報告	名称	残存状態	木地の樹種	内外面色	文様等	
H24c	I B 4	②	4466 (3)	23	漆碗	1/4	トチノキ	内外黒	内朱色草文、舟?・波文?	
M35a	I B 4	②	2055 (3)	24	漆碗	底~胴部 完形	ハリギリ	内外黒地橙赤	外黒縁部・内外朱草文様・高台内彫印	
M34d	I B 4	②	6479 (3)	25	漆碗	1/3	カツラ	内茶赤 外黒	外赤文様(漆下地)	
K28b	I B 4	②	1075 (3)		漆碗	胴部片	カツラ	内褐赤 外黒	外褐赤草文	
L32c	I B 3下	②	1905 (4)	269	漆碗	口縁部片	トチノキ	内外黒	内外朱色文様	
H23c	I B 3	②	4406 (4)	273	漆碗	口縁部片	ブナ属	内黒地橙赤 外黒	—	
H24c	I B 3	②	4452 (4)	270	漆碗	口縁~胴部片	トチノキ	内黒地朱赤 外黒	外朱色 松に鶴文	
I24a	I B 3	②	4160 (4)	274	漆碗	口縁部片	カツラ	内黒地橙赤 外黒	—	
I24c	I B 3	②	4090 (4)	263	漆碗	底部	トネリコ属	内外黒	なし	
I24c	I B 3	②	4094 (4)	275	漆碗	底部片	カツラ	内黒地橙赤 外黒	外朱色文様	
I24d	I B 3	②	5312 (4)	261	漆碗	1/2	ハリギリ	内外黒	内外朱色菊花文	
J21b	I B 3	②	9331 (4)	268	漆碗	胴部片	ブナ属	内黒地褐赤 外黒	外朱色文様	
J25d	I B 3	②	5499 (4)	271	漆碗	口縁部片	カツラ	内外黒	外朱色草花文	
K28c	I B 3	②	785 (4)	278	漆碗	竹製品 完形	タケ属	内外黒	外彫刻	
L20a	I B 3	②	8565 (4)	266	漆碗	口縁部片 同一個体	トチノキ	内黒地橙赤 外黒	外朱色文様	
L20b	I B 3	②	8598 (4)	265						
L20d	I B 3	②	8593 (4)	260	漆碗	1/3	エゴノキ属	内黒地朱赤 外黒	外朱色文様	
L29b	I B 3	②	423 (4)	272	漆碗	口縁部片	カツラ	内黒地茶赤 外黒	外朱色文様	
M35b	I B 3	②	2020 (4)	267	漆碗	胴部片	トチノキ	内黒地橙赤 外黒	なし	
M36b	I B 3	②	6645 (4)	264	漆碗	2/3	ブナ属	内黒地橙赤 外黒	外朱色文様	
N39a	I B 3	②	6581 (4)	262	漆碗	底~胴部 完形	トチノキ	内黒地茶赤 外黒	縁部文様なし・高台内彫印あり	
高AP-3	I B 2	②	4609 (3)		漆碗	腹片	—	褐赤・赤	朱色文様	
B67d	I B 2	①	102 (1)	17	漆碗	底~胴部	ケヤキ属	内黒地褐赤 外黒	外朱色草文	
H27b	I B 2	②	3828 (5)	182	漆碗	胴部片	ケヤキ属	内黒地赤 外黒	—	
I22c	I B 2	②	7011 (5)	189	漆碗	底~胴部 完形	ブナ属	内外黒地朱赤	なし	
I22d	I B 2	②	8131 (5)	186	漆碗	1/2	ブナ属	内黒地朱赤 外黒	外朱色草文・高台内彫印と同様	
J21b	I B 2	②	9399 (5)	192	漆碗	胴部片	カツラ	内黒地朱赤 外黒	外朱色文様	
K22a	I B 2	②	6667 (5)	187	漆碗	1/3	カツラ	内外黒	内外朱色草文?	
L23a	I B 2	②	3739 (5)	188	漆碗	胴部片	クリ	内黒地茶赤 外黒	なし	
L24b	I B 2	②	3704 (5)	193	漆碗	細枝片	トネリコ属	黒地	赤色文様?	
L33a	I B 2	②	1806 (5)	190	漆碗	口縁部片	トチノキ	内黒地茶赤 外黒	外朱色文様	
M22a	I B 2	②	7245 (5)	191	漆碗	胴部片	ブナ属	内黒地茶赤 外黒	外朱色文様	
R15b	I B 2	④	1041 (5)	182	漆碗	胴部片	カツラ	生漆	朱色文様	
J31a	I B 1	②	395 (5)	181	漆碗	曲物底 完形	ケヤキ属	外黒	なし	
J33a	I B 1	②	1444 (5)	181	漆碗	胴部片	クリ	内黒地橙赤 外黒	—	
N17b	I B 1	②	7777 (5)	181	漆碗	蓋の完形品	ブナ属	内黒地茶赤 外黒	外褐赤内茶文・整形(彫)沿輪	
S16d	I B 1	④	529 (5)	181	漆膜	腹片	—	朱赤	黒点?	
K27d	I B	②	6222 (5)	181	漆碗	腰部片	ケヤキ属	内外黒	内外朱色文様	
N14a	I B	②	9825 (5)	181	漆膜	腹片	—	朱赤・褐赤・生漆	牛漆地朱赤・朱赤地黒色の縁部	
J31a	O B	②	332・333 (5)	08	13	漆碗	胴部片	ブナ属	内黒地茶赤 外黒	なし
J60a	O B	①	390 (1)		漆膜	腹片	—	赤	—	
【参考資料】										
I22d	I B 3	②	7597 (4)	276	素木碗	底部片	ブナ属			
L19a	I B 3	②	9480 (4)	277	素木碗	底~胴部片	ブナ属			
L19d	I B 3	②	9482 (4)		赤色顔料片(漆)	赤色顔料片(漆)	—			
K23c	I B 2	②	4498・4499 (5)	182	185	素木碗	2/3	ハリギリ		



## V その他の遺物報告

## 1 金属製品の追加報告(図V-1,表V-1・2,図版V-1)

当遺跡出土の金属製品は、報告書(1)・(3)・(4)で既報の、墓・送り場・集石や住居跡などの遺構に伴う、刀・小刀・刀子・斧・鎌・針・鉤・鍋・素材・小札等の鉄製品や耳飾・刀装具・キセルなどの非鉄金属製品、包含層出土の太刀・斧・鎌・鍬・素材等鉄製品と刀装具などの銅製品・黒寧元寶・永楽通寶などである。鍛冶遺構や包含層から出土した鉄滓などの鉄生産関係遺物もある。全て弥文文化期〜アイヌ文化期に属するものである。

当節では、これらの報告後、灰集中・焼土・炭化物集中の土壌サンプルから検出された小製品を追加報告する。図は図V-1、データは表V-1に掲載した。また1〜3に対しては成分の蛍光X線分析を行ったので、このデータを表V-2に示した。2・3については鍍金の可能性もあるため、緑青のある部分と地金と思われる部分の2カ所を測定した。蛍光X線分析は日本電子機製のエネルギー分散蛍光X線装置(JOER JSX-3220)を使用し、附属のコンピュータ定量分析プログラムによる定量分析を行った。測定条件は電圧30kV・1カ所あたり時間240秒である。成分は元素で示した。以下、分析の結果を含めて報告する。

1は炭化物集中内から検出された小刀が刀子の鞘の鍍金か。片側のみ筋が入り、逆側の端は舌状になっている。表裏面とも金色に輝き、部分的に緑青は浮いているが安定している。色と分析から、黄銅(真鍮)製といえよう。他にも刀装具と思われる金属小破片が同時に検出されたが、復元できなかった。2と3は灰集中2から検出された装飾金具で組み合わせるものである。2は股になる脚を持つ円頭錐で、錐頭下に平らな小座金がついている。緑青と地金露出部分があり、緑青部分からは銀が少量検出されている。分析結果からみると、銅に少量の銀を混ぜた合金(四分一・隴金・赤銅など)を銅の地金に被せた製品と思われる。3の座金は円形で中央部に2の錐がセットされる角孔が開き、錐側の小座金の付着痕も残っている。縁には均等な刻みが入り花卉状の表現がなされている。表は緑青、裏は地金が露出しているが、分析結果は表裏とも同じで、銅製の座金である。4は焼土(F-87)から検出された鉄製の針。

表V-1 追加報告 金属製品

図番号	発掘区	層位	製品名	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	材質	備考
図V-1-1	②D30	I B	鍍金	(2.8)	1.2	0.1	(3.6)	黄銅	炭化物集中内より
図V-1-2	①J53d・J54a	I B2	錐	1.7	1.1	0.3	(0.3)	銅	灰集中2より 3とセット
図V-1-3	①J53d・J54a	I B2	座金	1.8	0.25	0.05	(0.8)	銅	灰集中2より 2とセット
図V-1-4	②E19bc	I B上面	針	(2.9)	(0.2)	(0.2)	(0.4)	鉄	F-87より

表V-2 金属製品蛍光X線分析

遺物No.	部位	Al	Si	P	S	Ca	Fe	Cu	Zn	As	Pd	Sn	Ag	Pb
1	表	—	—	—	6.7662	0.3835	0.6691	71.9674	14.5323	nd	—	2.2639	—	1.0972
	緑青	1.8310	3.9349	1.5847	1.7406	3.9912	0.1718	84.9676	—	0.0791	—	—	0.9798	1.0302
2	地金	1.5410	4.2544	0.8794	0.6590	0.8916	0.1119	89.1617	—	0.0617	1.5098	—	—	0.9636
	表	1.6209	3.7574	1.0031	1.4048	1.8749	0.1255	90.2534	—	—	—	—	—	—
3	裏	1.2890	3.3310	0.9032	0.4482	1.2515	0.1146	93.1595	—	—	—	—	—	—

nd: 検出されたが微量のため測定不可 ー: 検出されず

## 2 ガラス玉の追加報告

### 2 ガラス玉の追加報告 (図V-2, 表V-3・4, 図版V-1)

報告書③で1個のガラス小玉を報告したが、分析に誤りがあったため、未報告の資料ともどもここで報告する。2点ともI B 1層相当出土でアイヌ文化期に属するものである。成分の蛍光X線分析を行い、データを表V-4に示した。製作法に関するので、成分は酸化物状態で示した。蛍光X線分析の機器や測定条件は金属製品と同様である。

1はターコイズブルー(緑がかった青)の半透明なガラス玉。径8mmに対し孔径3mm弱と大きい。分析結果の $K_2O \cdot CaO$ から、カリ石灰ガラスと思われる。2は金春色(新橋色 くすんだ緑がかった青)の非透明なガラス小玉。径4mmに対し孔径1mm強と小さい。溶かしたガラスを3回巻いた製作時の螺旋筋が観察できる。分析結果の $PbO$ と $K_2O \cdot CaO$ から、鉛ガラスとカリ石灰ガラスが溶かし合わされたガラスとの判断に訂正する。

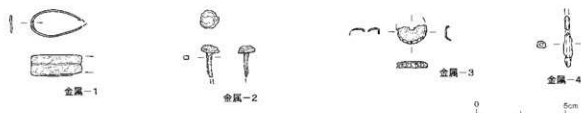
表V-3 追加報告 ガラス玉

図番号	発掘区	層位	製品名	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	材質	備考
図V-2-1	②J22a	I B1	ガラス玉	0.8	0.7	0.45	0.3	カリ石灰ガラス	
図V-2-2	②J21a	I B1?	ガラス小玉	0.4	0.4	0.4	0.2	鉛ガラスとカリ石灰ガラスの混合 (3)図III-12-8の再報告	

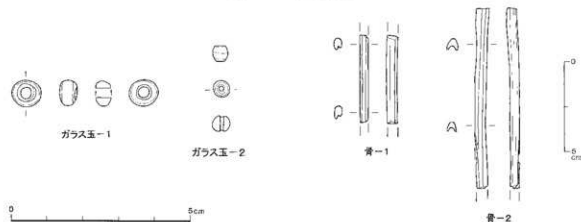
表V-4 ガラス玉蛍光X線分析

	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	SO <sub>3</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CuO	ZnO	As <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	OsO <sub>4</sub>	ZrO <sub>2</sub>	Ir <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	PbO
大	5.5516	79.3150	2.9047	4.1119	5.8909	0.4535	0.3481	0.8519	—	nd	—	0.0612	—	0.2214
既報小	2.6590	61.3316	5.8281	3.1446	3.1433	—	0.7511	0.9735	0.193	nd	0.1727	—	nd	19.0629

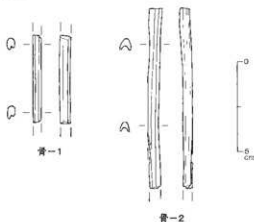
nd: 検出されたが微量のため測定不可能 —: 検出されず



図V-1 金属製品



図V-2 ガラス玉



図V-3 骨製品

## 3 骨製品報告 (図V-3, 表V-5, 図版V-1)

低湿度部で木製品と伴出した骨製品は2点で、木製品番号を付されて取上げられた遺物の中から選別したものである。2点とも折損している。1は表面を削りながらも側面の窪み筋を残した細棒状の製品で、陸獣骨製とみられる。2も側面の窪み筋を残しながら断面三角形に削った細棒状の製品で、シカの中足骨製である。

(三浦)

表V-5 骨製品

図番号	発掘区	層位	製品名	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	材質	備考
図V-3-1	②L31b	I B3	骨製品	(4.9)	0.5	0.65	(0.4)	陸獣骨	
図V-3-2	②L21a	I B2	骨製品	(10.0)	0.7	0.6	(2.3)	シカ中足骨	

## 4 キノコ報告 (図V-4, 表V-6, 図版V-1・2)

低湿度部で木製品と伴出したキノコは各層にわたっており、図V-4に示した位置から52点が出土している。木製品番号を付されて取上げられた遺物の中から選別したものもある。このうち過半数の27点を、北海道大学名誉教授 五十嵐恒夫氏に同定を依頼し、報文もいただいたので、ページを改め掲載させていただく。

キノコは低湿度部にあった木製品に自然に生えたものであろうが、これを当時の人々が利用した可能性もあるため、節を設けて報告することとした。同定された27点を含めた52点全点は、表V-6に示した。コフキタケがコフキサルノコシカケとも呼ばれるように、すべていわゆるサルノコシカケと称されるキノコで、インターネットで「サルノコシカケ」を検索したところ『えひめのキノコ図鑑』に、

- コフキサルノコシカケ 担子菌亜門真正担子菌綱帽菌亜綱ヒダナシタケ目マンネンタケ科  
*Ganoderma applanatum* (Pers.) Pat.  
 種々の広葉樹の倒木、切り株に生える
- ツリガネタケ 担子菌亜門真正担子菌綱帽菌亜綱ヒダナシタケ目サルノコシカケ科  
*Fomes fomentarius* (L.: Fr.) Kickx  
 プナの倒木や立ち枯れ木に生える
- ホウロクタケ 担子菌亜門真正担子菌綱帽菌亜綱ヒダナシタケ目サルノコシカケ科  
*Daedalea dickinsii* (Berk. ex Cooke) Yasuda  
 ナラ、カシ類の枯れ木上

とあった。

五十嵐氏もご指摘のとおり、ツリガネタケのかさの肉はフェルト質で、火口に利用された。一般にサルノコシカケ型のキノコは乾燥させて火をつけると煙り、火を保つ性質があり火口に利用されたようである。アイヌ語でもツリガネタケ(ホクチャタケ)をアベオブカルシ:火鉢キノコ・パシネカルシ:炭になるキノコと呼び、サハリンアイヌはサルノコシカケをチュナハ:我ら灰の中にいけるもの=火種と呼ぶという(如里 1953)。

出土品が即利用されたものと断定はできないが、縄文時代から擦文・アイヌ文化期にわたって、サルノコシカケ型のキノコを火口・火種・燃料等に利用していたことが窺えよう。

(三浦)

ユカンボシC15遺跡出土の菌類 北海道大学名誉教授 農学博士 五十嵐恒夫

ユカンボシC15遺跡出土の標本中、9点はコフキタケ、16点はツリガネタケ、1点はホウロクタケと同定された(別表のとおり)。

コフキタケ *Ganoderma applanatum* (Pers.) PAT.

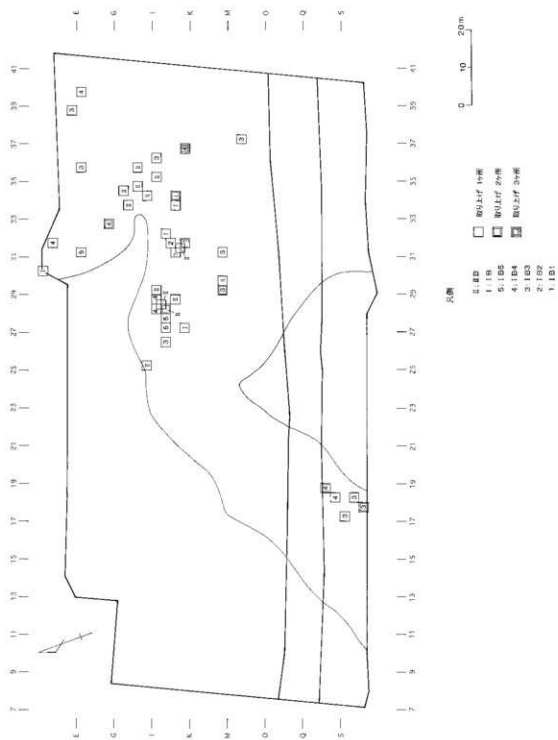
ツリガネタケ *Fomes fomentarius* (L.: Fr.) Fr.

ホウロクタケ *Trametes dickinsii* Berk.

これらの菌は、多孔菌科Polyporaceaeに属する硬質菌である。コフキタケは多くの広葉樹を腐朽するキノコで、全国的に分布する。ツリガネタケもコフキタケ同様に生きた広葉樹を腐朽し、全国的に分布する。このキノコのかさの肉はフェルト質で、火口として利用され、また木綿がなかった昔は外科綿として利用されたという。ホウロクタケはミズナラやカシワの枯れ木や根株に生え、木材部分を腐朽するキノコで日本全土に分布する。

同定  
別表

調査区	層位	菌名
F 32 c	I B4	コフキタケ
F 32 c	I B4	コフキタケ
G 34	II B	コフキタケ
H 25 b	II B	コフキタケ
H 34 b	II B	コフキタケ
I 26 b・c	I B3	コフキタケ
I 27 b	I B5	コフキタケ
I 27 c	I B5	コフキタケ
J 34 a	I B	コフキタケ・ツリガネタケ
C 30 a	I B	ツリガネタケ
D 38 c	I B3	ツリガネタケ
D 55 d	不明	ツリガネタケ
E 35 d	I B3	ツリガネタケ
G 33 c	II B	ツリガネタケ
H 35 d	II B	ツリガネタケ
I 28 a	I B4	ツリガネタケ
I 32 b	I B	ツリガネタケ
I 35 a	II B	ツリガネタケ
I 36 a	I B3	ツリガネタケ
J 27 b	I B	ツリガネタケ
J 33 d	I B	ツリガネタケ
J 36 c	I B4	ツリガネタケ
M 37 b	I B3	ツリガネタケ
R 18 d	I B4	ツリガネタケ
E 31 a	I B5	ホウロクタケ
D 55 d	不明	不明



図V-4 キノコ分布図

表V-6 キノコ出土一覧

出土グリッド	層位	キノコの種類	大きさ	量
② J 31 c	I B1		大	1 破片多数
② J 31 c	I B1		中	1
② I 31 c・J 31 d	I B2		大	1
② D 38 c	I B3	ツリガネタケ	小	1
② E 35 d	I B3	ツリガネタケ	小	1
② I 26 bc	I B3	コフキタケ	大	1 割破片多数
② I 36 a	I B3	ツリガネタケ	小	1
② L 29 b	I B3		小	1
② L 29 b	I B3		小	1
② L 31 b	I B3		小	1
② M 37 b	I B3	ツリガネタケ	小	1 破片2点
④ S 17 a	I B3		小	1
④ S 18 b	I B3		小	1 破片4点
④ T 17 d	I B3		小	1 破片2点
④ T 17 d	I B3		小	1 破片多数
② C 31 c	I B4		中	1
② E 39 d	I B4		中	1 小破片あり
② F 32 c	I B4	コフキタケ	大(径30cm以上)	1 破片4点
② F 32 c	I B4	コフキタケ	大	1
② I 28 a	I B4	ツリガネタケ	中	1 破片2点
② J 36 c	I B4	ツリガネタケ	小	1 破片6点
② J 36 c	I B4		小	1
② J 36 c	I B4		小	1 破片多数
④ R 18 b	I B4		小	1
④ R 18 d	I B4	ツリガネタケ	小	1
④ R 18 d	I B4		小	1
② E 31 a	I B5	ホウロクタケ	大	1 割破片多数
② I 27 b	I B5	コフキタケ	中	1 破片2点
② I 27 c	I B5	コフキタケ	中	1 小破片あり
② C 30 a	I B	ツリガネタケ	中	1 小破片あり
② I 32 b	I B	ツリガネタケ	中	1 破片6点
② J 27 b	I B	ツリガネタケ	小	1 破片2点
② J 33 d	I B	ツリガネタケ	小	1
② J 34 a	I B	コフキタケ	小	1
② J 34 a	I B	ツリガネタケ	中	1 破片5点
② G 33 c	II B	ツリガネタケ	小	1
② G 34	II B	コフキタケ	中	1
② H 25 b	II B	コフキタケ	中	1
② H 34 b	II B	コフキタケ	中	1 破片2点
② H 34 d	II B		中	1
② H 35 d	II B	ツリガネタケ	小	1
② I 28 b	II B		小	1 破片4点
② I 28 b	II B		小	1 破片多数
② I 28	II B		小	1 破片3点
② I 29 a	II B		小	1
② I 35 a	II B	ツリガネタケ	小	1 破片2点
② J 28 d	II B		小	1
② J 31	II B		小	1
② L 29 c	II B		小	1
① D 55 d	不明	ツリガネタケ	小	1
① D 55 d	不明	不明	小	1 破片多数
② J 31 a	不明		大	1

# 写真図版



遺跡全景

W E





遺跡ユカンボシ川原流付近



ユカンボシ川（遺跡付近）



旧長都沼（14号幹線排水路）

周辺の環境



遠景 (オサツ2遺跡付近より) S N



NW SE



SE NW

遺跡の現況



カマ場設置状況



保護用シート設置状況



ウエル・ポイント設置状況



ウエル・ポイントメインポンプ



ウエル・ポイント吸水管・集水管

低湿部対策施設



調査風景 (C67付近) NE SW



調査風景 (M34付近) W E



木製品出土状況 (K26) N S



調査風景 (M39・40) E W



木製品実測風景 (E28) NE SW

調査風景



土壌水洗作業



木製品水洗作業



木製品脱気バック作業



大型木製品脱気バック作業



大型木製品用屋外プール設置状況



木製品収納作業

一次整理作業風景



大型木製品屋外プール収納作業



木製品仮収納状況



保存処理作業



処理済み木製品クリーニング作業



接合作業  
整理作業風景(1)



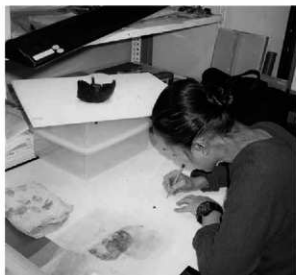
接合作業



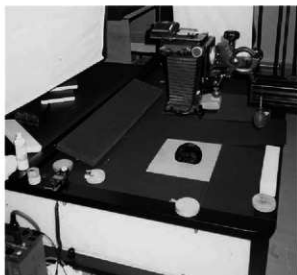
床実測作業



実測作業



実測作業



木製品俯瞰撮影用セット



樹種同定作業



種子選別作業

整理作業風景(2)



南北ベルト (C68) W E



東西ベルト (S35~37) S N



東西ベルト (M20~21) S N

基本土層





木製品出土状況 (H68付近) S N



木製品出土状況 (L28・29) W E



曲物検出作業 (掲載番号262) NW SE



調査風景 (M29付近) NW SE



木製品出土状況 (R18) SW NE

平成8年度の調査



木製品出土状況 (I 25・26) W E



木製品出土状況 (K23) NE SW



木製品出土状況 (I 23) SE NW

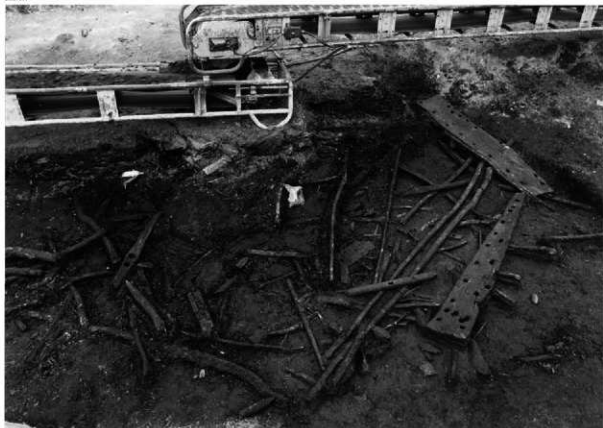


木製品出土状況 (J25・26) W E



調査状況 (I 23) NE SW

平成9年度の調査(1)



木製品出土状況 (I 23) NE SW



木製品出土状況 (I 24) S N

平成9年度の調査(2)



木製品出土状況 (K25付近) E W



木製品出土状況 (I 25付近) NE SW

平成9年度の調査(3)



木製品出土状況 (J22) SE NW



木製品取り上げ風景 (K22) E W



調査風景 (M22) NE SW



調査風景 (L21) NE SW



調査風景 (P19付近) W E

平成10年度の調査 (1)



調査風景 NE SW



調査風景 (O21・22) SE NW

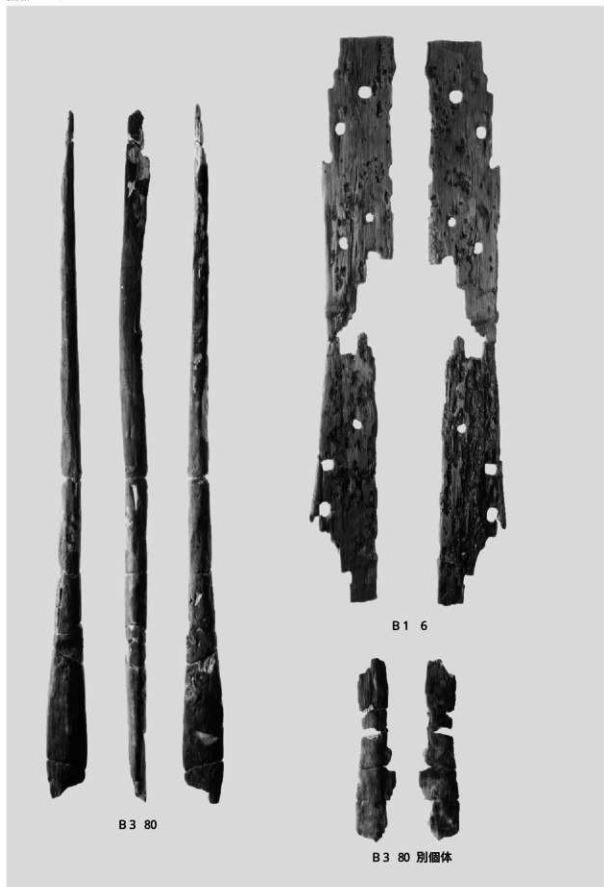


木製品出土状況 (O77) NW SE

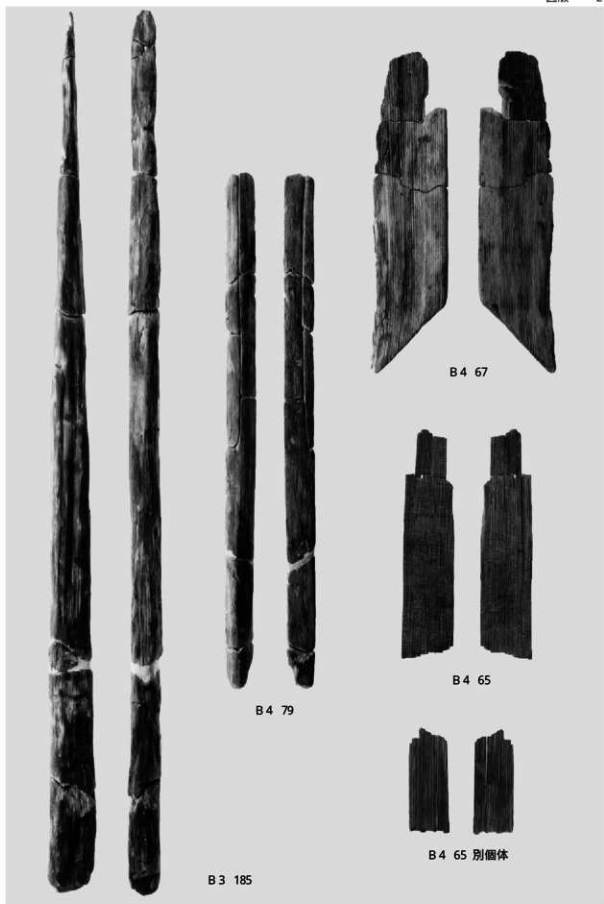


木製品出土状況 (J21) SE NW

平成10年度の調査(2)



修正木製品 ( 1 )



修正木製品 ( 2 )





B 2 160

修正木製品(3)



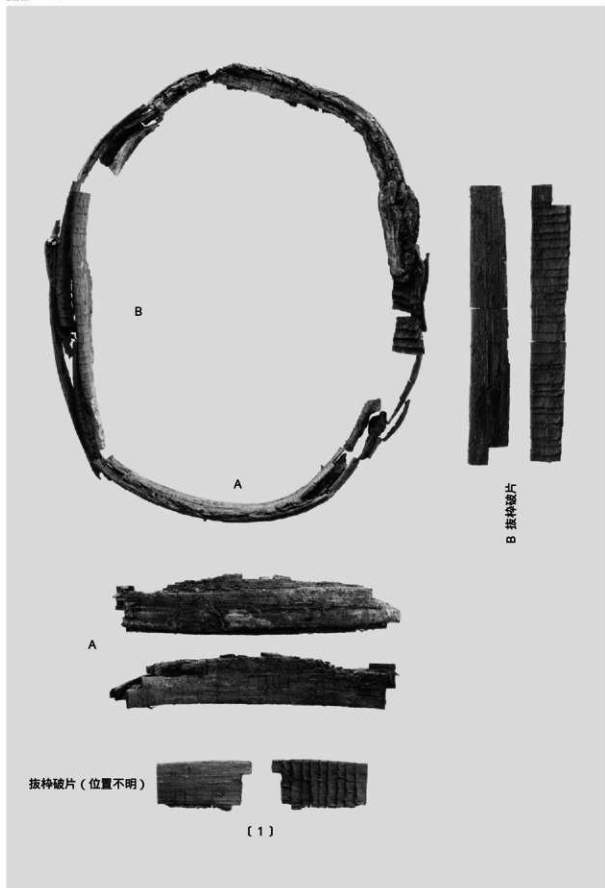
B 1 159

B 1 173

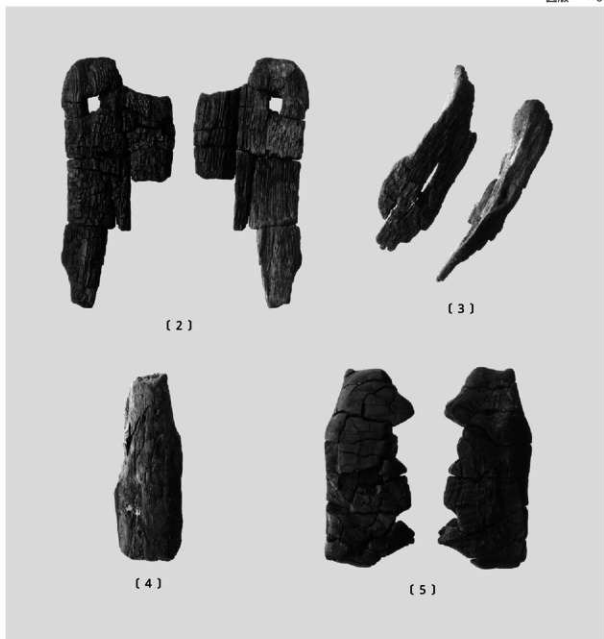
B 4 118

杭列 9 20

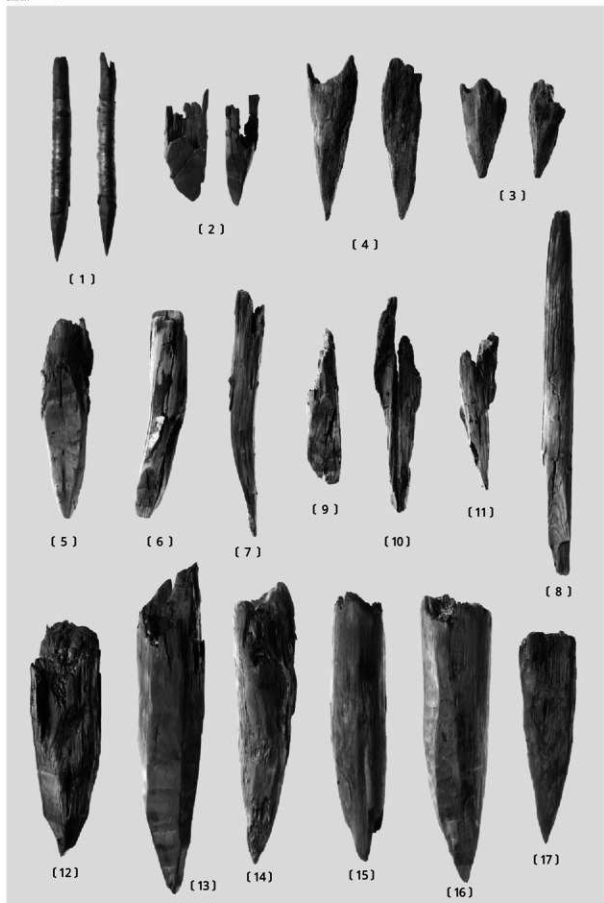
修正木製品 ( 4 )



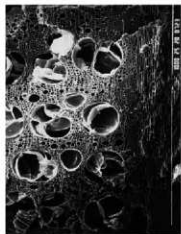
追加報告木製品(1)



追加報告木製品 ( 2 )



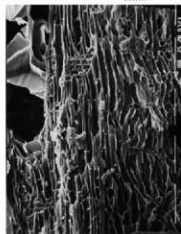
遺構の柱・杭



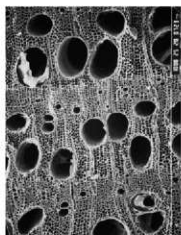
1 コナラ属 木口面 X37



板目面 X80



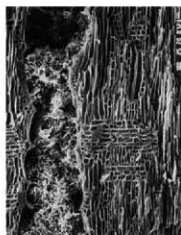
径目面 X100



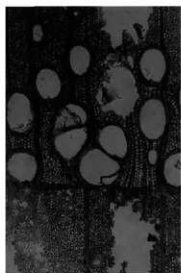
2 トネリコ属 木口面 X37



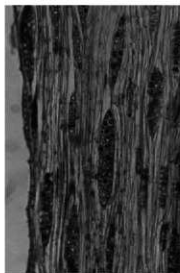
板目面 X100



径目面 X80



3 トネリコ属 木口面 X40

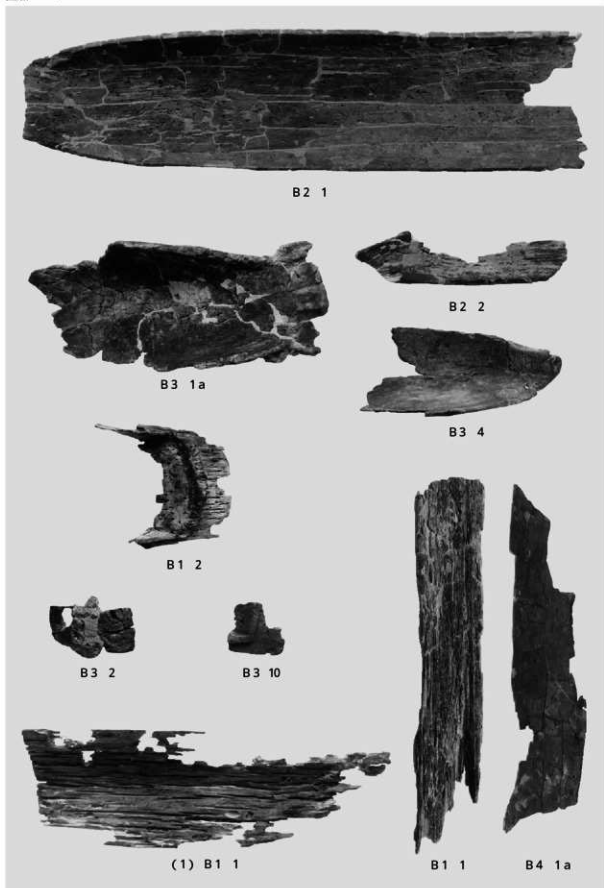


板目面 X100

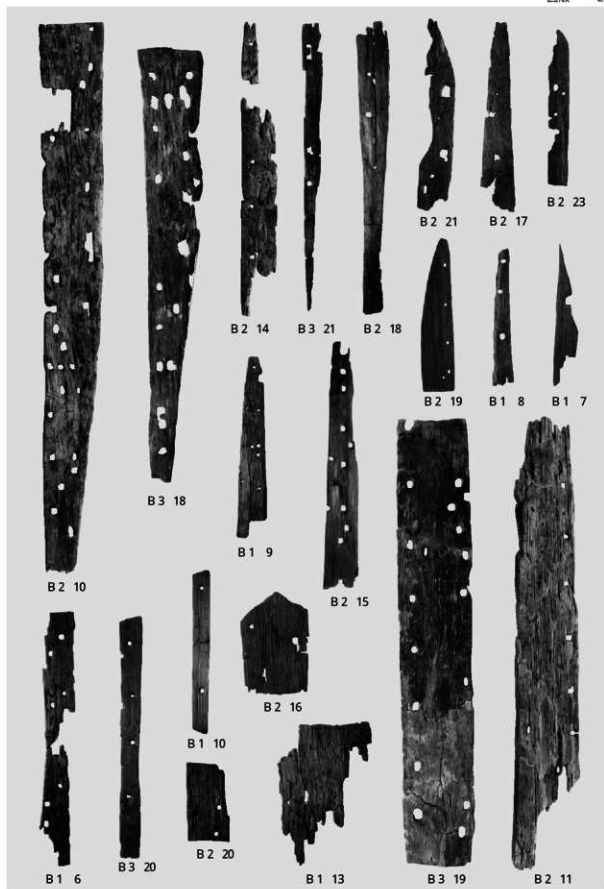


径目面 X100

木製品組織顕微鏡写真

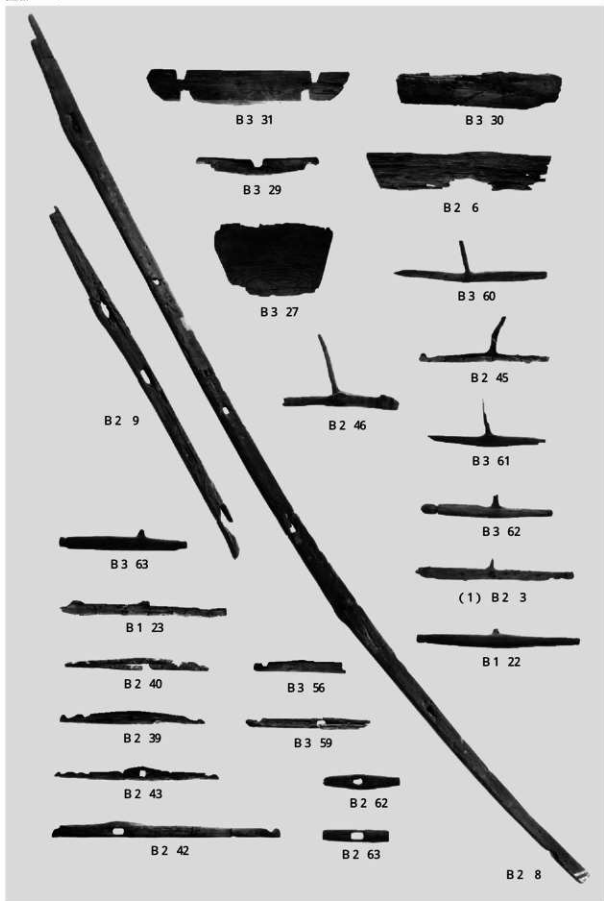


舟散·舟材

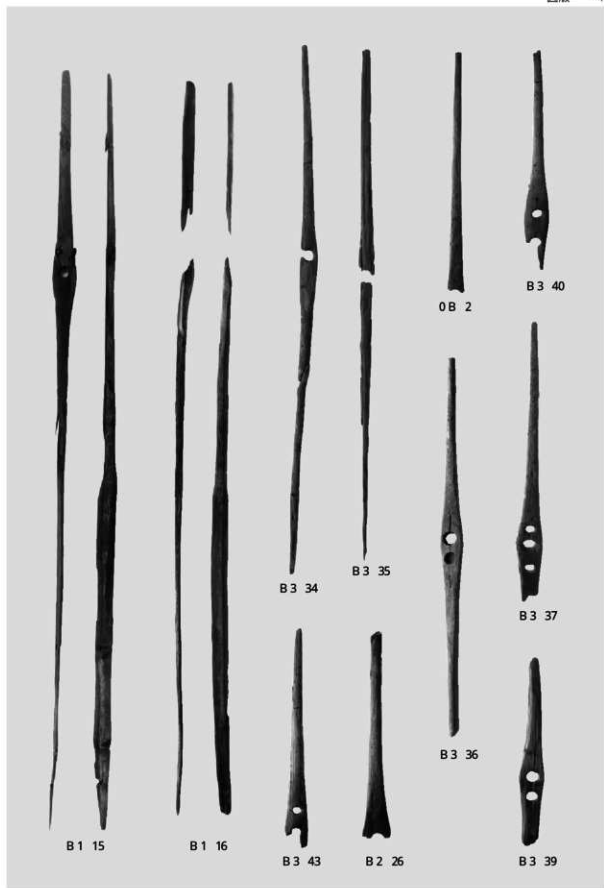


舷側板

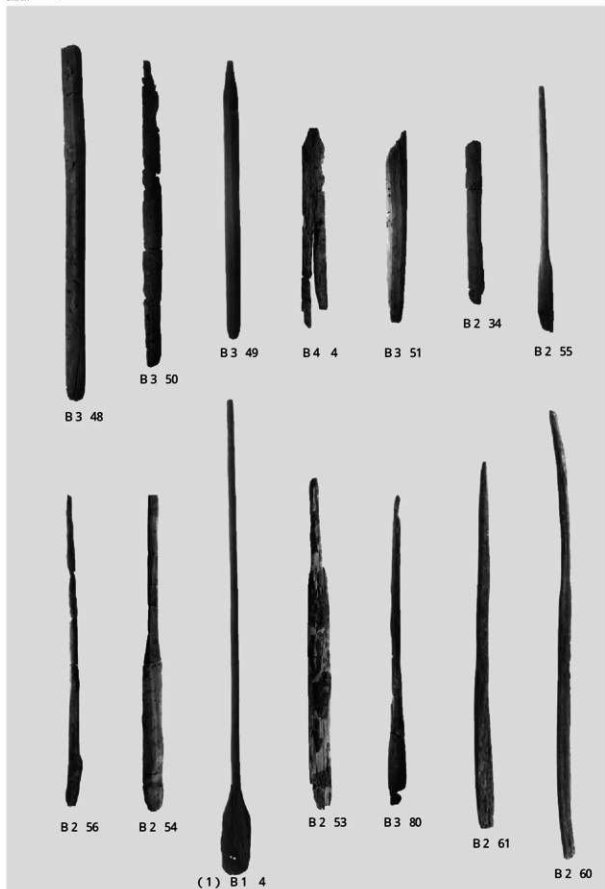




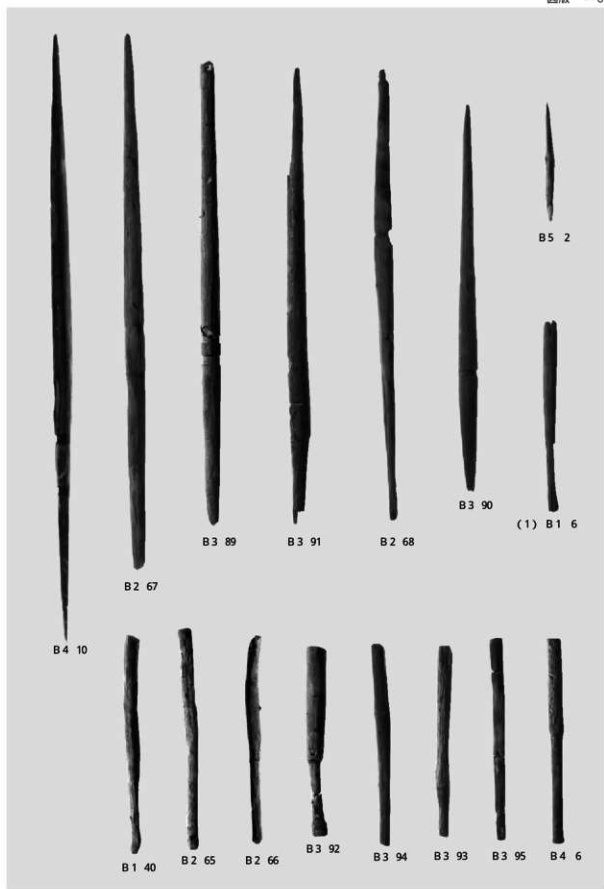
舟部材・車權受台部等



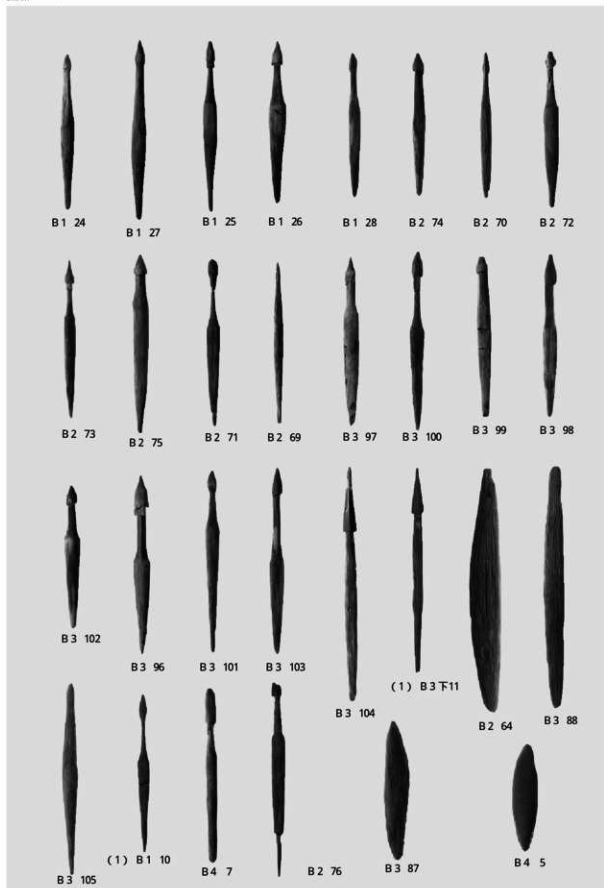
車權 ( 1 )



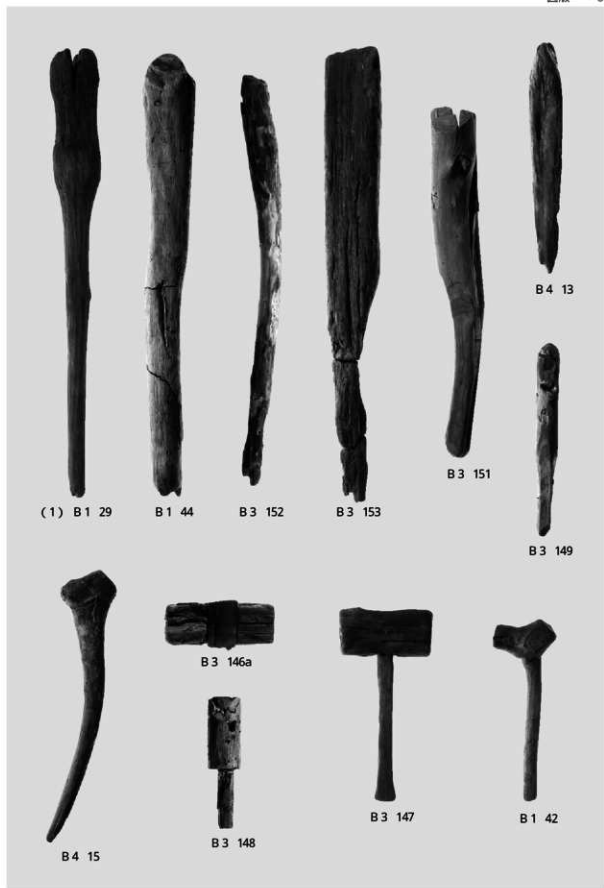
車權 ( 2 ) · 早權



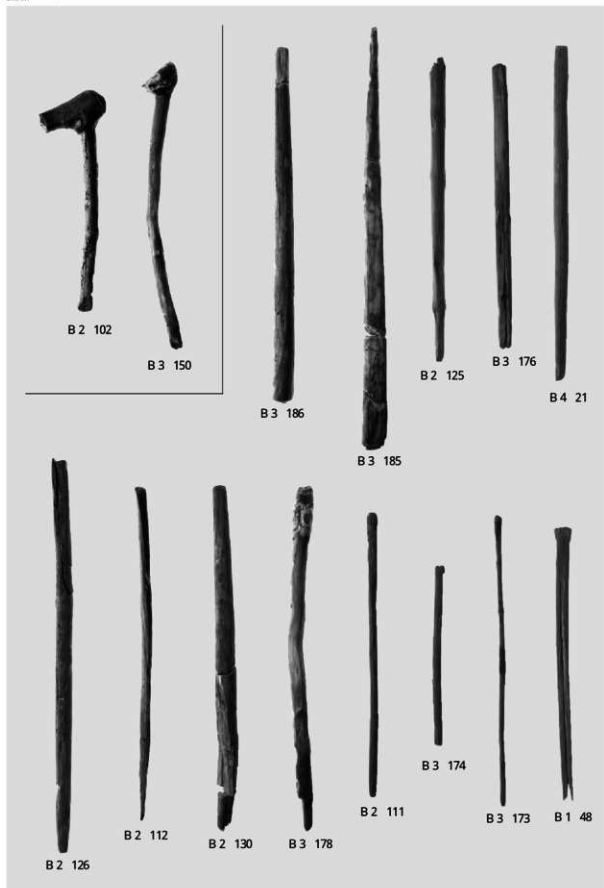
回転式離頭鉆(キテ)中柄・魚叩き棒



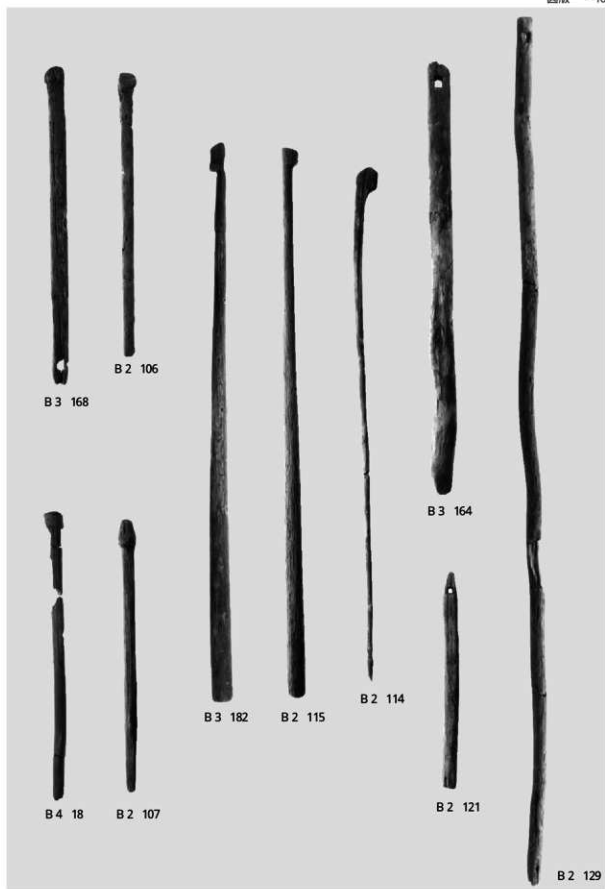
やす・浮子



掛矢・横槌・縦槌

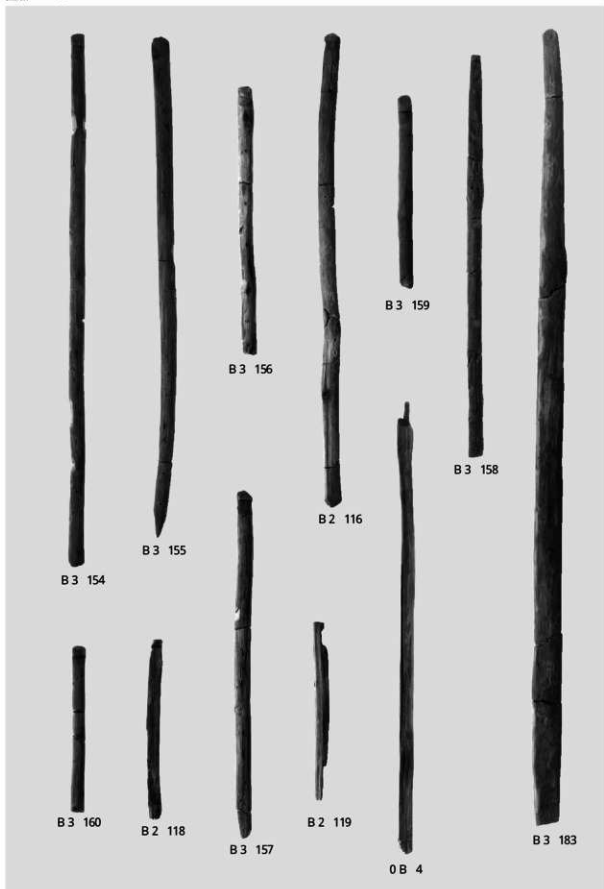


斧柄・柄類 ( 1 )

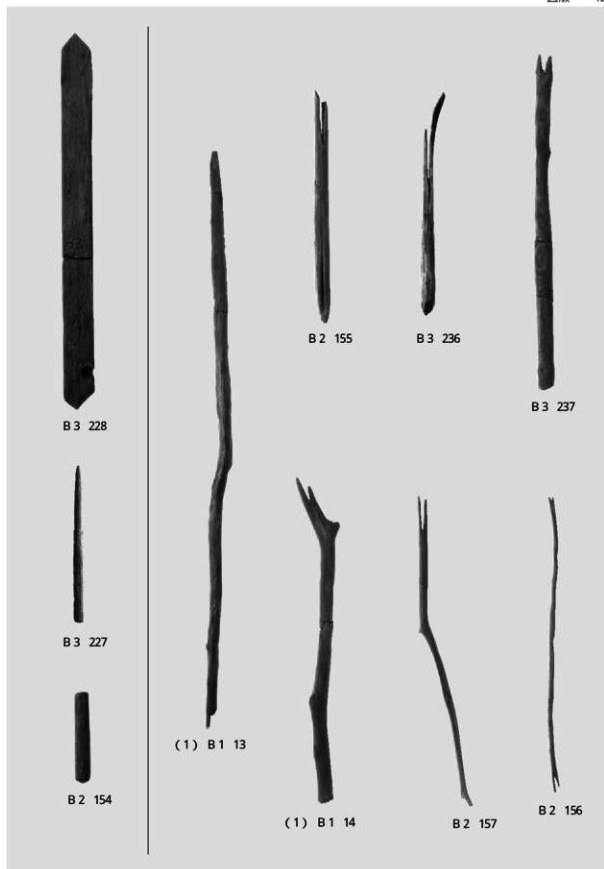


柄類 ( 2 )

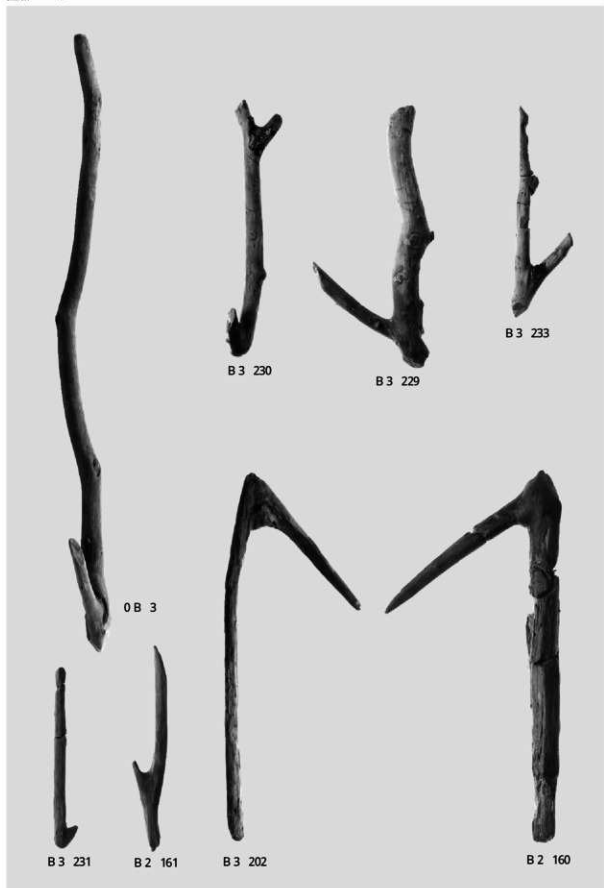




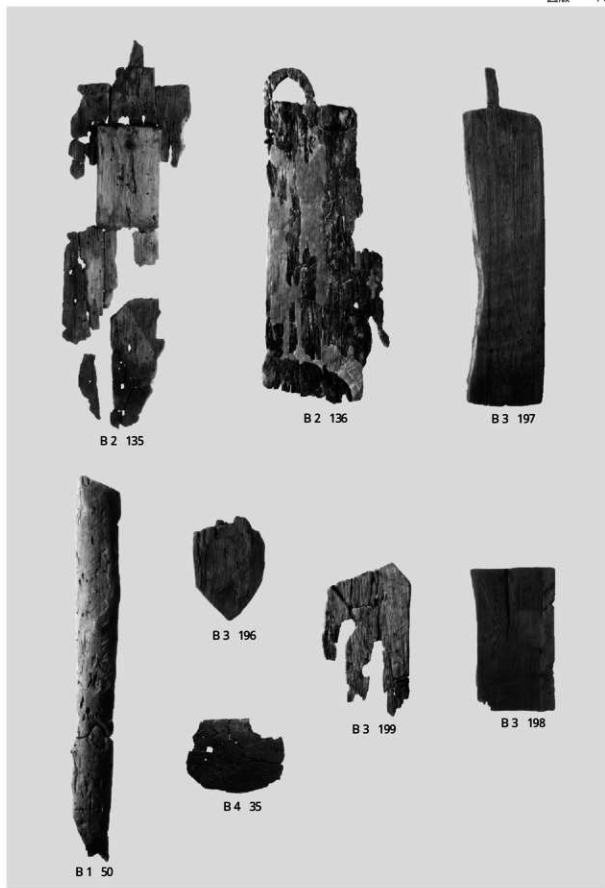
柄類 ( 3 )



発火具・挟み木



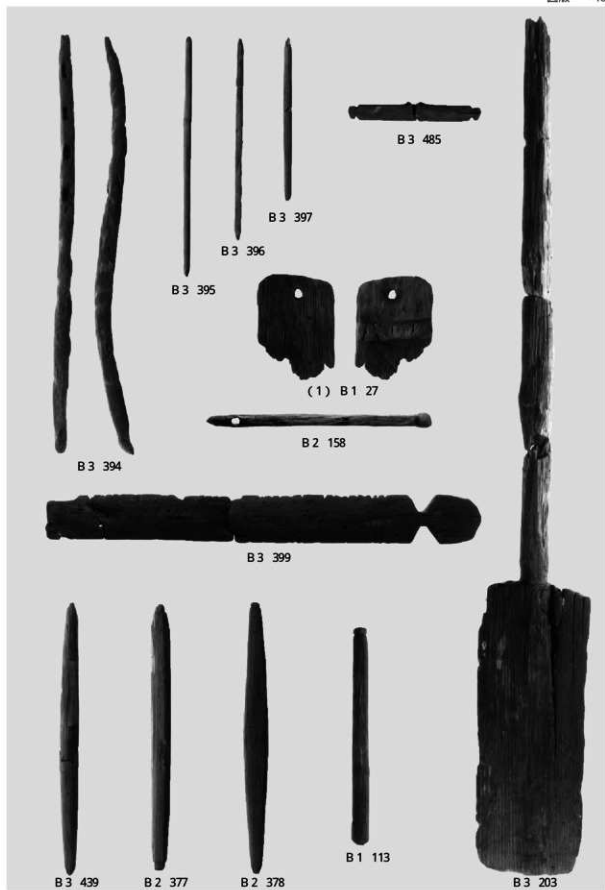
鈎類



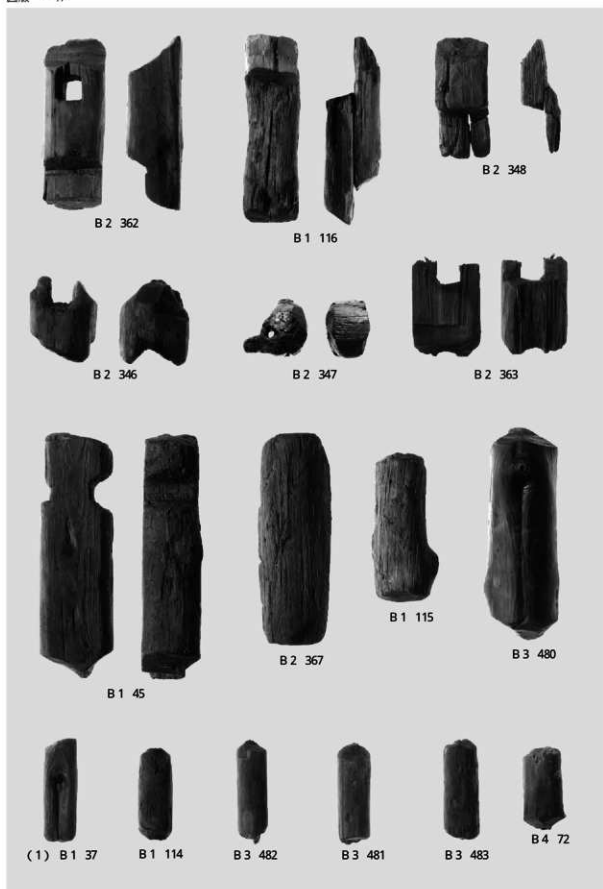
まな板・作業台



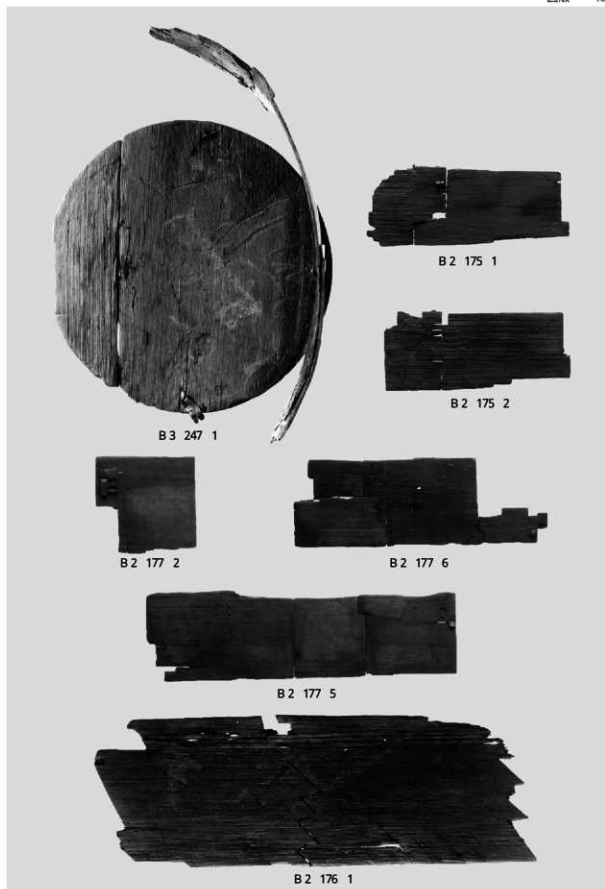
諸道具類



步行具・編具等

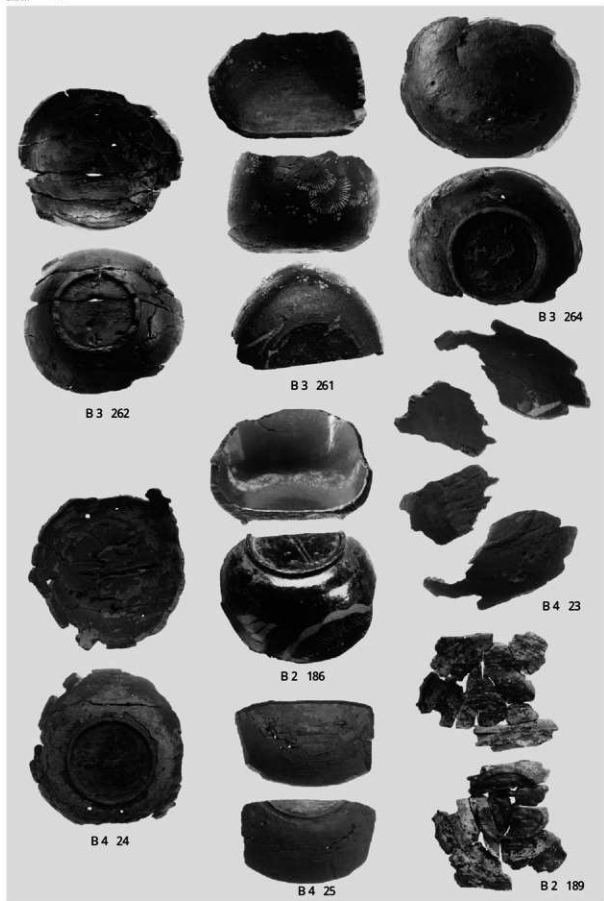


丸木材加工製品等（錘等）

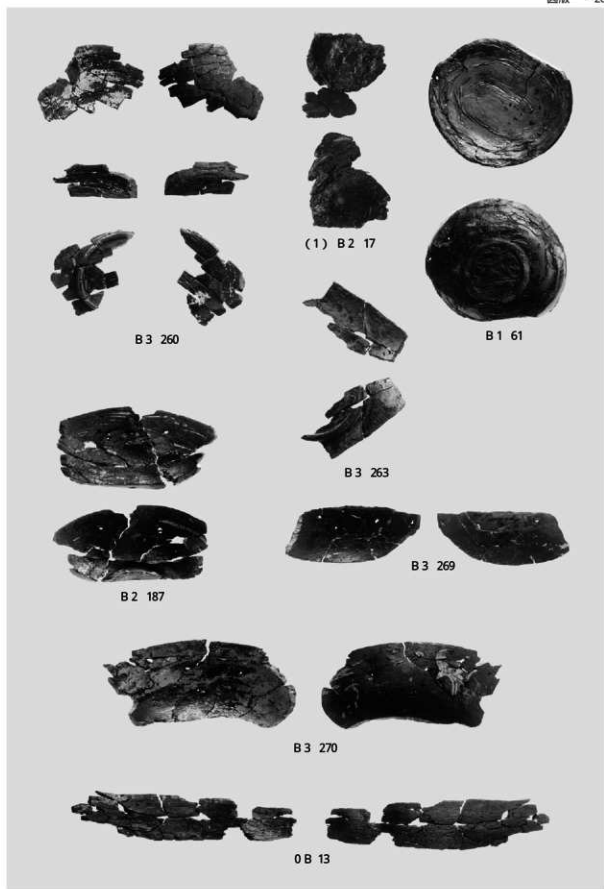


曲物

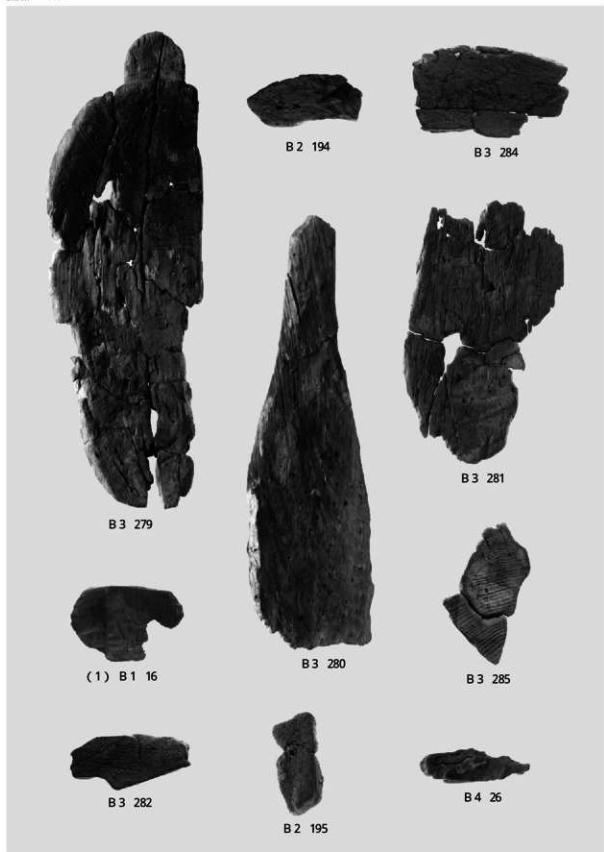




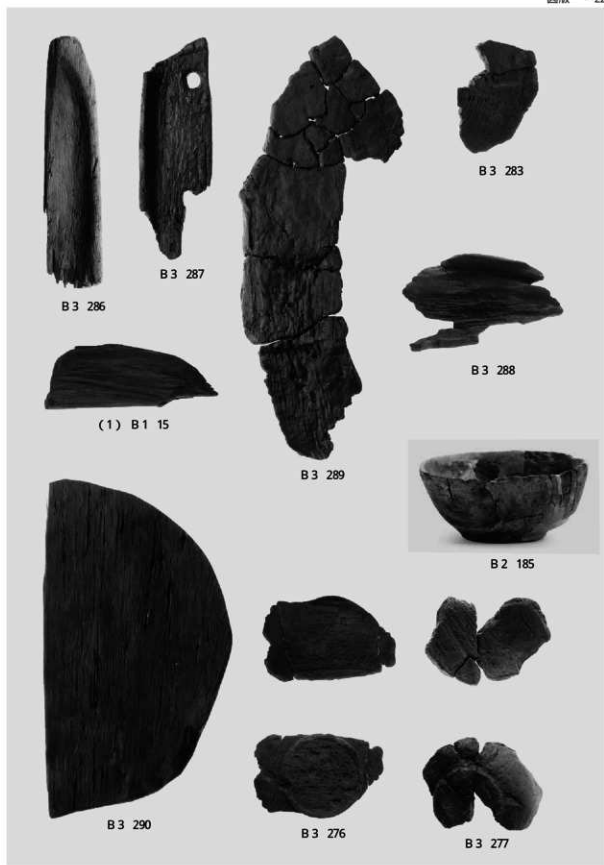
漆塗り椀 ( 1 )



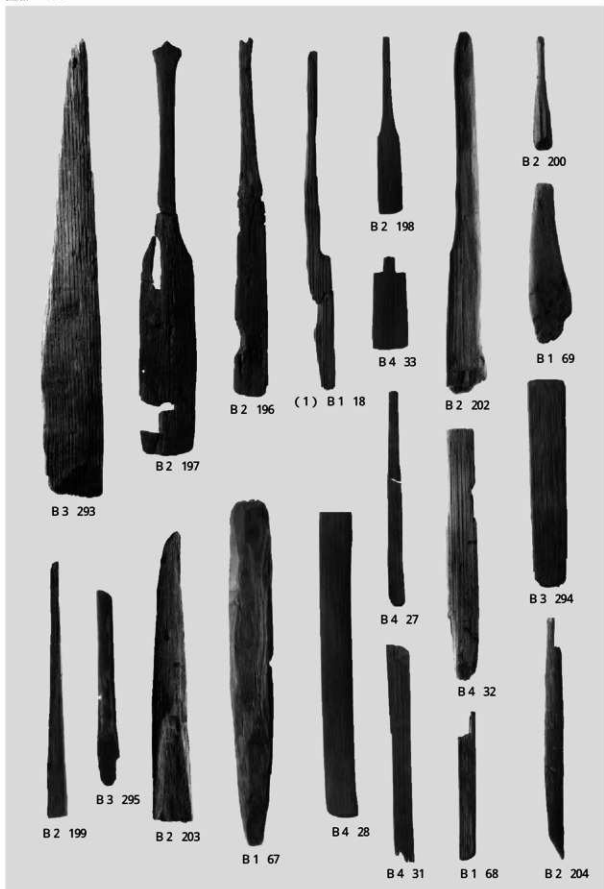
漆塗り椀 ( 2 )



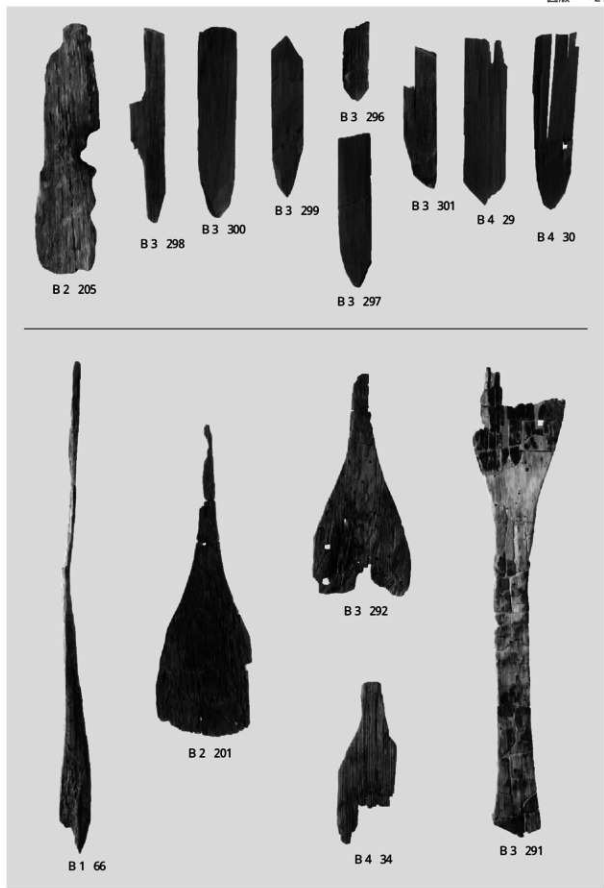
割り鉢 (ニマ)



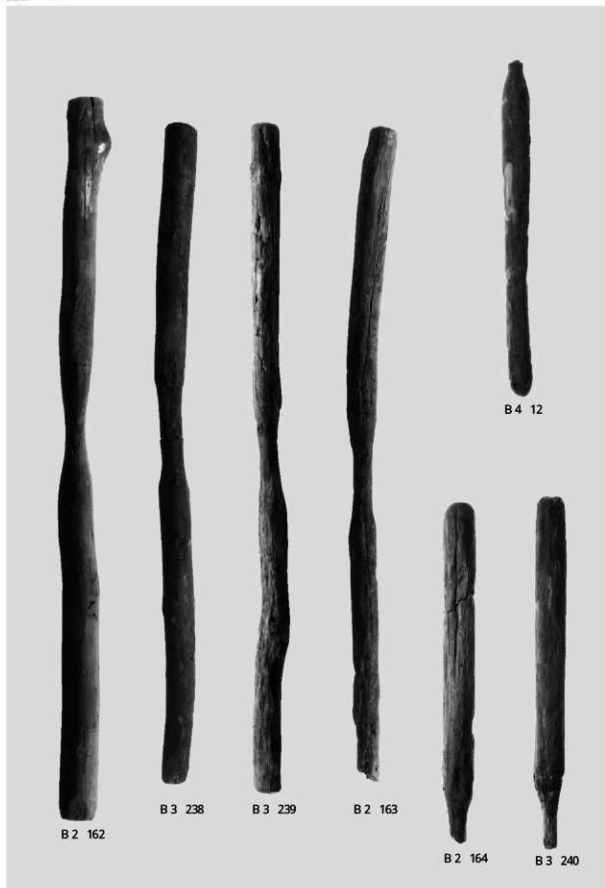
削り物(盆・皿・椀)



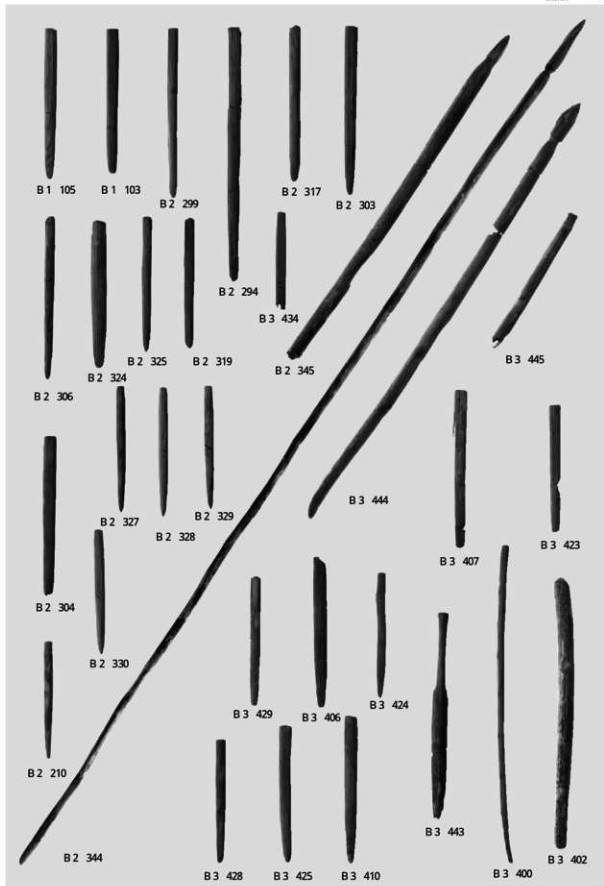
箭類 ( 1 )



笹類 ( 2 ) ・大型笹

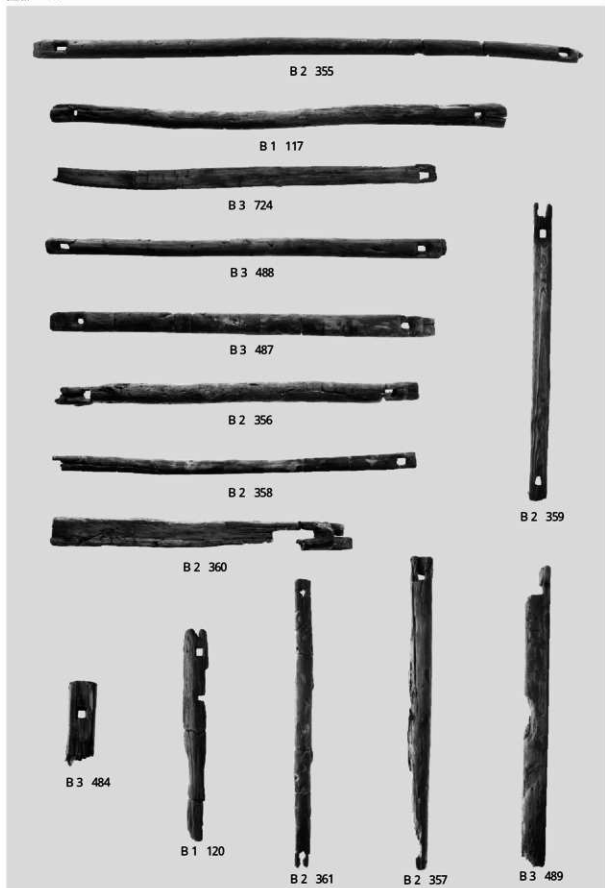


竖杵

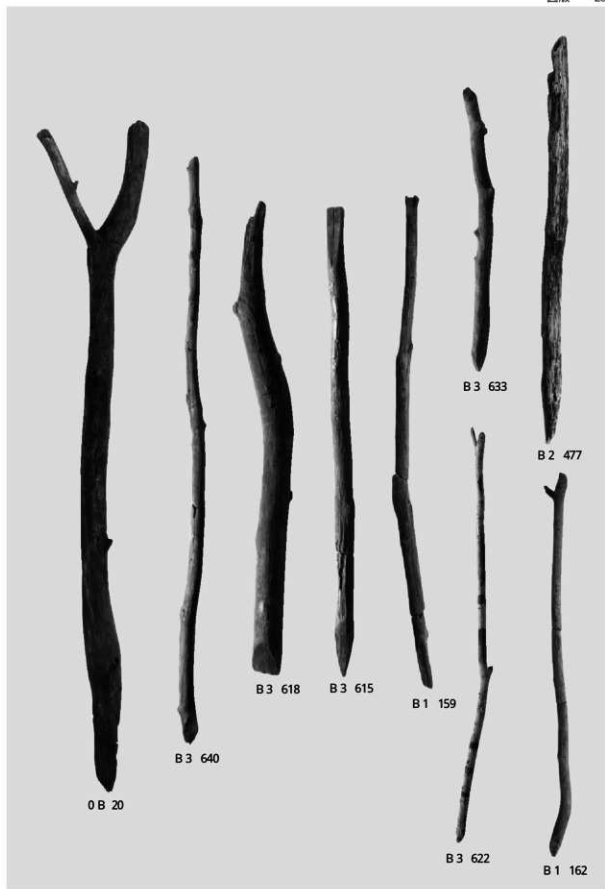


イクバスイ・木幣等

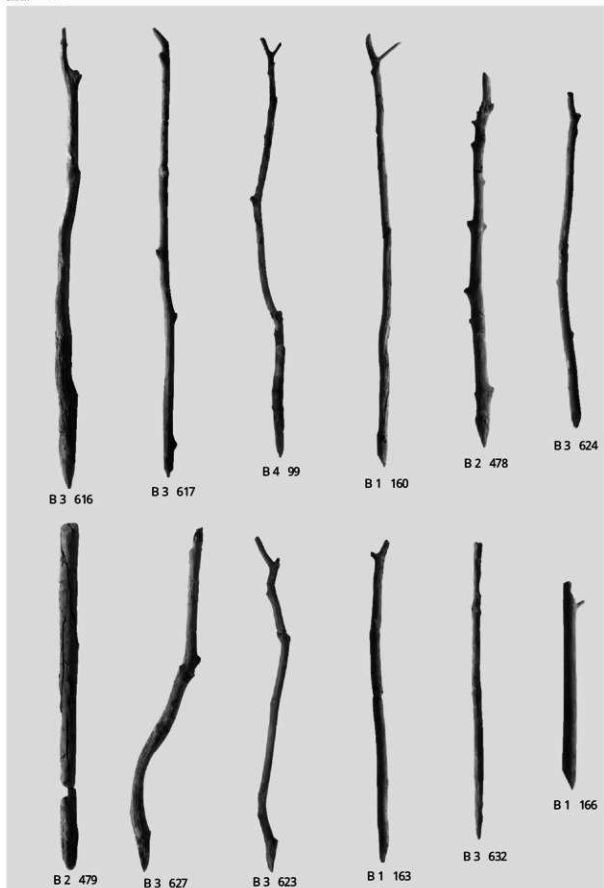




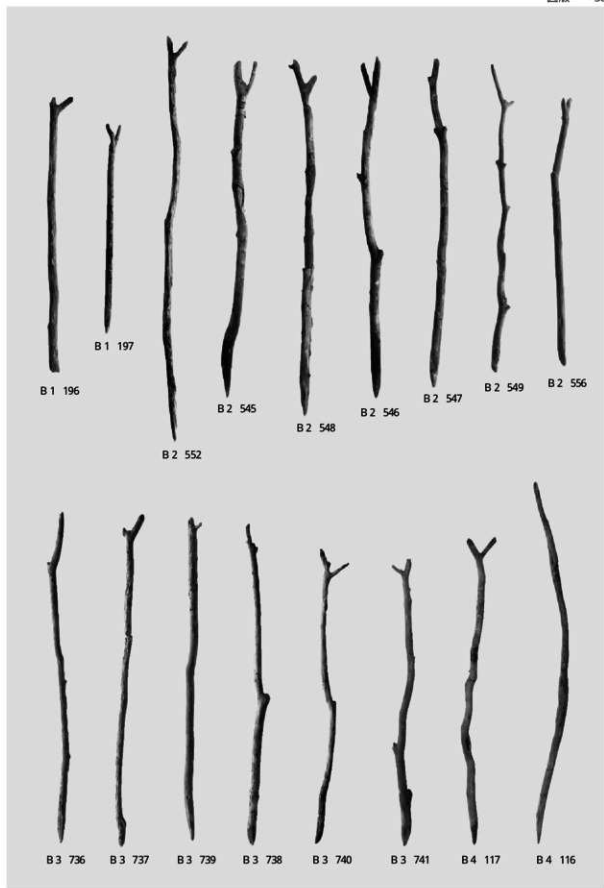
端快付有孔製品類（梓材？）



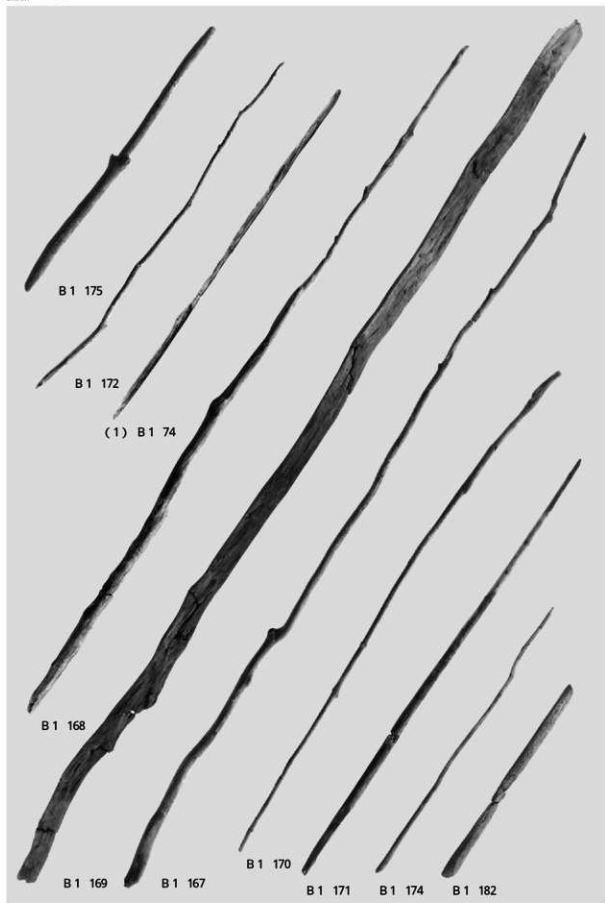
柱(1)



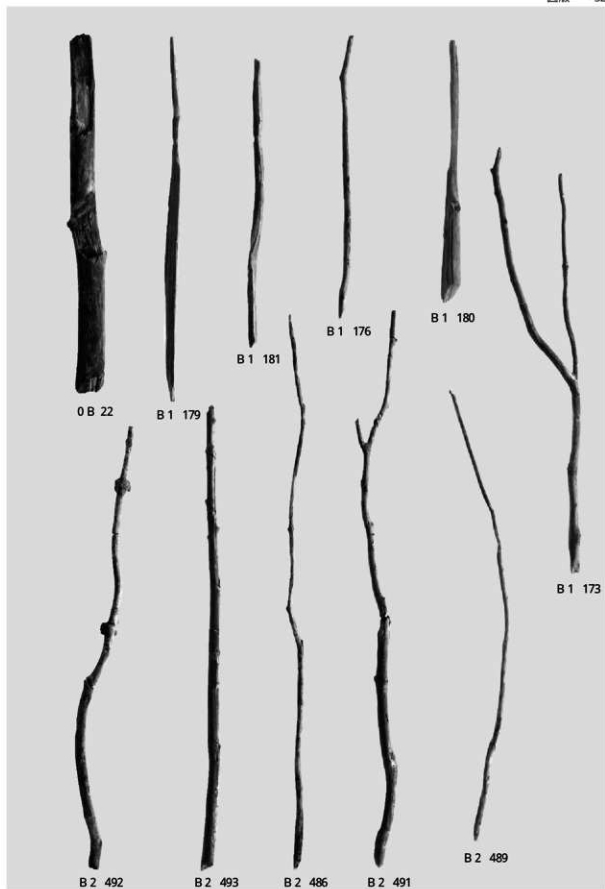
柱 ( 2 )



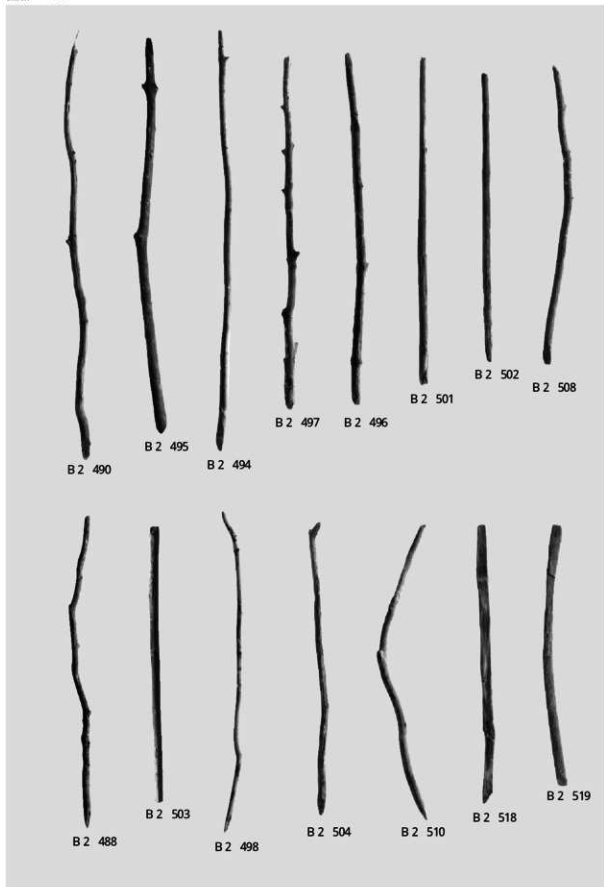
股木杭



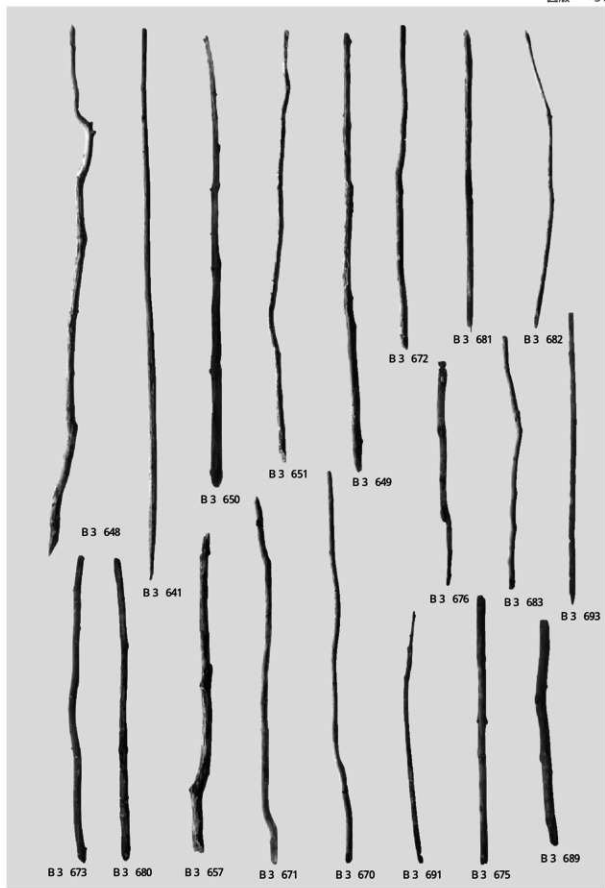
建材 ( 1 )



建材 ( 2 )

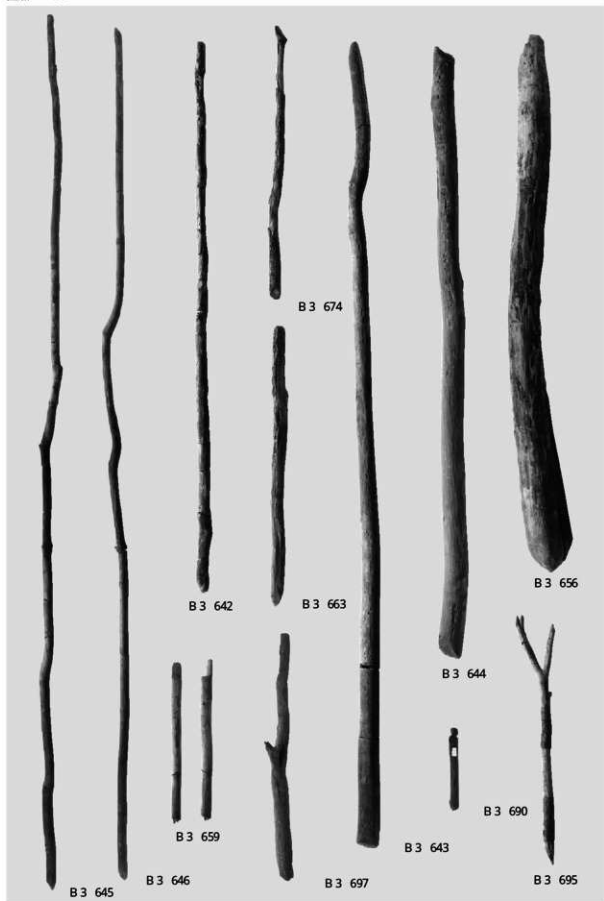


建材 ( 3 )

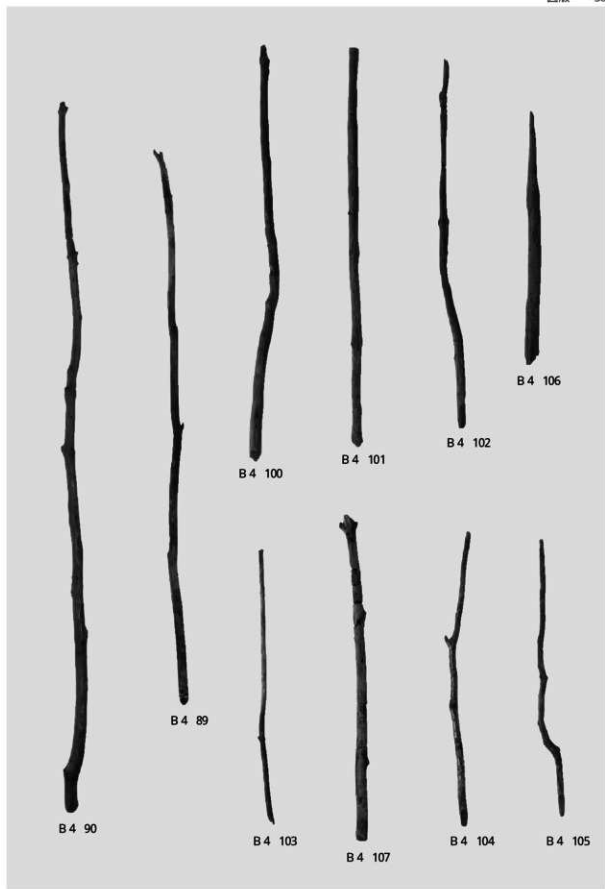


建材 ( 4 )

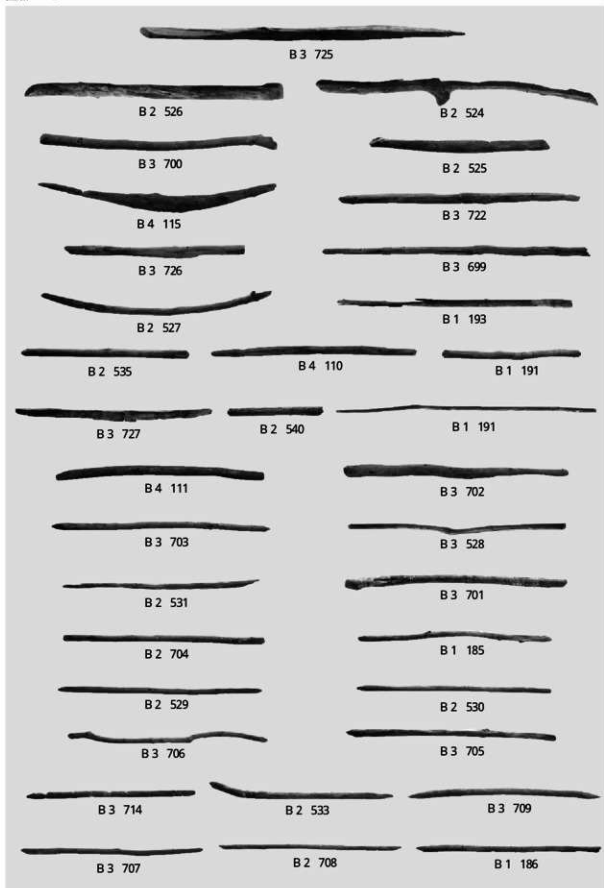




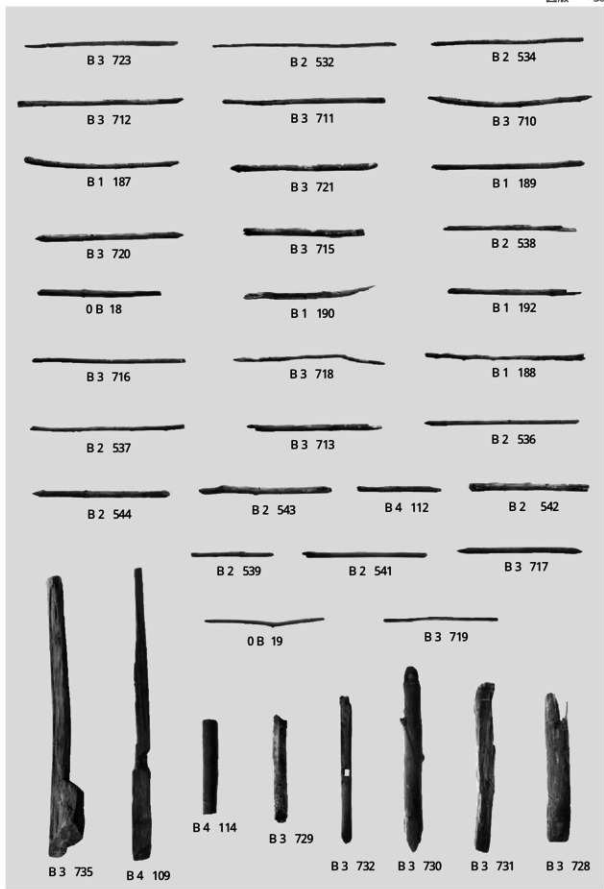
建材 ( 5 )



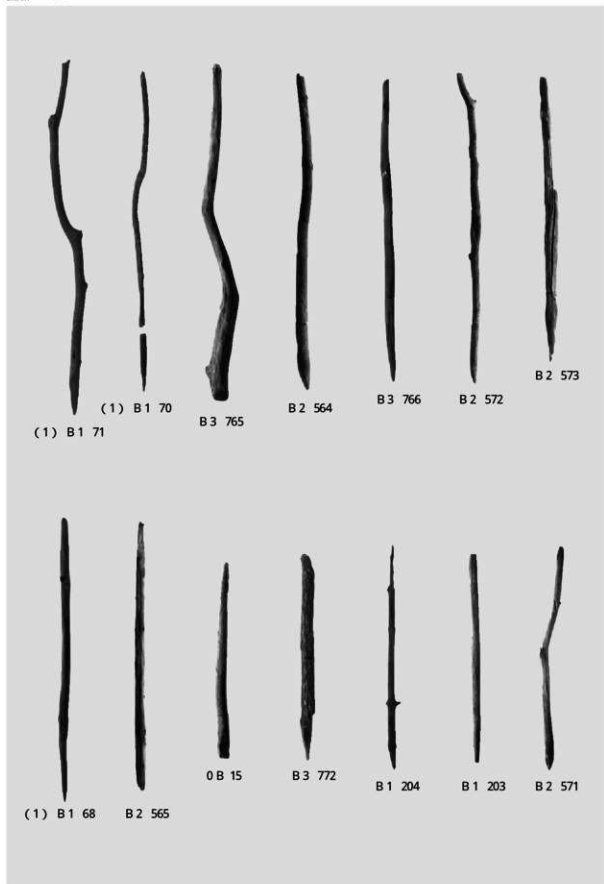
建材 ( 6 )



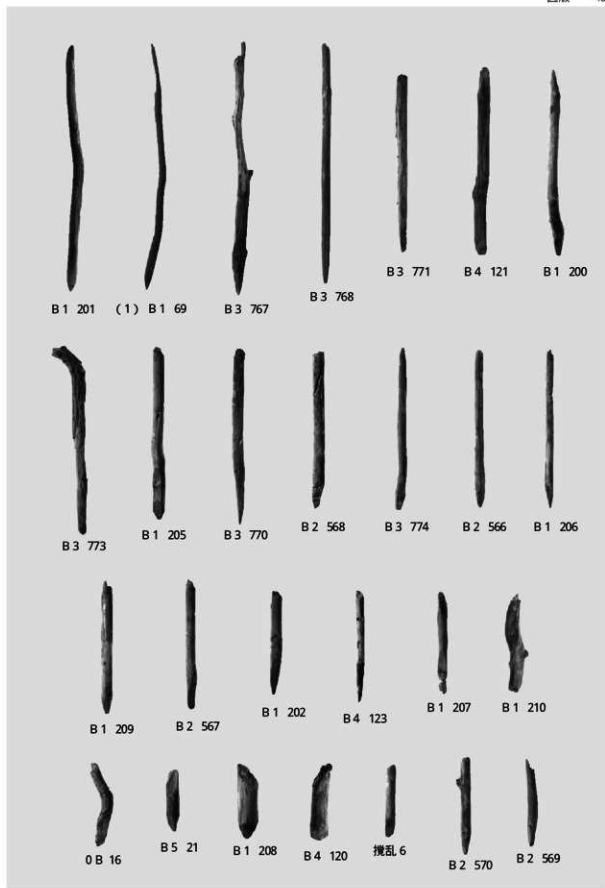
建築部材(1)



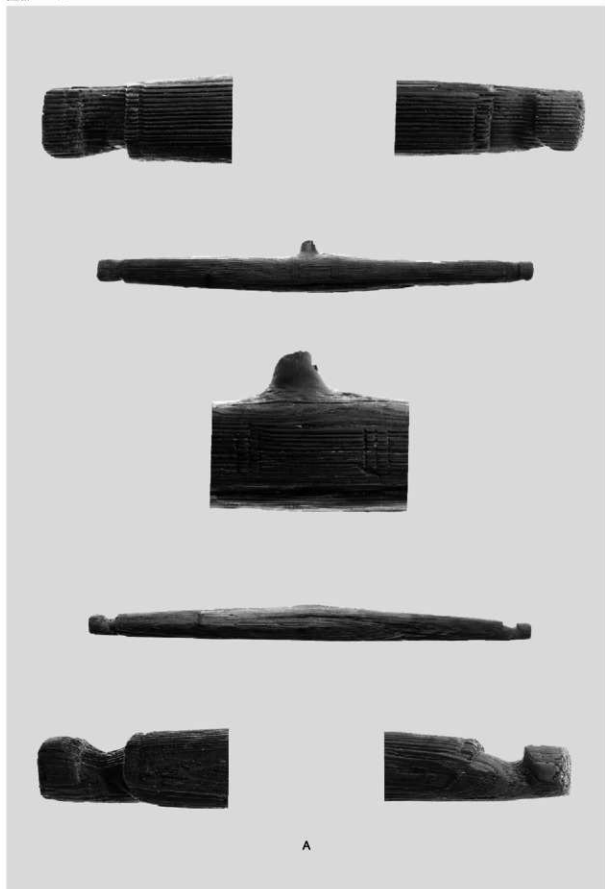
建築部材 ( 2 )



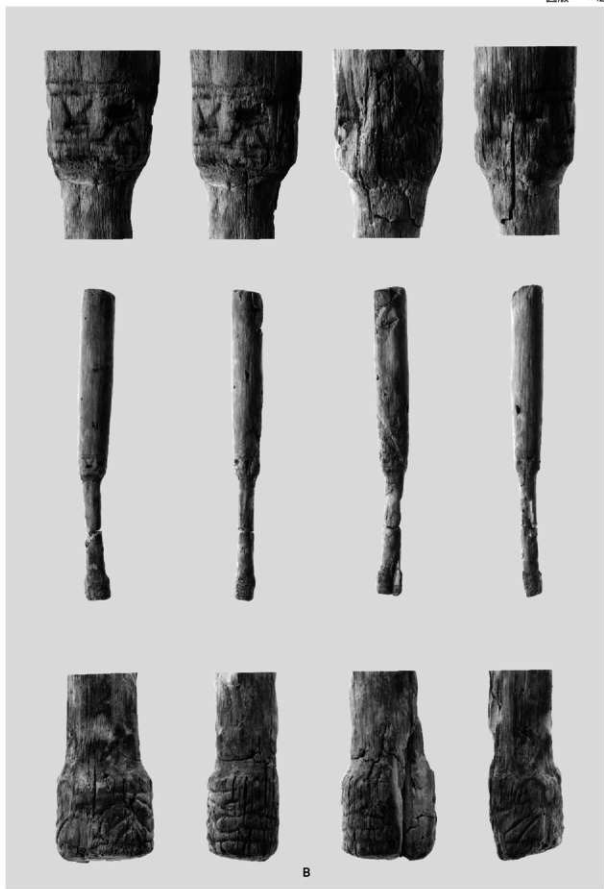
杭 ( 1 )



杭 ( 2 )

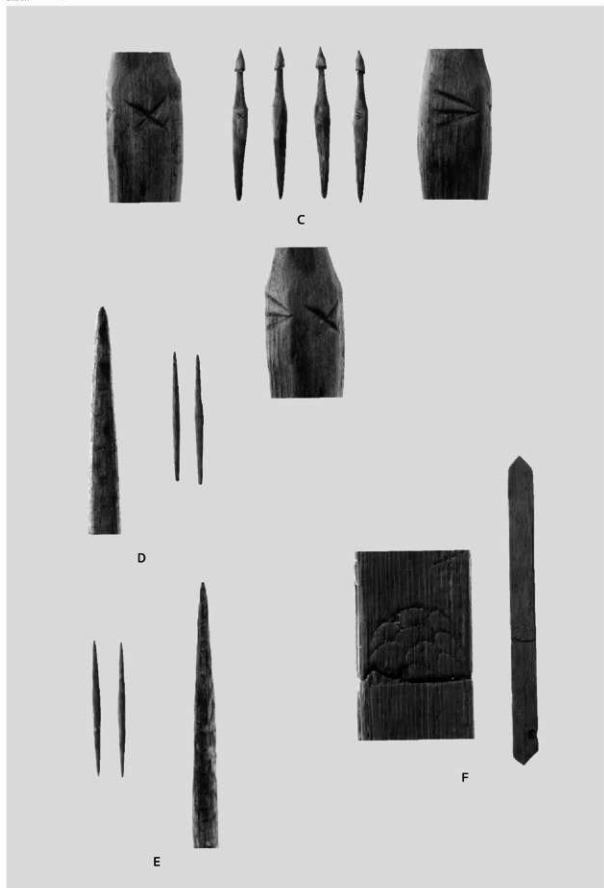


彫り・刻み集成(1)

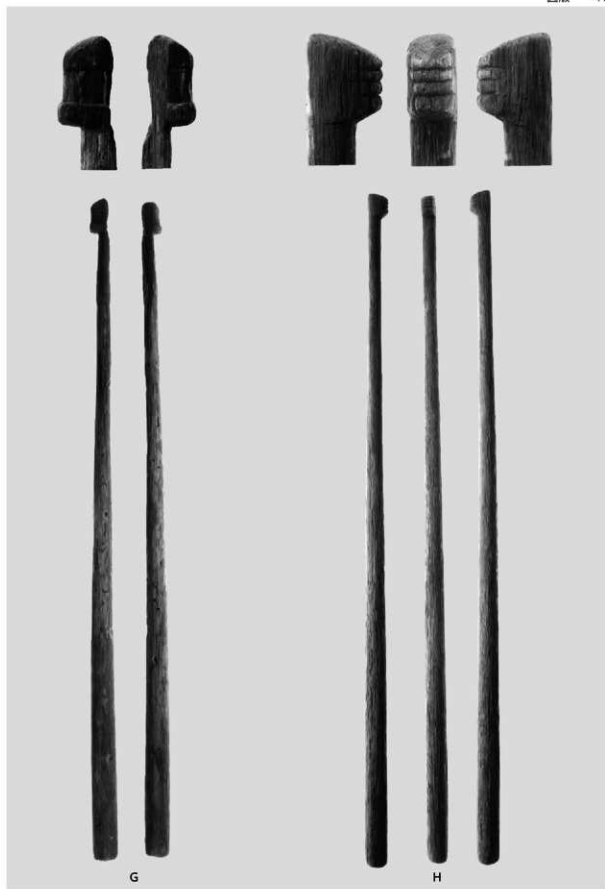


彫り・刻み集成(2)

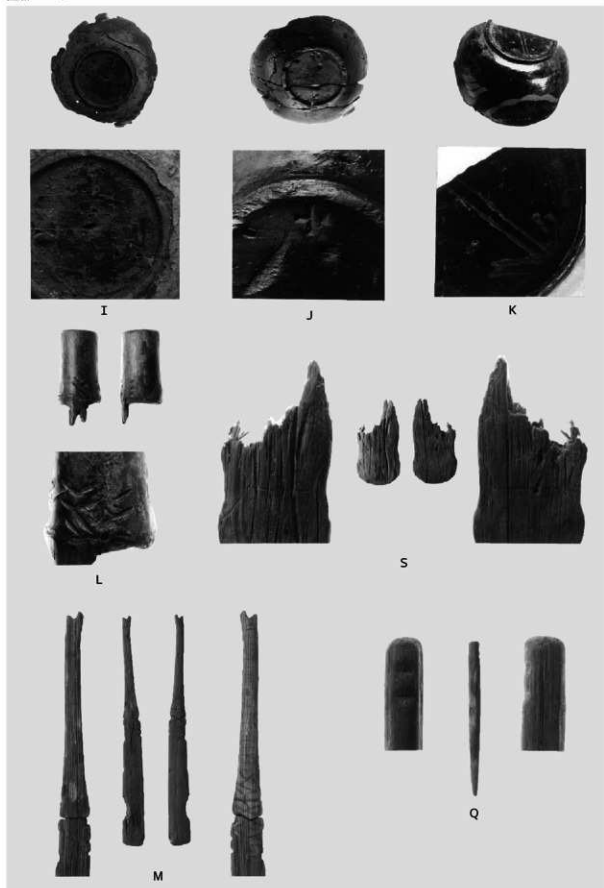




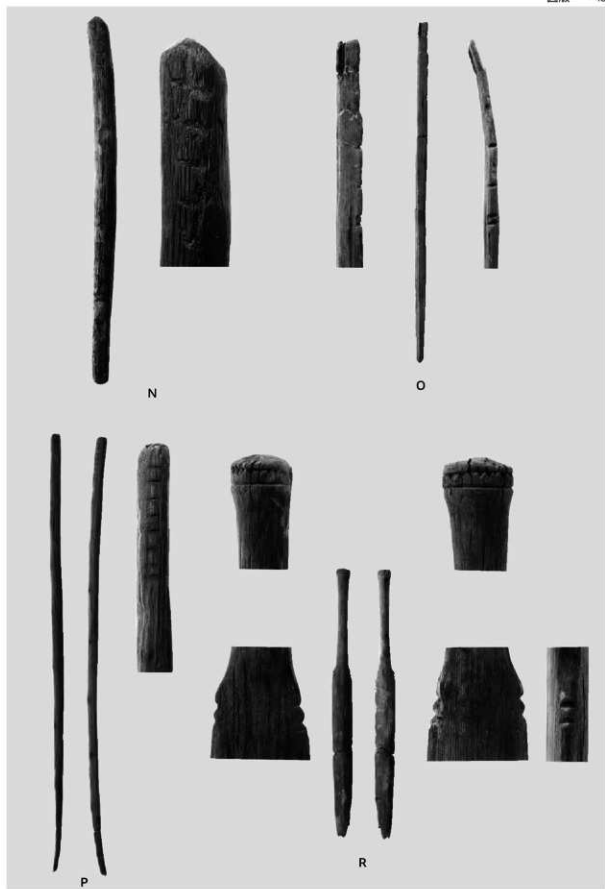
彫り・刻み集成(3)



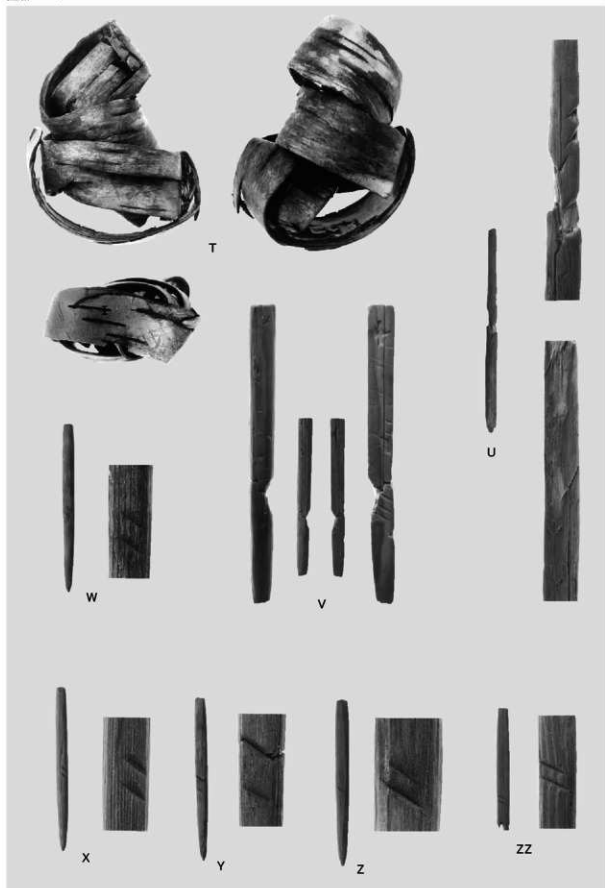
彫り・刻み集成(4)



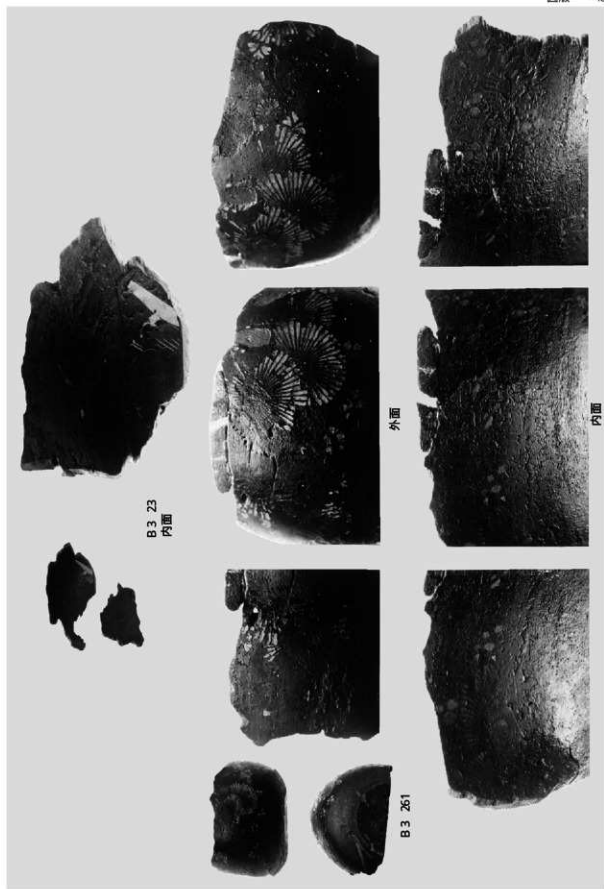
彫り・刻み集成(5)



彫り・刻み集成(6)



彫り・刻み集成(7)



漆塗リ椀紋様集成(1)

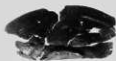


B 3 270  
外面



(1) B 2 17  
外面

B 2 186 外面



外面

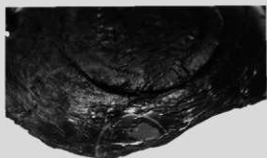
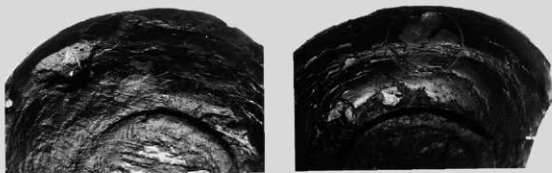


内面

B 2 187



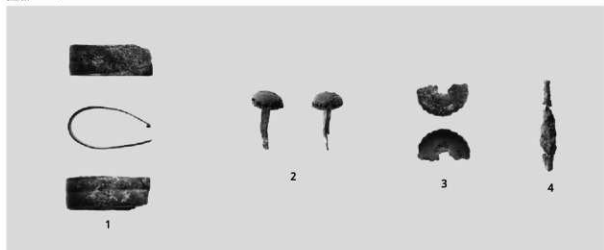
漆塗リ碗紋様集成(2)



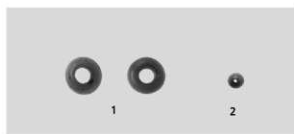
B 1 61  
外面

漆塗の椀紋様集成(3)

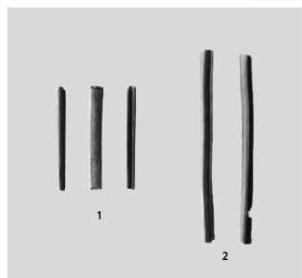




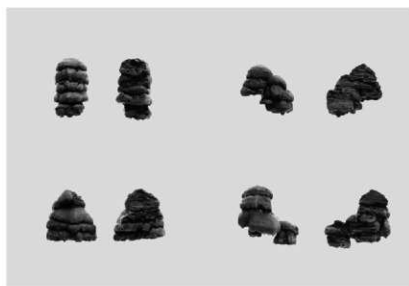
金属製品



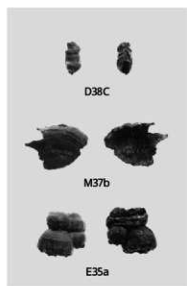
ガラス玉



骨製品

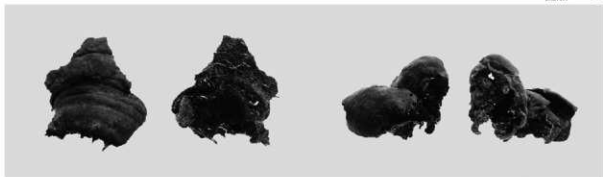


B1 サルノコシカケ (J31C)

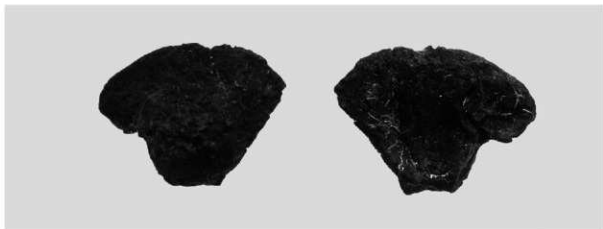


B3 ツリガネタケ

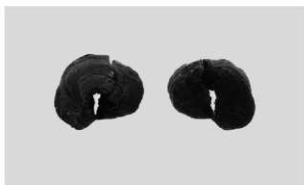
金属、骨製品・ガラス玉とキノコ(1)



B3 コフキタケ (I 26 bc)



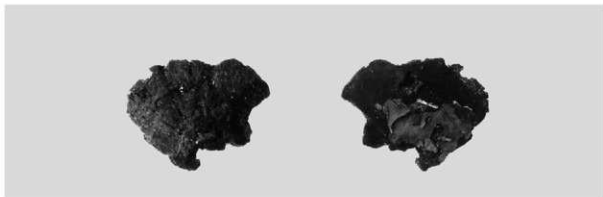
B4 コフキタケ (F32C)



B4 ツリガネタケ (I 28 a)



B5 コフキタケ (I 27 b)



B5 ホウロクタケ (E31a)

キノコ(2)

## VI 自然科学的分析

## 1 ユカンボシC15遺跡から出土した炭化植物種子

札幌国際大学 地域文化研究センター 吉崎昌一  
 札幌国際大学 地域文化研究センター 榎坂恭代

## (1) 遺跡と調査の概要

遺跡の名称：ユカンボシC15遺跡（A-03-263） 遺跡の所在：北海道千歳市長都183-1, 1190-1 ほか  
 調査の機関：財団法人北海道埋蔵文化財センター 調査担当者：鈴木 信ほか

調査期間：平成8年～平成10年

遺跡の立地：JR千歳駅の北方約6kmに位置し、標高は5～9mである。

遺跡の主な年代：縄文時代中期・後期、続縄文文化、擦文文化、アイヌ文化。その他、層準・出土遺構・  
 遺物についての詳細は、既刊のユカンボシC15遺跡(1)・(3)・(4)を参照されたい。

測定年代：検出した資料から、次のような<sup>14</sup>C測定値が得られている。

擦文文化の灰集中2出土のイネ：Beta-112936、暦年代 交点AD1220、2 AD1065～  
 1075、AD1155～1275。これは擦文文化末期の年代を示すものであろう。

また、アイヌ文化期の焼土68出土の初の破片：Beta-112937、暦年代 交点AD1445、2  
 AD1405～1525 AD1560～1630が得られている。

## (2) 扱った資料

この報告で分析資料として扱った炭化種子は、既刊のユカンボシC15遺跡(1)・(3)・(4)で未報告だったものをまとめて扱っている。アイヌ文化期の焼土、炭化物集中、灰集中、送り場などの遺構からと擦文文化の竅穴住居跡、焼土、炭化物集中、灰集中ほか、続縄文時代の焼土からと柱状サンプルからそれぞれ土壌が採取され、フローテーション法で処理された後、得られた炭化遺物から種子などの選別が行われ、送付されてきた。これらの資料について実体顕微鏡で観察ならびに撮影をおこなった。検出された種子の詳細については頁273～278表に示してある。計測値は「長さ/幅/厚さ」で示し単位は「mm」である。

## (3) アイヌ文化期の遺構から検出された種子（アイヌ文化期図版1～7）

イネ *Oryza sativa* L. (図版1-1・2：H-1出土。3a・b、4a・b、5a・b：F10出土。6a・b：  
 F390出土。7a・b、8a・b：F407出土。9a・b、10a・b、11a・b、12a・b：送り場1出土)

H-1の遺構から酸化状態<sub>1</sub>で初の破片が2片出土。焼土、炭化物集中12、送り場1の遺構から総数13粒出土。玄米は長楕円形で腹面の下端に胚がみられる。側面にはやや隆起した縦稜線が各2本ある。資料によっては粒形が狭長や被熱による変形の見られるものなどが混在していた。資料3a、4a、5a、6aの資料は玄米の状態では被熱された状態を示す。

計測値1:6.90/1.20/、2:6.60/2.20/、3a・b:3.80/2.85/2.10、4a・b:4.50/2.80/1.90、5a・b:4.80/2.50/2.20、  
 6a・b:3.80/1.80/0.95、7a・b:3.40/2.70/1.20、8a・b:2.80/1.50/1.10、9a・b:4.80/3.00/2.30、10a・b:5.20/2.60/  
 1.60、11a・b:3.50/2.10/1.70、12a・b:5.40/2.60/2.10

他に焼土68遺構から酸化した状態の初の破片塊が28.78g検出された。図版7に示しておく。

1 ユカンボシC15遺跡から出土した炭化植物種子

イネ科 GRAMINEAE (図版1 - 13a・b: 送り場1出土)

送り場1から2粒出土。果実は狭卵形でやや扁平。資料の保存状態が悪いため詳細な観察ができなかった。形態の特徴からはササ属 *Salsa Makino* et *Shibata* の種子に似る。計測値5.90/2.60/

アワ *Setaria italica* (L.) P. Beauv. (図版2 - 1a・b: 送り場1出土、2a-c: 焼土108出土、3a-c: 焼土384出土)

焼土、炭化物集中11、送り場1の遺構から総数15粒出土。穎果はやや球形。背面には果長の2/3ほどの胚があり、その反対側の腹面には、小さなへら型のヘソがある(椿坂1993)。出土種子のほとんどが内・外穎のとれた穎果の状態で出土しているが、中には図版1a・bに示すような穎の付いた状態(有ふ果)の種子も混在していた。計測値1a・b: 1.60/1.25/1.10、2a-c: 1.55/1.35/1.00、3a-c: 1.30/1.20/0.95

キビ *Panicum miliaceum* L. (図版2 - 4a-c: 焼土108出土、5a-c: 焼土384出土)

焼土遺構から51粒出土。穎果はやや球形または広卵形。背面には果長の1/2ほどの胚があり、反対側の腹面にはへら型状のヘソがある(椿坂1993)。検出された資料は、すべて穎果(内・外穎のとれた状態)で出土している。計測値4a-c: 2.30/1.80/1.40、5a-c: 2.00/1.35/1.25

ヒエ属 *Echinochloa* Beauv. (図版2 - 6a-c、10a-c: 焼土108出土、7a-c: 焼土384出土、8a-c、9a-c、11a-c: 送り場1出土)

焼土、炭化物集中、送り場1、H-36の遺構から総数163粒出土。穎果は広楕円形。背面には果長の2/3ほどを占める楕円形の大きな胚がある。その反対側の腹面にはへら型状のヘソがある(椿坂1993)。ほとんどの穎果の胴部はふくらみ、粒形が大きくなる。つまり栽培型のヒエ *Echinochloa utilis* Ohwi et *Yabuno* の形態をもつ。出土資料のほとんどが穎果(内・外穎のとれた状態)で出土しているが、中には図版2 - 6a・7aに示した内・外穎の付いた(有ふ果)状態のもの、11aに示した小粒のものも混在していた。これらの中から比較的状态の良い資料を計測し頁273の表に示した。

計測値6a・b: 2.70/1.75/、7a-c: 2.25/1.55/1.10、8a-c: 1.90/1.60/1.00、9a-c: 1.90/1.70/1.00、10a-c: 1.60/1.30/0.85、11a-c: 1.25/1.00/0.65

アサ *Cannabis sativa* L. (図版3 - 1a・b: 送り場1出土)

送り場1から8粒、破片21片出土。すべて酸化した状態である。種子は広楕円形。腹面に縦に2条の稜角がある。種皮の表面は平滑である。計測値3.30/2.60/2.10

タデ科 POLYGONACEAE (図版3 - 2・3: 送り場1出土)

タデ科1: 焼土、炭化物集中12、送り場1、鍛冶遺構1の遺構から総数61粒出土。瘦果は三角状紡錘形で稜は鋭ギシギシ属 *Rumex* L. の特徴を示す。タデ科種子は形態の類似した種類が多いため、詳細な分類は困難である。計測値2.30/1.35/

タデ科3: 焼土、炭化物集中12、送り場1、鍛冶遺構1から総数29粒と35片出土。瘦果は球形で突頭、ヘソ部分が突出し種子の表面は光沢である。このような形態の特徴からイシミカワ *Polygonum perfoliatum* L. の形態を示す。同じような形態でママコノシリヌグイ *Polygonum senticosum* (Meisner) Franch. がある。瘦果はふくれた三角形で突頭。種皮表面に微細な皺がある。以上のような違いからイシミカワ *Polygonum perfoliatum* L. と判断される。計測値2.90/2.25/

アカザ属 *Chenopodium* L. (図版 3 - 4 : 焼土384出土)

焼土、炭化物集中10・12、H - 1の遺構からすべて酸化した状態で総数168出土。種子は扁平球形。側面には嘴状に突出したヘソがある(写真資料の左側上部)。これまで扱った各時期の遺跡から検出されたアカザ属種子には、炭化されないで検出される場合が非常に多い。このような状況は、アカザ属種子の構造上発達するクチクラ層の関係で種皮の部分だけが残存するようである。計測値1.20/1.15/0.60

ナス属 *Solanum* L. (図版 3 - 5 : 焼土384出土)

焼土遺構から総数28粒出土。種子は扁平倒卵形で種子の全面に網状の隆起線がある。これらの特徴からイヌホオズキ *Solanum nigrum* L. に分類される。計測値1.65/1.20/0.50

ケシ科 PAPAVERACEAE (図版 2 - 6a・b : 炭化物集中8出土)

焼土、送り場1遺構から総数14粒出土。種子は狭倒卵形で基部のほうに細くなる。腹面は内側に湾曲する。種皮表面には網目模様があり、ケシ属 *Papaver* L. の特徴を示すが、形態と表面模様の類似したものが多く、詳細な分類は困難である。計測値1.90/1.00/1.00

ナデシコ科 CARYOPHYLLACEAE (図版 3 - 7 : 焼土407出土)

焼土407遺構からすべて酸化した状態で総数113粒出土。種子はほぼ円形で、資料の左側に少しくぼんでヘソがある。種子表面にはいぼ状の突起が観察される。ナデシコ科種子は形態と表面模様の類似したものが多く、詳細な分類は困難である。計測値1.00/0.90/0.40

クサノオウ属 *Chelidonium* L. (図版 3 - 8 : 焼土107出土)

焼土107遺構からすべて酸化した状態で9粒出土。種子は腎臓形で少し湾曲している。種子の表面には網目状の模様がある。これらの特徴からクサノオウ *Chelidonium majus* Linn. と判断される。計測値1.20/0.70/

ホタルイ属 *Scirpus* L. (図版 3 - 9 : 焼土109出土)

焼土、炭化物集中、送り場1の総数109粒出土。種子は扁平倒卵形で果皮は平滑。形態の特徴からはフトイ *Scirpus tabernaemontani* Gmel.、サンカクイ *Scirpus triquetus* L. の形態に似る。ホタルイ属の種子は類似する形態が多く詳細な分類は困難である。計測値1.80/1.10/0.65

メヒシバ属 *Digitaria* Haller (図版 3 - 10a・b : 焼土384出土)

焼土384から炭化種子2粒と酸化種子4片出土。穎果はやや扁平な長卵形。背面はやや隆起し、果の約1/3長の胚がある。腹面は平で基部にやや円形のヘソがある。しかし、メヒシバ属には形態の類似する種子が多く、詳細な分類は困難である。計測値1.85/0.70/0.25

エノコログサ属 *Setaria* Beauv. (図版 3 11a・b : 焼土384出土)

焼土384から纏まって酸化した状態で20粒出土。種子はずれも有ふ果の状態で出土。有ふ果は卵形で鈍頭。外穎側は革質で円みがあり、その表面全体に乳頭状の突起がある。内穎は革質で平である。その表面全体に乳頭状の突起がある。これらの特徴からエノコログサ *Setaria viridis* P. Beauv. と判断される。計測値2.25/1.20/0.80

1 ユカンボシC15遺跡から出土した炭化植物種子

クワ属 *Morus* L. (図版3 - 12: 送り場1出土)

焼土391、炭化物集中12、送り場1の遺構から酸化種子1粒と炭化種子7粒が混在して出土。種子は広倒卵状3角形で種皮の表面は滑らかである。これらの特徴からヤマグワ *Morus bombycis* Koidz. と判断される。計測値2.00/1.30/

キイチゴ属 *Rubus* L. (図版3 - 13: 焼土21出土)

焼土21から酸化した状態で1粒出土。種子は半横広卵形。種子の全面に大きな網状の凹凸がある。しかし、キイチゴ属種子は形態と種子表面の構造の類似したものが多くので種までの分類は困難である。計測値2.70/1.60/1.20

マタタビ属 *Actinidia* Lindl. (図版3 - 14: 焼土390出土)

焼土、炭化物集中、送り場1・2、H-1、H-36の遺構から酸化種子169粒と炭化種子2粒が混在して出土。種子は長楕円形。種皮には凹点による網目模様がある。この仲間にはマタタビ *Actinidia polygama* Planch. et Maxim. とサルナシ *Actinidia arguta* Planch. があるが、両者の種子は形態と表面組織がきわめて良く似ている。しかし粒形の特徴からはサルナシ *Actinidia arguta* Planch. と判断される。計測値2.10/1.40/0.70

タラノキ属 *Aralia* L. (図版3 - 15: 焼土390出土)

焼土、炭化物集中、送り場1・2の遺構から炭化種子1粒と酸化種子392粒と9片が混在して出土。種子は半円形。種子の左側には二本の縦溝があり、種皮は凹凸で粗面である。粒形と大きさからタラノキ *Aralia elata* (Miq.) Seemann と判断される。計測値2.25/1.35/0.65

ニワトコ属 *Sambucus* L. (図版3 - 16a・b: 焼土390出土)

焼土、炭化物集中、送り場1・2、灰集中1から炭化種子が7粒と酸化種子2183粒と333片混在して出土。種子は狭楕円形。背面は円みがあり、腹面は鈍稜をなす。種皮は皺状に隆起した模様があり粗面である。これらの特徴からニワトコ *Sambucus racemosa* L. と判断される。計測値1.95/1.40/0.60

ウルシ属 *Rhus* L. (図版3 - 17: 送り場1出土)

送り場1の遺構から1粒出土。種子は歪んだ扁円形でやや扁平。北海道ではこれらと同じ形態を持つ種子としてヤマウルシ *Rhus trichocarpa* Miq. ツタウルシ *Rhus ambigua* Lavallee ex Dippel, ヌルデ *Rhus javanica* L. があるが、出土数が1粒であるが種子の形態の特徴からはヤマウルシ *Rhus trichocarpa* Miq. と判断される。計測値2.80/4.00/2.10

ブドウ科 VITIDACEAE (図版3 - 18a・b: 焼土108出土)

焼土、炭化物集中、送り場1・2、H-36、鍛冶遺構1、AP-2の遺構から酸化種子と炭化種子が混在して総数64粒と310片出土。堅果は広倒卵形、背面は円みがあり、倒へら形の凹みがある。腹面の中央に稜をなす。稜の両側に針形の凹みがある。形態の類似した種子にエビヅル *Vitis ficifolia* Bunge var. *lobata* があるが、その分布域は北海道の南部に限られているという。したがって、形態の特徴からヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat と判断される。計測値4.10/2.90/1.40

ミズキ属 *Cornus* L. (図版 3 - 19a・b : AP - 2 出土)

送り場 1、AP - 2 から 1 粒と酸化した破片 1 片が出土。核は偏球形で浅い縦溝があり、腹面の先に穴がある(写真 19b)。特徴からミズキ *Cornus controversa* Hemsley と判断される。計測値 3.40/4.10/

ヒシ属 *Trapa* L. (図版 3 - 20 : 焼土 384 出土)

焼土 384、送り場 1 から総数 3 片出土。いずれも子葉の破片である。被熱による変形が著しい。破片のため計測はできなかった。

冬芽 (図版 3 - 21 : 焼土 390 出土)

焼土、灰集中 1、送り場 1 の遺構から出土。詳細な分類は困難である。計測値 3.00/1.50/

キハダ属 *Phllo dendron* Rupr. (図版 4 - 1a~c : 焼土 384 出土)

焼土、炭化物集中、送り場 1 から果実 2 片、種子が 8 粒と 2 片出土。果実は球形で中に 5 の小核があり、各 1 個の種子を含む。種子は半横広卵形で表皮に浅い凹みによる網目模様がある。これらの特徴からキハダ *Phllo dendron amurense* Rupr. と判断される。計測値 1a・b: 6.90/7.10/、1c: 4.20/2.25/1.30

コナラ属 *QUERCUS* L. (図版 4 - 2a・b : 送り場 1 出土)

焼土 384、送り場 1 の遺構から子葉部分が 2 片出土。子葉は長楕円形で表面(図版 4 - 2a)には縦条がある。このような形態を持つ種類にはミズナラ *Quercus crispula* Blume、コナラ *Quercus serrata* Thunb.、カシワ *Quercus dentata* Thunb. などがあるが子葉の形態から詳細な分類をするのは困難である(吉崎・椿坂 2000)。計測値 11.30/8.00/

クルミ属 *Jungias* L. (図版 4 - 3a・b : 炭化物集中 9 出土)

焼土から 2.96g、炭化物集中から 8.19g、送り場 1 から 5.32g、H - 1 から 0.02g、鍛冶遺構 1 から 0.38g、AP - 2 から 0.09g の内果皮の破片が総量 16.96g 出土。核表面には縦に浅い溝状の模様がある。これらの特徴からオニグルミ *Jungias sieboldiana* Maxim と判断される。破片のため計測はできなかった。参考までに現生のオニグルミ(自然乾燥)1個の重量は平均で 6.5g である。

サクラ属 *Prunus* L. (図版 5 - 1a・b、2a・b : 焼土 108 出土。3a・b : 送り場 1 出土)

焼土、炭化物集中、送り場 1 の遺構からスモモ *Prunus salicina* Lindl. の核が総数 2 粒と 102 片出土。核は楕円形でやや扁平。腹面は縦溝が並び、核面は粗面である。計測値は 1a・b : 長さ 11.20mm、幅 10.00mm、厚さ 7.40mm、2a・b : 長さ 10.70mm、幅 10.10mm、厚さ 7.70mm。送り場 1 遺構からサクラ属 *Prunus* L. の核が 1 粒出土。核は広楕円形。腹面には縦にベルト状の隆条があり核面は粗面である。エゾヤマザクラ *Prunus sargentii* Rehder; p. などの特徴を示すが、同じような形態を示すものが多く、詳細な分類は困難である。計測値 3a・b : 5.00/3.90/3.75

バラ科 ROSACEAE (図版 6 - 1a~c、2a・b、3a・b、4a・b : 送り場 1 出土)

焼土 384 から 1 粒、送り場 1 の遺構から果実が 443 粒出土。果実はやや球形、広卵形で大きさは大小さまざまのものが混在する。果実の頂部には萼片の落ちた痕跡が残るものや(図版 6 - 1a, 2a, 4a の下部)、果柄部分が残る資料などが観察できた(図版 6 - 1a)。果実を割るとその中に倒卵状長楕円

#### 1 ユカンボシC15遺跡から出土した炭化植物種子

形の種子がある(図版6-1b, c2b, 4b, c3a)。これらの特徴からリンゴ属 *Malus* Mill. に分類され、エゾノコリンゴ *Malus baccata* Borkh. var. *mandshurica* (Maxim.) Zmiz. *Malus sieboldii* (Regel.) Rehd. の形態を示す。現生資料との比較からは果実と種子の大きさはズミに近いが、被熱による変形のため種の特定は困難である。計測値 1a-c: 7.80/4.60/、2a-b: 6.00/4.20/、4a-c: 6.40/4.70/、3a-b: 4.10/2.10/2.00

#### 不明ミレット

アワ、キビのいずれかであるが、被熱による変形が著しいため分類できなかったものを一括した。不明2 資料の破損など保存状態が悪いため分類できなかった資料を不明2として扱った。その他、鍛冶遺構1からカヤツリゲサ科 CYPERACEAE の種子が酸化した状態で出土しているが、資料の保存状態が悪いため詳細な分類は不可能であった。

(4 標文文化期の遺構から検出された種子(標文文化期図版1~3))

イネ *Oryza sativa* L. (図版1-1a・b, 2a・b, 3a・b: 灰集中2出土)

焼土 灰集中2の遺構から総数23粒と破片15片出土。玄米は長楕円形で腹面の下端に胚がみられる。側面にはやや隆起した縦稜線が各2本ある。資料によっては被熱による変形の見られるものなどが混在していたが、粒は比較的揃っている。果実は玄米の状態で被熱された状態を示す。計測値 1a・b: 4.80/2.00mm/1.70、2a・b: 5.00/2.50/1.90、3a・b: 4.40/2.80/2.20

アワ *Setaria italica* (L.) P. Beauv. (図版1-4a-c: H-13火災時の焼土出土, 5a-c: H-13煙道の土出土)

H-13-14-33の遺構から総数93粒出土。穎果はやや球形。背面には果長の2/3ほどの胚があり、その反対側の腹面には小さなヘラ型のヘソがある(榎坂1993)。種子は図版1-4aに示すように内・外穎のとれた穎果の状態では出土しているものと、図版1-5aに示したように内・外穎が付いた状態(有ふ果)の種子が混在していた。計測値 4a-c: 1.35/1.30/1.00、5a-c: 2.00/1.40/1.55

ヒエ属 *Echinochloa* Beauv. (図版1-6a-c: 灰集中2出土, 7a・b: 炭化物集中7出土)

H-14、炭化物集中7、灰集中2の遺構から総数5粒出土。穎果は広楕円形。背面には果長の2/3ほどを占める楕円形の大きな胚がある。その反対側の腹面にはヘラ形状のヘソがある(榎坂1993)。穎果の胸部はふくらみ、粒形が大きくなる。つまり栽培型のヒエ *Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno の形態をもつ。出土資料は写真6aに示した一部内・外穎の付いた状態のものがほとんどである。中には写真7aに示した酸化した有ふ果も混在していた。計測値 6a-c: 2.00/1.60/1.30、7a・b: 4.20/2.05/

キビ *Panicum miliaceum* L. (図版1-8a-c: H-13床面出土)

H-13-33、焼土52、灰集中2の遺構から総数101粒出土。穎果はやや球形または広卵形。背面には果長の1/2ほどの胚があり、その反対側の腹面にはヘラ形状のヘソがある(榎坂1993)。検出された資料は、すべて穎果(内・外穎のとれた状態)で出土している。計測値 2.00/1.75/1.40

イネ科 GRAMINEAE (図版1-9a・b: X-2墓坑の覆土出土)

X-2墓坑の覆土から1粒と灰集中2の遺構から総数5粒出土。果実は狭卵形でやや扁平。資料の保存状態が悪いため詳細な観察ができなかった。形態の特徴からはササ属 *Sasa* Makino et Shibata の種子に似る。計測値 4.20/1.90/1.60



シソ属 *Perilla* L. (図版 1 - 10a・b : H - 33の炭化物集中出土)

H - 33の炭化物集中からすべて酸化した状態で6粒出土。種子は扁平球形で種子の表面に大きな網目状の模様がある。エゴマ *Perilla frutescens* var. *japonica* かシソ *Perilla frutescens* var. *japonica* のいずれであるのかは、両者とも形態と表皮の構造が類似している部分が多く分類は困難である。今回は被熱されておらず、種皮表面の色、種子のサイズからシソ *Perilla frutescens* var. *japonica* と判断される。計測値 1.70/1.35/1.20

マメ科 LEGUMINOSAE (図版 1 - 11a・b : H - 13の床面出土)

H - 13・14、X - 1の遺構から総数20粒出土。種子は扁平円形で腹面の中心に楕円形の小さなヘソがある。このような特徴からヤブマメ *Amphicarphaedgeworthii* Benth. var. *japonica* Oliver; と判断される。計測値 3.30/2.90/2.40

アカザ属 *Chenopodium* L. (図版 1 - 12 : H - 13の焼土出土)

H - 13、焼土の遺構から、酸化種子と炭化種子が混在して総数28粒出土。種子は扁平球形。側面には嚙状に突出したヘソがある(写真資料の左側)。計測値は長さ1.35mm、幅1.30mm、厚さ0.80mm

タデ科 POLYGONACEAE (図版 1 - 13 : H - 13の床面から出土。14 : H - 33炭化物集中から出土)

タデ科 1 : H - 2・13・14・31・33、灰集中2の遺構から酸化した種子が少量混じって総数13粒出土。瘦果は三角状紡錘形で稜は鋭ギシギシ属 *Rumex* L. の特徴を示す。タデ科種子は形態の類似した種類が多いため、詳細な分類は困難である。計測値は 2 : 長さ1.45mm、幅0.95mm

タデ科 2 : H - 33、焼土、炭化物集中からすべて未炭化2) で総数57粒出土。瘦果はレンズ形、または三稜形。果皮は粗面で表面に微細な網目模様がある。花被が被った状態で表面には腺点があり淡紅色である。これらの特徴からヤナギタデ *Polygonum hydropiper* L. と判断される。計測値 2.90/1.60/1.00

セリ科 UMBELLIFERAE (図版 1 - 15a・b : H - 33の炭化物集中出土)

H 33の炭化物集中からすべて未炭化で11粒出土。種子は卵形。表面は湾曲し溝と太い隆起がある。内面の中央に縦の溝がある。このような特徴を持つ種子にドクゼリ *Cicuta virosa* L. ハマゼリ *Cnidium japonicum* Miq. の種子に似るが、セリ科の種子は形態の類似したものが多く、種類の特定は困難である。計測値 2.25/1.25/1.05

ホタルイ属 *Scirpus* L. (図版 1 - 16a・b : H - 33の炭化物集中出土)

H - 33、炭化物集中、灰集中から全て未炭化で総数31粒出土。種子は扁平倒卵形で果皮は平滑。形態の特徴からフトイ *Scirpus tabernaemontani* Gmel.、サンカクイ *Scirpus triquetus* L. の形態に似るが、ホタルイ属の種子は類似する形態が多く詳細な分類は困難である。計測値 1.80/1.35/0.7

カヤツリグサ科 CYPERACEAE (図版 2・1・2 : H・13の床面出土。3〜7 : H・33の炭化物集中出土)

H - 13・31・33、焼土、炭化物集中、灰集中、SPの遺構からすべて酸化した状態で総数1186粒と1片出土。種子はタイプ別に7種類に分類し図示したが、カヤツリグサ科の種子は種類が多く詳細な分類は困難である。計測値 1 : 1.40/0.90/、2 : 1.80/0.80/、3 : 1.20/0.80/、4 : 2.00/1.30/、5 : 2.25/1.40/、6 : 1.70/0.90/0.45、7 : 1.40/1.00/0.60mm

1 コカンボシC15遺跡から出土した炭化植物種子

ケシ科 PAPAVERACEAE (図版2 - 8a・b : H - 13の床面出土)

H - 2・13・14、焼土、炭化物集中、X2の遺構から総数69粒出土。種子は狭倒卵形で基部のほうに細くなる。腹面は内側に湾曲する。種皮表面には網目模様があり、ケシ属 *Papaver* L. の特徴を示すが、形態と表面模様の類似が多く、詳細な分類は困難である。計測値1.80/1.00/0.90

キク科 COMPOSITAE (図版2 - 9 : H 33の炭化物集中出土)

H - 33の炭化物集中から未炭化で1粒出土。瘦果は倒卵形で先端は切形。片側はやや湾曲で他方は直線状である。アザミ属 *Cirsium* Adans. 種子の特徴を示すが、類似する形態が多いため種の特定は困難である。計測値3.40/1.30/1.80

ミツガシワ属 *Menyanthes* L. 属 (図版2 - 10a, b : H - 33の炭化物集中から出土)

H - 33の炭化物集中から未炭化で17粒と2片出土。種子は扁平楕円形で赤黄色。表面は平滑で艶がある。腹面に小さなへそがある。これらの特徴からミツガシワ *Menyanthes trifoliata* L. と判断される。計測値3.10/2.30/1.25

ミツバウツギ属 *Staphylea* Linn. (図版2 - 11 : H - 13の床面出土)

H 13から全て酸化した状態で19粒と2片出土。種子は倒卵形で黄淡色。種皮は平滑で光沢がある。これらの特徴からミツバウツギ *Staphylea bumaldii* (Thumb.) DC. と判断される。計測値5.80/3.90/

キンボウゲ科 RANUNCULACEAE (図版2 - 12a・b : H - 33の炭化物集中出土)

H - 33からすべて未炭化で21粒出土。瘦果は広楕円形で扁平。種皮は暗褐色で光沢は弱い。乾燥による変形などで詳細な分類は出来なかった。計測値3.70/2.70/0.30

オモダカ科 ALISMATACEAE (図版2 - 13a・b : H - 33の炭化物集中出土)

H - 33からすべて未炭化で20粒出土。翼果(図版2 - 13a)の表皮を剥がすと図版2 - 13bに示す倒卵形の濃褐色の種子が現れる。胚は馬蹄形に湾曲し、種子の両面は縦に窪んで浅い溝となり、表面には微小な凹凸がある。これらの特徴を持つ仲間にオモダカ *Sagittaria trifolia* L.、ヘラオモダカ *Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche があるが、翼果の形態の特徴からヘラオモダカと判断される。計測値13a : 2.30/1.20/0.50, 13b : 1.55/0.70/0.40

ニワトコ属 *Sambucus* L. (図版2 - 14a・b : H - 13の床面出土)

各住居跡から酸化種子151粒と炭化種子が2粒混在して出土。種子は半円形。種子は狭楕円形で背面は円みがあり、腹面は鈍稜をなす。種皮は皺状に隆起した模様があり粗面である。これらの特徴からニワトコ *Sambucus racemosa* L. と判断される。計測値2.00/1.00mm/0.65

タラノキ属 *Aralia* L. (図版2 - 15 : H - 13炭化物集中出土)

H - 10・13・14・31・33、X - 2の遺構から酸化種子392粒と40片と炭化種子5粒が混在して出土。種子は半円形。種子の左側には二本の縦溝があり、種皮は凹凸で粗面である。これらの特徴からタラノキ *Aralia elata* (Miq.) Seemannと判断される。計測値1.50/1.10/0.55

マタタビ属 *Actinidia* Lindl. (図版 2 - 16 : 焼土390出土)

H - 10・13・14・31・33, SP - 5の遺構から酸化種子と炭化種子が混在して総数255粒出土。その大部分は酸化した状態である。種子は長楕円形。種皮には凹点による網目模様がある。この仲間にはマタタビ *Actinidia polygama* Planch. et Maxim. とサルナシ *Actinidia arguta* Planch. があるが、両者の種子は形態と表面組織がきわめて良く似ている。粒形の特徴からはサルナシ *Actinidia arguta* Planch. であろう。計測値2.10/1.40/0.75

キハダ属 *Phellodendron* Rupr. (図版 2 - 17 : H - 13の煙道の土から出土)

H - 13・31, X - 1・2から総数で7粒と3片出土。種子は半横広卵形で表皮に浅い凹みによる網目模様がある。これらの特徴からキハダ *Phellodendron amurense* Rupr. と判断される。計測値3.70/2.00/1.20

キイチゴ属 *Rubus* L. (図版 2 - 18 : 炭化物集中2出土)

炭化物集中2、灰集中2の遺構から炭化種子1粒と酸化種子16粒出土。種子は半横広卵形。種子の全面に大きな網状の凹凸がある。しかし、キイチゴ属種子は形態と種子表面の構造の類似したものが多いため種までの分類は困難である。計測値2.10/1.30/0.75

クワ属 *Morus* L. (図版 2 - 19 : H - 13の床面から出土)

H - 13・31・33, SP - 22から全て酸化した状態で17粒出土。種子は広倒卵状三角形で種皮の表面は滑らかである。これらの特徴からヤマグワ *Morus bombycis* Koidz. と判断される。計測値2.00/1.55/

ブドウ科 VITIDACEAE (図版 2 - 20a・b : H - 13の床面出土)

H - 2・13・14・31・33の遺構から酸化種子と炭化種子が混在して総数87粒と581片出土。堅果は広倒卵形、背面は円みがあり、倒へら形の凹みがある。腹面の中央に稜をなす。稜の両側に針形の凹みがある。形態の類似した種子にエビヅル *Vitis ficifolia* Bunge var. *lobata* があるが、分布域が北海道の南部に限られているという。したがって、形態の特徴からヤマブドウ *Vitis coignetiae* Pulliat と判断される。計測値4.80/3.50/2.50

ミズキ属 *Cornus* L. (図版 2 - 21a・b : SP - 19出土)

SP - 19の覆土から酸化した状態で1粒出土。核は偏球形で浅い縦溝があり、腹面の先に穴がある(写真21b)。この特徴からミズキ *Cornus controversa* Hemsley と判断される。計測値4.30/4.40/

バラ科 ROSACEAE (図版 3 - 1 : H - 2出土)

H - 2から8粒出土。果実はやや球形、広卵形で大きさの変化が多い。果実の頂部には萼の落ちた痕が丸く残っている(図版 3 - 1の下部)。果柄部分が残存する。これらの特徴からリンゴ属 *Malus* Mill. に分類され、エゾノコリンゴ *Malus baccata* Borkh. var. *mandshurica* (Maxim.) ズミ *Malus sieboldii* (Regel) Rehder の形態を示す。現生資料との比較からは果実と種子の大きさはズミに近いが、詳細な分類は困難である。計測値7.10/4.50/

クルミ属 *Juglans* L. (図版 3 - 2a・b : H - 13の床面出土)

各住居跡から16.05g、焼土から0.40g、炭化物集中から0.46g、灰集中2から0.52g、X - 1・2・3

1 ユカンボシC15遺跡から出土した炭化植物種子

から0.13g、P-12から0.15gから核の破片が総量17.71g出土。酸化した内果皮が少量混じる。核表面には縦に浅い溝状の模様がある。これらの特徴からオニグルミ *Juglans sieboldiana* Maximと判断される。破片のため計測はできなかった。参考までに現生のオニグルミ(自然乾燥)1個の重量は平均で6.5gである。

モクレン属 *Magnolia* L.(図版3-3a・b; H-13の床面出土。4a・b; SP-27出土)

H-13・33、SP-27からすべて酸化した状態で総量1粒と2片出土。3a・b資料: 種子は三角状円形。背面には浅く細い縦溝が一面にあるが、破損のため観察ができなかったが、腹面の中央に深い縦溝が確認されたことから、ホオノキ *Magnolia obovata* Thunberg; と判断される。計測値10.40/8.00/

4a・b資料: 種子は腎臓状横楕円形でやや扁平。背面は円みがあり種皮は平滑で光沢は弱い。腹面の中央に浅く幅広い溝がある。特徴からコブシ *Magnolia kobus* DC. と判断される。計測値7.20/9.50/

不明ミレット

アワ、ヒエ属、キビのいずれかであるが、被熱による変形が著しいため分類できなかったものを一括して扱った。

不明1・2

不明1とは乾燥による変形が著しく分類不能なものであり、酸化状態で出土。不明2とは状態が極めて悪いため分類不能なものである。他にH-2・13・31・33から冬芽が検出されたが図示していない。

(5) 続縄文文化期の遺構から検出された種子(続縄文文化期図版1)

シソ属 *Perilla* L.(図版1-1a・b: 焼土41出土)

焼土41から酸化した状態で1粒出土。種子は扁平球形で種子の表面に大きな網目状の模様がある。エゴマ *Perilla frutescens* var. *japonica*かシソ *Perilla frutescens* var. *japonica*のいずれであるのかは、両者とも形態と表皮の構造が類似している部分が多く分類は困難である。今回は被熱されておらず、種皮表面の色、種子のサイズからシソ *Perilla frutescens* var. *japonica*と判断される。

計測値1.55/1.30/1.00

タデ科 POLYGONACEAE (図版1-2・3: 焼土61・62出土)

タデ科1: 焼土61・30・290から総数4粒出土。瘦果は三角状紡錘形で稜は鋭くギシギシ属 *Rumex* L. の特徴を示す。タデ科種子は形態の類似が著しいため、詳細な分類は困難である。計測値2.20/1.20/

タデ科3: 焼土29・60・62から総数1粒と2片出土。瘦果は球形で突頭、ヘソが突出し表面には光沢である。特徴はイシミカワ *Polygonum perfoliatum* L. の形態を示す。ママコノシリヌグイ *Polygonum senticosum* (Meisner) Franch. は同様の形態であるが瘦果はふくれた三角形で突頭。種皮表面に微細な皺がある。以上よりイシミカワ *Polygonum perfoliatum* L. と判断される。計測値2.60/2.25/

メヒシバ属 *Digitaria* Haller (図版3-4a・b: 焼土398出土)

焼土398の遺構から未炭化で1粒出土。穎果はやや扁平な長卵形。背面はやや隆起し、果の約1/2長の胚がある。腹面は平で基部にやや円形のヘソがある。しかし、メヒシバ属には形態の類似する種子が多く、詳細な分類は困難である。計測値1.95/0.80/0.45

アカザ属 *Chenopodium* L. (図版 1 - 5 : 焼土41出土)

焼土41・392の遺構から、酸化した状態で総数25粒出土。種子は扁平球形。側面には嘴状に突出したヘソがある(写真資料の右側)。計測値1.20/1.10mm/0.55m

ホタルイ属 *Scirpus* L. (図版 1 - 6 : 焼土38出土)

焼土38の遺構から未炭化で1粒出土。種子は広倒卵状鈍三角形で果皮は不明瞭な波状の模様が観察される。このような特徴からカンガレイ *Scirpus triangulatus* Roxb. 形態に似るがホタルイ属の種子は類似する形態が多く詳細な分類は困難である。計測値1.40/1.00/0.40

カヤツリグサ科 CYPERACEAE (図版 1 - 7 : 焼土38出土)

焼土38から酸化した状態で1粒出土。種子は楕円状三角形。カヤツリグサ科の種子は類似する形態が多く詳細な分類は困難である。計測値1.60/1.0/0.85

ケシ科 PAPAVERACEAE (図版 1 - 8a・b : 焼土130出土)

焼土130の遺構から1粒出土。種子は狭倒卵形で基部のほうに細くなる。腹面は内側に湾曲する。種皮表面には網目模様があり、ケシ属 *Papaver* L. の特徴を示すが、形態と表面模様の類似したものが多く、詳細な分類は困難である。計測値1.50/0.90/0.75mm

ニワトコ属 *Sambucus* L. (図版 1 - 9a・b : 焼土62出土)

焼土20・23・61・62・91・290・389・394から酸化種子242粒と炭化種子が15粒混在して出土。種子は半円形。種子は狭楕円形で背面は円みがあり、腹面は鈍稜をなす。種皮は皺状に隆起した模様があり粗面である。特徴からニワトコ *Sambucus racemosa* L. と判断される。計測値2.50/1.40/0.65

マタタビ属 *Actinidia* Lindl. (図版 1 - 10 : 焼土45出土)

焼土91・290・392・394から酸化種子84粒と炭化種子1粒が混在して出土。種子は長楕円形、種皮には凹点による網目模様がある。この仲間にはマタタビ *Actinidia polygama* Planch. et Maxim. とサルナシ *Actinidia arguta* Planch. があるが、両者の種子は形態と表面組織がきわめて良く似ている。粒形の特徴からはサルナシ *Actinidia arguta* Planch. であろう。計測値2.10/1.15/0.80mm

タラノキ属 *Aralia* L. (図版 1 - 11 : 焼土62出土)

焼土62・91・290・389・392・394の遺構から酸化種子41粒と炭化種子2粒が混在して出土。種子は半円形。種子の右側には二本の縦溝があり、種皮は凹凸で粗面である。これらの特徴からタラノキ *Aralia elata* (Miq.) Seemann と判断される。計測値1.70/0.80/0.65mm

キハダ属 *Phellodendron* Rupr. (図版 1 - 12 : 焼土39出土)

焼土39の遺構から2片出土。種子は半楕円形で表皮に浅い凹みによる網目模様ある。これらの特徴からキハダ *Phellodendron amurense* Rupr. と判断される。計測値3.60/2.05/

ブドウ科 VITIDACEAE (図版 1 - 14a・b : 焼土61出土)

焼土25・41・61・62・29・290・207から酸化した状態の種子2片と炭化種子4粒と4片が混在して出土。

1 コカンボシC15遺跡から出土した炭化植物種子

堅果は広倒卵状円形、背面は円みがあり、倒へら形の凹みがある。腹面の中央に稜をなす。稜の両側に針形の凹みがある。形態の特徴からはノブドウ属 *Ampelopsis Michx.* 属に似るが、確定はできない。ブドウ属 *Vitis L.* の種子は形態のバリエーションがあるので、今回検出された種子はその範疇に入ると考える。エビツル *Vitis ficifolia Bunge var. lobata* の分布域が北海道南部に限られているということから、ヤマブドウ *Vitis coignetiae Pulliat* と判断される。計測値 3.80/3.80/2.70

クルミ属 *Juglans L.* (図版 1 - 15a・b: 焼土30出土)

焼土25・28・30・37・38・44・45・62・65・75・173・290から内果皮の破片が総量1.96g出土。酸化した核片が少量混じる。核表面には縦に浅い溝状の模様がある。これらの特徴からオニグルミ *Juglans sieboldiana Maxim* と判断される。破片のため計測はできなかった。参考までに現生のオニグルミ(自然乾燥)1個の重量は平均で6.5gである。

冬芽(図版 1 - 13: 焼土44出土)

焼土44・290の遺構から出土。詳細な分類は困難である。計測値 3.00/1.50/

不明 1・2は資料の保存状態が悪いため分類出来なかったものを一括した。

(6) 柱状サンプルから検出された栽培種子(柱状サンプル図版 1)

イネ *Oryza sativa L.* (図版 1 - 1: B層出土。2a・b: B1出土。3a・b: B2層出土)

B層から籾が1粒出土。芒は短い。B1・B2層から1粒ずつ出土。果実は玄米の状態で被熱した状態を示す。玄米は長楕円形で腹面の下端に胚がみられ、側面にはやや隆起した縦稜線が各2本ある。計測値は 1: 7.10/3.10/、2a・b: 4.10/2.00/1.80、3a・b: 4.30/2.80/2.10

アワ *Setaria italica (L.) P. Beauv.* (図版 1 - 6a-c B2層出土)

B2から1粒出土。穎果はやや球形。背面には果長の2/3ほどの胚があり、その反対側の腹面には小さなへら型のヘソがある(楳坂1993)。図版 1 - 6aに示したように内・外穎の一部が残存して出土。計測値 1.40/1.40/1.20

ヒエ属 *Echinochloa Beauv.* (図版 1 - 7a・b: B4層下出土。8a-c, 9a-c, 10a-c, 11a・b: B2層出土)

B4層下から未炭化の小穂が4粒出土。小穂の状態では検出された場合、野生種なのか栽培種なのか分類は困難である。B2層から穎果の状態で23粒出土。穎果は広楕円形。背面には果長の2/3ほどを占める楕円形の大きな胚がある。その反対側の腹面にはへら型形状のヘソがある(楳坂1993)。穎果の胴部はふくらみ、粒形が大きくなる。つまり栽培型のヒエ *Echinochloa utilis Ohwi et Yabuno* の形態をもつ。中には8aに示す小型の穎果も混じるが、形態の特徴から栽培型の範疇である。また、写真11aに示した被熱による変形著しい穎果も混在していた。計測値 7a, b: 5.10/2.10/、8a-c: 1.30/1.10/0.75、9a-c: 2.00/1.55/1.00、10a-c: 2.00/1.70/1.15、11a-c: 1.90/2.25/

キビ *Panicum miliaceum L.* (図版 1 - 12a・b, 13a-c, 14a-c: B2層出土)

B2層から19粒出土。穎果はやや球形または広卵形。背面には果長の1/2ほどの胚があり、その反対側の腹面にはへら型形状のヘソがある(楳坂1993)。検出された資料は、穎果(内・外穎のとれた状

態)で出土しているが、中には12aに示す内・外穎の残存するものも混在していた。計測値は12a・b: 2.30 / 1.80 / 1.45, 13a-c: 2.00 / 1.80 / 1.35, 14a-c: 1.60 / 1.45 / 0.90

シソ属 *Perilla* L. (図版1・4a・b, 5a・b: B2層出土)

B2層から8粒出土。種子は扁平球形で種子の表面に大きな網目状の模様がある。エゴマ *Perilla frutescens* var. *japonica* かシソ *Perilla frutescens* var. *japonica* のいずれであるかは、両者とも形態と表皮の構造が類似している部分が多く分類は困難である。計測値は4a・b: 2.00 / 1.70 / 1.40, 4a・b: 1.70 / 1.30 / 1.10

その他に野生の草本種子・木本種子が検出されているが、ここでは取り上げていない。詳細については頁277の表に示してあるので参照していただきたい。

#### (7) コメント

アイヌ文化：この層からは、イネ・アワ・キビ・ヒエ属が検出されたが、オオムギやコムギが認められなかった。バラ科はリンゴ属で、エソノコリンゴかズミだと考えられるが、送り場遺構1から集中的に見出されている。この種のもはこれまでに報告例がない。出土状況から見る限り、儀礼的な供献である可能性がある。エソノコリンゴ、ズミは、アイヌ民族は実が赤くなってから食べていた。昔は河原に多くあったので、河原リンゴと呼んでいたという。また、秋に霜があたってからのものがとくに美味であるという記録がある(アイヌ民族博物館：1993)。イネは形態的に変異幅が大きい。この中にはシイナと分類できそうな小型狭長なものから完熟したのものまで認められる。こうした変異を持ってイネが出土していることは、これが単なる輸入だけに限らず、現地での栽培も考慮に入れなければならない可能性がある。遺跡周辺のプラントオパール分析などで、その実体を調べる必要があるかもしれない。初めの破片がかたまて見出された。この所見は、この地点で脱穀がおこなわれたことを物語っている。諸民族例では、イネは初めの状態で保存するのは通例である。したがって初摺りがこの地点で行われていたので、その結果として初めの破片がかたまて出土したのかもしれない。しかし、現地での小規模栽培が皆無であったという証拠も、またないのである。今後、初めの出土例の集積とともに、プラントオパールを利用した分析などを通じて現地栽培についての確認作業を続ける必要があろう。

擦文文化：栽培植物としてはイネ・アワ・キビ・ヒエ属が検出された。だが、オオムギ・コムギは出土していない。これまでの擦文文化遺跡のデータを見ると、オオムギ・コムギは、集落によっては栽培されていない場合があるらしい。例えば札幌市のサクシュコトニ川遺跡(吉崎・椿坂：1990)では多量のオオムギとコムギが検出されていたが、ユカンボシC15遺跡からはその痕跡すらなかった。こうした集落間の栽培植物組成の相違は、北海道中央部以西の擦文文化遺跡になると、しばしば認められるらしい。このあり方が地理的あるいは地域的な相違なのか、集落を構成する集団の所属系統の違いなのかはまだ決定できない。しかし、重要な所見として注目しておく必要があろう。ヒエ属は数が少なかった。しかし擦文文化中期末までの資料と異なり、穎果の胴部がふくらみ、粒形の大きくなる傾向が認められる。つまり、今回検討した資料は中世以降の栽培型に近づいているのではないか。その他の植物種子は、集落の周囲に一般的に認められる草本と木本のものであった。総じて可食性あるいは利用可能なものが多い。近世の出土資料同様に、バラ科の種子が注目されるが、前述したとおり可食性のもので、かなり普遍的に食べられていたのであろう(アイヌ民族博物館：前出)。





アイヌ文化期

栽培

遺構名	層位など	イネ		キビ		ヒエ属		アワ		不明ミレット	
		炭化		未炭化		炭化		未炭化		炭化	
		完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片
H-1	層2										
H-36	層1										
F-10											
F-68											
F-107											
F-136											
F-109											
F-384											
F-390											
F-391											
F-393											
F-407											
炭化物集中-11											
炭化物集中-12											
炭化物集中											

\* 未炭化破片28, 75枚

アイヌ文化期ヒエ属計測表

No.	L (mm)	W (mm)	T (mm)
1	1.26	1.22	0.53
2	1.89	1.81	0.77
3	1.74	1.53	0.56
4	1.85	1.31	0.53
5	1.98	1.60	0.59
6	1.88	1.23	0.53
7	1.33	1.25	0.58
8	1.82	1.23	0.48
9	1.40	1.51	0.48
10	1.33	1.29	0.43
11	1.25	1.05	0.45
12	1.49	1.05	0.45
13	1.53	1.29	0.45
14	2.03	1.63	0.59
15	1.39	1.29	0.53
16	1.23	1.29	0.53
17	1.53	1.03	0.48
18	1.53	1.13	0.48
19	1.33	1.03	0.43
20	1.43	1.33	0.53
21	1.33	1.49	0.53
22	1.23	1.03	0.48
23	1.43	1.49	0.73
24	1.43	1.03	0.53
25	1.43	1.43	0.53
平均	1.43	1.33	0.53
標準偏差	0.23	0.23	0.13

柱状

栽培

地点名	層位	イネ		キビ		ヒエ属		アワ		シソ属	
		炭化		未炭化		炭化		未炭化		炭化	
		完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片
H27	層2										
H27	層1										
H27	層1(2)										
H27	層1(3)										

縄文文化期

栽培

遺構名	層位など	イネ		キビ		ヒエ属		アワ		不明ミレット	
		炭化		炭化		炭化		炭化		炭化	
		完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片	完形	破片
H-13	灰層										
	カマド										
	竈きほの中の土										
	神道の土										
H-14	大穴時の壁土										
	層1										
H-23	炭化物集中										
F-13											
F-52											
炭化物集中											





1 ユカンボシC15遺跡から出土した炭化植物種子

続縄文・野生草木

科名	たで	あかぎ	けし		しそ		いね		かやつりぐさ		不明		不明		
属名	タデ	アカザ			シソ		イネ科		ネタライ		1		2		
種名	イシムカワ														
遺構名	炭化	炭化	未炭化	炭化	未炭化	炭化	未炭化	炭化	未炭化	炭化	未炭化	炭化	未炭化	炭化	未炭化
	定形数	破片数	重量	定形数	破片数	重量	定形数	破片数	重量	定形数	破片数	重量	定形数	破片数	重量
F-20															
F-25															
F-28															
F-29															
F-30	11														
F-37															
F-38															
F-41															
F-44															
F-60															
F-61	1														
F-62															
F-65															
F-71															
F-91															
F-130															
F-207															
F-290	3														
F-388															
F-392															
F-394															
F-398															

\*F-88, 90, 92の資料が整理中に統合した。77は料理化定形合計3

続縄文・野生木本

科名	くるみ	またたび	みかん	ぶどう	うごぎ	すいかずら	葉芽					
属名	クルミ	マタタビ	キハダ	ブドウ	タラノキ	ニワトコ						
種名	オニグルミ	キハダ種子										
遺構名	炭化	炭化	未炭化	炭化	未炭化	炭化	未炭化	炭化	未炭化	炭化	未炭化	
	定形数	破片数	重量	定形数	破片数	重量	定形数	破片数	重量	定形数	破片数	重量
F-20												
F-23												
F-25	10	0.08										
F-28	11	0.19										
F-29												
F-30	92	0.79										
F-37	2	0.01										
F-38	1	0.01										
F-39												
F-41												
F-44	4	0.06										
F-45	9	0.11										
F-61												
F-62	19	0.44										
F-65	8	0.14										
F-71												
F-75	1	0.01										
F-78												
F-91												
F-173												
F-207	8	0.07										
F-290	6	0.05										
F-389												
F-392												
F-394												
F-399												

\*F-88, 90, 92の資料が整理中に統合した。マタタビ属未炭化定形合計68、タラノキ属未炭化定形合計1、ニワトコ属未炭化定形合計1



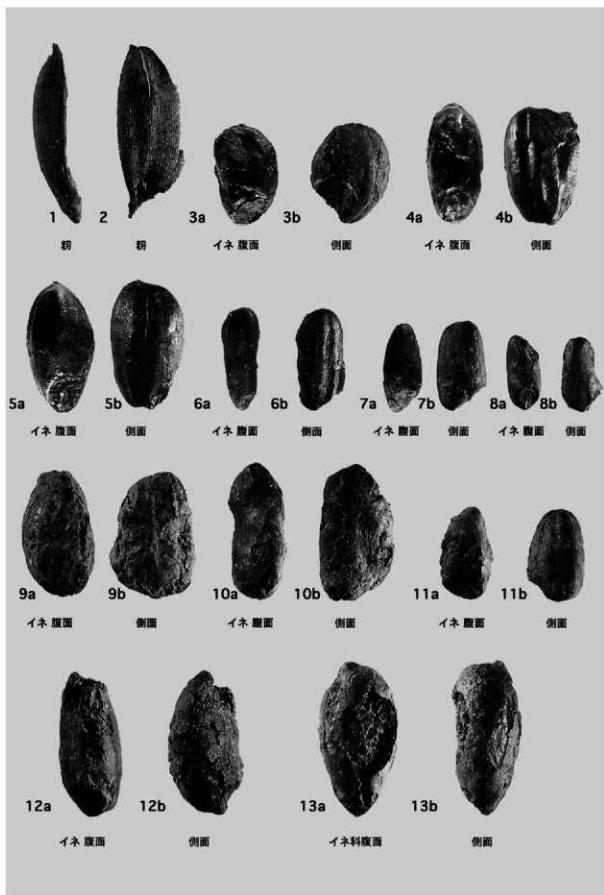
1 コカンボシC15遺跡から出土した炭化植物種子

ベルト・野生草木

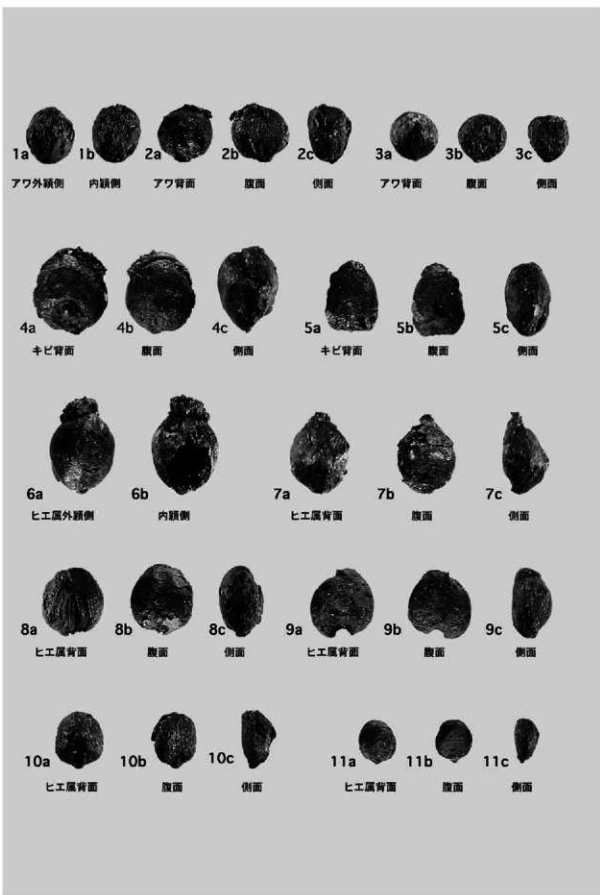
地点名	層位	科名		くわ		たで		まんぼうげ		ばら		せり		しそ		なす		きく		かやつりどき		不明I	不明II
		属名	種名	アザ		ナゲ		キョウゴク		シラ										マタシ			
				定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数		
L20	9B																						
	I B1																						
	I B2上																						
	I B3上			1	3			14			1	5	7	2					84		142		
	I B5							33											1274	31	21		
L22	9B			1																			
	I B1																						
	I B2上																						
	I B5上							99											1362	46	296		
	I B4																						
018	9B																						
	I B2上																						
	I B3上																						
	I B4																						
	I B5																						
019	9B																						
	I B1																						
	I B2上																						
	I B3上																						
	I B4																						
020	9B																						
	I B1																						
	I B2上																						
	I B3上																						
	I B5																						

ベルト・野生木本

地点名	層位	科名		くるみ		かばのき		くわ		もくれん		またたけ		ばら		みかん		かつぼう		ふどう		みずき		うごぎ		みつがしわ		まいが		発芽	
		属名	種名	カシ		アザ		モクレン		マツ		カバ		カハ		カハ		カハ		カハ		カハ		カハ		カハ		カハ			
				定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数	定形数	破片数		
L20	9B																														
	I B1																														
	I B2上																														
	I B3上																														
	I B5																														
L22	9B																														
	I B1																														
	I B2上																														
	I B3上																														
	I B5																														
018	9B																														
	I B2上																														
	I B3上																														
	I B4																														
	I B5																														
019	9B																														
	I B1																														
	I B2上																														
	I B3上																														
	I B4																														
020	9B																														
	I B1																														
	I B2上																														
	I B3上																														
	I B5																														

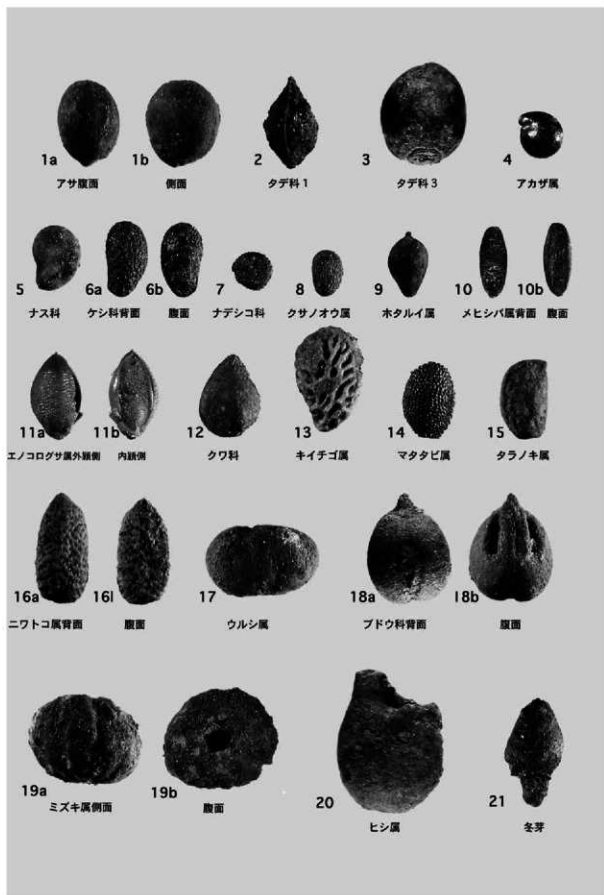


アイヌ文化期 図版 1

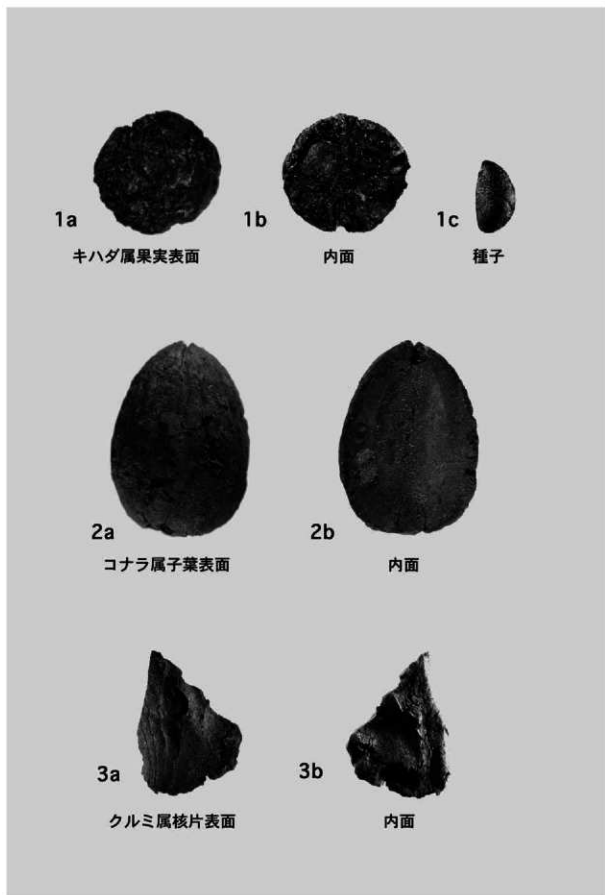


アイヌ文化期 図版 2

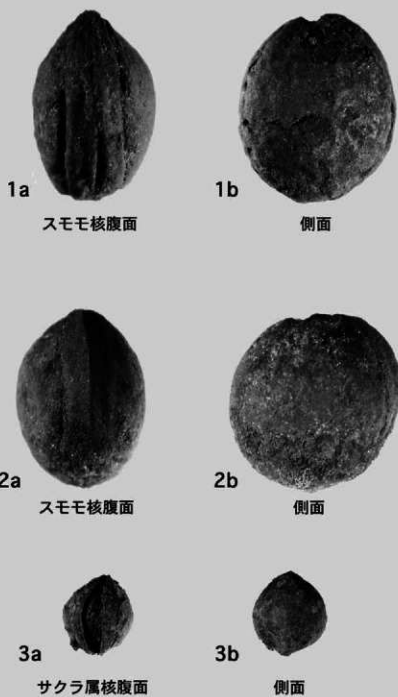




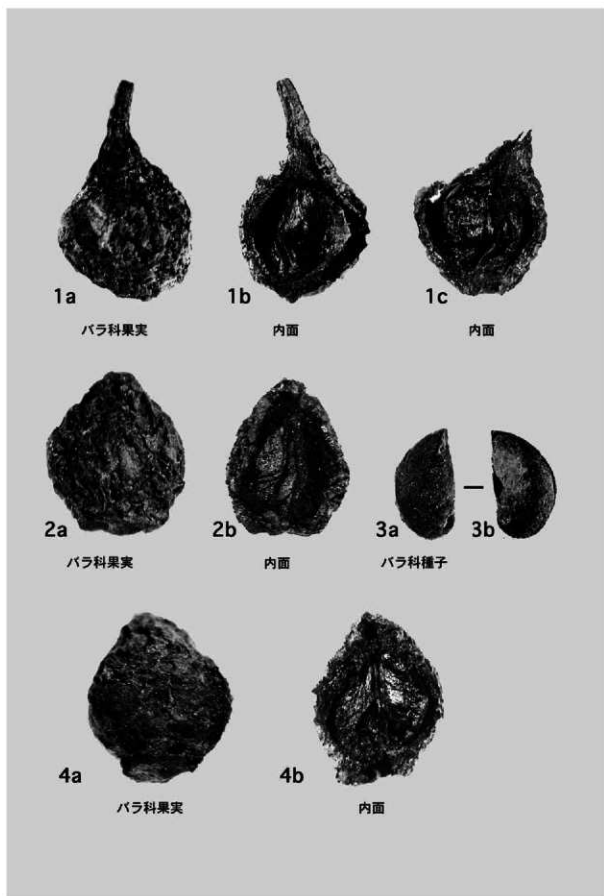
アイヌ文化期 図版 3



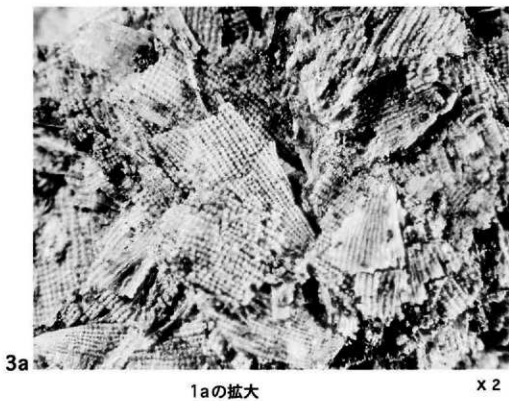
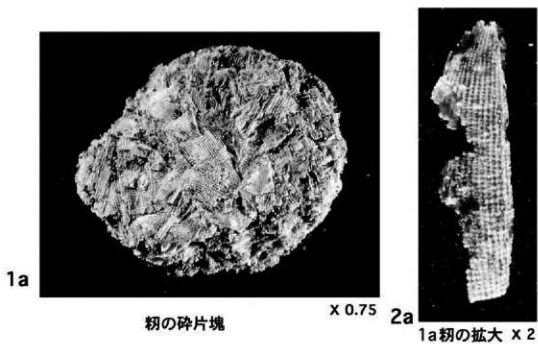
アイヌ文化期 図版 4



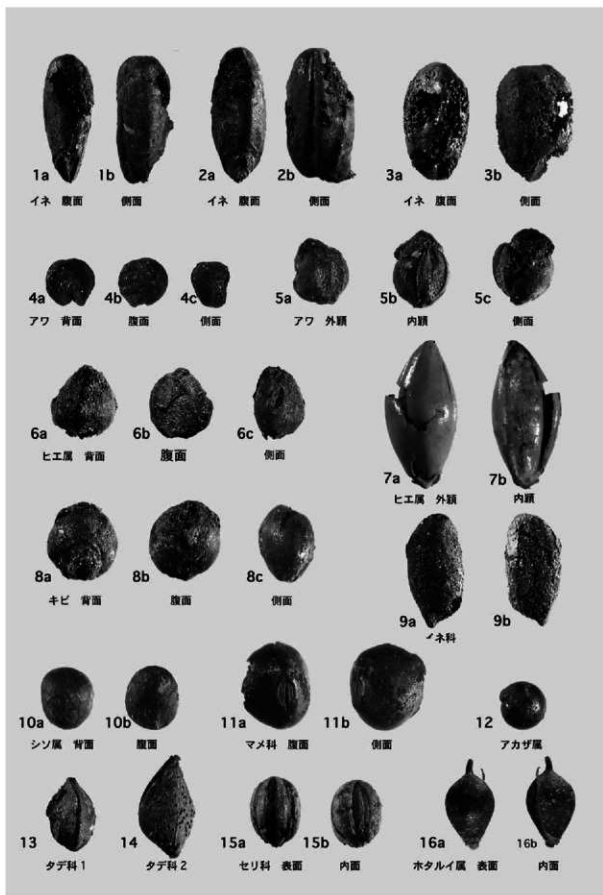
アイヌ文化期 図版 5



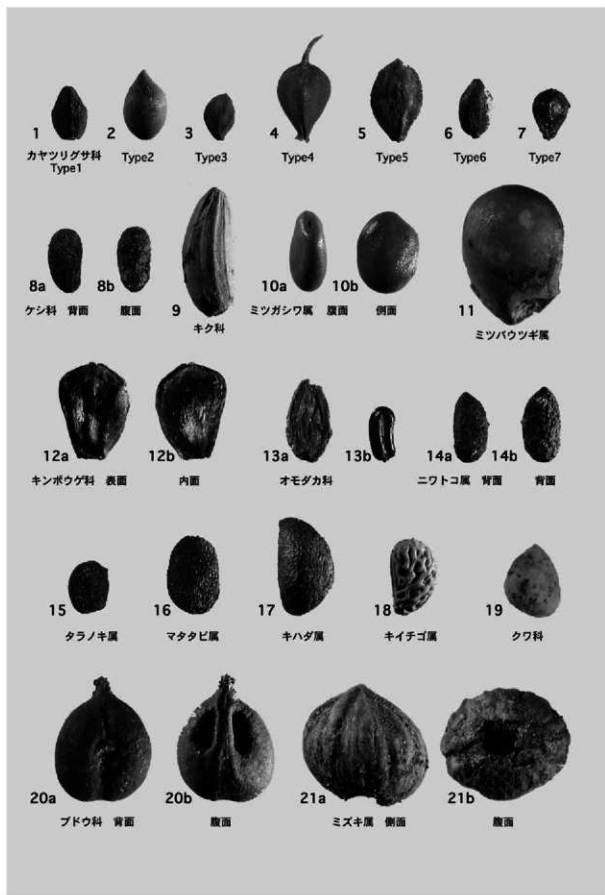
アイヌ文化期 図版 6



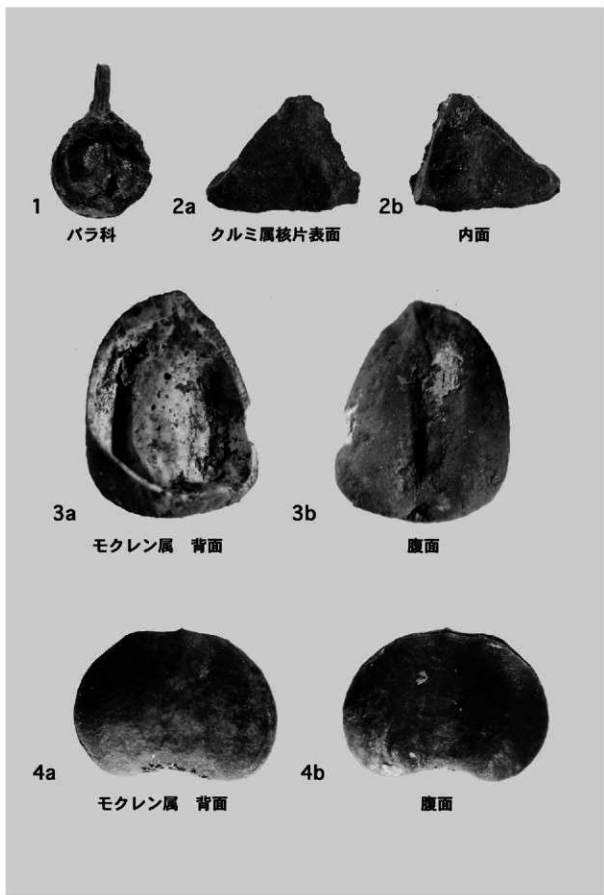
アイヌ文化期 図版 7



擦文文化期 図版 1

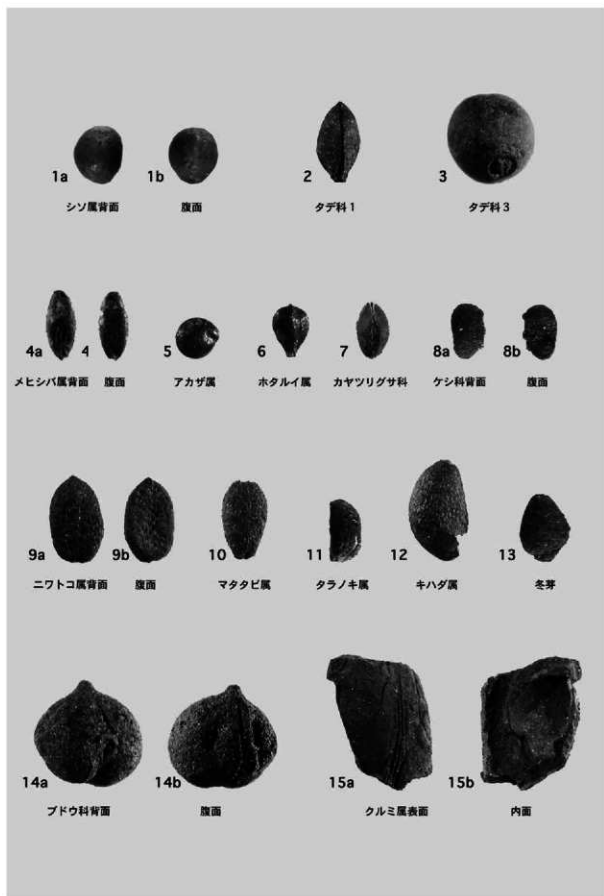


捺文文化期 図版 2

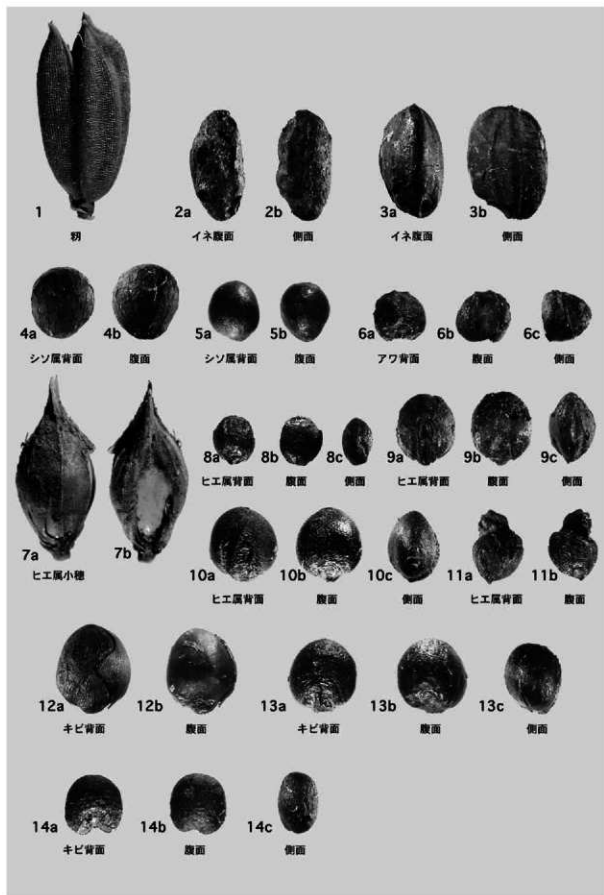


擦文文化期 図版 3





統縄文文化期 図版 1



柱状サンプル 図版 1

## 2 千歳市ユカンボシC15遺跡出土動物遺存体

高橋 理 / 千歳サケのふるさと館

## 1. 遺跡の概要

遺跡名: ユカンボシC15遺跡

所在地: 千歳市長都183-1、1190-1ほか

調査原因: 北海道横断自動車道建設工事

事業委託者: 日本道路公団北海道支社

調査主体: 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

調査期間: 平成8年6月26日~10月30日 平成9年5月6日~10月31日

平成10年5月6日~9月12日

調査面積: 平成8年度3,025㎡ 平成9年度8,855㎡ 平成10年度3,000㎡

## はじめに

北海道横断自動車道建設工事にともなう発掘調査が、平成8年から10年にかけて行われた。ここでは近世アイヌ期から旧石器時代の遺物や遺構が検出され、それにとまって多くの動物遺存体も回収された。今回の分析資料は、OB層・IB層より回収された近世アイヌ期・中世アイヌ期・縄文期・続縄文期の遺物である。

筆者に分析の機会をあたえられた第2調査部のスタッフ各位に心より御礼申し上げます。

## 2. 出土動物遺存体

出土した動物遺存体は次のとおりである。遺構・包含層ごとの出土状況は表1~9に記載した。

二枚貝綱 Pelecypoda

古異歯目 Paleoheterodonta

カワシンジュガイ科 Margaritiferidae

カワシンジュガイ *Margaritifera laevis*

腹足綱 Gastropoda

陸産貝類 Land Snail ヒラマキガイType

硬骨魚綱 Osteichthyes

サケ目 Salmoniformes

サケ科 Salmonidae

サケ属 *Oncorhynchus*

コイ目 Cypriniformes

コイ科 Cyprinidae

哺乳綱 Mammalia

偶蹄目 Artiodactyla

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

イノシシ科 Suidae

イノシシ *Sus scrofa leucomystax*

### 3. 各期の考察

#### 1) アイヌ期の動物遺存体

近世アイヌ期の遺構は、H-1・送り場1・灰集中1・焼土・炭化物集中・鍛冶遺構である。

H-1・送り場1と灰集中は一時期の遺構群と考えられている。H-1出土の動物遺存体では、焼土の中に多くのサケ属・コイ科魚類および少量のシカが含まれていた。シカは角片であるが、内部が決られてソケット状の道具に加工されていたと考えられる資料である。H-36の炉では、やはりサケ属魚類の椎骨・脱落歯が検出されている。

送り場1は、擦文期2号竪穴の埋土上層のくぼみに形成されていた。イーロの3ヶ所の灰・炭化物・焼土の広がり認識されたものである。ここに多くの動物・植物遺存体が含まれていた。竪穴が埋まりきらないくぼみに形成されていたこと、銅製煙管の雁首と吸い口が残されていたことなどから「送り場遺構」と判断されたものと考えられる。

多量の動物遺存体は、カワシシジウガイの殻皮のほか多くのサケ科、サケ属魚類であり、硬骨魚類としたものについてもほとんどが同科あるいは同属に帰属するものと考えられる。ここに哺乳動物としてシカが追加されるが、その数はわずかである。

1点ではあるが偶蹄目イノシシ科の動物が含まれていたことは注目されるだろう。これは左第二中手骨の近位端から骨幹であり、位置が少し離れていた2点が接合したものである。北海道の近世・中世のアイヌ期の遺跡・遺構においてイノシシ科動物が確認されたのは、これが最初の事例と考えられる。近年、市内ウサクマイN遺跡において擦文期のイノシシ科動物が認められた(金子:2001)が、さらに下った近世アイヌ期の送り場において検出されたことの意義が小さくない。

ただ近世という時期になると、ニホンイノシシとブタ(*Sus scrofa domestica*)の双方の可能性を考えなければならない。この点について中足骨一部から判断することは容易ではないが、第一足根骨との関節面がイノシシ標本より小さいことを指摘できる。この点についてはさらに多くのサンプルとの比較が必要である。むしろ、近世北海道における家畜導入に関する文献資料の渉猟が急務であろう。いずれにしても、北海道においてはイノシシ(イノシシ科)という動物が(相互の連関はまだ分明ではないにしても)縄文時代の前期(高橋・太子:2001)から近世のアイヌ期にいたるまで何らかの形の儀礼行為に深く関わり続けてきたことが明らかとなった。

送り場2についても近世アイヌ期の所産と考えられているが、種類・部位不明の微細骨片が多量に含まれていることがわかっているのみで、詳細は不明である。

炭化物集中は集中10および11がI B上面で確認されているが、サケ属魚類の脱落歯が少量と不明骨片が1点ずつ出土しているにすぎない。

鍛冶遺構は近世初頭アイヌ期の所産と考えられているが、サケ属魚類の椎骨・脱落歯およびシカと考えられる歯冠の破片が認められた。

O BおよびI B上面では焼土の形成が著しい。サケ属・サケ科魚類と少量のコイ科魚類で動物遺存体の主体をなしており、哺乳動物(シカ?)がこれに少量加わる。また、アイヌ期の包含層遺物には、サケ属・サケ科魚類・コイ科魚類にシカ、ごく微量の鳥類が含まれていた。

#### 2) 擦文期の動物遺存体

擦文期の動物遺存体を検出した遺構は、住居・灰集中・周溝のある墓・焼土などである。

2・10・13・14・33号が擦文前期末から中期・後期末までの住居であるが、各時期をとおしてサケ属・サケ科魚類が主体でシカがこれに加わる。椎骨や棘・鱗類が非常に多い一方、脱落歯がごく少ないという特徴は、同期のみならず縄文時代以降を通じての一般的な様相といえるだろう。また、灰集中

2も擦文期であるが、ここでもサケ主体の遺存体にコイ科魚類が多少混じり込むという状況である。やはり椎骨に比して脱落歯が過少であるといえるだろう。

擦文前期末の周溝のある墓では、墓墳の壙底南東部より細かく破砕した歯冠が検出されている。まったく被熱されておらず、ヒトの歯冠であると考えられる。

焼土は擦文期から中世アイヌ期にわたる時間幅をもっているようである。ここにおいても、住居と同様サケ属・サケ科魚類が卓越する。シカの指趾骨、種子骨などの末端骨、角片などが微量に含まれる。

### 3) 続縄文期の動物遺存体とまとめ

続縄文期の焼土が26ヶ所検出されている。これらは台地北中央および中央西寄りに位置しており、後北A式期の古い段階から後北B、C<sub>1</sub>式期および北大<sub>1</sub>式期にあたるという。

F-1は構築層からはI B下部であるが、伴出土器よりI B上層の北大<sub>1</sub>式期と判断されている。ここでは多くの哺乳類骨片に混じり、ヒグマの尾椎が1点検出されている。

F-1以外については、後北A(古)式期から北大<sub>1</sub>式期に帰属する。これらはサケ科魚類を包含する焼土と哺乳類(シカ?)を包含する焼土が極めて明確に分離される。

後北A(古)式期のF-17・37・41・54・69は、出土する動物遺存体は哺乳類に限られサケ科魚類がまったく含まれない。これに対して後北AからB式期にかけての一連の焼土群は、それぞれサケ科魚類と哺乳類を含むグループにはっきりと区別される。すなわち62・65は哺乳類のみを包含し、一方20・25・29・39・60・61はほぼすべてサケ科魚類に限定される。また丘陵上北寄りに62・65が位置し、中央寄りに20から61の焼土が残されるというように位置的にも明瞭なズレが認められる。これは、相互の性格と空間的位置づけが厳格に規定されていたことを示すもので、筆者がすでに何度か指摘してきたところである(高橋:1993, 2002など)

北大<sub>1</sub>式期にいたると、ふたたび哺乳類のみを包含ようになる。直前の北大<sub>1</sub>式期のF-1でもヒグマなどの哺乳類のみを出土する。少なくともユカンボシC15遺跡が立地する丘陵においては、続縄文期の各時期ごとの遺跡の性格において以上のようないくつかの推移があったのであろう。後北A(古)式期には捕獲哺乳類の処理を行う場として、後北A～B式期では同時に河川資源の利用・処理の場として、また北大<sub>1</sub>以降<sub>1</sub>式期までは再び哺乳類の処理を行う場としての性格を付与されたと考えられる。哺乳類についてはシカを主体としていた可能性が高い。擦文期までを再考すれば、該期にいたり河川資源利用に格段の大きく比重を置く生業形態に移行したらしい。

以上のように、ユカンボシC15遺跡は、続縄文期～擦文期にいたるまで「陸上資源利用」と「河川資源利用」の場のあいだを大きな振幅をくり返しながら変遷してきた。さらに言うならば、より複雑な生業形態・儀礼体系の成立に基づく空間構造をもつ場の構築が、同じ丘陵上の近世アイヌ期において実現したと考えられる。

### 引用文献

- 金子宏昌(2001)『ウサクマイN遺跡出土の動物遺体』『千歳市 ウサクマイN遺跡』①北海道埋蔵文化財センター pp.237-280  
 高橋 理(1993)『恵庭市ユカンボシE9遺跡出土動物遺存体』  
 『ユカンボシE9遺跡 ユカンボシE3遺跡』恵庭市教育委員会 pp.127-130  
 高橋 理・太子女(2001)  
 『白老町虎杖浜2遺跡出土動物遺存体』『白老町 虎杖浜2遺跡』①北海道埋蔵文化財センター pp.181-190  
 高橋 理・太子女(2000)『恵庭市西島松5遺跡出土動物遺存体』  
 『恵庭市 西島松5遺跡』①北海道埋蔵文化財センター pp.629-651

2 千歳市ユカンボシC15遺跡出土動物遺存体

住居

サブシ No.	遺跡名	層位など	日付	調査区	その他	出土動物遺存体	出土部位	数量	備考
1	K-1	0g 901	97.6.16	906a	近江アラスカ 大規模	ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	95	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	4	
2						ウツ鼠 <i>Selatosalmus</i>	罎・樽巻付	14	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	189	
3						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	15	
4		902	97.6.14			ウツ鼠 <i>Selatosalmus</i>	罎・樽巻付	203	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	2	
5			97.5.16			ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
						ウツ鼠 <i>Selatosalmus</i>	罎・樽巻付	87	
49	K-36	1g 901 部	98.6.19	726a	アイヌ文化圏	ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	12	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	249	
465	K-2	1g 901 部	97.6.18	816a	縄文前期末	ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	24	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	26	
1230						ウツ鼠 <i>Selatosalmus</i>	罎・樽巻付	39	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	59	
267	K-19	1g 遺跡土塊 部	97.7.4	167b	縄文前期末	ウツ鼠 <i>Selatosalmus</i>	罎・樽巻付	124	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
2573	K-13	1g 遺跡土塊 部	97.6.27	249c 250a	縄文前期末	ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
3574		遺跡土塊 部	97.7.26	154・155M 156a		ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	14	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
1610		遺跡土塊 部	97.5.7			ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	3	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
1613		遺跡土塊 部	97.5.7			ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
1382		遺跡土塊 部	97.5.18			ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
1381		遺跡土塊 部	97.5.18			ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	2	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
1454		遺跡土塊 部	97.5.19			ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
1535		遺跡土塊 部	97.6.27			ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
1543						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
1516						ウツ鼠 <i>Selatosalmus</i>	罎・樽巻付	16	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	16	
1571		遺跡土塊 部				ウツ鼠 <i>Selatosalmus</i>	罎・樽巻付	2	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	21	
1572						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	4	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	187	
1573						ウツ鼠 <i>Selatosalmus</i>	罎・樽巻付	21	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	20	
1581		遺跡土塊 部	97.6.28			ウツ鼠 <i>Selatosalmus</i>	罎・樽巻付	1	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	19	
1563		遺跡土塊 部	97.5.18			ウツ鼠 <i>Selatosalmus</i>	罎・樽巻付	266	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	21	
1589	K-14	1g 遺跡土塊 部	97.7.31	726a	縄文前期末	ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	6	
						ウツ鼠 <i>Selatosalmus</i>	罎・樽巻付	52	
1592						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	14	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	27	
1593			97.6.1			ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	16	
1691						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
						ウツ鼠 <i>Selatosalmus</i>	罎・樽巻付	7	
1603						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	
1599		大丸様土 塊部	97.7.31			ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	19	
						ウツ鼠 <i>Selatosalmus</i>	罎・樽巻付	23	
1594		大丸様土 塊部	97.6.6			ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	15	
						ウツ鼠 <i>Selatosalmus</i>	罎・樽巻付	42	
1600						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	79	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	174	
2533	K-28	1g 遺跡土塊 部	97.10.16	126a・126b	縄文文化圏	ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	89	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	47	
2535						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	4	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	4	
2526						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	52	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	44	
2542						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	165	
						ウツ鼠 <i>Reithrodontomys</i>	樽巻付	1	

焼土

サンプル 品名	遺構名	層位	日付	調査所	時期	出土動物遺体	出土層位	数量	備考
9	F-7	0-18.1.10	97.3.19	338a	アイヌ文化期	ツノ属 <i>Oxyechinus</i> ツノ属 <i>Oxyechinus</i> 硬骨魚類 <i>Osteichthyes</i> ツノ属 <i>Oxyechinus</i> 硬骨魚類 <i>Osteichthyes</i> 不明	獣骨層 硬骨層 19-20号溝 硬骨層 硬骨層 20号溝	4 24 1 17 4 15	4 硬骨層 4 硬骨層 1 硬骨層 1 硬骨層 1 硬骨層 1 硬骨層
13									
19	F-4	0-18.1.10	97.3.19	338b・338c・338d	アイヌ文化期	ツノ属 <i>Oxyechinus</i> ツノ属 <i>Oxyechinus</i> 硬骨魚類 <i>Osteichthyes</i> 哺乳類 <i>Mammalia</i> ツノ属 <i>Oxyechinus</i>	硬骨層 硬骨層 硬骨層 20号溝 20号溝	4 29 14 1 15	4 硬骨層 29 硬骨層 14 硬骨層 1 硬骨層 15 硬骨層
20									
21									
22									
23									
24			97.3.20			ツノ属 <i>Oxyechinus</i> 哺乳類 <i>Mammalia</i> ツノ属 <i>Oxyechinus</i> 哺乳類 <i>Mammalia</i> ツノ属 <i>Oxyechinus</i>	硬骨層 20号溝 20号溝 20号溝 20号溝	1 1 1 1 1	1 硬骨層 1 硬骨層 1 硬骨層 1 硬骨層 1 硬骨層
26									
27									
28									
29									
30									
31									
32									
33									
34									
35									
36									
37									
38									
39									
40									
41									
42									
43									
44									
45									
46									
47									
48									
49									
50									
51									
52									
53									
54									
55									
56									
57									
58									
59									
60									
61									
62									
63									
64									
65									
66									
67									
68									
69									
70									
71									
72									
73									
74									
75									
76									
77									
78									
79									
80									
81									
82									
83									
84									
85									
86									
87									
88									
89									
90									
91									
92									
93									
94									
95									
96									
97									
98									
99									
100									
101									
102									
103									
104									
105									
106									
107									
108									
109									
110									
111									
112									
113									
114									
115									
116									
117									
118									
119									
120									
121									
122									
123									
124									
125									
126									
127									

2 千歳市ユカンボシC15遺跡出土動物遺存体

シラフ 番号	遺構名	層位	日付	調査区	時期	出土動物遺存体	出土部位	数量	備考
1290	F-109	1st 遺・①	97.8.4	F104	アイヌ文化期	オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	4	
1291		5層				餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋存・埋込	29	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	4	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	4	
1298						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋存	1	1298
1299						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋存	1	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	2	
						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	36	
1300						埋込不明 <i>Nonid. sp.</i>	埋込不明	1	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	11	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	1	
						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	11	
1416	F-119	1st 遺	97.8.20	F174	アイヌ文化期	オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	14	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	2	
						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	2	
1426			97.8.21			オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	14	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	2	
32	F-394	13.2.4	98.6.10・20	G106	アイヌ文化期	餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	6342	遺構付
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	144	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	154	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋・餅草付	1203	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	24	
						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	1244	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	26	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	2	
38	F-285	13.2.4	98.6.20	G104	アイヌ文化期	餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	2	
16	F-390	13.2.4	98.6.20	G106	アイヌ文化期	オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	1	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	2	
56						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	2823	遺構付
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	40	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋・餅草付	1828	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	15	
64						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	3374	
						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	148	
15	F-91	14.2.10	98.6.20	G104	アイヌ文化期	オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	544	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	68	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋・餅草付	849	
						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	4	
12	F-263	14.2.10	98.6.21	M14d	アイヌ文化期	オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	80	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	86	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋・餅草付	86	
						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	34	
						埋込不明 <i>Nonid. sp.</i>	埋込不明	8	
40	F-296	14.2.10	98.6.21	G12a・G12b	アイヌ文化期	オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	42	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	25	
						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	25	
13	F-402	14.2.10	98.6.24	M14・S10	アイヌ文化期	餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	382	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	10	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋・餅草付	320	
						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	25	
177	F-407	14.2.10	98.6.24	G13a	アイヌ文化期	オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	17	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	52	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	12	
						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋・餅草付	28	
						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	20	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	11	
12	F-9	14.2.10	97.6.20	S17d・G14a	縄文文化期	オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	12	
32	F-9	14.2.10	97.6.20	G12f・G16a	縄文文化期	オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	14	系統色
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋・餅草付	14	
24	F-13	14.2.10	97.6.20	G17	縄文文化期	餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	35	
26						ハシラシラ <i>Ceras alpinus</i>	埋存付 埋・中埋付	5	
						埋込不明	1		
						ハシラシラ <i>Ceras alpinus</i>	埋存 埋存	1	
						ハシラシラ <i>Ceras alpinus</i>	埋存	1	
						埋込不明	18		
						埋込不明 <i>Nonid. sp.</i>	埋込不明	1	
						埋存	1		
						埋込不明	14		
25	F-14	14.2.10	97.6.20	G17	縄文文化期	オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	482	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	27	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋・餅草付	27	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	421	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	38	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋・餅草付	117	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	29	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	10	
						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	1	
28	F-15	14.2.10	97.6.20	G17c	縄文文化期	オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	151	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	21	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋・餅草付	71	
40						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	52	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	15	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋・餅草付	81	
						埋込不明	1		
198	F-49	14.2.10	97.6.20	G14a	縄文文化期	オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	123	
215	F-52	14.2.10	97.6.20	G14a	縄文文化期	オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	17	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋・餅草付	17	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	5	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	292	
						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	29	
206			97.6.4			オナモミ <i>Oenothera</i>	埋・餅草付	313	
206						オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	8	
212	F-56	14.2.10	97.6.21	G16a	縄文文化期	オナモミ <i>Oenothera</i>	埋存	2	3点埋込
						餅草白根 <i>Stachytarax</i>	埋込不明	1	







サンプル No.	産地名	種別	月付	調査区	時期	出土動物群体系	出土層目	数量	備考
76	送り堀 1	18.2.21	37. 5. 21	Sike	近世アイヌ 文化層	哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	6	
79				Sike - Sakai		ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳不明	61	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳不明	10	
						小型ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳	3	
						ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳・哺乳科	36	
						インシ <i>Sar serefa Inosentia</i>	鳥・中世鳥 古 野鳥	1	哺乳科、同一層
53				Sike - Eki		哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	13	
						ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳不明	1	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳不明	4	
						ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳・哺乳科	25	
						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	1	
						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	14	
43				Eki		ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	65	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	9	
						ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳・哺乳科	47	
						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	2	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	61	
98						小型ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳	7	
						ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳・哺乳科	28	
						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	3	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	4	
123			37. 5. 21			哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	4	
						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	4	
84			37. 5. 21			哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	17	
73						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	67	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
						ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳・哺乳科	14	
						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	21	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳不明	1	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	4	
						ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳・哺乳科	57	
						ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>	哺乳下科 鹿	1	
56				Sike		哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	6	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	6	
						小型ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳	1	
						インシ <i>Sar serefa Inosentia</i>	鳥・中世鳥 古 野鳥	1	哺乳科、同一層
47						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	11	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	11	
						ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>	哺乳下科	1	
73						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	6	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	7	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
						ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳・哺乳科	33	
						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	6	
78						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	6	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
						小型ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳	1	
						ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳・哺乳科	26	
240			37. 5. 21	Eki		哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	16	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
						ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳・哺乳科	26	
						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	3	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
						ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳・哺乳科	1	
						ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>	哺乳下科 鹿	1	
						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	1	
83						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	36	
						小型ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳	1	
						ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳・哺乳科	26	
						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	1	
238			37. 5. 21	Eki + Eki		哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	17	
						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	43	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
						ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳・哺乳科	1	
						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	1	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
202			37. 5. 21	Sike		ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳・哺乳科	1	
302			37. 5. 21			ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
276			37. 5. 21	Eki		ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
91						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
112						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
95						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
116						ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳・哺乳科	1	
191			37. 5. 21	Sike		ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
						ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
						ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳・哺乳科	1	
						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	1	
						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	1	
281			37. 5. 21			ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>	哺乳下科 鹿	1	
107				Eki		ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
104				Sike		ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	1	
193			37. 5. 21	Sike		ウサギ <i>Oryzomys</i>	哺乳科	1	
						ウサギ <i>Salmosia</i>	哺乳・哺乳科	1	
						哺乳綱 <i>Mammalia</i>	哺乳不明	1	

2 千歳市ユカンプシC15遺跡出土動物遺存体

サンプルNo	遺体名	層位	目付	調査区	時期	出土動物遺存体	出土部位	数量	備考
194	遺体1	187.2	97.8.23	306a	古ブアイヌ文化層	ヤクニク <i>Oncorhynchus</i> 鳩瓦鱈 <i>Nemotus</i>	埋蔵土層	4 14	
190						ヤクニク <i>Oncorhynchus</i> ヤクニク <i>Schizothorax</i>	埋蔵土層 埋蔵土層	15 23	
301			97.8.23	306a + 306b		鳩瓦鱈 <i>Nemotus</i> ヤクニク <i>Oncorhynchus</i> ヤクニク <i>Oncorhynchus</i> ヤクニク <i>Schizothorax</i>	埋蔵土層 埋蔵土層 埋蔵土層 埋蔵土層	23 11 11 3	
270						磯伊呂波鱈 <i>Interichthys</i> イロシシガニ <i>Exopalaemon</i>	埋蔵土層 埋蔵土層	1 1	2点確認
154			97.8.24	329a		磯伊呂波鱈 <i>Interichthys</i> イサ	埋蔵土層 埋蔵土層	1 1	
97	遺体2	187.2	98.6.12	314a	アイヌ文化層	イサ	埋蔵土層	120	自動撮影 撮影

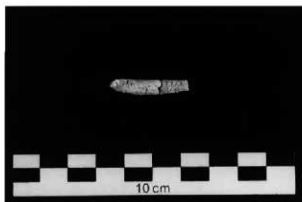
遺跡出土の軟体動物

サンプルNo	遺体名	層位	目付	調査区	時期	種名	部位	数量	備考
53	遺体1	187.2	97.8.23	306a	古ブアイヌ文化層	カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i> カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵 埋蔵	埋蔵多数 埋蔵多数	
68				306d		Land Shell 1798 (Type)	埋蔵	1	
72						カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	3 (埋蔵)	
87			97.8.22			カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	1 (埋蔵)	
190			97.8.23			カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	7 (埋蔵)	
83						カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	埋蔵多数	
85				306a + 306b		カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	5 (埋蔵)	
397				306b		カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	埋蔵多数	
503			97.8.22			カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	1 (埋蔵)	
273				306a		Land Shell 1792 (Type)	埋蔵	1	
112				306d		カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	1 (埋蔵)	
106				306d		カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	1 (埋蔵)	
99						カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	1 (埋蔵)	
241				329a + 329b		カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	埋蔵多数	
209				306a		カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	1 (埋蔵)	
58	遺体2	187.2	98.6.12	314a	アイヌ文化層	カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i> カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵 埋蔵	埋蔵多数 埋蔵多数	

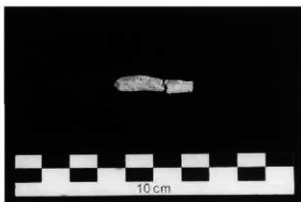
包含層の軟体動物

サンプルNo	層位	目付	調査区	種名	部位	数量	備考
333	187.2	97.8.11	306b	カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	1	確認済
334	187.1	97.8.11	306b	カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	378	確認済
335	187.1	97.8.11	306b	カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	1	確認済
336	187.1	97.8.11	306b	カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	1	確認済
337	187.1	97.8.11	306b	カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	23	確認済
338	187.1	97.8.11	306b	カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	4	確認済
339	187.2	97.8.12	306a	カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	1	
338	187.1	97.8.12	306a	カワランシロゴイ <i>Margaritifera Janata</i>	埋蔵	1	埋蔵済

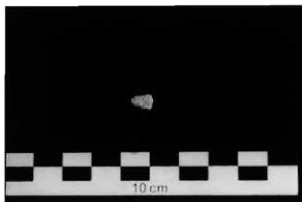




イノシシ科 第二中手骨 近位端から骨幹



(表面)



ニホンジカ

角方



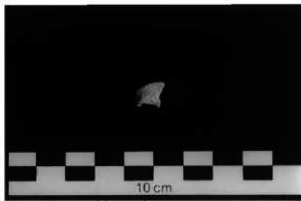
ニホンジカ

角片



ニホンジカ

基節骨 近位端



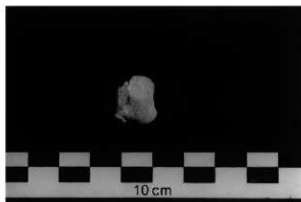
ニホンジカ

種子骨



ニホンジカ

撓側手根骨



ヒグマ

尾椎

## 3 出土木製品の樹種識別における現状と課題

独立行政法人 森林総合研究所 平川 泰彦  
財団法人 北海道埋蔵文化財センター 菊池 育子

当遺跡では、1万点以上の加工の見られる木製品について樹種識別を行ったが、サンプル数の増加に伴い、識別が難しい事例も増えてきた。有用樹種の材鑑標本で見られるような典型的な木部の組織構造であれば、特に識別に問題はないが、文献でも情報が得られないような観察事例もかなり多く、植生などから判断してある程度の確率である樹種が予想されたとしても、確実性に乏しいので、結果的には同定が困難であると結論せざるを得ない場合が多々あった。その主な原因としては、情報が少ない低灌木類の樹種が混じっていること、あて材や樹病などにより形成されたこぶのような異常組織が混じっていること、枝や根及び髄の近くなど組織構造の変異の大きい部位が利用されていること、さらに同一樹種でも立地環境などによる組織構造の変異などがあることが考えられる。これらについては、一般に公開されている情報も少なくかつ標本も簡単に入手できないので、識別は簡単ではなかった。

また、一般に走査電子顕微鏡 (SEM) レベルで観察される仮道管の分野壁孔、道管要素のらせん肥厚やいぼ状層のような微細構造は、有力な識別情報になるにも拘わらず、出土材の樹種鑑定は光学顕微鏡で行われる場合が多いため、電子顕微鏡レベルでの研究報告が少なく情報に乏しいことも大きな問題であると考えられる。炭化材をフロ-テイング法で観察する事例が、今後とも増えることは確実であると考えられるので、その点においてもSEMの活用と情報の充実を考えていく必要がある。

ここでは、以上のような識別上の問題点と今後解決すべき点について、現時点で気がついた事柄について述べてみたい。

## 1) 低灌木、つる類の材鑑標本と組織構造に関する情報の収集

有用樹種の材鑑は当センターでもかなりの点数を所有しており、それに関する組織関係の情報も一般解説書などで入手することが可能であるが、低灌木類及びつる類の材鑑標本は少なく、識別に有用な文献もきわめて少ない。最近では、伊東による報告書 (伊東1995~1999) が貴重な文献となっているが、スベ-スの関係もあり写真数がさほど多いわけではなく、各現場での実際の識別時には可能性のある樹種が数属にわたってしまう場合も多々あるものと推定される。森林総合研究所では標本収集と観察が進み、近々デ-タベ-ス情報が公開される予定であるので公開が待たれるところである。

低灌木及びつる類に限ったことではないが、現時点では、出土材関係を含めていくつかの文献に当たった場合、識別基準が観察者の主観により変わりうる場合や情報の混乱が散見される。例えば、前節でも述べたように、サルナシ (マタビ属) の組織構造については、各報告で不一致が多く見られ (宮本1996, 能城ら1996)、未だに統一的な見解は出されておらず、針葉樹の分野壁孔についての記載は、多くの文献では壁孔は大きい・小さいというような記述がされている。やはり実際に現生種の材鑑標本を集め同定者自身の目で確かめることが重要であるため、当センターでも低灌木及びつる類の材鑑標本の収集を行なっているが、今後とも組織構造に関する情報の充実が望まれるところである。

## 2) あて材などの異常組織に関する情報

あて材に関する研究報告は極めて多いが (Timell 1986, Perem 1964)、その他の異常組織に関する

報告は少ない。また、あて材を含めて異常組織に関しては、樹種識別という観点から研究が行われているわけではない。単なるあて材研究に関する情報は極めて多く問題ないが、その他の異常組織も含めて、識別の観点から研究・解説された報告は極めて少なく、今後とも情報の収集と充実が望まれるところである。

あて材は、出土材の加工品のサンプル中にも頻りに認められ組織構造変異も大きいので、その特徴と識別時に問題となる点をまとめてみたい。あて材とは、風・雪のためや傾斜地等に成育していたことにより曲げられた樹幹を元の位置に戻すために形成されるやや特異な組織のことで、針葉樹のあて材を圧縮あて材、広葉樹のあて材を引っ張りあて材といい、両者では組織や性質が異なっている。圧縮あて材では、肉眼的には材が濃色で重くなり晩材率が高いようにみえること（写真1）、顕微鏡レベルでは、仮道管が丸みをおびること（写真2）、仮道管壁にらせん状の裂け目ができ（写真3）であたかもらせん肥厚のように見えることがあること、さらには仮道管の壁孔がレンズ状やスリット状になり本来の形と異なることなどが特徴である。分野壁孔は、スギでもトウヒ型のように見え、腐朽が入った材ではらせん肥厚が存在するかのように見えることが多い。

一方、広葉樹の引っ張りあて材では、肉眼的には材が白っぽく光って見えること（写真4）、顕微鏡レベルでは木部繊維の細胞壁が一部欠落する場合があり、その内部にはゼラチン層（G層、写真5）と呼ばれる主にセルロースから成る層ができ、ゼラチン繊維が増えることなどが挙げられる。道管数が減るので木口面の形状が正常材と異なることが多いが、道管の構造が大きく変わるようなことはなくらせん肥厚の形態などが大きく変わる例は報告されていない。

壁孔の孔口の形が大きく変化することから、樹種識別時に特に問題となるのは針葉樹の圧縮あて材であるが、出土遺物の識別に際しても、分野壁孔の観察が難しい場合が多くなるなど極めて影響が大きかった。あて材は、一般に局部的に生ずるので、識別にはあて材を避けて切片を採取すれば良いのだが、実際には遺物が小さくて全面あて材である場合やあて材を避けても製品の重要な加工部分を簡単に切削するわけにはいかないことなどの問題があった。低灌木類及びつる類と同様に、識別の観点から研究した情報の充実が待たれるところである。

### 3) 樹体内の部位の違いによる組織構造の変異 <枝、根、隣近くの組織（未成熟材）>

当遺跡の樹種識別で最も難しかったのが、典型的な主幹（幹）の木部組織と枝及び根の組織との違いであった。逆にいえば、枝や根は、かなりの頻度で利用されていることが明らかになってきた。枝と根とを比較した場合、枝の組織構造は根よりも主幹のそれと類似しているが、根の場合には樹種にもよるがかなり大きな変異があった。しかし、枝の組織が主幹のそれと類似しているといっても、例えばハリギリとコシアブラのような同じ科に属する樹種では枝でさえも識別が難しいものもあった。さらに、枝と根の組織構造についてはほとんど公開された情報がないので、識別には著者らが収集した標本を用いたが、様々な変異があることが明らかになってきた。以下には、いくつかの樹種を例にとって、主幹材と枝材及び根材との組織構造を比較してみる。

広葉樹の環孔材では一般に、木口面での道管配列が枝ではやや半環孔状になり、根では完全な散孔状になる例が多かった。まず、ニレ属（オヒョウとハルニレ）について比較してみる。オヒョウの主幹材（写真6・7）、枝材（写真8・9）と根材（写真10）、さらにはハルニレの主幹材（写真11・12）と根材（写真13・14）とを比較してみると、道管の配列が枝では半環孔状、根では不規則な散孔状になっていた。しかし、根では部分的に環孔状、半環孔状や散孔状になるようで一定でなく（写真13）、ニレ属の根材と同定した出土材では（写真15・17）、同じ遺物試料から採取した切片でありながら、採取



部位がわずかに異なるだけで道管配列が異なっていた。

また、環孔材であるイヌエンジュの枝材(写真18・19)と根材(写真20・21)やトネリコ属の根材(出土材と現生材の例、写真22・26)及びケヤキの根材では(写真27・29)道管の配列が散孔状になっており、道管数が少なかった。また、トネリコ属では、根材の放射組織が完全な同性ではなかった。

さらに、環孔材であるハリギリの枝材では(写真30・32)主幹材(写真33・35)に比べ、ぬか目状で年輪境界が不明瞭になっており、孔圏道管の直径が小さく、配列も不揃いとなっていた。また、板目面における放射組織は幅が狭く細長くなっていた。出土材の例を示せば、主幹材に典型的な幅の広い放射組織や規則的な小道管配列を持たず、おそらく髄近く幼齢時に形成されたと推定されるもの(写真36・38)や枝材(写真39・41)と考えられるものが認められている。

一方、主幹で道管が半環孔状に並ぶコシアブラの主幹材と枝材とを比較してみると、主幹材に(写真42・44)比べて枝材では(写真45・47)道管の配列がより環孔材に近く、板目面で見ると放射組織の幅が狭い傾向があった。組織構造がハリギリの枝材と類似しているため、コシアブラの枝材は、採取部位によってはハリギリと区別がつきにくい場合があった。このため、ハリギリの髄近くの幼齢時に形成された材及び枝材とコシアブラのそれらとの区別は、孔圏外の道管数が少なくても、わずかでも規則的に斜線状、接線状や波状に配列しているものをハリギリとすることを識別基準とした。

さらに、主幹では環孔状に道管が配列するミズナラ及びコナラでは、枝材では環孔状であるものの、根材では放射状により近い配列をすることが特徴であり、放射孔材に近い配列となっていた(写真48・51)。また、放射組織も2列で複列のものが混じり、広放射組織の幅が小さく高さも低くなっていた。また、マテバシイの根材でも道管は放射状に配列していた(写真52・53)。

一方、散孔材においては、枝と根の双方ともに道管配列は全て散孔状でとくに変化はないので、木口面では環孔材ほどの大きな違いはなかった。しかし、主幹材に比べて枝材と根材では、道管径が異なる、放射組織の幅と高さが異なるなどの例が見られた。これらの例として、現生のナナカマドの主幹材(写真54・55)、枝材(写真56・57)及び根材(写真58・59)、さらには現生のカツラの主幹材(写真60・61)、枝材(写真62・63)及び根材(写真64・65)、さらにはヤマナラシ類の根材の写真(写真66・67)を示した。根材では一般に髄を欠くといわれているが(莉住1978)、ヤマザクラの根材では髄組織が存在するように見え(写真68・70)今後確認の必要があるものの興味深い。根材についての情報が極めて少ないことから今後の参考資料とするため、当センタ-が収集した標本のシラカバ(写真71・72)汁タコブシ(写真73・74)及びイタヤカエデ(写真75・76)についても顕微鏡写真を示した。

また、針葉樹についてみると、組織は広葉樹に比べて単純なので、主幹材と枝材とは基本的な組織は大きく異ならないが、枝材では仮道管直径が一般に小さいために分野壁孔の数や形が変わり、あて材が多いなどの変化が認められた。根材については細胞壁構造に変異が現れるとの報告(高宮ら2001, 福永ら2002)があるが、情報は極めて少ない。針葉樹の根や枝材についても樹種識別という観点から研究を行っていく必要があるだろう。

また、針葉樹では、一般に未成熟材と呼ばれる髄近くの通常の木部とはやや性質の異なる部分がある。通常は髄から半径7・8cm程度の円筒状に存在するが、繊維の長さが短く、マツ類では密度が低いがスギやヒノキでは逆に密度が高いなどの特徴がある。スギでは、細胞直径が小さく壁が厚いので分野壁孔の形が通常の主幹材と大きく異なるため識別時には注意が必要である。特に小径材では、全てが未成熟材であると言っても過言ではない。スギの未成熟材における分野壁孔の違いについては、『千歳市 ユカンボシC15遺跡』③北理調報146集p.375～p.390において述べたので詳細については省略する。

#### 4) 立地環境による組織構造の違い

立地環境による組織構造の違いについての研究例は少ない。広葉樹の道管径が、同属の異なる樹種間で緯度によって異なるといったような報告 (Bass 1973) はあるが、必ずしも立地環境が要因とは断定できない面もあり、今後の研究が待たれるところである。

同じ樹種を高地と低地に植えて組織構造と材質を比較したような研究はかなり行われているが (Ezellら1967) 樹種識別に影響を与えるような例えば異常組織に変化するような過酷な条件でない限り、特に著しい組織変化は知られていない。あて材や異常組織を形成するような場合以外は、特に問題となることは少ないであろう。

#### 5) 微細構造に関する情報 (走査電子顕微鏡研究の必要性)

針葉樹と広葉樹ともに、光学顕微鏡レベルでの観察に加えて、電子顕微鏡レベルで観察すれば、識別に際して極めて有効な情報を得られる組織構造が知られている。それらは、針葉樹材の分野壁孔はもちろんであるが、仮道管、道管要素及び木部繊維 (繊維状仮道管など) に見られるらせん肥厚、いぼ状層 (大谷ら1979) 、ベスチャー・ド壁孔などである。

針葉樹では、分野壁孔のタイプや大きさが識別の重要な根拠となるが、文献によって記載内容に違いのある場合があり、分野壁孔は「大きい」「小さい」というような主観的な表現も多く、実際の識別は簡単ではない。当センターでも現生の材鑑標本を用いていくつかの樹種について分野壁孔のタイプ分けと孔口径の測定を行い、定量的な識別の可能性について検討し報告 (前出報告書) した。スギについては枝や髓近くの未成熟材部を含めて測定を行い、ある程度の傾向を明らかにしたが、定量的に誰でも同じ答えを出せるような状況には至らなかった。さらに、出土材では、腐朽した材や劣化の著しい材も多く、定量的な評価にはいくつかの問題が残されており、今後とも研究の必要がある。

らせん肥厚は、通常光学顕微鏡レベルで観察可能であるが、広葉樹材の道管にしばしばみられるような糸線と呼ばれるようなごく細い隆起線のようなタイプのもものでは、電子顕微鏡レベルでなければ観察が難しいものも多い。また、いぼ状層は、針葉樹ではスギやヒノキの仮道管に、広葉樹ではブナの小道管やサワフタギの木部繊維などに認められる微小な粒状の突起を含む肥厚である。通常、光学顕微鏡では観察できず、SEMでの観察が必要であるが、いぼ状層はリグニンが多いことが知られており、かなり腐朽した試料でも残存している場合が多く観察が比較的行ないやすいという利点もある。ベスチャー・ド壁孔もいぼ状層に類似した構造物で、これはマメ科植物などで認められている。

光学顕微鏡レベルで識別が難しい場合には、らせん肥厚やいぼ状層は識別の有力な情報になる。例えば、ガマズミなどは、散孔材で複列の異性放射組織を持ち、道管には階段せん孔を持つが、このタイプの組織構造を持つ樹種は数が多く、これらの樹種が典型的な主幹材でなく枝などが混じって出土した場合などには識別がかなり困難になる。北海道に自生する樹種の中では、ミツバウツギ属のミツバウツギ、キブシ属のキブシ、ミズキ属のミズキ、ハイノキ属のサワフタギ、エゴノキ属のハクウンボク (この他にエゴノキなど) 、ガマズミ属のカンボク (この他にオオカメノキ、ガマズミ、ミヤマガマズミなど) 、タニウツギ属のハコネウツギ (その他にタニウツギなど) 等が挙げられるであろう。これらを光学顕微鏡レベルで識別する場合には、例えばミツバウツギ属では放射組織の幅が広いこと、これらの属間では例えば道管と軸方向柔細胞の壁孔の形が異なるなどの特徴を参考にすることが識別は簡単ではない。

そこで電子顕微鏡レベルでらせん肥厚やいぼ状層を観察し属ごとにまとめると結果は表1のようになる。サワフタギでは、木部繊維にいぼ状層が認められ (写真77) 、さらに道管の壁孔の周囲には対

をなす(ベアの)細いらせん肥厚が認められる(写真78)特徴がある。また、ミツバウツギの木部繊維にもいば状層が認められ(写真79)、道管の壁孔の周囲には細いらせん肥厚が存在する(写真80)。一方、キブシとハコネウツギでは、一部の木部繊維と道管要素にらせん肥厚が認められるが(写真81・82)いば状層は認められない。さらに、カンボクの道管要素には通常らせん肥厚を認めにくい(写真83)。大谷らは同属のガマズミとサンゴジュでは認められることを報告している。これらの樹種については、さらに詳細な研究が必要であるが、表1のような情報を得るだけでも、識別において

表1 7属の道管要素と木部繊維におけるらせん肥厚といば状層の有無

属名	種名	らせん肥厚 道管要素	木部繊維	いば状層 道管要素	木部繊維
ミツバウツギ属	ミツバウツギ	○	—	—	○
キブシ属	キブシ	△	△	—	—
ミズキ属	ミズキ	△	—	—	—
ハイノキ属	サワフタギ	○	—	—	○
エゴノキ属	ハクウンボク	—	—	—	—
ガマズミ属	カンボク	△	—	—	—
タニウツギ属	ハコネウツギ	△	○	—	—

○ 約90%以上の細胞で認められる

△ 約10%以下の細胞でのみ認められる

の有無は有効な識別根拠となる。ハギ属やイヌエンジュ属などのマメ科の樹種では、ベスチャー・ド壁孔(写真84・86)の存在をSEMで確認することが有効であるし、クマシデ属の特徴的ならせん肥厚の形態なども極めて有力な情報となる。しかし、一方では、出土材は泥などの物質が付着したり残存している場合も多く、試料の洗浄などに手間がかかるなどの問題もあった。

また、既往の文献で報告されている識別根拠の不一致においても、光学顕微鏡と電子顕微鏡レベルの観察のような手法の違いが主な原因であると推定されるものもあった。クマシデ属の中で、能城らはアカシデなどが単せん孔、クマシデなどは階段せん孔のみをもつと報告しているのに対して、大谷らと伊東は双方とも階段せん孔と単せん孔を持つと報告している。大谷らの報告(電子顕微鏡観察)では、アカシデには単せん孔以外のものがあり(写真87・89)、階段のバ・の数が少なかったり、バ・が途中で途切れたりと不完全ともいえる階段状のものが認められるとされている。これまでの報告における結果の不一致は、おそらくこれらを階段せん孔と呼ぶか単せん孔と呼ぶかの違いであろうと推察される。

これまでの報告に著者らの観察を加え結果をまとめると、バ・の形状が不完全でも階段であることに変わりはないとして、そのようなタイプもここでは階段せん孔に含めることとし、出現頻度が全体の約10%以下程度と低いものを表中で印で示すと、表2のようになった。サウシバについては、単

表2 クマシデ属4種の道管要素における単せん孔と階段せん孔

	大谷ら		伊東		能城ら		まとめ	
	単	階段	単	階段	単	階段	単	階段
サウシバ	—	○	○	○	—	○	—	○
クマシデ	○	○	○	○(○)	—	○	△	○
アカシデ	○	○	○	○	○	—	○	△
イヌシデ	○	○	○	○	○	—	○	△

○ 約90%以上の道管要素で認められる

△ 約10%以下の道管要素でのみ認められる

は有効な手がかりとなることがわかる。

さらに、枝や腐朽した材が混じり、識別が難しいような場合にもベスチャー・ド壁孔、らせん肥厚はいば状層

せん孔のように見えるものでも、電子顕微鏡レベルで観察するとどこかにバ・が不完全ながら存在すると報告されているので(大谷ら1978)単せん孔は存在しないこととして扱っている。文献を整理すると以上のような結果になるが、各文献での結果は異なっており、かつ常に電子顕微鏡での観察が可

能なわけではないので、現時点の実際の同定においてはクマシデ属を一括で扱い、節または種のレベルまでの区別はしないほうが混乱を避ける意味で確実な方法といえるかもしれない(チブニー1遺跡2002、キウス4遺跡2003)。

先に本報告でも述べたように、ヒノキとアスナロについては、基本組織が類似しているの識別が難しい場合があった。そこで、両者の定量的な識別根拠について検討してきたが、その中でも放射組織の高さについて興味深い情報が得られたので、まだデータの収集段階ではあるがここで報告しておきたい。ヒノキとアスナロの識別については、基本組織は極めてよく似ているが、一般にヒノキの分野壁孔がヒノキ型で一分野に2個あるのに対し、アスナロではスギ型に近いものがあり、一分野で3~4個と数の多いのが普通であると報告されている(島地ら1982)。しかし、一般的には、両樹種ともに一分野には2個の壁孔があるのが普通で、ある組織の上端と下端の放射柔細胞に対する分野では、ヒノキに比べてアスナロで3~5個の壁孔が存在する例が多いようである(写真90-91)。しかし、材鑑ではそのような傾向を捉えることができるものの、限られた試料で行なう樹種識別では区別が難しい場合があることは否めない。

そこで、ヒノキとアスナロの分野壁孔の大きさか特に変わらないのにも拘わらず、アスナロでは一分野に二段で配列し数も多い事例が認められる理由として、放射柔細胞の高さはアスナロがヒノキに比べて高いのではないかという仮定の基に、両者の放射柔細胞の高さを測定し比較してみた。

試料は、森林総合研究所所有の材鑑標本1点、青森県産のアスナロ2点、ヒノキは静岡県産の天然木と千代田試験地の造林木の2点である。各試料から柱目面の切片を切り出し、放射組織の高さ(高さ方向に3細胞以上あるもの)を光学顕微鏡で20の放射組織を任意に選んで測定し、高さ方向の数で除して(図1、放射柔細胞の高さ =  $H/N$ )放射柔細胞の高さを計算で求め比較した。切片は、髄から近い側と樹皮側の2ヶ所または、樹皮側だけの1ヶ所から採取した。その結果の一覧を表3に示した。

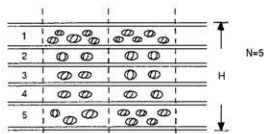


図1 放射柔細胞の高さの測定方法

表で明らかなように、3細胞高以上の放射組織では、ヒノキの放射柔細胞の平均の高さは約15~16ミクロンであるのに対してアスナロでは約18~19ミクロンと大きかった(写真92-93)。一方、2細胞高以下の放射組織では、ヒノキに比べアスナロの値が大きい点において変わりはないが、3細胞高以上のものに比べて値が大きかった(表3、写真94-95)。一般的な傾向としては、放射柔細胞

表3 ヒノキとアスナロの放射柔細胞の高さ

樹種名	採取地	髄からの 年輪数	放射柔細胞の高さ	放射柔細胞の高さ
			(ミクロン) 3細胞高以上	(ミクロン) 1~2細胞高
ヒノキ(1)	静岡県	150	16.7	19.3
ヒノキ(2)	茨城県	5	15.6	17.9
		19	16.0	18.8
アスナロ(1)	材鑑標本	不明	19.9	21.4
アスナロ(2)	青森県	2	18.9	23.0
		30	18.8	20.2
アスナロ(3)	青森県	4	19.9	—
		18	18.2	20.5

の高さは放射組織の上端と下端とで高いので2細胞高だけの放射組織では平均値が大きくなるが、アスナロはヒノキよりも高く、3細胞高以上の放射組織でもばらつきはあるものの平均値はアスナロがヒノキに比べて高い傾

向があるものと考えられる。アスナロでは放射柔細胞の高さが高いために、分野壁孔が二段になって一分野に3〜6個存在する事例が多くなるものと推定される。今後、数を増やして2樹種間で有意な差があるかどうかの確認を行なう必要があるが、放射柔細胞の高さの平均値を定量的な識別の根拠として利用できる可能性がある。方法としては、3細胞高以上の放射組織を柱目面切片で10〜20選んで測定し、平均値を求めて比較するのが確実であろうと考えられる。

#### 6) 樹種識別作業を通じての問題点と注意すべき点

以上に述べてきた以外の樹種識別作業を通じて生じたその他の問題点についていくつかふれてみたい。

##### a) サンプルングの問題

出土材の樹種識別を行なう際には、その遺物が外見上はしっかりしていたとしても、組織構造的には腐朽や劣化などでかなりダメージを受けていることがほとんどであり、組織観察から得られる情報があまりにも少ない場合が多い。このような試料の場合、できるだけ劣化の少ない、しかもあて材などのない正常材の部分から試料を取り、そこからいかに多くの情報を得るかが重要である。しかし、外部依頼試料の場合には、特に識別用のサンプリングが観察者とは別個に行なわれ、かつプレパラート数が少ない事例なども見られ、識別結果に誤りを生じさせる可能性が考えられる。したがって、サンプリングと観察はできるだけ同一人物が行なうことが望ましい。また、サンプリング時には、その遺物が樹木のどの部位から採られたものが、組織の劣化はどのような状態かをよく観察することが必要であろう。

##### b) 種レベルでの同定について

組織構造の特徴から識別できる限界は、一般的に属レベルまでと考えられているが、例えば、自生種が一属一種であるような場合、さらには一属に数種が含まれていても特異的な種の特徴が認められるような場合には、種レベルまでの識別結果を示すことがある。しかし、種レベルまでの同定については、よそから製品としての持ち込みなども考えられるので、細心の注意が必要である。

例えばアジサイ属のノリウツギとツルアジサイの例を示せば、美々8遺跡および当遺跡の初期の報告書(北埋調報128集)では、ノリウツギをアジサイ属として報告してきたが、北埋調報146集からはノリウツギと種名で報告することに変更した。その理由としては、アジサイ属には直立性落葉低木と蔓性木本とがあり、このうち北海道に自生するのは、前者ではノリウツギ、エゾアジサイ、後者ではツルアジサイの3種とされている(岡本ら1981)が、加工品においても木取りなどから3種を区別することが可能と考えられていることによる。ノリウツギは、北海道での自生種であり頻繁に利用されているという民俗例だけでなく、莖ではなく直径5〜10cmの樹幹には強固な木部を形成することからみて他の二者とは異なり、ツルアジサイは蔓性植物である点、また組織構造も他の二者とは異なることから、両者については種レベルまでの同定をして問題ないと判断した。

このような例としては、他にヒノキとサワラ、前項で既述したクマシデ属のアカシデとサワシバなどが挙げられ、前者では分野壁孔の大きさで、後者ではせん孔のタイプで識別がある程度可能であるが、定量的な識別法が確立されているわけではないので注意が必要である。

##### c) 識別及び同定結果の記載方法の統一について

いくつかの遺跡発掘報告書にある樹種同定の結果を比較したときに、同定者それぞれの考え方の違いや参考にした文献の違いなどによって、樹種名等の記載が異なる場合が時折見受けられる。特に、学名の引用においては、近隣の遺跡でありながら、同じ樹種について異なる学名が与えられる場合が

ある。今後は、識別基準の統一も含めて、学名の統一など全国的レベルで同じ方法で識別、結果を記載していくためのマニュアル作りが必要であろう。

#### 7) まとめ

以上に実際の識別における問題点を列記してきたが、より精度の高い識別を行なうには試料の収集と組織構造に関する情報を充実させていく以外に特別な方法はないと考えられる。しかし、そのためには若干の工夫を加えることだけで得られると考えられる情報も多い。例えばSEMの利用などは、典型的な例である。また、分野壁孔の大きさの定量的な評価やその他の組織構造に関する定量的な評価の試みもまだ行いうる余地を残している。今後は、これらについて地道に検討を行っていく必要がある。

#### 参考文献

- 菊住 昇, 根の働きと生長, 林業改良普及叢書69, 全国林業改良普及協会, (1978)
- ④北海道埋蔵文化財センター, 千歳市 チブニー1遺跡・チブニー2遺跡, 北埋調報 第173集, (2002)
- ④北海道埋蔵文化財センター, 千歳市 キウス4遺跡(9), 北埋調報 第180集, (2003)
- 高宮邦仁ら, 針葉樹根材の仮道管長と紡錘形始原細胞長( ), 第51回日本木材学会大会講演要旨集, p.523, (2001)
- 福永大介ら, 針葉樹根材の理化学的性質, 第52回日本木材学会大会講演要旨集, p.523, (2002)
- Baas P., The wood anatomical range in *Ilex* and its ecological and phylogenetic significance, *BLUMEA*, 21, 193-258, (1973)
- Ezell A. W. & Stewart J. L., Variation of sweetgum fiber length within and between upland and bottomland sites, *Wood and Fiber*, 13, 246-251, (1967)
- Perem E., Tension wood in Canadian hardwood, Department of Forestry Publication NO.1057, 1-38, (1964)
- Timell T. E., Compression wood in gymnosperms (1-3) Springer Verlag, (1986)
- このほか、 章84・85頁、樹種同定参考文献参照



1 スギの枝のあて材 (色の濃い部分)

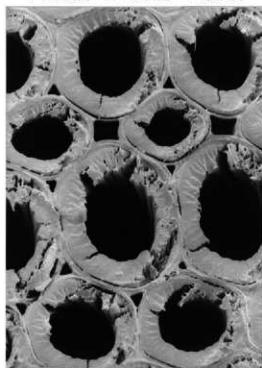


3 カラマツのあて材 仮道管(らせん溝) 100

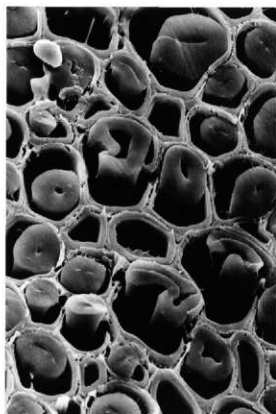


4 ケヤキのあて材 (白い部分)

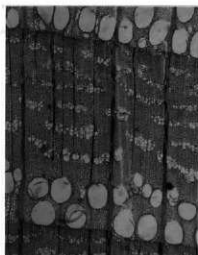
a : 木口面 b : 板目面 c : 柁目面



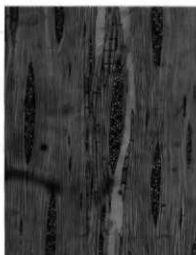
2 カラマツのあて材 a 80



5 ケヤキのあて材 木部繊維のG層 a 70



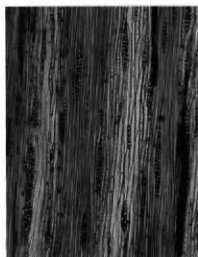
6 現生オヒョウ a 28



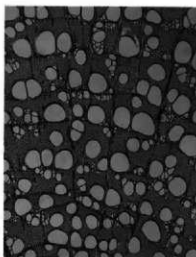
7 現生オヒョウ b 70



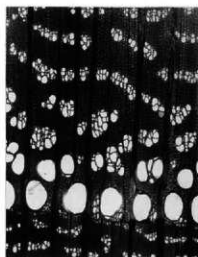
8 現生オヒョウの枝材 a 28



9 現生オヒョウの枝材 b 70



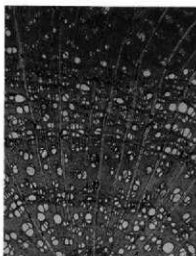
10 現生オヒョウの根材 b 28



11 現生ハルニレの主幹材 a 28



12 現生ハルニレの主幹材 b 70



13 現生ハルニレの主幹材 a 28

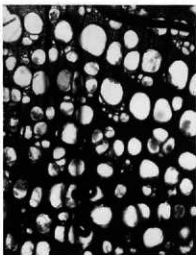


14 現生ハルニレの主幹材 b 70





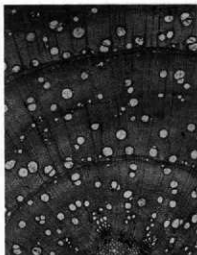
15 出土材ニレ属の根材 a 28



16 出土材ニレ属の根材 a 28



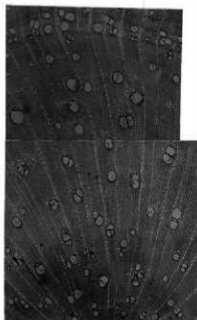
17 出土材ニレ属の根材 b 70



18 現生イヌエンジュの枝材 a 28



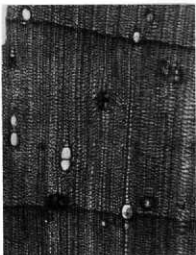
19 現生イヌエンジュの根材 b 70



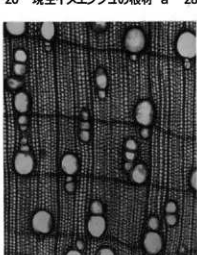
20 現生イヌエンジュの根材 a 28



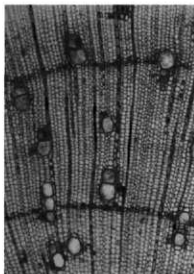
21 現生イヌエンジュの根材 b 70



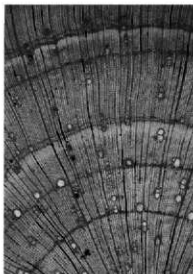
22 出土材ネリコ属の根材 a 28



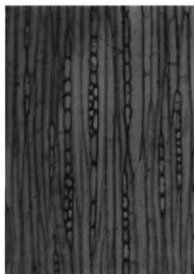
23 出土材ネリコ属の根材 a 28



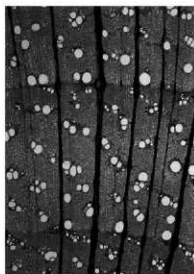
24 現生トネリコ属の根材 a 51 3



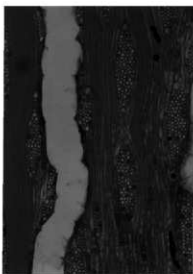
25 現生トネリコ属の根材 a 20 5



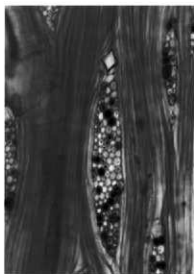
26 現生トネリコ属の根材 b 205



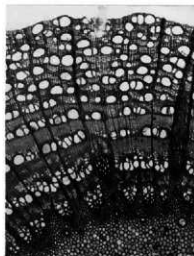
27 現生ケヤキの根材 a 51 3



28 現生ケヤキの根材 b 51 3



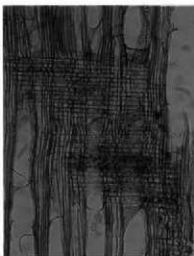
29 現生ケヤキの根材 b 205



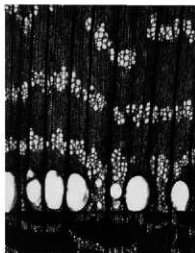
30 現生ハリギリの主幹材 a 28



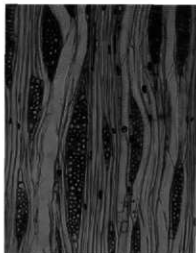
31 現生ハリギリの主幹材 b 70



32 現生ハリギリの主幹材 c 70



33 現生ハリギリの主幹材 a 28



34 現生ハリギリの主幹材 b 70



35 現生ハリギリの主幹材 c 70



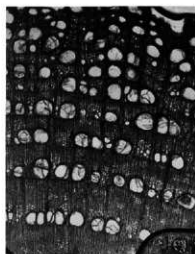
36 出土材ハリギリの主幹材 a 28



37 出土材ハリギリの主幹材 b 70



38 出土材ハリギリの主幹材 a 28



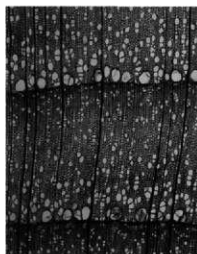
39 出土材ハリギリの枝材 a 28



40 出土材ハリギリの枝材 a 28



41 出土材ハリギリの枝材 b 70



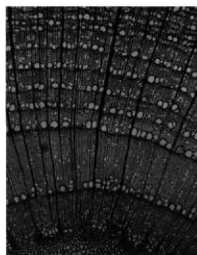
42 現生コシアブラの主幹材 a 28



43 現生コシアブラの主幹材 b 70



44 現生コシアブラの主幹材 c 70



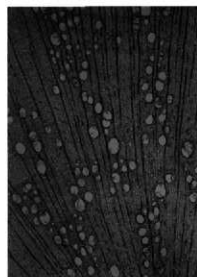
45 現生コシアブラの枝材 a 28



46 現生コシアブラの枝材 b 70



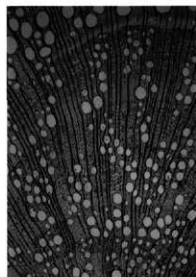
47 現生コシアブラの枝材 c 70



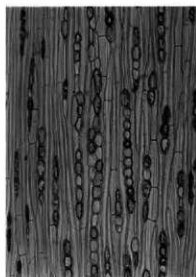
48 現生コシアブラの根材 a 20 5



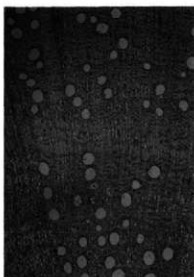
49 現生コシアブラの根材 b 51 3



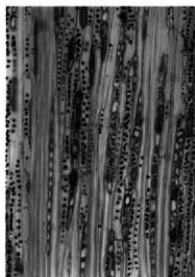
50 現生コナラの根材 a 20 5



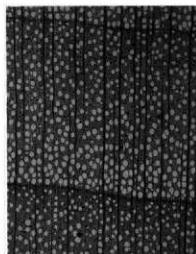
51 現生コナラの根材 b 205



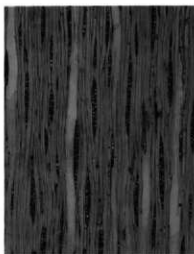
52 現生マテバシイの根材 a 20 5



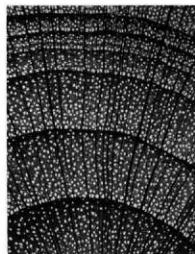
52 現生マテバシイの根材 b 20 5



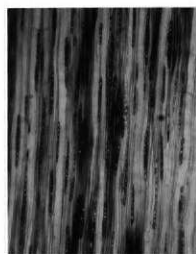
54 現生ナナカマドの主幹材 a 28



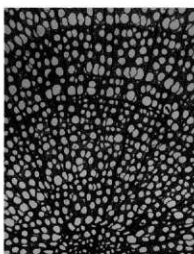
55 現生ナナカマドの主幹材 b 70



56 現生ナナカマドの枝材 b 70



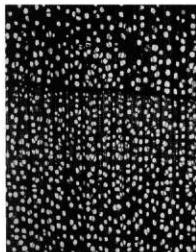
57 現生ナナカマドの枝材 b 70



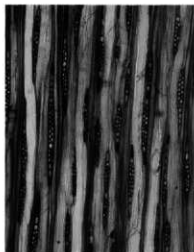
58 現生ナナカマドの根材 a 28



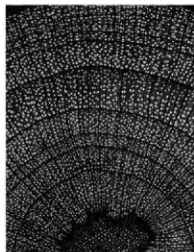
59 現生ナナカマドの根材 b 70



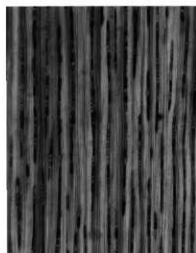
60 現生カツラの主幹材 a 28



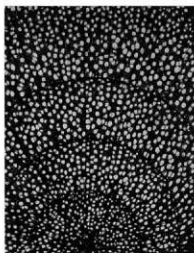
61 現生カツラの主幹材 b 70



62 現生カツラの枝材 a 28



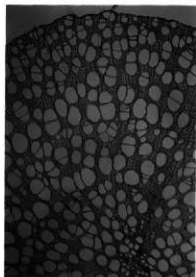
63 現生カツラの枝材 b 70



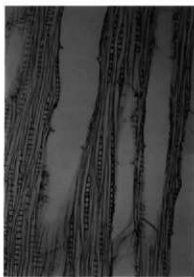
64 現生カツラの根材 a 28



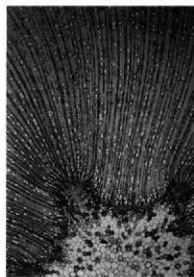
65 現生カツラの根材 b 70



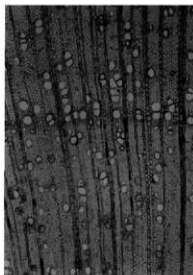
66 現生ヤマナシ類の根材 a 70



67 現生ヤマナシ類の根材 b 51.3



68 現生ヤマザクラの根材 a 20.5



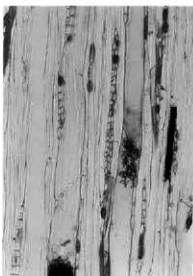
69 現生ヤマザクラの根材 a 51 3



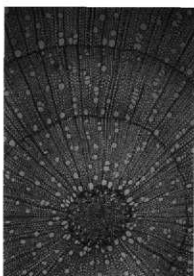
70 現生ヤマザクラの根材 c 205



71 現生シラカンバの根材 a 20 5



72 現生シラカンバの根材 b 20 5



73 現生キタゴボシの根材 a 20 5



74 現生キタゴボシの根材 b 205



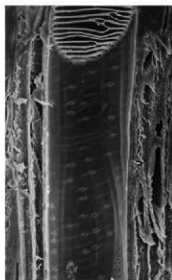
75 現生イタヤカエデの根材 a 20 5



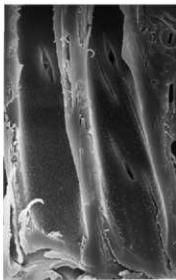
76 現生イタヤカエデの根材 b 205



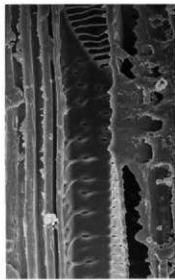
77 サwfutaagi 木部繊維のいぼ状層  
784



78 サワフタギ 道管のらせん肥厚 240



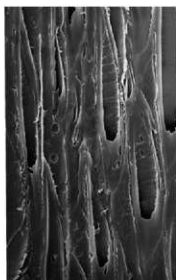
79 ミズハウツギ 木部繊維のいぼ状層 966



80 ミズハウツギ 道管のらせん肥厚 329



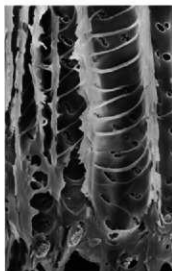
81 キブシ 木部繊維のらせん肥厚 273



82 ハコネウツギ 木部繊維のらせん肥厚 483



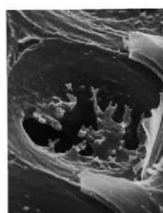
83 カンボク 道管 329



84 イヌエツグ 道管のベスチャード壁孔 1204

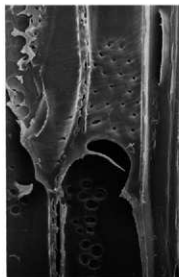


85 イヌエツグ 道管のベスチャード壁孔 4200

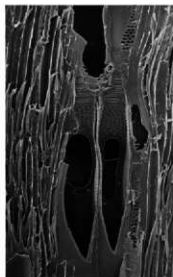


84 イヌエツグ 道管のベスチャード壁孔 7000

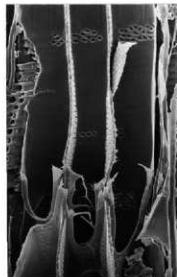




87 アカシデ 道管のせん孔板 392



88 アカシデ 道管のせん孔板 98

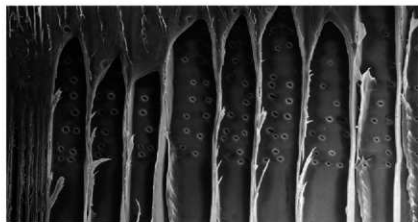


89 アカシデ 道管のせん孔板 150.5



90 ヒノキの分野壁孔

c 260



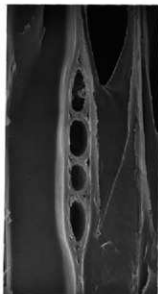
91 アスナロの分野壁孔

c 230

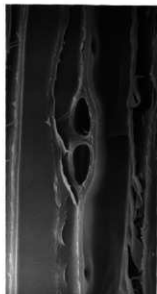
3 出土木製品の樹種識別における現状と課題



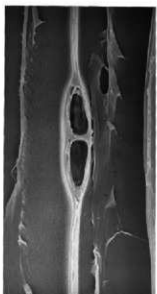
92 ヒノキの放射組織 b 860



93 アスナロの放射組織 b 860



94 ヒノキの放射組織 b 860



95 アスナロの放射組織 b 860

## 4 ユンカボシC15遺跡 年代測定結果

(株)地球科学研究所

試料データ	C14年代 (y BP) (Measured C14 age)	$\delta^{13}C$ (permil)	補正 C14年代 (y BP) (Conventional C14 age)
Beta-174535 試料名 (21741) YC15-33 試料種、前処理など plant material, acid/alkali/acid	280±40	-27.0	250±40
測定方法、期間 AMS-Standard			
Beta-174536 試料名 (21742) YC15-34 試料種、前処理など charred material, acid/alkali/acid	520±40	-24.0	540±40
測定方法、期間 AMS-Standard			
Beta-174537 試料名 (19357) YC15-35 試料種、前処理など charred material, acid/alkali/acid	440±40	-27.5	400±40
測定方法、期間 AMS-Standard			
Beta-174538 試料名 (19358) YC15-36 試料種、前処理など charred material, acid/alkali/acid	390±40	-25.7	380±40
測定方法、期間 AMS-Standard			
Beta-174539 試料名 (21745) YC15-37 試料種、前処理など plant material, acid/alkali/acid	113.7±0.6pMC	-27.6	113.7±0.6pMC
測定方法、期間 AMS-Standard			
*modern(現代の試料: 値はモダン・スタンダードからの%で表示)			
年代値は RCYBP (1950 A.D.を0年とする) で表記。モダン リファレンス スタンダードは国際的な慣例として NBS Oxalic Acid の C14 濃度の 95% を使用し、半減期はリビーの 5568 年を使用した。エラーは 1 シグマ (68% 確率) である。			

測定の対象となった試料 Y C 15 - 33への採取位置・内容等は下表のとおりである。測定結果の中で資料量が最少量に満たないもの ( Y C 15 - 34 ) f .carbonが最少量に満たなかったであろうもの ( Y C 15 - 37 ) がある。2 件の結果は考古学的に推定される年代と乖離している。

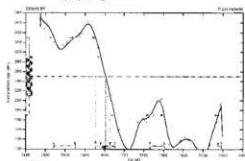
(鈴木)

## 平成14年度ユンカボシC15遺跡 年代測定試料一覧

試料名	地層	遺構名	試料採取方法	試料内容	備考
YC15-33	I B層 上面	送り場 1	炭化物に富む土壌のフローテーション	未炭化ブドウ属種子 0.06 g (乾)	肉眼で抽出
YC15-34	I B層 中部	F-61	炭化物に富む土壌のフローテーション	炭化タデ科種子 0.02 g (乾)	肉眼で抽出
YC15-35	I B層 上面	F-384	炭化物に富む土壌のフローテーション	炭化コナラ属子葉 0.26 g (乾)	肉眼で抽出
YC15-36	I B層 上面	F-390	炭化物に富む土壌のフローテーション	炭化ブドウ属種子 0.06 g (乾)	肉眼で抽出
YC15-37	I B層 上面	F-407	炭化物に富む土壌のフローテーション	未炭化ナデシコ科・未炭化アカザ属 0.02 g + 0.02 g (乾)	肉眼で抽出

## CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Y-axis: C13C12=17‰, sea-1)  
 Laboratory number: Beta-19338  
 Conventional radiocarbon age: 254 ± 30 BP  
 3 sigma calibrated result: Cal AD 1578 to 1588 (Cal BP 431 to 393) and  
 (95% probability) Cal AD 1578 to 1588 (Cal BP 431 to 375) and  
 Cal AD 1579 to 1588 (Cal BP 394 to 375) and  
 Cal AD 1540 to 1578 (Cal BP 318 to 31)  
 Sample ID: A71708  
 Name and/or radiocarbon age with calibration error: Cal AD 1630 (Cal BP 500)  
 1 Sigma calibrated result: Cal AD 1680 to 1689 (Cal BP 110 to 59)  
 (95% probability)



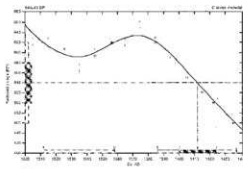
Customer Name: 西海国立大学  
 Address: 西海国立大学 工学部 工学系 放射線測定室  
 702-8565 高松市東山町  
 Author: 西海国立大学  
 Date: 2013年11月27日

Beta Analytic Inc.

401 (97) S1500 - 0166 - 000001 - 001 (01) - 000000 - 000000 - 000000 - 000000

## CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Y-axis: C13C12=-24‰, sea-1)  
 Laboratory number: Beta-19339  
 Conventional radiocarbon age: 149 ± 30 BP  
 3 Sigma calibrated result: Cal AD 1359 to 1368 (Cal BP 149 to 140) and  
 (95% probability) Cal AD 1359 to 1368 (Cal BP 149 to 140)  
 Sample ID: A71709  
 Name and/or radiocarbon age with calibration error: Cal AD 1441 (Cal BP 149)  
 1 Sigma calibrated result: Cal AD 1480 to 1479 (Cal BP 59 to 58)  
 (95% probability)



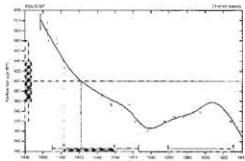
Customer Name: 西海国立大学  
 Address: 西海国立大学 工学部 工学系 放射線測定室  
 702-8565 高松市東山町  
 Author: 西海国立大学  
 Date: 2013年11月27日

Beta Analytic Inc.

401 (97) S1500 - 0166 - 000001 - 001 (01) - 000000 - 000000 - 000000 - 000000

## CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Y-axis: C13C12=27.3‰, sea-1)  
 Laboratory number: Beta-19337  
 Conventional radiocarbon age: 484 ± 30 BP  
 3 Sigma calibrated result: Cal AD 1478 to 1479 (Cal BP 478 to 479) and  
 (95% probability) Cal AD 1478 to 1479 (Cal BP 478 to 479)  
 Sample ID: A71707  
 Name and/or radiocarbon age with calibration error: Cal AD 1488 (Cal BP 499)  
 1 Sigma calibrated result: Cal AD 1518 to 1519 (Cal BP 378 to 379)  
 (95% probability)



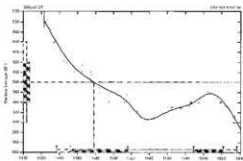
Customer Name: 西海国立大学  
 Address: 西海国立大学 工学部 工学系 放射線測定室  
 702-8565 高松市東山町  
 Author: 西海国立大学  
 Date: 2013年11月27日

Beta Analytic Inc.

401 (97) S1500 - 0166 - 000001 - 001 (01) - 000000 - 000000 - 000000 - 000000

## CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Y-axis: C13C12=-23.7‰, sea-1)  
 Laboratory number: Beta-19336  
 Conventional radiocarbon age: 563 ± 30 BP  
 3 Sigma calibrated result: Cal AD 1449 to 1448 (Cal BP 578 to 579) and  
 (95% probability) Cal AD 1449 to 1448 (Cal BP 578 to 579)  
 Sample ID: A71706  
 Name and/or radiocarbon age with calibration error: Cal AD 1449 (Cal BP 478)  
 1 Sigma calibrated result: Cal AD 1490 to 1479 (Cal BP 500 to 479) and  
 (95% probability) Cal AD 1490 to 1479 (Cal BP 500 to 479)



Customer Name: 西海国立大学  
 Address: 西海国立大学 工学部 工学系 放射線測定室  
 702-8565 高松市東山町  
 Author: 西海国立大学  
 Date: 2013年11月27日

Beta Analytic Inc.

401 (97) S1500 - 0166 - 000001 - 001 (01) - 000000 - 000000 - 000000 - 000000

年代測定のプロット

## 5 ユカンボシC15遺跡出土漆器資料の材質と製作技法

くらしき作陽大学 北野 信彦

## 1. はじめに

ユカンボシC15遺跡からは中世から近世にかけてのアイヌの人々の生活什器類である木製品をはじめとする貴重な遺構・遺物が多数検出され、このなかには漆器資料も多く含まれている。今回、財団法人北海道埋蔵文化財センターの御厚意によりこれら漆器資料の材質と製作技法について自然科学的手法を用いた調査を行ったので、この結果を報告する。なお、本報では同様に調査する機会に恵まれた平取町二風谷遺跡と千歳市ウサクマイN遺跡出土の漆器資料についても併せて報告する。

## 2. 調査方法

漆器資料は、陶磁器資料と比較して、木胎・塗り・加飾等、材質や製作技法に関する属性が多く、これらの品質は自然科学的手法による調査を行うことによって、より客観的にとらえやすい。そのためこのような漆器資料の材質と製作技法を調査することは、個々の資料の性格を正確に把握する上で有効な方法であり、これらが出土した遺構・遺跡の性格自体を考える上でも意味があるものと考えている。本報では、これら漆器資料の形態および塗り面の状況を表面観察した後、(1)用材選択、(2)漆膜面の塗り構造、(3)色漆の使用顔料、(4)蒔絵材料、等の項目別に自然科学的な手法を用いた分析を行った。ここではまず、その調査方法を記す。

## 2.1 用材選択(樹種同定)

樹種の同定作業は、出土木材の細胞組織の特徴を生物顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。本漆器資料の樹種同定結果は、すでに財団法人北海道埋蔵文化財センターにおいて調査が為されているので、本調査ではその結果を引用させていただくこととした。

## 2.2 漆膜面の塗り構造

まず肉眼で漆器資料の塗り表面の状態を観察した後、簡易顕微鏡を用いた細部の観察を行なった。次に1mm 3mm程度の漆膜片を漆器資料から採取して合成樹脂(エポキシ系樹脂/アラルダイトGY1251J P, ハ・ドナHY837)に包埋した後、断面を研磨し、漆膜の厚さ・塗り重ね構造・顔料粒子の大きさ・下地の状態等について金属顕微鏡による観察を行った。

## 2.3 色漆の使用顔料および蒔絵材料の定性分析

色漆に用いられた顔料および蒔絵材料である金属粉の無機物に関する定性分析には、先の漆膜片をカ・ボン台に取り付け、日立製作所S-415型の走査電子顕微鏡に堀場製作所EMAX 2000エネルギー分散型電子線分析装置(EPMA・電子線マイクロアナライザ-)を運動させて用いた。分析測定時間は600秒である。また、簡易定量分析には、堀場製作所MESA500型蛍光X線分析装置を使用した。設定条件は以下の通り。X線電圧50kV。電流240uA。試料室系：真空。測定時間600秒。

## 3. 調査結果

今回、調査を行った出土漆器資料は、低湿地遺跡であるユカンボシC15遺跡から多数検出された木製品などの日常生活什器類に含まれている碗破片などの中・近世の挽き物類を中心とした42点、および近世アイヌ墓副葬品である二風谷遺跡出土の碗破片や板物類である臍部破片を中心とした5点の合計47点である。以下、各項目別の調査結果を示す(表1)。

## 3.1 用材選択

ユカンボシC15遺跡出土の碗型などの挽き物類の樹種には、ブナ科ブナ属7点、ニレ科ケヤキ属4

点、カツラ科カツラ9点、エゴノキ科エゴノキ1点、モクセイ科トネリコ属2点、トチノキ科トチノキ8点、クリ科クリ2点等の広葉樹8種類が確認された。これらの木材の組織、工作の難易、割れ狂い、色光沢、塗り等を考慮に入れて本漆器資料の用材選択の傾向をみると、優材であるケヤキ・トネリコ材などと、加工や入手の容易さという大量生産の点からみて極めて一般性が高いと考えられる適材のトチノキ・ブナ・クリ材などの2つのグループに分かれた(表2)(注1)。

### 3.2 漆膜面の塗り構造

漆器表面の塗り技法は、大きく分けて無文様で地塗りのみの資料と、家紋等の漆絵文様を地外面に描く資料、さらには箔絵や蒔絵等きわめて高度な漆工技法をもつ資料に分かれた。これらの漆膜面の塗り構造、特に、各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、いずれもビークがほとんど見出だされず、これらをさらに金属顕微鏡で観察することにより、炭粉を柿渋などに混ぜて用いる炭粉下地であると認識した(注2)。

次に、地の漆塗り層は、1層塗りもしくは2層塗りであり、いずれも簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料が中心であった(図1)(注3)。そして加飾は、いずれも地の上塗り層の上に描かれていた。

### 3.3 赤色系漆の性質

赤色系漆の使用顔料の定性分析および簡易定量分析と金属顕微鏡観察の結果、これらはそれぞれベンガラ(酸化第二鉄 $Fe_2O_3$ )、朱(水銀朱 $HgS$ )および朱とベンガラの混合の二種類の異なる赤色顔料を用いた赤色系漆であると理解した(図2)。ベンガラ・朱ともに赤色系顔料としての歴史は古い。しかし近世漆器の色漆顔料としては、幕府朱座を中心とした統制物資であった朱に比較して、江戸時代中期以降、人造ベンガラの工業生産化により量産体制が確立するベンガラの方が廉価で一般的となるようである(注4)。本漆器資料の場合、基本的には朱を使用した資料が比較的多い傾向で見いだされた。

### 3.4 蒔絵材料の材質

表面観察において金粉(金箔)もしくは金泥(金彩)によるとみられる蒔絵加飾部分の定性分析を行った結果、Au(金)が認められる資料の他、金(Au)と銀(Ag)の混合材料(青金)を使用する例も見出だされた(図2)。次に、これら加飾部分を金属顕微鏡観察した結果、蒔絵粉の資料とともに金箔押の資料もあり多様性が見いだされた(写真1)。

江戸期の各種文献史料には、漆器に蒔絵や梨子地等の加飾を施すこと自体が、寛文年間以降しばしば発せられる奢侈禁止令によって各社会階層毎に厳しく制限されていたこと(注5)や、これら金・銀・錫等の材質別の蒔絵漆器に、明確な価格差が存在したこと(注6)等が、知られる。そのためか、金(Au)自体を使用した近世蒔絵漆器は、通常の近世遺跡出土漆器資料には少なく、大半は代用蒔絵粉材料を用いた銀・錫・石黄蒔絵資料が中心である。本資料の場合、金自体を使用した資料が比較的多く、この点は、本州地域の和入地における一般的な近世遺跡出土漆器資料とは異なる傾向であろう。

## 4. 考察

以上、前項では項目別に各出土漆器資料の材質および製作技法の在り方をみた。その結果、本資料は、木胎・漆塗り技法・使用顔料ともに簡素な素材からなる極めて一般的で廉価な日常什器類の範疇に入る資料が中心であったが、そのなかでも若干幾つかのランク別のグループに分類された。このような漆器資料のグループ毎の違いは、文化的背景を含むそれぞれの漆器資料の製作年代、これら什器を使用しさらには投棄した使用階層の社会的・経済的背景(生活様式)、地域性、什器類の使用目的

表1 漆器観察・分析結果

No.	遺物No.	層位	残存状態	樹種	表面塗リ技法		塗層構造		使用顔料			備考	
					内	外	内	外	内	外	文様		
1	4466	I B 4	1/4	トチノキ	黒	黒	内-絵-赤	II	I			朱	
2	2055	I B 4	底~胴部 変形	ハリギリ	赤	赤	外-絵-黒	I	II	朱	朱	朱	
3	6479	I B 4	1/3	カツラ	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱		朱	
4	1075	I B 4	胴部片	カツラ	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱		朱	
5	1905	I B 3	口縁部片	トチノキ	黒	黒	内外-絵-赤	II	I			朱	
6	4406	I B 3	口縁部片	ブナ属	赤	黒		I	I	朱			
7	4452	I B 3	口縁~胴部片	トチノキ	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱		朱	
8	4160	I B 3	口縁部片	カツラ	赤	黒		III	II	朱			
9	4090	I B 3	底部	トネリコ属	黒	黒		I	I				
10	4094	I B 3	尻部片	カツラ	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ		朱	
11	5312	I B 3	1/2	ハリギリ	黒	黒	内外-絵-赤	II	II			朱+ベンガラ	
12	9331	I B 3	胴部片	ブナ属	赤	黒	外-絵-赤	I	II	ベンガラ		朱	
13	5499	I B 3	口縁部片	カツラ	黒	黒	外-絵-赤	I	II			朱+ベンガラ	
14	9480	I B 3	底~胴部片	ブナ属									黒木筒 赤色顔料
15	9482	I B 3	赤色顔料	—	赤	—				ベンガラ			
16	8565	I B 3	口縁部片	トチノキ	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ		朱	
17	8598	I B 3	胴部片	トチノキ	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ		朱+ベンガラ	
18	8593	I B 3	1/3	エゴノキ属	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱		朱	
19	423	I B 3	口縁部片	カツラ	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱		朱	
20	2020	I B 3	胴部片	トチノキ	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ		朱+ベンガラ	
21	5645	I B 3	2/3	ブナ属	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ		朱+ベンガラ	
22	6581	I B 3	底~胴部 変形	トチノキ	赤	黒		I	I	朱+ベンガラ			
23	①120	I B 2	底~胴部	ケヤキ属	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱		朱	
24	3828	I B 2	胴部片	ケヤキ属	赤	黒		I	I	朱			
25	7011	I B 2	底~胴部 変形	ブナ属	赤	赤		I	I	朱	朱		
26	8131	I B 2	1/2	ブナ属	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱		朱	
27	9399	I B 2	胴部片	カツラ	赤	黒	外-絵-赤	I	I	朱		朱	
28	6667	I B 2	1/3	カツラ	黒	黒	内外-絵-赤	II	II			朱	
29	3739	I B 2	胴部片	クリ	赤	黒		I	I	朱+ベンガラ			
30	3704	I B 2	細枝片	トネリコ属	—	—		—	—				
31	1806	I B 2	口縁部片	トチノキ	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱+ベンガラ		朱+ベンガラ	
32	7245	I B 2	胴部片	ブナ属	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱	朱92	朱	
33	⑥1041	I B 2	胴部片	カツラ	黒	黒	内外-絵-赤	II	II			朱	
34	395	I B 1	蓋台部	ケヤキ属	—	黒		—	—				
35	1444	I B 1	胴部片	クリ	赤	黒		I	I	朱			
36	7777	I B 1	蓋完形品	ブナ属	赤	黒	外-絵-赤・金	I	II	ベンガラ		朱・Au+Ag	南部箱桶
37	⑥529	I B 1	胴面のみ	—	赤	—		I	—	ベンガラ			
38	4609	I B 2	胴面のみ	—	赤	黒	外-絵-赤	I	II	朱		朱	黒AP-3
39	6222	I B	尻部片	ケヤキ属	黒	黒	内外-絵-赤	II	II			朱	
40	9825	I B	胴面のみ	—	赤	—		II	—	朱			
41	332・333	O B	胴部片	ブナ属	黒	黒	内外-絵-赤	II	II			朱+ベンガラ	
42	①390	O B	胴面のみ	—	赤	—		I	—	ベンガラ			
43	1号蓋・柄		胴面のみ	—	赤	黒	外-絵-赤・金	I	II	朱		朱・Au+Ag	二風谷・殘桶
44	1号蓋・皿?		胴面のみ	—	黒	黒	内外-絵-赤	II	II			朱	二風谷
45	1号蓋・柄		胴面のみ	—	黒	黒	外-絵-赤・金	I	II			朱・Au	43と同じ個体
46	2号蓋		胴面のみ	—	赤	黒	外-絵-赤・金	I	I	朱		朱	二風谷
47	蓋		胴面のみ	—	黒	黒	外-絵-赤・金	I	II			朱・朱+ベンガラ・Au	ウラクマイ・筒桶

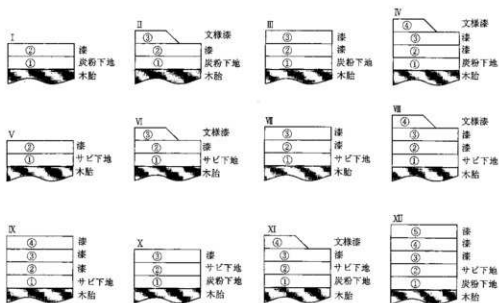


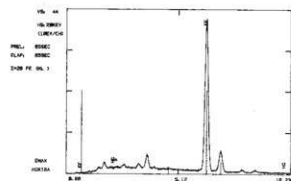
図1 漆塗り構造の分類

表2 ろくろ焼き物の用材分類一覧表

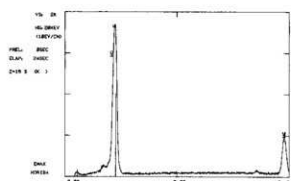
A 環 孔 材	a. ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリ キリ、クリ、ヤマヅワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが靱性もあり、木皿など薄手の物に適する。
B 散 孔 材	b. サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ 類、ヤマザクラ、ウワミズザ クラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なく、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
c.	c. プナ、トチノキ系 トチノキ、プナ、ミズキ、カ ツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大きである。
d.	d. エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

編本鉄男「ろくろ ものと人間の文化史31」-1979-などを参考にして作成

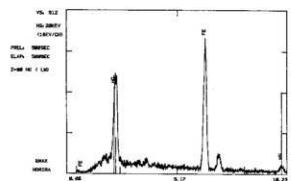




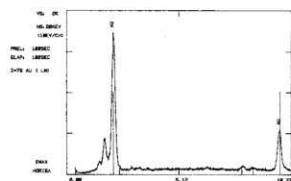
赤色系漆 べろろ (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)



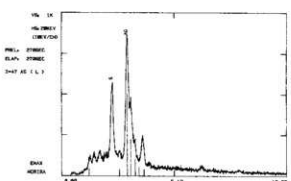
赤色系漆 朱 (HgS)



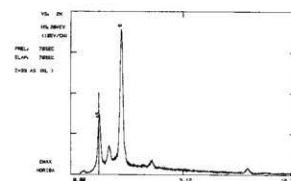
赤色系漆 朱+べろろ (HgS+Fe)



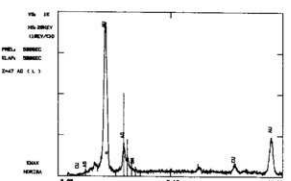
青緑加飾 (金彩) 金 (Au)



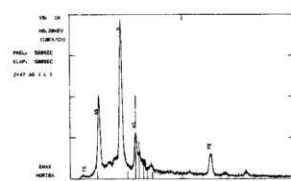
青緑加飾 (銀彩) 銀 (Ag)



青緑加飾 (金彩) 石黄 (As<sub>2</sub>S<sub>3</sub>)



青緑加飾 (金彩) 金+銀 (Au+Ag)



青緑加飾 (金彩) 銀+石黄 (Ag+As<sub>2</sub>S<sub>3</sub>)

図2 電子線マイクロアナライザー(EPMA)分析結果

や方法、さらには個々の漆器生産地の製作技術、等さまざまな条件が反映されたものであろう。

さて、本報では、中・近世アイヌ社会を象徴的に「海の民」と「陸の民」の立地別の二つに大別し、前者の代表例として余市の入舟遺跡・大川遺跡、礼文島の香深井遺跡の3遺跡、後者の代表例として本遺跡であるユカンボシC15遺跡、千歳的美々8遺跡・末広遺跡の3遺跡、合計6遺跡の一括出土漆器資料群を取り上げ、それぞれの一括出土漆器種類の材質と製作技法上の組成の傾向をみるためにそれぞれレーダーチャート方式で集計した(注7)。その結果、日本海沿岸地域に所在するいわゆる『海の民としての近世アイヌ社会』の出土漆器には高度な技術を用いた蒔絵などの優品資料が比較的多く、かつ地塗り漆にも塗り直し補修や布着せ補強を施すなどの多層塗り資料が比較的多く見出された(注8)。一方『山の民としての近世アイヌ社会』の出土漆器には、内地の和入地遺跡出土漆器と同様の休漆技法である炭粉下地に上塗り漆を一層塗布するなどの一般的な塗構造を有する資料が基本的には多かった(図3)。しかしそのなかには、和入地の漆器資料では見られないような独特なモチーフを金箔で蒔絵加飾したり赤色漆でフリーハンド加飾した資料が含まれる、などの特徴も見られた。そしてこの両者に南部箔挽(注9)や根来手もしくは根来塗と呼称される膳部(注10)などが含まれていた。この点に関連して、文献史料の記載内容からも近世アイヌ社会には、基本的な器型別、蒔絵加飾の技法別、地塗の種類別、生産地(もしくは調達先)別、明らかに蝦夷地輸出向けに作成されたであろう漆器品目など、極めて多彩な漆器が調達されていたことが理解される(注11)。今回の調査結果でも、ともに低湿地遺跡である美々8遺跡低湿地とユカンボシC15遺跡出土漆器碗では、前者はブナ64.6、トチノキ15.7、ケヤキ13.7で、後者はカツラ26.4、ブナ属23.5、トチノキ20.5と組成が異なっており、また港湾地区に立地する余市入舟・大川遺跡の出土漆器碗の場合も、ブナ42.0、トチノキ10.2、ケヤキ43.5と集計された。この点からは漆器の調達(産地)や品質には遺跡毎の違いがある可能性も指摘されよう。そしてこれらそれぞれの遺跡出土の漆器資料は、文献史料に管見される漆器のいずれかに対応するのであろう。今後の課題は、他の伴遺物や遺構の性格との相互関連性を総合的に比較・検討していくことである。この検討作業を行うことが、本出土漆器資料の性格をさらに的確に理解する上で大切なことであろう。

#### (謝辞)

調査を行なうにあたり、北海道埋蔵文化財センターの三浦正人・田口尚・鈴木信氏、北海道開拓記念館の小林幸雄氏、東京都立大学の山田昌久氏をはじめとする多くの方には、出土漆器資料の分析および資料の収集等で大変お世話になりました。厚く謝意を表します。

なお本報は、平成14年度財団法人の文化財センターの食文化研究助成事業研究課題『近世アイヌ漆器碗の流通と使用に関する文化財科学的研究』の成果であると共に、平成11-14年度科学研究費補助金基盤研究C『近世蒔絵材料の劣化現象の把握とその保存に関する基礎的研究(研究代表者:北野信彦)』の成果の一部を含む。

#### (注)

- (1) ろるる挽き物である近世出土漆器の用材には、早晚材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは環孔材ではあるが靱性がある材が適材として用いられており、ケヤキ(近世初期段階ではシオジ)・トチノキ・ブナ材はその代表的な樹種である。北野信彦(2000)『近世出土漆器の用材選択に関する一考察』『考古学と自然科学』第38号。p.47-66、日本文化財科学会

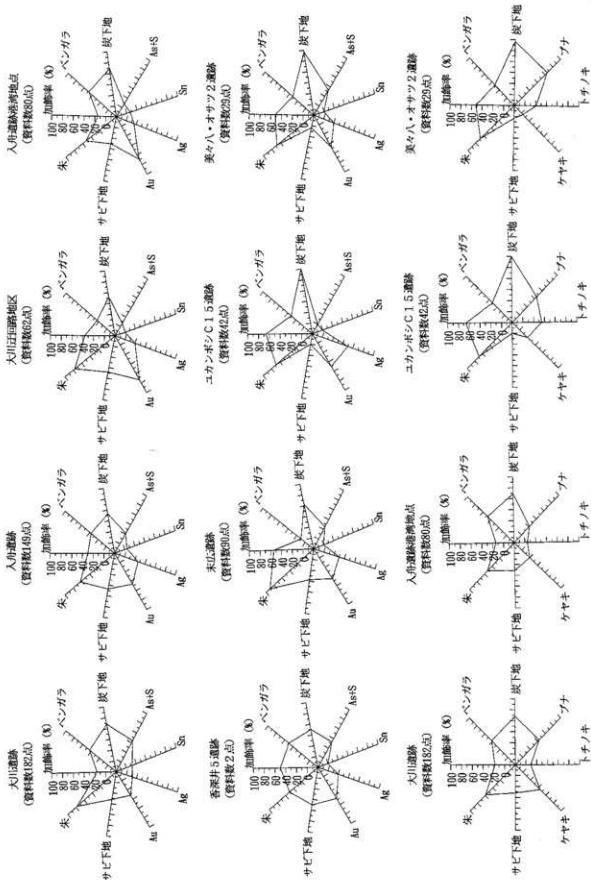


図3 各近世アイヌ関連遺跡における一括出土漆器資料の組成(集計例)

## 5 コカンボシCIS遺跡出土漆器資料の材質と製作技法

- (2) 北野信彦 (1993) 『日常生活什器としての近世漆器の生産と消費』『食生活と民具』p. 81-101、日本民具学会編 雄山閣出版、等を参照されたい。
- (3) なお一部の資料については細かい粘土や珪藻土をにかわ等に混ぜて用いる泥下地(堅下地・本下地より堅牢性に欠ける)の可能性もある。しかし出土資料のかかわと生漆の明確な科学的識別が技術的に困難な現在、両者をまとめてサビ下地とした。北野信彦 (1993) 『近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・1 - 文献史料からみた量産型漆に使用する混和剤を中心として - 』『古文化財之科学 第38号』p. 65-79、古文化財科学研究会
- (4) 近世漆器の製作技法の在り方を示す民俗事例の1つに、新潟県糸魚川市大所の小橋丈助氏による実用に即した近世木地師、漆器師の製作技法に関する口承資料がある。それによると

[上品] 布着せ補強(襦の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く)→サビ下地(砥の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗布)→下塗り(生漆)→上塗り(生漆に赤色系顔料もしくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆)の工程をふみ、人一代は持つ堅牢なもの。

[下品] 炭粉下地(柳や松煙を精液に混ぜて用いるサビ下地の代用下地)→上塗り(生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物を多く混入している粗悪な漆)

[中品] 下品とほぼ同様の工程をふむが上塗りの漆を濃く塗布したりミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良い。

などとしており、各漆器ランク別の工程をよく示している。

文化庁文化財保護部編(1974)『木地師の習俗 民俗資料選集2』国土地理協会

- (5) 江戸時代における朱とベンガラの価格表を検討してみると、江戸時代前期段階には両者海外輸入品が多いためか、相対価格差はほとんど見られない。しかし江戸時代後期頃の段階では、両者に約30倍ほどの相対価格差が見られ、とりわけ朱の高値さと入手困難さが指摘される。

北野信彦 (2000) 『ベンガラ・朱項目』『日本民俗大辞典』吉川弘文館

- (6) 寛延四年(1751)の『名古屋諸色料集、寛延四年小買物諸色直段帳』には、漆器の体漆技法別の価格が記載されている。この史料では、布着せ蝋色(上品)・常溜塗(中品)・常拭漆塗(下品)の相対価格差は、約51:3.4:1と算定される。また、伊勢菟野藩土方家菩提寺である見性寺の見性寺文書には、伊勢桑名の塗物商ぬし興に提出させた見積書があるが、それによると家紋加飾に使用された金・銀・錫粉蒔絵の相対価格比率は、約18:6:1と算定され、いずれの事例からも材質や製作技法の違いにより、漆器資料には明確な価格差が存在したことが理解される。

北野信彦・肥塚隆保(2000)『近世時給漆器の材質・技法に関する調査』『考古学と自然科学第38号』p. 67-92、

日本文化財科学会

- (7) 本稿における分析結果の集計方法は、個々の漆器資料からもっとも一般的な8つ(Aタイプ)もしくは9つ(Bタイプ)の材質や製作技法上の優劣ランクの項目を抽出し、それぞれの比率を総個体数の中で計算する。この結果をレ・ダ・チャート方式で図化する方法を用いた。以下、それぞれの集計方法を記す。

### (Aタイプ集計方法)

レ・ダ・中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率(一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合)を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・ブナ材などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の材質および製作技法上の特徴を取り、それと相対する左側には、朱・サビ下地・ケヤキやシオジ材などの優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にランク的にもケヤキやシオジ材・ブナ材のほぼ中間に位置すると考えられるトチノキ材の占有比率( )をそれぞれ配置した。この配置で示されるレ・ダ・チャートは、その重点が右に寄るほどランク的に廉価な資料が多いことを、左に寄るほど優品資料の占める割合が高いことを示す。

### (Bタイプ集計方法)

レ・ダ・中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率(一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合)を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・スズ(Sn)粉・石黄(As<sub>2</sub>S<sub>3</sub>)粉などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の材質および製作技法上の特徴をとり、それと相対する左側には、朱・サビ下地・金(Au)粉などの優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にランク的にもケヤキやシオジ材・ブナのほぼ中間に位置すると考えられる銀(Ag)粉の占有比率( )をそれぞれ配置した。

- (8) 江戸時代前期の元和年間(1618)に松前城下町に渡ったポルトガル人宣教師アンジェリスは、この地域には蝦夷地一大陸ルートで中国製品を含む多くの物資が運ばれてくる活発な海上交易が存在することを報告している。

聖心女子大学カトリック文化研究所編(1962)『H・チースリク編北方探検記 - 元和年間に於ける外国人の

蝦夷地報告書 - a p. 49 59, 吉川弘文館

- (9) 近世南部箔桶の生産は、江戸時代前期頃には既に盛んであり、寛永15年(1638)の松永重頼『毛吹草』にも全国主要漆器生産地の一つとして陸奥薄(箔)桶・薄(箔)盆として、その名がみられる。箔桶は、寛永21年(1644)の盛岡藩の正式藩政記録である『雑書』によると、御留物(秋田藩等の他領への禁輸品目)の一つに掲げられており、貞享元年(1684)の『浄法寺塗物他領出証文』にも「箔絵之塗物一切出申聞敷事」という記述がみられる。このことから、南部箔桶が盛岡藩専売品目の一つとして認識され、ある程度藩上層部は特別な漆器であると認識していたことがわかる。しかしその後の箔桶生産自体は会津塗生産地に移行したようであり、当地での箔桶生産は途絶したため現在では詳細は不明の点が多い。なお、現在の伝統的漆器産品の一つである「秀衝桶」は、この意匠を模倣したものであり、近世南部箔桶との直接的な技術的つながりはない。

(10) 一般には寺院什器である漆器資料として、中世以来の『根来塗もしくは根来手』と呼ばれる地塗りみの朱漆器類がその代表例として知られる。これらは、他の近世遺跡出土の漆器資料のそれと比較してかなり高い品質ランクに位置し、かつ長時間大切に使用・維持管理されていたことが知られる。寺社がこれら優品を維持、充足させた経済的背景の一つには各寺院が当時の宗教センター・であるとともに、宗門人別帳や檀家制度に代表されるような社会的な公共性をあわせ持っていたこと。そこから生まれた「寄進」もしくは「共有物」の観念が根底に存在したためであろう。

北野信彦(2002)『根来寺坊院跡出土漆器の製法について』『和歌山県立博物館研究紀要 第8号』

p. 28 37, 和歌山県立博物館

- (11) 近世アイヌの人々が本州などの和入地から搬入された漆器桶をどのように使用したかを如実に示す文献史料として、寛政2年(1788)最上徳内の『蝦夷草紙巻之上 凡例十五則』がある。この一項目には、「一、蝦夷土人惣て食する盤を用いず只桶一つを用い、汁菜をも食せず。味噌、塩も無ければ魚肉獣肉に或は草根などをまがし、水煮にして食す。」と記述されている。また、同『蝦夷草紙巻之下(蝦夷国風俗人情之沙汰)』所収の逸話の一つには、以下の文章があり、当時の状況が理解される。

#### 「酒器 酒宴並酒器の事

酒宴には威厳厚く礼式多し既に酔ては礼白崩壊すと雖も是又和するの礼なり、然れども歌舞に長じては嗜する事も多し、尤も器を多く陳列するを以て優雅なりとして本邦の行器、盃、湯桶、柄杓盃台の類、都て金蒔絵の付たるをよるごぶり、是皆酒宴に用るなり、松前人に留川長右衛門と言う通辞、所在島シラスカを支配して居た時、其地の長夷、或る日来て談じければ近來は珍らしき器物も参らざるよ言ければ、長右衛門を以て詫びて何かなと云えんと思ひければ松前表へ其趣を言ひけるに、請負の主人方より彼は詮索して金鎖金、金具附の狭篋を遣わして、此篋の内光紙にて張付たる故、内外全光に輝きたり、長右衛門早速彼長夷、コタカを運上屋へ招きて此器を見せれば熟視して大に悦び、天地開けしよりかかる漆器を容易に求め得ることよと高慢心に生じ俄に濁酒を醸し近辺の長夷どもを招き集め彼の器弘めの酒宴を始めたり。時に彼、狭篋へ濁酒を十分に盛り産の中央に聞き、賣夷共集會し其器を熟観して肝に銘じ古今此類なき漆器なりと感賞して酒宴も既に終わらんとする頃、狭篋も虚に成れば、張りたる金光紙は皆禿にけり。是を見て一座の長夷始め皆々興を醒し、氣の毒がりければ、主人コタカ大いに怒りて曰、我器を求るに莫大の産と交易せしが、かかる贖物を奪取たるならん事、憤て運上屋へ行き通辞長右衛門に向て彼漆器は贖物なり濁酒を盛りたれば、内悉く禿たりと言ひければ、長右衛門大に困り、全く贖物にはあらず、彼器は衣類を入にて、水を入る篋には非ずと詫びければ漸く不肖せしとなり、責備を出して交易せし器と思入運たるより唯一途に敗れたりと凝塊まりたる片意地を領解させたこそ思ひやられたれば、都て蝦夷の器物は酒宴のみに用ゆるなり、未だ人道の開けざる国なれば器財費用覚悟せざるも理なり。」

- (12) 北野信彦(1999)『舟通跡出土漆器資料の材質と製作技法について』『舟通跡における考古学的調査 余市川改修事業に伴う1989～1994年度大川遺跡発掘調査報告書』p. 89 99, 余市町教育委員会

北野信彦(2000)『大川遺跡出土漆器資料の材質・技法について』『大川遺跡における考古学的調査 - 余市川改修事業に伴う1995・1997年度舟通跡発掘調査報告書』p. 449 462, 余市町教育委員会

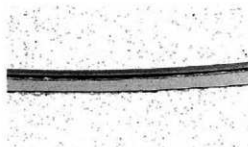
北野信彦(2002)『大川遺跡出土漆器資料の材質と製作技法』『大川遺跡における考古学的調査』p. 232 244, 北海道余市町教育委員会

(引用文献)

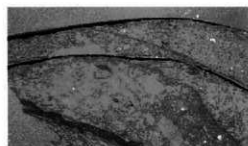
- (1) 稲生典太郎(1997)『北方文化の考古土俗学』岩田書院
- (2) 佐々木利和(1995)『アイヌの工芸、日本の美術 No.354』至美堂
- (3) 玉虫左太夫(著)・稲葉一郎(解説)(1992)『蝦夷地・樺太巡見日誌 入北記』北海道出版企画センターなど
- (4) ①北海道埋蔵文化財センター(1994)『遺物が語る北海道の歴史 北海道埋蔵文化財センター15周年記念誌』  
北野信彦編(2002)『アイヌ社会の漆器考古学 月刊考古学ジャーナル 6月増大号』ニューサイエンス社
- (5) 秋野茂樹・藪中剛司他(1994)『描かれた近世アイヌの風俗』①アイヌ民族博物館編  
②アイヌ文化振興研究推進機構編(1999)『アイヌの四季と生活 十勝アイヌと絵師平沢屏山』十勝毎日新聞社
- (6) 北野信彦(2000)『生産技術面からみた近世出土漆器の生産・流通・消費』『日本考古学第9号』p.71-96、日本考古学協会、吉川弘文館
- (7) 沢口吾一(1966)『日本漆工の研究』美術出版社  
京都国立博物館(1995)『蒔絵 - 漆黒と黄金の日本美 - 』特別展覧会図録



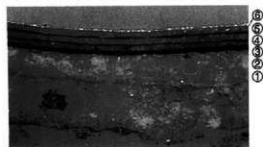
赤色系塗  
①サビ下地 ②朱塗 (落射写真：×100)



塗り直し補修の塗塗膜面①  
(透過写真：×100)



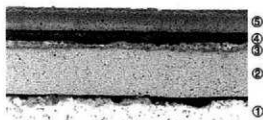
塗り直し補修の塗塗膜面②  
①サビ下地 ②黒色塗 ③朱塗十金蒔絵加飾  
④サビ下地 ⑤黒色塗 (落射写真：×50)



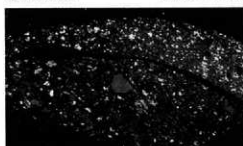
蒔絵加飾のある塗塗膜面  
①サビ下地 ②黒色塗 ③～⑤赤褐色系塗  
⑥朱塗十金蒔絵加飾 (落射写真：×100)



①赤褐色系塗 ②朱塗(粗) ③朱塗(細)  
④黒色塗 (透過写真：×400)



同左拡大写真  
①サビ下地 ②赤褐色系塗 ③サビ下地 ④黒色塗  
⑤赤褐色系塗 (透過写真：×400)



同左落射偏光写真  
(落射偏光：×50)



沈金加飾のある塗塗膜面の表面拡大写真  
(×100)

## Ⅷ まとめと考察

### 1 I B 3層における木製品の集中区について

当遺跡の木製品出土状況と分布が、低湿部の堆積環境や流水・植生の影響により各層ごとに異同をみせることは、既報告と当報告Ⅱ章に述べた。概略でいうと、全域で安定したI B 3層の時期（標文文化期中葉から中世アイヌ文化期の前葉、おおよそ9世紀から13世紀）には総計の約45%の木製品が出土、区域的に安定を続けるI B 2層以降（アイヌ文化期、13～19世紀）でも総計の約43%が、台地縁辺を中心に出土している。逆にI B 4・II B 5・II B 6層では、流水の影響を受けていた沼沢～湿原であったためか、合計でも約11%の出土にとどまっている。東地区ではI B 1層の出土比率が高いという时期的特徴もある。

西地区でみると図Ⅱ-3・4に示したように、II B層では沖の沼沢の底あたりに点在する分布があり、I B 5層でも断続的に低い位置に出土する。I B 4層では、南低平台地縁に沿って台地突端に達し低湿部中央に散在する水流に沿うような出土域があり、北側台地に沿った集中域もみられる。I B 3層での分布はほぼI B 4層と重なり、これを密度濃くした状況である。北台地の近辺部に分布が激増し、さらに濃密な集中をみせる区域もある。I B 2層では安定した止水域の状況からか、数を減らしながらもI B 3層よりも分布域には広がりが見られる。集中域は北台地縁辺に沿って南西に移動している。I B 1層では分布域はI B 2層の状況のまま、数を減らした観がある。北台地突出部の南側の状況が変化を示している。O B層では北台地突出部の南側にやや集中が見られる。

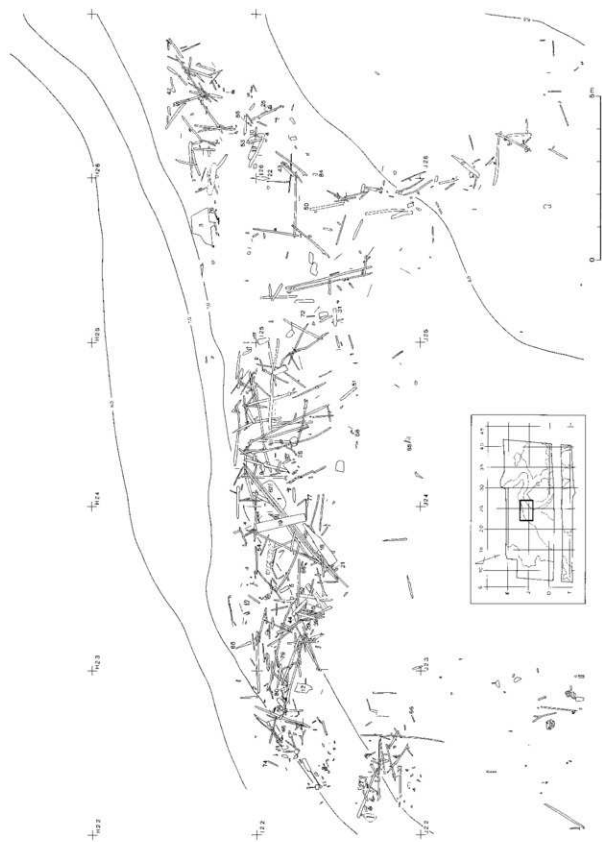
このような状況のうち、特にI B 4層における北側台地に沿った集中域については、報告書<sup>(3)</sup>（北埋調報146）でH・I-24～26区を木製品集中地点として報告し、上層の広がりに指摘した。I B 3層として扱ったこの上層には、濃密な集中をみせる木製品の堆積が続き、区域も広がりをみせる。ここではこのI B 3層におけるH・I・J-22～26区を、木製品集中区として分析を加えて報告し、考察してみたい。

集中区の木製品として取り扱うのは、図VII-1に示したH-22c・H-23～25bc・H-26・I-22～25・I-26abd・J-25d・J-26ab区から出土した製品である。これはI B 3層で木製品が出土した2.5×2.5mグリッド477区のうち33区で、面積比で7割となる。実際の広がりは120㎡にも満たないほどで、低湿部調査面積約9,000㎡に対しては約1.3%にしかあたらない。対して遺物点数でみるとI B 3層木製品5,226点のうち、表VII-1～4に示した計1,683点、約32%を占める。面積比と木製品点数比からも、明らかに木製品が集中している区域と認定できる。

図VII-1はH・I・J-22～26区全体のI B 3層木製品出土位置図で、北側台地と木製品集中状況、分散状況がとらえられる縮尺1/50の図。製品にNoを打つと図が煩雑になるため、舟関係だけ報告書<sup>(4)</sup>（北埋調報159）での掲載Noを付した。コンターは調査最終面のものである。表VII-1～4は図VII-1に示した木製品のグリッド別一覧表である。いくつかのグリッドにわたるものも別に分けて表示してある。掲載Noは報告書<sup>(4)</sup>のNo、遺物名称の後ろの数字は点数で、グリッドごとの点数はグリッド名の次に合計してある。

この集中区の製品構成を木製品種別ごとにI B 3層全体と比較してみる。比較対照となる比率は、この集中区の木製品出土点数1,683点がI B 3層木製品5,226点に占める割合32%である。これより相当高い率を示すものは、A舟関係96点中56点58%、L建築材類616点中247点40%、M樹皮65点中37点57%、やや高めの率はB・C・D・E・F・G・H・Iの諸道具・容器類の合計443点中165点37%、J 3-1・2・J 4・K 3-1・2・2d・K 4を合わせた板類379点中137点36%である。逆に低い率を





図VII-1 IB3層木製品集中区出土状況図

示すものは、N 廃材764点中133点17%で、J 5・K 5の柱目板類も501点中148点30%とやや低い。

さらに特徴的なものを細分してみると、L 建築材類では標準的なL 5細杭31%を除けば、L 1 - 1柱38%・L 1 - 2 股木杭39%・L 3 建築部材35%・L 4 杭37%と高い率で、特にL 2 建材49%とL 6 刺し杭44%は目立った高率を示す。B - Iの諸道具・容器類ではB 漁労具44% (特に魚叩き棒は4本中3本75%)・D 6 柄類47点中24点51%・D 11 楔類49%・G 4 - 1 漆塗り椀44%・G 5 - 6 刺り物・素木椀57%が40%を超える高率、C 狩猟具39%・H 5 串37%も高い率を示す。逆にイクバスイ等の祭祀具は20%と極端な低率を示す。

以上のように全体に比して高い出現率を示すものとして、舟関係・大型の建築材・樹皮・漁労具・狩猟具・柄類・楔類・漆塗り椀・刺り物があり、低い出現率のものには祭祀具や廃材があることがわかった。これらから読み取れることは、木製品の種別の出現率に大きな差があることや、その一部に高率を示すものがあること、廃材や祭祀具が少ないなど、この場所がただの木製品の集中区でも、一般の木製品廃棄場でもないことである。廃棄場とみるよりは、出現率の高かった舟関係や漁労・狩猟具類・容器類など特定の品の送り場としての意味がより強いと考えられる。台地縁辺から斜面にかけて送り対象の木製品が置かれていたものと思われる。また、図VII- 1で表されているごとく、大型の建築材類が台地と直交・並行など一定の方向で出土すること、大型建築材の出現率の高さからみると、家屋ではなく小屋・柵・棚などの施設が、台地縁辺から倒壊したように推定される。建築材だけでいえば類似の状況は、美々8 遺跡低湿度でも建材集中(美沢川流域の遺跡群VⅦ・XⅩ 北埋調報102・114)としてみられた。台地側の状況が水田造成による削平で失われていたため確認できなかったため、想像にしかならないが、小屋掛けのような建築物があり、そこに使用されなくなった木製品あつまりられて再生に向けて朽ち果てゆく状況だったのではないだろうか。

報告書<sup>(3)</sup>(北埋調報146)でI B 4層木製品集中地点として報告した図Ⅳ- 22を当図Ⅴ- 1に重ね合わせてみると、このI B 3層集中区でもやや密度の薄い部分に位置することがわかり、やはり小屋掛けのような建築物が倒壊したようにみえる。ただ、台地と直交する建築材の出土方向がI B 3層とはやや違っている。堆積土の違いからI B 4層と判断したが、重ね合わせた平面的な状況だけからみれば、これをI B 3層から沈み込んだもの理解することも可能かもしれない。I B 4層のものであれば、擦文文化期中葉以前から、I B 3層としても擦文文化期中葉から形成された木製品の送り場が、それ以降中世アイヌ文化期に至るまで利用されつづけたと考えるべきであろうか。図VII- 1にみられるJ 26区付近の南に流れ出したような状態は、斜面を落下した木製品が水流で動かされたものと思われる。

図II - 3・4から読み取れるごとく、I B 2層になるとこのI B 3層集中区の位置からはほとんど木製品が検出されなくなる。わずかにI 22・23区に名残がみられ、集中域が北台地に沿って南西に移動したことがわかる。I B 2層木製品集中域については分析していないが、I B 2層の時期においては、I B 3層の木製品集中区=送り場を避けて木製品が廃棄・送りされていたことは明白である。この状況からも、このI B 3層の木製品集中区が特別な意味を持って伝えられたことが推定でき、特定の種類の木製品の送り場であったことを想定させる。

(三浦)

1 I B 3層における木製品の集中区について

表V-II-1 B3層木製品集中区出土木製品一覧(1)

H22b	3点	H23c・I23d	13点	H24c	53点	H25c	55点	H26b	続き
掲載№	遺物名称	掲載№	遺物名称	掲載№	遺物名称	掲載№	遺物名称	掲載№	遺物名称
815	湯呑状樹皮	54	車轆木桶部	32	車轆	3	舟敷(輪)		柄1
	半割材1	693	建材	161	袂付長柄	76	車轆受台部輪		ピン状製品1
	湯呑状樹皮1		枝材加工製品1	177	柄	128	矢中柄		漆塗痕状製品1
<b>H22c</b>	<b>6点</b>		砥目板1	229	炉鉤・吊り鉤	250	曲物		有孔板材加工製品1
166	有孔柄		割材1	270	漆碗	449	軸状製品		板材加工製品1
591	砥目板		半割材1	343	平細串	470	丸木材切断品		割材加工製品1
	砥目板1		枝材2	393	木札	668	建材切断品		枝材加工製品1
	半割材1		丸木材1	479	心持材加工製品	806	帯状樹皮		砥目板6
	細枝材1		建材3	562	有孔板加工製品		櫻3		板材3
	磨皮1		湯呑状樹皮1				三角串1		板材1
<b>H22c・I22d</b>	<b>2点</b>	<b>H24b</b>	<b>30点</b>						
723	建築部材	88	浮子	694	建材		板材加工製品1		割材7
	杭1	159	袂付長柄	772	杭		半割材加工製品1		割材3
<b>H23b</b>	<b>25点</b>	372	太長串	779	細杭		枝材加工製品1		半割材1
65	車轆受台部	422	イクバスイ	800	刺し杭		砥目板3		細枝材4
189	柄	776	細杭		角串1		板1		枝材7
327	両先梢円串	803	長円形樹皮加工製品		割材加工製品1		割材15		杭4
389	長串		舟敷(輪・楯)1		砥目板1		心持材1		細杭1
432	イクバスイ		太三角串1		板2		細枝材5		柱2
438	イクバスイ		舟敷(輪・楯)1		板材1		枝材7		建材3
	板材加工製品2		太三角串1		割材1		丸木材1		建築部材1
	割材加工製品1		板材加工製品1		偏割材2		柱1		切片4
	砥目板5		割材加工製品1		半割材1		建材1		湯呑状樹皮1
	割材1		偏割材加工製品1		細枝材6		切片2		
	半割材1		枝材加工製品1		枝材9		割材1		<b>H26bc</b>
	細枝材2		割材1		丸木材5		炭化材1		<b>12点</b>
	枝材1		半割材1		股本材3		樹皮1		631
	丸木材3		細枝材2		細杭1				柱
	刺し杭2		丸木材3		建材2				678
	建材1		杭2		切片2				建材
<b>H23b・I23a</b>	<b>9点</b>			<b>H24c・H25b</b>	<b>3点</b>				715
574	砥目板					<b>H25c・H26b</b>	<b>5点</b>		774
	枝材加工製品1					91	キテ中柄		板材加工製品1
	板材1					208	建築部材		袂入細枝材加工製品1
	細枝材1						板材加工製品1		砥目板1
	枝材2						砥目板1		割材1
	丸木材3						枝材切断品1		枝材1
	枝材1								柱1
									建材1
									炭化材1
<b>H23b・I23a</b>	<b>9点</b>								
574	砥目板								
	枝材加工製品1								
	板材1								
	細枝材1								
	枝材2								
	丸木材3								
<b>H23c</b>	<b>27点</b>								
47	車轆								
132	矢中柄								
141	弓								
187	柄								
273	漆碗								
332	両先細串								
449	軸状製品								
	板材加工製品3								
	割材加工製品1								
	砥目板5								
	板材1								
	心持材1								
	細枝材1								
	枝材2								
	丸木材2								
	杭1								
	柱1								
	切片1								
	切片2								
<b>H23c・H24b</b>	<b>2点</b>								
634	柱切断品								
	丸木材1								
<b>H23c・H24b・I23d・I24a</b>	<b>2点</b>								
738	股本杭								
	股本杭1								

表ⅤⅡ- 2 B3層木製品集中区出土木製品一覧(2)

H26c	継ぎ	I22b	継ぎ	I22d	継ぎ	I23a	継ぎ	I23d	99点
掲載№	遺物名称	掲載№	遺物名称	掲載№	遺物名称	掲載№	遺物名称	掲載№	遺物名称
	丸木材6	810	細帯状樹皮	288	皿	435	イクバスイ	19	敵側板
	股木材1		柄1	333	両先細串	496	快清付割材加工製品	21	敵側板
	細杭2		柄1	345	三角串			86	あかみ
	建材2		曲物1	421	イクバスイ	508	割材加工製品	95	魚印き棒
	建築部材1		イクバスイ1	430	イクバスイ	541	板材加工製品	140	矢印
	切片1		割材加工製品1	458	輪状製品	565	有孔板加工製品 (丸木板加工製品)	184	柄
	炭化材1		柱目板16	499	半割材加工製品	684	建材	206	模
H26cd	5点		板材4	506	割材加工製品	730	建築部材	220	模
42	車轆		板材1	525	備割材加工製品	733	建築部材	254	細板材(筋材)
	細枝材1		備割材1	536	挟付板材加工製品	755	股木杭	294	値
	刺し杭1		細枝材5	795	刺し杭	781	細杭	331	両先細串
	柱2		枝材9	797	刺し杭		有孔板加工製品1	351	太串
H26c-I26d	1点		丸木材2		細串1			377	長串
	半割材1		柄3		柄1			387	長串
H26d	4点		細板2		イクバスイ1		押酒袋状製品1	396	かんじき輪
	柱目板1		建材1		押酒袋状製品2		板材加工製品5	398	かんじき輪
	細枝材2		切片9		板材加工製品2		割材加工製品3	484	有孔丸木材加工製品切斷品
	樹皮2		湯巻状樹皮2		割材加工製品7		柱目板13	605	割材加工製品
I22a	45点	I22bc	10点		丸木材加工製品1		細板1	534	挟付板材加工製品
74	車轆受部輪	692	建材		柱目板22		板材2	554	板材加工製品
138	矢中柄	593	柱目板		板材7		割材2	555	板材加工製品
147	敵側		割材1		割材11		備割材1	731	建築部材
360	半串		枝材3		半割材3		半割材2	732	建築部材
611	板		丸木材1		細枝材4		細枝材3	814	双湯巻状樹皮
753	股木杭		杭2		枝材8		枝材15	柄内串1	
	押酒袋状製品1		建材1		丸木材7		丸木材7	イクバスイ1	
	板材加工製品1	I22b-J22a	2点		柄6		股木材1	押酒袋状製品1	
	割材加工製品1		柱目板2		細杭5		杭3	有孔板材加工製品1	
	柱目板13	I22c	36点		刺し杭3		股木杭1	板材加工製品1	
	板材5	66	車轆受部輪		建材1		建材2	切片3	
	割材4	478	心持材加工製品		切片20		建築部材5	割材加工製品2	
	細枝材1		板材加工製品3		木端3		切片3	柱目板7	
	枝材4		割材加工製品3		炭化材4		湯巻状樹皮1	細板1	
	丸木材1		柱目板6		湯巻状樹皮2			板1	
	切片4		割材1		炭皮4			板材2	
	木端1		細枝材2	I22d-I23a	15点		5	舟敷(輪)	
	樹皮3		枝材3		80	車轆	6	舟材(輪)	
I22ad	4点		丸木材3	639	柱切斷品	575	柱目板	575	柱目板
600	有孔板		柄2	649	建材	624	柱	624	柱
	枝材2		細杭1	657	建材	667	建材	739	股木杭
	丸木材1		刺し杭1		枝材3	751	股木杭	751	股木杭
I22b	78点		建築部材1		柄1		丸木材2		丸木材7
27	舟部材		切片5		刺し杭2		細枝材集積1		枝材22
33	車轆		木端2		柱1		建材1		丸木材7
98	やす・矢		炭化材1		建材4				柄4
116	矢中柄	I22c-J22d	2点	I23a	99点		割材1		細杭1
146	敵側		647	建材	15	舟敷	丸木材1		柱2
167	有孔柄		丸木材1		29	舟部材	柄1		建材5
215	樅	I22d	149点		39	車轆			切片4
216	模		11	舟材(輪)	44	車轆	I23bc	1点	双湯巻状樹皮1
404	イクバスイ		12	舟敷	52	車轆木樋部	770	杭	I23d-I24a
442	柱目板加工製品		46	車轆	79	車轆受部輪	I23b-J23a	1点	1
487	両端挟付有孔丸木材加工製品		58	車轆受部	114	矢	594	柱目板	舟敷(輪)
493	挟付割材加工製品		101	やす・矢	174	柄	I23c	3点	77
537	挟付板材加工製品		110	矢	176	柄	771	杭	473
			160	挟付長柄	253	箱材	丸木材1		654
			169	柄	283	割り皿	樹皮1		666
			205	模	289	大皿			割材加工製品1
			234	釣り・釣り鉤	293	籠	I23cd	3点	割材1
581	柱目板		237	挟み木	312	箸	18	敵側板	枝材4
582	柱目板		245	曲物底板	323	樺内串	半割材1		丸木材2
590	柱目板		276	素木輪	414	イクバスイ	建材1		建築部材1
662	建材						I23c-J23d	1点	切片1

表VⅡ- 3 B3層木製品集中区出土木製品一覧(3)

I24a	102点	I24bc	2点	I24d	続き	I25b	23点	I25c・J25d	5点
掲載No.	遺物名称	掲載No.	遺物名称	掲載No.	遺物名称	掲載No.	遺物名称	掲載No.	遺物名称
	9舟材(軸)		割材1		縦板1	106 矢		784 刺し杭	
28	扶付丸木材加工製品(舟部材)		枝材1		割材8	225 楔		板1	
		I24b・J24a	1点		偏割材4	325 楕円串		割材1	
67	車樞受台部軸		235 伊駒・吊り駒		半割材4	380 長串		偏割材1	
129	矢中柄	I24c	23点		心持材1	384 長串		板1	
144	箱		51 車樞木樞部		細枝材6	807 帯状樹皮	I25d	35点	
208	楔		93 魚叩き棒		枝材21	柄1		218 楔	
247	曲物		111 矢		丸木材3	割材1		282 例9鉢	
274	漆碗		263 漆碗		割木材1	割材2		286 盆	
340	籠串		276 漆碗		細枝3	半割材3		321 楕円串	
447	ビン状製品		柱目板加工製品1		建材3	細枝材2		扶付割材加工製品	
513	割材加工製品		枝材加工製品2		切片11	枝材5		492 品	
696	建材		柱目板1		割材1	板1		538 卵形板材加工製品	
791	刺し杭1		割材2	I24d・I25a	5点	切片1			
811	帯状樹皮		偏割材1	691 建材		木端1		542 板材加工製品	
	舟材(軸・縦)1		細枝材2		扶付偏割材加工製品	I25bc	4点	805 平帯状樹皮加工製品	
	車樞1		枝材3		割材1	早樞1		割材加工製品3	
	車樞受台部軸1		丸木材2		偏割材1	枝材2		偏割材加工製品1	
	楔1		板1		建材1	建材1	49点	半割材加工製品1	
	板材加工製品4		細枝材1	I25a	53点			柱目板1	
	細枝材加工製品2		切片1			45 車樞		細板1	
	枝材加工製品1		木端1		31 舟部材	195 把手		割材4	
	柱目板7	I24cd	3点		72 車樞受台部軸	230 伊駒・吊り駒		偏割材2	
	板1		139 矢中柄		149 横櫓	251 曲物		半割材2	
	板材6		割材1		376 長串	284 例9鉢		細枝材3	
	割材13		丸木材1		385 長串	359 平串		枝材3	
	偏割材5	I24c・I25b	5点		553 板材加工製品	382 長串		丸木材1	
	半割材2		板材加工製品1		612 板	441 段木材加工製品(クマ形?)		建材2	
	細枝材8		割材1		625 柱切断品	566 有孔板加工製品(柱頭板内加工品)		切片1	
	枝材19		半割材1		729 建築部材		木端2		
	丸木材2		枝材1		舟繋1				
	板1		刺し杭1		三角串1	799 刺し杭	I25d・I26a	4点	
	細枝材1	I24cd・I25ab	1点		割材加工製品1	板材加工製品3	22 柱側板		
	建材4		92 魚叩き棒		柱目板1	割材加工製品1	164 有孔柄		
	切片6	I24d	94点		板1	偏割材加工製品1	枝材1		
	木端1		113 矢		板材1	柱目板1	建築部材1		
	樹皮1		175 柄		割材6	板2	I26a	64点	
I24ab	3点		200 作業台		偏割材2	板材2	25 軟側板		
563	有孔板加工製品(軟側板内加工品)		261 漆碗		半割材2	割材3	43 車樞		
	丸木材2		316 箸		細枝材2	偏割材1	84 早樞木樞部		
I24ad	5点		371 長平串		枝材12	半割材2	165 有孔柄		
	239 整件		381 長串		丸木材1	細枝材1	226 楔		
663	建材切断品		386 長串		段木材1	枝材12	311 箸		
	枝材1		390 長串		板1	板1	443 彫刻入樞構造品(ミニチュア)		
	丸木材1		402 刻目人枝材加工製品		建材3	段木材1	558 板材加工製品		
	段木材1		イクバスイ		建築部材1	刺し杭1	583 柱目板		
I24ad・I25a	1点		413 イクバスイ		切片4	建材1			
	464 棒酒造状製品		464 棒酒造状製品		樹皮1	切片6			
	642 建材		498 半割材加工製品	I25ab	8点	I25cd	11点		
I24b	20点		531 溝付板材加工製品		板材2	50 車樞木樞部		板材加工製品2	
68	車樞受台部軸				細枝材2	318 円串		割材加工製品1	
85	あし・汲み				枝材2	699 建築部材		柱目板	
105	やす・矢				有孔板(軟側板?)	707 建築部材		板材2	
244	曲物		601 建築部材	I25abd・abcd	2点	板材加工製品1		割材16	
798	刺し杭		721 建築部材		丸木材2	板材1		偏割材4	
	楔1		741 段木材	I25ad	3点	半割材1		心持材1	
	軸状製品1		812 帯状樹皮		610 板	枝材2		細枝材3	
	棒酒造状製品1		曲物1		792 刺し杭	丸木材1		枝材8	
	心持材1		大串1		板1	建築部材1		丸木材4	
	細枝材3		棒酒造状製品2			I25c・I26b・J26a	2点	細枝1	
	枝材7		割材加工製品2			710 建築部材		建材1	
	段木材1		柱目板2			枝材1		切片4	

図VII-4 B3層木製品集中区出土木製品一覧(4)

I26ab 1点		J26a 28点		以下、周辺参考品			
掲載No	遺物名称	掲載No	遺物名称	掲載No	遺物名称	掲載No	遺物名称
	割材1	401	割目入割材加工製品	(I26c)	(J22c) 焼き	(J23c)	
I26b	14点			(I26c)			
357	平串	568	板材加工製品	(J22a)	曲物1	(J24b)	割材加工製品1
543	板材加工製品	609	板	450	軸状製品		割材加工製品2
	薄板1		枝材加工製品1		心持材加工製品1		割材加工製品2
	板材1		桎目板4	(J22b)			細枝材1
	割材4		細板1	761	股木杭		枝材1
	偏割材1		板材1		板材加工製品2		(J25a)
	枝材1		割材3		偏割材加工製品1		
	杭1		偏割材1		枝材加工製品1		細枝材3
	切片3		細枝材4		桎目板2		枝材3
I26d	3点						切片10
	割材1		枝材2			(J22cd)	
	切片1		丸木材2		割材2	462	曲物武板
	炭化材1		細杭1		半割材1		細枝材加工製品1
J25d	23点		刺し杭1		細枝材1	(J22c・J23b)	
217	楔		切片2		枝材2		397
222	楔		木端1		丸木材2		かんじき軸
271	漆桶		割材1		切片8	(J22d)	801
461	軸状製品	J26ab	2点		木端4		刺し杭
785	刺し杭	688	建材	(J22c)			
	割材加工製品1		細枝材1	248	曲物		板1
	桎目板1	J26b	39点	249	曲物		割材1
	板材1	56	車轆受台部	252	曲物	(J23a)	偏割材2
	割材1	221	楔	486	挟付偏割材加工製品	210	建材1
	偏割材2	227	火鑽り棒	535	挟付板材加工製品		切片1
	細枝材1	287	盆	567	板材加工製品		
	枝材4		細板材加工製品1	734	建築部材		
	丸木材1		板材加工製品2	759	股木杭		
	割材1		割材加工製品1				
	股木杭1		杭1				
	細杭1		心持材加工製品1				
	建築部材1		桎目板3				
	切片2		板2				
J25d・J26a	4点		板材1				
	板材加工製品1		割材1				
	板1		半割材2				
	枝材1		細枝材5				
	杭1		枝材6				
J25d・J26ad	1点		杭2				
737	股木杭		建材2				
			切片5				
			炭化材1				

\* 周辺参考品は図Ⅶ-1の範囲内のみを示した

## 2 木製品の樹種構成からみたユカンボシC15遺跡の性格とその変容

### (1) 木製品分析の意義

ユカンボシC15遺跡から出土した木製品の総数は、11 612点にのぼる。主に低湿度部に残されたこれら木製品は、当時の人々が生活を営むにあたって最も身近で利用度の高い材質であった。そのため木製品を調査し分析検討することは、当時の人々の行為を復元するという、重要な課題につながるものとなる。分析検討の主体は、製品がどんな木から作られているのかを知る樹種同定である。樹種が判明すれば、製品が地場産か交易で得たものか、製品によって使用する樹種を選択しているのか、遺跡内での時間的変化などを検討することができる。また他遺跡との比較検討により、製品や利用樹種が集落ごと・地域ごと・時間的にどう変化するのか、なぜ変容するのかを考える要素ともなる。

このような事由から当遺跡報告にあたっては、11 612点全ての樹種同定を行った。実際は材の複合した製品を含むため、11 616点が樹種同定の対象となり、同定不能・樹皮・大分類止まりなどを引いた11 095点の樹種が属レベルまで判明した。属によっては種レベルまで同定されたものもあり、32科48属17種に同定分類されている。これらを層別でみると、I B 3層5 061点32科44属14種、I B 2層3,196点30科42属16種、I B 1層1,380点26科37属13種、I B 4層932点24科30属11種、(以下略)となり、この四つの連続した層が数量的にも層別の分析検討に使えるデータとして成立するものと考えられる。

一方、樹種にも関係はするが、木材が製品になるにあたっての木取りのあり方も検討項目のひとつである。どんな製品にするかという明確な意図があって、木取りや加工法が決定されるもので、再利用材においても同様であろう。次項で木取りの展開と内訳を概観する。他に、焦がし加工の痕跡や焼痕など炭化部分が残存する製品は、炭化材として分類した物を除くと、11 612点中715点6.2%。樹皮残存の製品は分類が樹皮であるものを除いて、11 612点中568点4.9%である。これらの情報も製品種別や層別・遺跡別で比較検討することにより、何らかの示唆を与えてくれるであろう。

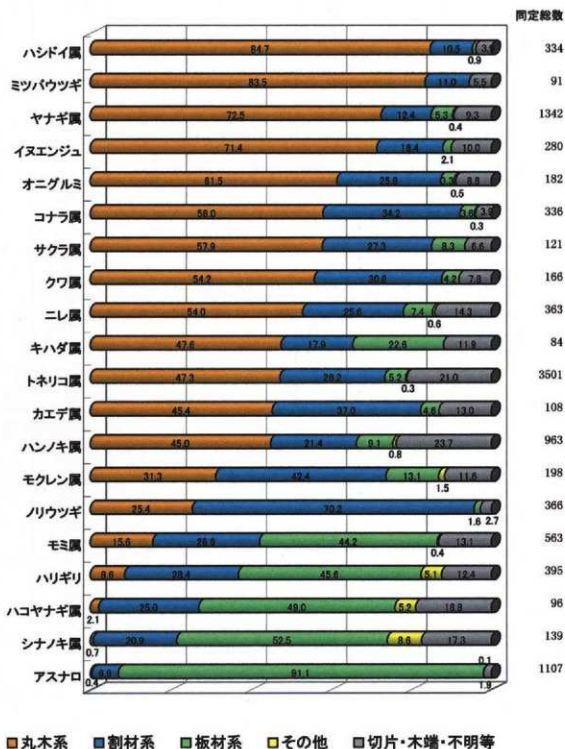
以下、この樹種同定結果を中心に、層ごとの樹種選定の特徴・木製品種別の樹種構成・樹種アイヌ語名との関係・美々8遺跡低湿度部との比較などから、遺跡の変容を探り、当時の人々の行為を復元する一助としたい。

### (2) 木製品の木取りについて

木取りはその先に展開する加工の第一歩で、製品の役割や名称を決定する上での大きな要素である。製品の具体的な使用法が不明の段階では、製品名は材の規模・木取りや細部加工をもって命名する。製品を分類した種別の報告は既報告や、章で行っており、製品によっては木取りにも触れているが、ここではまとめとして、木取りについて11 612点を集約し、展開等を考慮して検討した。今回は層ごとの分析を行っていないが、さらに製品種別ごとに木取りの変化の有無を層別・遺跡別に検討することができれば、木製品を通した人的行為の復元はさらに進展するものと考えられる。

総点11 612点中、木質が失われたり腐朽や炭化が著しく木取りが不明のものが249点、加工の未の廃材でこれ以上加工されない切片・木端が1,472点ある。これらを除いた9,891点の木取りを大別すると、{丸木系}・{割材系}・{板材系}・{その他}に分けられる。その総数と9,891点に対する割合は、{丸木系}4,914点49.7%・{割材系}2,577点26.1%・{板材系}2,116点21.4%である。

{丸木系}には[丸木]4,603点・[股木(丸木)]205点・[心持]106点がある。[丸木]の多さは細枝材・枝材・丸木材の多さに起因する。{丸木系}は材を通して樹心が残っているあるいは残しているのが特徴となるが、ここから展開する{割材系}は樹心を無視あるいは割る(嫌う)のが特徴となる。また{その他}の[横木]90点のほとんどや[縦木]8点は丸木から樹心を削り抜くなどして除去する木取りである。[節]6点と[樹皮]180点は樹心と無関係な分類である。



図Ⅷ-2 主要樹種の木取り系統比率グラフ



{ 割材系 } には、樹心を割る [ 割・半割 ] ( 正割 ) と、樹心を割らない [ 偏割 ] とがある。内訳は [ 割 ] 1 610 点・ [ 半割 ] 452 点、 [ 偏割 ] 515 点で、樹心を割る正割と [ 偏割 ] の比は 2 062 : 515 = 4 : 1 である。 [ 半割 ] は [ 丸木 ] の次段階で、さらに [ 割 ] や [ 偏割 ] あるいは { 板材系 } や [ 横木 ] に展開する可能性を持つ。 [ 割 ] には [ 1 4 割 ] 系と [ 1 6 割 ] 系があり、 [ 1 4 割 ] 系には [ 1 4 割 ] ・ [ 1 8 割 ] ・ [ 1 16 割 ] ・ [ 1 32 割 ] の段階が、 [ 1 6 割 ] 系には [ 1 6 割 ] ・ [ 1 12 割 ] の段階がある。どちらの系列になるか判然としない [ 1 4 ~ 1 8 割 ] ・ [ 1 4 ~ 1 6 割 ] ・ [ 1 6 ~ 1 8 割 ] としたものもある。点数をみると、 [ 1 4 割 ] 913 点・ [ 1 8 割 ] 236 点・ [ 1 16 割 ] 51 点・ [ 1 32 割 ] 4 点、 [ 1 6 割 ] 261 点・ [ 1 12 割 ] 90 点、 [ 1 4 ~ 1 8 割 ] 22 点・ [ 1 4 ~ 1 6 割 ] 23 点・ [ 1 6 ~ 1 8 割 ] 9 点で、 [ 1 4 割 ] 系と [ 1 6 割 ] 系の比は 1, 204 : 351 = 7 : 2 である。なお 1 3 割という概念は導入せず、 1 3 割に見えるものは [ 半割 ] から 1 6 を割取ったもので、木取りとしては [ 半割 ] と判定することとした。 [ 偏割 ] には [ 割 ] に形を準じた [ 偏半割 ] ・ [ 偏 1 4 割 ] ・ [ 偏 1 6 割 ] ・ [ 偏 1 8 割 ] もあるが、約 64% の 332 点は形状の不均一な [ 偏割 ] である。 [ 心持 ] ・ [ 割 ] から [ 偏割 ] への展開も可能性がある。

{ 板材系 } には [ 榎目 ] ・ [ 板目 ] ・ [ 追紐 ] がある。点数をみると、 [ 榎目 ] 1 430 点・ [ 板目 ] 536 点・ [ 追紐 ] 150 点であるが、 [ 榎目 ] には曲物や榎目板とその加工製品として別に分類した薄い板の分 875 点が含まれている。これを除く [ 榎目 ] 555 点と [ 板目 ] の比はほぼ 1 : 1 であり、 [ 追紐 ] を [ 榎目 ] 系とした時の合計 705 点と [ 板目 ] の比は 1 3 : 1 となる。

{ 板材系 } の成立には大きく四通りの流れが考えられる。ひとつは [ 半割 ] ・ [ 偏半割 ] から [ 榎目 ] [ 追紐 ] [ 板目 ] と割面に平行に幅広の板材を採っていく方法。もうひとつは [ 1 8 割 ] 以上・ [ 1 6 割 ] 以上の割材から割面に平行に割って [ 榎目 ] [ 追紐 ] の板材を採っていく方法。第三に [ 1 8 割 ] 以下・ [ 1 12 割 ] 以下の角度の小さい割材を [ 榎目 ] の板材に加工する方法。第四に [ 1 8 割 ] 以上・ [ 1 6 割 ] 以上・みかけ 1 3 割・ [ 偏 1 6 割 ] 以上の角度の大きい割材を年輪に沿うように割って [ 板目 ] の板材に加工する方法がある。出土遺物の形状や木取り比率からみると、板材の製作にあたっては第三・第四の方法が主流で、舷側板などに大型板材を必要とするときには第一の方法に拠ったものと推定できる。

木取りが { 丸木系 } { 割材系 } { 板材系 } と展開すると、その行き着く先は板を細い棒状に割る [ 小割 ] である。当報告では特に木取り形態として分類しなかったが、一応、木製品表の木取りデータ欄には [ 榎目 ] ・ [ 板目 ] の後に [ 小割 ] と表示してある。その数は 59 点で、内訳は [ 榎目 ] から 20 点、 [ 板目 ] から 34 点で、小割のため [ 榎目 ] ・ [ 板目 ] の判別ができなかったものもある。樹種でみるとアスナロ 44 点・モミ属 10 点・カラマツ 2 点等である。当遺跡の場合、交易で得た針葉樹材の板の再利用として小割をすることがほとんどといってよい。

出土数 20 傑の樹種別に木取り 4 系統をグラフに表すと、図 VII- 2 のようになる。丸木系の占める割合が多い順に並べてみたが、全体でわかることは、ほとんどの樹種で主体となる木取り法があるということである。特に { 丸木系 } と { 板材系 } に顕著である。 { その他 } は舟や刺り物など、 { 横木取り } の製品が多い樹種に目立っている。樹種ごとに木取り比に相違があり、これを元にした製品の数と結びつくことは、表 VII- 27・28 と対比することによりわかる。

### (3) 木製品樹種の層別変化

木製品に使われた樹種が時間的にどう変化するかを検討することは、遺跡の変容や木製品種別の盛衰などをみる上で必要となる。また他遺跡の相当層との比較検討により、製品や利用樹種が集落ごと・地域ごと・時間的にどう変化するのか、なぜ変容するのかを考える要素ともなる。当遺跡では、 I B

表Ⅴ-5 各樹種の層別構成比

科名	属名	種名	I B4 (%)	I B3 (%)	I B2 (%)	I B1 (%)	全層 (%)	全層合計数
いちい	イチイ	イチイ		0.1	0.2	0.3	0.2	18
	モミ		2.4	4.7	7.2	3.9	4.8	563
まつ	カラマツ			0.1	0.2	0.1	0.1	12
	トウヒ			0.1	0.1	0.2	0.1	15
	トウヒ・カラマツ			0.0			0.0	2
すぎ	スギ	スギ	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	53
ひのき	アスナロ	アスナロ	7.2	11.6	11.1	4.9	9.9	1107
	ヤナギ		8.7	12.8	13.3	9.5	12.0	1342
やなぎ	ハコヤナギ		0.2	1.1	0.9	0.5	0.9	96
	オニグルミ	オニグルミ	1.1	1.9	1.5	1.1	1.6	182
くるみ	アサダ				0.0		0.0	1
	カバノキ		0.1	0.1	0.0	0.5	0.1	13
かばのき	ハンノキ		9.7	7.2	8.7	13.7	8.6	963
	ブナ			0.1	0.1	0.1	0.1	10
	コナラ		2.1	3.5	2.5	2.7	3.0	336
ぶな	クリ	クリ			0.1	0.1	0.0	3
	ニレ		2.8	3.7	2.8	2.7	3.2	363
にれ	ケヤキ				0.1	0.1	0.0	4
	クワ		1.1	1.3	1.3	2.4	1.5	166
くわ	カツラ	カツラ	0.9	0.2	0.3	0.3	0.3	35
かつら	モクレン		0.9	1.9	1.7	2.1	1.8	198
もくれん	アジサイ	ナリウツギ	2.3	3.6	3.3	3.2	3.3	366
		ツルアジサイ	0.7	0.2	0.2		0.2	24
ゆきのした	サクラ		0.6	1.0	1.5	1.0	1.1	121
	ナナカマド		0.6	0.1	0.1	0.1	0.2	18
ばら	リンゴ			0.0			0.0	1
	イヌエンジュ	イヌエンジュ	2.4	2.0	2.5	3.9	2.5	280
	ハギ		0.3	0.1	0.1		0.1	15
みかん	キハダ		0.4	0.7	1.0	0.6	0.7	84
にがき	ニガキ	ニガキ		0.1	0.0		0.0	5
うるし	ウルシ			0.0	0.0		0.0	2
にしきぎ	ニシキギ			0.2	0.2	0.2	0.2	22
	ツルウメモドキ		0.1	0.1			0.1	8
みつばうつぎ	ミツバウツギ	ミツバウツギ	0.4	0.8	1.2	0.6	0.8	91
かえで	カエデ		1.8	1.2	0.5	0.6	1.0	108
ぶどう	ブドウ	ヤマブドウ		0.1	0.0	0.1	0.1	6
とちのき	トチノキ	トチノキ	0.1	0.1	0.1		0.1	8
しなのき	シナノキ		0.7	1.8	1.0	0.5	1.2	139
またたび	サルナシ		0.3	0.2	0.1	0.1	0.2	17
	ハリギリ	ハリギリ	1.5	3.9	4.0	3.2	3.5	395
うこぎ	タラノキ	タラノキ		0.4	0.3	0.6		39
	ウコギ	コシアブラ					0.0	2
みずき	ミズキ			0.0	0.0		0.0	2
えごのき	エゴノキ			0.0			0.0	2
もくせい	トネリコ		44.9	28.2	27.4	36.4	31.2	3501
	ハンドイ		4.0	2.9	3.1	2.4	3.0	334
すいかずら	ニワトコ			0.0	0.1	0.1	0.2	18
	ガマズミ						0.0	2
広葉樹散孔材A・B・C			0.7	1.2	0.7	0.7	0.9	102
広葉樹環孔材A						0.1	0.0	1
広葉樹				0.1	0.2		0.1	9
いね	タケ		0.1	0.0			0.0	3
層別合計点数			940	5126	3222	1391	樹種同定総計	11207

4・IB3・IB2・IB1層の四つの連続した層が数量的に層別の分析検討に使えるデータとして提供できる。表VII-5は、層ごとに各樹種がどの程度の使用割合を示すかを、樹種が属レベル以上まで判明した11095点に大分類止まりの112点を加えた11207点を対象として一覧表にしたものである。各樹種の層ごとの利用頻度は横列で、層に占める割合は縦列で掌握できる。各層の樹種利用の特徴は、

IB4層では、汎用材であるトネリコ属が半数近くを占め、ハンノキ属・ヤナギ属も1割近くと多く、持込みと思われるアスナロもすでに出現している。

IB3層では、汎用材であるトネリコ属・ハンノキ属が多いながらも相対的には大きく減り、ヤナギ属と持込み材アスナロの割合がかなり高まる。ハリギリが激増、コナラ属・ニレ属・ノリウツギ・シナノキ属・針葉樹のモミ属も増えているが、ハシドイ属は減少する。

IB2層では、汎用材であるトネリコ属・ヤナギ属と持込み材アスナロも安定、モミ属・ハンノキ属は増加する。ノリウツギ・ハリギリ・ハシドイ属は安定しているが、コナラ属・ニレ属・シナノキ属はやや減少する。

IB1層になると、汎用材であるトネリコ属・ハンノキ属が大きく増加するが、ヤナギ属・モミ属は減少し、持込み材アスナロも激減する。ノリウツギ・コナラ属・ニレ属は安定的で、イヌエンジュ・クワ属が増加傾向にある。

次に各樹種の層対間の割合変化を、樹種同定報告の表III-17に示された木取りの変化傾向を含めてみておく。全層中1%以上を占める樹種で、層間の変化幅が1%以上あるものを大きな変化とすると、トネリコ属は、全層で突出して安定して多い汎用材で、特にIB4・IB1層の全体(丸木系)・(板材系)でより高比率となる。(丸木系)ではIB3・IB1層の増加傾向が顕著である。

ヤナギ属は、全体の1割を占める汎用材で、IB4・IB3層で急増、IB2層で微増するが、IB1層で激減する変化の多い樹種である。変化は(丸木系)に顕著である。

持込み材アスナロは、IB4層ですでに出現し、IB2・3層では安定して供給されるが、IB1層で激減する。特に(板材系)で顕著である。

ハンノキ属は、全体の1割近くを占める汎用材で、IB4・IB3層で減少するものの、IB2層で微増し、IB1層で激増する変化の多い樹種である。変化は(丸木系)に顕著である。

モミ属は針葉樹の汎用材で、IB4・IB3・IB2層と増加するが、IB1層で激減する。

ハリギリはIB4・IB3層で急増してからは安定的に使用されているが、(板材系)でみるとIB2層出増加し、IB1層でさらに激増する。

ノリウツギもIB4・IB3層で増加してからは安定的に使用されているが、(丸木系)では徐々に減少している。

ニレ属は安定的に使用されており、IB3層でやや高比率。

コナラ属も安定的に使用されており、IB3層で特に(丸木系)が高比率。

ハシドイ属はIB4層でやや高比率だが、ほぼ安定的に使用されている。

イヌエンジュはIB3・IB2層と増加し、IB1層で急増する。

モクレン属も安定的に使用されており、IB1層で(丸木系)の比率がやや高い。

オニグルミはIB3層でやや増加するが、後徐々に減少。特にIB1層(丸木系)で大きく減少。

クワ属は安定した使用から、IB1層で急増。(丸木系)・(板材系)とも率は増えている。

シナノキ属はIB3層で急増して、以後徐々に減少。特にIB1層(板材系)で激減。

サクラ属はIB2層でやや高いが、安定的に使用されている。

カエデ属はIB4・IB3層で激減し、IB3層でさらに減少する。

出土数100点以下のもものでは、持込み材のスギが安定的に供給されており、ハコヤナギ属・ミツバウツギがⅠB3・2層で、キハダ属がⅠB2層でやや高比率を示すことがわかる。

あくまでも層に占める比率であり、絶対数比較ではないので、点数は低くても高比率を示すものもある。絶対数比較では現れない使用樹種の変化と、時期の違いによる使用頻度の変化傾向が確認できる。

#### (4) 木製品種別の樹種構成について

では、各々の木製品はどのような樹種で作られているのか、樹種選定がなされているのか、木取りが整えば何でもよいのか。製品ごとの樹種選定の有無や、どの樹種が選定されているのか、その意識はどう推移するのかを検討することも、遺跡の変容を探り、当時の人々の行為を復元する要素となるだろう。各種木製品の樹種構成については、層ごとには既報<sup>(3)(4)(5)</sup>で、まとめては当報告、章でも若干述べているが、木取りを含めた総合的見地から再度Ⅳ章で分類したA-Nにそって主な製品群を取りまとめておくことにする。

表ⅦE-6~26は、A-N分類を基礎とした細分類に対してどの樹種が製品に使われているかを、層別に分けて数量を一覧化した表。21枚の大部になったが、各種製品の製作にあたって利用樹種に特定があるランダムな選択なのかや、同種の製品の層別推移もとらえられる。

図ⅦE-3~11は、代表的な製品等を個別や類型的にまとめて、樹種構成比をみた表と円グラフ。類型的な例はA舟関係をA1舟本体関係と權に分けたことや、手から離す狩猟・漁労具をまとめたこと、木取り別の加工製品関係を原材と製品に分けたものと小括して合わせたものの両者を掲載したことなどである。最後には全点の樹種別グラフを載せた。

A1・1・2の舟数・舟材8樹種40点ではシナノキ属12点30%・ハリギリ11点27.5%と2種で半数以上、A1・4舷側板でも8樹種38点中ハリギリ11点29%・モミ属とハンノキ属各8点21%ずつと3種で6割以上を占め、どちらも明確な樹種選択がなされている。これらを主にしたA1・1~5の舟本体部でみても12種87点中ハリギリ・ハンノキ属・シナノキ属・ヤナギ属・モミ属・ハコヤナギ属6種で74点85%あり、樹種選択があったと考えられる。A4あかくみもこれに準ずる。

A2・1車權・A3・1早權でも合わせて12種65点中、ハンノキ属・モクレン属・サクラ属の3種で49点34%を占め、明らかな樹種選択ととらえられる。

B2魚叩き棒は9点中4点がヤナギ属で、彫刻の入った魚叩き棒もヤナギ属製であった。アイヌ民族ではヤナギ材は木幣を作る木で、魚叩き棒(イサバキクニ)も木幣の一種とされることから、魚叩き棒をヤナギ材で作る伝統がすでに擦文文化期には芽生えていたものと考えてよいだろう。

魚獲具ではB3キテ中柄は8本とも、B4やすも23点中22点がノリウツギ製。狩猟具C1・1~3の矢関係では矢26点中25点、矢中柄49点中39点がノリウツギ製である。矢中柄と矢柄でやや他の樹種が入るため8割ほどの比率しかないが、これらの手から離れる魚獲・狩猟具はほぼノリウツギのみで作られたとみてよいだろう。ノリウツギはアイヌ語でラスバ・ニ=中柄を作る木と呼ばれる。ノリウツギを魚獲・狩猟具製作の特定材として選定し続ける伝統が、擦文文化期にはもう成立していたと考えられる。

D5斧柄とD6柄のすべてをまとめてみる。樹種でみるとD5・6で23種と多様で、柄に対しての樹種選定はあまりないように見受けられる。ただ「柄」は挟り・有孔・頭部削り出し・長尺等の加工や形状から用途を検討すべきであり、用途に応じた用材の可能性は残る。全体の樹種の出現率からいえば、クワ属・カエデ属に特徴が見出せる。特にカエデ属は、D6ah挟付長柄11点中5点を占め、この種の柄については選定を受けたものと思われる。

D11槌は、モミ属をはじめアスナロ・スギと針葉樹・持込み材で50%を超え、ハリギリ・モクレン



表 VII-7 種別木製品の樹種別・層別出土数(2)

	科名	属名	種名	A2-3			A3-1			A3-2	A4	B1			B2			B3				B4		
				B5	B3	B2	B3	B2	B1	表土	B2	B3	B2	B4	B3	B2	B1	B4	B3	B2	B1	B4	B3	B2
針葉樹	いちい	イチイ	イチイ																					
	まつ	モミ		1																				
		カラマツ																						
広葉樹	すぎ	スギ	スギ																					
	ひのき	アスナロ	アスナロ																					
	やなぎ	ヤナギ		1	1	1			1						2									
	くるみ	オニグルミ	オニグルミ				1								1									
	かばのき	アサダ	アサダ																					
		カバノキ																						
		ハンノキ																						
	ぶな	ブナ																						
		クリ	クリ						1															
	これ	ケヤキ																						
くわ	クワ																							
かつら	カツラ	カツラ																						
もくせん	モクレン																							
ゆきのした	アジサイ	ツルアジサイ																						
木質	ばら	サクラ																						
		ナカマド																						
		リンゴ																						
	まめ	イヌエンジュ	イヌエンジュ																					
	みかん	ハキバダ																						
	にがき	ニガキ	ニガキ																					
	うるし	ウルシ																						
	にしきぎ	ニシキギ																						
	みつばうつぎ	ミツバウツギ	ミツバウツギ																					
	かみで	カニデ																						
	かむろ	アトウ	ヤマブドウ																					
	とちのき	トチノキ	トチノキ																					
	しなのき	シナノキ																						
	またたび	サルナシ																						
	うこぎ	ハリギリ	ハリギリ																					
	タラシキ	タラシキ																						
	ウコギ	ウコギ																						
みずき	ミズキ																							
えごのき	エゴノキ																							
もくせい	トネリコ																							
	ハシドイ																							
すいかずら	ニワトコ																							
	ガマズミ																							
散孔材	材A																							
散孔材	材B																							
散孔材	材C																							
環孔材	材A																							
広葉樹																								
い石	タケ(ササ)																							
	腐	取																						
	腐葉土	木質なし	など																					



表 VII-9 種別木製品の樹種別・層別出土数(4)

	科名	属名	種名	D5-1			D5-2			D6			D6h			D6a			D6b	D6c	D6d		D6ah		D6ad-adh	
				I B4	I B3	I B2	I B1	I B4	I B3	I B2	I B1	OB	表土	他	I B3	I B2	I B3	I B2	I B1	OB	I B2	I B2	I B3	I B2	I B3	I B2
針葉樹	いちい	イチイ	イチイ																							
	まつ	マツ	マツ					2	2	1																
樹	すき	スギ	スギ																							
	ひのき	ヒノキ	ヒノキ																							
広葉樹	やなぎ	ヤナギ	ヤナギ																							
	くろみ	クノミ	クノミ																							
樹	かばのき	カバノキ	カバノキ																							
	ぶな	フナ	フナ																							
樹	にれ	ニレ	ニレ																							
	くわ	クワ	クワ																							
樹	かつら	カツラ	カツラ																							
	もくれん	モクレン	モクレン																							
樹	ゆきのした	ユキサイ	ユキサイ																							
	ぼら	ボラ	ボラ																							
樹	まめ	マメ	マメ																							
	みかん	ミカン	ミカン																							
樹	にがき	ニガキ	ニガキ																							
	うるし	ウルシ	ウルシ																							
樹	にしきぎ	ニシキギ	ニシキギ																							
	みつばうつぎ	ミツバウツギ	ミツバウツギ																							
樹	かすて	カステ	カステ																							
	ぶどう	ブドウ	ブドウ																							
樹	とちのき	トチノキ	トチノキ																							
	しなのき	シナノキ	シナノキ																							
樹	またたび	またたび	またたび																							
	うごぎ	ウゴギ	ウゴギ																							
樹	みずき	ミズキ	ミズキ																							
	まごのき	マゴノキ	マゴノキ																							
樹	もくせい	モクセイ	モクセイ																							
	すいかずら	すいかずら	すいかずら																							
樹	散孔材A	散孔材A	散孔材A																							
	散孔材B	散孔材B	散孔材B																							
樹	散孔材C	散孔材C	散孔材C																							
	散孔材A	散孔材A	散孔材A																							
樹	広葉樹	広葉樹	広葉樹																							
	いわ	タケ(ササ)	タケ(ササ)																							
樹皮																										
固定不能・木質なし など																										



表Ⅴ-10 種別木製品の樹種別・層別出土数(5)

計	D7		D8		D9		D10		D11		D12		D13		D14		D15				
	IB4	IB3	IB2	IB1	IB4	IB3	IB2	IB1	IB4	IB3	IB2	IB1	IB4	IB3	IB2	IB1	IB4	IB3	IB2	IB1	
イ	イシイ	イシイ																			
マ	カラマツ																				
ト	トウヒ																				
ウ	ウツギ																				
エ	エスナロ																				
ハ	ハコヤナギ																				
ニ	オニタビ																				
ホ	オニタビ																				
ヘ	カバノキ																				
フ	フナ																				
ク	クナ																				
ケ	クナ																				
コ	カワラ																				
サ	カワラ																				
シ	モクレン																				
ス	モクレン																				
セ	アジサイ																				
ソ	アジサイ																				
タ	サクラ																				
チ	サクラ																				
リ	イヌエンジュ																				
ロ	イヌエンジュ																				
ハ	ハハタ																				
ニ	ハハタ																				
フ	ワカバ																				
ミ	ワカバ																				
メ	ツツバ																				
モ	ツツバ																				
カ	カエデ																				
コ	カエデ																				
ト	トチノキ																				
チ	トチノキ																				
ハ	ハリギリ																				
コ	ハリギリ																				
ウ	コシアブラ																				
エ	コシアブラ																				
ス	エゴノキ																				
モ	エゴノキ																				
ク	モクセイ																				
ズ	モクセイ																				
イ	すいかずら																				
イ	すいかずら																				
イ	タケ																				
イ	タケ																				

目録不備・未記入なし

表 VII- 11 種別木製品の樹種別・層別出土数(6)

	科名	属名	樹名	D16	E1	E2-1	E2-2	E3	F1-1	F1-2	F2-1	F2-2		F2-3	F3	G1	G2-1			G2-2			
				I B2	I B3	I B3	I B3	I B1	I B3	I B3	I B2	I B1	I B4	I B3	I B1	I B2	I B1	I B3	I B3	I B2	I B1	I B4	I B3
針	いちい	イチイ	イチイ								1												
	まつ	カラマツ トウヒ トクサヅク																					
葉	すぎ	スギ	スギ																				
	ひのき	アスナロ	アスナロ						1	2							3					1	
樹	やなぎ	ヤナギ ハコヤナギ	ヤナギ																				
	くるみ	オニグルミ アサダ	オニグルミ アサダ																				
樹	かほのき	カハノキ ハノキ																2					
	ぶな	フナ コナラ クナラ																					
樹	にれ	ニレキ								1													
	くわ	クワキ																					1
樹	かつら	カツラ	カツラ																				
	もくれん	モクレン																					
広	ゆきのした	アジサイ	フリウツギ ツルアジサイ				4						1										
	ばら	サクラ ナナカマド リンゴ																					
葉	まめ	イヌエンジュ ハギ	イヌエンジュ																				
	みかん	キハダ ニガキ ワラビ	ニガキ																				
樹	にしきぎ	ニシキギ ツルウメモドキ																					
	みづばうつぎ	ミヅバウツギ	ミヅバウツギ																				
樹	かえで	カエデ																					
	ふだのき	フダノキ トチノキ	ヤマブドウ トチノキ																				
樹	またたび	サルナシ																					
	うごぎ	ハリギリ タラノキ ウゴキ	ハリギリ タラノキ コシアブラ																				
樹	みずき	ミズキ																					
	えこのき	エコノキ トネリコ																					
樹	もくせい	ハシドイ																					
	すいかずら	ニワトコ ガマズミ																					
樹	散孔材A																						
	散孔材B																						
広葉樹	いね	タケ(ササ)																					

2 木製品の樹種構成からみたユカンボシC15遺跡の性格とその変容

表VI-12 種別木製品の樹種別・層別出土数(7)

種別	樹名	G3			G4-1			G4-2			G5			G6			G7			H1			H2			H3							
		I B3	I B2	I B1	I B4	I B3	I B2	I B1	OB	I B3	I B2	I B1	I B4	I B3	I B2	I B1	I B4	I B3	I B2	I B1	I B4	I B3	I B2	I B1	I B4	I B3	I B2	I B1					
針葉樹	いちい																																
	カラマツ																																
	トウヒ																																
広葉樹	イナブナ																																
	スズナロ		6	2	2																												
	オニグルミ																																
	アサダ																																
	カバノキ																																
	フナ																																
	コナラ																																
	ニレ																																
	クヌギ																																
	カシ																																
雑木	カワハ																																
	カクレソ																																
	アジサイ																																
	ツルギ																																
	サクラ																																
	イヌエンジュ																																
	ニガキ																																
	ミツバツツギ																																
	ヤマブドウ																																
	トチノキ																																
	ハリギリ																																
	コシアブラ																																
	ミズキ																																
	エゴノキ																																
	モクセイ																																
アサミ																																	
タケ(ササ)																																	

表 VII- 13 種別木製品の樹種別・層別出土数 ( 8 )

種名	属名	種名	H4							H5					H6			H7			I 1				I 2		I 3										
			I B5	I B4	I B3	I B2	I B1	O B	I B5	I B4	I B3	I B2	I B1	O B	I B3	I B2	I B1	O B	I B4	I B3	I B2	I B1	O B	I B5	I B4	I B3	I B2	I B1	O B	I B3	I B2	I B1	O B				
針葉樹	いちい	イチイ	イチイ																																		
	まつ	カラマツ			1	3	1																														
樹	すが	スギ	スギ																																		
	ひのき	アスナロ	アスナロ			5	7																														
	やなぎ	ヤナギ																																			
広葉樹	くろみ	オニグルミ	オニグルミ																																		
	かばのき	カバノキ	カバノキ																																		
	ふな	フナ	フナ																																		
	これ	クナ	クナ																																		
	くわ	クワ	クワ																																		
	かつら	カツラ	カツラ																																		
	もくれん	モクレン	モクレン																																		
	ゆきのした	アジサイ	アジサイ			6	10	6																													
	葉	ばら	バラ	バラ																																	
		まめ	マメ	マメ																																	
		みかん	ミカン	ミカン																																	
		にがき	ニガキ	ニガキ																																	
		にしき	ニシキ	ニシキ																																	
		みづはづき	ミヅハヅキ	ミヅハヅキ																																	
		かえで	カエデ	カエデ																																	
		ふどう	フドウ	フドウ																																	
		はなのき	ハナノキ	ハナノキ																																	
		またたひ	マタタヒ	マタタヒ																																	
		うぎ	ウギ	ウギ																																	
みずき		ミズキ	ミズキ																																		
えこのき		エコノキ	エコノキ																																		
もくせい		モクセイ	モクセイ																																		
すいかずら		スイカズラ	スイカズラ																																		
敷孔材A		敷孔材A																																			
敷孔材B		敷孔材B																																			
敷孔材C		敷孔材C																																			
敷孔材A		敷孔材A																																			
広葉樹	広葉樹																																				
いね	イネ	イネ																																			
樹皮	樹皮																																				
同定不能・木質なし	同定不能・木質なし																																				



表 VII- 15 種別木製品の樹種別・層別出土数(10)

	科名	属名	種名	J1-3cm		J2-1			J2-1a			J2-2							J2-2a				J2-2d		
				I	II	I	II	III	IV	V	VI	表	土	他	I	II	III	IV	OB	I					
針	いちい	イチイ	イチイ	1				1				1	2	12	10	1	1			3	3				
	まつ	カラマツ																							
		トウヒ																							
樹	すぎ	スギ	スギ	1																					
	ひのき	アスナロ	アスナロ										8	4											
広	やなぎ	ヤナギ					6	1																	
		ハコヤナギ											9	3											
	くるみ	オニグルミ	オニグルミ										1	1	1										
		アサダ	アサダ																						
	かばのき	カバノキ																							
		フナノキ											2	11	8	3	1				1			2	
	ぶな	コナラ																							
		クリ	クリ																						
	にれ	ニレ																							
	くわ	クヤキ																							
	かつら	カツラ	カツラ											1	1	3	1								
	ちくねん	モクレン																							
	ゆきのした	アジサイ	ノリウツギ																						
		ツルアジサイ																							
	葉	ばら	サクラ																						
		ナナカマド																							
		リンゴ																							
まめ		イヌエンジュ	イヌエンジュ				1	1																	
		ハギ																							
みかん		キハダ																							
いがき		ニガキ	ニガキ													1	1	1							
うるし		ウルシ																							
にしきぎ		ニシキギ																							
		ツルウメ	モドキ																						
みつばうつぎ		ミツバウツギ	ミツバウツギ																						
かえで		カエデ																							
ぶどう		ブドウ	ヤマブドウ																						
ぶらのき		トチノキ	トチノキ																						
しなのき		シナノキ																							
まなたび	サルナシ																								
うごぎ	ハリギリ	ハリギリ																							
	タラノキ	タラノキ																							
	ウコギ	コシアブラ																							
みずき	ミズキ																								
えごのき	エゴノキ																								
もくせい	トネリコ																								
	ハシロイ																								
すいかずら	ニワトコ																								
	ガマズミ																								
散孔材A																									
散孔材B																									
散孔材C																									
環孔材A																									
広葉樹																									
いな	タケ(ササ)																								
樹皮																									
同定不能・木質なし																									

2 木製品の樹種構成からみたユカンボシC15遺跡の性格とその変容

表VII-16 種別木製品の樹種別・層別出土数(1)

種別	品名	J2-3(c)			J2-3a			J2-4(d)			J2-4a			J3-1			J3-1a				
		I B4	I B3	I B1	I B5	I B3	I B1	I B3	I B5	I B4	I B3	I B1	I B5	I B4	I B3	I B1	I B5	I B4	I B3		
針葉	いちい	イチイ	2																		
	まつ	カラマツ																			
	樹	まづ	トウヒ																		
		すのこ	スギ																		
		すのこ	ヒノキ																		
		すのこ	カバノキ																		
		すのこ	オニグルミ																		
		すのこ	アサダ																		
		すのこ	カバノキ	2	2																
		すのこ	アサダ																		
広葉	すのこ	クリ																			
	すのこ	ニレ																			
	すのこ	クヤキ																			
	すのこ	カツラ																			
	すのこ	アジサイ																			
	すのこ	ツツジ																			
	すのこ	ハチマダ																			
	すのこ	イヌエンジュ																			
	すのこ	ニガキ																			
	樹	すのこ	ミツバクツギ																		
すのこ		ヤマブドウ																			
すのこ		トチノキ																			
すのこ		ハリギリ																			
すのこ		タラシ																			
すのこ		コシアブラ																			
すのこ		ミズギ																			
すのこ		エゴノキ																			
すのこ		ハシロトイ																			
すのこ		アサミ																			
すのこ	タケ(ササ)																				

表 VII-17 種別木製品の樹種別・層別出土数(12)

	科名	属名	種名	J3-1d		J3-2				J3-2a		J3-2d		J4(a)			J5		J6-1						
				I B3	I B1	I B3	I B2	I B1	他	I B2	I B3	I B2	I B1	表土	I B3	I B2	I B1	I B4	I B3	I B2	I B5	I B3	I B2	I B1	DB
針葉	いちい	イチイ	イチイ																						
	まつ	カラマツ		2		6	6					6	1		6		2	1							
	すざ	スギ	スギ					3																	
樹	ひのき	アスナロ	アスナロ					2						2	8	2		1	5						
	やなぎ	ヤナギ						3																	
広葉	くるみ	オニグルミ	オニグルミ																						
	かばのき	カバノキ																							
	ふな	フナ						2	1																
	にれ	ニレ																							
	くわ	クワ																							
	かつら	カツラ	カツラ																						
	もくれん	モクレン						1																	
	ゆきのした	アジサイ	ノリウツギ																						
	ばら	サクラ	ツルアジサイ																						
	まめ	イヌエンジュ	イヌエンジュ																						
	みかん	キハダ							1	1															
	にがき	ニガキ	ニガキ																						
	うるし	ウルシ																							
	樹	にしきぎ	ニシキギ																						
みつぼうぎ		ミツバウツギ	ミツバウツギ																						
かえで		カエデ																							
かむう		クマドウ	ヤマブドウ																						
どちのき		トチノキ	トチノキ																						
しなのき		シナノキ																							
またたび		サルナシ																							
うこぎ		ハリギリ	ハリギリ					1	7	2		2	4	3	1										
みずき		ミズキ																							
えごのき		エゴノキ																							
もくせい		トネリコ																							
すいかずら		ニフトコ																							
散孔材A		ガマズミ																							
散孔材B																									
環孔材A																									
広葉樹																									
いね	タケ(ササ)																								
	樹皮																								
	同定不能・木質なし など																								



表VII-18 種別木製品の樹種別・層別出土数(13)

種別	品名	樹名	J6-2		J7				J8				J9		J10(c)		J11			
			IB4	IB3	IB2	IB1	IB4	IB3	IB2	IB1	IB4	IB3	IB2	IB1	IB4	IB3	IB2	IB1	IB4	IB3
針葉樹	いちい	イチイ																		
	まつ	カラマツ トウヒ	2	4	2	1	8	2												
	すぎ	スギ																		
	しのぶ	アサキ																		
	しのぶ	アサキ																		
広葉樹	やなぎ	ハコヤナギ	4				12	8	4											
	かほのき	オニグルミ アサダ																		
	ぶな	クヌギ クナギ																		
	これ	クヌギ																		
	くわ	カツラ																		
	かつら	カツラ																		
	もくめん	モクレン																		
	ゆきのした	アジサイ																		
	ぼら	サカサマド ナンゴ																		
	まめ	イヌエンジュ																		
雑木	みかん	キハダ																		
	たなまし	ハギ																		
	うなぎ	ニガキ																		
	みづはう	ツルウメモドキ																		
	かえり	ミツバケツギ																		
	あじろ	ミツバケツギ																		
	あじろ	アブ																		
	あじろ	アブ																		
	あじろ	アブ																		
	あじろ	アブ																		
	薪	うごき	ハリギリ																	
みぎき		タラノキ																		
えごのき		ウツクスギ																		
もくせい		エノキ																		
すいかずら		トネリコ	1	8	0	3	2													
あじろ		ハク	2	1	0															
あじろ		カマズミ																		
あじろ		カマズミ																		
あじろ		カマズミ																		
あじろ		カマズミ																		

表 VII-19 種別木製品の樹種別・層別出土数 (14)

計	科名	属名	種名	K1-1							K1-2							K1-3																
				IR	IR5	IR4	IR3	IR2	IR1	OB	他	IR	IR5	IR4	IR3	IR2	IR1	OB	表土	他	IR	IR5	IR4	IR3	IR2	IR1	OB	表土	他					
針葉	いらい	イチイ	イチイ										2	1																				
	まつ	モミ カマツ トウヒ トウヒ ツバキ					5	3						1	7	5	1							1	1									
	すぎ	スギ	スギ																															
	ひのき	アスナロ	アスナロ																															
広葉	やなぎ	ヤナギ	ヤナギ		1	10	128	100	30		1		2	23	186	136	53	5						1	20	11	5							
	くろみ	クニグサ	オニグルミ					1	2					1	1	24	10	1						2	10	7	4							
	かばのき	カバノキ	カバノキ																															
	ぶな	フナ	フナ		2	2	21	12	7				1	18	74	29	40	2						1	4	28	26	22	1			1		
	これ	コナラ	クリ											1	2	19	11	6						1	28	10	6	1						
	くわ	クワ	クワ																															
	かつら	カツラ	カツラ																															
	もくれん	モクレン	モクレン																															
	ゆきのした	アジサイ	アジサイ																															
	ぼら	ボラ	ボラ																															
	実	まめ	マメ	マメ		1		3	11	8	5				5	23	13	7	1					1	1	8	11	5	3				2	
みかん		ミカン	ミカン			1	2	3			2																							
にがき		ニガキ	ニガキ																															
うるし		ウルシ	ウルシ																															
にしきぎ		ニシキギ	ニシキギ																															
みつばうつき		ミツバウツギ	ミツバウツギ																															
かたき		カタキ	カタキ																															
とちのき		トチノキ	トチノキ																															
しなのき		シナノキ	シナノキ																															
またたび		またたび	またたび																															
うごぎ		ウゴギ	ウゴギ																															
樹	みずき	ミズキ	ミズキ																															
	えこのき	エゴノキ	エゴノキ																															
	もくせい	モクセイ	モクセイ		1	3	25	106	116	54	1	1	6	8	4	213	159	73	5			4	1	5	19	99	43	50	9		3			
	すいかずら	スイカズラ	スイカズラ																															
	新井村A	新井村A	新井村A																															
	新井村B	新井村B	新井村B																															
	新井村C	新井村C	新井村C																															
	海井村A	海井村A	海井村A																															
	広葉樹	広葉樹	広葉樹																															
	いわ	イワ	イワ																															
		樹	樹																															
	樹	樹																																
	樹	樹																																
	樹	樹																																

69C





表 VI-22 種別木製品の樹種別・層別出土数(17)

種別	和名	学名	K4				K5				L1-1									
			I.B5	I.B4	I.B3	I.B2	I.B1	他	II.B	I.B5	I.B4	I.B3	I.B2	I.B1	他					
針葉	いちらい	イチライ																		
	まつ	カラマツ ウレシヒ スギ	1	5	25	3	1					2	6	25	10	3				
樹皮	すき	アサナロ				2														
	ひのみ	アサナロ				2														
くさ	やなぎ	ヤナギ				3														
	くさのみ	ハコヤナギ アサナロ カバノキ フナノキ				5														
か	かばのみ	オニグルミ アサナロ																		
	ふな	フナノキ																		
に	にれ	クナラ																		
	くわら	クヤウキ カツラ																		
か	かつら	カツラ																		
	もくろん	モクレン																		
ゆ	ゆのした	アジサイ																		
	ぼら	サカマド リンゴ																		
ま	まめ	イヌエンジュ																		
	あか	ハナダ																		
に	にしき	ウルシ																		
	み	ニシキギ																		
み	み	ツルヌメモトキ																		
	み	ツルヌメモトキ																		
あ	あ	ミツバウツギ																		
	あ	カエデ																		
し	し	アトク																		
	し	アトク																		
ま	ま	トチノキ																		
	ま	トチノキ																		
う	う	ハリギリ																		
	う	ハリギリ																		
あ	あ	タラノキ																		
	あ	タラノキ																		
え	え	ウツギ																		
	え	ウツギ																		
も	も	コシアブラ																		
	も	コシアブラ																		
す	す	エゴノキ																		
	す	エゴノキ																		
ず	ず	ハハコグサ																		
	ず	ハハコグサ																		
い	い	ニワトコ																		
	い	ニワトコ																		
い	い	ガマズミ																		
	い	ガマズミ																		
い	い	タケ(ササ)																		
	い	タケ(ササ)																		

表 VII-23 種別木製品の樹種別・層別出土数(18)

樹種	科名	属名	種名	L2							L3					L1-2				
				I B5	I B4	I B3	I B2	I B1	OB	他	I B4	I B3	I B2	I B1	OB	I B4	I B3	I B2	I B1	OB
針葉	いらい	イチイ	イチイ			4	5	2			4	8	2	1						
				モミ																
樹	まつ	カラマツ	トウヒ																	
				ツグミ																
樹	すぎ	スギ	スギ																	
				ヒノキ																
樹	やなぎ	ヤナギ	ヤナギ	1		25	7	2		14	9	13	2			5	6	4		
				ハコヤナギ																
樹	くるみ	オニグルミ	オニグルミ	2		6	4	1									1			
				アサダ																
樹	かばのき	カバノキ	カバノキ			1	12	11	8	1	1	3	4	1			2			
				ハンノキ																
樹	ぶな	コナラ	クリ	3		20	4	1			6	1	1				1			
				クサビ																
樹	にれ	ケヤキ	ケヤキ	1		7	8	1			1	1	1			1	4	2		1
				クワ																
樹	くわ	カツラ	カツラ			3	2	3		2	1	1	1				3	2		
				モクレン																
樹	もくれん	カツラ	カツラ	3		3	1			5	3	1	1				1	1		
				モクレン																
樹	ゆきのした	アジサイ	ノリウツギ																	
				ツルアジサイ																
樹	ばら	サクラ	ナナカマド			2	2													
				リン																
樹	まめ	イヌエンジュ	イヌエンジュ	1		10	7	3		1	2	1	1			1	6	3	2	1
				ハギ																
樹	みかん	キハダ	ニガキ			1	1													
				ニガキ																
樹	にかき	ニガキ	ニガキ																	
				うるし																
樹	にしきぎ	ニシキギ	ツルウメモドキ																	
				ツルウメモドキ																
樹	みつぼうづぎ	ミツバウツギ	ミツバウツギ			1				2	3	1				1	5			
				カエデ																
樹	かえで	ブドウ	ヤマブドウ	1		4	1	1												
				トチノキ																
樹	とちのき	トチノキ	トチノキ																	
				シナノキ																
樹	しなのき	シナノキ	シナノキ																	
				サルナシ																
樹	またたび	ハラギ	ハラギ			2	1													
				ハラノキ																
樹	うごぎ	ウゴギ	ウゴギ			1														
				ウコギ																
樹	みずき	ミズキ	ミズキ																	
				エゴノキ																
樹	えごのき	エゴノキ	エゴノキ			9	60	43	31	5	3	29	12	1	1	1	13	5	1	1
				トネリコ																
樹	もくせい	ハシンドイ	ハシンドイ	1		3	7	4	1											
				ニフトコ																
樹	すいかずら	ガマズミ	ガマズミ																	
				ガマズミ																
樹	散孔材A	タケ(ササ)	タケ(ササ)																	
				散孔材B																
樹	散孔材C	タケ(ササ)	タケ(ササ)																	
				散孔材A																
樹	広葉樹	タケ(ササ)	タケ(ササ)																	
				タケ(ササ)																
樹	いわ	タケ(ササ)	タケ(ササ)																	
				タケ(ササ)																
根				同定不能・木質なし など																









属も多い。対して汎用材のトネリコ属やヤナギ属は少なく、針葉樹、特に持込み材の再利用を意識した樹種・用材の選定がみられる。

F 2 - 1・2・3の鍾と思われる製品11点を集約してみると、図示していないがトネリコ属5点ほか7樹種で、特に選定とは思われない。汎用材トネリコ属を中心に〔丸木系〕木取りに対応する樹種を使用するということであろう。

G 2・3の曲物・箱物はアスナロ・スギが主体の交易で得た製品である。

G 4 - 1・G 5の漆塗りを含んだ換き物椀も交易で得た製品である。樹種では漆塗り椀の汎用材であるブナ属・カツラ・トチノキ・ケヤキ属で80%を占める。漆椀は生産地や時代を反映するので出土層ごとにみると、I B 4層ではカツラ・トチノキがあり、I B 3層ではトチノキが主・カツラは継続しブナ材が登場する。I B 2層になるとカツラ・ブナ属は継続するがトチノキが衰退し、ケヤキ属とクリが登場する。I B 1層ではカツラ・トチノキがなくなり、ブナ属・クリ・ケヤキが継続する、という流れがある。

G 6 割り物は自前の製品で、加工の深い割り鉢（ニマ）では11点中ハリギリ4点・モクレン属3点、加工のしやすさから樹種選定されたものと思われ、前出の換き物椀でも3点のハリギリ材がある。対して割りの浅い盆・皿は、7点7樹種と選定は考えられない。アスナロ材の使用は持込み材の再利用であろう。

H 2 節類31点はアスナロ・スギ・モミ属の針葉樹で2・3以上を占め、D 11棟と同様、針葉樹、特に持込み材の再利用を意識した樹種・用材の選定がみられる。

H 4 箆もアスナロ・イチイ・モミ属等の針葉樹で51点中28点55%とノリウツギ22点43%で大半を占める。針葉樹（持込み材）かノリウツギという特定がある。

H 5 串も箆と同じく針葉樹（持込み材）17%・ノリウツギ55%と二通りの特定がありそうだが、食用以外の用途がある串が含まれているためか、ハシドイ属はじめノリウツギ以外の広葉樹も28%ある。串の用途別・形状別・樹種別検討は、Ⅳ章2節の分類別報告で述べてある。

H 7 堅杵は7点出土で3種の樹種しかない。汎用材のトネリコ属が4点と特定樹種とするには心もとないが、3樹種が各層にわたることから、選定と考えられなくもない。

I 4 イクバスイでは141点中アスナロが3・4を超える105点を占め、針葉樹だと90%を超える。これは針葉樹を選定する意識があり、持込み材アスナロの再利用がこれに合致したということだろう。

J 1 - 1・2・2 aの細枝材と枝材の加工製品類は、17樹種74点の出土で、汎用材のトネリコ属・ヤナギ属で半分以上を占める。これを素材となるK 1 - 1・2 細枝材・枝材35樹種以上2・512点でもほぼ同じ傾向を示す。細さの目途以外に樹種の選定はないものと判断できる。なお98点約4%ある散孔材Aは製品化されていない。樹種同定で細分類には至らなかったが、ブナ属の可能性があり、細枝・枝という形態からすると、当時ブナが近辺に自生していたが持ち込まれて植えられていた可能性もなくはない。

J 1 - 3・3 a・J 2 - 4・4 aの丸木材・股木材・心持材すなわち〔丸木系〕木取りの太い方の加工製品類は、16樹種45点の出土で、バラツキが顕著である。汎用材のトネリコ属も全体比からすると少ない。モミ属の11%が目立っている。これを素材となるK 1 - 3・K 2 - 4 丸木材・股木材・心持材22樹種584点でみると、汎用材のトネリコ属・ハンノキ属は全体比よりも高く、ヤナギ属は細さからかやや低い。他に比率の高いものはコナラ属・ニレ属・イヌエンジュ・オニグルミと太さを確保できるものである。樹種としてより大きさの規準によるもので、樹種選定といえるかは微妙である。素材からどの程度が製品になっているかを「製品数 製品と素材の合計数 100」で計算した製品化

率をみると、モミ属71%・ノリウツギ43%と2種は高いが、トネリコ属・ハンノキ属・コナラ属・ニレ属・ヤナギ属・イヌエンジュ・オニグルミと主だった樹種はみな10%以下の低率を示す。率の高い2種が特定製品に対して樹種選定されたものととらえられる。

J1-3 adt・J2-2 ad・J2-4 adtなど図IV-26に集成した14点の端挟付有孔各種加工製品は、木取りは様々だが、図VII-8に示したごとくモミ属・モクレン属・トネリコ属各3点、ヤナギ属2点と比較的まとまりをみせ、層に渡るものもあるので、一定の樹種選択があるものと思われる。

J2-1・2・3とそのa・dなどは、{割材系}木取りの加工製品類で、24種以上381点がある。J1-3等の{丸木系}木取りと比較すると、汎用のトネリコ属に変化はないが、ハリギリが多くなりヤナギ属は減少する。K2-1・2・3の{割材系}木取りの素材類は29種以上1,479点あり、汎用材トネリコ属の割合が半数近くと他を圧している。{割材系}木取りの「製品数 製品と素材の合計数 100」で計算した製品化率をみると、ハリギリ・ノリウツギ・モクレン属・モミ属などがおよそ40~60%と高く、トネリコ属・ハンノキ属・ヤナギ属・コナラ属・ニレ属は20%以下の低い製品化率である。高い製品化率を示す樹種が、特定製品に樹種選定されたものと考えられよう。

J3-1・2とそのa・b・c・dなどは、{板材系}木取りの加工製品類で、20種以上267点がある。板・板材を使った加工製品だけあって、{丸木系}・{割材系}木取りの製品とは樹種も大きく変化し、ハリギリの比率の高さ、アスナロ・スギといった持込み材の存在、シナノキ属の登場、トネリコ属の著しい少なさが目立つ。素材であるK3-1・2でみると、17樹種448点で、製品と比べてトネリコ属・シナノキ属・ハコヤナギ属・ニレ属の高さが目立つが、これは舟との関係や板そのものとしての利用のためであろう。したがって、図VII-9に現れた樹種のうち持込み材を除くと、モミ属・ハリギリ・トネリコ属・ハンノキ属・ヤナギ属・シナノキ属・ハコヤナギ属・ニレ属が板物に使用する樹種として選定されたものと考えられる。ちなみに「製品数 製品と素材の合計数 100」で計算した製品化率をみると、モミ属67%・ハリギリ46%が高く、ハンノキ属・ヤナギ属は30%ほどである。製品化率の高いほど板からさらに加工されるものが主体となっているということで、製品化率30%クラスは製品にもなるが、板としての利用が多いということである。さらに製品化率20%以下のトネリコ属・シナノキ属・ハコヤナギ属・ニレ属は製品にされるよりも本来、板として利用されるものであろう。また、板として使われた後の再加工を考えても、製品化率の高いものほど再利用率が高いと考えられよう。

J5・K5 榎目板をみるとG2・3の曲物・箱物と同様、アスナロ・スギという持込み材の比率が高いが、モミ属の多さも注目され、広葉樹もある。当時の人々が交易品をもとに、自家生産で曲物を製作したが、その意識をもっていたものと推定される。

L1-1・2の柱・股木杭はL2・3 建材・建築部材を支える建築材で、16樹種239点出土している。全体比からするとハシドイ属・コナラ属・イヌエンジュ・ニレ属の比率が高いが、汎用材のトネリコ属・ヤナギ属・ハンノキ属も平均的にあり、汎用材3種でほぼ50%である。

L2・3の建材・建築部材はL1-1・2柱・股木杭の上に据える材で、24樹種540点出土している。汎用材のトネリコ属・ヤナギ属・ハンノキ属の比率が6割近い。ハシドイ属・コナラ属・イヌエンジュ・ニレ属・モクレン属等も全体比からすると高率ではある。

L4杭は21樹種450点出土している。地中に刺して何らかの材を支えるものであるが、建材等とほぼ同じ比を示し、柱・股木杭とはやや違った比率を示す。中でもオニグルミ・サクラ属に特徴がある。ヤナギ属・ハンノキ属は柱類よりもやや高い率である。

L5・6細杭・刺し杭は建築物とは直接関係ない杭類で、21樹種274点出土している。L4杭に比

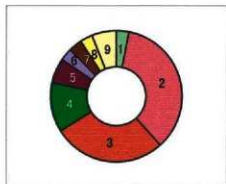
A1-1~5:舟敷・舟材・舟縁材・舷側板・舟部材

	樹種	点数	構成比 %
1	花ミ属	8	9.2
2	ハリギリ	22	25.3
3	ハンノキ属	14	16.1
4	シナノキ属	14	16.1
5	ヤナギ属	9	10.3
6	ハコヤナギ属	7	8.0
7	トネリコ属	6	6.9
8	その他	7	8.0
	計	87	



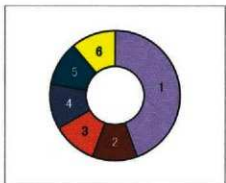
A2-1・A3-1:車椽・早椽

	樹種	点数	構成比 %
1	カラマツ	2	3.1
2	ネクレン属	23	35.4
3	ハンノキ属	18	27.7
4	リクウツギ	8	12.3
5	トネリコ属	4	6.2
6	ヤナギ属	2	3.1
7	オニグルミ	2	3.1
8	コナラ属	2	3.1
9	その他	4	6.2
	計	65	



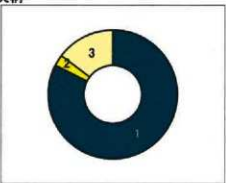
B2:魚叩き棒

	樹種	点数	構成比 %
1	ヤナギ属	4	44.4
2	オニグルミ	1	11.1
3	ハンノキ属	1	11.1
4	トネ属	1	11.1
5	ノリウツギ	1	11.1
6	ハシドイ属	1	11.1
	計	9	



B3・B4・C1-1~3:キテ中柄・やす・矢・矢中柄・矢柄

	樹種	点数	構成比 %
1	ノリウツギ	90	82.6
2	ハシドイ属	3	2.8
3	その他	16	14.7
	計	109	

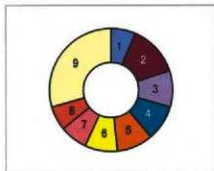


図VII-3 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比(1)

2 木製品の樹種構成からみたユカンボシC15遺跡の性格とその変容

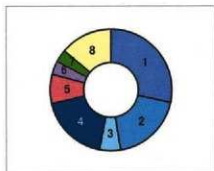
D5・D6 a, b, c, d, h: 各種柄

樹種	点数	構成比 %
1 松ミ属	6	6.3
2 トネリコ属	13	13.7
3 ヤナギ属	9	9.5
4 クワ属	9	9.5
5 カエデ属	9	9.5
6 ハンドイ属	8	8.4
7 モクレン属	7	7.4
8 ハシノキ属	6	6.3
9 その他	28	29.5
計	95	



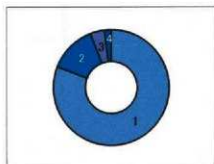
D11: 椽・椽状製品

樹種	点数	構成比 %
1 松ミ属	25	28.4
2 アスナロ	17	19.3
3 その他の針葉樹	5	5.7
4 ハリギリ	16	18.2
5 モクレン属	7	8.0
6 ヤナギ属	3	3.4
7 シラカシ属	3	3.4
8 その他の広葉樹	12	14.0
計	88	



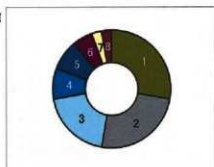
G2-G3: 曲物・箱物

樹種	点数	構成比 %
1 アスナロ	42	80.8
2 スギ	7	13.4
3 モミ属	2	3.8
4 クヤキ属	1	2.0
計	52	



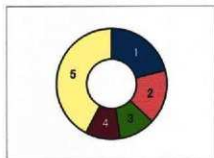
G4-1-G5: 漆塗物(木質残存品のみに)・素木柄

樹種	点数	構成比 %
1 ソナ属	10	27.8
2 カツラ	9	25.0
3 トチノキ	7	19.4
4 ケヤキ属	3	8.3
5 ハリギリ	3	8.3
6 タリ	2	5.6
7 エゴノキ属	1	2.8
8 トネリコ属	1	2.8
計	36	



G6: 製物

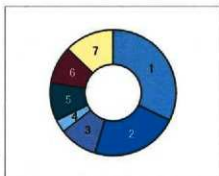
樹種	点数	構成比 %
1 ハリギリ	4	21.1
2 モクレン属	3	15.8
3 シラカシ属	2	10.5
4 トネリコ属	2	10.5
5 その他	8	42.1
計	19	



図VII-4 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比(2)

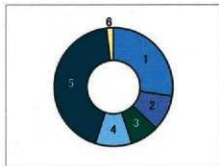
H2: 壁

	樹種	点数	構成比 %
1	アスナロ	10	32.3
2	スズ	7	22.6
3	モミ属	3	9.7
4	その他の針葉樹	1	3.2
5	リウヅツ	3	9.7
6	トネリコ属	3	9.7
7	その他の広葉樹	4	12.9
	計	31	



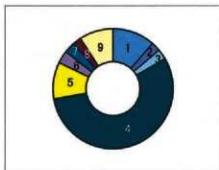
H4: 壁

	樹種	点数	構成比 %
1	アスナロ	14	27.5
2	モミ属	5	9.8
3	イチイ	4	7.8
4	その他の針葉樹	5	9.8
5	リウヅツ	22	43.1
6	その他の広葉樹	1	2.0
	計	51	



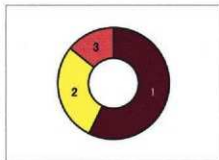
H5: 串

	樹種	点数	構成比 %
1	アスナロ	24	11.5
2	モミ属	5	2.4
3	その他の針葉樹	6	2.9
4	リウヅツ	115	55.3
5	ハンドイ属	21	10.1
6	ヤナギ属	7	3.4
7	クワ属	6	2.9
8	トネリコ属	5	2.4
9	その他の広葉樹	19	9.1
	計	208	



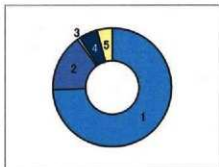
H7: 壁柱

	樹種	点数	構成比 %
1	トネリコ属	4	57.1
2	コナラ属	2	28.6
3	モクレン属	1	14.3
	計	7	



I1: イクバスイ

	樹種	点数	構成比 %
1	アスナロ	105	74.5
2	モミ属	22	15.6
3	その他の針葉樹	1	0.7
4	ハリギリ	7	5.0
5	その他の広葉樹	6	4.3
	計	141	

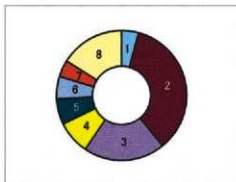


図VII-5 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比(3)

2 木製品の樹種構成からみたユカンボシC15遺跡の性格とその変容

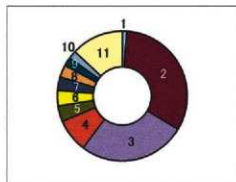
J1-1-2-2a: 細枝材・枝材加工製品類

樹種	点数	構成比 %
1 針葉樹	3	4.1
2 トネリコ属	26	35.1
3 ヤナギ属	15	20.3
4 ハシドイ属	6	8.1
5 ノリウツギ	5	6.6
6 ミツバウツギ	4	5.4
7 ハシノキ属	3	4.1
8 その他の広葉樹	12	16.2
計	74	



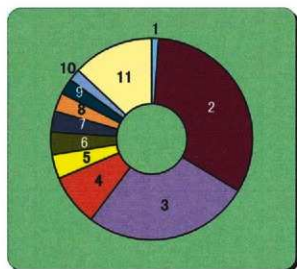
K1-1-2: 細枝材・枝材

樹種	点数	構成比 %
1 針葉樹	27	1.1
2 トネリコ属	816	32.5
3 ヤナギ属	675	26.9
4 ハシノキ属	208	8.3
5 散孔材A	98	3.9
6 ハシドイ属	95	3.8
7 ニレ属	82	3.3
8 イヌエンジュ	78	3.1
9 ノリウツギ	57	2.3
10 ミツバウツギ	44	1.8
11 その他の広葉樹	332	13.2
計	2,512	



J-K1-1-2全

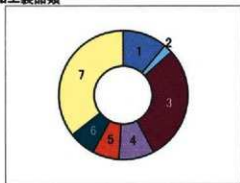
樹種	点数	構成比 %
1 針葉樹	30	1.2
2 トネリコ属	842	32.5
3 ヤナギ属	690	26.7
4 ハシノキ属	211	8.2
5 ハシドイ属	101	3.9
6 散孔材A	98	3.8
7 ニレ属	84	3.2
8 イヌエンジュ	79	3.1
9 ノリウツギ	62	2.4
10 ミツバウツギ	48	1.9
11 その他の広葉樹	341	13.2
計	2,587	



図VII-6 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比(4)

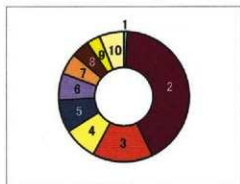
J1-3-3a・J2-4-4a:丸木材・股木材・心持材加工製品類

樹種	点数	構成比 %
1 樺ミ属	5	11.1
2 トウヒ属	1	2.2
3 トネリコ属	13	28.9
4 ヤナギ属	4	8.9
5 ハシノキ属	3	6.7
6 ノリウツギ	3	6.7
7 その他の広葉樹	16	35.6
計	45	



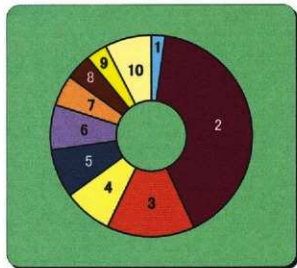
K1-3・K2-4:丸木材・股木材・心持材

樹種	点数	構成比 %
1 針葉樹	4	0.7
2 トネリコ属	246	42.1
3 ハシノキ属	88	15.1
4 コナラ属	48	8.2
5 ニレ属	47	8.0
6 ヤナギ属	40	6.8
7 イヌエンジュ	30	5.1
8 オニグルミ	26	4.5
9 ハシドイ属	19	3.3
10 その他の広葉樹	36	6.2
計	584	



J・K1-3-2-4全

樹種	点数	構成比 %
1 針葉樹	15	2.3
2 トネリコ属	263	40.8
3 ハシノキ属	91	14.1
4 コナラ属	51	7.9
5 ニレ属	50	7.8
6 ヤナギ属	46	7.1
7 イヌエンジュ	32	5.0
8 オニグルミ	28	4.3
9 ハシドイ属	20	3.1
10 その他の広葉樹	49	7.6
計	645	



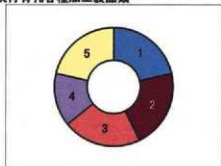
図VII-7 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比(5)



2 木製品の樹種構成からみたユカンボシC15遺跡の性格とその変容

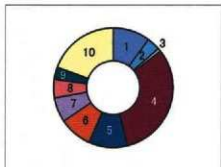
J1-3・J2-1-2-4のabtほか(図IV-26): 端快付有孔各種加工製品類

樹種	点数	構成比 %
1 モミ属	3	21.4
2 トネリコ属	3	21.4
3 モクレン属	3	21.4
4 ヤナギ属	2	14.3
5 その他の広葉樹	3	21.4
計	14	



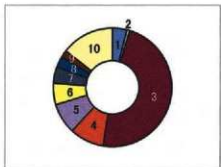
J2-1-a-2-2a-2d-3-3a-3at: 半割材・割材・備割材加工製品類

樹種	点数	構成比 %
1 モミ属	38	10.0
2 アスナロ	14	3.7
3 その他の針葉樹	3	0.8
4 トネリコ属	121	31.6
5 ハリギリ	40	10.5
6 ハンノキ属	34	8.9
7 ヤナギ属	25	6.6
8 モクレン属	19	5.0
9 アリウツギ	13	3.4
10 その他の広葉樹	74	19.4
計	381	



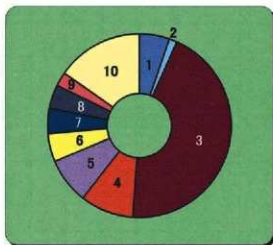
K2-1-2-3: 半割材・割材・備割材

樹種	点数	構成比 %
1 モミ属	59	4.0
2 その他の針葉樹	9	0.6
3 トネリコ属	707	47.8
4 ハンノキ属	140	9.5
5 ヤナギ属	124	8.4
6 コナラ属	86	5.8
7 ニレ属	67	4.5
8 ハリギリ	45	3.0
9 オークレモ	30	2.0
10 その他の広葉樹	212	14.3
計	1479	



J-K2-1-2-3全

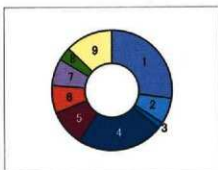
樹種	点数	構成比 %
1 モミ属	97	5.2
2 その他の針葉樹	26	1.4
3 トネリコ属	828	44.5
4 ハンノキ属	174	9.4
5 ヤナギ属	149	8.0
6 コナラ属	93	5.0
7 ハリギリ	85	4.6
8 ニレ属	77	4.1
9 モクレン属	44	2.4
10 その他の広葉樹	287	15.4
計	1860	



図VII-8 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比(6)

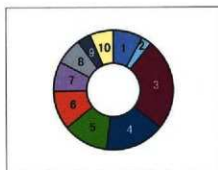
J3-1-1a-1b-1d-1ed-1ac-2-2a-2d: 板・板材加工製品類

樹種	点数	構成比 %
モミ属	72	27.0
アスナロ	19	7.1
スギ	4	1.5
ハリギリ	62	23.2
トネリコ属	26	9.7
ハンノキ属	20	7.5
ヤナギ属	19	7.1
シナノキ属	10	3.7
その他の広葉樹	34	12.7
計	267	



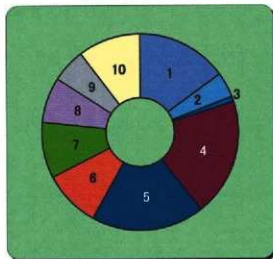
K3-1-2-2d: 板・板材類

樹種	点数	構成比 %
モミ属	36	8.0
その他の針葉樹	13	2.9
トネリコ属	112	25.0
ハリギリ	72	16.1
ハンノキ属	55	12.3
ハンノキ属	47	10.5
ヤナギ属	36	8.0
ハコヤナギ属	33	7.4
ニレ属	16	3.6
その他の広葉樹	28	6.3
計	448	



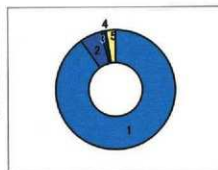
J-K3-1-2全

樹種	点数	構成比 %
モミ属	108	15.1
アスナロ	30	4.2
スギ	6	0.8
トネリコ属	138	19.3
ハリギリ	134	18.7
ハンノキ属	67	9.4
ハンノキ属	65	9.1
ヤナギ属	55	7.7
ハコヤナギ属	39	5.5
その他の広葉樹	73	10.2
計	715	



J5-K5: 柱目板

樹種	点数	構成比 %
アスナロ	759	90.1
モミ属	49	5.8
スギ	11	1.3
トウヒ属	2	0.2
広葉樹	21	2.5
計	842	

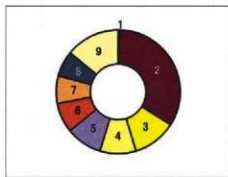


図VII-9 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比(7)

2 木製品の樹種構成からみたユカンボシC15遺跡の性格とその変容

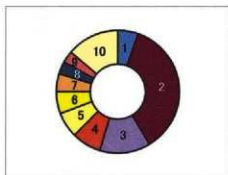
L1-1-2: 柱・殿木杭

樹種	点数	構成比 %
1 トウヒ属	1	0.4
2 トネリコ属	80	33.5
3 ハンドイ属	27	11.3
4 コナラ属	23	9.6
5 ヤナギ属	22	9.2
6 ハンノキ属	19	7.9
7 イヌエンジュ	17	7.1
8 レノ	16	6.7
9 その他の広葉樹	34	14.2
計	239	



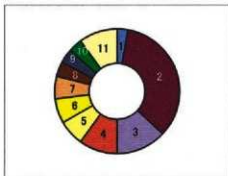
L 2-3: 建材・建築部材

樹種	点数	構成比 %
1 ヒメ属・アスナロ	28	5.2
2 トネリコ属	195	36.1
3 ヤナギ属	73	13.5
4 ハンノキ属	42	7.8
5 コナラ属	36	6.7
6 ハンドイ属	31	5.7
7 イヌエンジュ	25	4.6
8 レノ	19	3.5
9 モクレン属	16	3.0
10 その他の広葉樹	75	13.9
計	540	



L4: 杭

樹種	点数	構成比 %
1 ヒメ属・トウヒ属	13	2.9
2 トネリコ属	154	34.2
3 ヤナギ属	58	12.9
4 ハンノキ属	45	10.0
5 コナラ属	30	6.7
6 ハンドイ属	29	6.4
7 イヌエンジュ	26	5.8
8 オニグルミ	18	4.0
9 レノ	16	3.6
10 リクウ属	16	3.6
11 その他の広葉樹	45	10.0
計	450	



L5-6: 細杭・刺し杭

樹種	点数	構成比 %
1 ヒメ属・イチイ	5	1.8
2 トネリコ属	88	32.1
3 ヤナギ属	49	17.9
4 ハンドイ属	35	12.8
5 ハンノキ属	15	5.5
6 イヌエンジュ	15	5.5
7 ミツバウツギ	11	4.0
8 その他の広葉樹	56	20.4
計	274	

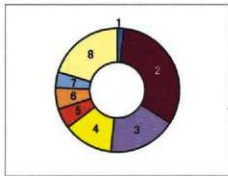
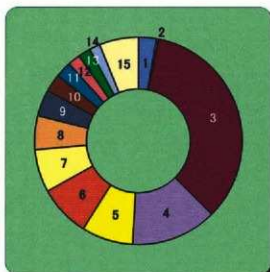


図 VII- 10 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比( 8 )

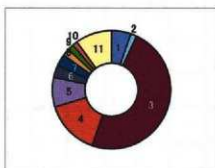
し 金

樹 種	点数	構成比 %
1 赤ミ属	42	2.8
2 その他の針葉樹	5	0.3
3 トネリコ属	517	34.4
4 ヤナギ属	202	13.4
5 ハシドイ属	122	8.1
6 シンノキ属	121	8.1
7 コナラ属	97	6.5
8 イヌエンジュ	83	5.5
9 ヒレ属	58	3.9
10 オニグルミ	45	3.0
11 クワ属	36	2.4
12 モクレン属	30	2.0
13 サツタ属	28	1.9
14 ミツバウツギ	26	1.7
15 その他の広葉樹	91	6.1
計	1503	



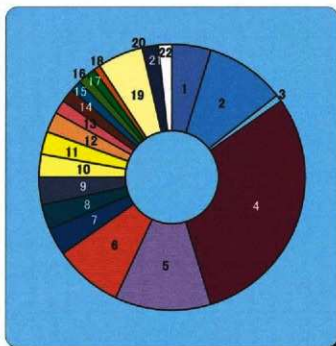
NI-2-3：鹿村類

樹 種	点数	構成比 %
1 赤ミ属	82	5.3
2 その他の針葉樹	23	1.5
3 トネリコ属	746	48.5
4 シンノキ属	229	14.9
5 ヤナギ属	123	8.0
6 ヒレ属	51	3.3
7 ハリギリ	51	3.3
8 イヌエンジュ	30	2.0
9 シンノキ属	24	1.6
10 モクレン属	23	1.5
11 その他の広葉樹	154	10.0
計	1,535	



全11,612点

樹 種	点数	構成比 %
1 赤ミ属	562	4.84
2 アスナロ	1107	9.53
3 その他の針葉樹	100	0.86
4 トネリコ属	3500	30.14
5 ヤナギ属	1342	11.56
6 シンノキ属	963	8.29
7 ハリギリ	395	3.40
8 ノリウツギ	365	3.14
9 ヒレ属	363	3.13
10 コナラ属	336	2.89
11 ハシドイ属	334	2.88
12 イヌエンジュ	280	2.41
13 モクレン属	198	1.71
14 オニグルミ	182	1.57
15 クワ属	165	1.42
16 シンノキ属	139	1.20
17 サツタ属	121	1.04
18 カエデ属	108	0.93
19 その他の広葉樹	642	5.53
20 タケ属	3	0.03
21 樹皮	198	1.71
22 不明等	209	1.80
計	11,612	



図Ⅶ- 11 ユカンボシC15遺跡木製品樹種別構成比( 9 )

ベヤナギ属・ハシドイ属・ミツバウツギが高率を示し、コナラ属・ニレ属・ハンノキ属・オニグルミ・サクラ属などが低下する。太さに影響されるものとみられる。

Ⅰ建築材を総合的にみると図VII-11に示されるように、汎用材のトネリコ属・ヤナギ属・ハンノキ属はほぼ平均的に使用されるが、建築材として特に使用率が高いもの=選定された樹種にはハシドイ属・コナラ属・イヌエンジュ・ニレ属・オニグルミ・ミツバウツギがあるといえる。

N1・2・3 剥材・切片・木端の廃材類では、数でも全体比との比較でもトネリコ属・ハンノキ属が突出して多い。モミ属もやや高い比率を示す。利用度も高いが捨てられる部分も多いということだろう。対してアスナロ・スギなどの持込み材は再利用も含めて利用度が高く、ノリウツギ・ハシドイ属ともども廃材としては少数しか現れない。木材利用を考える上で注目できるデータである。

次に出土数上位20傑の主要樹種を個別に概観してみる。表VII-27・28に樹種ごとの製品出土数を順位表にして示した。ひとつに樹種が実際に使用されているのかを確認することで、樹種選定の意識や実態を検討することができるだろう。また表VII-29は、ひとつの樹種ごとにA~Nの大分類の製品群に使用されている割合(単位%)を求め比較した表である。A~Jを合計するとその樹種の製品化率である。Kは木取り情報を反映するので、系統分けて比較した。

トネリコ属で割合が高いのは{丸木系}・{割材系}の素材と廃材・建築材である。A~Jを合計した製品化率は8.3%で、数の多い汎用材であるが、個別の製品となるよりも建築材や材のまま多様に用いられる樹種といえる。

ヤナギ属で割合が高いのは{丸木系}素材と建築材である。A~Jを合計した製品化率は9.5%で、トネリコ属同様数の多い汎用材であるが、建築材や{丸木系}材のまま多様に用いられる樹種といえる。{割材系}木取りや廃材は少なめである。

アスナロは交易品として製品でもたらされる持込み材で、柁目板として多く現れる。製品化率は約27%で、柁目板を曲物等の破片として合計すると96%となる。この中にはイクバスイ・箸串・筥・楔などの再加工品が含まれる。

ハンノキ属トネリコ属で割合が高いのは{丸木系}・{割材系}の素材と廃材・建築材である。A~Jを合計した製品化率は12%で汎用材としては高く、その分廃材も多い。舟の舷側板や車輻に使用され、権の選定樹種の一つである。

モミ属は製品化率が42%、柁目板を含めると約57%と高いのが特徴である。その分廃材もやや多く、対して建築材としての使用度が低い。一般的な木製品や道具の部品の自家生産を支える樹種といえよう。

ハリギリも製品化率が46%と極めて高いのが特徴。廃材もやや多い。特に舟の舷側板をはじめとする板としての利用度が高く、素材でも{板材系}木取りのものが多し。板物を作る樹種として樹種選定の対象になっている。

ノリウツギの製品化率は約75%と抜群に高い。これは箸串の製作に半数以上の比率を持つ利用度の高い材でありさらに、やす・キテ中柄・矢・矢中柄といった漁撈・狩猟具作成のほぼ単一の選定樹種となっているためである。

ニレ属では{丸木系}・{割材系}の素材と廃材・建築材の割合が高く、製品化率は9.4%である。割合比がトネリコ属と極めて近く、汎用材トネリコ属の代用品、または同一の材として扱われていた可能性が高い。

コナラ属はニレ属同様{丸木系}・{割材系}の素材と建築材の割合が高いが、廃材の率が低い。中では{割材系}の素材と建築材の割合が特に高いのが特徴である。製品化率は9.5%と低い。{丸木系}素材と建築材の合計57%と製品化率の低さからみて、建築材利用が主の樹種のようなのである。

ハシドイ属は〔丸木系〕素材と建築材の比率が極めて高い。〔割材系〕はほとんど見られず、丸木のまま利用されることが多い樹種である。製品化率は約20%で、串ではノリウツギ・アスナロに次いで多く用いられる。

イヌエンジュでは、〔丸木系〕素材と建築材の比率が合計で68%と高い。製品化率は9.3%。〔割材系〕にも少し使われている点と、串には使われてない点に、ハシドイ属との違いがある。〔丸木系〕素材と建築材の合計68%と製品化率の低さからみて、ほぼ建築材に利用する特定樹種のようなものである。

モクレン属は製品化率が約46%と極めて高く、その分廃材もやや多い。建築材にも用いられているが、車輻や早稲への使用度が高いため、舟関係の比率が最も高い樹種となっている。他の〔割材系〕の製品も多いが、權作成の特定樹種として選定されている。

オニグルミは〔丸木系〕・〔割材系〕の素材と建築材の比率が高い。特に〔丸木系〕素材と建築材の合計は63.5%となり、製品率12%未満で、イヌエンジュと総体的によく似ている。同様にほぼ建築材に利用する特定樹種といえるだろう。

クワ属の製品化率27%とやや高いが、一つの製品を作るよりも部品の扱われ方が多い。〔丸木系〕・〔割材系〕の素材や建築材としても平均的に使われるが、板物にはならない。

シナノキ属も製品化率27%とやや高い樹種だが、板とその製品としての比率が高く、舟を作る樹種としても重要である。その分、廃材も多い。板物と舟の特定樹種として選定されている。

サクラ属は〔丸木系〕素材と建築材の合計57%と、コナラ属と同程度の割合を持つが、製品化率も31.4%と高い。特に權への使用度が高く、モクレン属・ハンノキ属に次ぐ權の特定樹種といえる。

カエデ属は〔丸木系〕素材比が高いほか、〔割材系〕素材・建築材・廃材も多い。製品化率は26%、挟付の平長柄5点の特定樹種だが、同時に作られた組み合わせ使用の製品の可能性もある。

ハコヤナギ属は製品化率は22%ほどだが、シナノキ属同様、板とその製品としての比率が高く、舟の舷側板も作る。廃材も多く、全体比率はシナノキ属と酷似する。板物の特定樹種として選定されていると思われる。

ミツバツツギの製品化率は12%と低く、〔丸木系〕素材の比率が極度に高い。これと建築材の合計は77%で、柱を除く建築材類にはほぼ限定されて使用されているように見受けられる。細さが特徴の樹種といえよう。

キハダ属の製品化率は27.4%、他も平均的に使用されクワ属とやや似た面がある。舟縁材の樹種として注目される。

以上出土上位20樹種を概観した。これら樹種どうしの時間的変移（層レベル）については前項表VII-5に示されている。

#### (5) 伝承と樹種 - 樹木のアイヌ語名から -

利用された樹種の傾向が見えてくると、ノリウツギ(アイヌ名 ラスバニ):中柄を作る木、といったようにアイヌ語名やアイヌ民族が伝承でもつ使用法と、出土品が一致するものがあることがわかった。表VII-30-34には、同定した属名から一步すすめて遺跡周辺に自生しているなど手に入れられる樹木の名称を出し、これの別名・アイヌ名・アイヌ名の意味を並列した。さらにアイヌ民族の伝承などにある製品名を示し、後尾に当遺跡出土木製品を羅列して対照できるようにした。こうして検討していくと、伝承 = 樹種選択として、いくつかの一致を見るものや伝承以外にも広く利用されることなどがわかってくる。

舟・舷側板は伝承では、ハコヤナギ属ドロノキ・ヤナギ属(オオバヤナギ属)トカチヤナギ・エゾノバッコヤナギ・ブナ属クリ・カツラ属カツラ・シナノキ属シナノキ・ハリギリ属ハリギリ・トネリ

## 2 木製品の樹種構成からみたユカンボシC15選跡の性格とその変容

表VⅡ-27 主要樹種の出土製品点数表(1)

## トネリコ属 3,500点

分類・種別	点数
1 N2 切片	632
2 K1-2 枝材	509
3 K2-2 割材	413
4 K1-1 細枝材	307
5 K1-3 丸木材・股木材	229
6 K2-3 偏割材・偏半割材	213
7 L4 杭	154
8 L2 建材	149
9 J2-2 割材加工製品	96
10 K3-1 板材	90
11 N3 木端	88
12 K2-1 半割材	81
13 L5 細杭	61
14 L1-1 柱	59
15 L3 建築部材	46
16 N4 炭化材	43
17 L6 刺し杭	27
18 N1 剥材	25
19 J3-1 板材加工製品	23
19 J6-2 軸状製品	23
21 L1-2 股木杭	21
22 K3-2 板	19
23 K2-4 心持材	17
24 K4 薄板・細板(材)	16
25 J2-3 偏割材加工製品	15
26 J1-2 枝材加工製品	13
27 D6 柄	10
27 J1-1 細枝材加工製品	10
29 J1-3 丸木材・股木材加工製品	6
29 J2-1 割材加工製品	6
29 K5 柾目板	6

## ヤナギ属 1,342点

分類・種別	点数
1 K1-2 枝材	405
2 K1-1 細枝材	270
3 N2 切片	104
4 K2-2 割材	68
5 L4 杭	58
6 L3 建築部材	38
7 K1-3 丸木材・股木材	37
7 K2-1 半割材	37
9 L2 建材	35
10 L5 細杭	31
11 K3-1 板材	24
12 K2-3 偏割材・偏半割材	19
13 L6 刺し杭	18
14 N3 木端	17
15 J1-2 枝材加工製品	15
15 J3-1 板材加工製品	15
15 L1-2 股木杭	15
18 J2-2 割材加工製品	12
19 K3-2 板	11
19 J2-1 半割材加工製品	9
20 J6-2 軸状製品	9

## アスナロ 1,107点

分類・種別	点数
1 K5 柾目板	752
2 J1 イクバスイ	106
3 J7 挿酒窠状製品	24
4 H5 串	23
5 G2-1 曲物	18
6 D11 楔	17
7 N2 切片	16
8 J3-1 板材加工製品	15
9 G2-2 曲物底板	14
9 H4 箸	14
11 K4 薄板・細板(材)	13
12 J2-2 割材加工製品	12
12 J4 細板(材)加工製品	12
14 G3 箱物板	10
14 B2 篋	10
16 J5 柾目板加工製品	7
17 K3-2 板	6
18 K3-1 板材	5
19 K2-2 割材	4
19 N3 木端	4

## ハンノキ属 963点

分類・種別	点数
1 N2 切片	202
2 K1-2 枝材	164
3 K1-3 丸木材・股木材	83
4 K2-2 割材	80
5 L4 杭	45
6 K1-1 細枝材	44
7 K2-3 偏割材・偏半割材	35
8 K3-1 板材	33
8 L2 建材	33
10 J2-2 割材加工製品	25
10 K2-1 半割材	25
12 N3 木端	20
13 L1-1 柱	17
14 A2-1 車權	16
15 J3-1 板材加工製品	11
15 L5 細杭	11
17 L3 建築部材	9
18 A1-4 斜側板	8
19 K3-2 板	7
19 K3-2d 有孔板	7
19 N1 剥材	7

## モミ属 562点

分類・種別	点数
1 N2 切片	69
2 K2-2 割材	49
3 K5 柾目板	46
4 J3-1 板材加工製品	44
5 K4 薄板・細板(材)	35
6 J2-2 割材加工製品	27
7 D11 楔	25
8 J1 イクバスイ	22
9 K3-1 板材	19
10 L3 建築部材	15
11 K1-2 枝材	14
12 J3-2 板加工製品	12
12 L4 杭	12
14 J7 挿酒窠状製品	11
14 L2 建材	11
16 K3-2d 有孔板	10
17 J6-2 軸状製品	9
18 A1-4 斜側板	8
18 K1-1 細枝材	8
18 K2-3 偏割材・偏半割材	8
18 N1 剥材	8

## ハリギリ 395点

分類・種別	点数
1 K3-1 板材	43
2 J3-1 板材加工製品	41
3 N2 切片	37
4 J2-2 割材加工製品	31
5 K2-2 割材	28
6 K3-2 板	19
7 D11 楔	16
8 K2-3 偏割材・偏半割材	13
9 N3 木端	12
10 A1-4 斜側板	11
11 J3-2 板加工製品	10
11 K3-2d 有孔板	10
13 K1-2 枝材	9

## ハリウツギ 365点

分類・種別	点数
1 H5 串	116
2 C1-2 矢中柄	39
3 K1-1 細枝材	32
4 K1-2 枝材	25
5 B4 やす・矢	22
5 H4 箸	22
7 C1-1 矢	20
8 J2-2 割材加工製品	10
9 N2 切片	9
10 B3 キテ中柄	8

## ニレ属 363点

分類・種別	点数
1 K1-2 枝材	54
2 K1-3 丸木材・股木材	45
3 K2-2 割材	43
4 K1-1 細枝材	28
5 L2 建材	17
5 N3 木端	17
7 K2-3 偏割材・偏半割材	16
7 L4 杭	16
9 K3-1 板材	13
10 N2 切片	11
11 L1-2 股木杭	9

表VⅡ-28 主要樹種の出土製品点数表(2)

## コナラ属 336点

分類・種別	点数
1 K2-2 割材	69
2 K1-3 丸木材・股木材	46
3 K1-2 枝材	39
4 L4 杭	30
5 L2 建材	28
6 L1-1 柱	22
7 N2 切片	11
8 K2-1 半割材	10
9 K1-1 細枝材	8
9 L3 建築部材	8
11 K2-3 偏割材・偏半割材	7

## ハシドイ属 334点

分類・種別	点数
1 K1-2 枝材	62
2 K1-1 細枝材	33
3 L4 杭	29
4 H5 串	21
5 K1-3 丸木材・股木材	18
5 L1-2 股木杭	18
5 L5 細杭	18
8 L6 刺し杭	17
9 L3 建築部材	16
10 L2 建材	15
11 N2 切片	12
12 L1-1 柱	9

## イヌエンジュ 280点

分類・種別	点数
1 K1-2 枝材	50
2 K1-3 丸木材・股木材	30
3 K1-1 細枝材	28
4 L4 杭	26
5 N2 切片	25
6 L2 建材	21
7 K2-2 割材	16
8 L1-2 股木杭	13
9 L5 細杭	8
10 J2-2 割材加工製品	7
10 L6 刺し杭	7
11 K2-3 偏割材・偏半割材	6

## モクレン属 198点

分類・種別	点数
1 N2 切片	20
2 A2-1 車輻	16
3 J2-2 割材加工製品	15
4 K2-2 割材	13
5 K1-2 枝材	12
6 L3 建築部材	9
7 K2-3 偏割材・偏半割材	8
8 A3-1 早樫	7
8 D11 楔	7
8 J3-1 板材加工製品	7
8 L2 建材	7
8 L4 杭	7

## オニグルミ 182点

分類・種別	点数
1 K1-2 枝材	37
2 K1-3 丸木材・股木材	24
3 K2-2 割材	19
4 L4 杭	18
5 L2 建材	14
6 N2 切片	11
7 L1-1 柱	8
8 K2-1 半割材	6
9 K2-3 偏割材・偏半割材	5
10 N4 炭化材	4

## クワ属 165点

分類・種別	点数
1 K1-2 枝材	26
2 K2-2 割材	14
3 L4 杭	11
4 D6 柄	8
4 L2 建材	8
4 N2 切片	8
7 K1-1 細枝材	7
8 H5 串	6
8 J2-2 割材加工製品	6
8 K2-1 半割材	6
11 L1-2 股木杭	5

## シナノキ属 139点

分類・種別	点数
1 K3-1 板材	32
2 K3-2 板	20
3 N2 切片	19
4 K2-2 割材	12
4 K2-3 偏割材・偏半割材	12
6 A1-1 舟敷	10
7 J3-1 板材加工製品	9
8 N3 木端	5
9 D11 楔	3
9 K3-2d 有孔板	3

## サクラ属 121点

分類・種別	点数
1 K1-2 枝材	27
2 L4 杭	16
3 J2-2 割材加工製品	9
3 K1-1 細枝材	9
5 N2 切片	7
6 K1-3 丸木材・股木材	5
7 A2-1 車輻	4
7 A3-1 早樫	4
7 J6-2 軸状製品	4
7 L2 建材	4

## カエデ属 108点

分類・種別	点数
1 K1-2 枝材	12
1 K2-2 割材	12
3 N2 切片	11
4 L2 建材	7
4 L4 杭	7
6 D6ah 扶付長柄	5
6 K1-3 丸木材・股木材	5
6 K2-3 偏割材・偏半割材	5
9 D6 柄	4
9 K1-1 細枝材	4
9 L3 建築部材	4

## ハコヤナギ属 96点

分類・種別	点数
1 K3-1 板材	15
1 K3-2 板	15
3 N2 切片	14
4 K2-2 割材	12
5 K2-3 偏割材・偏半割材	6
6 A1-4 舷側板	4
6 J3-1 板材加工製品	4
6 N3 木端	4
9 J2-2 割材加工製品	3
9 K3-2d 有孔板	3
9 K4 葎板・細板(材)	3

## ミツバウツギ 91点

分類・種別	点数
1 K1-1 細枝材	25
2 K1-2 枝材	19
3 L6 刺し杭	7
4 L1-2 股木杭	6
4 L3 建築部材	6
6 K2-1 半割材	4
6 L5 細杭	4
6 N2 切片	4
9 J1-1 細枝材加工製品	2
9 J1-2 枝材加工製品	2
9 L4 杭	2

## キハダ属 84点

分類・種別	点数
1 K1-1 細枝材	10
2 K1-2 枝材	8
3 K2-2 割材	7
4 L4 杭	6
5 N2 切片	5
6 J3-1 板材加工製品	4
6 K3-2 板	4
6 L5 細杭	4
9 J2-2 割材加工製品	3
9 N3 木端	3
11 A1-3 舟敷材ほか	2



表VII-29 主要樹種の出土製品 大分類別構成比

分類	名称	出土点数	構成比%	トネリコ属	ヤナギ属	アスナロ	ハンノキ属	中央部	ハビキリ	ハクツギ	ニシ	コナラ属	ハンノキ属
A	舟関係	207	1.78	0.49	1.42	0.18	3.53	2.49	5.57	0.27	0.55	0.89	2.69
B	漁撈具	44	0.38	—	0.30	0.09	0.31	—	—	8.49	0.28	—	0.30
C	狩猟具	82	0.71	0.09	0.07	—	0.21	0.18	—	16.44	—	0.30	0.90
D	諸作業道具	240	2.07	0.74	1.27	1.90	1.04	6.05	5.57	1.10	2.20	2.38	3.59
E	運搬具	7	0.06	—	—	—	—	—	0.25	1.10	—	—	—
F	紡織編具	18	0.16	0.14	—	0.27	—	0.18	—	0.55	0.28	—	—
G	容器類	118	1.02	0.09	—	3.79	0.10	0.18	1.77	—	0.28	0.30	—
H	食用具	307	2.64	0.29	0.52	4.34	0.31	2.31	1.27	38.36	—	1.19	6.29
I	祭祀具	155	1.33	0.03	0.07	9.67	0.10	3.91	1.77	0.82	—	0.30	—
J	各種加工製品・部品	984	8.47	6.43	5.81	6.96	6.54	26.87	30.13	7.67	5.79	4.17	5.99
K	素材類	5,955	51.28										
K1	[丸木系]	3,057	26.33	29.86	53.06	0.09	30.22	4.27	3.04	16.71	34.99	27.68	33.83
K2	[樹材系]	1,518	13.07	20.69	9.46	0.54	15.06	10.50	11.65	2.74	19.01	26.19	3.89
K3	[板材系]	448	3.86	3.20	2.68	0.99	4.88	6.41	18.23	—	4.41	2.08	—
K4-5	薄板・紐目板等	932	8.03	0.63	0.82	69.11	0.52	14.41	2.28	—	0.82	0.30	0.30
L	建築材類	1,503	12.94	14.77	15.05	0.18	12.77	7.47	3.29	1.92	15.70	28.87	36.53
M	樹皮	175	1.51										
N	廢材等	1,817	15.65	22.51	9.46	1.90	24.40	14.59	12.91	2.47	15.43	5.36	4.49
	出土点数計	11,612		3,500	1,342	1,107	963	562	395	365	363	336	334

分類	名称	出土点数	構成比%	トネリコ属	モウソウソク属	オニグルミ	クワ属	シナノキ属	サクラ属	カエデ属	ハンノキ属	ミツバハツキ	キハダ属
A	舟関係	207	1.78	0.36	15.15	2.75	0.61	10.07	7.44	2.78	8.33	—	5.95
B	漁撈具	44	0.38	—	—	0.55	—	—	—	0.93	—	—	—
C	狩猟具	82	0.71	—	—	—	1.21	—	1.65	—	—	—	—
D	諸作業道具	240	2.07	1.79	8.08	1.65	7.88	2.16	4.13	10.19	2.08	1.10	2.38
E	運搬具	7	0.06	—	—	—	0.61	—	—	—	—	—	—
F	紡織編具	18	0.16	0.36	—	—	1.21	—	0.83	0.93	—	1.10	—
G	容器類	118	1.02	—	1.51	0.55	—	1.44	—	—	1.04	—	1.19
H	食用具	307	2.64	1.07	0.51	—	4.24	—	1.65	—	—	—	1.19
I	祭祀具	155	1.33	—	1.01	1.10	—	—	1.65	0.93	—	—	2.38
J	各種加工製品・部品	984	8.47	5.71	19.19	4.95	11.52	10.07	14.05	10.19	10.42	9.90	14.29
K	素材類	5,955	51.28										
K1	[丸木系]	3,057	26.33	38.57	11.11	38.79	26.62	0.72	33.88	46.30	—	48.35	22.62
K2	[樹材系]	1,518	13.07	9.64	13.13	17.58	15.15	17.27	4.96	18.52	21.88	5.49	10.71
K3	[板材系]	448	3.86	0.71	2.53	1.85	—	39.57	—	1.85	34.36	—	4.76
K4-5	薄板・紐目板等	932	8.03	0.36	1.01	0.55	0.72	0.72	—	—	3.13	—	2.38
L	建築材類	1,503	12.94	29.64	15.15	24.73	21.82	—	23.14	19.44	—	28.57	20.24
M	樹皮	175	1.51										
N	廢材等	1,817	15.65	11.43	12.12	9.34	12.12	17.27	6.61	13.89	18.75	5.49	11.90
	出土点数計	11,612		280	196	182	165	139	121	108	96	91	84

コ属ヤチダモが見受けられ、当遺跡出土のハコヤナギ属・ヤナギ属・カツラ・シナノキ属・ハリギリ・トネリコ属と相当の一致をみる。舟に対しての伝承の確かさや古さから、木製品での舟の重要性が立証されるようである。舟の櫂の伝承では、サクラ属シウリザクラ・トネリコ属ヤチダモがあり、これに対してはサクラ属の車楳・早楳とトネリコ属の車楳が出土しているが、出土数の多いハンノキ属・モクレン属には伝承はないようである。

魚叩き棒用材の伝承は、ヤナギ属の各種・ミズキ属ミズキといった木幣を作る木にあり、魚叩き棒に木幣の役割があることが窺える。出土品でも9点中4点がヤナギ属で、彫刻が入ったものもあった。他の5点中3本もオニグルミ・ハンノキ属(ミヤマハンノキ)・ハシドイ属(ハシドイ)と、やはり木幣を作る木との伝承一致をみる。

漁撈・狩猟具で手から離れるものについては、アジサイ属ノリウツギに矢・鋳・槍などの中柄を作る伝承があり、アイヌ名の意味も「中柄を作る木」である。これも出土品とあらかた一致し、キテ中柄全点・やす96%・矢77%・矢中柄80%がノリウツギ製である。また、ハシドイ属ハシドイとニシキギ属マユミ・コマユミに花矢や鋳の伝承があり、出土品でハシドイ属の矢と矢中柄各1点・ニシキギ属の矢中柄1点があるのも無関係ではないだろう。

弓としてはイチイ属イチイ・クワ属ヤマグワ・サクラ属シウリザクラ・ニシキギ属マユミ・トネリコ属アオダモ・ガマズミ属オオカメノキに伝承があり、出土品ではイチイとクワ属に一致を見る。中でもイチイはアイヌ名クネニに「弓のなる木」の意がある。

道具類で一致を見るのは、ニレ属ハルニレ・クワ属ヤマグワ・モクレン属ホオノキ・カエデ属などである。これを柄に限定すると、槍や鋳の柄の伝承を持つサクラ属シウリザクラと柄・長柄があるサクラ属のほか、柄でナナカマド属(ナナカマド)・トネリコ属(アオダモ)が一致する。また、発火具でニレ属ハルニレの伝承、木名チキサニの意「われらがこすって火を出す木」と、出土品ニレ属が一致する。火をおこすという重要な行為とその伝承が樹木種の一致のなまって表れている。

かんじきの用材の伝承は、クワ属ヤマグワ・ナナカマド属ナナカマド・サルナシ属サルナシ・ガマズミ属オオカメノキにあり、唯一の出土品はクワ属で一致を見る。

割り物に使う伝承があるのはカツラ属カツラ・モクレン属ホオノキ・ニシキギ属マユミ・ハリギリ属ハリギリで、出土品割り物(G5・G6)22点中モクレン属3点14%とハリギリ5点23%を占める二種が一致を見る。

篋ではモクレン属キタコブシ等・ウコギ属コシアブラに、箸串類ではクワ属ヤマグワ・ニシキギ属コマユミ・カエデ属・ナナカマド属ナナカマド・ハギ属エソヤマハギに伝承がある。箸串類でクワ属・ニシキギ属・ハギ属に少量の一致はあるが、実際の出土品では篋は交易品のアスナロ・スギの再加工で半数以上がまかなわれており、箸串類でもノリウツギとアスナロ再加工品がほとんどである。食器用小物は伝承との一致が少ないが、ノリウツギと交易品アスナロ等の再利用という樹種選定は存在する。杵ではアサダ属アサダ・カツラ属カツラ・イヌエンジュ属イヌエンジュ・ハリギリ属ハリギリに伝承があるが、出土品とは全く一致しない。伝承ではほぼ白とのセットであり、縦・横の違いなど用途・対象物の異なりが、この不一致の要因かもしれない。

イクバスイは伝承にはイチイ属イチイ・ヤナギ属オノエヤナギ・ニシキギ属マユミがあるものの、出土品は交易品アスナロの再利用が75%を占めている。広葉樹でもノリウツギが主で、イクバスイでは全く一致をみない。木幣を作る木の伝承は多く、ヤナギ属各種・オニグルミ属オニグルミ・ハンノキ属ミヤマハンノキ・モクレン属ホオノキ・サクラ属シウリザクラ・エソノウウミズザクラ・ナナカマド属ナナカマド・イヌエンジュ属イヌエンジュ・キハダ属・ウコギ属コシアブラ・ミズキ属ミズ

## 2 木製品の樹種構成からみたユカンボシC15選跡の性格とその変容

表VII-30 樹木のアイヌ名・伝承と出土製品(1)

樹種名	別名	アイヌ名	アイヌ名の意味	利用伝承など	当選跡出土木製品
属名:イチイ属 (科名:いちい科)					
イチイ	オンコ・アララギ	ラムニ クネニ	イチイ 弓になる木	弓・ハナリ楳・イクバスイ・柱・ 器・食用・薬用 網走・安斗・薬用、薬・食用	半環交合器、弓、柄杓蓋、櫛、 篋、箸、串、彫材加工製品、細杖
属名:モミ属 (科名:まつ科)					
トドマツ	アカトドマツ	フ フウシニ	腫れ物	器・食用、網走、屈張、彫材、 網走:板着器	籠形器、半環交合器、半環交合器、 燧、矢、矢柄、屈張、櫛、有孔 柄、作業台、櫛、網走補助具、 櫛、曲物杖、彫材、篋、箸、串、イ クバスイ、役材加工製品、丸木材加 工製品、高層加工特殊棒状製品、 半割材加工製品、割材加工製 品、編割材加工製品、心持材加 工製品、櫛材加工製品、櫛加工製 品、輪状製品、板材、板、屈 張器、板材、建築部材、杖、細 杖、網走杖
アオトドマツ	トドマツと同じ扱いと思われる				
エゾシラビソ					
属名:トウヒ属 (科名:まつ科)					
エゾマツ	クロエゾマツ	スク シュンクニ	エゾマツ エゾマツの木	矢柄、櫛皮、網走、板、木皮合 成板・板材、網走・薬・食用	箸、杖材加工製品、丸木材加工 製品、割材加工製品、板加工製 品、輪状製品、紐目籠、弓、杖
アカエゾマツ	ヤチシニコ	チカカスク	鳥のエゾマツ		
属名:カラマツ属 (科名:まつ科)					
カラマツ	ラクヨク	なし/オスク	(トドマツ以外はスク)		半環、柄、櫛、串、編割材加工製 品、板加工製品、輪状製品
グイマツ	シベリアカラマツ	クイ			
属名:スギ属 (科名:まつ科)					
スギ		なし			舟楫材、浮子、矢中柄、櫛、燧火 具、曲物、曲物杖、彫材、大型 器、箸、箸、杖、イクバスイ、板材 加工製品、板材、舟楫材
属名:アスナロ属 (科名:まつ科)					
アスナロ	アテ	なし			半環交合器、浮子、柄、櫛、機 織、燧、燧、燧、イクバスイ、板造 器、内輪加工特殊棒状製品、半 割材加工製品、割材加工製品、 編割材加工製品、板材加工製 品、板加工製品、輪状製品、板 材、板、網走板、板材、建築部材
属名:ハコヤナギ属 (科名:やなぎ科)					
ドロノキ	ドロヤナギ・ドロ ワタドロ・ワタノキ	ヤイニ	ただの木	舟 楫や浮子木	舟、舟材、籠形器、おのびのみ、作 業台、櫛、網走、割材加工製 品、板材加工製品、板加工製品、 板材、板
ヤマナラシ	ハコヤナギ	クルニ	熊鷹の住む木	櫛皮・薬用	
属名:オオバヤナギ属 (科名:やなぎ科)					
オオバヤナギ	マルバヤナギ	トイス	蒸 柳		
トカチヤナギ		チュツニ・チツニ	舟材になる木	舟・舟材	
属名:ヤナギ属 (科名:やなぎ科)					
オノエヤナギ	ナガバヤナギ・ヤブヤナ ギ・カクタチヤナギ	ス	柳	木製・舟印し楳・イクバスイ	舟、舟材、網走板、半環、半環交 合器、半環交合器、弓、網走、網走 子、おのびのみ、魚印し楳、コウ 機織、櫛、板材柄、板材有孔柄、 作業台、櫛、網走、舟楫器、舟、木 製、杖材加工製品、丸木材加工 製品、網走加工特殊棒状製品、半 割材加工製品、割材加工製 品、編割材加工製品、心持材加 工製品、板材加工製品、板加工製 品、心持加工製品、輪状製品、板 材、板、舟楫器、板材、建築部 材、板材、板、網走、網走杖
マルババコヤナギ		チュツニス	舟材になる柳		
エゾバコヤナギ	ソノヤマコヤナギ	ヌカカス	原野の上の柳	舟・舟材・木製・櫛皮・せいの	
イヌコリヤナギ		キムンス	山にある柳		
バコヤナギ・エゾノカワヤナギ・エゾノキ ヌヤナギ・エゾヤナギ・タチヤナギなど		ウラリス	梁をつくる柳	梁・櫛皮・せいの・薬用	
		ススほか		木製・舟印し楳	
属名:オニグルミ属 (科名:かばのき科)					
オニグルミ		ネシコ ニヌツ	クルミの木 木の実	木製・マキ割材・櫛 矢・食用、櫛皮・薬料	半環、半環交合器、半環、魚印し楳、 櫛、柄、板材柄、板材長柄、網走 物、イクバスイ、機織品、杖材加工 製品、丸木材加工製品、割材加 工製品、編割材加工製品、板材 加工製品、板加工製品、板材、 板、板目板、板材、板材、板材、 板、網走、網走杖
属名:アサダ属 (科名:かばのき科)					
アサダ	シノカブリ・ハネカブ	セイカバル	薄い樹皮	舟・コングン器・櫛料 彫り木	



## 2 木製品の樹種構成からみたユカンプシC15遺跡の性格とその変容

表VII-32 樹木のアイヌ名・伝承と出土製品(3)

樹種名	別名	アイヌ名	アイヌ名の意味	利用伝承など	当遺跡出土木製品
属名: アジサイ属 (科名: ゆきのした科)					
ノリウツギ	サビタ・ニベ ノリキ	ラスパニ	中柄をつくる木	矢、薪、薪などの中柄・花矢・キセル・灰などに入ばきみ、顔皮・真皮: 薬用	奉還受台座輪、舟形中柄、越中柄、ササ、矢、矢中柄、矢柄、網、かんじき輪、罫、茅、藁、棧造品、苞葉、織物・織造品、杖材加工製品、木柱加工製品、室棚加工製品、各種加工製品、ビン状製品、板材加工製品、板加工製品、種皮製品、板材、板、紐、杖、付、付、建築部材、板木柱、杖、網、罫、網
ツルアジサイ	ゴトウヅル	ユッパンカ イワラスパニ	鹿(鹿)の蔓 山鹿にある中柄をつくる木		建築部材
属名: サクラ属 (科名: ばら科)					
エゾヤマザクラ	オオヤマザクラ	カリパニ	ぐるぐるに充分にま わる皮のとれる木	樹皮: 刺、矢、鹿・鹿皮、香皮・薬用	奉還、奉還受台座輪、草履、大甲船、舟、網、罫、網、有孔網、罫、罫、正皮履、イタバス、杖材加工製品、室棚加工製品、心材加工製品、各種加工製品、板材加工製品、板加工製品、種皮製品、板材、板、紐、杖、付、付、建築部材、板木柱、杖、網、罫、網
ミヤマザクラ	シロヤマザクラ	レタツカリパニ	白いカリパニの木		
シウリザクラ	ミヤマミザクラ	シウリ・シウニ?	苦い木?	木船・仕掛・舟・船中の柄・薬用	工製品、板材加工製品、板加工製品、種皮製品、板材、板、紐、杖、付、付、建築部材、板木柱、杖、網、罫、網
エゾノウミスザクラ	カバザクラ	キキンニ	身代わりに出て危険を避つ けようとなる木	木船、杖: 薬用、実: 食用: 薬用	
属名: ナナカマド属 (科名: ばら科)					
ナナカマド	ライデンボク	イワキキンニ	山地にある羅人を入つら うものなる木	木船・舟・食器・柄・かんじき、樹皮・実: 薬用	網、建築部材
アズキナシ	カダスギ	チカゴセタンニ	島のユノコランゴの木		
属名: コリンゴ属 (科名: ばら科)					
エゾノコリンゴ ズミ	サントシコロハオオズミ コリンゴ	セタンニ	エゾノコリンゴのなる木	網、杖: 薬用	
属名: イヌエンジュ属 (科名: まめ科)					
イヌエンジュ		チクベニ		柱・木船・鹿蹄・鹿蹄・臼・舟、顔皮: 薬用	奉還受台座輪、茅、網、罫、舟、舟形中柄、環めみ木、罫、舟、杖材加工製品、室棚加工製品、心材加工製品、各種加工製品、板材加工製品、板加工製品、種皮製品、板材、板、紐、杖、付、付、建築部材、板木柱、杖、網、罫、網
属名: ハギ属 (科名: まめ科)					
エゾヤマハギ		シンケツ ヌガンシンケツ	萩・留め串 野萩	串	矢中柄、串
属名: キハダ属 (科名: みかん科)					
キハダ	シコロ	シケルベニ	ぬるぬるした実のなる木	木船・柱、実: 食用・薬用	舟輪、舟形中柄、草履、奉還受台座輪、網、罫、舟、杖材加工製品、室棚加工製品、心材加工製品、各種加工製品、板材加工製品、板加工製品、種皮製品、板材、板、紐、杖、付、付、建築部材、板木柱、杖、網、罫、網
ヒロハノキハダ			シコロベ $\rightarrow$ 日本産		
属名: ニガキ属 (科名: にがき科)					
ニガキ		シウニ・シウニ ユツライケニ	苦い木	網、顔皮: 薬用	奉還受台座、串、燻製品
属名: ウルシ属 (科名: うるし科)					
ヌルデ	フシノキ				
ヤマウルシ	キウルシ	ウツアチャ ウシチクニ・ウルシ	うるしの伯父 うるしの木		建築部材
属名: ニシキギ属 (科名: にしきぎ科)					
ニシキギ	クマユミ	ラブニ	翼のついている木		
マユミ	ヤマニシキギ	カスゴ	杓子をつくる木	杓子・舟・舟輪・舟・イタバス、芯矢・舟・船矢	
コマユミ		イマツカニ	歯を治す木	薪・花矢	
ツリバナ	エリマキ	コンケニ・クニ	曲がる木・弓の木	弓	矢中柄、標、串、沼材加工製品、杖
ヒロハツリバナ					
ムラサキツリバナ	クロツリバナ	エルンコンケニ	ねずみの曲がる木	子供差鹿角弓	
オオツリバナ					

表VII-33 樹木のアイヌ名・伝承と出土製品(4)

樹種名	別名	アイヌ名	アイヌ名の意味	利用伝承など	当遺跡出土土製品
属名: ツルウメモドキ属 (科名: にしきぎ科)					
ツルウメモドキ	ヤマガキ	ハイツカル フーハイ	内皮の繊維をとる蔓	内皮: センイ	矢中柄、甲
オニツルウメモドキ		オツツマニ			
属名: ミツバウツギ属 (科名: みつばうつぎ科)					
ミツバウツギ		エロカナンニ ノミニツ	それで鋸をつくる木 鑿の柄	地皮: 鞆綱・火着、内皮: 薬用	柄、イクバネイ、編材料加工製品、 枝材加工製品、丸木材加工製 品、平源材加工製品、ピン状製 品、枝材加工製品、板加工製品、 種状製品、燃料、建築部材、段木 柱、杖、綱丸、網丸
属名: カエデ属 (科名: かえで科)					
イタヤカエデ	エゾイタヤ	トベニ・トベニ	乳汁の出る木		
カラコギカエデ	ヤチイタヤ	オトトベニ	初芽にある乳の出る木		
ハウチワカエデ	メゲツツカエデ	イフトベニ	山地にある乳の出る木	器具(槍穂筒・網網・ムグツリ・雪 ・イクバネイなど)、山刀柄・ツクリ 柄、網	中緯、市腹交合部、車腹交合部 織、スサノ大、網、槍付巻物、作 品、真鍮、イクバネイ、枝材加工製 品、両端起し地味状製品、平 源材加工製品、割材加工製品、 編材料加工製品、板材加工製 品、種状製品、燃料、燃料、建築 部材、段木柱、杖、綱丸
エゾイタヤ					
オハラバナ	ホザキカエデ	ニタツトベニ	湿地にある乳の出る木	網織: 食用・薬用	
ヤマモミジ					
クロビイタヤ					
属名: ブドウ属 (科名: ぶどう科)					
ヤマブドウ		ハツツカル シト・カッブ	ぶどう蔓	皮: センイ・網目固定材、 実: 食用・酒用、葉・燃料・食用	
属名: トチノキ属 (科名: とちのき科)					
トチノキ		トチニ	樹の葉のなる木	皮: 舟、実: 薬用	漆
属名: シナノキ属 (科名: しなのき科)					
シナノキ	アカシナ	ニペシニ クベルケ	木からもぎ取った製皮のとれる木	舟: 舟材、内皮: センイ	舟、舟材、鞆綱、棹、木、網の 綱、大形網、平源材加工製品、板 材加工製品、編材料加工製品、 板加工製品、板加工製品、板 材、板
オオハボダイジュ	アオシナ	ヤニペシニ	たがひニベシのとれる木 (シナノキの産より完るの で)	内皮: センイ	
属名: サルナシ属 (科名: またたび科)					
サルナシ	シラクチツル・ コクワ	クッチツツカル	さるなしの生ずる蔓	かんじ、 実: 食用・酒用、根皮: 薬用	
マタタビ	ナツウメ	マタタツ	⇨ 日本語	実: 薬用・食用	枝材加工製品
ミヤママタタビ		チカククッチツツカル	さるなしの生ずる蔓		
属名: ハリギリ属 (科名: うこぎ科)					
ハリギリ	セン・センノキ	アユシニ	とげの多くある木		舟、舟材、鞆綱、網、枝付物、 作業部、標、下駄、漆、漆木 織、綱、網、品、苦な網・イクバネ イ、丸木材加工製品、両端加工 特殊種状製品、平源材加工製 品、割材加工製品、割材加工製 品、心付材加工製品、枝材加 工製品、編加工製品、ピン状製 品、種状製品、燃料、板、材、日 板、杖、燃料、建築部材、杖、網 丸
属名: タラノキ属 (科名: うこぎ科)					
タラノキ	タランボ	アユシニ	とげの多くある木	和陶・物干、 若葉: 食用、根: 薬用	車腹交合部織、枝付物乳柄、枝 材加工製品、ピン状製品、種状製 品、燃料、建築部材、杖、綱丸、 網丸、杖
属名: ウコギ属 (科名: うこぎ科)					
コシアブラ	ボンゼン・アブラウ	コトルシニ	斜面に多くある木	内皮: 網・下駄・木柄	杖
属名: ミズキ属 (科名: みずぎ科)					
ミズキ		ウト・カンニ イノウニ	ミズキ 木質の木	一木質・鳥羽目漆	網
属名: エゴノキ属 (科名: えごのき科)					
エゴノキ	チシヤ・ロクゴ			器具、漆: 漆用	網織、綱丸
ハクウンボク	オオバツシヤ・ハッポ	オヨベロニ	葉を打ち込んで製する木		

表VⅡ-34 樹木のアイヌ名・伝承と出土製品(5)

樹種名	別名	アイヌ名	アイヌ名の意味	利用伝承など	当遺跡出土木製品
属名:トネリコ属 (科名:もくせい科)					
ヤチダモ	タモノキ	ピンニ	割れ木・傷木	建築材・燃料・舟材・漆、燃料・炭、樹皮・炭	舟、舟材、船割板、舟型材、漆、木製土台、漆器土台部輪、草履、火弓、扇柄、笛吹き、鹿、イノシシの角、熊のみ、鹿、熊?、漆碗、皿、大気筒、舟、土台板、型枠、木製、漆器材加工製品、材料加工製品、丸木材加工製品、圓筒加工物棒状製品、半割材加工製品、羽付加工製品、扇柄材加工製品、心持材加工製品、船材加工製品、板加工製品、ピン状製品、輪状製品、棒状製品、板材、箸、釜口板、柱、建柱材、建築部材、撥木杖、杖、編杖、刺し杖
アオダモ	コバトネリコ	イワニ	山地の木	弓・柄・割成棒・木筒、燃料・炭、明、薪炭・炭用・燃料	
属名:ハシドイ属 (科名:もくせい科)					
ハシドイ	ドスナラ・ヤチカバ	ブンカウ ブンニ	ハシドイ はねる木	木筒・草履・杖・伊根材・櫛干平、土製具・花火	土製土台部、漆器土台部輪、火、櫛、櫛持ち手、舟用土俵、火、火、中筒、火筒、扇柄、輪、有孔板、鹿、イノシシの角、枝のみ、漆、扇柄材加工製品、枝材加工製品、半割材加工製品、羽付加工製品、扇柄材加工製品、心持材加工製品、船材加工製品、板加工製品、ピン状製品、輪状製品、棒状製品、板材、箸、釜口板、柱、建柱材、建築部材、撥木杖、杖、編杖、刺し杖
属名:ニワトコ属 (科名:すいかざら科)					
エゾニワトコ		ソコンニ	囊(良気を持つ木)	木筒・扇柄品、明・炭・炭用	銅鏡、漆器土台、刺し杖
属名:ガマズミ属 (科名:すいかざら科)					
ガマズミ		キライニ	櫛をつくる木	櫛	
ミヤマガマズミ		リテンニ	柔軟な木	仕掛弓・かんじき	串
オオカメノキ	ムシカリ	ヤルベニ			
カンボク	メノキ	バシクレツ		火箸、炭・炭用	
属名:タケ属 (科名:いね科)					
ネマガリタケ		オブネトフ アユシトフ ルムネトフ	矢柄になる竹 矢先のついている竹 矢尻になる竹	矢、矢中柄、矢柄、櫛や扇の中柄	竹材、漆器竹製品
マダケ		トフ	竹		
モウソウチク					

\* 「当遺跡出土木製品」の項で、数量の多いものや「利用伝承」に見合ふものエゴチック体にした。

キ・トネリコ属アオダモ・ニワトコ属エソニワトコとあるが、出土品の4点はヤナギ属・モクレン属・トネリコ属と一致を見る。木幣は目的により多種あり、選定される樹種もその目的に応じたものとなるので、出土数の少ない遺物とその伝承樹種が一致したことはそれなりの意味がある。

建築材の伝承は、イチイ属イチイ(柱)・コナラ属カシワ(建築材)・イヌエンジュ属イヌエンジュ(柱)・キハダ属(柱)・ハリギリ属ハリギリ(建築材)・トネリコ属ヤチダモ(建築材)・ハシドイ属ハシドイ(柱)がある。イチイの柱がない以外はほとんど伝承の建築材は出土しているが、大型の柱・建材から細い杭や建築部材まで出土する材の樹種は30種以上ある。先に検討した結果では、ハシドイ属・コナラ属・イヌエンジュ・ニレ属・オニグルミ・ミツバウツギを樹種選択されたものと考えた。建築材の需要と供給を考えると、これら選択された樹種の柱や建材が建築物の一部にでも取り入れられていることで、伝承は満たされるものと考えられる。

樹皮を生かして使用する伝承は、モミ属トドマツ・トウヒ属エソマツ・カバノキ属ウダイカンバ・シラカンバ・サクラ属エソヤマザクラにあり、樹皮を繊維として利用する伝承には、ヤナギ属エソノバッコヤナギ・イヌコリヤナギ・ニレ属ハルニレ・オヒョウ・ツルウメモドキ属・ブドウ属ヤマブドウ・シナノキ属シナノキ・オオバボダイジュにある。樹皮はほかに灯火用・燃料・染料・薬用等にも利用されるものがある。樹皮は樹種同定できない物が多いが、多様な利用をされていたことは明らかで、分類記号D1-1・G7・Mの177点の樹皮加工製品・樹皮や付随する樹皮製絞め帯や、建築・繊維製品にはこれら伝承の樹皮が使われていたものと思われる。

以上のあり方から、樹種選定(後に)伝承には、絶対的なもの・代用のきくもの・一部選択(伝承)を取り込めばよいもの・無視できるものなどの段階があり、当時の人々の間では、生活を営む中でこれらをうまく組み合わせていたものと考えられる。

#### (6) 千歳市美々8遺跡低湿度との比較

美々8遺跡低湿度部は、平成元～4年に発掘調査され、近世アイヌ文化期の舟着場・建物跡・物送り場などが発見され、木製品は標文～近世アイヌ文化期の生活用具や建築材・舟材・交易品などが多量に出土し注目された遺跡である。同じ千歳市に所在し、低湿度と多量の木製品といった共通点を持つ遺跡どうしを比較することで、当遺跡と特質を探って見たい。当遺跡と遺跡の比較できる美々8遺跡の資料としてIB層(1B1～6・Ta-c上面)のみを選択し、美々8報告書製品名にほぼ従い当報告の分類方式で報告書上の数を統計した。ただし、報告当時はアスナロをしっかりと同定するに至ってらず、アスナロはその他の針葉樹に含まれている。また実際には報告に入っていない丸木材類・割材類・腐材類が相当数ある。したがって当遺跡でこれらの出土数が多かったトネリコ属をはじめヤナギ属・ハンノキ属・ニレ属・ハシドイ属・イヌエンジュ・オニグルミなどが、今回の美々8遺跡統計では少なくする傾向にある。しかし、個別の製品や大きな数値は比較の対象にはなり得ると考えた。表VII-35～37に分類ごとの点数を示し、比較の行いやすいものを図VII-11～14に当遺跡と同じ手法で統計掲載した。以下コナボシC15遺跡はC15、美々8遺跡低湿度部は美々8と略記する。

A1-1～5の舟本体部ではハリギリ・ハンノキ属等が共通するが、割合ではハリギリの比率が美々8で高い。また美々8ではトチノキ・クリなど周辺自生材ではない種の舟材がみられ、和船の入港が想定できる。A2-1車輪・A3-1早櫂では使用樹種に共通点が多く、美々8ではアサダ・キハダ属に特徴がある。

B・Cのキテ中柄や矢など魚獲具・狩猟具の比較では、両者ともノリウツギ主体の使用が共通するが、美々8では針葉樹の比率もやや高い。

D5斧柄とD6柄の柄類では、モミ属・トネリコ属・モクレン属・ヤナギ属と共通するものも多く



あるが、美々8ではコナラ属・サクラ属が高く、C15ではクワ属・カエデ属・ハシドイ属などが特徴的である。D11榎類はどちらも針葉樹の割合が高く、美々8で80%以上、C15で53%である。ともにアスナコの再利用が主体となる。しかしC15ではハリギリ・シナノキ属など板材の加工に使われる材の利用も多い。

G4・1・G5の漆塗りを含んだ挽き物椀は交易品の比較となる。C15では先にカツラ・トチノキ・トチノキ・カツラ・ブナ属・カツラ・ブナ属・ケヤキ属・クリ・ブナ属・クリ・ケヤキという時間の流れを層とらえた。美々8ではブナ属が70%近くと圧倒的に多い。ブナ属の多さは同じだが、C15でカツラが出現している分、C15がやや古い時期主体とみることができるだろう。

H4箸は両斜とも針葉樹とノリウツギだが、美々8の針葉樹比率が高い。H5串も両者とも同傾向でノリウツギが主、針葉樹が従という関係だが、美々8のノリウツギの高さと、C15の広葉樹のバリエーションの多さが特徴的である。

J1・3adt・J2・2adt・J2・4adtなどの端扶付有孔各種加工製品が美々8にも存在した。C15では14点各3点のモミ属・モクレン属・トネリコ属の樹種選択を見出せたが、美々8でも11点中各3点のハンノキ属・モクレン属・2点のモミ属があり共通する樹種選定意識があるものと思われる。用途不明の同種の製品が両者に共通することが重要で、一般的な製品であったものと思われる。

J3・1・2とそのa・b・c・dなどの〔板材系〕木取りの加工製品類では、両者とも交易品針葉樹材の再利用やハリギリの比率の高さが共通する。美々8ではカツラ、C15ではモミ属が特徴的だが、どちらも舟舷側板に使われており、この再加工だったと思われる。素材であるK3・1・2でみると、美々8の場合報告書に統計されてないものも多いがハリギリを主に広葉樹がバラエティに富んだ使われ方をし、C15ではトネリコ属・ハリギリを主にしている。両者に共通の樹種が多いが、これは舟にも使用されている材種であることが重要である。板系全体でみると、美々8ではカツラ、C15ではハンノキ属が特徴的である。

L1・1・2の柱・股木杭では、美々8ではコナラ属が特定的に樹種選定を受けているように見えるが、報告数が少ないので変動があると思われる。対してL2・3建材・建築部材では、両者ともバラエティに富んだ樹種で、共通する以外では美々8ではカエデ属・サクラ属・ハリギリが、C15ではハシドイ属・イヌエンジュ・ニレ属・モクレン属が目立つ。建築材で最大の特徴は、美々8ではトネリコ属がほとんど使われないといつてよいのに対し、C15ではトネリコ属が主体になっていることである。

これまでの個別の検討をふまえて全体比較でいえることは、美々8における交易品を主体とする針葉樹の比率の高さと、トネリコ属・ヤナギ属の著しい低さである。細かく見るとハシドイ属・イヌエンジュ・オニグルミ・シナノキ属も少ない比率は低い。また、ハリギリ・ノリウツギ・カツラ・コナラ属・カエデ属・モクレン属などはC15よりも比率が高い。さらにタケ属の多さも美々8の特徴で、クマシデ属・ムラサキシキブ属・イボタノキ属・ハイノキ属などC15にはない、より本州的な樹種も出現している。これらのことから、美々8では和船が入港した可能性もあり、C15以上に本州産品が多く手に入り、またそれを再加工することも多かったという状況にあったといえる。C15は周辺の自生材を使った木製品の加工が多いながらも、交易品も重要な供給源の一つであったことがわかる。製品類においても櫂やマレクなど美々8にしかないものも多く、逆にC15ではイクバスイが多い。ただ漆塗り椀でみればC15は美々8に遜色はない。

報告書も含めて総合的に判断すると、美々8遺跡は太平洋側を主とした交易・漁撈がさかんな開かれた港町で、和人の出入りも多く、近世には和人定住の可能性もある。対してユカンボシC15遺跡は、





表 VII-37 美々8遺跡低湿部 B層出土木製品種別・樹種別点数(3)

種別	和名	属名	種名	検出位置																				計	構成比%					
				J3-1	J3-2	J3-3	J3-4	J3-5	J3-6	J3-7	J3-8	J3-9	J3-10	J3-11	J3-12	J3-13	J3-14	J3-15	J3-16	J3-17	J3-18	J3-19	J3-20							
針葉樹	いちい	イチイ	イチイ																						17	1.75				
		ヒノキ																								37	3.61			
	まつ	カラマツ																									1	0.10		
		トウヒ																										1	0.10	
	すぎ	スギ	スギ																									1	0.10	
広葉樹	スズナ	ノキ属-アスナロ属-ネズコ属		3																								183	18.76	
	ひのき	ヒノキ																										2	0.21	
		アスナロ	アスナロ																									19	1.94	
	針葉樹																											1	0.10	
広葉樹	やなぎ	ヤナギ																										33	3.45	
		ハコヤナギ																											7	0.72
	くまひ	オニグルミ	オニグルミ	1																								5	0.52	
		アサギ																											4	0.41
	かばのき	カバノキ																										7	0.72	
		カバノキ																										8	0.83	
		ハンノキ																										36	4.02	
		ブナ																										11	1.13	
	ぶな	コナラ		1																								66	6.80	
		クリ	クリ																										5	0.52
		ニレ																											9	0.93
	にれ	クヤキ		1	1																								3	0.31
		エノキ																											1	0.10
	くわ	クワ																											13	1.34
	かつら	カツラ	カツラ																										20	2.05
	もくれん	モクレン																											44	4.54
	ゆきのした	アジサイ	ノリウツギ																										174	17.94
	まめ	さくら	サクラ																										33	3.40
			ナナカマド																										54	5.62
		イヌエンジュ	イヌエンジュ																										17	1.75
	ハギ																											10	1.03	
みかん	キハダ																											8	0.82	
にがき	ニガキ	ニガキ																										1	0.10	
うるし	ウルシ																											2	0.21	
はしきぎ	コシキギ																											36	3.71	
	ツルヌメモドキ																											1	0.10	
かえで	カエデ		1	1																								1	0.10	
どろのき	トチノキ	トチノキ																										39	4.02	
しなのき	シタノキ																											4	0.41	
うごぎ	ハリギリ	ハリギリ																										6	0.62	
えごのき	エゴノキ		1	2	2	1	6	1																				55	5.67	
はいのき	ハイノキ																											1	0.10	
	イモダノキ																											1	0.10	
もくせい	トネリコ																											47	4.85	
	ハンDOI																											11	1.13	
くまづら	ムラサキシキブ																											2	0.21	
いね	クサ(ササ)																											10	1.03	
計																												191	19.6	
構成比%																													2.96	

2 木製品の樹種構成からみたユカンボシC15遺跡の性格とその変容

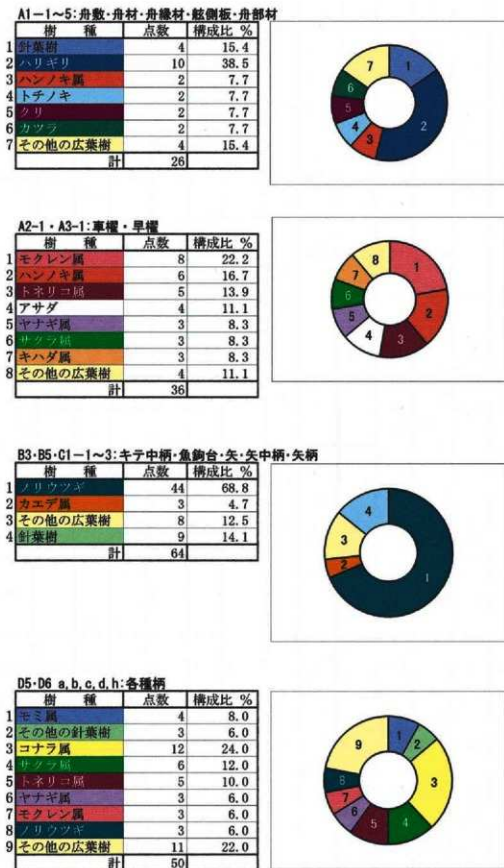
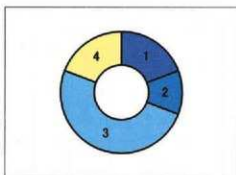


図 VII-12 美々8遺跡低湿度 B層出土木製品種別構成比 (1)

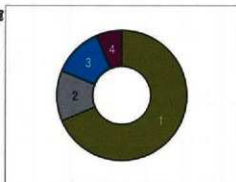
D11: 榎・模状製品

	樹種	点数	構成比 %
1	ヒミ属	5	19.2
2	イチイ	3	11.5
3	その他の針葉樹	13	50.0
4	その他の広葉樹	5	19.2
	計	26	



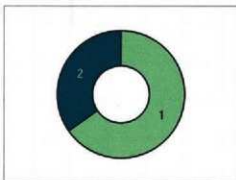
G4-1-G5: 漆塗椀(木質残存品のみ)・素木椀

	樹種	点数	構成比 %
1	ブナ属	11	68.8
2	トチノキ	2	12.5
3	ケヤキ属	2	12.5
4	クリ	1	6.3
	計	16	



H4: 箸

	樹種	点数	構成比 %
1	針葉樹	17	65.4
2	ソウロウツギ	9	34.6
	計	26	



H5: 串

	樹種	点数	構成比 %
1	針葉樹	29	24.0
2	ソウロウツギ	79	65.3
3	ハギ属	7	5.8
4	その他の広葉樹	6	5.0
	計	121	

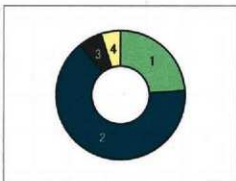
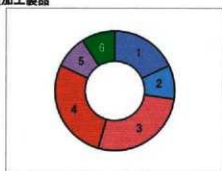


図 VII-13 美々8遺跡低湿部 B層出土木製品種別構成比(2)

2 木製品の樹種構成からみたユカンボシC15遺跡の性格とその変容

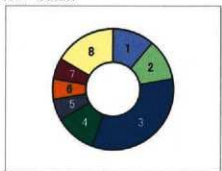
J1-3・J2-1・-2--4のabt:両端扶付有孔各種加工製品

樹種	点数	構成比 %
1 モミ属	2	18.2
2 ヒノキ	1	9.1
3 モクレン属	3	27.3
4 ハコヤナギ属	3	27.3
5 ヤナギ属	1	9.1
6 キハダ属	1	9.1
計	11	



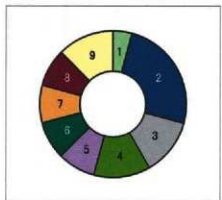
J3-1・1a・1b・1d・1ad・1ac-2・2a・2d:板・板材加工製品類

樹種	点数	構成比 %
1 モミ属	4	11.1
2 その他の針葉樹	4	11.1
3 ハリギリ	12	33.3
4 カツラ	4	11.1
5 コレ属	2	5.6
6 カエデ属	2	5.6
7 トネリコ属	2	5.6
8 その他の広葉樹	6	16.7
計	36	



K3-1・2・2d:板・板材類

樹種	点数	構成比 %
1 カラマツ	1	4.2
2 ハリギリ	6	25.0
3 ハコヤナギ属	3	12.5
4 ヒノキ属	3	12.5
5 ヤナギ属	2	8.3
6 カツラ	2	8.3
7 キハダ属	2	8.3
8 トネリコ属	2	8.3
9 その他の広葉樹	3	12.5
計	24	



J-K3-1・2全

樹種	点数	構成比 %
1 モミ属	4	6.7
2 その他の針葉樹	4	6.7
3 ハリギリ	18	30.0
4 カツラ	6	10.0
5 トネリコ属	4	6.7
6 ヤナギ属	3	5.0
7 ハコヤナギ属	3	5.0
8 ヒノキ属	3	5.0
9 その他の広葉樹	15	25.0
計	60	

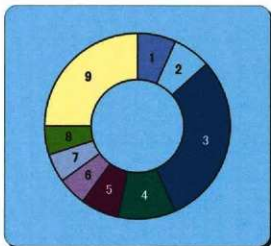
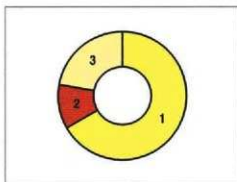


図 VII-14 美々8遺跡低湿部 B層出土木製品種別構成比(3)

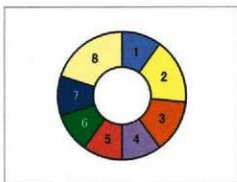
L1-1.2: 柱・股木杭

樹種	点数	構成比 %
1 コナラ属	12	66.7
2 ハンノキ属	2	11.1
3 その他の広葉樹	4	22.2
計	18	



L-2.3: 建材・建築部材

樹種	点数	構成比 %
1 針葉樹	3	10.0
2 コナラ属	5	16.7
3 カエデ属	4	13.3
4 ヤナギ属	3	10.0
5 ハンノキ属	3	10.0
6 カツラ属	3	10.0
7 ハリギリ	3	10.0
8 その他の広葉樹	6	20.0
計	30	



全 970点

樹種	点数	構成比 %
1 松属	37	3.81
2 イチイ	17	1.75
3 その他の針葉樹	207	21.34
4 ソリウツギ	174	17.94
5 コナラ属	66	6.80
6 ハリギリ	55	5.67
7 トネリコ属	47	4.85
8 モクレン属	44	4.54
9 ハンノキ属	39	4.02
10 カエデ属	39	4.02
11 ヤナギ属	33	3.40
12 カツラ属	33	3.40
13 カツラ	20	2.06
14 クワ属	12	1.23
15 ハンドイ属	11	1.13
16 榎	11	1.13
17 ハギ属	10	1.03
18 ニレ属	9	0.93
19 その他の広葉樹	76	7.84
20 タケ属	10	1.03
21 樹皮	20	2.06
計	970	

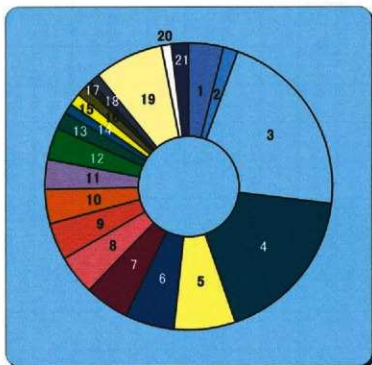


図 VII-15 美々8遺跡低湿部 B層出土木製品種別構成比(4)



近くまで舟の出入りは可能で交易は行われていたが、基本的には樺文人—アイヌが日常生活を営む、オサツ沼周辺の一集落である。オサツ沼は千歳川 石狩川を通して日本海側へのつながりがある（1章参照）。また両者の共通点も多く、広く見れば一つの社会で、千歳市末広遺跡・オサツ2遺跡・ユカンボシC2遺跡・オルイカ2遺跡・恵庭市カリンバ遺跡群などの集落とも交流・交易が行われていた広域的文化圏であったと考えられる。

#### (7) 樹種選定意識と遺跡の変容

第2)～(5)項でみてきたごとく、「樹種選定」と「木取り」には、「加工」が取り持つ親密な関係がある。製品の出来上がりをご想定し、加工を施すことで製品として成立するその過程に、樹種選択・木取りがある。出来上りの想定では、用途や使用感・消耗度・強度などが検討事項になり、加工では容易さや技術の習熟度・形状・大きさや太さなどが問題になる。この検討や問題に対する答えが、樹種選定であり木取りであると考えられる。また後述的に、精神的な意味のある樹種選択が生まれるが、これも前述の過程があって適した樹種が固定され、特定品には特定樹種という関係が成立して、伝承されたものと思われる。

樹種選定には先に述べたごとく、選定意識の高低や有無により、絶対的に必要な選定や代用の利くものから、選定を組み合わせの一部に取り入れる—汎用材でよい—無視といった諸段階がある。交易品の再利用である持込み材の再加工も、木取りは限定されているが、意識の高い方の段階と思われる。

樹種選定意識は、樹皮・幹・枝・根といった「木」の存在のしかたを考えると、最も身近で需要に即応できる材料としての「木」、親近感 汎用材、先を見通した計画性に対応できる材料としての「木」、安定感 選定・汎用、加工が容易で細工も施せる「木」あるいは大型品の製作に対応できる「木」、生産意識 選定・木取り、精神的支柱・自然の一部・神としての「木」、信仰・崇拜 精神的選定、持ち込まれる「木」、欲求 交易・選定、燃料や灯りとしての「木」、日常生活 廃材・選定、といったような意識の複合体で、言い換えれば、当時の人々の自然観であり生活感・社会観である。この意識の変遷が種々の製品に対し樹種選択の諸段階の変動を生み、遺跡の変容に大いに関係する。そこには和人との交易が大きな影響力を持っている。

このような「木」との間わりを樹種を通してI B 4層～I B 1層でみると、I B 4層とI B 1層の様相が似ていてアスナロやモミ属が少なく広葉樹が多い。特にトネリコ属が突出して多く、I B 4層では5割にせまる量であり、I B 1層でも4割に近い。ヤナギ属が1割を切ってハンノキ属は1割前後の比率を示す。I B 3層とI B 2層では、汎用材トネリコ属の割合が3割を切り、逆にアスナロの使用量が1割を超える。ヤナギ属も1割を超えハンノキ属は1割を切る。

樹種別の層ごとの変遷は第(3)項で詳細を説明したが、前項の美々8遺跡低湿部との比較から見たユカンボシC15遺跡のあり方を、層ごとの変遷でさらに追えば以下のようなよう。I B 4層ではすでにアスナロ材や漆碗が見られるが、道外との接触はまだ少ないようで、木製品製作の材料供給は周辺自生材で賄っている状況である。あるいは集落の中心が別の位置にあったのかもしれない。I B 3層の時期には道外や美々8遺跡との交易・交流が急速な展開をみせ、豊かなムラとなっていく。遺物の質や量から見てもユカンボシC15遺跡が最も栄えた時期で、木製品製作の材料供給は周辺自生材に交易品の再利用を交えてなされている。I B 2層でもその繁栄は続くが、衰えも見せ始め、I B 1層では道外との直接・間接の繋がりが少なくなっている。遺物量から見てもI B 2層～I B 1層にかけては半分以下となる。これは周辺の遺跡の状況や人々の生活を考えると、集落が消滅していくわけではなく、ムラはオサツ沼との関係からかその位置を移動していったのではないと思われる。中心部の移動は木製品の出土状態にも現れ、II章や前節で述べたI B 3層 I B 2層 I B 1層での木製品の

出土分布(図Ⅱ-3・4)や集中域の移動からも想像できる。東地区 区でⅠB1層の木製品出土比率が高くなることから、集落の中心は東側へと移動していったものと思われる。ⅠB2層～ⅠB1層～0B層とその集落の中心は移動しても、木製品製作の材料供給は周辺自生材に交易品の再利用を交えていたことに変わりはない。それは0B層の舟材や漆碗からも推定できる。ユカンボシC15遺跡はまだ全体を調査されたわけではない。集落の中心は依然ユカンボシC15遺跡の範囲内にあるものと想定される。

(三浦)

## 文 献

- ①北海道埋蔵文化財センター 1990・93・96・97 『美沢川流域の遺跡群ⅩⅡ・ⅩⅢ・ⅩⅣ・ⅩⅤ・ⅩⅥ』北埋調報69・83・102・114
- ②北海道埋蔵文化財センター 1996 『千歳市オサツ2遺跡①』北埋調報103
- ③北海道埋蔵文化財センター 1998—2002 『千歳市ユカンボシC15遺跡①—⑤』北埋調報128・133・146・159・176
- 千歳市教育委員会 1994 『千歳市埋蔵文化財包蔵地分布図』
- 千歳市教育委員会 2002 『ユカンボシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査』千歳市文化財調査報告書ⅩⅩⅡ
- 恵庭市教育委員会 1998 『カリンバ2遺跡第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ地点』
- 恵庭市教育委員会 2001 『カリンバ1遺跡・A地点』
- 恵庭市教育委員会 2001 『カリンバ2遺跡Ⅳ地点』
- 札幌市教育委員会 2001 『K39遺跡 第6次調査』札幌市文化財調査報告書65
- 大綱哲夫・武笠耕三 1953 『アイヌの丸木舟の作製』『北方文化研究報告 第8輯』
- 知里真志保 1953 『分類アイヌ語辞典 植物編』(1976 『知里真志保著作集 別巻1』)平凡社)
- 萱野 茂 1978 『アイヌの民具』アイヌの民具刊行運動委員会編
- 氏家 等 1985 『北海道の民具』『北海道の研究7 民俗・民族篇』
- 石川和助 1857 『蝦国録』(苫小牧町 1935 『苫小牧町史』)
- 玉島左太夫 1857 『入北記』(稲葉一郎解説 1992 『蝦夷地・樺太巡見日誌 入北記』北海道出版企画センター)
- 松浦武四郎 1846 『再航蝦夷日誌』(秋葉實翻刻・編 1999 『校訂 蝦夷日誌 全』北海道出版企画センター)
- 松浦武四郎 1857 『丁巳日誌』(秋葉實解説 1982 『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』北海道出版企画センター)
- 松浦武四郎 1858 『戊午日誌』(秋葉實解説 1985 『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』北海道出版企画センター)
- 小林和夫 1987 『蝦夷全図付録地名表』『北海道古地図集成』
- 高倉新一郎編 1987 『北海道古地図集成』北海道出版企画センター
- 長見義三 1976 『ちとせ地名散歩』
- 千歳市 1983 『増補千歳市史』
- 寺崎昭紀 1988 『千歳の植物』(千歳文化財保護協会 千歳市植生調査報告)
- 恵庭自然研究会 1994 『恵庭公園伐採予定地植生調査』・『恵庭公園植物相調査』・『恵庭公園植物目録』(『みずなら』第三号)
- 元田 茂 1950 『北海道湖沼誌』(北海道水産孵化場 『水産孵化場試験報告』5-1)
- 佐藤孝夫 1990 『北海道樹木図鑑』亜細亜社
- 飯島惇一郎 1986 『北海道の樹木』北海道新聞社
- 秋葉 實 編 1997 『植物名一覧 松浦武四郎著作より』北海道出版企画センター
- 北野信彦 2000 『生産技術面からみた近世出土漆器の生産・流通・消費』『日本考古学』9。

## 3 道央部における続縄文土器の編年

## (1) はじめに

私は本遺跡において続縄文文化期—擦文文化期の土器編年に携わった。後北式・北大式の一部については「3. 黒層の土器について」『ユカンボシ(15遺跡)』北海道埋蔵文化財センター(1998)がある。「北大式」期の土器については「北大式期以降の墓制について」『海峽と北の考古学 テーマ3』日本考古学協会(1999)の中で私見を述べてきた。ここでは新知見・訂正を加えそれらを再整理する。

## (2) 分析対象と分析項目

資料抽出の対象地域は日高・石狩・後志・空知である。対象とした遺跡は、墓以外を表1・7、土器が出土した墓(埋蔵を除く)を表2・8に、その詳細は表3-6・9・10に示した。極少数出土や破片資料の多い遺跡は対象としていない。

胎土選択・成形・乾燥・焼成は土器の内在的屬性(完成個体からは窺い知れず、ヒトからヒトへ伝わるには製作時の時間・場面の共有が必要な情報)である。

施文方法・文様は土器の表出的屬性(完成個体・破片からでも理解でき、ヒトからヒトへ伝わるには製作時の時間・場面の共有を必要とせず、モノだけを介して伝達可能な情報)である。

器形・調整は、内在する要素と表出する要素の両方が場合によって考えられる属性であり、中間的属性といえる。複雑な器形を造る場合は時間・場面の共有を必要とし、単純な器形を造る場合は時間・場面の共有を必要としない。調整は物を見て真似できるが、その意味・効果が理解されなければ痕跡的になるであろう。また、土器の製作技法には含まれないが、二次的加熱・炭化物の付着は使用方法の反映であり、その類似は伝達によるであろう。

これらのことから土器製作の手順においては内在的要素の下部概念として中間的要素・表出的要素がある。ただし、土器がデザイン嗜好や使用から計画・作製された場合に、必ずしも中間的・表出的要素が内在的要素の下部概念にならず、等値概念としてある可能性がある。

内在的属性、中間的属性、表出的属性の全てを分析し、その関係を論じることが本来であるが、ここでは筆者の能力的限界があるので主要な分析項目は器形・文様・組成とさせていただく。

施文方法に関する用語や文様名称は、後北C<sub>2</sub>-D式については鈴木 前出(1998)を、北大式については鈴木 前出(1999)を使用し、『対雁2遺跡』(北海道埋蔵文化財センター2002)を使用する。

## (3) 形態分類・規格

器種は、口径(口縁部の外縁周の直径)と器高(外底から最高噴水)の比によって分類する。倒円錐台形の形態は、深鉢・甕：口径/器高<1.25、鉢：1.25<口径/器高<1.50、浅鉢：1.51<口径/器高<3.00、皿：3.00<口径/器高と呼称する。胴部最大径よりも著しく窄まる頸部を有する形態を壺と呼称し、口径と器高の比によって分類しない。

器形は、耳が付く器形は「耳付+器種名；耳付深鉢など」、高台が付く器形は「台付+器種名；台付浅鉢など」、片口が付く器形は「片口+器種名；片口深鉢など」、注口が付く器形は「注口+器種名；注口皿など」、把手が付く器形を「把手付+器種名；把手付鉢など」、上面観が舟形の器形を「舟形+器種名；舟形鉢など」と呼称する。舟形は最小口径(船幅)と器高(外底から最高噴水)の比で分類する。

規格は、深鉢・甕・壺については器高、鉢・浅鉢・皿については口径で分類した。深鉢・甕・壺の「大」：器高 35cm、「中」：35>器高 25cm、「小」：25>器高 15cm、「袖珍」：15cm>器高。鉢・浅鉢・皿の「大」：口径 30cm、「中」：30>口径 20cm、「小」：20>口径 10cm、「袖珍」：10cm>口径。「袖珍」と呼ぶが非実用を意味していない。表3-6・9・10には斜字体で記載した。

なお、この器形差・規格差を「機能論に基づいた様式」における器種の下部概念とするような定義はしない。

なぜなら器形差・規格差に基づいて判別した同一器種において、機能が著しく異なることが容易に予想されるからである。例えば、鉢・浅鉢では規格の「大—中」は煮沸、「小の一部—袖珍」は供膳である。また、同一規格の「中」浅鉢と台付浅鉢では、浅鉢という形態に台が付加され、形態と名称上では上部・下部概念の関係にあるかにみなされるが機能は全く異なる。仮に、下部概念とする場合は細分された階層的機能を仮想しなければ整合が取れない。細分された階層的機能とは、互いに関連しながら目的別の用途を想定することである。形態差が目的別用途の違いであることが証明できない場合、形態と機能を直結させて階層的な分類すること、細分形式の消長は留保すべき仮説といえる。

本論においては、分析手法が限られていることから、器種・器形は形態の属性であり表出的属性の一部と考える。



表2 続編文初編～後北武初編の墓

番号	地域名	遺跡名	遺跡名	遺跡の時期	編者名など	発行年	書名など
1	石巻市	アザノ	葛19-22-24-26-106-110-113-301-307(1-3)+9-15-16-30-109-111-201-204-304(6)+8-11-18-20-103-108-109-203-205-23-32-202-303-土城3	F91/F92a/F92b/F93a	石巻市教育委員会	1980	
2	宮小牧市	タブコ	大塚1号墳(古P-27-29-30-36-38/1-31-39-40) 古P-2 古P-18 古P-7-8-10-11-13-14-20-21-24-25-28-33	古P1/古P2a/F92b/F92c	宮小牧市教育委員会	1981	
3		野川22	G-4-13-16/9-15 G-9/12-21 G-24	F91/F92a H11/F92b/野川 江沢太1	宮小牧市教育委員会	2002	
4	三石町	堀野1	GP-139-140-179-189-190-212	H17古墳	北海道文庫P	1983	
5		ウツクマイ	1P-25	後北武	北海道文庫P	2001	
6		末広	1P-102	後北武	千歳市教育委員会	1981	末広遺跡(上)
7			1P-31	後北武	千歳市教育委員会	1982	末広遺跡(下)
8		オサツ2	GP-4-7-8、P-5	後北武	北海道文庫P	1990	
9	鹿沼市	松木8	葛17-36-39-48-60-67-71-78-80-114-111-132-190-202-216-218-241-247-264-280-309-314-316-385-395-602-630土城基	後北武	鹿沼市教育委員会	1981	
10		浅瀬6	P-7-28	後北武	鹿沼市教育委員会	2002	
11	江沼市	坂ヶ岡	葛109 葛112	後北武 後北武	江沼市教育委員会	1980	
12		町村農場1	P-44	H17	江沼市教育委員会	1994	町村農場1(3)
13		町村農場2	P-110-111 P-110-128-140 P-54-55-79	江沢太2 後北武 後北武	江沼市教育委員会	1996	町村農場2(2)
14			P-35	江沢太2	江沼市教育委員会	1994	町村農場2(4)
15		高砂	P-358	H17	江沼市教育委員会	1989	高砂(3)
16			P-478-482	H17古墳	江沼市教育委員会	1990	高砂(8)
17			P-629-663/630	H17古墳/H17	江沼市教育委員会	1991	高砂(10)
18			P-679-689	H17	江沼市教育委員会	1991	高砂(9)
19			P-914	H17古墳	江沼市教育委員会	1992	高砂(10)
20			P-1195	H17家阿	江沼市教育委員会	1989	高砂(15)
21			P-1231/1290	H17古墳/H17家阿	江沼市教育委員会	1989	高砂(16)
22		元江別1	葛1-43/7-13-16-21-34-38-46-62-66-67-68-73/19-48-53-56-58-72/18 葛1-47/18-44-45-51-58-61-64	F91/F92a/F92b/F93a H11/F92b家阿	江沼市教育委員会	1991	元江別遺跡群
23			P-77	江沢太1	江沼市教育委員会	1988	元江別1
24		元江別10	P-33	後北武	江沼市教育委員会	1998	
25		印堂平内葬	P-6 P-9 P-7	H17古墳 江沢太1 後北武	江沼市教育委員会	1981	元江別遺跡群
26			葛1-18/10-23-24 葛5-6	F92a/F92b 江沢太1	江沼市教育委員会	1983	豊平町II
27			土城97/91 土城126 土城105-102 土城28	F92b/F93a H17家阿 江沢太2 後北武	江沼市教育委員会	1984	豊平町III
28			葛135-142/132-156-174-188 葛133-166-184-185-168-168-171-175-176-179-180-182-183-184-185-187-188 葛137	江沢太1/江沢太2 後北武 後北武	江沼市教育委員会	1985	豊平町IV
29			土城128-7 土城130-1	F92b 江沢太2	江沼市教育委員会	1986	豊平町V
30		七丁目沢4	P-48	H17	江沼市教育委員会	1989	七丁目沢4(2)
31		七丁目沢6	P-138-167	H17古墳	江沼市教育委員会	1998	七丁目沢6(3)
32		大塚21	P-44	後北武	江沼市教育委員会	1988	大塚21(2)
33		大塚3	P-76-122-129/128	H17古墳/H17家阿	江沼市教育委員会	1988	大塚3(8)
34			P-190/199	H11/F92b家阿	江沼市教育委員会	1999	大塚3(7)
35	札幌市	S153	葛194号(*) 葛126号(*) 葛200-280-421-480-528-539-601-616-673-749-781号(*)	F92b 後北武 後北武	札幌市教育委員会	1976	
36		T361	葛19-42-97-100-114号(*)	後北武	札幌市教育委員会	1987	
37		B354	葛19号(*)	後北武	札幌市教育委員会	1992	
38		N159	葛1-19号(*)	後北武	札幌市教育委員会	1977	
39		N295	葛13-36号(*) 葛28/1-27号(*)	F92b 江沢太1/江沢太2	札幌市教育委員会	1987	
40	石狩市	紅蓮山33	7号塚穴	H17	石狩市教育委員会	1975	
41			3号塚穴 GP-42/1-52-54/3-5-22-26-27-37-38-43-50-53/58 GP-67/2-42-56-63 GP-18/65-68	F91/F92a/F92b/F93a H11/F92b家阿 江沢太1/江沢太2	石狩市教育委員会	1981	
42		ワッカオイ-A	葛1-3-5土城基	後北武	石狩市教育委員会	1976	
43		ワッカオイ-B	葛1-2-3-9-11-14-15-16-17-20土城基-5号土城	後北武	石狩市教育委員会	1975	
44			葛1-23-24-25-26-27-28-29-30-32-33土城基	後北武	石狩市教育委員会	1977	
45	厚岸町	滝原4	P-5	後北武	北海道文庫P	1998	
46		滝原安井	P-45	後北武(下-5)	北海道文庫P	1999	
47	小樽市	テプタシナイ	3-8-8	後北武	小樽市教育委員会	1992	
48		館屋沢	P-284-286-295-488-484-687-688-674-10-38C-371-38A-388-484-444-648-674-11-371-38A-388-389-398-484-614-618-624-65C-668-67C-684-12-34C-371-38A-388-389-489-416-418-484-485-13-39F-48A-688-688C	後北武	小樽市教育委員会	1991	大川I
49	赤松町	大川	GP-186/27-82-120-123-175-388/28-72-75-100-107-109-116-125-425/21-183-343-373-375-378-400-422-457-489-548-590 GP-218/790 GP-318/389-179-200 GP-142 GP-7-110 GP-678-686-683/620-711-720-729-856-941/623-948 GP-944 GP-945/916 GP-664/622	F91/F92a/F92b/F93a H11/F92b家阿 江沢太1/江沢太2 後北武 後北武 F92a/F92b/F93a F91/F92a/F93a H17家阿 江沢太1 後北武 後北武	赤松町教育委員会	2000	大川II
50			GP-44-17(遺蹟地品)/30-32-53/18-59 P-68 P-6(遺蹟地品) P-124(遺蹟地品)/77-83(遺蹟地品)/122(遺蹟地品)/99-128-10(遺蹟地品) P-34/100-118(遺蹟地品) P-96 P-63 P-88-93 P-94	後北武 後北武 後北武 後北武 後北武 後北武	赤松町教育委員会	2001	大川IV
51			GP-42-87-91-348/78-79-89-105-131-133/118-3408-372-448-654-693	F92a/F92b/F93a	赤松町教育委員会	2001	大川IV
52			P-44-17(遺蹟地品)/30-32-53/18-59 P-68 P-6(遺蹟地品) P-124(遺蹟地品)/77-83(遺蹟地品)/122(遺蹟地品)/99-128-10(遺蹟地品) P-34/100-118(遺蹟地品) P-96 P-63 P-88-93 P-94	F91/F92a/F93a H17家阿 江沢太1 後北武 後北武 後北武	赤松町教育委員会	2001	大川I
53			P-6(遺蹟地品) P-124(遺蹟地品)/77-83(遺蹟地品)/122(遺蹟地品)/99-128-10(遺蹟地品) P-34/100-118(遺蹟地品) P-96 P-63 P-88-93 P-94	F91/F92a/F92b H17古墳/H17家阿 江沢太1 後北武 後北武 後北武	赤松町教育委員会	2002	大川I









品名	品名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	付属品の有無		別添品の位置		備考
													付属品の有無	別添品の位置			
品名	品名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	付属品の有無	別添品の位置	備考	
品名	品名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	付属品の有無	別添品の位置	備考	
品名	品名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	通商名	付属品の有無	別添品の位置	備考	

## (4) 続縄文初頭～後北式期の解説

## a H37丘珠期(図1-1~22、図4-64~79、表1~3)

この期は口頸部の施文方法・文様から3期に細分する。大川遺跡JH-4を基準資料とする「古」、H37遺跡丘珠地点第1号竪穴・第2号竪穴状遺構・遺物集中Dを基準資料とする「中」、H37遺跡丘珠地点第1号竪穴状遺構・H37遺跡南群を基準資料とする「新」。

成形 粘土紐輪積み。粘土紐接合面はほとんどが外傾である。

器形・組成 深鉢の口頸部が内屈する形版(11・15)は晩期後葉～H37期「新」(40)までであり、内屈する頸部の上へ外屈する口縁が付く形版(20)は「新」～H37期「古」(26)までである。「古」、「中」の浅鉢(64~66)は体部が内彎しながら立ち上がり、「新」の浅鉢(67~71)は体部が直線的に立ち上がる。深鉢・鉢・浅鉢の底部は凸平底・器壁立ち上がり張り出さない平底。器種・規格は、深鉢・大一袖珍、鉢・小、浅鉢・中一袖珍、壺・中一袖珍、棺用の壺大、舟形鉢小一袖珍が確認できる。

胴部の縄文 胴部に施される縄文原形はRLが多い。回転方向は斜位縦走がほとんどである。キウス5遺跡 層の「古」には0段多条縄文がある。この期以降に0段多条縄文は増加してゆく。

描順規則 「古」、「中」の有文深鉢は縄文の上から施文する直描き文が多く、「新」は縄文をナデ消して描く直描き文が多い。有文鉢・浅鉢は縄文をナデ消して描く直描き文が深鉢よりも多い。

口頸部の文様 主文様には平行線文のほかに、変形工字文、波状工字文、矢羽文、弧沈線文(交互・対向)、三角形沈線文(交互・並列)、分断文様がなくなるので対向三角文のかわりに並列菱形沈線がある。「新」以降に主文様に縄線文が多用される。

「古」では多段化した変形工字文(1)とそれが在地化した文様が主体を占める。対向弧線文・並列菱形文(3・5・6)は並列の弧線文・三角形沈線文の多段化したものである。「中」は引き続き多段がみられるが、(7)のように多段分割が痕跡的(横位の列点)であるものもあり、並列菱形文のくずれ(10)、対向弧線文のくずれ(11)もある。「新」では多段が融合して単段(12~16)となる。並列菱形文(18)、対向弧線文(17)には文様帯の圧縮による変形が見られる。矢羽根文はなくなる。

## b H37期(図2-23~42、図4-80~90、表1~3)

基準資料が少ない時期である。この期は口頸部の施文・文様・底部形態から2期に細分する。H37遺跡中央3・北群のB・C・D・E、中央2群のD、N30第2号竪穴住居の斜位横走縄文を基準資料とする「古」、H37遺跡中央1・北群のC、ユカンボシE7遺跡 層の斜位横走縄文を基準資料とする「新」。

成形 粘土紐輪積み。粘土紐接合面はほとんどが外傾である。

器形・組成 深鉢の口頸部が内屈する形態、内屈する頸部の上へ外屈する口縁が付く形態がある。「古」、「中」の浅鉢(64~66)と「新」の浅鉢(67~71)は体部が直線的に立ち上がる。深鉢・鉢・浅鉢の底部は凸平底・器壁立ち上がり張り出さない平底は「古」、外底縁が横に張り出す平底、斜め下に張り出す高台状の凹底は「新」。器種・規格は、深鉢・大一袖珍、鉢・中一袖珍、浅鉢・大一袖珍、壺・小、台付深鉢小が確認できる。

胴部の縄文 胴部に施される縄文原形はRLが多く、0段多条縄文は前時期より増加する。回転方向は斜位縦走が多いのは「古」、斜位横走縄文が「新」に急増する。

描順規則 「古」の有文深鉢は縄文の上から施文する直描き文もあるが、「新」は縄文をナデ消して描く直描き文がほとんどである。有文鉢・浅鉢は縄文をナデ消して描く直描き文がほとんどである。

口頸部の文様 主文様には平行線文のほかに、変形工字文、波状工字文、弧沈線文、三角形文、並列菱形文がある。主文様は縄線によってほとんどが表現される。図示はしていないが大川遺跡FP-14(2002)から波状工字文の深鉢・大「古」にあたるものが出土している。この波状工字文は折り返し部分が高く、丸く収まる波頭が右傾している。折り返し部分が短く波頭が尖る下添山式よりは古相を示す。

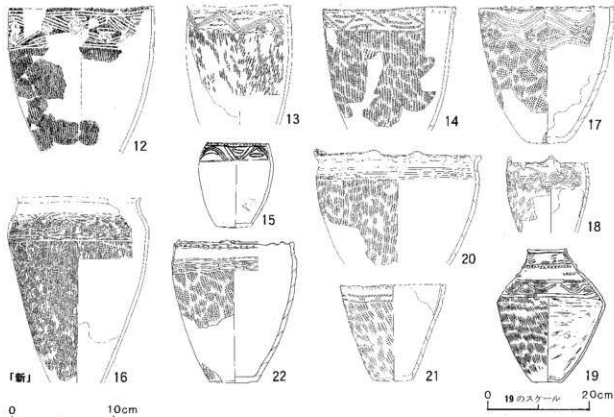
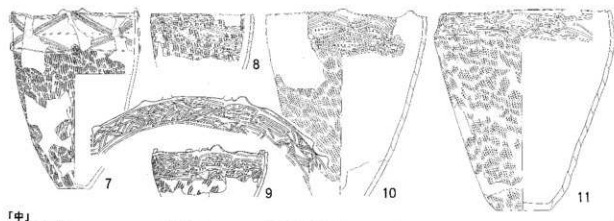
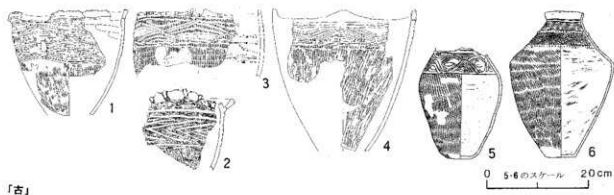
「古」ではH37丘珠期「新」に起こった単段化が引き続きみられる。交点に粘土粒がつかない変形工字文(24)、結節沈線を模したような文様(27・28)、並列三角形文に似た並列菱形文(23・30)、高さの低い三角形文(31)がある。「新」では単段化した文様が縮減したことにより上下の区画文が失われるものがある(35・36・38)。高さの低い三角形文のくずれと思われる弧線文(42)がある。

## c H37栄町期(図3-43~63、図4-91~102、表1~3)

この期は口頸部の施文方法・文様・形態から2期に細分する。H37遺跡栄町地点第1号竪穴、江別太7文化層を基準資料とする「古」、H37栄町遺跡包含層の帯縄文が多用されるもの、美々2遺跡 黒層の帯縄文が多用されるもの、江別太6文化層、N156第1号竪穴を基準資料とする「新」。

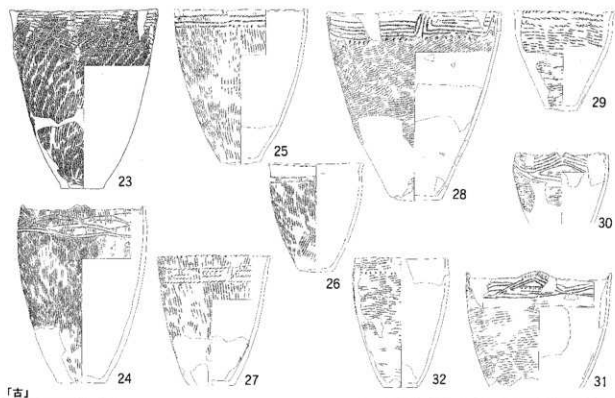
成形 粘土紐輪積み。深鉢の粘土紐接合面はほとんどが外傾であるが、壺(63)や頸部がややくびれ

3 道央部における続縄文土器の編年

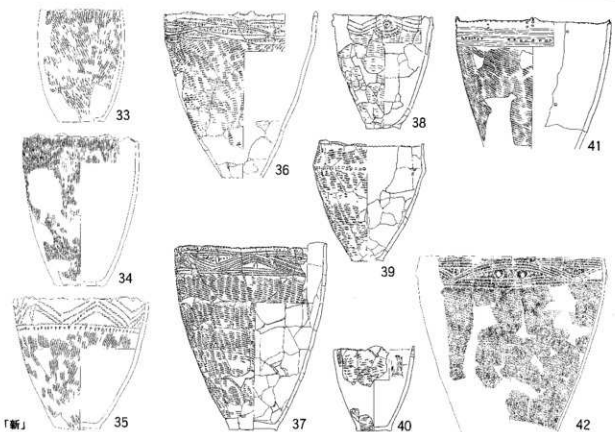


1-2-4-48(Ⅱ-4), 3-48(包含層), 5-4(SP-41), 6-4(SP-24), 7-72(包含層), 8-11:89(1号住), 9:89(2号住状), 10:89(集中D), 12-69(包含層), 13-91(南群), 14-63(包含層), 15-4(包含層), 16:91(北群), 17:89(集中A), 18-20-21:89(1号住状), 22:80(集中F), 19-4(SP-26)

図1 H37丘珠期



「古」



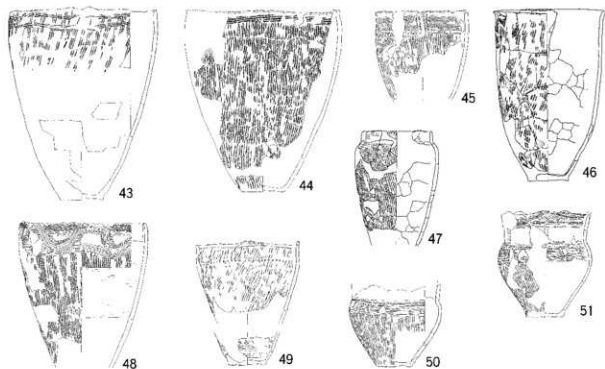
「新」

0 10cm

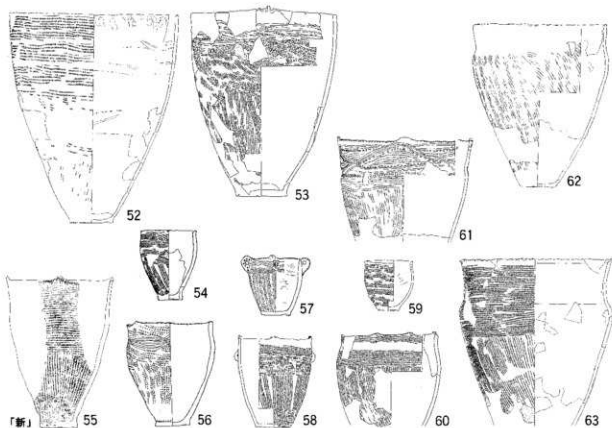
23: 65 (P-5), 24~27: 29: 91 (中央3群), 28-30-31-35-93 (包含層), 32: 91 (中央2群), 33: 91 (中央1群), 34: 91 (北群), 36~40: 75 (包含層), 41: 88 (包含層), 42: 69 (包含層)

図2 H317期

3 道央部における続縄文土器の編年



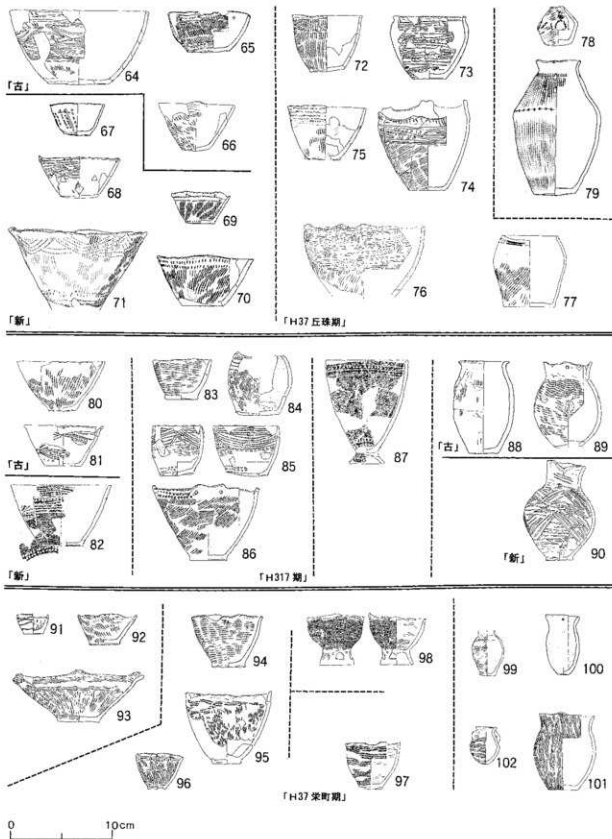
「古」



0 10cm

43・51・52・62・90(包含層), 44:91(北群), 45・60:93(包含層), 46・47:75(包含層), 48:91(中央3群), 49・50:90(L号群), 53・60:93(包含層), 54・55・63・65(包含層), 56:21(P-1290), 57:22(墓44), 58・59:90(GP-944)

図3 H37栄町期



64-89(包含期), 65-78:19(P-914), 66:89(2号住状), 67-79:17(P-693), 68:93(包含期), 69~71-75:45(P-5), 72:89(5号住状), 73:63(包含期), 76:89(4号住状), 77-4(SP-228), 80-91(中央3期), 81:91(北群), 82-87:69(包含期), 83:3(6-9), 84-89-93-95-96:93(包含期), 85-90-93(3号聚穴), 86:41(GP-57), 88-34(SP-106), 91-99-100-102:21(P-1290), 92-94:3(G-4), 97:16(P-128), 98:50(GP-944), 101:49(GP-390)

図4 H37丘珠期～H37栄町期

る形態(55)は内傾接合であり、甕(62)内傾接合の可能性もある。甕形やそれに似る形態には、恵山式と同じ粘土紐接合が行われる。

器形・組成「古」には縄線を付した甕形があり、二枚橋式・アヨロ1式の影響が僅かに現れている。ただし器形・文様構成が揃って影響を受けた例はない。(50・51)は搬入品である。「新」には影響が浸透した甕形(62・63)や頸部がややくびれる形態(55・56・61)が出現する。また「新」には道東地方の影響により耳付深鉢・耳付壺も現れる。深鉢・鉢・浅鉢の底部は、斜め下に張り出す高台状の凹底は「古」。外底部と胴部の接点がくびれて開く高台になるのは「新」。器種・規格は、深鉢または甕・大一耳付・鉢・小、浅鉢・中一袖珍、壺・中一袖珍、台付鉢・小、耳付深鉢・小一袖珍、片口深鉢・袖珍、耳付壺・袖珍が確認できる。

胴部の縄文 胴部に施される縄文原形はRLが多く、0段多糸縄文がほとんどとなる。胴部地の縄文の回転方向に斜位縦走が多いのは「古」、縦走帯縄文が多いのは「新」。道央部における帯縄文の最古例はH37栄町期の「古」にあたる江別太遺跡7文化層であり、礼文華・小幌・南有珠7遺跡の出土例は時期を確定できる供伴関係が不詳であるため江別太遺跡例より古いといえない。また、帯縄文は0段多糸RLがほとんどであることや道央においてはH37丘珠期の「古」には0段多糸RL斜位縦走があることから、帯縄文の祖形は道央の0段多糸RL斜位縦走である可能性が高い。

描順規則 「古」の有文深鉢は縄文をナデ消して描く直描き文で、縦位帯縄文を下地とし横位帯縄文を口縁部に施す。「新」には文様帯が胴部上半に拡張し始める。「新」の有文深鉢は口頸部の帯縄文を下地とした直描き文。有文鉢・浅鉢は帯縄文を下地とするもの、縄文をナデ消して描く直描き文がある。

口頸部の文様 主文様には平行線文のほかに、変形工字文、並列菱形文がある。主文様は沈線によって表現され、縄線文は専ら平行線文に用いられる。

「古」では横位帯縄文は口縁部に限られて施すもの(43~45・47)が多い。胴部が帯縄文となったもの(46・48)も出現する。「新」では横位帯縄文が口頸部に拡張し(52・54・55)、胴部下半は縦位帯縄文が一般的となる。「新」に変形工字文(61)と並列菱形文(56)があることから変形工字文・並列菱形文はH37栄町期を通じて存在していたと推定される。

#### d 江別太1式期(図5・1~17、表1~3)

この期は江別太遺跡における層序、口頸部の施文方法・文様から前後に細分可能であるが、極めて類似しているのてひとつの型式と考える。江別太1式の定義よりも古相を示す(1~4)は「古<sub>中</sub>」基準資料は江別太5文化層。江別太4文化層を基準資料とする江別太1式が「新<sub>中</sub>(5~17)・5・4文化層ともアヨロ2b式併行である。紅葉山33号式は江別太1式期に含まれる。

成形 粘土紐輪積み。深鉢の粘土紐接合面はほとんどが外傾である。甕形には前代に内傾接合が出現しているためその接合の可能性が高い。

器形・組成 深鉢の多くは倒鐘形で、甕形に近いものもある。深鉢・大一袖珍、鉢・袖珍(17)、浅鉢・袖珍、片口深鉢・袖珍が確認できる。組成はアヨロ2b式(類恵山も含む)の組成に在地系深鉢が複合した内容である。

胴部の縄文 胴部上半・下半には0段多糸RLの横位・縦位帯縄文が殆んどで、斜位縦走縄文もある。

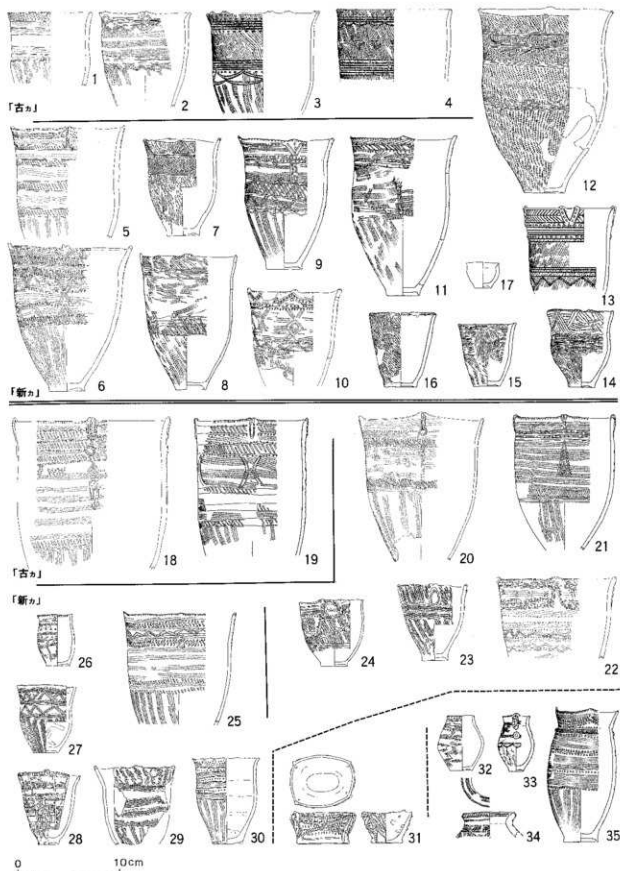
描順規則 有文深鉢は胴部下半に縦位帯縄文を施し、その後口頸部に横位帯縄文を下地とした直描き文を施す。また、斜位縦走縄文を下地として直描き文を施すものもある。この時期は文様帯の拡張が定着する。「新<sub>中</sub>」では口縁部突起下に縦位に配置される文様が登場する。

胴部上半の文様 主文様には斜線・山形がある。主文様は沈線や押し引きによる横位線によって区画される。「古<sub>中</sub>」ではくずれて弧線化した変形工字文が胴部上下の区画文としてあり(2・3)。「新<sub>中</sub>」では連続山形文に置き換わる(9・10・12~14)。また、沈線間が幅4mm位のところを刺突で埋める文様(「沈線間刺突文」と呼ぶ)が出現する(9~11・13~14)。

#### e 江別太2式期(図5・18~35、表1~3)

この期は口頸部の施文方法・文様から前後に細分可能であるが、江別太遺跡では同一文化層から出土していること、文様が極めて類似していることからひとつの型式と考える。江別太1式と2式の文様構成を持つもの(18~19)が「古<sub>中</sub>」。「新<sub>中</sub>」には、江別太3文化層(アヨロ3a式併行)を基準資料とする江別太2式(20~24)、口縁部突起下に縦位貼付文がなく帯縄文を沈線・列点で区画する(25~30・35)、アヨロ3a式と併行する(25・27~30)後北A式と併行する(35)がある。

成形 粘土紐輪積み。粘土紐接合面は外傾か内傾かを確認していないが、後北A式が内傾接合であることから深鉢にも内傾接合が行われている可能性がある。



1・2・5・6・18・20・22・31(包含層), 3・40(p13), 4・13・40(包含層), 7:49(GP-518), 8・17:29(9号住), 9:28(墓142), 10・94(包含層), 11:28(墓132), 12・99(1号住), 14・15・39(25号ピット), 16:39(27号ピット), 19:27(包含層), 21・25:25(1号住), 23:49(GP-88), 24:41(GP-46), 26・32:41(GP-65), 27・28・31:41(GP-916), 29:80(GP-623), 30:52(GP-89), 33・35:28(墓133), 34:13(土坑110)

図5 江別太1・2式



器形・組成 深鉢は倒錐形が多く襷形に近いものもある。深鉢・大一袖珍・鉢・袖珍、浅鉢・袖珍(31)壺・中と袖珍が確認できる。組成はこれらとアヨロ3a式(類恵山も含む)の器種が複合した内容である。

胴部の縄文 胴部上半には0段多糸RL横位帯縄文、胴部下半にはその縦位がほとんどとなる。

描順規則 有文深鉢は胴部下半に縦位帯縄文、口頸部に横位帯縄文を下地とした直書き文を施す。口縁部突起下に縦位に配置される文様は貼付文(「口縁部縦位貼付文」と呼ぶ)となる。4箇所の突起が口縁部縦位貼付文の基点となり、この貼付文が主文様の縦基線となる。

帯縄文を沈線で区画することはアヨロ3a式併行に通用である。道南・七飯町大中山13遺跡(北海道埋蔵文化財センター 1995)においては南川 群(アヨロ3a式)襷と帯縄文を沈線で区画する土器が併存している。道央においてはアヨロ2b式併行である江別太遺跡5文化層から出土(1)し、江別太2式期まで継続していることから、帯縄文の沈線区画は道央が初源と考えられる。

(31)と(35)の沈線間刺突文が貼付文(貼付文の両脇を沈線が握り込むので断面形が擬縄貼付文とは異なる)している。次期以降に盛行する擬縄貼付文の祖形と考えてよい。ただし、両脇の沈線文は後北B式にみられる擬縄貼付文脇の調整と異なる。なお、(33)と(35)は後北A式初期頭の旧豊平河畔・墓133出土だが、これらは江別太2式最新相を示す。

胴部上半の文様 主文様には平行線文のほかに、変形工字文、斜線・山形文がある。文様は沈線によって描かれ、縄線も少数ある。

「古」には、沈線や押し引きによる区画(江別太1式の文様構成)と口縁部縦位擬縄貼付文(江別太2式の文様構成)が組み合ったもの(18・19)がある。「新」には、口縁部縦位擬縄貼付文があって列点で斜線文・帯縄文を区画するもの(20・21)と沈線で帯縄文を区画するもの(23)がある。

口縁部縦位擬縄貼付文をもたない(25-30・35)なかには、アヨロ3a式に近似するものもある(27・29)。

f 類・非恵山式土器群: H37栄町期〜後北B式期併行(図6-1~40、表4・5)

図6は、副葬土器の主体「恵山式が主体」とは、坑底資料が恵山式が過半を占める場合か、総数で恵山式が過半を占める場合をいうが恵山式である事例に、併存した在地系土器(類・非恵山)を図示した。成形・調整を含めて「類・非」を分別しなければならないが、器形・描順規則・文様の分析から仮に「類・非」を分別する。類恵山aとは器形が恵山式であり描順規則・文様がそうでないもの、類恵山bとは描順規則・文様が恵山式で器形がそうでないもの。非恵山とは器形・描順規則・文様が該当しないもの。

アヨロ1式はH37栄町期「古」併行、アヨロ2a式はH37栄町期「新」併行、アヨロ2b式は江別太1式併行、アヨロ3a式は江別太2式・後北A式併行、アヨロ3b式は後北B式併行である。

アヨロ1式併行 類恵山α(1・2)は突起下に孔があり、縄線文が施される。孔・縄線文は在地的要素である。(1)の横位縄文は同時期の在地系に通用である。(2)は底部が口縁部と平行していない。これは在地系深鉢に通用であり恵山式の成形ではない可能性が高い。類恵山β(6)は舟形鉢・小で結節の山形文である。(3〜5)は在地系、深鉢形で縄線文や横位縄文が施される。

アヨロ2a式併行 類恵山α(7〜9)は縄線文が施される。(8)には片孔が付く。類恵山β(10・15〜17)は恵山式の文様が施され、在地的要素の孔もある。(9)には片孔が付く。(10)の口縁部には粘土粒が付く。(11〜14)は在地系、深鉢・鉢形で帯縄文(帯縄文は道央起源)や縄線文が施される。

アヨロ2b式併行 類恵山α(18)は縄線文がある。(19)の口縁部貼付帯は恵山式にない要素である。類恵山β(20〜22・27)は恵山式の文様がある。(27)の恵山式の沈線文と江別太2式の口縁部縦位貼付文と下田ノ沢式の円形貼付文がつく。(23〜26)は在地系。(24〜26)には孔がある。

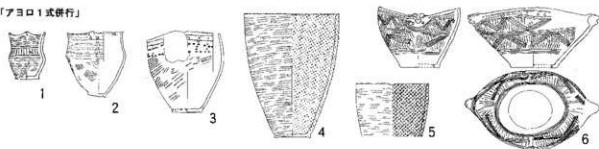
アヨロ3a・b式併行 類恵山α(30)は縄線文がある。類恵山β(28・29・31〜36)は恵山式の文様が施される。(31〜34)は壺形・深鉢形で、恵山式の文様構成と下田ノ沢式から影響を受けた縦耳がつく。(37・38)は後北A式。(39)は後北B式である。

g 後北A式期(図7-1~29、表1~4)

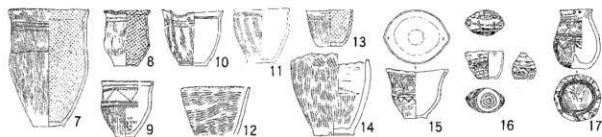
以前に細分案(1998)を示した。改めて今回、道央部の資料を検討した結果、施文方法・文様についての細分属性<sub>1</sub>は部分的に改定しなければならないという認識に至った。突起と口縁部縦位擬縄貼付文との間隔の変化(突起下の口唇部直下 突起下の横位擬縄貼付帯の下段) 横環擬縄貼付文の増加、菱形擬縄貼付文の出現は妥当である。いっぽう、帯縄文の間隔・刺突文のあり方は漸移的非変化するの細分属性としては好適でない。

江別太2式の文様構成を持つものが「古」<sub>1</sub>、細分案(1998)の「a」にあたる。後北A式の文様構成を持ち、突起下の口唇部直下に口縁部縦位擬縄貼付文があるものが「古」<sub>2</sub>、細分案(1998)の「b」<sub>1</sub>にあたる。後北A式の文様構成を持ち、突起下の横位擬縄貼付文下段やそれに重複して口縁部縦位擬縄貼付文があるの

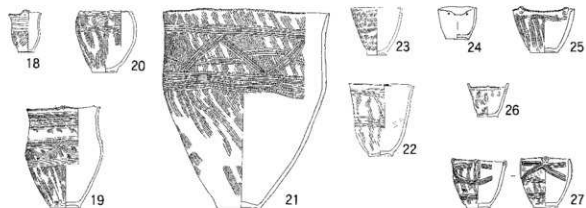
「アヨロ1式併行」



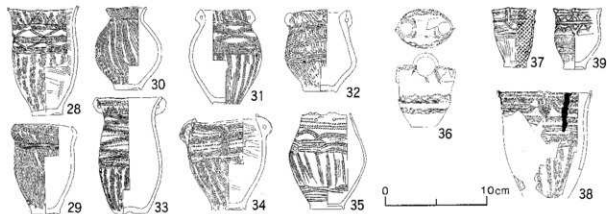
「アヨロ2a式併行」



「アヨロ2b式併行」



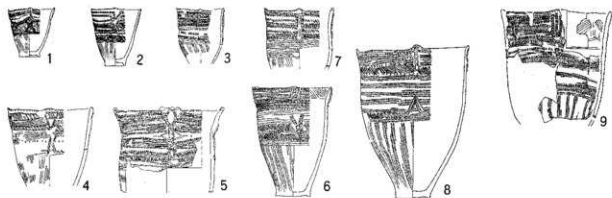
「アヨロ3ab式併行」



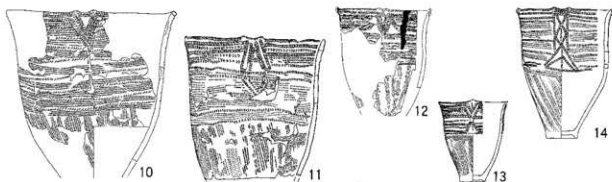
1:3(GP-4), 2:41(GP-56), 3:41(GP-62), 4:1(墓19), 5:1(墓30), 6:22(墓43), 7:1(墓15), 8:1(墓204), 9:22(墓16), 10:53(P-126), 11:2(GP-30), 12:3(GP-15), 13:3(墓109), 14:3(GP-5), 15:22(墓13), 16:52(P-30), 17:22(墓13), 18:41(GP-3), 19:11(GP-22), 20:41(GP-38), 21:22(墓19), 22:41(GP-27), 23:2(GP-17), 24:22(墓56), 25:23(墓72), 26-27:22(墓19), 28-49(GP-378), 29-49(GP-422), 30-49(GP-546), 31-49(GP-400), 32-49(GP-372), 33-49(GP-163), 34:50(GP-623), 35:41(GP-59), 36:49(GP-21), 37:1(墓201), 38-49(GP-373), 39:1(墓105)

図6 恵山式と併行した道央在地系土器

3 通央部における縄文土器の編年



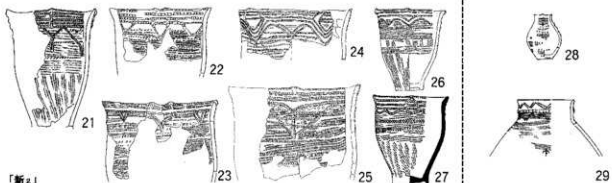
「古1」



「古2」



「新1」



1-2:28(墓133), 3:27(8号住), 4:29(包含層), 5-49(包含層), 6:25(P-7), 7:25(1号住), 8:13(P-128), 9:8(P-5), 10-16:23:74(包含層), 11:8(GP-8), 12-49(GP-373), 13:28(墓175), 14-27(13号住), 15-8(GP-2), 17-19:8(GP-5), 18:27(20号住), 20-11(墓109), 21-3(包含層), 22:59(包含層), 24:47(包含層), 25:97(包含層), 26:11(墓112), 27:82(埴手,山Ⅲ-1号), 28:28(墓165), 29:28(墓178)

図7 後北A式

が「新<sub>1</sub>」(細分案 1998)の「d.e.」にあたる。後北A式の文様構成を持ち、口縁部擬縄貼付文は突起下の横位擬縄貼付文下段と突起間にあるのが「新<sub>1</sub>」。「古<sub>1</sub>」「新<sub>1</sub>」は突起を基線とする口縁部擬縄貼付文が4ヶ所付される。「新<sub>1</sub>」は4ヶ所の間を充填して計8ヶ所に擬縄貼付文が割付られる。

なお、(15)と(26・27)は後北B式中期初頭の墓出土である。これらは後北A式最新相を示す。また、このことから「新<sub>1</sub>」と「新<sub>2</sub>」は近接した時間に起こった変化と考えられる。「古<sub>1</sub>」は江別太2式の文様構成をもつことから江別太2式と近接した前後関係と考えてよい。

成形 粘土紐輪積み。粘土紐接合面は内傾である。

器形・組成 深鉢はほとんどが倒鐘形で、頸部がくびれないものが少数ある(1・2・4)。規格は、深鉢・大一袖珍、壺・中(30)と袖珍(29)が確認できる。この期の石狩低地帯からはアヨ口3a式が退潮している。深鉢・壺以外の器種がアヨ口3a式である可能性はない。未見の可能性が高い。

胴部の縄文 胴部上半には0段多糸RL横位帯縄文、胴部下半はその縦位帯縄文が施される。

描順規則 有文深鉢は胴部下半に縦位帯縄文を施し、後に口頸部に横位帯縄文を下地とした直描き文・擬縄貼付文を施す。口縁部擬縄貼付文は「古<sub>1</sub>」以降に主文様となる。

胴部上半の文様 主文様には沈線文と擬縄貼付文がある。

「古<sub>1</sub>」には、斜線・山形沈線文(2・4・7~9)や押し引き文(3)がある。斜線文は刺突文によって区画される。(1・6)は沈線間刺突文が施される。(5)は帯縄文が刺突文と沈線に区画されている。「古<sub>1</sub>」には、角度の開かないV字・逆V字擬縄貼付文が口縁部直下に施される(10~14)。「新<sub>1</sub>」には、角度の開いたV字・文の詰まった菱形擬縄貼付文が本数の増加した口縁部横位擬縄貼付文の下段やそれに重複して施される(15~20)。「新<sub>2</sub>」には、4箇所(25)と8箇所(28)の擬縄貼付文をもつ(21~24・26~29)ものがある。また8箇所(22)の擬縄貼付文をもつものには貼付文の大きさ(22)を展開させるものがある(26・27)。貼付文の交点に小円形の擬縄貼付文があるものもある(22)。

h 後北B式期(図7-1~44、表1・2・4)

この期は供伴関係と施文方法・文様から3期に細分する。後北B式の描順規則は縦方向の割付において後北A式を踏襲する。それは貼付文による4または8単元の割付けである。後北A式の描順規則と異なるのは、胴部上半に文様帯の重畳(横方向の分割)が起こり、胴部下半は縦位擬縄貼付文が底部付近まで垂下して文様帯となるが、胴部上半の主文様が下半に伸張するわけではない。

突起下のV字・逆V字擬縄貼付文を横方向に分割の単元ととらえる(変形はV字文・逆V字が合わされたものと考え2単元、台形はV字・逆V字の頂部が欠失したものと1単元と考える)と1~7があり、この期を通じて多いのは2~3単元である。横1単元は「古<sub>1</sub>」のみに存在する。

後北A式の文様要素を持つもち、横1単元が多く存在するのが「古<sub>1</sub>」。オサツ2遺跡・GP-1、坊主山遺跡・4号墓が基準資料。V字・逆V字擬縄貼付文が縮小変形して台形が生れる。V字・逆V字擬縄貼付文の変形は、重畳した横単元が上下方向に圧縮した結果として生じたものと考えられる。横2単元以上が多く存在するのが「中」。坊主山遺跡・2号墓が基準資料。「新<sub>1</sub>」では、さらに横単元の圧縮がみられV字・逆V字擬縄貼付文が紡錘形の結節部となるものが出現する。横2単元以上が多く存在する。栄浜1遺跡P-20が基準資料。

なお、(1・3・6・11・40・41)「古<sub>1</sub>」は、後北A式「新<sub>1</sub>・新<sub>2</sub>」を含む墓・住居出土である。後北A式の文様要素をもつことから近接した前後関係である。また、(5)と(27)は同じ墓から出土している。「古<sub>1</sub>」と「中」は近接した時間に起こった変化と考えられる。

成形 粘土紐輪積み。粘土紐接合面は内傾である。

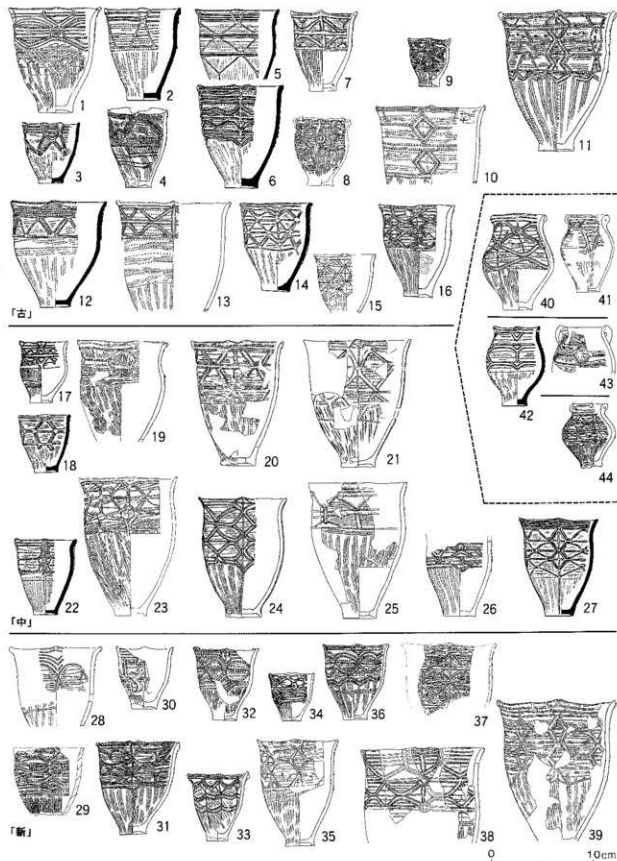
器形・組成 深鉢はほとんどが倒鐘形で、頸部がくびれないものが少数ある。壺には縦耳が付いたものも多くあるようだ。深鉢・中一袖珍、壺・中一袖珍が確認できる。この期の石狩低地帯からはアヨ口3b式が退潮している。深鉢・壺以外の器種がアヨ口3b式である可能性はない。未見の可能性が高い。

胴部の縄文 胴部上半には0段多糸RL横位帯縄文、胴部下半はその縦位帯縄文がある。

描順規則 有文深鉢は胴部下半に縦位帯縄文を施し、後に口頸部に横位帯縄文を下地とした直描き文・擬縄貼付文を施す。直描き文の沈線文は「古<sub>1</sub>」までである。

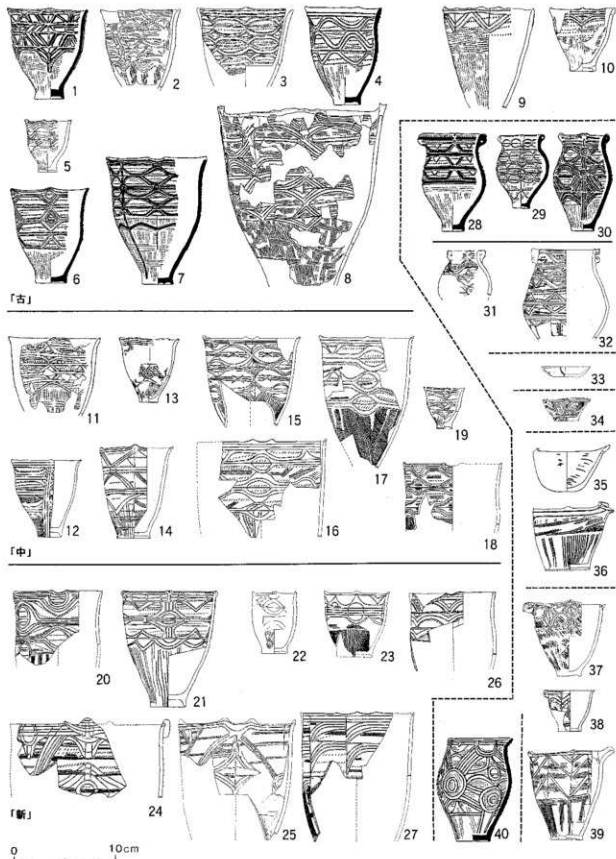
胴部上半の文様 主文様には沈線文と擬縄貼付文がある。

「古<sub>1</sub>」は、押し引き沈線・山形沈線文(1・10・11)がある。縦4単元(1~11・40・41)8単元(1~4)である。横1単元(1~4・12・41)2単元(5~8・13)3単元(9・14・40)4単元(10)5単元(11・15)6単元(16)である。横位擬縄貼付文は1本が多く、2本一組もある。



1-7:11(高112), 2-5:82(坊主山Ⅷ-14号), 3:82(坊主山Ⅷ-1号), 4:8(GP-3), 6:82(坊主山Ⅷ-4号), 8-64(包含層), 9:8(GP-1), 10-13-15-28:2(包含層), 11:8(GP-2), 12-27: 82(坊主山Ⅷ-14号), 14:82(及川マツツツ), 16:8(GP-1), 17:11(高106), 18-22: 82(坊主山Ⅷ-2号), 19-39(包含層), 20-3(6号住), 21-30:55(包含層), 23:49(包含層), 24:2(GP-2), 25-74(包含層), 26:25(2号住), 29-37-48(包含層), 31-33-36:栄浜1(P-20), 32:89(包含層), 34:84(包含層), 35:61(包含層), 38:74(P-28), 39:3(5号住)

図8 後北B式



1:82(瓦川コレクション), 2:59(包含層), 3:87(包含層), 4:82(坊主山墳-2号), 5:2(GP-18), 6:82(坊主山V-1号), 7:82(後藤遺跡), 8:54(包含層), 9:2(GP-18), 10:野田遺2(包含層), 11:61(包含層), 12-15~18-23-32~34-36-38:若月(土坑24), 13-19-31:8401-2), 14:若月(土坑26), 20-24-26-27:若月(土坑98), 21:若月(土坑82), 22:2(包含層), 25:若月(土坑39), 28-29:82(成川コレクション), 30:82(坊主山IV-4), 35:若月(土坑23), 37:常呂南1(ビット46), 39:城阜第二(2号壘穴・南ビットA)

図8 後北C式

「中」の上下圧縮は軽度であり、変形V字・逆V字・台形擬縄貼付文の上下は密着しない。縦4単元は17-24・42・43)、縦8単元は25-27)、横2単元は17-19)、横3単元は20・21・42・43)、横4単元は22・23)、横5単元は30)、横6単元は24)である。横位擬縄貼付文は2本一組が多くなる。

「新」では、「中」より重度に圧縮され、横分割の基線である横位擬縄貼付文の省略も見られる(28・33・34・36)。V字・逆V字擬縄貼付文が独立した文様ではなく、弧線・紡錘形の結節になるものもある(28・30・32・33・34・36)。(31-33は道南地方出土の土器であるが同じような変形が見られる。縦4単元は28-31)、縦8単元は32-39・44)である。横2単元は28・32・33)、横3単元は29-31・34-38)、横4単元は44)、横5単元は39)である。

#### i 後北C<sub>1</sub>式期(図9-1-39、表1・2・4)

この期は施文方法・文様から供伴関係から3期に細分する。後北C<sub>1</sub>式の描順規則は、「古」までは後北Bを踏襲する。タブコブ遺跡・GP-18が基準資料である。「中」は後北C<sub>1</sub>・D式に通じる縦横の割付けの組み合わせが出現する。大麻22遺跡・H-2、十勝太若月遺跡・土坑24が基準資料である。「古」、「中」には変形V字・逆V字・台形・紡錘形貼付文(以下、貼付文は「隆起線」と呼ぶ)による縦4単元が少数ある。「新」は「中」で出現した割付けが定着し、後北C<sub>1</sub>・D式に通じる描順規則が整う。「新」は縦8単元が殆んどである。十勝太若月・土坑98が基準資料である。

「古」は、一部に隆起線に刻目が残るものがある。「中」は、縦4または8単元の割付け、上中下の3本の横位隆起線による2単元の割付けの組み合わせが出現する。また、V字・逆V字・紡錘形隆起線文の要縮が著しいが、この時点ではまだ突起下縦位に並んでいる。

「新」では、縦4単元の割付け、上中下の3本の横位隆起線による2単元の割付けが一般的になる。突起下縦位に並んで縦位・横位割付けの基点となっていたV字・逆V字隆起線文は副文様(後北C<sub>1</sub>・D式の充填文様にあたる)となり、紡錘形・円形が縦位・横位割付けの基点に施される(後北C<sub>1</sub>・D式の充填文様-1にあたる)ようになる。

この期を通じて胴部下半は縦位隆起線が底部付近まで垂下して文様帯となっている。しかし、胴部上半の主流様が下方へ拡張することはない。なお、深鉢(15・16・17・18・23)は同一の墓出土であり、このことから「中」と「新」は時間的に近接した前後関係にある。

成形 粘土紐輪積み。粘土紐接合面は内傾である。

器形・組成 深鉢はほとんどが倒錐形で、頸部から外反する、直線的に立上るものが少数ある。壺には縦耳が付いたものが多い。古の底部は直径が小さく、厚底・逆台形を呈し、「新」のは底径が大きく、薄底である。深鉢・大一袖珍、壺・小一袖珍が確認できる。また道東北部の例であるが、皿・小、舟形片口浅鉢・袖珍、舟形片口鉢・小、片口鉢・小、片口深鉢・袖珍、片口深鉢・小、注口深鉢・小がある。未見ではあるが石狩低地帯にも同様の器種が存在する可能性は高い。

胴部の縄文 胴部上半には0段多糸R1横位帯縄文、胴部下半はその縦位帯縄文がある。

描順規則 有文深鉢は胴部下半に縦位帯縄文を施し、後に口頸部に横位帯縄文を下地とし隆起線(「古」では一部隆起線に刻目)を施す。

胴部上半の文様 主流様には沈線文と隆起線文があり、「古」に少数例擬縄貼付文がある。

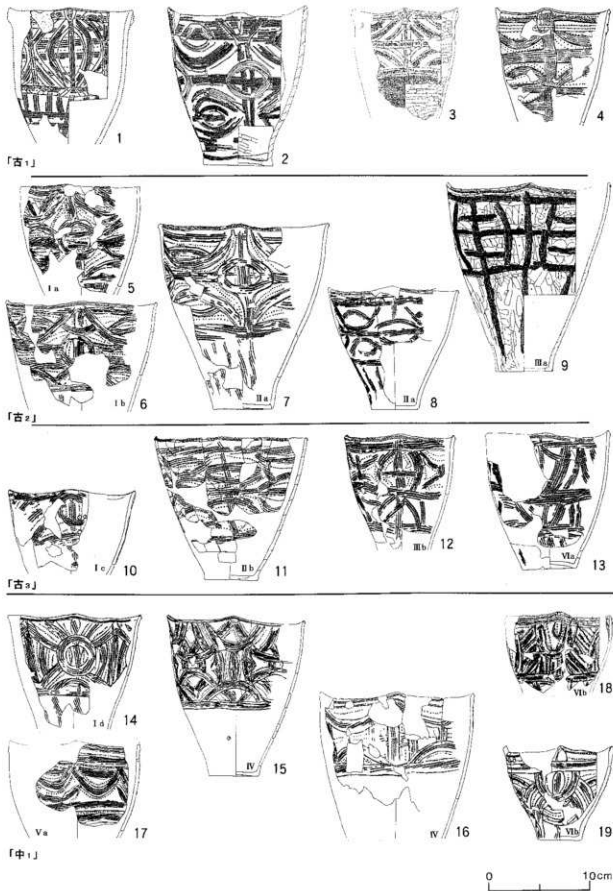
「古」(1-10・28-30)には、隆起線に刻目(1・28)がある。縦4単元は(1・6・10・30)その他は8単元である。横1単元は(9・10)で、他は3-6単元であり5単元が多い。突起下の変形V字・逆V字・台形・紡錘形隆起線文を横位に分割する隆起線文が1本(1-5・29)のものと、1本と2本一組・3本一組の複線の隆起線文が交互に横分割する(6-8・28-30)がある。

「中」(11-19・31-32)には、縦4単元は(11・12・19)その他は8単元である。横単元は3-5単元であり5単元が多い。突起下の変形V字・逆V字・台形・紡錘形隆起線文を横位に分割する隆起線文が1本(11-13)のものと、1本と2本一組・3本一組の複線の隆起線文が横分割する(14-19)がある。(14)は縦4単元であるが横は2単元で、突起下に隆起線文がない。新しい傾向であるか。

「新」(20-27)には、殆んど縦4単元となる。横分割は横2と3単元で2単元が多い。突起下の変形V字・逆V字・台形・紡錘形隆起線文が横位に分割される(21-24)と、分割されない(20・25)がある。

#### j 後北C<sub>1</sub>・D式期(図10-11-1-39、12-1-46、表1・2・5・6)

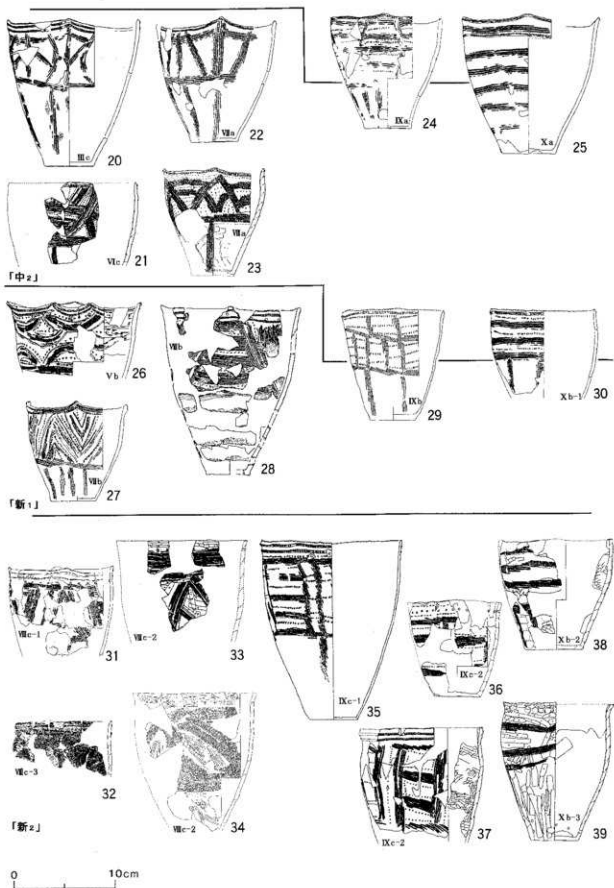
この期は以前に細分案(1998)を示した。一部(私案'c'の細分)に改善が必要であるが根本的な改定を必要としない。熊木俊朗「第四章三節 後北C<sub>1</sub>・D式期土器の展開と地域差」『トコロチャシ跡遺跡』(2002 東京大学)は、道東の編年を行い私案との比較を行っている。熊木の施文原理と私案は合一しているが細部に相違点が2つある。



1:56(包含層), 2:48(包含層), 3:98(包含層), 4:61(包含層), 5~8-10-12~17-19:87(包含層), 11:77(包含層), 18:98(包含層)

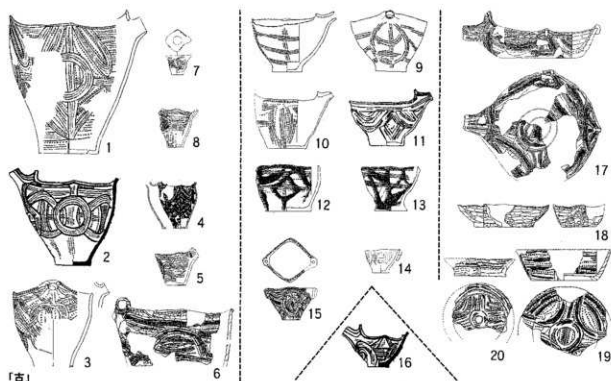
図10 後北C<sub>2</sub>・D式



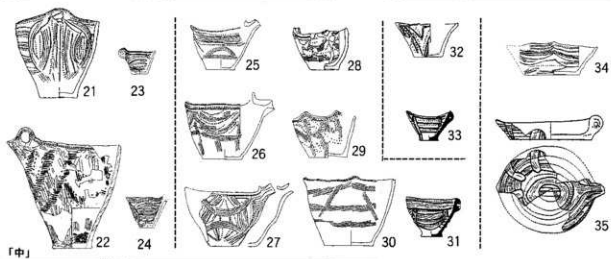


20-22-24-25-30:87(包含層), 21-23-33-36-38-39:46(包含層), 26-98(包含層), 27:44(25号土坑墓), 28:6(包含層), 29:44(14号土坑墓), 31:70(包含層), 32:116(包含層), 34:97(包含層), 35:86(埴土2付近), 37:98(包含層)

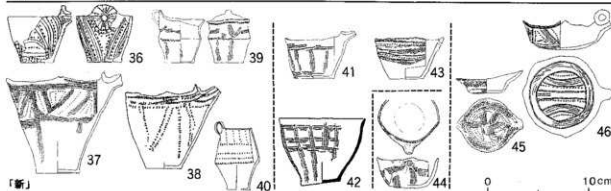
図11 後北C<sub>2</sub>・D式



「古」



「中」



「新」

1-3:2(GP-13), 2:82(坊主山XVII-9号), 3:2(GP-13), 4:74(包含層), 5:2(GP-28), 6:46(包含層), 7:2(GP-10), 8:2(GP-7), 9:9(36号土坑), 10:44(27号土坑蓋), 11:85(施土1), 12-13:44(20号土坑蓋), 14:2(GP-7), 15-17:18:46(包含層), 19-20:22:47(包含層), 21-36:73(包含層), 23-24:2(GP-20), 25-29:44(32号土坑蓋), 26:44(29号土坑蓋), 27:9(357号土坑), 28:87(包含層), 30:44(20号土坑蓋), 31:82(坊主山XVI-n号), 32:87(包含層), 16-33:82(坊主山XVII-7号) 34:43(20号土坑蓋), 35:82(坊主山XVI-m号), 37:44(26号土坑蓋), 38:83(施土2付連), 39-45:44(24号土坑蓋), 40:44(14号土坑蓋), 41:44(33号土坑蓋), 42:82(坊主山XV-13号), 43:44(28号土坑蓋), 44:72(包含層), 46:44(25号土坑蓋)

図12 後北C<sub>2</sub>・D式

第一に、円形刺突文の有無をもって道東4b式と5式を分けていることである。これらは私案のf段階に相当する。

私は下記の状況証拠からf段階には円形刺突文が付される土器とされない土器があると考え、ひとつは、北大式期の初期(円形・刺突文土器群期)には円形刺突文が付される土器とされない土器があること。もうひとつは、北大式において、円形刺突文が微隆起線の間隔を調整せず、むしろ円形刺突文は微隆起線間・線稜に沿って施されること(ただし、円形・刺突文土器群期)一期には口縁部において複列化などが起こり、客体的性格は解消される)。くわえて後北C・D式の口縁部隆起線(貼付文2条)の間隔は、円形刺突文を付するために決められるわけではない(口縁部貼付文2条の間隔は口縁部横位帯縄文の幅によって決まる)ことや(微隆起線2条)の下に付される場合があること。

以上4点から円形刺突文は、後北C・D式一北大式において客体的性格がうかがえる。つまり必ず付されなければならない主文様とはいえない。ただし、道東における円形刺突文の流行の仕方・時期が道央と異なる可能性を考慮すれば、道東4b式と5式を分ける根拠として妥当である。

第二は、道東4a式以降に私案にない細分がある。道東4a式では(αe期)の文様があり平縁のもの、道東4b式では(αf期)文様をもって平縁のもの、道東5式では(αf期)文様をもって平縁でそれに円形刺突文が付いたもの。これらは道央でも少数(管見では、柏木B遺跡第274号土坑、キウス5遺跡包含層、静岡26遺跡包含層)確認できる。f期には道東4b・5式にあたる土器が道央に存在していることは間違いのない。私案に変更を要するので(α)を細分(全てf段階)する。

c・1: 山形文を波頂下の帯間1・2に、口縁部に円形刺突、頸部が括れる。

c・2: 山形文を帯間1・2に、口縁部に円形刺突、頸部が括れる。

c・3: 山形文を帯間1・2に、頸部が括れる。

佐藤剛は「北海道における弥生時代後期～古墳時代中期併行の土器編年」『東日本弥生時代後期の土器編年(2000 東日本理蔵文化財研究会)』において全道の編年を行っている。佐藤の施文原理は私案による部分が大いとしているが、提示された編年図を見ると異なる。また、熊木編年(道東)と私案(道央)には生じない錯綜が佐藤案と私案みられる。佐藤の編年図との相異を下記に示す。下線が付された細分は、私案と同じ個体を根拠としていることを示す。

・1-a期には私案 a・d・b・a・α(a・c・b後半-d後半-d段階)が掲載され、・1-b期には私案 a・a・(α(a・a・b段階)が掲載されている。・2-a期には私案 c・a・b・a・c・(d・c・d・e・f段階)が掲載され、・2-b期には私案 c・1・c・2・e・f段階)が掲載されている。

・3-a期には私案 (αe段階)が掲載され、・3-b期には私案 b・3(fの後半段階)と北大式-a-1(円形・刺突文土器群期)が掲載され、・3-c期には私案の北大式(α(円形・刺突文土器群期)が掲載されている。

#### ：上位の・1と・2の区分、・3期の内容について検討する。

・1には区画帯・1があり、・2には区画帯・2があることをもって分けている。区画帯・1に付され文様構成の(α)段階が・1に存在するという事は、上位区分を逸脱して下位区分が分類されている。これによってc段階・道東3式は・1-a期と・2-a期とに振り分けられてしまった。

・3期は新たに口縁部文様帯が現れる。口縁部文様帯があればそこに付される主文様があるということである。佐藤は1cm間隔に開く二本の隆起線と突窓(円形刺突)と多条の微隆起線をさす。

二本の隆起・微隆起線は、口縁部隆起線である「貼付文2条」間に区画帯の上帯縄文の充填が行われる(大沼忠寛(1982)の「初」-d段階)ことに端を発し、微隆起線化(f段階、道東4b式)に連続する。道東4b式以降が・3期にあたるのだろうか。また先述したように、この時期の円形刺突文は口縁部貼付文2条と微隆起線の関係において客体的性格をもつて主文様としての性格は萌芽していないと考えられる。以上より、口縁部文様帯の出現は微隆起線の多条化による。よって・3期は一つの時期といえない。

#### ：最下位の細分(例えば、・3-a・b期のa・bのこと)の矛盾点は下記に記す。

・f・1-a期は充填文・1が付され、・1-b期は充填文・1が付されない。

・a期に充填文・1がないものが図示されている。私案の(α(後半-d段階)にあたるユカンボシE9遺跡出土、(α(後半-d段階)にあたるK135遺跡出土である。文様が胴部下半に及ぶのは古い傾向があることは肯首できる。出土状況はどうであろう。ユカンボシE9遺跡例は(α)段階を含む土器集中から出土している。K135遺跡例は同一グリットから b・α(a段階) c・(c段階)が出土している。a・aの出現はc段階にあるとしてよいのではないが。

・b期に充填文・1があるものが図示されている。このような矛盾は充填文・1に属する円形文を・a期に、それ以外を・b期に振り分けたことによって生じたのであろう。私案ではa-c期に、熊木編年では道東2・3式にあり両者は整合する。円形文は・1・a期に限定できない。

・f・2・a期は区画帯と充填文に弧形があり、・2・b期は区画帯はあるが充填文に弧形がない。」

・a期には区画帯と充填文に弧形がないものが多数図示されている。私案 c・a・b・a・b・b・c・1(d・d・e・d・e・e・f段階)である。定義どおりの図示は私案(c段階)のみである。・a期にはd・e・f段階、道東3式・道東4a式・道東4b式が混在することになる。c段階と道東3式、d・e段階と道東4a式・f段階(円形刺突文なし)と道東4b式は、それぞれ整合している。c段階・道東3式は佐藤の編年には存在しないので・a期がひとつの時期とはいえない。

・b期には佐藤の定義と矛盾する土器は掲載されていない。・b期にはe・f段階、道東4a式・道東4b式・道東5式が混在することになる。d・e段階と道東4a式は整合し、f段階は道東4b式・道東5式とほぼ整合する。e段階・道東4a式は・a期と・b期に含まれることになる。

・f・3・b期までは後北C<sub>2</sub>・D式期である」

事例としてユカンボシC15遺跡F・1の後北C<sub>2</sub>・D式深鉢と北大式・a・1を挙げている。F・1のような出土状況は近接した時期の前後型と理解するのが通常である。したがって・3・b期以降が北大式の初期であるというならば矛盾はない。

#### 新私案

区画文・1が施される段階を「古」とし、大沼忠春(1982)の「初」を「古<sub>1</sub>」a段階を「古<sub>2</sub>」b段階を「古<sub>3</sub>」とする。区画文・2が施される段階のうち縦位帯を持つ、横位帯縄文・多を「中」とし、c段階を「中<sub>1</sub>」d段階を「中<sub>2</sub>」とする。区画文・2が施される段階のうち縦位帯を持たない、横位帯縄文・多の一部、横位帯縄文・少を「新」とし、e段階を「新<sub>1</sub>」f段階を「新<sub>2</sub>」とする。

成形 粘土紐輪積み。粘土紐接合面は内傾である。

器形・組成 深鉢は後北C<sub>2</sub>式以来の倒鐘形が基本的形である。下記のような小変がある。

	口頸部	胴部上半	胴部下半	底部	図示例
ア1	外反	内曲	外反	凹底(古 <sub>1</sub> のみ)・平底	10 - 7
ア2	直線外傾				10 - 2
イ1	外反	内曲	直線外傾	平底	11 - 28
イ2	直線外傾				10 - 13
ウ1	直線外傾		外反	平底	10 - 8
ウ2					10 - 11
エ	直線垂直		直線外傾	平底	10 - 38
オ1	外屈・弱	内曲	外反	平底	11 - 39
オ2					11 - 36

ア1は「古<sub>1</sub>」新<sub>2</sub>、ア2は「古<sub>1</sub>」新<sub>2</sub>、イ1は「新<sub>1</sub>」新<sub>2</sub>、イ2は「古<sub>1</sub>」新<sub>2</sub>、ウ1は「古<sub>1</sub>」新<sub>2</sub>、ウ2は「古<sub>1</sub>」新<sub>2</sub>、エは「中<sub>1</sub>」新<sub>2</sub>、オ1は「中<sub>1</sub>」新<sub>2</sub>、オ2は「新<sub>1</sub>」にある。深鉢の基本的形はア1・ア2で違いは胴部下半である。オ1〜オ2の口頸部外屈は新しい傾向である。

鉢には体部が直線外傾するものと内彎が「古<sub>1</sub>」新<sub>2</sub>、体部下半が外反して上半が内彎(12 - 11)が「古<sub>1</sub>」にある。体部が内彎のものには底部が逆台形(12 - 13・33)になるものが「古<sub>1</sub>」中<sub>1</sub>にある。

浅鉢には体部が直線外傾するものが「古<sub>1</sub>」中<sub>1</sub>と内彎ものが「古<sub>1</sub>」新<sub>2</sub>にある。体部が内彎のものには底部が逆台形(12 - 16・32)になるものが「古<sub>1</sub>」中<sub>1</sub>にある。

皿には体部が直線外傾するものが「古<sub>1</sub>」新<sub>2</sub>と内彎のものが「古<sub>1</sub>」体部下半が外反(12 - 20)するものが「古<sub>1</sub>」にある。丸底気味(12 - 45・46)のものが「新<sub>1</sub>」にある。

なお、注口付・片口付・耳付・把手付の器部分は上記の深鉢・鉢・浅鉢・皿と同じ変遷を辿る。

規格は、深鉢と注口深鉢・大一袖珍、片口深鉢と把手付深鉢・袖珍、把手付注口深鉢・小、鉢・小一袖珍、注口鉢・小一袖珍、片口鉢・小、把手付鉢と耳付鉢・袖珍、浅鉢・小一袖珍、片口浅鉢・小一袖珍、耳付浅鉢・袖珍、皿・小一袖珍、注口皿・中一袖珍、片口皿・小、把手付注口皿・小が確認できる。

胴部の縄文 胴部下半には0段多糸R1縦位帯縄文がある。

描順規則 有文深鉢は胴部下半に縦位帯縄文を施し、後に口頸部に帯縄文・微隆起線文を施す。口縁部の貼付文はf段階に微隆起線となる。

胴部上半の文様 主文様には沈線文と微隆起線文と帯縄文があり、e段階に円形刺突文が副文様として現れる。

「古<sub>1</sub>(1-4)」には、区画帯と区画帯-1の交点が隆起線で囲まれたものが多い。縦4単元、横1(1)と2単元2-4があり2単元が多い。「古<sub>2</sub>(5-9)」には交点の装飾がなくなる。「古<sub>1</sub>(10-13)と24-25」には充填文様-1が帯間1-1と-2の二段に施されるものが多くなる。

「中<sub>1</sub>(14-19)と24-25-29-30」までは胴部下半にまで主文様が及んでいる。「中<sub>2</sub>(20-23)と24-25」には主文様が体部上半に限られるものが多くなる。

「新<sub>1</sub>(26-28)と29-30」には主文様が体部上半に限られる(小型の深鉢を除く)。「新<sub>2</sub>(31-39)」には円形刺突文が施されるものが多くなる。(33)は柁目板状原体の集合沈線を帯縄文風に用いる。

図12は深鉢以外の器種を图示した。(1-8)(21-24)(36-40)は深鉢形に付加部位をもつもの。(9-15)(25-31)(41-43)は鉢と鉢形に付加部位をもつもの。(16)(32-33)(44)は浅鉢と浅鉢形に付加部位をもつもの。(17-20)(34-35)(44-46)は皿と皿形に付加部位をもつもの。

深鉢以外の器種は、主文様の構成が深鉢と異なり、そのまま深鉢の文様変遷を当てはめることができない。深鉢との供伴例により時期の判別し、それと同じ単位文様をもつ他の器種を同時期とした。また、ワッカオイ遺跡土坑墓には多数の切り合い例(第3号土坑墓5、14、1、20、16、22、23、24、33、25、26、29、27、32)、追葬・合葬例(第20号土坑墓、22、25、26)がある。切り合い例で前後を、追葬・合葬例で時間的近接を推定した。「古<sub>1</sub>」は1-20)、「中<sub>1</sub>」は21-35)、「新<sub>1</sub>」は36-46)。

#### (5) 「円形・刺突文土器群」の解説

北大と「狭義の北大式(円形刺突文のみ)」は併行し、続く「広義の北大式(有文でミガキ、有文で刷毛調整)」は「十勝茂寄式」に含まれると考える(上野1994)。もうひとつは、並行せず北大式を十勝茂寄式に置き換える(大沼1989-1997)である。

上野分類を私案に当てはめると、「狭義の式」は私案の北大-北大と併行する。「広義の北大式」は私案の北大式後半と併行する。「円形刺突文のみ」と「有文でミガキ」の供伴はユカンボシE7遺跡P-28で、「円形刺突文のみ」と「有文で刷毛目」の供伴は萩ヶ岡遺跡墓305に例がある。有文と円形刺突文のみの併存はこの時期を通じた現象である。

大沼分類を私案に当てはめると、「十勝茂寄式」は私案の北大式後半-私案の刺突文後半となる。大沼分類では北大式と北大式の重複が説明されていない。

これらの矛盾を解消するための呼称として、後北C<sub>2</sub>-D式のe-f段階(b、c-1・2、c-2)-北大式を「円形刺突文土器群」、その後半に併行する刺突文土器とあわせて「円形刺突文土器群:Ⅰ-XI」と称した。北大式は従来の定義を使用した。北大式は「広義の北大式(有文でミガキ)」と「広義の北大式(有文で刷毛調整)」を指した。「狭義の式(円形刺突文のみ)」は「円形刺突文土器」と呼んだ。「円形刺突文がなく有文でミガキ・刷毛調整」は「刺突文土器」と呼んだ。無文のものを「無文土器」と呼んだ。以前に細分案(1998)を示したが原理の改定を必要としない。しかし1999年当時の浅慮・誤りがあることや最近の調査成果より、細分(特に円形刺突文・無文土器)に改善が必要である。

#### a 北大式の種・深鉢(図13-1-17、表7-9)

C<sub>2</sub>-D式の器形が残り、口縁部文様帯が単段を「古」とする。a-1-a-2は口唇断面形の違いで細分したが、これはC<sub>2</sub>-D式以来の小変なのであわせて「古<sub>1</sub>」b段階を「古<sub>2</sub>」c-1-c-2(1999年時点では図3において、c-2の事例として73を挙げたのはあやまりである。訂正いたします。)は胴部下半の形態に新旧傾向が認められるが、それ以外は同じ要素をもつのであわせて「c」と改めて段階を「古<sub>3</sub>」とする。長胴化、口縁部文様帯の多段化、LR攪り原体による横位回転の斜行縄文の出現を「新」とする。d段階を「新<sub>1</sub>」e段階を「新<sub>2</sub>」とする。

成形 粘土紐輪積み。粘土紐接合面は内傾である。

器形 深鉢形は「古<sub>1</sub>」に多くみられる以外は甕形が殆んどである。甕の器形には下記の小変がある。

	口頸部	胴部上半	胴部下半	底部	図示例
ア1	外屈・弱	内曲・強	直線外傾	平底	13-1
ア2	外屈・強			平底/高台状	13-9
イ	外屈・弱	直線外傾		平底	13-3
ウ1	外反・強	内曲・弱	直線外傾	平底/	13-12
ウ2	直上			横に張り出す外縁線	13-13

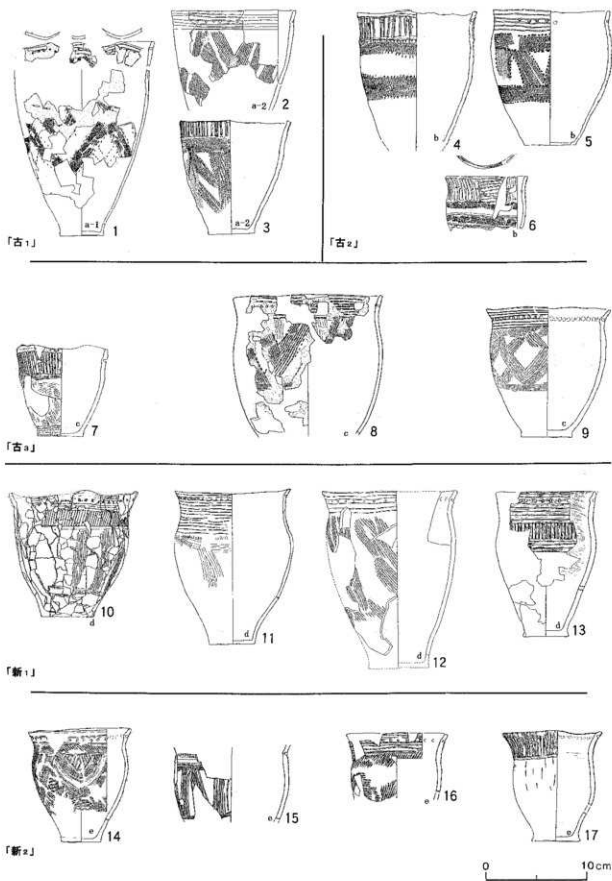








3 道央部における続縄文土器の編年



1-6:115(包含層), 2:122(F-1), 3~5:171(ブロック 3-7-8-11~13), 7:114(包含層), 8:99(包含層), 9:14(F-8), 10:75(包含層), 11:16(F-402), 12:10(F-66), 13:121(包含層), 14:16(P-345), 15-16:204(包含層), 17:14(F-93)

図13 北大式

「古」では後北C<sub>1</sub>・D式以来の器形を引き継ぐが、胴部中位の曲率はきつくなる。「新」では胴部下半の伸張、頸部の伸張が顕著である。ア1・ア2は「古」、ウ1・ウ2は「新」にある。襷または深鉢に大一袖珍が確認できる。

胴部の縄文「古」には胴部上半～下半に0段多条RL帯縄文。「新」では北大式に通常の0段多条LR普通縄文が出現する。

描順規則 襷・深鉢は胴部に斜位帯縄文を施し、後に口頸部に横位帯縄文、そして微隆起線文を施し、最後に円形刺突文を施す。

口頸・胴部上半の文様 口頸部の正文様には微隆起線文と円形刺突文があり、この円形刺突文は「新」に複列化する。胴部上半には帯縄文とそれを区画する三角形刺突文が副文様としてある。北大式において、微隆起線文の多条化・多段化は口頸部の伸張と相関関係にある。

「古」(1-3)には帯縄文が三角形刺突文で囲まれたものが多い。(1)のように微隆起線文の条数が少ないものがある。「古」(5-6)には縦微隆起線文と横微隆起線文が交互に施されたものがある。「古」(7-9)の正文様は「古」と変わらないが、帯縄文を区画しないものが多くなる。頸部のくびれは明瞭になり、底部は高台状になる。

「新」(10-13)には伸張した頸部に横位・縦位の縦微隆起線文が上下に多段の配置となるものがある。「新」(14-17)には時期の北大式に繋がる様相が現れる。(14-16)は帯縄文を施さない。(14)は口縁部の横位縦微隆起線文の条数が減少し、RL原体の横位・斜位回転縄文をつけている。(15)は帯縄文を沈線で区画している。(16)はLR原体を横位・斜位回転縄文をつけている。(17)は縦微隆起線文の下端を半管笠状原体による2本一組の沈線で区画される。

この時期には、LRやRL原体の横位・斜位回転縄文の端を撫で消して、帯縄文風に見せる技法がある。RL原体の事例として、吉井の沢1遺跡P-210、宇津内遺跡包含層、青森県八戸市田向冷水遺跡S11竪穴住居で確認されている。

b 北大式の襷(図14-1-18、表7・8・10)

体部下半にナデ調整が施され、北大式の器形・縄文が残るa・1を「古」とする。口縁部がさらに伸張するa・2を「古」とする。体部下半に籠ミガキ調整が施される段階を「新」とする。「新」は、頸部の普通縄文を単沈線によって区画するb・1を「新」、正文様の断続化や2本一組沈線によって区画するb・2・b・3をあわせてb・2(1999年時点で、b・2をb・3と、b・3をb・2と誤って図4に掲載した。訂正いたします。)と改め「新」、普通縄文を下地として2本一組沈線で文様を描くc・1・c・2をあわせて「c」と改め「新」とする。「新」の一部(旧c・2)では、胴部と頸部の境に段があり頸部が明瞭となる。

成形 粘土紐輪積み。粘土紐接合面は内傾である。

器形 襷形が殆どとなるが、例外的に深鉢形がある。襷の器形には下記のような小変がある。

	口頸部	胴部上半	胴部下半	底部	備考	図示例
ア1	外反	内曲・弱	直線外傾	平底/横に張り出す 外底縁	北大 ウ1に近似	14-4
ア2	直上				北大 ウ2に近似	14-6
イ1	外反・強	内曲	直線外傾	平底/Aと同じ	最大径が口縁部	14-7
イ2		内曲・弱				14-13
ウ2	外反・強	内曲・強	直線外傾	平底/Aと同じ	頸部明瞭	14-16

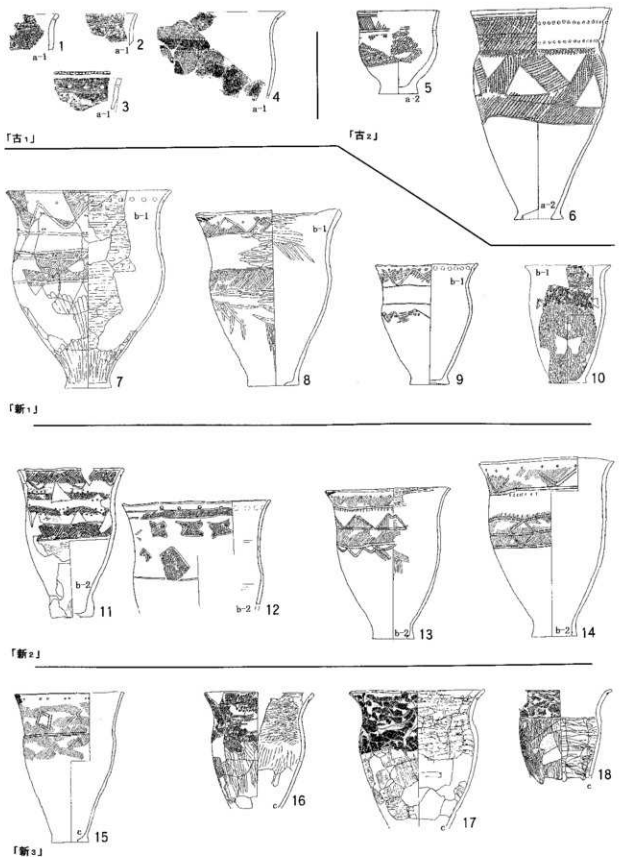
北大式以来の器形を引き継ぐア1は「古」にある。口縁部の伸張が著しいア2は「古」にある。伸張した口縁部が外反し大きく見えるイ1は「古」、イ2は「新」にある。「新」の一部(旧c・2)では口縁部の肥大しない。ウ2は「新」の一部(旧c・2)にある。規格は大一袖珍が確認できる。

口頸・胴部の縄文「古」には、口縁部に0段多条RL帯縄文やそれを楔形の刺突文で区画したものもある。道央におけるRL帯縄文の例は大森3のP-403・434、キウス7、柏木B、S135、フゴッペ洞窟の包含層がある。RL普通縄文の例は高砂、蘭島A、入船、堀株神社遺跡の包含層、青森県八戸市市子林遺跡からも出土している。

この時期は北大式に通常の0段多条LR横位斜行縄文に混じって北大式に盛行したRL撚り原体が遺存している。「古」以降は0段多条LR普通縄文が通有となる。

描順規則 「古」は口頸・胴部上半に普通縄文を横位・斜位に施し、後に縄文の端を撫で消して沈線を、最後に円形刺突文を施す。「新」は口頸部に普通縄文を施し、後に縄文の端を撫で消して沈線を、そして籠ミガキを加え、最後に円形刺突文を施す。

3 道央部における続縄文土器の編年



1:118(包含層), 2:16(P-434), 3:134(P-331), 4:204(包含層), 5:83(包含層), 6:178(包含層), 7:108(包含層), 8:21(1号墓), 9:153(包含層), 10:190(包含層), 11:6(GP-1), 12:156(包含層), 13-14:180(包含層), 15:21(1号墓), 16-17:7(P-47), 18:7(P-38)

図14 北大式

口頸・胴部上半の文様 口頸部の主文様には区画された縄文、沈線文、円形刺突文がある。口頸部の円形刺突文は「新<sub>2</sub>」に単列化する。胴部上半の副文様の円形刺突は「新<sub>1</sub>」にはみられない。2本一組沈線は北大の「新<sub>2</sub>」や北大の「古」「新<sub>1</sub>」では口頸部に横位直線として用いられるが、「新<sub>2</sub>」には区画文として、「新<sub>1</sub>」には独立した文様として用いられ、明瞭となった頸部に文様が収束する。頸部と施文範囲の相関はこれ以降にも継続する。

「古<sub>1</sub>」にはRL帯縄文(1~3)とRL普通縄文(4)がある。縄文の区画に列点をを用いる。「古<sub>1</sub>」(5・6)はLR普通縄文を沈線で区画する。(5)は横位回転斜行縄文が胴部上半を覆う。2本一組沈線の多用は(6)と較べて新しい傾向である。ただし、この段階における2本一組沈線の使用は口頸部に限られる。

「新<sub>1</sub>」(7~10)は主文様が横位に接続し、沈線区画の縄文帯が横環する。(10)は横位回転斜行縄文の上下が箇ミガキされて沈線区画の縄文帯にみえる。「新<sub>1</sub>」(11~14)は主文様が横位に断続するものが登場する。(14)は口頸部の2本一組沈線が既に主文様化する新しい傾向が見られる。「新<sub>1</sub>」(15~18)は口頸部の2本一組沈線が単独の主文様となる。(15)の頸部と胴部の境に内屈が(18)には段が見られる。(17)の内面は弱いので(18)の内面は疎らな磨きのために下地のヨコハケが見える。

c 北大 式の襷(図15-1~18、表7・8・10)

北大 式「古<sub>1</sub>」と同じ器形・ナデ調整が残るaを「古<sub>1</sub>」とする。体部下半に箇ミガキが施され、口頸部にナデ・箇ミガキ下地に沈線文を施す段階を「中<sub>1</sub>」とする。「中<sub>1</sub>」は、主文様が横位に接続するbを「中<sub>1</sub>」、ナデ下地に主文様が横位に断続するc-1を「中<sub>2</sub>」とする。箇ミガキ下地に主文様が横位に断続するc-2を「中<sub>3</sub>」とする。体部下半に箇ミガキが施され、口頸部の沈線文が刷毛目下地に施される段階を「新<sub>1</sub>」とする。「新<sub>1</sub>」は、体部下半に箇ミガキが残るdを「新<sub>1</sub>」、体部下半が刷毛目が目立つeを「新<sub>2</sub>」とする。

成形 粘土輪積み。粘土紐接合面は内傾である。

器形 襷の器形には下記のような小変がある。

	口頸部	胴部上半	胴部下半	底部	備考	図示例
ア	直上	内曲・弱	直線外傾	平底/横に張り出す 外底線	北大 ア2に近似	15-1・4
イ1	外反・強	内曲・弱	直線外傾	平底/アと同じ	北大 イ1に近似	15-3
イ2		内曲			北大 イ2に近似	15-6
ウ	外反・強	内曲・強	直線外傾	平底/アと同じ	北大 ウ2に近似	15-7
エ	直線外傾	内曲・強		平底/アと同じ		15-10

北大 式以来の器形を引き継ぐアは「古<sub>1</sub>」「中<sub>1</sub>」にある。イ1は「古<sub>1</sub>」にある。イ2は「中<sub>1</sub>」にある。ウは「中<sub>2</sub>」~「新<sub>2</sub>」にある。エは「中<sub>3</sub>」~「新<sub>2</sub>」にある。「中<sub>3</sub>」では、胴部と頸部の境に段が発生し頸部が明瞭となる。規格は大一袖珍が確認できる。

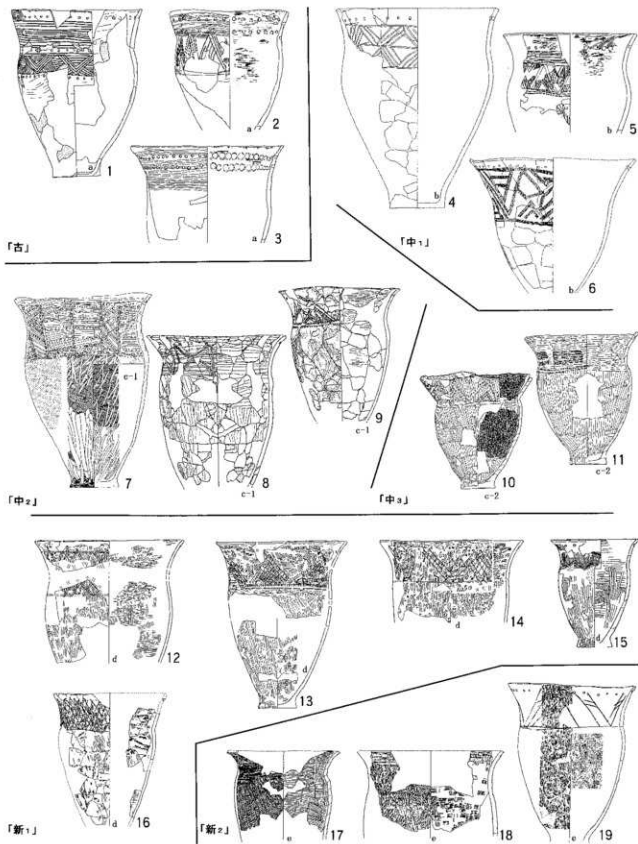
描順規則 「古<sub>1</sub>」はナデの後に沈線文を、最後に円形刺突文を施す。「中<sub>1</sub>」「中<sub>2</sub>」はナデの後に沈線文を、そして箇ミガキを加え、最後に円形刺突文を施す。「中<sub>3</sub>」「新<sub>1</sub>」は刷毛目の後に箇ミガキを、そして沈線文・刺突文を加え、最後に円形刺突文を施す。「新<sub>1</sub>」は刷毛目の後に箇ミガキ行わない場合が多く、沈線文・刺突文を加えて最後に円形刺突文を施す。

口頸・胴部上半の文様 口頸部の主文様には沈線文、刺突文、円形刺突文がある。口頸部の円形刺突文は「中<sub>1</sub>」のc-1に単列となる。胴部上半の副文様の円形刺突は「中<sub>1</sub>」のc-1にはみられない。刺突文が副文様として「中<sub>1</sub>」のc-1にある。2本一組沈線は独立した文様として「中<sub>1</sub>」のc-1に以降にある。横位沈線文は「古<sub>1</sub>」では主文様として多用されるが、「中<sub>1</sub>」になるまで断続したり、別な文様の下地になる。「新<sub>1</sub>」では鋸歯文の充填文様となったりする。後述する「刺突文土器」の「古<sub>1</sub>」(北大「中<sub>3</sub>」併行)には横走沈線のみがあるので、横位沈線が分離して単段の横走沈線となる。

「古<sub>1</sub>」(1~3)には口頸部には単段文様帯・複段文様帯があり、複列円形刺突文と横位沈線文が多用される。複段文様帯は上段に多条の横位沈線文、下段に入り組みの鋸歯文がある。

「中<sub>1</sub>」(4~6)には「古<sub>1</sub>」と同じく単段文様帯と複段文様帯がある。(6)は柁目板状本体による集合沈線で入り組みの鋸歯文を描く。「中<sub>1</sub>」(7~8)は単段の文様帯が頸部に収まる。次期以降もこの構成は継続する。2本一組沈線文と刺突文が多用される。(7)は多条の横位沈線が付され、(8)は横位沈線下地があり古相を示す。「中<sub>1</sub>」(10~11)は「中<sub>1</sub>」と同じ文様構成であるがミガキと施文の順が変わる。(11)は頸部ヨコミガキ、胴部タテミガキに分けられる。新相を示すか。

3 道央部における続縄文土器の編年



1:177(包含層), 2-3-5:225(包含層), 4:107(包含層), 6:108(包含層), 7:102(包含層), 8:7(P-28), 9:7(P-1), 10:246(P-99), 11:246(P-146), 12-13-14-139(包含層), 15:99(包含層), 16:138(包含層), 17-18:190(包含層), 19:13(層305)

図15 北大式

「新<sub>1</sub>」(12~16) (12)は2本一組沈線による斜格子文、(16)は単沈線による斜格子文である。擦文文化期まで続く斜格子文はこの時期に初出する。「新<sub>2</sub>」(17~19) (17・18)は頸部に刺突文が施される。(19)の鋸歯文には退化が見られる。

鋸歯文は北大 式の胴部文様に発して、北大 式では口頸部文様として描かれるようになり、「中<sub>1</sub>」では頸部文様として「新<sub>2</sub>」に至る。

d 「刺突文土器」の概 (図16-1~18、表7・8・10)

「刺突文土器」とは円形刺突文の施されない土器のことで、このなかには刺突文、刺突文+沈線文の土器、沈線文の土器が含まれる。主文様の種類は北大 式と同じものが多い。

ナデ調整が残るaを「古<sub>1</sub>」とする。道央の類例は未見であるが存在する可能性は高いので段階を設けた。それに加えて体部に篋ミガキが施され、主文様が横位に断続する段階を「古<sub>2</sub>」とする。口頸部~胴部がタテ篋ミガキ下地のb・1を「古<sub>2</sub>」、口頸部がナデ・ヨコ篋ミガキ下地のb・2を「古<sub>2</sub>」に細分する。

体部外面に刷毛目が施され、主文様が横位に断続する段階を「中<sub>1</sub>」とする。「中<sub>1</sub>」は、胴部外面に篋ミガキがあるcを「中<sub>1</sub>」、外面全面に刷毛目調整があるd・1とd・2をあわせて「d」改め「中<sub>2</sub>」とする。

口唇部には段状横位沈線があり、口頸部から篋ミガキがなくなる段階を「新<sub>1</sub>」とする。「新<sub>1</sub>」は、口縁部が内屈しないeを「新<sub>1</sub>」、口縁部が内屈するfを「新<sub>2</sub>」に細分する。

成形 粘土紐輪積み。粘土紐接合面は内傾である。

器形 概の器形には下記のような小変がある。

	口頸部	胴部上半	胴部下半	底部	備考	図示例
A1	外反・強	内曲・弱	直線外傾	平底		16-1
A2	外反			平底/横に張り出す 外底線	北大 イ1に近似	16-7
イ	外反・強	内曲・弱	直線外傾	平底/Aと同じ	北大 ウに近似	16-13
ウ1	直線外傾	直線的	内曲	平底/Aと同じ	北大 エに近似	16-15・19
ウ2	内屈	内曲		平底/Aと同じ		16-22

A1・2は「古<sub>1</sub>」~「古<sub>2</sub>」にある。イ・ウ1は「中<sub>1</sub>」にある。ウ2は「中<sub>2</sub>」~「新<sub>1</sub>」にある。ウ1は下膨れ気味の器形で宇部則保(2000)の概Bの形に類似するが、概Bの口縁径は胴部径よりも小さいに比べて(19)の口径は胴径より大きい。規格は大一袖珍が確認できる。

描順規則 「古<sub>1</sub>」はナデの後に刺突文を施す。「古<sub>2</sub>」・「古<sub>3</sub>」はナデの後に篋ミガキを、そして沈線文・刺突文を施す。「中<sub>1</sub>」は刷毛目の後に篋ミガキを、そして沈線文・刺突文を施す。「中<sub>2</sub>」は刷毛目の後に沈線文・刺突文を施す。「新<sub>1</sub>」・「新<sub>2</sub>」は刷毛目の後にナデを、そして段状・段状沈線、最後に沈線文・刺突文を施す。

口頸・胴部上半の文様 口頸部の主文様には沈線文、刺突文がある。「古<sub>1</sub>」~「新<sub>1</sub>」までは頸部全面に主文様が施されるが、「新<sub>2</sub>」には頸部下半に縮減する。「中<sub>2</sub>」以降に柁目板の先端による刺突文が多くなる。「新<sub>1</sub>」・「新<sub>2</sub>」の段状・段状沈線は、篋状原体の角を器壁に対して立て削ることで表現される。

「古<sub>1</sub>」(1)は縦位に刺突文が施される。「古<sub>2</sub>」(2~6) (3~5)は頸部段に刺突文が施される。「古<sub>3</sub>」(7~10) (9・10)は内面にも篋ミガキが施されており、(7・8)よりも古相を示しているが、(10)は横走沈線文が単独で施される初例である。

「中<sub>1</sub>」(11~14) (11・14)は単沈線による「M」字状の鋸歯文・四辺形を描き、その中に刺突・横位沈線で充填する。これは北大 式と同じである。(12)は2本一組沈線で鼓形を描き、その中に2本一組沈線で充填する。「中<sub>2</sub>」(15~19) (15・16)の主文様は単沈線で描かれている。この時期以降2本一組沈線は主文様には用いられない。(15)には柁目板原体による刺突文があり、内面にはタテ篋ミガキが施されている。

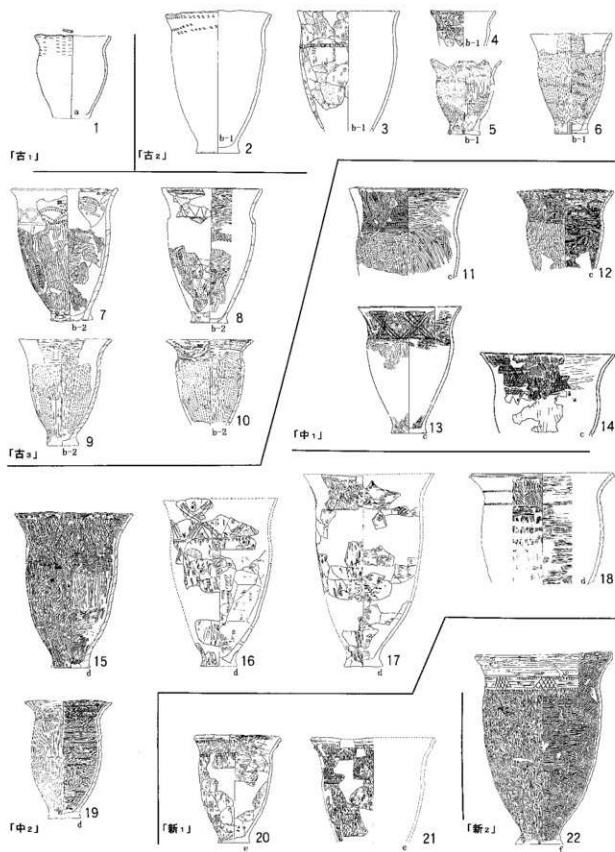
「新<sub>1</sub>」(20・21)「新<sub>2</sub>」(22) (20)は段状沈線の稜に柁目板原体による刺突が施される。(22)は口唇と頸部に柁目板原体による刺突が施される。

e 「円形刺突文土器」の概 (図17-1~16、表7・8・10)

「円形刺突文土器」(以下は括弧で括らない)とは円形刺突文のみが施された土器のことである。胴部がナデ調整の段階を「古<sub>1</sub>」とし、器形の違ひによって細分する。括れがほとんどない深鉢形aを

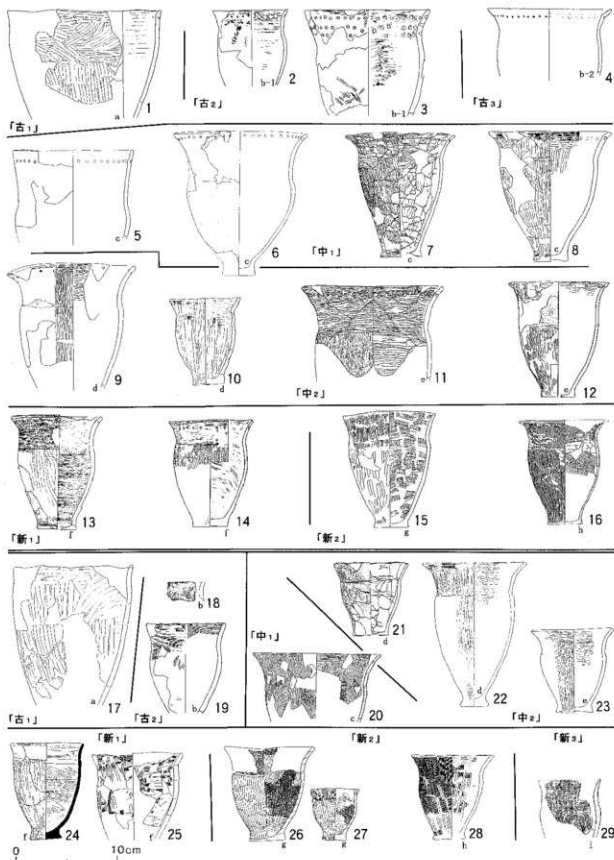
「古<sub>2</sub>」、括れがあつて短い口頸部があるb・1を「古<sub>2</sub>」、口頸部が外反して明瞭で円形刺突文が単・複列あるb・2を「古<sub>3</sub>」とする。

3 通央部における続縄文土器の編年



1:27(土坑 61), 2-18:212(包含層), 3:135(包含層), 4-16:137(包含層), 5:246(P-125), 6:246(P-66), 7:22(81-9A 土坑), 8:136(包含層), 9:246(P-55), 10:246(P-22), 11:96(包含層), 12:187(包含層), 13:84(包含層), 14:97(包含層), 15:190(包含層), 17-20-21:138(包含層), 19:216(P-19), 22:190(包含層)

図16 刺突文土器



1:122(包含層), 2-3-19:225(包含層), 4:163(包含層), 5-6:141(包含層), 7:7(P-26), 8:126(包含層), 9:132(包含層), 10:95(包含層), 11:7(P-36), 12:99(包含層), 13:7(P-27), 14:84(包含層), 15:82(包含層), 16:189(包含層), 17:122(P-78), 18:163(包含層), 20:116(包含層), 21:7(P-40), 22:198(包含層), 半部(2002)引用, 23:127(包含層), 24:3(基63-4), 25:108(包含層), 26:246(P-203), 27-246(P-23), 28:25(1号棟), 宇部(2002)引用, 29:191(包含層)

図17 円形刺突文・無文土器



胴部が篋ミガキ調整の段階を「中」とし、篋ミガキ調整の違いによって細分する。胴部外面にタテ篋ミガキがあるcとd・1とをあわせて「c」と改め「中<sub>1</sub>」、胴部外面にタテ篋ミガキがあって頸部に明瞭な段があるd・2を「d」と改め、口頸部と胴部とをミガキ分けするeとを「中<sub>2</sub>」とする。口頸部から篋ミガキがなくなる段階を「新」とし、外面の器面調整の違いによって細分する。口頸部にヨコナデ調整があるfを「新<sub>1</sub>」、口頸部が刷毛調整のままのg・hを「新<sub>2</sub>」に細分する。

成形 粘土紐輪積み。粘土紐接合面は内傾である。

器形 円形刺突文土器は北大 から刺突文土器に併行するので器形の小有もそれらに相応する。

描順規則 器面調整の後に円形刺突文を施す。

調整など

「古<sub>1</sub>」は胴部はタテナデ、口頸部はヨコナデが施される。「古<sub>2</sub>」・「古<sub>3</sub>」(2-4) 胴部はタテナデ、口頸部はヨコナデが施される。「中<sub>1</sub>」(5-8) (8)は胴部と口頸部の境を沈線で表現している。「中<sub>2</sub>」(9-12) (9-12)の頸部の段は磨かれずに残っている。「新<sub>1</sub>」(13-14)「新<sub>2</sub>」(15-16) (14-16)の底部の括れが少ない。

f 「無文土器」の裏(図17-17-29、表7・8・10)

「無文土器(以下では括弧で括らない)」とは文様がないう器のことである。無文土器の調整・器形は円形刺突文土器とほぼ同じである。1999年時点では、両者の相関を考慮に入れられない名称を付けていた。相関を表現するため、同じ調整のものは円形刺突文土器の細分名称のアルファベットと同じ名称に変更する。ナデ調整の「b」を新設し、b・1・2はb・3とあわせて「c」と改める。c・1 d、c・2 e、c・3 f、d g、e h、f Iと改める。

胴部がナデ調整の段階を「古」とし、器形の違いによって細分する。括れがほとんどない深鉢形aを「古<sub>1</sub>」、括れがあるbを「古<sub>2</sub>」に細分する。

胴部が篋ミガキ調整の段階を「中」とし、篋ミガキ調整の違いによって細分する。胴部外面にタテ篋ミガキがあるcを「中<sub>1</sub>」、胴部外面にタテ篋ミガキがあって頸部に明瞭な段があるd、口頸部と胴部とをミガキ分けするeを「中<sub>2</sub>」とする。

口頸部から篋ミガキがなくなる段階を「新」とし、外面の器面調整の違いによって細分する。口頸部にヨコナデ調整があるfを「新<sub>1</sub>」、口頸部にヨコナデ調整があるg・hを「新<sub>2</sub>」、iを「新<sub>3</sub>」に細分する。

成形 粘土紐輪積み。粘土紐接合面は内傾である。

器形 円形刺突文土器は北大 から刺突文土器に併行するので器形の小有もそれらに相応する。

調整など

「古<sub>1</sub>」(17)は胴部はタテナデ、口頸部はヨコナデが施される。「古<sub>2</sub>」(18-19) 胴部はタテナデ、口頸部はヨコナデが施される。「18」は口頸部の外反が弱く(19)に比べて古相を示す。「中<sub>1</sub>」(20)は胴部上半が直線的に外傾する。「中<sub>2</sub>」(21-23) (21-22)の頸部の段は磨かれず残る。「新<sub>1</sub>」(24-25)「新<sub>2</sub>」(26-28)「新<sub>3</sub>」(29) (29)は口頸部ヨコハケ、胴部タテハケである。

f 裏による各型式の併行関係について(表11)

併行関係は先述したように、北大 式と北大 式は重複する時期があり、北大 式という単系統の変遷はない。また、有文土器と円形刺突文土器・無文土器はこの時期を通じて併存する。まずは各型式の供伴例を明らかにする。

表11の 一は、これまで述べてきた細分属性の比較、つまり属性の類似が見られた場合、属性の類似は時間的同一と考慮して、その類似を最小の時間単元に置き換えたものである。

[供伴例]<sup>12)</sup> 江別市・萩ヶ岡・墓305: 北大 e + 円刺g + 無文h = 期

恵庭市・西島松5・P・6: 北大 d + 刺突c = 期

恵庭市・ユカンボシE7・P・28: 北大 c・2 + 円刺d + 無文f = 期

恵庭市・ユカンボシE7・P・46: 北大 c + 円刺c = 期

恵庭市・西島松5・P・1: 無文e + 円刺e = 期

恵庭市・ユカンボシE5・P・1: 無文e + 円刺d + 北大 b = 期

しかし例数が少ないのでこれを定点にし、属性の類似の消長によって時間単元の集合(大単元)を設定する。その際、細分属性が多い北大 式と刺突文土器を基準にする。

北大 式(古<sub>1</sub>-新<sub>2</sub>) + 北大 式(古<sub>1</sub>-古<sub>2</sub>) + 北大 式(古) + 円形刺突文土器(古<sub>1</sub>-古<sub>2</sub>) + 無文土器(古<sub>1</sub>-古<sub>2</sub>) = 一。北大 式のみがある時期: 一、北大 式 + 北大 式がある: 一に細分できる。ここは北大 の消長が大単元の内容である。

北大式(新<sub>1</sub>-新<sub>2</sub>) + 北大式(中<sub>1</sub>-中<sub>2</sub>) + 刺突文土器(古<sub>1</sub>-古<sub>2</sub>) + 円形刺突文土器(中<sub>1</sub>-中<sub>2</sub>) + 無文土器(中<sub>1</sub>-中<sub>2</sub>) = Ⅰ。ここは刺突文土器の出現、北大式のおわりが大単元の内容である。

北大式(新<sub>1</sub>-新<sub>2</sub>) + 刺突文土器(中<sub>1</sub>-新<sub>2</sub>) + 円形刺突文土器(新<sub>1</sub>-新<sub>2</sub>) + 無文土器(新<sub>1</sub>-新<sub>2</sub>) = Ⅱ。北大式・円形刺突文土器がある時期：Ⅰ、北大式・円形刺突文土器がない時期：Ⅱ・Ⅲに細分できる。ここは北大式以降が大単元の内容である。

g その他器種について(図18-1~49、表7~10)

その他器種は、遺構が極めて少く包含層出土が主である。遺構例の中では墓坑例がほとんどである。時期を考える条件は、副葬品の覆と供伴例(条件とする)遺構からの単独出土例(条件とする)包含層出土例(条件とする)がある。単独出土例は遺跡内の円形・刺突文土器群の遺構(表9・10参照)の時期幅と推定し、包含層出土例(表7参照)は同一包含層の円形・刺突文土器群の時期幅と推定した。

Ⅰ(1~6・8~16)高Ⅰ(7)は、条件が(2・3)条件が(5・7・8・14)条件が(1・4・6・9~13・15・16)である。Ⅱは搬入品でⅠⅢ期にある。

Ⅰの規格は殆んどが「小」であるが、Ⅰ期以前には口径10cmを僅かに下回るもの、Ⅰ期以降に口径20cmを超えるものがある。これらは容積変化を意図としているというよりは口縁部の形態に起因する変動である。基本的にはⅠの規格は「小」である。

注口深鉢(17・23・24)注口鉢(22)注口浅鉢(18~21)は、条件が(22~24)条件が(19~21)条件が(17・18)である。注口深鉢はⅠ期とⅡ期にあることから、継続していると思われる。注口鉢・浅鉢はⅠ期にある。注口浅鉢の中で極めて低平な(18)はⅠ期のみを確認できた。この器形は後北C<sub>1</sub>・D式から続くものである。注口の形は、直線的なもの(18・19・22・23)、反りがある(20・21・24)がある。反りがある注口は円形・刺突文土器群中に初出する。器部が舟形(20・24)のものはⅠ期とⅡ期にあることから、継続していると思われる。また、器部の上面観が多角形のものもⅠ期である。なお、注口のつく器形は藤文文化期にもあることからⅡ~Ⅲ期にもそれが存在する。

注口深鉢の規格は小一袖珍、注口鉢は小、注口浅鉢は小一袖珍が確認できる。

片口深鉢(28・30)片口鉢(26・29)浅鉢(25・27)は、条件が(25・27)条件が(30)条件が(26・28・29)である。片口深鉢はⅠ期とⅡ期にあることから、継続していると思われる。片口鉢・浅鉢はⅠ期にある。片口の形は、長いもの(25~27)、短いもの(28~30)がある。Ⅰ期を境に片口が短くなる。また、器部の上面観が多角形のものもⅠ期である。

片口深鉢の規格は小一袖珍、片口鉢の規格は小一袖珍、片口浅鉢の規格は小一袖珍が確認できる。

深鉢(36)鉢(32・37~39・42・44)浅鉢(31・33~35・40・41・43・44)は、条件が(34・35・44)条件が(33・37・38)条件が(31・32・39~44)である。

深鉢の規格は袖珍、鉢の規格は小一袖珍、浅鉢の規格は袖珍が確認できる。壺の個体例(46)は1個確認できた。頸部以下がタテ節磨きであること、円形刺突文が確認ことからⅠ期の土器であろう。

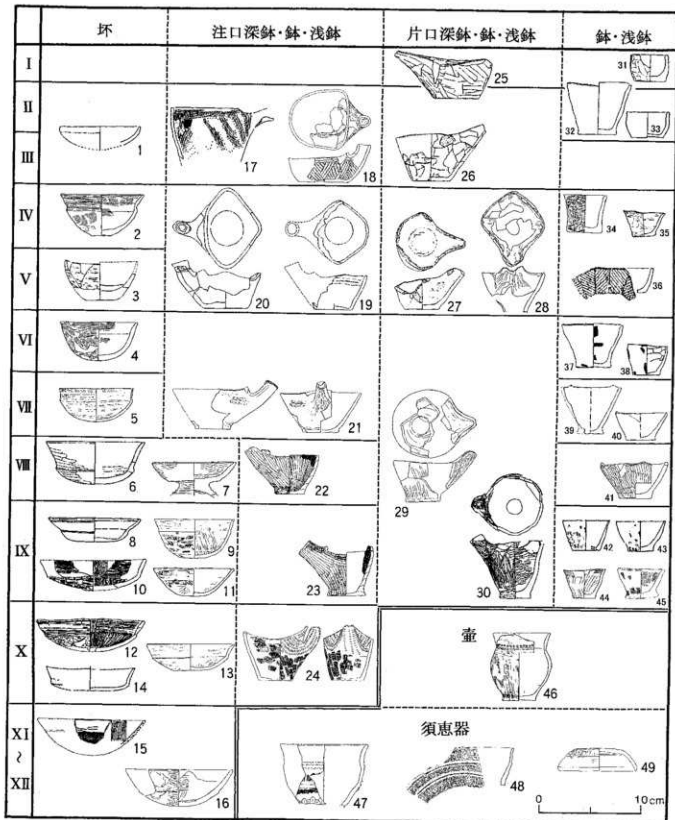
須恵器(47~49)は、条件が(49)条件が(47・48)である。(47)は体部下半にケズリがあるので碗であり把手がつく可能性がある。口縁部はやや伸長し窄まらない、陶器TK208型式(5世紀後葉)に類する。(48)は直口壺の口頸部である。口縁はあまり外傾せず、口頸部半ばに屈曲がある古相を示す。陶器TK216型式(5世紀中葉)に類する。(49)は坏蓋である。天井部はやや平たく、口縁部内側の面取りが消失した直後の器形である。陶器TK209型式(6世紀後葉)に類する。

h 「円形・刺突文土器群期」の暦年代について(表12)

Ⅰは搬入品であるから東北地方の編年に沿って述べる。(1)：Ⅰ期は南小泉式(2~4)：Ⅰ期は引田式(5~7)：Ⅱ期は住社式(8~16)：Ⅲ期は栗岡式にあてはまる。

東北出土の円形・刺突文土器群について私案を当てはめることで暦年代を考えてみる。宮城県伊治城跡SD26Ⅱ(4世紀後半)の後北C<sub>1</sub>・D式c・2またはc・2：後北C<sub>1</sub>・D「新<sub>1</sub>」はⅠ期の直前である。SD26Ⅱ(4世紀後半)の北大式は底部にヨコケズリがあること、長胴であることことから北海道で作られた北大式ではない可能性が高くそのまま私案を当てはめることはできないが、口頸部が伸張せず外屈が弱いことから「古<sub>1</sub>」~「古<sub>2</sub>」にあたり、Ⅰ期にあてはまる。青森県田向冷水遺跡S11Ⅱ(6世紀後葉)の北大式e：「新<sub>2</sub>」はⅡ期である。秋田県田久保下遺跡SK30Ⅱ(6世紀中葉)の無文土器d：「中<sub>1</sub>」はⅡ期である。岩手県高柳遺跡Di72住・Dh63住・Ea60住覆土(7世紀前~中葉)の円形刺突文土器f：「新<sub>1</sub>」はⅠ期である。

以上より、Ⅰ期は5世紀後葉、Ⅱ期が5世紀代の前・中・後葉、Ⅲ期が6世紀代の前・中・後葉、Ⅳが7世紀代の前・中・後葉、Ⅴ期は8世紀前葉にあたと考えられる。(鈴木)



1:171(包含層), 2:34-35:16(P-104), 3:27:7(P-27), 4-9:82(包含層), 5:14(P-9), 6:95(包含層), 7:259(P-301), 8:15(383号ピット), 10-12:15-16:190(包含層), 11:97(包含層), 13:94(包含層), 14:15(185号ピット), 17:171(ブロック8-14-15), 18:160(包含層), 19:17(P-87), 20:17(P-211), 21:9(33号土坑跡), 22:246(P-98), 23:246(P-70), 24:25(1号墓), 宇部(2002)引用, 25:122(P-78), 26:108(包含層), 28:225(包含層), 29:126(包含層), 30:7(P-19), 31:122(包含層), 32:171(包含層), 33:17(P-178), 36:17(P-191), 37-38:21(第4号墓), 39-40:141(包含層), 41:126(包含層), 42-43:84(包含層), 44:74(包含層), 45:25(7号墓), 宇部(2002)引用, 46:175(包含層), 47:134(包含層), 48:259(包含層), 49:24(GP-34)

図18 その他の器種

表11 円形・刺突文土器群の変遷

		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	X I	X II
型式名等	細分類名												
北大Ⅰ	a-1	古 <sub>1</sub>											
	a-2		古 <sub>2</sub>										
	b			古 <sub>2</sub>									
	c				古 <sub>2</sub>								
	d												
北大Ⅱ	a-1				古 <sub>1</sub>								
	a-2					古 <sub>2</sub>							
	b-1						新 <sub>1</sub>						
	b-2							新 <sub>2</sub>					
	c								新 <sub>3</sub>				
北大Ⅲ	a				古 <sub>1</sub>								
	b							中 <sub>1</sub>					
	c-1								中 <sub>2</sub>				
	c-2									中 <sub>3</sub>			
	d										新 <sub>1</sub>		
刺突文	a												
	b-1				古 <sub>1</sub>								
	b-2												
	c												
	d												
円形刺突文	a	古 <sub>1</sub>											
	b-1				古 <sub>2</sub>								
	b-2					古 <sub>1</sub>							
	c												
	d												
無文	a	古 <sub>1</sub>											
	b				古 <sub>2</sub>								
	c												
	d												
	e												

表12 時期区分と型式の対照

	東北北半の土器型式	北海道の時期	西暦	道南の土器型式	道央の土器型式	道東北の土器型式
縄文前期	大穴入式	縄文晩期・後葉	約9700年頃～約7000年頃	野山直式	タンネトラ式	前期式
縄文中葉	大穴A'式		約6900年頃～約5900年頃	口ノ筒式(北山内1群)	船形式・水川式	終期式
縄文後葉	神沢式		約6400年頃～約5400年頃	野山直式(北山内2群)	日立直式(大行部式～船形式) 日立直式 兼1号野山式)	フシココタン下群式 メタウ式
	二枚櫛式	終期式・前葉	約5900年頃～約4900年頃	下路山式	H317 (H317 中東3-北群B6-C) (H317 中東1-北群C) (H317 東明 兼1)野山式	美伊式
				アソコ1式		2572式
				高田直式	(西狩棚遺跡) アソコ2式 (高川遺跡) アソコ3式	
縄文中葉	宇路直式 田舎型C3		約5400年頃～約4400年頃	高田直式 (高川遺跡) アソコ3式	アソコ2式、(高田)1式	F田ノ沢1式
	念仏函式		約4900年頃～約3900年頃	高田直式(兼1)伊知田式	伊知田式 東北A式 東北B式	宇路内直山式
縄文後葉	(留沢) 天土山式	終期式・中葉	約4900年頃～約3900年頃	(高田直式) アソコ3式 高田直式(兼1)伊知田式 伊知田式(兼1)伊知田式	伊知田式 東北C <sub>1</sub> 式 東北C <sub>2</sub> 式	F田ノ沢1式 下田ノ沢群2式
				(高田直式) 兼1伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式	伊知田式 東北C <sub>2</sub> -D式/円形・刺突文土器群Ⅰ～Ⅲ 円形・刺突文土器群Ⅳ～Ⅵ 円形・刺突文土器群Ⅶ～Ⅷ 円形・刺突文土器群Ⅷ～Ⅹ 円形・刺突文土器群Ⅹ 円形・刺突文土器群ⅩⅡ	宇路内直山式 宇路内直山式
縄文前期	赤穴式 陶舟式		約4400年頃～約3400年頃	(高田直式) 兼1伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式	伊知田式 東北C <sub>1</sub> 式 東北B式	宇路内直山式 宇路内直山式
縄文中葉	赤穴式 引山式	終期式・後葉	約3900年頃～約2900年頃	高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式	伊知田式 東北C <sub>1</sub> 式 東北B式	宇路内直山式 宇路内直山式
縄文後葉	赤穴式		約2900年頃～約1900年頃	高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式	伊知田式 東北C <sub>1</sub> 式 東北B式	宇路内直山式 宇路内直山式
縄文後葉	赤穴式		約1900年頃～約900年頃	高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式	伊知田式 東北C <sub>1</sub> 式 東北B式	宇路内直山式 宇路内直山式
縄文前期	赤穴式		約900年頃～約0年頃	高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式	伊知田式 東北C <sub>1</sub> 式 東北B式	宇路内直山式 宇路内直山式
縄文中葉	赤穴式		約0年頃～約1000年頃	高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式	伊知田式 東北C <sub>1</sub> 式 東北B式	宇路内直山式 宇路内直山式
縄文後葉	赤穴式		約1000年頃～約2000年頃	高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式 高田直式(兼1)伊知田式	伊知田式 東北C <sub>1</sub> 式 東北B式	宇路内直山式 宇路内直山式

道東葉の土器型式は、熊本県下田ノ沢上群の再検討(『縄文文化研究』(2002)を引用した。東北C<sub>1</sub>-D式以前の道東円筒式の「C」マークから推定したものである。

### 3 道央部における続縄文土器の編年

#### 註

- 1) 後北B式期の「新」出土例が少例なので、栄浜1遺跡P-20の墓坑資料を使用した。道央の後北C式「古」とは齧齧がなく繋がるので、大まかな編年においては問題がないと思われる。また、後北C式期の出土例が少例なので、「古」には野田遺2遺跡包含層、「中」「新」には浦幌町十勝大若月遺跡の墓坑資料を使用した。道央の後北B式期「新」、道央の後北C・D式「古」とは齧齧がなく繋がるので、大まかな編年においては問題がないと思われる。しかし対象地域外の資料であることから、これらの土器はその地域性が含まれている可能性は残される。
- 2) 表3-6・9・10の下端平面形は、0.8<下端の長/幅；円形・隅丸方形・方形、0.5<下端の長/幅；楕円形・隅丸方形・方形<0.8、下端の長/幅；長楕円形・隅丸長方形・長方形 0.5と分類した。また、出土土器に下線があるものは破片資料である。
- 3) 『道央部における晩期後葉の土器編年』『対馬2遺跡』(2002)において、主文様の弧状線文(交互・対向)三角状線文(交互・並列)は以降存在しないと述べたが、H37丘珠期の「新」まで存在し、平行状線はさらに後まで存在する。
- 4) 札幌市埋蔵文化財センター秋山洋司氏のご教示による。
- 5) 製作時の属性である施文方法・文様の型式学的類推による細分が「供伴する、一括状態の」といわれる状況(同じ時期に埋まった)ということであり、使用・廃棄時の属性である組成を検討する以前の段階にあると完全一致しないことは自明である。多相的な出土状況＝多相的な型式ではない。多相的な型式かどうかは、前後の型式の型式学的類推によって判別すべきである。一括性を検討(類推)する段階において無条件または不適切な条件(事例が少ない、遺構の種類が偏る)に基づいて、型式学的類推を飛越して同時期にまとめ(多相的な型式と判断する)ことは早計である。墓の副葬品の場合は近接した前時期ものが供伴することが多くあり、住居などの開口部が広く浅い遺構は混入も多い。
- 6) 高瀬克範は「恵山式土器群の成立・拡散とその背景」『北海道考古 34』(1998)、貼付文の型式学的類推による後北A式とB式の連続について検討の余地があると述べている。高瀬の指摘は江別太遺跡に後北B式が存在するというところに基づくのであろうが、報告書に後北B式といえる土器は見当たらない。しかし、後北B式が短期間であった型式という指摘自体は正しい。
- 7) 熊木俊朗は、すでに「宇津内式土器の編年」『東京大学考古学研究室紀要15』(1997)において、後北式の横方向の分割について言及し、縦方向の分割においては突起・縦位貼付文が基線になることを指摘している。氏の考え方は卓見である。
- 8) 細分案(1998)に使用した図-6「後北C・D式深鉢の変遷」のf段階 b-3の帯中に「円形刺突」という語句を入れているが b-3には円形刺突が付かない。よって、表-2は正しく、図-5には適切なものが掲載されている。また、cの例として涼状口縁の例を掲載するべきであったが平縁を載せてしまった。誤植・齧齧をお詫び申し上げます。
- 9) 熊木のTable 8(1997)によって、私案と佐藤細分とが整合しないことが既に明らかにされている。
- 10) 上野秀一は、既に「N162遺跡」札幌市教育委員会(1974)において、RL燃り原体が少数であることを指摘している。
- 11) なお、丸子山遺跡の標は、口縁部形態が「新」で、底部は径が大きくて括れない「新」以降の形態である。よって標の胴部外面のタテ筋ミガキをもって「中」の頃まで時期を引き上げることはできない。胴部外面筋ミガキは続く縄文文化期の8世紀中葉までは残存している。丸子山遺跡のほかには標文化期の例として、泊村ヘロカルウス遺跡E地点3号竪穴住居、千歳市祝梅三角山D遺跡2号竪穴周辺がある。以上より、丸子山遺跡をⅡ期とした。
- 12) 表9・10中の網掛は土器の供伴例を示す。

引用・参考文献(本文・註・表中に書名・論文名を表したものを除く)

- 上野秀一「北海道続縄文文化の諸問題」『北日本続縄文文化の実像』縄文文化検討会(1994)  
宇部則保「古代東北地方北部の沈線文のある土器器」『考古学ジャーナル 462』(2000)  
宇部則保「東北北部型土器器にみる地域性」『市川金丸先生古稀記念献呈論文集』(2002)  
大沼忠春「後北式土器」『縄文土器大成 3』講談社(1982)  
大沼忠春「続縄文土器文様式」『縄文土器大観 4』小学館(1989)  
大沼忠春「8・9世紀の土器」『蝦夷・律令国家・日本海』日本考古学協会秋田大会実行委員会編(1997)  
田村雅彦「北大式土器」『北奥古代文化 14』(1983)  
高橋正勝「北海道中央部の続縄文時代」『北海道の研究1』清文堂(1984)  
藤澤 敦「引田式再論」『歴史 79』(1992)  
村田晃一「葉圓式土器の成立と展開」『東北大学考古学研究会 21回例会要旨』(1998)

## 報告書抄録

ふりがな	ちとせし ゆかんぼしい 15いせき 6
書名	千歳市 ユカンボシC15遺跡(6)
副書名	北海道横断自動車道(千歳 夕張 夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	北埋調報
シリーズ番号	192集
編著者名	三浦正人・鈴木信・吉田裕史洋・菊池育子
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒069 0832 北海道江別市西野幌685番地1 011(386)3231
発行年月日	西暦2003年3月31日
ふりがな	ゆかんぼし しい 15
所収遺跡名	ユカンボシC15
ふりがな	ほっかいどう ちとせし おさつ
所在地	北海道 千歳市 長都
市町村コード	1224
遺跡番号	A-03-263
北緯・東経	42度52分41秒・141度38分49秒
調査期間	19960626～19961030・19970506～19971031・19980506～19980912
調査面積	3,025㎡・8,855㎡・3,000㎡
調査原因	道路(北海道横断自動車道)建設に伴う事前調査
種別	集落跡
主な時代	縄文文化期・弥生文化期・アイヌ文化期
主な遺物	木製品：舟敷・舷側板・舟縁材・舟材・車轆・車轆受台部・早榿・あか汲み・キテ中柄・魚叩き棒・やす・矢・矢中柄・槌・斧柄・各種柄・台板・楔・火鑽り棒・杵・曲物・漆椀・箸・串・籠・ビン状製品・軸状製品・イクバスイ・木幣・缸目板・板材とその加工製品・各種板とその加工製品・各種割材等とその加工製品・枝材丸木材とその加工製品・柱・建材・建築部材・杭・樹皮製品など 金属製品：刀器具・針 骨製品 ガラス玉 動植物遺体
特記事項	* 低湿度の調査 * 縄文文化期・中・近世アイヌ文化期の木製品・漆器とその樹種 * 動植物遺体・樹種・漆器の分析

---

財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告第192集

千歳市  
ユカンボシC15遺跡(6)

- 北海道横断自動車道(千歳-夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書 -

---

平成15年3月31日 発行

編集 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

069 0832 江別市西野幌685番地1

Tel (011) 386 - 3231 (代表)

Fax(011) 386 - 3238

URL : [http : www.domaibun.or.jp](http://www.domaibun.or.jp)

印刷 株式会社 キサツ

064 0921 札幌市中央区南21条西10丁目

Tel (011) 531 - 2111 (代表)

Fax(011) 512 - 3555

e - mail : [kisatu@crocus.ocn.ne.jp](mailto:kisatu@crocus.ocn.ne.jp)

---